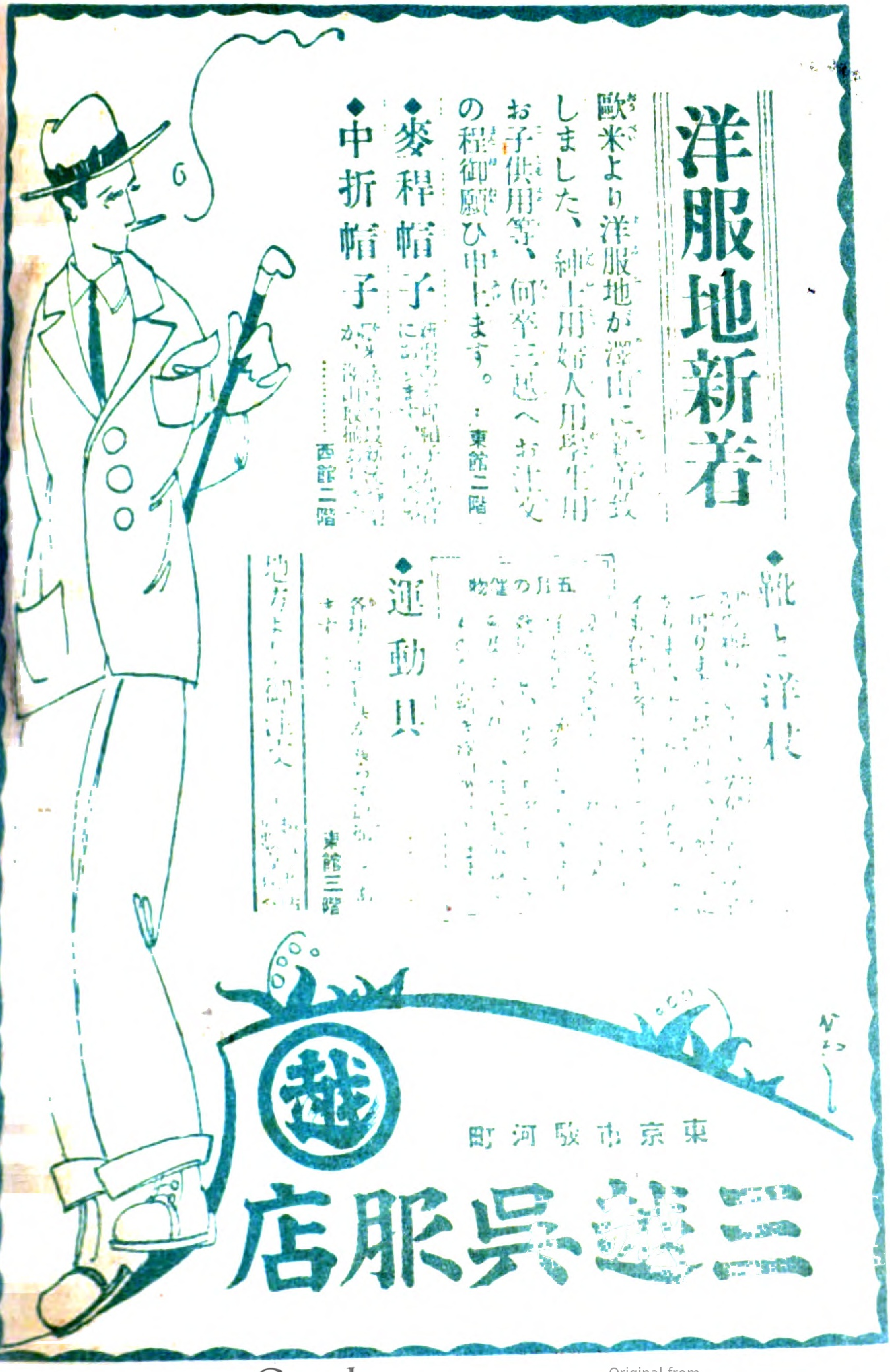
血壓亢進症及動脈硬化症に就て

と題する小冊子あり總代理店宛御申越次第進呈す

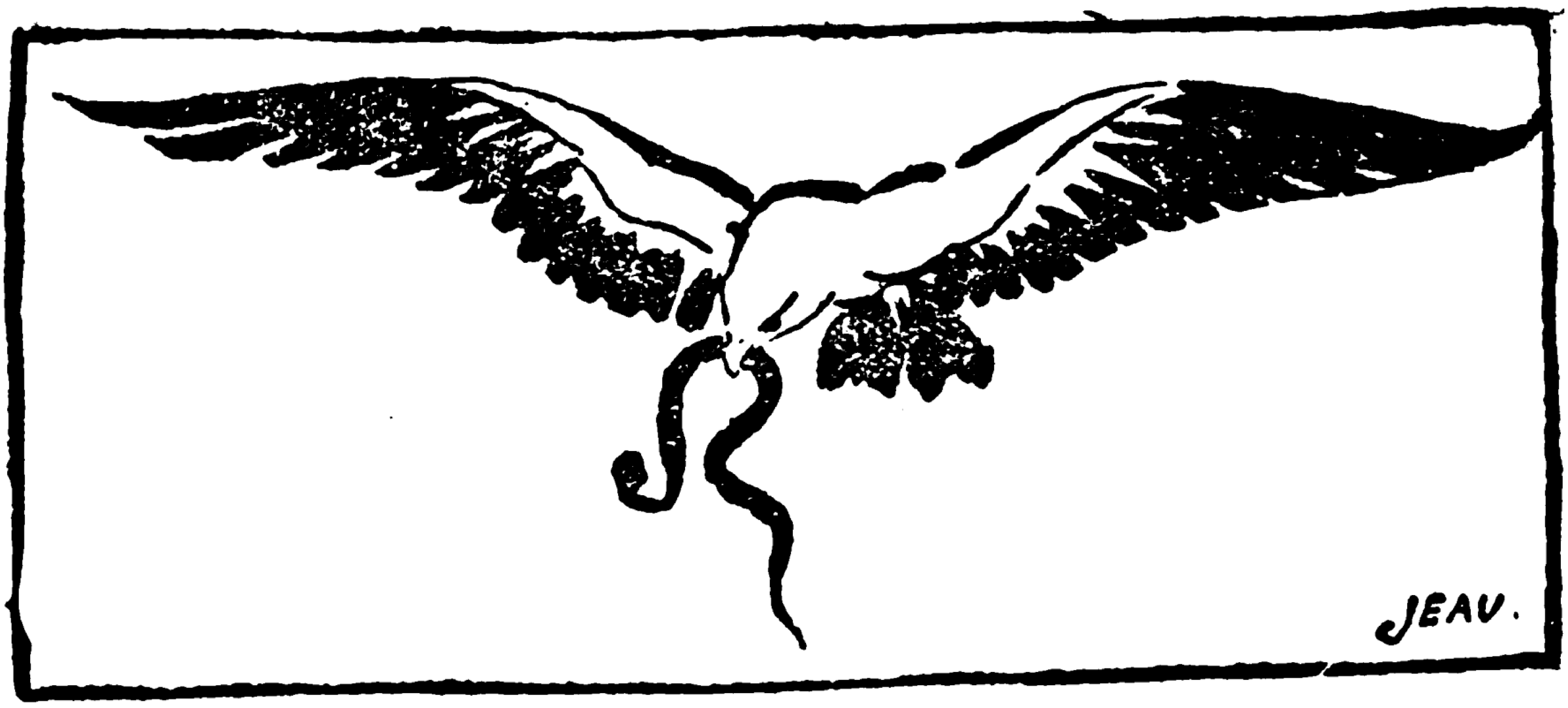
各地藥店にあり



洋服地新着
歐米より洋服地が澤山に新着致しました、紳士用婦人用學生用お子供用等、何卒三越へお注文の程御願ひ申上ます。
東館二階
◆麥稈帽子
◆中折帽子
西館二階
◆靴と洋杖
五月の生物
◆運動具
東館三階
東京市駿河町
三越呉服店



# 改造五月號目次




(五月號)

# AとBの話

A　もう一度、大地震が來て我日本全土が地下に埋沒されたとして――そして一千年の後、――或る考古學者によりて我東京、大阪が發掘されたとしたら日本民族の今まで築いた文明がどれほど評價されるであらうか。

B　マア紀元前の埃及位のものさ。日本民族は先天的に官僚で、民衆の殆んど全部が賴他的小規模のものばかりだ。維新以來の政治家、先覺者にしても偉人として指を屈するものは誰一人だもなく、まして我文明の地位を考慮するなぞといふ人は一人もなかつた。

B　そうすると現今の日本文明の地位は……

E　獨自のものは何一つないぢやないか――他民族が一寸でも風變りのものを創造すると、それを模倣する位が關の山さ、早い話がこの十年間我が大衆の思想的基調をなせる唯物史觀にせよ、資本主義制度にせよ、皆その通だ。恥しくて穴に入りたい位だ。他人樣のものを我物顏に强調するのは少々蟲がよ過ぎるぢやないか。

A　そうすると日本文明の將來！　日本民族の前途は絕望かね。

B　そうだ、歐米文明の糟粕ばかり追つかけるやうではネ。……學んでつくる文明の殿堂は價値がなく、絕大の勇氣を鼓して奮鬪打開した獨自のものでなければ何等の權威と意義とを有たない。

A　舶來以上の名案があるかね。

B　あるとも、先づ日本の十三歲から二十歲までの精悍な青年百萬人の指揮權を僕に與へて見ろ。その人間達を六等分してボルネオ、セレベス、濠洲、雲南、秘露に分布し、あとの一部分を北米のヨセミテの森林に捨てゝおくよ。苗床をするつもりでネ……歐米留學！この四字ではいつも胸糞が惡くなる、

この連中が難有がられるまでまではいつも禁厨の時代であり、青瓢箪の跋扈する時代である。

A　君も誇大妄想人種だね！

B　僕は眞にそう考へておる。經濟でも、政治でも行詰つた狹い日本にあくせくばかりしていてどうなる。彼の切支丹の殉教者達が我國で、指を切られ、眼球を刳りとられ、兩足を切斷されても自若として自己の信念に殉した氣魄で我理想鄕を國外に建設するさ。今はその時代だ大和民族が當時の殉教者にならねばならぬ時代だ。人口の密集した南支や我國でのとも喰ひの外、何も能がないからボイコツトや諸種の鬪爭に絕えずに脅威されるのさ。

A　そしてその第一步は！

B　早速文部省や民間の歐米留學生を廢する。そしてそれに數倍した費用と人を前記六箇所に永遠に居住せしむる。勿論僕の計畫は民族全體の問題であれば、百年や二百年の短日月では理想の實現はむづかしい。これを歐米文明の過程に見るも然りである。そして尤もその入り易い途は宗教によるのが早道であるが、涅槃や天國なぞ亡者のことばかり說く既成宗教では現代民族運動の先驅をなすにはあまりに現代と沒交涉すぎる。

A　そうすると新なる宗教を創造するのかね。

B　成るならそうしたい。そして永遠性のある宗教を。しかしそうでなくとも可い。我々の希望が現實主義の意氣地のない我青年達にはユートピアンの寢言のやうにも聞えやうが、永い目で過去の歷史を眺めても、また我民族の將來、我文明の行衛を默想して見てもそこに行きつくのだ。一生一代や、十年、二十年の姑息な計畫のみを樹てておるのが我民族の短所だ。

A　明日喰ふことさへ出來ぬ無產階級の疾苦を救ふのがそれより當面の急務ぢやないかネ。

B　それは別に人がある。僕は我民族の百年後、千年後の大計についてのみ努力がしたい。そしてどんな大地震が來てもそれが沒落せぬ文明を建設したい。また、かりに我等の築き上げた文明が沙漠の爲めに埋沒されても　三千年後のシユリーマンから笑はれぬ丈けの建築藝術位は遺したいものぢや。スフヰンクスやピラミツトよりは意義ある創造をセレベスにでものこしたい。……地球の再生するやうな赤熱的　原人的偉力をどうしても我民族の體の中から出さなくてはならぬ。

A　そうさ、僕とて日本民族の永遠の墳墓を未開の麗はしい山川に求めたいさ。我民族は今の時に於て何か覺悟がいるね。フム………。

# 亞細亞主義の勝利

室伏高信

一

日本人であるがゆゑに日本を讃美するといふことは決して日本人らしい態度ではない。あの寛大な、優雅な、超俗的な日本精神はショウビニズムの精神と兩立することはできないのである、謂ふところの日本主義なるものは、まことの日本から最も多く遠ざかつたところのものである。

私は日本において善きもの、美しきもの、高きものがなかつたといふのではない。われ〳〵の日本、過去の日本においては多くの善きもの美しきもの、高きものがあつたのである。茶において、能において、俳句において、もろ〳〵の

藝術と、並に汎くわれ〳〵は象徴主義の極致にと近づくことができたのである。日本においてのみ發達し、そして日本人によつてのみ味得することのできるといひえられるがごとき意味、精練された態度、淨化された感覺――われ〳〵は實に完成の理想に向つてわれわれの日本を近づけることができたのである。われ〳〵がこれを世界に教へ、これを世界に誇ることにおいては、もとより何等の異論もないのである。この點においては、われ〳〵は寧ろ世界に教ゆることが甚だ少く、世界に誇ることの未だ甚だ足らざることを憾みとするのである。われ〳〵は更に進んでわれより世界に教へ、まことの日本の如何なるものであるかを世界に示すところがなくてはならないのである。それによつてわれ〳〵の民族的價値が明確にされるばかりではない。それによつてわれわれの民族的理想が將來にいよ〳〵鼓舞されてゆかなくてはならないのである。われ〳〵の進むべき道は旣にこゝに示されてゐる。日本及び日本人の道なるものが若しも存在しうるといふならば、われ〳〵はひたすらにこの道に向つて精進すべきである。

けれどもわれ〳〵が日本において誇るべきところのものは亞細亞について誇るべきところのものである。われ〳〵が日本的であると考へてゐるものはその根本において亞細亞的であることを忘れてはならないのである。

亞細亞を理解することなくして日本を理解しやうとするものがあるとしたら、その企は最初から失敗である。亞細亞文化について考へることなくして日本文化を直に理解しやうとするものがあるとしたら、それが砂上の樓閣であるといふことを人々は知らしめられなくては止まないであらう。

日本は亞細亞の一部である。日本文化は一つの亞細亞文化である。日本と亞細亞、日本文化と亞細亞文化とは二つにして一つである。日本を深きに理解し、日本文化を深きに理解せんとするものは、遂に一つの亞細亞、一つの亞細亞文化の殿堂に向つて旅立たなければならないことを悟るであらう。

勿論、亞細亞的生活、若しくは亞細亞文化といふもののうちにおいても、われ〳〵はそこに日本的なるもの、支那的なるもの、印度のあるといふことを拒むものではない。印度において哲學がより多く發達し、支那において調和の文化がより多く發達し、そして日本においてより多く感覺の精進の存在することは疑ふことはできないのである。けれども印度の哲學といひ、支那の調和といひ、若しくは日本の感覺といふも、それは決して離ればなれの存在であるのではない。印度的世界觀、支那的自然感は凡ての亞細亞文化の根本をなしてゐるのである。それは印度において、支那において、日本においてそれ〴〵に特種の形において表現されたことは事實である。けれども印度的世界觀を離れては支那の自然感を考へることもできないし、また印度的世界觀と、支那的自然感とを離れて日本の文化を考へることもできないのである。

日本の文化は象徴的であるといはれてゐる。それはたしかに象徴的である。象徴的でないところの如何なる文化もありえないのである。凡ての文化はその本質において象徴的なのである。象徴をとほして表現され、象徴をとほして理解されるところに文化の本質が存在するのである。日本の文化がより多く象徴的であるといふことは、日本の文化がより高き文化であるといふことを意味する。日本の文化はたしかに一つの高き文化である。けれどもその高き文化を理解するがために、そして更にその文化が如何にして高き文化であるかを理解するがためには、それが印度的世界觀、支那的自然感のうちに根を置いてゐるといふことを理解することが致命的に必要なのである。われ〳〵の文化が如何に多く佛教の影響をうけてゐることであるか！　われ〳〵の生活が如何に深く老莊的精神の囚へるところとなつてゐることであるか！　まことに、われ〳〵の生活と文化との悉くは、深く〳〵佛教的運命觀、老莊的自然觀によつて侵透されてゐるのである。

こゝに亞細亞がある。亞細亞の生活、亞細亞の文化がある。西洋的世界に對して亞細亞的世界が存在するのである。

私は決して地理學的、人類學的社會學を說かんとするのではない。地理的區別、人種的區別が直に文化的區別であると私は思ふてゐるのではないのである。亞細亞といひ、歐羅巴といふも、若しくは白人といひ、黃人といふも、そこに必ずしも越えがたき境があると私はいはんとするのではない。けれどもわれわれがわれ〳〵の東洋を白人の西洋に比較した時に、この地理的に幷に人種的に區別されたところの世界において、二つの根本的に異つた生活、二つの根本的に異つた生活の理想がそれぞれに發達してきたことの事實を拒むことはできないのである。そしてまたその二つの生活と生活の理想に應じて、二つの根本的に異れる秩序、思想、道德、藝術、宗敎がそれ〴〵に發達してきたことの事實を拒むことはできないのである。

一つは希臘の頭から出發した。頭は進化する。希臘の頭から出發したものは歐羅巴において進化し、亞米利加において實を結んだのである。一度羅馬帝國において實を結んだところのものが、二度亞米利加、然り第二の羅馬帝國においてより大なる實を結んだのである。

他の一つのものは印度の森林から生れた。それは進化の代りに內に深められた。印度において、支那において、日本において、花咲き實を結んだのである。ガンヂスに、長江に、日本の山川草木に結びついて、渾然たる一つの文化を織りなし、悠々三千年、こゝにわれ〳〵の生活を支配し、われ〳〵の生活に不斷の生命を與へてきたのである。

最初に亞細亞的世界が存在し、その亞細亞的世界から希臘的世界に、希臘的から羅馬的へ、羅馬的から獨逸的へと、歷史は進化の道を辿つてきたのではない。歷史的進化論は荒唐無稽である。われ〳〵は常に亞細亞である。白人の西洋に對して、われわれは常に亞細亞であつたのである。われ〳〵が亞細亞文化の創造に參加し、そして亞細亞文化がわれわれを支配してきたのである。われ〳〵の生活はかくのごとくにして常に亞細亞の生活であり、われ〳〵の文化はかく

のごとくにして常に亞細亞の文化であつたのである。亞細亞は創造し、持續し、生長したのである。西洋文明の進化に對して、亞細亞文化は生長したのである。

## 二

小泉八雲を讀むものは、彼の日本觀のうちにおいて、二つの矛盾するところの批評の存在に氣付くであらう。それは彼自身の矛盾ではない。日本の矛盾である。日本自體における矛盾である。日本のうちに二つの矛盾が發展した。小泉八雲が日本に滯在した間において、この矛盾が日本において發展した。亞細亞的日本において西歐的日本が發展したのである。

ピイタアの露西亞があまりに早く西歐化したといふことはルソウの夙に批難したところである。その露西亞は、けれども、今日も尙ほ依然として露西亞である。昔ながらの露西亞、ムシイクの露西亞、イワンの露西亞である。ルソウのいふたごとくに、露西亞は遂に眞實には文明化することができなかつたといふべきである。

日本の猿が如何に怜悧な猿であつたことか！日本のピイタアが如何に模倣の天才であつたことか！そして遂にまことの天才に如何に多く欠けてゐたことであるか！

印度が依然として印度である時に、支那が依然として尙ほ支那である時に、日本は最早や日本ではない。亞細亞的日本が早く亡びて西歐の日本が生れたのである。日本がより多く賢明であつたがためではない。日本の歷史と文化とが、思ふに、支那のそれより、印度のそれよりも、淺くして且つ短かつたといふことを意味するのである。

日本が遂に西歐化に徹底するであらうかはもとより問題である。けれどもわれ〳〵の日本、新日本の悉くが西歐化の

悉くであり、そこに西歐化の日本が既に支配的であるといふことは問題ではないのである。

今日の日本は疑もなく文明の日本である。高度文明の日本である。亞米利加に中心を移したところの高度文明の悉くは今やわれ〳〵の生活秩序であり、信條であり、理想である。そしてまた唯一の秩序であり、信條であり、理想であると思はれてゐるのである。

批判哲學の時代において批判の力が如何に欠けてゐることであるか！亞細亞的なる一切のものは過去として、時代錯誤として、無價値として、若しくはわれ〳〵の自由と兩立することのできないものとして葬られた。西洋的なる一切のものは新らしきもの、高きもの、そしてまた自由の名において受容れられたのである。

人々は印度と絶ち、支那と絶つて、ひたすらに西洋文明を追ふてきた。爲學日益、爲道日損。人々は道を捨て、學に走つたのである。まことに學を爲せば日に益する。新日本は日々に益したごとくである。日本は世界の一等國となり、「東洋の盟主」となり、世界文明の第一列に進み出て、人間の知的能力、物質、權力に限りなき望がかけられたのである。

こゝにペシミズムが亡びた。印度的運命觀が亡びて白人的樂天主義が支配した。老莊的回歸の思想が亡びて、スペンサア的進歩の觀念が支配したのである。文明は永遠の發展、永遠の進化、永遠の進歩であるといふことの觀念がわれわれの信條にと化せられたのである。この信條を抱いて既に半世紀、樂觀から樂觀へと、まことに衆人は熙々として大牢を享くるがごとくである。

## 三

われ〳〵は西洋文明から何ものを學びえたのであるか。西洋文明はわれ〳〵に何ものを與へたのであるか。西洋的生活と理想とは亞細亞的の生活と理想とに比べて果して高きもの、善きもの、美しきものであつたであらうか。亞細亞的文化は果して過去として捨てらるべきもの、時代錯誤として葬り去らるべきものであつたであらうか。そしてまた、歷史の進行のうちにおいて、亞細亞的世界は滅亡し、西洋的文明は永遠の發展であるであらうか。私たちがこの問題に當面するの時がきた。世界の轉機において、私たちは今やこの問題に當面しなくてはゐられないのである。この問題に當面することなくして私たちは今や世界の轉機を語りえないのである。こゝに文明批評の最高問題が存在してゐることを私たちは知らなくてはならないのである。

## 四

自由！　われ〳〵の先輩は自由の名に醉ふた。自由の名によつて文明に醉ふた。自由は亞細亞から來たらず、それは歐羅巴の產物であると思はれてきたのである。亞細亞の奴隸的社會に對して、西歐の自由社會が憧憬されたのである。われ〳〵は自由のために戰ひ、自由のためには如何なる犧牲を拂ふことも辭するところでないといふたのである。その自由をわれ〳〵は贏ちえたであらうか。その自由へと近づくことができたであらうか。否西洋文明それ自體が自由の實現であるといふことができるであらうか。亞細亞的社會に比べて歐羅巴の社會は果してより自由であるのであらうか。亞細亞的文化に比べて西洋文明は果してよく自由の實現であると見ることができるのであらうか。

私は必ずしも政治的自由を意味しない。西洋人の自由なるものが必ずしも政治的にのみ考へられてゐるものだと私はいふのではない。そこには政治的自由の觀念がある。經濟的自由の要求がある。そしてまた精神の自由の問題が存在

する。私の見るところでは、西洋文明は一つの政治的、經濟的、並に精神的文明である。この三つのものは三つにして一つである。その一つのものも缺くことはできない。一つのものを缺くことは凡てを缺くことである。何れが先きでもなく、何れが後でもない。何れも鼎の足である。或るものは政治的自由を語り、或るものは經濟的自由を語り、また或るものは精神の自由について語らんとする。西洋文明の桎梏のうちにおいて、自由主義と社會主義とが戰つてゐる。けれどもそれは原則に於ける戰ひではない。目的における戰ひではない。利益と利益との戰ひである。黨派と黨派の戰ひである。權力と權力との戰ひである。われわれ亞細亞人の立場から見るならば、何れも渺として蝸牛角上の爭ひであるにしか過ぎないのである。

## 五

政治的民主主義の失敗は今日はあまりに明らかである。それは既に歐羅巴の諸國において證明された。近代歐羅巴の政治は民主政治に始つて獨裁政治に終りつゝある。伊太利においても、西班牙においても、匈牙利においても、露西亞においても獨裁政治が既に實現された。英國にはダイ・ハアヅがある。佛蘭西の議會は遺憾なくその無能を暴露して人人は再びナポレオンの出現を夢みてゐる。われ〳〵が今日も何程世界の民主化を夢みつゝある間に、世界は今や獨裁化の過程を急いでゐる。民主主義のために世界を安全にするといふたところの大戰の後において、世界は今や獨裁政治のために安全ならんとしてゐるのである。昔の羅馬の獨裁官と雖も、一人の獨裁官は半年と續かなかつたのに對して、伊太利の顚狂的獨裁官、そして露西亞の官僚的獨裁官は既に數年を續いて、遂に何時果つるかを知らないのである。まことに十八世紀は王侯の自由の時代であり、十九世紀は人民の自由の時代であり、二十世紀は偉大なる人物の自由を求めて

ゐるといはれるものは（Spengler, Politische Pflichten der deutschen Jugend, 1924）たしかに時代の一つの傾向を語つてあまりあるのである。

けれども私のいはんとするところはたゞなる政治の形式ではない。民主政治といふも、獨裁政治といふも、その間には本質的には何等の區別も存在しない。露西亞のソヰエト政治も、英國の議會政治も、ともに一つの獨裁政治である。凡ての民主政治といはれるものは一つの獨裁政治である。獨裁政治を離れては民主的政治なるものは存在もせず、また存在しえられるものでもないのである。

代表制度といふことが既に獨裁制度である。代表制度が民主的理想のために生れたと考へる位ひ大いなる僞瞞はない。まことの民主主義にとつては代表なるものはありえない。人格は特異である。各々の人格はホモゲナイテエトに屬するものではなくしてヘテロゲナイテエルトに屬する。從ひて各々が自由である。各々が獨立である。また從ひて各々の人格は他の如何なるものによつても代位すべからざるものである。ballot-box democracy なるものは ballot box autocracy である。投票場において、投票と自由とを交換するところの制度である。人民の側が如何に投票を好まず、代表者の側において如何に投票を熱望するかといふの一事に見ても、何もののために投票の行はれてゐるかといふことはあまりにも明瞭である。

こゝに政黨がある。政黨は憲法外の制度である。けれども政黨なくしては立憲政治を動かすことはできない。昔は政治は正なりといふたが、今日は政治は黨派のうへにある。昔の門閥政治に對して今日の政黨政治がある。昔の國家が門閥のうへにあつたやうに、今日の國家は政黨のうへにある。政黨が命令し、政黨が法律を作り、政黨が支配する。政黨はたゞ一つの支配者である。議會政治と云ふこと勿れ。議會はたゞ演舞場である。そこに野次馬があり、銀行があり、

喧嘩口論がある。大小のデマゴオグが賣名のために常に咆哮しつゝある。けれども議會の討論も、雄辯も、今日は一票の投票と雖も動かすことはできない。凡てのことは政黨の本部において決定される。英國の主權は新に選擧された下院のうへにあるといふたところのバジョットは、共××が政黨のうへにあるといふことに氣付かなかつたのである。階級のうへに國家のあるといふたところのマアクス・エンゲルスは、未だ階級の黨派的分裂について深く思ひ至ることが足らなかつたのである。政黨こそ正しく今日の國家である。政黨は國家たらんとする意志から始まつて國家を實現したのである。ブルジョア國家において然るばかりではない。プロレタリア國家と自ら稱するところの露西亞に於いて益々然りである。

經濟的には階級が支配する。政治的には政黨が支配する。今日の社會は階級社會である。今日の國家は政黨國家である。近代の經濟制度は資本主義を實現し、近代國家、政治的民主主義は政黨國家をわれ〳〵の世界に實現したのである。政黨獨裁は、獨り露西亞の暴力社會主義の理想であるばかりではない。凡ての民主國と稱せられる國家において既に久しく行はれて人々何の怪しむところもないのである。

政黨の獨裁は、けれども政黨の獨裁ではない首領の獨裁である。一人若しくは數人の首領が獨裁する。代議士でさへも何等の權力もない。况んや一般の黨員に至つては政黨の意志については何等の參加するところもない。凡ての權力は一人若しくは數人の首領に屬する。「凡ての權力をソヰエトに」といひながら、凡ての權力を首領の手に奪つた。政黨は下から組織されたところの如何なる制度でもなく、人民のための如何なる組織でもない。首領のための制度である。首領の手によつて組み立てられてゐるところの組織である。首領は×××であり、そして黨員は首領の機關であるにしか過ぎないのである。言葉を換へていふならば、政黨とはそれ自體獨裁政治の組織であり、そして首領の政權欲を滿た

すがための機關なのである。

まことに政治的民主主義といはれたものは政治的獨裁主義である。人民主權といひ、總意といひ、自由といふたところのものは等しく虚僞である。政治的民主主義の名によつて、自由の名によつて、人民××の名によつて、××の名によつて、われ〱の到りえたところのものは一つの獨裁である。獨裁政治である。奴隷制度である。政治的自由なるものが如何に空しき錯覺、ビスマークの所謂センチメンタリズムであるにしか過ぎなかつたといふことは、今や赤裸々に證明されてしまつたのだのである。

こゝにデュギイがある。ラスキがある。ロスコウ・パウンドがある。ギルド社會主義者がある。ギイルケとメエトランドの流れが政治學説のうへに新らしい一派を組織しつゝある。政治上の多元主義がヘエゲル主義に比べて、若しくはヘエゲルを師とするところのマアクス派の政治學説に比べて一歩を進めてゐるといふことは事實である。けれどもそれによつて今日の國家を理解することができると思ふ位ひ無邪氣な樂觀はない。今日の國家の理解、今日の政治の解釋としては、何人もヘエゲル的絶對主義を採らなければならないのである。

政治的多元説は一つの夢である。貧しき夢である。西洋ユトピアンによつて考へ出されたところの貧しき夢である。一度現實の問題に面しては、何等の據りどころもないところの夢である。勞働諸團體の發達によつて主權が分化されつゝあるといふがごとき解釋は事實の甚だしき轉倒である。勞働諸團體の發達、就中勞働者の間における政治的團體の發達は權力の一元化、合理化へ向つての一筋の道である。權力は分化することの代りに益々絶對化しつゝある。三權分立論が夢であつたごとくに、政治的多元説もまた一片の夢である。絶對化から絶對化へと今日の政治的權力が動いてゐるばかりではない。絶對化それ自體が權力の本質なのである。絶對なくば權力はありえない。權力の文化といふことは、

權力の否定においてのみ考へえられるところのものである。政治の否定においてのみ考へられるところのものである。

こゝにサンヂカリズムがある。こゝに無政府主義がある。共産主義もまた政治なき社會を理想とするもののごとくにいひなしてゐるのである。

政治の威嚴の傷けられたことにおいて今日は正しく羅馬の末期に相當するごとくに思はれる。羅馬において一度全盛を極めたところの政治、政治なくしては社會は存在しえられざるものと考へられたところの政治が、最後の共和國が滅びてから後一千年の久しきに亘つて、政治好きの歐羅巴人もまた政治を顧みるところなかつたごとくに、やがて世界が再び政治から解放され、千年二千年、人々が脩然として天下を忘れてまた顧みることなきの時代がきたるであらうことを私は信ずるのである。けれども、サンヂカリズムによつて、共産主義によつて、若しくはクロポトキン的無政府主義によつてかくのごとき時代を期待することができるであらうか。西洋的社會制度、西洋的經濟制度、汎く西洋文明のもとにおいてかくのごとき時代の到來を期待することができるであらうか。

六

今や政治の時代から經濟の時代に進んだといひなしつゝある。政治的民主主義の失敗を前にして、人々は經濟的民主主義を口にし、政治的自由の幻滅を前にして經濟的自由を叫びつゝある。凡てのブルジョア運動が政治のうへに限りなき望みを繫いだごとくに、凡てのプロレタリア運動は、經濟のうへに限りなき望みを抱いてゐる。政治的革命の失敗は經濟的革命の成功によつて償ひ、政治的に失敗したところの自由は、經濟的革命によつて回復することができるもののごとくに考へてゐたのであつた。[illegible]は一つの[illegible]とともにきたるであらうか。

政治的社會は權力社會である。經濟的社會は利益社會である。テンニイスの所謂共同社會ではなくして最も純粹なる利益社會である。利益は結合の動機である。そして目的である。人々は奉仕のために結合するのでもなく、相互扶助のために集合するのでもない。利益のために結合し、利益のために分離する。利益の觀念なくしては近代社會はありえないのである。

既に利益は目的である。財の獲得は目的である。所有せんとする意志、消費せんとする意志は支配的である。所有から所有へ、消費から消費へ、人々の欲望は常に鼓舞されなければならないのである。一つの財をうることは一つの滿足を與へることではない。更に他の欲望を刺戟するところの動機である。一つの所有によつて滿足を味つたところの心はやがて第二の所有に到達せんとする心である。既平隴復望蜀、毎一發兵、頭髮爲白。これ獨り光武帝のなしたところではないのである。生きるより死するまで、財から財へと、人々は物的欲望の魔力のために頭髮ために白きを知らないのである。こゝに欲望の原理がある。欲望の原理はその滿足において終るところにあるのではない。ただに經濟的失敗者が不滿足において終るばかりではない。富めるものと雖も常に不滿足に終るのである。ニイチエの流儀にいへばより多く所有するものに支配されることもまた多いのである。物質の有限性といふことの最も簡單な理論を忘れないものにとつては、物質は人間に滿足を與へるものではなくして不滿足を與へるものであるといふことに思ひ當らなければならないのである。

近代の歐羅巴人はこの最も簡單なる理論に到達することができなかつたのである。人々財を爭つて賤民の帝國が築かれた。Reich dea Pöbel である。賤民の帝國である。町人的賤民の帝國である。中世紀において賤しめられたところの都會的賤民の帝國である。自由の名において賤民の一大帝國が建てられた。近代社會とは、

國であつたのである

賤民の帝國において人々は自由を求めた。自由を求めて賤民の帝國を建てた。神の自由を求めんとして賤民の帝國を建てたのである。賤民の帝國において神の自由を求めたのである。何といふ傷ましい悲劇であらう！

政治が不自由であるごとくに經濟は不自由である。經濟の原理はその不自由なることにある。經濟的社會は最も不自由な社會である。不自由であることを目的とするところの社會なのである。自由は財とともにきたるのではない。拋棄とともにきたるからである。

社會主義の危險はブルジョア社會制度と衝突するところにあるのではない。それと兩立するところにある。社會主義は賤民の帝國を破壞することの代りにこれを建てなほさんと企てたのである。プロレタリア階級に對して、自由が拋棄とともにきたるものであることを主張することの代りに、所有とともに自由のきたることを教へたのである。こゝに社會主義の致命的欠陷がある。それは一つの黨派の運動ではありうる。けれどもまことの革命運動ではありえないのである。

人々は何ほ經濟的正義といはんとするか。經濟的正義といふことは自己矛盾である。正義は經濟的に到達しえられるものではない。正義に到達しやうとすることは經濟的關係から解放されやうとすることである。財の獲得によつて正義は贏ちえられるものではない。財の拋棄によつてのみ贏ちえられるところのものである。されば正義への道は經濟からの解放を意味する。正義の社會は經濟的社會からの解放を意味する。正義の終るところに經濟があるごとくに、經濟の終るところに正義が始まるのである。

社會主義は生産を減退せしめるであらうといふ[illegible]

若しも經濟的平等といふことを目的とするものであつたとしたら、生産への動機は衰頽し、社會の經濟的機能は破壊しなければ止まないであらう。經濟的平等といふことは經濟的價値の分配ではない。それの否定であるからである。經濟的價値が否定され、そして社會主義それ自體が否定されるのである。唯物的社會主義はそれ自體において自己矛盾であるといはなければならないのである。

こゝにキヤナンがある。economics of stabilization がある。西洋的經濟學は今やレッセイ・フェエルの傳説から出發してキヤナンの新學説にまで到達したのである。けれども安定の經濟といふことは經濟的社會の救濟者として存在することはできない。經濟的社會の否定としてのみ存在することができるのである。

中世紀における安定且つ公正價格の觀念は再び舞台のうへに登つてきた。けれども安定且つ公正價格の觀念は宗教的社會においてのみ存在しえられたのである。權力と金錢とが賤められたところの宗教的社會においてのみかくのごとき觀念は存在しえられたのである。經濟的社會ではなくして、宗教的社會においてのみ存在しえられたのである。所有の社會ではなくして抛棄の社會においてのみ存在しえられたのである。

まこと、富めるものが神の國に入ることは駱駝が針の目を通るよりも困難である。富まんとする心は惡魔への心である。所有せんとする心は惡魔への心である。經濟的社會は惡魔の國である。賤民の國は惡魔の國である。神の自由ではない。惡魔の自由である。近代的經濟社會は神の自由を約束して惡魔の自由をもちきたしたのである。政治的自由の約束がこの地上に未前の奴隷制度をもちきたしたがごとくに、經濟的自由の約束もまた遂に惡魔の王國においてその終りを見たのである。

七

西洋文明は一つの政治的、經濟的、精神的文明であると私はいふた。精神の自由といふことは、西洋文明に一貫したところの要求である。希臘人の頭から出發したところの西洋文明はその出發からして精神の自由とともにあつたのである。ことに、亞細亞文化が精神的であるのではない。西洋文明こそ精神的であつたのである。

基督教が西洋文明の一つの要素であると見ることは虚僞である。ベニトスンの所謂自然的虚僞である。基督教から近代文明が生れたのではない。基督教の終るところに西洋文明が始まつたのである。基督が復活することの代りにアリストテレスが復活したのである。

あの長い間の宗教に對する科學の戰ひ、基督教に對する希臘主義の戰ひに、精神の自由のための戰ひである。基督教的信仰に對する精神の自由のための戰ひである。ルネサンスに始まつたところの近代文明は、基督教に對する否定の一歩々々であり、そしてまた精神の自由の勝利における一歩々々であつたのである。

精神の自由、思惟の自由といふことが如何に重きを置かれたことであるか！　近代の凡ての科學、凡ての機械、凡ての文明は自由精神の産物であり、組織である。科學が日日に進み、機械が日日に發達して、自由精神への期待は益々強固になつてきたのである。十九世紀において自由科學は正しく、歐米人の新らしい宗教にと化したのである。

科學は最早やたゞなる自然を對象とするものではない。ニュウトン的自然から離出してゲェテ的自然の領域に馬を進めてきた。繪畫も、音樂も、舞踊も、今や數學と論理學の世界に屬してきた。宗教もまた科學の世界に隷屬しつゝ、神の王國の秘密は、科學者の机上において選出されなければならないもののごとくである。

科學はその萬能を證明したか。自由精神はその萬能を證明しえたのであるか。科學はその無能を暴露したのである。自由精神はその失敗を暴露したのである。

自由精神は自由ではない。精神は不自由である。精神の世界は自由なる天地ではない。一つの桎梏である。吾有知乎。まことに吾れ知ることあらんや。知識は限りある。限りあることが知識の本質である。知的能力は限りある。限りあることが知的能力の本質である。有限の生命をもつて無限の知識を追ふ。知識尚ほ到りえず。生命これ奈何ともすべきなし。まことに生命これ奈何ともすべきなしである。生命の秘密が遠く知識の限界の彼方にあるといふことは既に一般に認められたのである。人間の知的能力は、その長い努力の後において、遂に一つの神秘にと到達したのである。神秘の扉の前に於いて神秘の存在に氣づき、そして遂に神秘の扉の前に彼の兜を脱いだのである。まことに吾れ知ることあらんや。知ることなき也。自由精神は遂に彼の不自由であつたことを證明したに過ぎなかつたのである。科學萬能の思想に對して、今日、歐羅巴において如何なる反動の行はれてゐるかについては、私は既に私の近著のうちにこれを盡くしてゐる。そして、それが如何に亞細亞への傾向を語つてゐるものであるかといふことも既にこれを述べてゐる。希臘的知的能力の行詰まりにおいて亞細亞的世界理解が要求されて來たのである。自由精神の破産によつて自由靈魂への目ざめが始まつて來たのである。

西洋文明は自由精神を代表する。亞細亞文化は自由靈魂を代表する。前者は意識の世界である。後者は無意識の世界である。意識の盡くるところに無意識の世界がある。自由精神の終るところに自由靈魂がある。西洋文明の終るところに亞細亞的文化が横つてゐるのである。

されば亞細亞の世界がより深いといはれることは決して亞細亞に偏したものの言葉ではない。自由精神が淺きがごと

くに西洋文明は淺いのである。自由靈魂が深きがごとくに亞細亞文化は深いのである。

文明は皮膚の淺さである。文化は心の深さである。文明は頭から生れるからである。文化は本能の深みから生れるからである。生命の神秘はたゞ本能の深みにおいてのみ理解される。知識の行詰まりは、されば心への訴へ、本能への突き進みとならなければならないのである。

まことの哲學は知識のうへに立てることはできない。最も深く思惟したといはれたところのソクラテスは知識のうへに最も少き價値を置いたのである。彼は自ら知らざることを知らずとなしたるがために刑に處せられたことを悔いなかつたのである。哲學にして若し眞に一つの全き世界理解であり、或は人生の理解であるとしたなら、哲學は心の國、心の神秘のうへに立てられるものでなければならないのである。

ソクラテスは遂に自由靈魂の世界へと突き進んだ。魂の探究なき生活は人間に價ひするものでないといふことは、彼の闡明中における最も偉大な言葉である。知識の世界を超克して自由靈魂の深みにと突き進むのでなくては、まことの世界理解まことの人間理解はありえないのである。

こゝに亞細亞的世界理解の優越がある。こゝに亞細亞的人間理解の優越性が存在する。世界理解が、若しくは人間理解が、深くなればなるほど、益々亞細亞的とならざるをえないといふことは、決してたゞなる亞細亞マニイではないのである。nur aus asiatischem Weltgefühl Kann eine allumfassende, nichts verleugnende Religion und Philosophie hervorgehen. ——白人哲學者の豫言に對して、われ〳〵は何ものを訂正するの必要もないのである。

白人は自由を外的に理解した。亞細亞人は内的にこれを理解した。されば前者は外的に自由を求めた。後者は内的に自由を求めたのである。

白人はこゝにおいて政治と經濟と精神において自由を求めた。そして遂に政治と經濟と精神の一大帝國を建てたのである。政治と經濟と精神の帝國は日一日と發展して、凡ての世界は西歐化し、そしてまたその西歐化は不斷の發展であるかに見えた。こゝにコントがある。こゝにヘエゲルがある。宗教的世界は永久に葬られ、亞細亞的世界は永遠に過去であるかのごとくに見られたのである。こゝにバツタルがある。歴史は不斷の進化である。こゝにスペンサアがある。社會は絶えざる進化であるがごとくに思はれたのである。過去の偉大なる哲學、過去の偉大なる歴史哲學は全く忘れ去られたのである。ニイチエがプラトオに歸つた時に、人々はこゝに何等の注意をも喚起するには至らなかつたのである。

けれども歴史が不斷の進歩でもなく、また不斷の進化でもなかつたといふことは、既に新らしい哲學における一つの中心の問題となつてきた。プラトオや、老莊や、若しくは印度の哲人がいふところが、バツタルや、ヘエゲルや、コントのいふたところよりも偉大であつたといふことを、人々は今や一般に注意しなければならなくなつてきたのである。

この頃、露西亞から日本を訪れた一文士がスペングラアの名を説いた。彼の哲學が如何に歐羅巴の思想界を動かしてゐるかを痛切に指摘した。この露西亞文士の勞を俟つまでもない。スペングラアの名は既にわれ〱の耳に熟してゐる。日本の講壇哲學者が今日も尚ほリカアト的概念建築に沒頭してゐる時に、民間の素人獵師は既に百尺竿頭一歩も二歩も進めてゐるのである。

世界の轉機は今や明らかになつてきた。マアタス的社會主義ではない。暴力的ボルシエヰズムでもなく、タロポトキン的無政府主義でもない。汎く西洋文明に對する亞細亞的世界の要求がこれなのである。外的世界の一切に對

世界の要求がこれなのである。

外的に自由を求めたところの凡ての企ては失敗に終つた。政治的自由も、經濟的自由も、精神の自由といふことも、その一々は虚僞と誤謬の一々であつた。凡ての外的なるものは自由ではない。不自由である。政治も、經濟も、精神もあらゆる物的なるもの、あらゆる知的なるもの、あらゆる量的、あらゆる機械的なるものは自由ではない。不自由であることが本質なものである。不自由の世界において自由を求めたのである。不老不死の藥を求めたところの支那人の傳說を追ふて、西洋文明は空しい努力、失敗の努力の何世紀を費やしたのである。

こゝに亞細亞がある。亞細亞的自由ある。西洋的自由の失敗において亞細亞的自由が戀ひもとめられるの時がきたのである。

まことの自由は外にあらずして内にある。まことの價値は外にあらずして内にある。まことの富は外にあらずして内にある。亞細亞人は夙にこの原理に徹してゐたのである。亞細亞における一切の文化はこの原理の徹底において生れたのである。佛教といひ、道教といひ若しくは印度哲學といふも、老莊の學といふも、日本の藝術といふも、この原理の徹底において生れたのである。それはたゞなる理論ではない。それはたゞなる聖者の理想ではない。萬人の理想として、萬人の生活のうちに織りなされて、深く人々の心に徹し、不斷の秩序であり、道德であり、生活それ自體であつたのである。こゝに亞細亞文化の本質がある。亞細亞的價値觀念の特質がある。そしてまたこゝに亞細亞的文化の優越性が存在してゐるのである。

## 九

亞細亞の正しき價値が認識されなければならないの時がきた。亞細亞文化が世界において再評價をうけなければな

らないの時がきた。

獨り哲學のうへにおいてばかりではない。また獨り藝術のうへにおいてばかりではない。われ〳〵の社會生活における原理と組織とにおいて、亞細亞が再び世界に要求されるの時がきたのである。

亞細亞的社會の研究は今日の急務である。亞細亞的社會の原理、亞細亞的社會の組織を研究することは今日の急務である。われ〳〵が亞細亞的社會の原理と組織とについて益々深く研究を進めるならば、われ〳〵は社會問題の解決が、亞細亞的社會において最後の鍵を見出すといふことの確信にと到達することができるであらう。

亞細亞的社會が自由の原則と兩立することのできないもののごとくに考へてきたことは、われ〳〵の痛ましい誤謬であつた。亞細亞的社會は、たゞに自由の體現であつたばかりではない。より高き自由の體現としての社會であつたといふことを、われ〳〵は今や知らなければならないの時にと到達したのである。

法學の世界においては契約的から共同的への要求がある。le droit objectif の要求がある。政治學説においては多元的國家説が支配し、政治の實際においては、黨派政治に對する隣保的民主主義の要求がある。經濟の世界においてはキヤナンの所謂安定經濟の要求がある。中世紀的公正價格、產業自治の要求がある。それ等のものに一步を進めよ。亞細亞的社會、亞細亞的社會の原理によつてのみこれ等の要求、凡ての新らしき要求が滿たされるであらうことを人々は知るべきである。

亞細亞は過去ではない。亞細亞は死んではゐなかつた。亞細亞は生きてゐる。亞細亞は未來である。文化のうへにおいて、社會制度のうへにおいて、亞細亞は未來である。そして亞細亞のみ未來でありうる。自由はチエツカとともにきたらず、印度の森林からきたるであらう。政治・經濟・精神的西洋文明がその職分を使ひつくして無爲的無欲的無知的亞細亞主義が勝利の聲を揚げるの時がきたのだと私には思はれる。

森戸辰男著

# 學生と政治

（忽八版）

定價參拾五錢
送料十二錢

學生と政治、腐敗墮落の極に達せる現代ブルジョア政治から純眞なる青年は隔離されねばならぬ。併し眞の政治——高き社會理想に從ひて人類生活を新しき歷史に導き入るべき社會運動——には、當然彼等青年は參與の義務がある。近來我國當局の學生社會運動に對する方策が如何に眞理と脊馳するか？此の時代の青年學徒は何を目標に進むべきか？を其の明晰なる論理に依りて斷定したのが本書である。眞理の前に何者をも恐れざる青年學徒の必讀書。

森戸辰男著 思想と鬪爭（六版）

定價金貳圓
送料金二十錢

森戸辰男著 青年學徒に訴ふ（十七版）

定價參拾錢
送料金十二錢

發行所 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

# 弱少民族の悲哀

## 『一視同仁』『內地延長主義』『醇化融合政策』の下に於ける臺灣

山川均

（一）

一般に、臺灣については、多くの注意が拂はれて居らぬ。少くとも吾々は、殖民地としての朝鮮に對して拂つてゐる程度の注意をも、臺灣に對しては拂つて居らぬ。臺灣には、日本國民の全體の名によつて政治的にも經濟的にも支配せられてゐる三百五十萬の民族がある。無産階級といへども、之に對して責任を回避することは出來ぬ。吾々は彼等の利害と彼等の運命について、決して無關心であつてはならぬ。本年の衆議院には、臺灣特別議會開設の請願を提出され、この請願は憲法に違反せぬものとして受理せられたといふことである。この請願が如何に處理せられて居り、議會によつて結局如何に處理せられるかは、尙ほ不明であるが、兎も角もこの事實は、多くの人々の注意を、不當に忘れられてゐた臺灣民族の上に引戻しに違ひない。私はこの議會に、母國の殖民政策下の臺灣を知る多少の資料をも紹介することは、彼等に對する責任の一端であらうと思ふ。

『……山に喬木あり、海に無盡あり、野に穰々の五穀稔り、百果纍々たり。富源盡滅の期なく、寶庫人の發くに任す。いて兒孫の爲めに百年の計を爲すに足り、進むでは南方の大志を伸ぶべし……。』

『臺灣年鑑』の一九二五年版を開いて見ると、この一節が簡潔な言葉を以て、臺灣領有の意義を吾々に教へ

明治二十八年に臺灣が領有され、三十年からは特別會計が立てられた。當時の計畫では明治四十二年までは、年々臺灣の經費を國庫から補助しなければならぬ豫定であつた。これは日本の財政に取つて可なりの負擔であつたから、寧ろ臺灣を放棄すべしといふ説すらあつた。然るに臺灣の『開發』は豫想以上に進捗し、明治三十七年限り、總督府の財政は獨立して、最早や本國の補助を必要とせぬこと〻なつた。この九ケ年間に本國の財政から臺灣に補助した金額は、三千四十八萬八千六百八十九圓であつて、これが領有以來日本が臺灣に注ぎ込んだ元手であつた。

この資本に對して、日本は何を得たらうか。明治三十年から大正十年までの對內貿易（本島と母國間）の移出入金額を總計して見ると、二、〇〇三、三一二圓であつて、これから生ずる純益を最低一割五分と見積つても、三〇〇、四八一、八四八圓であつて、日本が領有以來、臺灣に注ぎ込んだ元金の十倍近くとなる。

日本が臺灣の領有から受ける商業上の利益――間接的であり、從つて正確な數字に現はれてゐない利益――は暫らくおき、それ以外、國庫は年々、臺灣から直接にして明白な收入を得つつある。さきにも述べた如く、領有當時は、明治四十二年までは、臺灣領有の代價として、年々持出しとなる豫定であつた。然るにこの持出しは三十七年で打切られ、之に反して四十二年から大正三年までは、臺灣の關税收入の一半を、却つて國庫に繰入れること〻なつた。即ち臺灣は、積極的に母國の財政の不足を補ひ、臺灣の領有は、母國に取つての直接の財源となつたのである。いま大正二年から大正十一年に至る十年間の砂糖消費税を計上して見ると、一八、四六九、八九〇圓であつて、たゞ之れだけを以つて、さきに臺灣に投資せられた三千萬圓の元金から揚がつた利益と見做しても、隨分割のよい取引であつて、殖民地領有の意義の少くとも一半を物語つてゐるものである。

（二）

臺灣の領有以來、歴代總督の施政方針を讀むと、その骨子となつてゐるものは謂ゆる『島民の綏撫』であつて、要するに地方官が『警察と兵備とを羽翼とし』『寛猛其の度に適する』ことを教へたものである。大正八年、最初の文官總督として赴任した田總督の施政方針を讀むと、初めて産業政策に重きが置かれてゐる。大正八年前後は、臺灣の經濟狀態に著しい變化の現はれ[illegible]臺灣に於ける[illegible]の合計數は、大正

七年の二百三十五社から九年には四百三十四社に激增し、その資本總額は二億圓から一躍して、五億七千萬圓となつた時明であつて、この一事によつても、臺灣の統治が武官政治から文官政治に推移したことの、決して偶然でないことを知らしめる。

日本の統治の下に行はれたこの經濟上の變化は台灣の島民に取つて、何を意味してゐるだらうか。台灣全島の人口三百九十萬人中（このうちには內地人及び外國人二十一萬人を含んでゐる、農民は殆んど皆台灣人である）五割八分は農民であるから、先づこの方面の變化を一瞥しよう。

先づ第一に、總人口と農民との割合を見ると、明治四十三年には、農民は人口の六三%を占めてゐたが、大正二年には六二%となり、大正五年には一時六四%に增加したが、八年には再び六二%に低下し、十年には六〇%に減じ、大正十一年十二年には更に減じて五八%に降つてゐる。この間にも農民の人口は約十七萬六千を增加してゐるが、總人口との割合から見れば、人口中、農業によつて生活を支える部分の割合は、著しい勢ひで減じて居り、しかも之は確乎たる傾向なのである。

この間に、耕地面積も增加した。即ち明治三十五年の耕地面積を一〇〇とすれば、四十年には一五〇に激增した。しかしそれ以後は增加の割合を減じ、大正九年には一七一となつたが、十年、十一年、十二年の三ケ年は一七二を保ち、耕地の增加は最早や停止の狀態にある。いま耕地面積と農業人口との割合を見ると、明治四十年の耕地面積と四十三年の農業人口とを比較すると、一人當り〇・三二三甲（一甲は九反七畝二十四步）であつたが、大正十二年の一人當り耕地面積は〇・三四二甲となつてゐる。以上により、ほゞ次の事實を知ることが出來る。耕地は增加した。農業人口は絕對的には增加はしたが、人口の增加に對しても、耕地の增加に對しても、相對的には減少した。即ち農業が農業人口を支へてゐる力は減少した。言葉をかへて云へば、農民はその生活を支持するために、漸次、より多くの土地を耕やすことが必要となつてゐる。

それと同時に農產物の價格總額は、大正三年の八千餘萬圓から大正十一年には一億八千六百餘萬圓に激增して居つて、この間に物價は約二倍となつてゐるから（大正三年七月の台北市場の重要品卸相場を一〇〇とすれば、大正十一年の平均物價指數は二〇〇・二九となつてゐる）假りに大正三年の物價標準に引直して見ても、千三百萬圓以上の增加となる。然るに農民の生活狀態、ことに多數の小農の生活狀態は、この間に著しく窮迫を來してゐることが爭ふべからざる事實である以上は、この增

加した生產力は、多數の農民には歸しないで、彼等以外の何者かによつて搾取せられてゐるのである。

以上は農民を全體として見た觀察であるが、この二百三十餘萬の農民の內容が、如何なる構成に分れてゐるかは、一層重要な事柄である。ことに農民の間のこれ等の階級または層の間には、日本の統治とその產業政策との下に如何なる作用が進行して狀態ゐるかは、特に重要な事柄であるが、遺憾ながらこの動的を知るべき充分の統計がない。そこで茲にはたゞ、大正九年・十年に亘る調査の結果により、台灣の農民が如何なる階級から成り立つてゐるかを伺ふに止どめておく。

大正九年・十年に於ける台灣の耕地七十二萬一千餘甲（七十七萬六千餘甲中の）について見ると、農民戶數の六四％强が耕地全體の僅かに一四・四％弱を持つて居り、三六％弱が耕地の八五・六％强を持つてゐた。即ち次表の通りである。

| | 五分未滿 | 五分以上 | 一甲以上 | 二甲以上 | 三甲以上 | 五甲以上 | 十甲以上 | 二十甲以上 | 三十甲以上 | 五十甲以上 | 百甲以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 戶數 | 一七二・九三二 | 八六・七二一 | 七〇・七三九 | 二八・四二三 | 二三・二七六 | 一四・九九一 | 五・四五四 | 一・三五六 | 八四三 | 三七六 | 一九六 |
| 面積 | 四〇・九八七 | 六二・五一三 | 一〇〇・一四〇 | 六九・七四九 | 八八・六[illegible] | 一〇一・〇六六 | 七三・七二三 | 三二・九九五 | 三一・八三[illegible] | 二五・四九七 | 九四・〇七三 |
| 戶數百分率 | 四二・六八 | 二一・四〇 | 一七・四六 | 七・〇二 | 五・七四 | 三・六八 | 一・三五 | 〇・三三 | 〇・二一 | 〇・〇九 | 〇・〇五 |
| 面積百分率 | 五・六八 | 八・六七 | 一三・八八 | 九・六七 | 一二・二[illegible] | 一四・〇[illegible] | 一〇・二三 | 四・五七 | 四・四一 | 三・五四 | 一三・[illegible] |

即ち一方には、耕地の約七分の一を二十六萬戶（六四％）が持つて居り、他方にはほゞ之と均しい耕地を、百九十六戶が占有する。これを日本內地に比較して見ると、一町步未滿の所有者は七三・二五％を占め、五十町步以上の所有者は〇・〇九であるから、臺灣に於ける土地集中の程度は、內地よりはやゝ低いにせよ、大體に於て大差のない狀態にあると見做してよい。（これに相當する大正十一年度日本內地の數字は五段未滿四九・〇五、五段以上一四・二五、一町以上一八・〇六、三町以上四・六五、五町以上二・九〇、十町以上一・〇〇、五十町以上〇・〇九である）。

（三）

日本の產業政策の下に、臺灣に於ける土地の集中が如何なる速度で行はれ、また貧農と中農との上に如何に作用してゐるかは、精密に知るべき資料がないが、自作農が減少して自作兼小作が增加してゐる事實によつて、或る程度までの推測をすることが出來る。

前述の如き割合で農民の間に所有せられてゐる耕地が、實際に耕作せられてゐる狀態を見ると、一方には、甚

分未滿の土地を耕作してゐる戸數は、五分未滿の地主の數よりも少ないこと（また五分未滿の耕作者の耕地の總面積も、五分未滿の地主の所有地總面積よりも少ないこと）、同時に他方には、七甲以上の耕地を經營してゐる戸數は（その面積も）、七甲以上の地主の數とその總面積よりも少ないことを見る。即ち耕地經營の狀態は、次表の如くなつてゐる。

| | 五分未滿 | 五分以上 | 一甲以上 | 二甲以上 | 三甲以上 | 五甲以上 | 七甲以上 | 十甲以上 | 廿甲以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 戸數（百分率） | 三〇・二三 | 三三・八八 | 二三・七三 | 一〇・七六 | 七・八四 | 三・四四 | 一・一四 | 〇・七八 | 〇・一三 |
| 面積（百百率） | 四・八八 | 一〇・〇八 | 二〇・二〇 | 一五・九九 | 一八・一六 | 八・六六 | 六・〇四 | 五・七七 | 九・六〇 |

これを前掲の土地所有者の百分率と對照して見ると、五分未滿の所有者は四二・六八%でその總面積は五・六八%であるが、五分未滿の土地を耕やしてゐる戸數は三〇、二三%で、その總面積は四・八八%である。この差に相當する約四萬五千戸の小地主は、恐らくはその大部分が、五分未滿の土地では一家を支へることが出來ないので、他の地主から土地を借入れて自作兼小作農となり、耕地五分以上の農民戸數の一部分をなしてゐるものと思はれる。また前述の如く、五分未滿の耕地は一戸の生活を支へるに足りない面積であるから、耕作者の三分の一に近い約十三萬戸の農民は、副業により、又は農業勞働者その他の半勞働者として辛うじて生活してゐる最下層の農業勞働者であることは云ふまでもない。これに反して七甲以上の地主とその總面積と、七甲以上の耕作者戸數とその總面積との間に著しい相違があるのは、これ等の大所有地の約半分は、分割して小作に出してあるからに外ならぬ。

この兩端の中間、即ち五分以上七甲以下の各欄を通じて、いづれも耕作者の戸數及び面積が、地主のそれよりも增してゐる。この差大凡そ四萬戸は、小作農と自作兼小作農とによつて膨脹してゐるものと思はれる。

次に自作農、自作兼小作農、小作農との相對的の增減は、次表の如くなつている。

| | 自作農 | 自作兼小作農 | 小作農 | 人口總數に對する農業人口 |
|---|---|---|---|---|
| 明治四十三年 | 三三・七 | 二三・五 | 四二・八 | 六三 |
| 大正　二年 | 三二・四 | 二五・五 | 四二・一 | 六二 |
| 五年 | 三一・二 | 二六・四 | 四二・四 | 六四 |
| 八年 | 三一・八 | 二八・九 | 四〇・二 | 六二 |
| 十年 | 三一・八 | 二八・九 | 三九・三 | 六〇 |
| 十一年 | 三一・三 | 二九・三 | 三九・四 | 五八 |
| 十二年 | 三〇・一 | 三〇・〇 | 三九・九 | 五八 |

備考ー大正十二年末の戸數による比較は、自作二九、自作兼小作三〇、小作四一となつてゐる。

斯ように明治四十年以來、多少の不規則はあるが、確乎たる傾向として、自作農と小作農とは減少し、自作兼小作農が增加してゐるのである。これを日本内地の狀態と比較して見ると(右に相當する大正十一年の日本内地の數字は、自作農三〇・六〇自作兼小作農四一・一七、小作農二八・二三であるから、)自作農の割合は兩者ほゞ同じであるが、小作農の割合は内地よりも遙かに少なく、從つて自作兼小作農は、内地よりもそれだけ少ない。增減の傾向は、自作農の減少することは兩者に共通であつて、たゞ内地に比して、稍々緩漫である。これに反しては、内地では自作農の減少は、大部分小作農の增加によつて償はれてゐるが、台灣では小作農もまた減じてゐる。從つて自作兼小作農の割合は、内地台灣ともに增加はしてゐるが、内地に於てはその增加の率は極めて僅かであるが、台灣に於ては、著しい增加を示してゐる。即ち内地の場合には、土地集中の作用によつて耕地を失つた小自作農の大部分は、小作人となり、台灣の場合には、同じ作用の壓迫を受けて自作兼小作農として命脈を保つてゐるものと見做される。

自作地と小作地との一戸當り平均を見ると、自作地は一・一三五甲、小作地は一・三八九甲(大正十年)であつて、れよりも、稍々廣く、且つ内地と反對に、小作地の方が、自作地のそれよりも多くなつてゐる(大正十一戸當り平均は、自作地八反四畝、小作地七反五畝弱で

## (四)

以上の數字のみによつては、いくばくの明確な結論を抽き出すことも出來ないが、しかも台灣に於ける農民狀態の大體を推測せしむるに足るものがある。即ち一方には少數の大地主があるが、農民の多數は、その耕作によつては生活を支持するに足りない僅かの土地を持つてゐる。これ等の小農は經濟上の壓迫により、或者は土地の一部を失つて自作兼小作農の社會層を膨張せしめ、或者は全く土地を失つて小作農となり、その他の者は農業から驅逐せられてゐる。また一方には、例へば製糖會社の經營地や總督府殖産局附屬地に見るような、進歩した大規模の耕作が行はれてゐるが(大正十二年末にこれ等の經營地に用ひられてゐたトラクター四十三台、八百五十七馬力、スチームプラオ二十二臺五百馬力であつた、)農民の多數は、極めて狹小な土地を耕やしてゐる貧農である。從つて商業資本が勢力を得るにつれ、容易にその支配と搾取に服せざるを得ぬ。

土地の集中の程度に於いて、即ち大地主と最下層の小地主とが増加し、中農が急速に消滅してゐる程度に於ても、五段未滿といふが如き狹小な土地を耕作してゐる貧農の割合に於ても、自作農が減少して小作農が増加し、農村に於ける地主と無產農民との階級的分化が進行してゐる程度に於ても——すべて之に相當する現象は、台灣に於ても明かに現はれてはゐるが——尙ほ且つ今日は、少くとも內地の程度には達して居らぬといふことが出來る。即ち土地の集中、農村の階級的分化といふ點のみから見れば——近き將來には、內地と同一の狀態に進むことは疑ひがないにもせよ——台灣の農村の形勢は、今日は尙ほ內地のそれほどに切迫して居らぬ。言葉を換へて云へば、農村の內部に於ける階級的形勢が切迫し、階級的性質を帶びた農村問題と農民運動とが當面の問題となるのは、今日以前ではなくて、今日以後のことである。

然しながら之は台灣の農民の生活狀態が、內地農民のそれに優つてゐると信ずべき、少しの理由ともならぬ。また內地の農民の大衆が、地主の苛酷な搾取を蒙つてゐるに反して、台灣の農民は、その程度の搾取を受けて居らぬと考ふべき何等の根據を與へるものではない。台灣の農民の上には、內地の農民の知らない一つの要素が働らいてゐる。即ち母國の資本である。工業資本の間接の作用は暫らくおき、商人資本によつて搾取せられてゐる點では、內地の農民といへども異るところはない。たゞ台灣の農民に取つての特殊な要素は、これ等の商人資本が主として內地人の資本であるといふ事實にある。この事實は、商人資本に對する台灣の農民の關係を、極めて微妙なものとする。農民がこれ等の資本のために如何に容赦のない搾取を受けてゐるかは、これ等の資本は內地以上の利潤を豫期して、——言葉を換へて云へば、無制限な搾取を豫期して——流入したものだと云ふ一事によつても、充分に暗示せられてゐる。斯ような性質を持つた母國の商人資本の勢力と、農業生產者としての島民とが對峙した時に、この兩勢力の天秤のいづれかの一方に、決定的の重量を添へるものは、いふまでもなく政治上の權力である。そして之が產業政策乃至は殖產政策といふ形を取つて現はれる。

この事實を最もよく註解するものは、昨年問題となつたバナナ直移出の問題である。バナナの產額は年々激增し、大正十二年中に內地移出せられた金額は八百萬圓以上であるが、昨年の初に臺灣青果株式會社が出來てからは、臺灣のバナナはこの會社が一手に取扱ふことゝなつた。然るに平地一甲以下山地三甲以下のバナナ栽培者は、同業組合に加入する資格がなく、從つて青果株式會社との折衝に於いて非常に

段は思ふ存分、會社のために踏み倒される。然るに内地消費者の手に、それだけ廉價で渡るかといふと決してさうでない。そこで若しバナナ栽培者が各部落で共同荷造所を設け、なるべく中繼機關の手を經ずに、直接内地の共同販賣所へ送り附けて販賣することになれば、栽培者の畑から臺灣市場に現はれるまでも、既に百斤について四十五錢の經費が節減され、臺中州下に於ては（臺中州は臺灣バナナの九割を産出する）一ヶ年六十萬圓の利益となる。そこで臺中州に於ける平地一甲以下山地三甲以下の小栽培者は、青果株式會社の壓迫を免かれ、現在の苦境を切り拔ける方法として、内地の共同販賣所へバナナを直移出する計畫を立てた。ことに内地六大都市に中央市場が開かれることになれば、この方法は最も便利であり、且つ生産者と消費者とを、最も直接的に結びつける有効な方法と考へられた。

かくてバナナ栽培者は一切の計畫を立てゝ六月末にはバナナは續々基隆に到着した。ところが郵船會社も商船會社も、總督府殖産局の内命により、生産者が直移出する一切のバナナの積荷を拒絶したのである。のみならず總督府では、青果物同業組合員以外のものがバナナを管外に搬出するのは、搬出營業者の行爲であつて違法であるといふ決定をしたが、栽培者には、勿論搬出營業者の同業組合に加入する資格はない。こゝでバナナ栽培者の計畫は、法規の上からも[illegible]灣青果株式會社の資本の統制に服するの外なくなつたのである。私はこの事實によつて、必ずしも總督府殖産局の役人が、營利會社と結託したことを證據立てようとしてゐるのではない（これは全然、問題外である。）たゞバナナの移出を統一しようとする總督府の殖産政策は、臺灣に於けるバナナの取引を獨占しようとする商業資本の欲望と、たまたま一致するといふこと、そしてこの一致が、小生産者の上に一定の影響と作用を及ぼすといふ、爭ふことの出來ない事を例證してゐるのである。

臺灣島民のみについて云つても、その内部には階級的の分化作用が進行しつゝある。都市と農村とを通じて、島民中のブルジョアジーの一角は、内地人の資本の勢力（政治上の勢力とも）と漸次に結合しつゝある。從つて今日は、最早や島民を一つの全體として取扱ふことは出來ぬ。そしてこの狀態は、今後ますます、そして一層急速に、進展するに違ひない。けれども今日は――少くとも今日までは――内地の資本の勢力と島民との對峙が前景を占め、島民間の階級的對立は、寧ろ後景におしやられてゐたと云つてよい。現に小作人によつて農民組合が組織せられてゐるのは、内地資本と直接に當面してゐる甘蔗園の農民なのである。

[illegible]

見逃がしてはならぬ。製糖會社は臺灣に於ける最大の資本家であると同時に、最大の大地主として、農奴に均しい臺灣農民に君臨する。大正十一年までに、糖業資本が臺灣の農民の手から獲[illegible]

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | 同小作權取得地 |
| 合計 | 七五、五六七 | 八七、一五〇 | 九三、九八八 | [illegible] | |
| 耕地總面積との比率 | 九・九 | 一一・三 | 一二・二 | [illegible] | |

十三 製糖會社固定資産（大正十一年營業期、單位圓）

| 土地 | 建物 | 機械 | 鐵道 | 什器 | 農具 | 船舶 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 四七、九七〇、三八〇 | 三一、九〇三、三八〇 | 七六、三四四、四六一 | 二五、二五八、三四 | 一、七七七、五五六 | 一、二〇五、一六二 | 四、四〇九、〇六三 | 一八八、九六八、五五 |

（六）

斯ように砂糖王國は、臺灣[illegible]の耕地總面積のうちに益々大[illegible]

內地に於ける百萬圓以上の株式會社は、その數に於ては全體の一五％であるが、資本金額に於ては全體の八三・三七％を占めてゐる。臺灣では、資本はこれほど少數の大會社の手に集中はせられて居らぬが、尙ほ且つ百萬圓以上の會社が全體の三分の一を占め、資本總額の九〇・九％を握つてゐるのであるから、資本は相當に大企業に集積せられてゐると云つてよい。金融業の發達もまた注意に値ひする。前表中、商業に關する諸會社の社數二百十三、資本總額一億七千萬圓のうち、一億一千四百萬圓餘は銀行業、信托業、保險業、無盡業、金貸業の四十會社に屬してゐる。

臺灣に於ける代表的の大企業は、いふまでもなく製糖業であつて、工業株式會社の資本總額二億七千萬圓中の二億六千二百餘萬圓を占め、（大正十一年）全ての株式會社の資本總額の四五・三％に當つてゐる。明治三十三年に臺灣製糖株式會社が創立され、初めて一萬二千圓の補助金が下附せられて以來、臺灣の製糖業が日本政府の殖産政策の暖い懷のうちで、如何に急速に成長したかは、下表によつて示されてゐる。

この驚くべき成長の過程のうちに、『一人の資本家は多くの資本家を殺した』。けれども唯だに多くの資本家を殺したゞけではない。臺灣に於ける製糖業の發達は、一面に於ては、單な

| 年次 | 資本金額 |
|---|---|
| 明治三十五年 | 一、〇〇〇、〇〇〇（圓） |
| 同　四十三年 | 四〇、八八八、〇〇〇 |
| 大正　三年 | 一〇二、一〇〇、〇〇〇 |
| 同　七年 | 一二七、五〇〇、〇〇〇 |
| 同　十一年 | 二七一、四五〇、〇〇〇 |
| 同　十二年 | 二七一、二〇〇、〇〇〇 |
| 同　十三年 | 二八一、二〇〇、〇〇〇 |

る企業集中の作用であると同時に、一面に於ては、母國の資本が土着の生產者を驅逐する過程であつた。次表はこの過程の進行を、明かに示してゐる。

| 年次 | 舊式糖廍 數 | 舊式糖廍 生產能力（噸） | 改良糖廍 數 | 改良糖廍 生產能力（噸） | 新式製糖場 數 | 新式製糖場 生產能力（噸） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治三五年 | 一、一一七 | 二一、一七〇 | — | — | 一 | 三〇〇 |
| 同　四三年 | 六六三 | 六、六三〇 | 六九 | 五、六二〇 | 一六 | 九、七六〇 |
| 大正　三年 | 二一七 | 二、一七〇 | 三四 | 二、八七〇 | 三一 | 二四、三三〇 |
| 同　七年 | 一二一 | 三、一一〇 | 三三 | 二、八二〇 | 三七 | 二九、二〇〇 |
| 同　十一年 | 一三五 | 一、三五〇 | 一六 | 一、二七〇 | 四五 | 三五、〇五〇 |
| 同　十二年 | 一〇二 | 一、〇一〇 | 一二 | 八二〇 | 四四 | 三四、六五〇 |
| 同　十三年 | 一〇四 | 一、〇四〇 | 一三 | 一、一八〇 | 四四 | 三四、六五〇 |

一億八千萬圓の資本を擁する十四の新式製糖會社は、本島內に四十八箇の製糖工場と、[illegible]工場一、酒精工場十を持つてる[illegible]

[illegible]

[illegible]多くの農民の哀話を秘めてゐるか[illegible]

る以外に、本島外に十七の精糖工場と八つの粗糖工場を有し、原料採取區域として約六十二萬二千甲の耕地を、殆んど自己の版圖の如くに支配しつゝある。この一大砂糖王國はまた專用線九五二・六哩、營業線二七五・二哩、合計一千二百二十七哩八の鐵道を領有する。臺灣の鐵道總哩數は一千八百四哩六（大正十二年）であつたから、その六八％が砂糖王國に屬してゐることゝなる（官線二九・一％、その他の私線二・九％）。王國は一億八千餘萬圓の固定資産を有し（次表を見よ）、一ケ年六十億六千五十萬斤の甘蔗を消費して、五億八千百三十萬斤の砂糖を生産し（大正十一―十二年度）、その中から四千七百萬圓の納密よりも甘い利潤を搾り出す（七大製糖會社の大正十三年度の利益は三千九百餘萬圓であつて、拂込資本額の二割七分五厘に當つてゐる。また大正九年には[illegible]）

| | 大正八年 | 大正九年 | 大正十年 | 大正十一年 |
|---|---|---|---|---|
| 製糖會社所有地 | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] |
| 同小作權取得地 | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] |
| 計 | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] |
| [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] | [illegible] |

得した耕地は五萬二千餘甲であつて、會社の所有地は年々增加しつゝある。この急速な製糖會社の所有地增加の物語りのうちには、如何に多くの農民の哀話を秘めてゐるか、そして謂ゆる資本の原始蓄積が如何に露骨な――殖民地のみで見られる露骨な――形で行はれたかについては、こゝには記述せぬ。たゞ賣買の形式で、その實會社をして、農民から強制的に農民の耕地を收用せしめるといふようなことは、少くとも今日は臺灣に行はれてゐないといふことを特筆し、そして製糖會社は、正しい手段にせよ正しからざる手段にせよ、現に臺灣の農民の手から既にこれだけの耕地を獲得し、尙ほ年々その所有地を增加しつつあるといふ事實を註するだけで、充分だと思ふ。

て、（一）甘蔗の買收價格をあらかじめ決定すること[illegible]についての交渉を、組合との間に團體的に行ふことを要求し

挿話がある。事件の翌日、午前二時、警察は一齊に[illegible]

きな割合を占めてゆく廣大な土地を所有してゐるばかりでなく、その他の數萬甲の土地に對しては小作權を握つてゐる。そこで製糖資本は、臺灣の耕地全體の十分の一以上の耕地を支配してゐるものであつて、この點に於ては、約十萬甲の土地を耕してゐる二十二萬五千戶の農民（全農民の五五％）に匹敵する一大勢力であつて、資本の一大王國と云つてよい。ことに蔗農だけについて見れば、大正十二年の甘蔗作付面積は十一萬六千餘甲であるから、臺灣に於ける甘蔗農業——從つて農民——は完全に製糖支配の下にある。

製糖會社の所有地及び小作權取得地九萬甲のうち約四割は、機械力と進步した耕作方法とを應用して、會社自ら直接經營する自作蔗園であつて、殘りの約六割は、農民をして小作せしめてゐる一般蔗園である。いまその收穫を比較して見ると、自作蔗園の一甲當り收穫は五二、一三〇斤であつて、一般蔗園の一甲當り收穫は僅かに四四、一六〇斤である。從つて一般蔗農は、生產技術の高い、生產力の高い、從つて生產費の低い會社の耕作と競爭しなければならぬ。この競爭の結果として、一般蔗農は必然に滅亡しなければならぬ。たゞ一般蔗農が臺灣の農業界から驅逐されないのは、今日、製糖會社の生產能力が必要とする原料の全額を、悉くその自作地から供給することが出來ないからである。即ち一般蔗農の存在に、たゞ會社の必要と便利の問題である。會社はそれを有利とする場合には、何時でも、そして望みの程度だけ、自作を擴張することが出來る。そしてこれに相當したゞけの一般蔗農を、農業界から驅逐することが出來る。即ち臺灣の蔗農は、完全に糖業資本の支配の下にあると云ふことができる。

のみならず臺灣には、砂糖原料採取區域制度なるものが設けられてゐる。即ち全島に亘つて、甘蔗栽培地は幾つかの區域に分け、それ〲一定の製糖會社に割當てられてゐる。そして收穫した甘蔗は、製糖原料以外に供給せしめぬことは勿論、指定區域以外に搬出することさへも許されない。甘蔗の買收價格は耕作者と協定して、官廳の認可を受ける規定であるが、この規定は正直にその半分だけが實行せられてゐる。即ち製糖會社は、事實上、官廳の認可を受けるのみで價格を決定し、農民の甘蔗はこの獨斷的な價格によつて買ひ取られてゐるのが常である。そして農民は否でも應でも、定められた買收價格で指定せられた會社に賣らなければならぬ。即ち名は買收であつて、その實は一種の徵發である。斯うして一方には、甘蔗の價格に對する砂糖王國の主權を確保すると同時に、他方には總督府はその殖產政策の本義に基き、農民に關涉し一一三でも甘蔗を栽培せしり

てゐる。農村の金融機關や蔗作改良會なども、農民が甘蔗の栽培を强要することを制肘する手段に用ひられてゐる。補助金や獎勵金の前貸しが、同じ手段の一つであることは云ふまでもない。

斯ように一般蔗農の耕作地に於ける甘蔗の價格すらも、之を決定する力は、完全に會社が握つてゐる。そしてこの決定權に對して農民が喙を容れることは、砂糖王國の主權に對する許すべからざる大逆であつて、現に昨年は、斯ような『不逞』の農民が騷擾罪に問はれた事件がある。たゞ會社の絕對の決定權を制限してゐるものは、會社自ら必要とする原料の供給に不足を來たさぬ程度には、一般蔗農を活かしておかねばならぬといふ一事である。そこで會社が支拂ふ甘蔗の價格は、一般蔗農に最低限度の生活を與へる點にまで切り詰められてゐる。

然るに注意すべきことは、製糖資本のこの神聖な主權に對して、新たな反抗の勢力が生まれたことである。即ち一部の蔗農の間に農民組合の組織せられたことである。林本源製糖會社の採取區域に屬する臺中北斗郡二林庄の蔗農により、一昨年初めて蔗農組合が組織せられたが、これが臺灣に於ける恐らく唯一の農民組合である。昨年の收穫期に當り、組合は會社に對して、(一)甘蔗の買收價格をあらかじめ決定すること、(二)これについての交渉を、組合との間に團體的に行ふことを要求した。一般蔗農の栽培した甘蔗に對して、會社が價格の決定權を握つてゐることは前述の通りであるが、これは單に經濟上の作用により、斯かる結果に到達してゐるといふ意味ばかりではなくて、文字通りに、會社が勝手に價格を決定してゐるのであつて、會社は一般自作農の畑の甘蔗を、買收價格を定めずに刈り取り、後日に至つて買收價格を發表する。二林庄の蔗農組合は、この習慣に對して、かねてから反對してゐたが、昨秋の收穫日前一日、組合は重ねてこの要求を會社に提出したのである。

この要求に逢つて當の會社は頗る狼狽したが、××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××××が、斯ような誇張と宣傳との目的が、この機會に組合の全滅を計るにあつたことは云ふまでもない。これについて面白い(?)挿話がある。事件の翌日、午前二時、

圓、三圓、十圓、五十圓等狀袋に入れあるを、捺印と引換に渡されたるものにして、約四十甲にして十三圓四十二錢を下附されたるものあれば、八甲にして二圓二十錢のもあり、十甲にして二十二圓二十錢を得たるもありき。

『又當時御呼出しを受けたる者にても、恐怖の念に驅られ、派出所に出頭せざりし者も尠からず。此等の者は勿論捺印もせず、交附金も受けざりしにも拘らず、出頭して捺印せし者と、同樣の取扱ひを蒙りたり。之れ各方面に於ける概況にして小梅庄に於ては、關係者一同公學校內に、斗六方面は崁頭厝支廳構內に、林圯埔方面は頂林及過溪、勞水坑各派出所構內にて、何れも門を閉鎖し、出入を禁じ、多數警官の嚴重なる警戒裡に於て行はれたるものにして、就中、崁頭厝支廳構內の如きは、前年多數の土匪を歸順式擧行に××××××××××る歷史附の場所柄とて、庄民等は不安と恐怖に生きたる心地もせず、殊に廳長の「判を捺さぬ者は、臺灣には××××××××××××」との言葉に一同戰慄し、皆々泣く／＼捺印したるものにして、此日は朝より午後に至るまで、一同構內に閉ぢ込められ、一歩も門外に出づるを許されざりき。………』

これは大正十四年六月、二部の庄民一千三十一名を代表して、伊澤臺灣總督に提出した『歎願書』の一節である。現に警官から虐待を受けた一人たる林啓興なる者は『深く之を遺恨に含み、後ち遂に惡むべき陰謀を企て、不逞の徒十餘名を糾合し同派出所を襲ふて巡査以下三名の警官を慘殺し、自己も亦た匪徒刑罰令を適用され死刑に處せられた』事件――林圯埔事件――を誘發したことによつても知ることが出來る。

かくて大竹林のこゝかしこに、『臺灣總督府模範竹林』の標札が立てられ、林圯埔街には三菱事務所が設けられ、勞水坑には臺灣總督府模範竹林事務所が設けられた。これが事件の第一段である。

ところが『奚ぞ知らん此の總督府模範竹林事務とは、三菱事務所の出張所の假名にて、其事務員は悉く三菱社員ならんとは』！　庄民が驚いたのは尤もである。

『而して官設の爲め最も盡力せし林圯埔支廳長森警部は幾程もなく、官を辭して三菱に入社し、竹林事務所の主任となり、各派出所の警官等も、或は同社の請願巡査となり、或は辭職して其の事務員となると云ふが如き有様にて、例へば現在に三菱事務所に在職の齋藤某の如きも、官吏當時は斗六廳巡査として大湖底派出所に駐在し、同方面庄民の[illegible]

れより三菱の請願巡査となり、次で職を辭し入社せるものなり……』。

そこで庄民も、『漸く模範林編入事件の眞相を看破し、今や救はれ難き陷穽に突き墜されし心地して、絕望と悲憤と怨嗟の情に遣る瀨なかりしが』、この時から間もなく、總督府模範竹林といふ標札は、いつの間にか三菱會社貸下名義の標札に變更された。これが事件の第二段である。庄民は救濟方について總督府に嘆願書を差出したが、願書は素氣なく却下され、代表者陳張源、陳玉丕等は南投廳に拘留された。

その結果は、會社が竹の伐採及販賣を直營し、『庄民は唯だ會社の苦力となり、其指揮により、之が伐採及び搬出に從事し、賃銀を得るに過ぎ』ざるものとなつた。即ち庄民は土地から解放され、「自由な」無產者となつた。そして彼等の受ける賃銀は、竹一流につき、遠近を平均して二十三圓十錢となる。然るに一流の竹を伐採搬出するためには、屈强の男子一人にて二十日乃至三十日を要するから、日割にすれば僅かとなるが、會社は竹一流を、六十六圓で二八水方面の商人と賣渡契約をしてゐるから、何等の資本を投じないで、差引四十二圓九十錢の利益を得る。これは問題の竹林中、下清水溪流域方面の實狀であるが この區域からのみで一ヶ年千五百流の產出があるから、會社は九萬圓の利益を得、庄民は二萬六千五百圓餘を得る、これを庄半六百戸の庄民全體の收入であつて、一戸平均、僅かに四十四圓餘となるに過ぎぬ。然るに從來は一ヶ年二千流の竹を產出して居つた（三菱の濫伐のため、著しく產額を減少した）から、庄民はその價格の全部、十三萬圓の收入を得てゐたのである。

この外木炭、干龍眼、干筍などの產出があるが、何れも會社に對して過分の料金を拂つて許可を得なければならぬ。木炭の如きも、焚上り高百斤につき、會社から二十錢を徵集される上、社員の自家用として、時價の如何に拘らず、百斤八十錢で二百斤の納付をさせられる。

『檳榔一本に付き十錢、筍は蔴竹一株七錢乃至十錢を徵收する等、何に付け彼に付け、彼は庄民より一錢にても多く搾取せんとのみ工風を凝し、甚しきは庄民中の貧困者等が、米鹽の資に窮し、竹林中より雜木の枯枝、竹欉の、枯株等を蒐集し、薪となして林圯埔の町まで賣りに行かんとすれば、三菱社員は途中にて待ち伏せ、此等よりも一々厘金税と稱する料金を徵收し、一擔に付、大人より三錢、婦人と兒童とよりは二錢づゝ取る事にて、婦人や兒童にして、此の二錢の厘金税の爲め巡視員等より毆打されたり、擔へる薪を奪はれたりする等、屢々あり……』。

その他の地域でも、事情はほゞ同じであつて、之がパルプの輸入を防遏して國益の增進を計る母國の產業政策のために、臺灣の民業が拂はれてゐる代價である。

斯うして十七年を經過した今日、竹林問題が何故に新しい問題として起つたらう。十七年前に、總督府模範竹林といふ標札が、三菱貸下の標札に變形したやうに、この標札は再び、そして極めて自然な成行として、三菱製紙會社所有林の標札に變化しやうとしてゐるからである。竹林が總督府の竹林である間は、庄民は尙ほ一縷の望みを殘してゐた。然るに三菱の竹林拂下運動によつて、いまこの殘された最後の望みが絕えかけてゐる。これが竹林問題が、十七年後に甦つた理由である。この問題のこの後の成行きについては、遺憾ながら私は知るところがない。

（八）

台灣に於ける主要な工業生產品（年額五萬以上）の年額は大凡二億三千五百萬圓（大正十二年）であるが、このうちから砂糖及び酒精、並びに樟腦、阿片、煙草の如き專賣品を引去ると、約四千萬圓となる。これ等の生產の大部分は、家內工業乃至は小規模な手工製造業によつて行はれてゐるものである。これ等の製造業には約十萬の勞働者が使用せられてゐるが、製造業者の數は二萬一千餘戸（いづれも大正十一年末現在）であつて、一企業平均僅かに五人に滿たぬ。また勞働者の約五割五分は婦人である。最も多くの勞働者を包容する帽子製造業の如き、年產額百二三十萬圓（好況時代は二百萬圓以上）に上り、大正十一年末の現在職工は男子五七〇人女子四七、八五七人であつたが、製帽業者の數は二百九十八であつて、一企業の平均職工數は百六十二人强となる。同じく百二三十萬圓の年產額を有する機織業には、男子二七三人、女子一、九二四人を使用してゐたが、機業者一千三十二戸であつて、平均二人强である。この種の手工製造業乃至は家內工業又は小規模工場の場合は、大工場制の場合よりも、一般に搾取の程度の甚しいことは云ふまでもないが、ことに企業者が內地人である場合には（多くの新しい製造業はそうである）、企業者は征服者が被征服民に對する心理と態度とを以つて勞働者に臨むので、云ふべからざる虐使が行はれる。彼等はこの無節制無制限の搾取を以つて、優等民族が劣等民族に對する當然の權利と考へ、これを以つて殖民地領有の意義の一部分（或はその全部）であると信じてゐる。

台灣に於ける工場の數は、動力を使用するもの一、一六八、動力を使用せざるもの一、五七五、合計二、八四一工場（大正十年末）であつて、同年中の平均使用職工數は四萬五千人であつた。

| | 工場數 動力を使用する者 | 動力を使用せざる者 | 計 | 職工數 男 | 女 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 機械器具工場 | 七五 | 三一 | 一〇六 | 一、四二一 | 五七 | 一、四七八 |
| 纖維工場 | 一一 | 四三 | 五四 | 五五五 | 五三六 | 一、〇九一 |
| 化學工場 | 四五 | 七三六 | 七八一 | 九、五八一 | 一、五三三 | 一一、一一八 |
| 食料品工場 | 一、〇〇六 | 四九六 | 一、五〇二 | 一七、六八四 | 八、三五八 | 二六、〇四二 |
| 雜工場 | 九二 | 二四〇 | 三三二 | 三、〇〇三 | 一、五〇九 | 四、五一二 |
| 特殊工場 | 三七 | 二九 | 六六 | 七九七 | 一五 | 八一二 |
| 合計 | 一、二六六 | 一、五七五 | 二、八四一 | 三三、〇四四 | 一一、九九八 | 四五、〇四二 |

これ等の工場の大多數は内地人の經營するものであつて、勞働者の大多數は島民である。工場の勞働條件は、一般に内地のそれよりも遙かに劣つてゐるが、數字によつて表はすべき資料がない。いま是等の工場に於いて、內地人と島民とが如何なる割合で雇傭せられてゐるかを見ると、次の通りである。

| | 職工總數 | 臺灣人 男 | 女 | 計 | 總數に對する臺灣人の割合 |
|---|---|---|---|---|---|
| 機械器具工場 | 一、四七八 | 一、〇六二 | 五五 | 一、一一七 | 七五・六 |
| 纖維工場 | 一、〇九一 | 五三二 | 五二八 | 一、〇六〇 | 九七・二 |
| 化學工場 | 一一、一一八 | 九、三一九 | 一、五二三 | 一〇、八四二 | 九七・五 |
| 食料品工場 | 二六、〇四二 | 一五、七三六 | 八、二一四 | 二三、九五〇 | 九二・〇 |
| 雜工場 | 四、五一二 | 二、三六八 | 一、五〇四 | 三、八七二 | 八五・八 |
| 特殊工場 | 八〇二 | 五五四 | 五 | 五五九 | 六九・七 |
| 合計 | 四五、〇四二 | 二九、五七一 | 一一、八二九 | 四一、四〇〇 | 九一・九 |

臺灣人の最も多く雇傭せられてゐる化學工業は、動力を使用する工場の割合の最も高い部門である。纖維工業と食料品工業とは之に次ぐ部門であつて、臺灣人の雇傭の割合の最も少ない機械器具工業と特別工業（製氷、造船、荷車等）とは、動力を使用する工場が、動力を使用せざる工場以上の割合に上ぼつてゐる部門である。この一事によつても、臺灣に於ける內地資本の增大の作用のうちに、島民の割當てられてゐる割役を知ることが出來る。資本の有機的構成の最も低い部門は、絕對的な勞働搾取の率の最も高い部門である。臺灣人は、丁度この部分に置かれてゐる。言葉を換へて云へば、臺灣人は內地資本によつて、動力よりも安い動力として、機械よりも安い機械として使用せられてゐるのである。

臺灣の勞働者が、如何に內地の資本によつて、何者に遠慮もいらぬ無制限無節制な虐使と搾取の對象として取扱はれてゐるかは、これ等の勞働者の年齢別を見る時に、一層露骨に現はれる。

斯ように工場に於いて酷使せられてゐる十二歳未滿の幼年は、殆んどその全部が日本人ではなくて臺灣人である。十五歳未滿になつてもその通りであつて、二十歳未滿といへども、日本人は極く少數である。そして二十歳以上となつて、日本人は

| | 總數 | 日本人 | 臺灣人 男 | 臺灣人 女 | 臺灣人 計 | 外國人 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 十二歳未滿 | 三八八 | 二 | 五二 | 三三〇 | 三八二 | 一 |
| 十二歳以上十五歳未滿 | 二、一五四 | 九 | 四九四 | 一、六〇三 | 二、〇九七 | 四七 |
| 十五歳以上二十歳未滿 | 六、七九七 | 一九六 | 三、一五八 | 三、二四二 | 六、四〇〇 | 二〇一 |
| 二十歳・以上 | 三三、四五九 | 一、九六五 | 二五、六九八 | 五、〇七五 | 三〇、七七三 | 七二一 |

（備考——大正十年末現在）

初めて、工場勞働者の總數に對する割合よりも、多くの割合を占めて來る。

のみならず、台灣人を出來得る限り安價な勞働力の供給者としておくことは、——算盤を彈いて出たこの答は——たま〳〵民族的の偏見——高尙な精神的な産物——と一致する。これ等の台灣勞働者が、如何に差別的な待遇を與へられてゐるかに就いては、目擊者の受ける深刻な印象以外には、數字によつても同表によつても、讀者諸君に傳へる方法がない。たゞ唯一の數字上の資料は、賃銀の相異である。即ち同一勞働に對して、內地人と台灣人との間に、どれだけの差別がつけられてゐるかと云ふことである。

| 職別 | 日本人 | 臺灣人 | 職別 | 日本人 | 臺灣人 |
|---|---|---|---|---|---|
| 家作大工 | 三、五〇 | 一、八〇 | ＊染色 | 二、五〇 | 〇、八〇 |
| 左官 | 四、〇〇 | 二、〇〇 | ＊洋服裁縫 | 二、五〇 | 一、三〇 |
| 石工 | 四、〇〇 | 二、〇〇 | ＊活版植字 | 二、二〇 | 一、〇〇 |
| 木挽 | 三、二〇 | 一、四五 | ＊雜役人 | 一、五〇 | 〇、八〇 |
| 瓦葺 | 四、五〇 | 二、〇〇 | ●仲仕 | 二、二〇 | 一、八〇 |
| 煉瓦積 | 三、八〇 | 二、〇〇 | ＊貨物荷捌人 | 二、五〇 | 一、五〇 |
| 鍛冶 | 二、九〇 | 一、三〇 | ＊女中（月） | 八、〇〇 | 四、〇〇 |
| 鑄物 | 二、五〇 | 一、二〇 | ＊漁夫 | 二、五〇 | 一、二〇 |
| 農作男 | … | 〇、五〇 | ●荷車挽 | 二、五〇 | 一、〇〇 |
| 農作女 | … | 〇、三〇 | ●輕便鐵道後押 | 二、〇〇 | 一、〇〇 |
| ＊茶揀女 | … | 〇、一八 | 總平均 | 二、八五 | 一、二五 |

（備考——臺北市に於ける大正十一年中の平均、＊印は同市に於ける大正十二年前半の平均、●印は高雄街に於ける大正十二年前半の平均。農作女と茶揀女を除いては、いづれも壯年者の中等の賃銀の平均。女中の給料は總平均中に加へてない）。

右は臺北市に於ける賃銀の比較であつて、地方によつて多少の相異はあるが、ほゞ同じ割合であつて、台北市の數字を代表的と見做してよい。即ち台北市を初め主要な七都市に於ける大正十二年中の各種賃銀の總平均を更に平均して見ると、日本人

三圓四十三錢、台灣人一圓七十六錢である。但し農作女と茶揀女とは、この總平均から除いてある。そこで大多數の職業では、同一の仕事に對して台灣人は日本人の半額の賃銀を支拂はれてゐるのである

尤もこの相異は、征服民と被征服民との差別を表はしたものではなく、勞働の能率、即ち熟練の相異を示したものだと云ふ説明があるだらう。けれども前表中には、殆んど何等の熟練をも要しない職業をも含んでゐる。然るにこれ等の不熟練勞働の場合にも、同じ賃銀の相異のあることは、右の説明を裏切つてゐる。例へば輕便鐵道の後押を、日本人は台灣人よりも二倍より善くするとは、如何に國民的自負心を張りつめても考へることは出來ぬ。また台灣に於ける日本人が、島民よりも二倍勤勉だとも思はれぬ。現に總督府の發行した『台灣に於ける家内工業』といふ小冊子のうちには、『本島在住内地人は以前に比すると、よほど所謂殖民氣質といふ風はなくなつたようであるが、未だ其生活勤勞に於て、日本内地に於けるものよりも一般的に云ふと甚だ放漫であり怠惰であると云ふことは斷言しても、恐らく異議はあるまいと思ふ』と書いてある。即ち台灣人は、この勤勞に於て甚だ放漫であり怠惰であるところの内地人の、半分の賃銀で働かされ、××××××××。×××××××××××××、××××××××、××××××を有すると考へるのが、即ち謂ふところの『殖民氣質』に外ならぬ。

同一の勞働に對して、内地人と台灣人との間に報酬の差別を立てることは、たゞに一般民間の勞働の場合ばかりでなく、之を原則的に確立してその模範を示してゐるものは、島民に對する『一視同仁』を一枚看板とする總督府自身であつて、總督府遞信局通信事務現業員の賃銀にも、次の如き差別がある。

| 地名 | 日本人 大正十一年 | 日本人 大正十二年 | 臺灣人 大正十一年 | 臺灣人 大正十二年 |
|---|---|---|---|---|
| 臺北 | 円 一・六〇 | 一・六〇 | ・九七 | ・九七 |
| 基隆 | 円 二・二八 | 二・二〇 | 一・三〇 | 一・一五 |
| 新竹 | 円 二・〇〇 | 二・一〇 | 一・〇〇 | 一・〇〇 |
| 臺中 | 円 一・五〇 | 一・三〇 | ・八〇 | ・八〇 |
| 嘉義 | 円 二・五〇 | 二・五〇 | ・八〇 | ・八〇 |
| 臺南 | 円 二・〇七 | 一・八五 | 一・〇〇 | ・九五 |
| 高雄 | 円 一・八〇 | 一・八〇 | 一・〇〇 | ・九〇 |
| 屏東 | 円 一・六〇 | 一・三〇 | ・八〇 | ・七〇 |
| 淡水 | 円 一・五〇 | 一・五〇 | ・八〇 | ・八〇 |
| 宜蘭 | 円 一・六〇 | 一・六 | ・八五 | ・八五 |
| 彰化 | 円 一・八〇 | 一・五〇 | 一・〇〇 | ・八〇 |
| 澎湖 | 円 二・三〇 | 二・五〇 | 一・〇〇 | ・八〇 |
| 臺東 | 円 一・六〇 | 一・八〇 | ・八五 | 一・〇〇 |
| 花蓮港 | 円 二・〇〇 | 一・八〇 | 一・五〇 | 一・三〇 |
| 平均 | 円 一・八五 | 一・七二 | ・九七 | ・九三 |

その他の官吏の俸給や手當についても、同一の差別原則が厳格に存してゐる。例へば日本人の官吏には、本俸に對する六割の加俸と給仕に至るまで官級により一定の宿舍料とが給與せられるが、台灣人には與へられて居らぬ。近年規定の改正により、地方から來た台灣人のみには宿舍料を支給することゝなつたが、同じく判任待遇で日本人の宿舍料は一ケ月十八圓、妻帶者

には四圓の割増がつくが、台灣人には八圓、妻帶者四圓の增額である。この規定以前には、例へば地方から小學教員が轉任して來れば、校長の恩惠により、僅かに學校の物置に宿泊するといふ有樣であつた。台灣人にして高等官たる者が三人あるが、そのうちの一人、醫專教授の醫學博士の如きも、學校の雜費から、しかも日本人判任官待遇と同額の宿舍料を貰つてゐた。今日では善かれ惡しかれ、全てのものが貨幣によつてその價値を評價せられる世の中である。從つてこれ等の貨幣評價は、日本人が人としての台灣人に對する評價でないとは云はれない。」

(九)

『抑も台灣は帝國を構成する領土の一部にして……英佛諸國の屬領の、唯だ本國の政治的資源地たり、又は經濟的資源地たるに止まる殖民地と同一視すべきに非ず』。これが台灣統治の『大精神』なのである(田總督施政方針)。けれども事實は往々にして、志と違うことがある。歷代の總督が『一視同仁』『醇化融合』『誘掖指導』に努めてゐる間に、經濟生活の方面では、內地資本と島民の利害とは(農村でも都會でも)遠慮なく對立する。如何に領有國民の被領有民族に對する『一視同仁』の眼鏡を掛けても、この對立の事實に冷淡とはなれぬ。少くとも內地資本と島民との、經濟的利害が對立してゐるといふ一點では吾々は台灣に於ても、英佛の殖民地に於いて見るところのものと同一のものを見るのである。

經濟上の利害が相鬪つてゐる時に、決定的の役割を演ずるものは政治の力である。これは階級と階級との場合に於いて然るが如く、殖民地の場合に於ても同じであるが、殖民地の場合には、その『大精神』に於ては同じでも、この精神の發露する形態に於いて、一層露骨だといふ相異があるだけである。そこで私は台灣の政治が、如何に一視同仁の精神によつて行はれてゐるかを、極く簡單に觀察しよう。

台灣の政治は謂ゆる委任立法であつて、明治二十九年法律第六十三號を以つて、台灣總督に行政立法の二權が賦與せられてゐる。明治三十九年法律第三十一號及び大正十年法律第三號により、制度上には多少の變改が行はれたとは云へ、台灣總督は依然として、專制君主のような行政立法の權能を一手に握つてゐるのである。

大正八年には謂ゆる『六三問題』(前記法律第六十三號撤廢運動)が起つたので、總督府は『民情緩和』のため、越へて大正九年十月に變態的な一種の自治制(?)を施行した。即ち總督の『諮問に應じ意見を開申する』機關として總督府評議會と、

各市街庄にはこれに相當する機關として協議會なるものが設けられた。これは單なる諮問機關である上に、議員は官選であつて、決して自治機關とは云はれぬものではあるが、兎も角も總督府評議會は、台灣人が總督府の政治に對して何等かの發言をすることの出來る唯一の機會であるから、相當重要なものである。然るに總督府評議會の構成要素を見ると、一台灣人がこの機關を評して、總督府は手製の蓄音器のレコードを、自分で吹込んでゐるものだと云つたのが、失當でないことを發見する。大正十一——十三年の總督府評議會の構成は次の通りであつた。

| 種族 | 職業 | 大正十一年 | 大正十二年 | 大正十三年 |
|---|---|---|---|---|
| 日本人 | 高級官吏 | 九 | 九 | 七 |
| | 實業家 | 九 | 九 | 九 |
| 臺灣人 | 實業家 | 九 | 九 | 九 |

これが台灣の民意を發言するための蓄音器であつて、この蓄音器が如何なる聲を出すかは聽かずして明かである。台灣人が九割五分五厘を占め、內地人は僅かに四分五厘しかゐない台灣の政治に、內地人は官吏と實業家との二重の資格で二倍の票決權を持ち、その票決を台灣の民意として發聲する。これがこの蓄音器の役割なのである。

尤も官吏は『一視同仁』の大精神の上に立つもの故、實業家と同じく內地資本の利害を代表するものではない、といふ抗議があるかも知れぬ。けれども假りに台灣の政治の上に、內地人と台灣人とが同數の評議員によつて代表せられてゐるとしても、之は決して公正な、否な公正らしい代表とすらも云はれない。台灣に於ける內地人の數は十七萬であつて、九名の代表者は、一萬八千八百八十八人に對する一人の割合であるが、三百六十萬の臺灣人に對する同數の代表者は、四十五萬九千五百五十六人に對する一人の割合である。これが總督府評議會の數字の上の內容であつて、この數字は加減乘除の如何なる算法を應用しても、その中から台灣人の『民意』といふ答を得ることの出來ない數字である。況んや台灣の實業家——極めて少數のブルジョアー——は、日本の資本の利害に、完全に『醇化融合』した社會層である。彼等の利害は台灣の民衆の利害とよりも、內地資本のそれと完全に一致する。過去三十年間の殖民地政策が何等かの『醇化融合』の實績を擧げ得たとするならば、それは台灣に於けるこの社會的階級を、日本のブルジョアジーに『醇化融合』し、若くはその寄生的の一階級に變じたことである。彼等は如何なる意味に於ても、最早や台灣の民衆の利害を代表するものではない。然るに總督府評議會の議員が、最もよく

『醇化融合』した台灣人のうちからのみ官選せられてゐることは、いふまでもない。

州及び都市に於ける協議會もその通りで、日本人が壓倒的の多數を占めてゐる。即ち次表の通りである。

| 地方 | 總員 | 日本人 | 臺灣人 |
| --- | --- | --- | --- |
| 臺北州 | 三五人 | 二四人 | 一一人 |
| 臺北市 | 三〇 | 一九 | 一一 |
| 基隆街 | 一八 | 一二 | 六 |
| 新竹州 | 二〇 | 一一 | 九 |
| 新竹街 | 一八 | 九 | 九 |
| 臺中州 | 三〇 | 一八 | 一二 |
| 臺中市 | 二〇 | 一三 | 七 |
| 臺南州 | 三五 | 二一 | 一四 |
| 臺南市 | 二五 | 一八 | 七 |
| 高雄州 | 一九 | 一二 | 七 |
| 高雄街 | 一九 | 一四 | 五 |
| 臺東廳 | 八 | 六 | 二 |
| 花蓮港廳 | 九 | 七 | 二 |
| 合計 | 二八六（一〇〇） | 一八四（六四・三） | 一〇二（三五・七） |

（備考——大正十三年）。

次に街長、庄長の配置を見ると、全島を通じて街長は日本人一四、台灣人二〇、庄長は日本人一四、台灣人二二〇である。（大正十三年）さまで重要でない庄長は、台灣人が壓倒的の多數であるが、これすらも日台人口の割合から云へば、日本人が不釣合に多數である。より重要な街長に至つては、日本人の割合は激增する。ことに基隆街、新竹街、苗栗街、豐原街、南投街、嘉義街、高雄街、屛東街、台東街の如き、街も台灣に於いて經濟的にも政治的にも重要な都市の街長は、注意深く日本人の手に保留せられてゐるのである。

次に官吏について見ると、臺灣の官吏約三萬三千人といふうちに、專賣局翻譯官一名（高等文官試驗及第者）、醫專教授一名（醫學博士）、高等專門學校教授一名（文學士）と、さきに退官した外事課の反譯官一名の外には、臺灣人で高等官なるものは一人もない。謂ゆる自治制の實施後間もなく、臺灣人の文官特別任用令が發布され、臺灣人のために仕官の門戶が開かれた譯であるが、今日まで特別任用令によつて登用せられた前記四名のうちの醫專教授と反譯官との外には、數ケ年間その恩惠に與づかつた者は一人もない。大阪には臺灣人の判檢事があつたと云ふが、臺灣の法院では、臺灣人の判任書記すらも、全島を通じてほんの數へるほどしかない。警察行政に携はる巡査でさへも、臺灣人の巡査部長は一人もないのである。謂ゆる自治制施行前までは、臺灣人[illegible]

人巡査と臺灣人巡査とを甲種勤務乙種勤務で區別することゝなつた。しかし待遇の差別は依然として存してゐる。小學校教員もその通りである。

## （十）

警察の補助機關として、臺灣には、保甲制度と名づける特殊な制度がある。保甲制度は明治三十一年律令第二十一號、同年府令第八十七號保甲條令施行規則によつて定められたものであるが、實はこの制度の原型は舊くから存して居り、宋以來、支那歴代の專制政府が利用し來つた最惡の連座制度の舊慣を踏襲したものに外ならぬ。（例へばロシアの農民のミールは、往昔の共産村落制度の遺物であつたが、帝政時代の政府はこれを利用して一種の連座制度とし、農民を誅求搾取する道具に用ひてゐた。）

甲は凡そ十戸から、保は凡そ十甲を以つて編成し、十六戸以上は二分として二甲とし、十六甲以上は二分として二保に編制する。保甲を編成するには、その區域内の家長が連署して規約書を作り、官廳の認可を受ける。日本人（その他の外國人）は、保甲の區域内に居住してゐても保甲に加はることは出來ないが、之に反して、その區域内の臺灣人の家長は、加盟を拒むことが出來ぬ。他の地方から移住する者は、現行の保甲規約に服從を誓ふ義務がある。保には互選によつて保正、甲には甲定め、保正は知事又は廳長、甲長は所轄郡守、支廳長、又は警察署長の認可を受ける。保甲の經費は各家長が分擔し、保正、甲長は無報酬ではあるが、特に保正に對しては、阿片小賣特許鑑札の下附といふ特殊權利が與へられてゐる（阿片は專賣品であつて、吸飲者は一定の鑑札を持つて一定の販賣所から購入しなければならぬ。從つて阿片小賣の特許は、何人も羨望するところである。）

この制度の目的を知るために、保甲規約十四ケ條のうちから摘記して見ると

（三）出入者取締りに關すること

（四）風水火災及び土匪强盗に對する警戒搜査に關すること。

（七）道路橋梁溝の小破修繕及び掃除に關すること

（十三）經費の收支及び豫算並に賦課徴收に關すること

（十四）前各號の外、地方の安寧保持上必要であること

などである。これが爲めに各家長は如何なる義務を負ふかといふと、その項目は百以上にも亘つてゐるから、ただ一つ代表的な一例を擧げて見る。即ち自家の者が一泊以上の旅行をする場合、又は他所の者を宿泊せしめる場合には、家長は住所・氏名・職業年齡・用向・宿泊日數を明記して其旨を一々報告する

義務がある。そして若し保甲内に、規則や條令に違反した者のある場合には、保甲全部が連座して責任を負ふのである。

警察の保助機關たる機能を遂行するために、保甲には壯丁團が組織せられる。壯丁團の團員は十七歳以上五十歳までの男子で、身體强健、品行善良な志望者中から選拔し、團長は選擧により、官廳の認可を受けるのであるが、實際には所轄巡査の指名する人を投票する。そしてこの傾向は近來益々甚しい。壯丁團は郡守、支廳長、警察署長の監督を受け、一旦緩急ある時は警察の指揮命令を受けることゝなつて居り、定期又は臨時に、警察官は壯丁團を召集して訓練をする。また壯丁團には、銃器彈藥、その他必要な器具被服を備附け、その經費は保甲民の負擔である。

臺灣の統治に於けるこの制度の役割は、問はずして明らかであらう。尙ほ大正三年頃の生蕃伐討には、保甲規約により、全島の保甲から人夫を徵發し、その費用を支辨せしめてゐた。この費用を總計すれば、總督府の討蕃費と同額に上るだらうと取沙汰せられてゐたのを見ても、その負擔の莫大なことが想像される。また大正十二年に竣工した三百哩に近い南北縱貫道路の如きも、その用地は寄附の名の下に收用したものであり、且つ工程三ヶ年に亘り、[illegible]夫によつて出來上つたものである。保甲制度の効用も多樣であり、且つ偉大であると云はなければならぬ。島民の習慣を尊重して、注意深く日本人を保甲から除外してゐることも、決して理由のないことではない。

（十一）

私は先づ第一に台灣人が經濟的に如何に支配せられてゐるかを見、次に政治的に如何に支配せられてゐるかを見た。そこで最後に、台灣人は精神的には如何に支配せられてゐるかを、極く簡單に見たいと思ふ。

第四代の台灣總督兒玉將軍は、日本の殖民地政策を確立した人だと云はれてゐるが、さすがに殖民地民族に對する一定の敎育方針を、その殖民地政策の重要な一部として織り込むことを忘れなかつた。

『敎育は一日も忽諸に附し去るべからず。然れども漫に文明流を注入し、權利義務の論に走るの風を養成し、新附の民をして例の弊害に陷るなからしめんこと期せざる可からず』

これが兒玉總督が地方官に與へた、敎育に關する訓示の一節である。この敎育方針の精神は、台灣の敎育制度の上にも、敎[illegible]

先づ第一に小學教育について見ると、日本人のためには小學校があり、台灣人の兒童を收容する小學校を公學校といふ。歐洲大戰後、被抑壓民族の擡頭と民族自決の運動とは、世界的の現象となつた。台灣に於ける武官總督が文官總督となり、これに照應した統治上の方針の變化を見たのもこの時であつたが、同時に教育の方面では、內地人台灣人間の從來の差別が撤廢されて共學制度となり、台灣人の兒童も小學校に收容し得ることゝなつた。また從來の公學校も小學校と同樣に、その聲籍費が學校豫算の一科目として編入せられることゝなつた。

斯ように大正九年四月に共學制が發表され、續いて大正十一年二月に教育令（勅令第二十號）が發布され、こゝに日本人と台灣人との、教育に對する差別が撤廢され、機會の均等が與へられた譯ではあるが、これは單に形式上の差別が撤廢せられたのみであつて、事實上の差別は、依然として從來のまゝに存してゐる。共學制の結果として、成績優良な財產ある台灣人の兒童は、許可主義によつて小學校に收容することゝなり、小學校と公學校との區別は、制度の上では、日本語を常用するとしないとの區別に過ぎないことゝなつた。けれども實際には、教程に非常の相異があり、いづれも六年制であるが、公學校に於ては、如何にひいき目に見るも、小學校の五年以上の課程を教へて居らぬことは、專門家が認めてゐる。ことに共學制の實施以來、台灣人の兒童が小學校に收容せられてゐるのは、極めて少數な寧ろ例外に過ぎないことは、次表によつて明かである。

| 年度 | 尋常科 日本人 | 尋常科 臺灣人 | 高等正數科 日本人 | 高等正數科 臺灣人 | 高等補習科 日本人 | 高等補習科 臺灣人 | 合計 日本人 | 合計 臺灣人 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正九年 | 一七、八六三 | 五四 | 一、〇四一 | — | 二五 | — | 一八、九二九 | 五四 |
| 大正十年 | 一九、〇四二 | 二二四 | 二、〇七七 | — | 三九 | — | 二一、一五八 | 二二四 |
| 大正十一年 | 一九、六二五 | 五六八 | 二、二〇五 | 二六 | 二〇 | — | 二一、八五〇 | 五九四 |

小學校兒童の就學率は九七%であるが、公學校兒童の就學率は僅かに三三・六五%に過ぎぬ。それにも拘らず、大正八九年以降は台灣人の入學兒童が激增し、募集人員に對して五分の二以上の過剩を生じ、校舍の狹隘に苦んでゐる有樣であるが、台北市の如きは、日本人の人口五萬に對して五つの小學校があるにも拘らず、台灣人の人口十二萬に對しても、同じく五つの公學校があるに過ぎぬ。全島に亘つて、學校數と兒童數との割合を見れば

| (大正十一年) | 兒童數 | 學校一に付兒童數 | 敎員一に付兒童數 |
|---|---|---|---|
| 小學校 | 二二、四四八 | 一六八 | 三〇 |
| 公學校 | 二〇〇、四〇八 | 三三九 | 四〇 |

であつて、大正十三年三月一日現在、小學校は學校一に對する兒童數は三三三名を最高とし、最低六五名であるが、公學校は最高四七〇名、最低一五五名である。教員一名に對する兒童の割合は、小學校は最高三九名、最低一七名であつて、公學校は最高四六名、最低二六名である。

次に教員の素質から見ると、大正十一年度に於ける小學校の教員七三四名を性別にすれば男四七七名、女二五七名である。更にこれを資格別にすれば、本科正教員男四五二名、女一五九名、專科正教員男五名、女一四名、准教員男一名、無資格者男一九名、女八四名である。即ち七三四名中、准教員及び無資格者は一〇三名である。

然るに同年度の公學校教員三、〇八八名を性別すれば、男二、六五四名、女四三四名であつて、之を資格別にすれば、甲種乙種本科正教員男一、〇七三名、女一一一名、丙種本科正教員（台灣人）男九七九名、女一六四名、專科教員男二名、女一九名、准訓導（多くは台灣人）男五四七名、女二二名、無資格者男七十名、女八八名であつて、三、〇八八名中、准訓導及び無資格者七二七名となる。即ち小學校と公學校との教員を比較すると、前者の有資格教員は全體の七〇・九%であるが、後者は四一・五%に過ぎない。

教員の俸給の上にも、小學校と公學校との間には大差がある。

| | 大正十年 | | | 大正十一年 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 教員數 | 俸給總額 | 一人平均 | 教員數 | 俸給總額 | 一人平均 |
| 小學校 | 六八四 | 八三一、三六四 | 一、〇九九 | 七四〇 | 七八六、〇五四 | 一、〇六二 |
| 公學校 | [illegible] | [illegible] | 六〇四 | 五、〇九八 | 三、二三六、〇五六 | 六三四 |

（備考——教員數は前揭の數字と多少の相異があるが、いづれも總督府官房調査課調査統計による）

次には台灣總督府は、教育費としてどれだけ支出してゐるかといふと、大正十二年度には、二百四十萬圓であつて、歳出の八%强に當つてゐる（大正八年二一九%强）大正九年三三%弱、大正十年一六%强、大正十一年一五%弱。）台灣島民全體の頭にかかつてゐるこの二百四十萬圓を、總督府は內地人と台灣人との間に、如何なる割合で使つてゐるかは、極めて重要な事柄であるが、遺憾ながら私の手元に新しい材料がない。たゞ大正九年度の小學校と公學校との敎育費の割合は次表の如くになつてゐる。

| | 教育費 | 兒童數 | 兒童一人當り |
|---|---|---|---|
| 小學校 | 一、五〇〇、四〇〇 | 一九、七三三 | [illegible] |
| 公學校 | [illegible] | [illegible] | [illegible] |

以上に述べた學校及び教員數と兒童との割合、教員の資格などを右の數字と對照して考へれば、臺灣人が臺灣在住の日本人よりも、遙かに安價な教育を當てがはれてゐることは、疑ひの餘地がない。

中等以上の學校は、大正四年に至るまで、一つの師範學校を除いては、臺灣人を收容する學校は存しなかつた。大正二年臺灣人の請願を容れ、臺灣人の寄附した金で臺中中學を設立した(大正四年)が、修業年限四年であつて、日本人の中學よりも遙かに程度の低いものであつた。これは大正八年一月に、高等普通學校と改稱された。高等女學校に對しては、從來の國語學校附屬女學校を大正八年に女子高等普通學校と改稱したが、主として女教員の不足を補ふのと、技藝教育とを目的とし、修業年限三ケ年、これまた高等女學校よりも遙かに程度が低い。商業學校も日本人の方は修業年限を五年とし、臺灣人の方は三年とし、同じく工業學校も五年と三年とした

總督府醫學校は臺灣人醫師養成の目的で、明治三十五年に設立せられたものであるが、大正七年、日本人のために醫學專門學校醫學專門部を設け、臺灣人の方は醫學專門學校と改稱した。また日本人の高等商業學校に對しては、臺灣人の商業專門學校を、高等農林學校に對しては農林專門學校を設けたが、いづれも程度の低いものである。

小公學校の教員を養成する師範教育に、小學師範部と公學師範部とに分ち、公學師範部を更に甲乙の二科に區別し、小學校中師範學校の卒業生を一ケ年間、小學師範部または公學師範部の甲科に入れ、前者を小學校の教諭、後者を公學校の教諭とした。そこで公學師範部が、臺灣人の教員を養成する唯一の師範教育であつて、修業年限四ケ年、卒業生は公學校訓導である。大正八年、內地人教員養成規則が設けられ、從來の甲乙二科を廢して、單に公學師範部と改稱された。

斯ように臺灣に於ける有ゆる學校は、基底から頂上まで、日本人と臺灣人といふ民族線に沿ふて明確に兩分せられてゐる。そして何づれの部分を引離して見ても、日本人の學校と之に照應する臺灣人の學校とを比較して見れば、必ず臺灣人學校の方が遙かに程度が低くしてあるから、臺灣人は學校卒業後、社會のいづれの方面、職業のいづれの專門に踏み出しても、これと相當する種類の學校を出た日本人とは、とうてい同一の立場に立てないように仕組まれてゐるのである。

大正九年の共學制實施により、この差別はたゞ紙の上だけでは拭ひ去られたが、事實の上に却つて深刻にきざまれてゐる。

共學制度により、入學試驗に及第した臺灣

| 區分 | 校名 | 校數 | 學生數 | 日本人 | 臺灣人 |
|---|---|---|---|---|---|
| 初等教育 | 小學校 | | | | |
| | 公學校 | | | | |
| 中等教育 | 高等學校 | 一 | 八一 | 七九 | 二 |
| | 中學校 | 八 | 二、〇二〇 | 一、四五一 | 五六九 |
| | （高等普通學校） | | | | |
| | 高等女學校 | 八 | 二、一一八 | 一、四五四 | 七三一 |
| | （女子高等普通學校） | | | | |
| 實業教育 | 農林學林 | 八 | 一九八 | — | 一九八 |
| | 商業學校 | 二 | 五七八 | 三二二 | 一九六 |
| | 工業學校 | 二 | 四四七 | 二四五 | 二〇二 |
| | 實業補習學校 | ・ | | | |
| | （簡易實業學校） | | | | |
| 師範教育 | 師範學校 | 二 | 小學師範部 七一<br>公學師範部 五二一 | 七一<br>一三五 | —<br>三八五 |
| | （師範學校） | | | | |
| 專門教育 | 高等商業學校 | 一 | 一五八 | 一五七 | 一 |
| | （商業專門學校） | 一 | 一四五 | 一 | 一四四 |
| | 醫學專門學校 | 一 | 四〇三 | 一〇八 | 二九二 |
| | （醫學專門學校） | | | | |
| | 高等農林學校 | 一 | 一一六 | 一七 | 九四 |
| | （農林專門學校） | | | | |

（備考　括弧內の校名は舊教育令による臺灣人學校、數字は大正十一年度）

同一の中學校に入學することが出來る。けれども小學校の課程に前述の如き差異をつけ、臺灣人の小學卒業生は、日本人の小學五年程度の學力しか與へてない以上は、臺灣人にして中學校に入學し得るものは、勢ひ少數の例外であつて、多數の臺灣人に取つては、中學の門は事實に於て閉ざゝれてゐるものである。

共學制の實施が臺灣人に取つて、どの程度に、教育に對する機會均等を意味するかは、上揭の各學校の學生種族別を一見して明かである。

（十二）

教育に携はつてゐる私の一友人は、兩三年前、臺灣の小學校を視察し、現に共學の行はれてゐる或る小學校の校長に對し、內地人兒童と臺灣人兒童との間に喧嘩は起らぬかといふ質問を發したところが、校長は眞面目な顏して、臺灣人を對等な人間として取扱ふからこそ喧嘩も起るが、臺灣人は×××××のものとして敎へてあるからして、內地人の兒童は、決して臺灣兒童と喧嘩などしない。と答へたといふことである。またある公學校の一臺灣敎員は、同僚の日本人敎員をつかまへて『君』と呼んだところを、校長に訓戒せられ、[illegible]

話がある。この種の挿話は何に殘つても附け加へることが出來るが臺灣人が社會的に如何なる地位におかれてゐるかを知るためには、一二の實話で澤山である。

大正十三年十一月十九日(?)の『大阪毎日新聞』の社說には、次の如き一節があつた。

『……實際今日の台灣島民には、絕對に言論集會の自由はない……、彼等島民から言論集會の自由を奪ひ得るかと云ふことは、總督府のなすべき仕事の中でも、最も大なる仕事の一つになつてゐる。勿論言論機關としては台灣新聞、台灣日々及び台南新報の三新聞がある。けれども御用の機關で、最も必要なる一般島民の日常生活とは何等の交涉もないといはれてゐる。論より證據、現に今春以來進行中である治安警察法違反事件の如き、これに關する記事は一行も書かしめず、たまたま內地新聞が本事件は勿論總督府政治に論及すると、總督官憲は御叮嚀にも、一々その記事のみを切り取り、彼等島民には絕對に事件の眞相を知らしめないやうにして居る……』。

これは正直な批評であつて、政治上の言論や集會は云ふまでもないが、學校に於ける學術上の講演會の如きでさへ、非常な制限が加へられてゐる。私立學校規則第四十四條には、『私人にして學術に關する講習會を開催せむとする者は、左記各號の事項を具し、知事又は廳長の[illegible]し、[illegible] (一) [illegible]の目的、(二) 講習科目、(三) 講習の期間及び場所、(四) 講習者の資格及び定員、(五) 主催者及び講師の住所氏名及び經歷、(六) 經費支辨の方法を明記して認可を受けなければ、講習會一つ催ほすことが出來ぬ。また公學校卒業者が、同窓會を開くことさへも禁止されてゐる。また師範學校の一學生は公學校の同窓會に於て台灣語で演說をしたといふかどで、將來教員となる資格なしと認められて退學處分を受けたことがある。

台灣人は旅行についても、特別な制限を受けてゐる。即ち日本內地を除いては、支那の開港地――日本人ならば旅券を要せぬ地方――への旅行にも、旅行券が必要である。台灣の青年中には、總督府の與へる安價な教育に滿足しないで、却つて支那に留學を志望する者が澤山ある。しかし旅券の下附を願出でれば、台灣には、特に台灣人のために設けた學校が澤山ある、わざわざ支那に留學する必要はないと云ふので却下され、尙ほその上に警察の說諭を受ける。尤も門司や長崎を經由すれば、台灣人といつても旅券なくして支那に渡航が出來るが、それも人物次第で、旅行券取締規則により、密航のかどで罰金刑に處せられた實例がある。

曾て日本人の某博士は、台灣のある役所に於いてローマ宗

ついて講演中、聽衆のうちに台灣人がゐるかゐないかを確めた上で、講演を續づけたそうである。これと同じ話は數年前、某豫備中尉なる南洋探險家が、官憲の後援の下に各地を講演して廻つたことがある。彼は台北でも彰化でも、印度事情について講演したが、講演の終る頃、やはり聽衆中に台灣人がゐないといふことを確め(實際には台灣人がゐたのであるが)た上、懐から××を取り出して勵聲一番、台灣の統治はこれに限ると冒頭して、印度に於ける英國人の政策を説明した。彼の云ふところによれば、印度人の叛亂は、みな英國人自身が教唆し、武器を供給してゐるものであつて、印度は叛亂の起る度びごとに、英國の統治政策が成功の域に進んでゆく。なぜならばその××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××。×××××××、再びこれを繰返す……といふのであつた。少くとも台灣に於ける日本人の多數が、某中尉殿ほどに突飛非常識でないことは明かであるが、某中尉の思想と感情とが統治者たる日本人の思想の奥底に潜んでゐる或るものとの間に、一脉の相通ずるところがあると云ふことも否まれぬ。

台灣については、尚ほ紹介しなければならぬ多くの事柄が殘つてゐる。ことに或る方面の事柄については、私はことさらに本文のうちには言及しなかつた。これ等については、全て後日の機會に讓らうと思ふ。

以上は台灣の狀態の一班を説明したものであつて、その資料の如きも極めて不滿足であつて、それのみでは、決定的な結論に達し得ぬ問題が少くない。これらの問題については、私はつとめて控へ目な結論をした。私の目的は、台灣についての私自身の意見と判斷とを讀者諸君に提出することではなく、寧ろこれ等の問題を提出して、台灣に對する一般の注意を惹くことである。

たゞ疑ひの餘地なき事實は、內地資本の壓迫が功あれば功あるほど、これが爲めに台灣民族のそのものゝ、階級的分化の作用を促進する。そしてこの作用の進行する一歩一歩に、台灣民族の民族主義的問題が、同時に階級的な問題の性質を帶びて來る。この疑ひのない事實は、台灣問題が特に內地の無產階級と無產階級運動とに取つての、より多くの注意と關心とを要求する問題となることを意味してゐる。(附記本文は主として昨年の初め台灣を視察した友人M氏の蒐集した資料の一部によつたもので、M氏に負ふところが頗る多い。爾後一年間執筆の機會を得なかつたため、統計の如きも幾分古くなつた憾みはあるが、大體の形勢を知るために差支がないのと、新たに蒐集することと [illegible]

# 現代常識の根本概念百

杉森孝次郎

## 十一　消費

價値は消費と共に始まる。それはまたそれと共に進む。價値は消費と共に始終する。價値の成立は消費の存在だ。

唄ひながら聽き惚れる。ここに藝術の價値が成り立つ。聽きながら享樂する。ここにもまた藝術の價値が成り立つ。そして、この二たつを除けば、藝術は無價値になる。

唄ふ當人も唄ひ樂しまず、聽く他人も聽き樂しまないならば、そこに藝術はない。藝術としての價値はそこにない。けれども、樂しむといふことは、消費の一形に勿論ほかならない

田作り、炭掘り、車窓操業、これらは、現代の職業として、いづれも、それに於ける生産過程そのものだけを選擇して考察する限り、心理的事實として、ありがた味の充實したものでは、要するに、決してない。しかし、それを忌避することは、當人としては、それ以上の苦痛を意味する窮乏を招致することだと判然してゐ、世間からいへば、食はず、たかず、乘らぬ悲哀、不便、不自由をそれは意味する。耕作自體はむしろ不快だが、それの結果はたしかに快だ。石炭採掘自體は不幸だがそれの結果は幸だ。機關運轉自體は無趣味だが單なる乘用は快適だ。藝術生活から識別される經濟生活も、かくして、それが一とつの人生價値を構成する理由は、その經濟生活に於ける消費生活的部分に繫げて存する。

すべての享樂は或消費だ。肉體的幸福のすべてと、精神的快樂のすべてを完全に包含した享樂主義は、人間の目的だと例外なしにいへる。中心から、人間の生活の中心から發生

主義と、末梢にまで人間の生活の末梢にまで、及達した幸福主義とはもとより同義物だ。そして、それの名が快樂であると、幸福であるとにはすこしもかかはらず、それ自體は或消費形にほかならない。

人生の目的は消費にある。消費のあるかたちにあると、ここに於てか、再認される。

活動すればいい、活動さへすればそれでいい、といふ思想が十九世紀に發達した。そして、いく多の理屈がそれに附帶した、附帶させられたかたちに於て說かれた。しかし、その說には、點睛の功が缺けてゐた。それは、文字通りに、盲龍がやみくもに動く時代の學說的反映及び獎勵といふ意味を帶んだものであつた。活動が、價値ある消費によつて結論されないならば、その限りに於て、ともかくもそれは愚なものだと明言されるほかない。怠慢が賢明な生きかたでないと同樣に、繁忙も必ずしも賢明な生きかたでない。生きかたの賢明、不賢明を判決する條文は、單なる怠慢や、單なる繁忙よりも基礎綱領的な部分に書かれてある。それは、その怠慢が、あるひはその繁忙が、いかなる消費を意味するかを常に注意の焦點に置く哲學的神經中樞そのものとして不磨の文字を形成してゐる。

生產・建設・破壞・これらの各種形に於て・肝心かなめの要

感を持たない活動または行動と活動感情または行動感情と、代にいちじるしい。消費目的を粗略に考察したそれらだから社會體の內的不安定情態は、それらによつて部分的に救はれることはあるが根本的に救はれる見込はない。

社會主義そのものが、生產的大衆に於ける消費的自己の發心にほかならない。產業革命は、直接には生產の世界に於ける突現的進化にほかならなかつたもんだから、その後の社會と文化に於ては、當然的には常に第一位に置かれべき消費の世界が、當然的には常に第二位に置かれべき生產の世界の隸屬的位置に置かれた。盲龍の如き生產團が無數にそこに發生し且つ發達した。そして、それを中心として、愚なかたちの生產本位的社會及び文化が一般的にそこに成長した。生活を、產業革命以後の生活を、新たに目的づけることが、社會主義の文化史的位置だ。そして、この事業は、消費の價値を完全に知ることを條件としないでは決して成し遂げられない。

消費の價値、言は簡だが、內容は最も豐富だ。したがつて、それを完全に知ることは哲學心以下の心によつては明白に絕望だ。なに人にも哲學心はあるが、その哲學心を極度に使用することによつて、なに人も、せめても消費の價値を完全に知るための第一要件を闕却しないだけの立ち場を取る。

單なる富、經濟的生產の結果、の消費の價値を完全に知るとだけでも勿論容易どころの事業でないが、消費一般の價値を完全に知ることの困難はとてもその比ではない。

社會主義も、それの育ちが、また生まれも、明白に產業の世界內であつたゆゑに、消費一般の價値を完全に知るための自然的便宜にはすくなからず不足してゐる。消費一般の價値を完全に知るための勞は、恐らくは既成社會主義の傳統的保持者に期待すべき事柄ではない。かれらには、別にかれら自身の、限られたる自然的使命が、要するに、ある。

早い話が、いかなる一社會主義者、もしくはいかなる一勞働組合員、經濟的生產團員たりともの現實を分析して見るならば、殊にかれの消費的現實を分析して見るならば、そこには、ほとんど限りもなく多種に、かれが意識的には主張しない或ものが主張されてゐ、かれが意識的には非認し、否定さへする或ものも必ずしもさうされないであるひは是認され、あるひは肯定されてゐるといふやうな事實が發見されよう。一切の傳統を脫ぎ棄てたといふ激語そのものが、その國語が意味する限りの傳統をばすくなくとも着用してゐるにも似た關係がそこにはある。

生產と消費との比較は、個性と環境との比較に似てゐる。もしも、われらが、生產をそれの充分なる深さと、廣さと、關係とにしたがつて認識するならば、そこには消費が完全に、いや應なしに完全に發見される。けれども、多くの場合、われらは、生產をもつと限られたる探照燈によつて窺視する。われらは、普通に、生產を全觀せずに管見する。かうして認取された生產生活は、社會、人生の統一則の成り立ち場ではない。

消費生活に於ては、それの現實及び必要に於ては、各人間に差別はほとんどない。われらの各は、他のすべての人々の存在と活動とその活動の結果としての事業や作品とを、原則的關係に於ては、ほとんど悉皆的に、現實的及び必要的に消費する。常識と、いはゆる敎養とを分析すれば、いな、それだけの勞によつてさへも、この事實は最も手つ取り早く、簡明にさへ認取される。

消費しないでは人は生きられない。それとの比較に於ては、人は、生產しないでも生きうる。怠惰なる富者階級さへも、勿論善いことではないが、事實として現に存在し、働らいても、働らいてもなほかつ生存の最低限をすら困難として見いだす階級的多數さへも現に存在してゐることが、その一證據だ。

消費は、生存にとつて、始終を一貫する基礎的必要件だ。生產は、その消費を、自分のためか、他人のためかは別の問題として、可能にするための、したがつてその意味に於ての從屬的

な、必要件にほかならない。

生存そのものは、實に、生産によつてよりは必然的、普遍的に消費によつて代表される事柄であるのだ。

社會進歩の法則に於ても、それゆゑに、それの第一原因的衝動は、生産界に於けるよりも消費界に發生する。社會不安は、それの最初の時期に於ては、消費的社會不安であるを常とする。そして、これはすこしも不思議でない。どうしてかといふに、消費的社會不安は、大多數人の生存不安そのものにほかならないからだ。しかるに、人間に於ける生存欲、生存本能は底知れぬほどにも深い。低級生物にさへも強烈なる生存本能の存在はいちじるしい。

かくして、例へば政治に於ける進步、即ち自治化は何を第一因としたか。立法や行政を消費する人々、即ち大衆者に於ける不安、不滿、**不平が要するにそれであつたではないか。**その不安、不滿、不平を少數の批判、思索、社會的良心の所有者が先づ意識づけ、しかるのちに、その意識づけられた不安、不滿、不平が政治的生産の方法に改廢を強制したかたちに、それはいつでもなつてゐるではないか。

政治的自治化の未完成的發達と同時に發達の端緒についた經[illegible]同一だ。ただ、産業革命以來の、そして殊にその産業[illegible]身成し遂げた當の社會の場合にあつては、大多數者は、たまたま、生産群であつたがゆゑに、その大多數者の不安、不滿、不平は、生産的不安、不滿、不平であつたかの如き外觀を、輕卒な考察眼には、呈した。しかし、それは眞實の內情では勿論なかつた。眞實の內情は、その大多數者に於ける、かれらの生活に於ける、消費的必要が不當にすくなく制度によつて支給されてゐること、その事實に對する意識にほかならなかつた。

社會主義そのもの、勞働運動そのものが、實に、多少無意識的な、しかしながら最も深いところに於て、消費不足の現實と感覺と意識とを原因及び本體とするものにほかならない。

ただ、産業革命を自身成し遂げた各の當の社會に於て、及びそれ以後の社會一般に於て、**經濟的生産者が、**どんなに人口の大部分を形成しようとも、なほかつ、生活の必要は決して經濟的性質のものばかりではないから、職業的には經濟的生産に專ら從事する人々の場合に於てさへも決してさうではないから、現代に於ける消費生活の完全、不完全は、純粹に社會の各員、即ち全社會そのものの消費的現實と必要とに對する完全なる考察的努力を待つて始めて知られるほかない。

[illegible]十[illegible]質[illegible]、すくな[illegible]より[illegible]一とくに[illegible]その[illegible]は[illegible]
[illegible]費[illegible]が[illegible]人に対する消費生活を見ること
[illegible]消費生活
[illegible]

見そこに見つかるものはかれの材料た

生産は自己そのものを意味するがゆゑに、人にとつてこれよりも重要なことはない。けれども、生産が純粋に生産である限り、[illegible]これだ、何[illegible]、早晩、多くの[illegible]消費[illegible]に[illegible]

ば大衆本位的傾向によつて特徴づけられる現代としては、經濟的にも、いな經濟的にこそ第一に、消費の位置の不安定に注意の焦點を求めることが最も科學的だ。

行動的事實は、それゆゑに、必ずしもけばけばしさや、はなばなしさに於てはさほどでないが、着々としてその方途に歩を進めつつある。例へば金融の世界に於て、私益主義的銀行制度が次第に消費者本位の制度、それの現在に於ける甚だ幼稚な一形としては信用組合及びそれと原則的類同質のものへ讓席しつつあるが如き、また例へば、大衆の消費生活を滿足させえないことが強制力となつて、その事實または事情に強制されて、或社會は純粹社會主義組織から多少資本主義組織へ歸復し、他の或社會は資本主義組織から社會主義組織へ更に新たに實驗の手を動かしつつあるが如き、これらも、その現狀内の或ものだ。

產業革命は、直接には勿論生產の方法に於ける革命であつたが、そしてその革命がその後の社會の在りかたに與へた變化と影響は深廣だが、その深廣なる變化及び影響のうち、最も代表的なものは、やはり大衆の自治的及び專制的傾向の促進及び助長であつたと見るほかない。機械は、機械使用を方法とする生產は、大衆に未曾有の大規模に於ける自己組織の機會を與へ、大衆に社會的・經濟的生產の絶對無代用的・必要位を與へた。この事情に立脚して大衆の自治的及び專制的傾

進歩した。產業革命の社會的結果のうち最も貢能多きものはどうしてもこれだとしか考へられない。

產業革命の原因にしても、やはりその頃までにすでに發達したデモクラシが、即ち大衆の大衆的自己主張が、それの最も主もなものだつたと考へる。もつと充分に消費したいといふ大衆の慾望、現在の消費に不滿足をいよいよ堪へがたく感覺し、意識し來たつた大衆、これが、この社會的現實が、おのづから當代の聰明、發明力、創造能、技術心を刺戟し、獎勵し、強制して、そこで科學と機械に於ける新發達が實現されるに至つたのだと考察される。勿論それが完全に唯一の原因だつたとは考へられないが、その一點に注意を新たに拂ふべき餘地が大きく存することだけは疑はれない。

デモクラシは近代の一大傾向だが、政治的デモクラシが明白に示す通り、それは、政治なら政治の、經濟なら經濟の、いづれにしても、消費者の自己主張だ。政治的デモクラシの場合に於ては、政治的消費者の自己主張が政治的生產方法を自分に都合よく、自分に有益なものへと變革し、經濟的デモクラシの場合に於ては、經濟的消費者の自己主張が經濟的生產方法を同様にさうする。原則は、デモクラシにありては、いつでも大衆乃

至社會的全衆の自己主張だ。しかるに、消費よりも共通的な必要はなく、消費のうちでも、經濟的消費よりも共通的な必要はない。趣味物や思想體に對する消費的必要は、經濟物に對するそれに比して個性的、各別的だ。かくして、例へば、同じ道路を、電車を、汽車を、實業家と勞働者と軍人と藝術家が使用することはすこしも珍らしくないが、藝術品や思想書に對する選擇が、材料が豐富であり、當方に束縛がない時に、千人が一樣である可能はない。

經濟は實用だ。實用中の實用が經濟中の經濟だ。實用は必要だ。必要中の必要が經濟だ。經濟以外の文化要素は贅澤だ。だからそこには選擇の自由が主張される。すき、きらひを發表する餘地がそこにはある。經濟的消費中の經濟的消費は、それの必要は、萬億人を通じて同一だ。保健費、教育費、興樂費、家政費、社交費、人格的體面維持費、これらは、これらの各が意味する經濟的消費は、そのうちの或ものだ。本質的自己成長、本質的自己實現、本質的、最善的社會奉公、これらのために必要な經濟的消費が、その時代相當、その社會のその時代相當に常にある。時代相當、社會相當の各人の自己保存即ち生存の最低限水平と見られるものがある。そして、それに必要な經濟的消費がある。現代の大衆は、先づこれの獲得に急である事情を持つ。大衆が、かれら自身の消費的必要に對する社會的、副次的給與に深い不滿足を意識するあひだ、生產及び分配の方法に於ける改革的實驗は、それを主原因として續く。その大衆自身の不滿足が殘餘の少數者との比較に於ける不平等を中心意識とするものである限り、產業公營及び產業自治への努力をその改革的實驗は必然的に主として取る。

その不平等が進化的に改正される過程が一とたびそれの極點にまで到達すれば、いはゆる經濟的階級鬪爭は一とたび絕滅する。その瞬間からしては、全社會的に消費を充分にするための方法、したがつて相當に充分なる生產への努力に、改革的實驗の形式は一變する。かくして、消費的社會の不滿足が、永久に生產及び分配の分法に不安定を與へ、したがつて進步的變革を與へる。

消費は、實に、人及び人間社會の場合にあつては、萬事の基礎であると同時に完成だ。生產は消費の方法以上のものではない。

消費者の研究は、したがつて、經濟的、政治的、教育的、藝術的、思想的、知識的各種消費者の各と、それらの總全とについて、現代に於て最も深い、急な、しかしながら比較的に閑却されてゐる一要務だと考察される

消費的自己及び消費的社會の現實と必要に對する明確な、完全な智識なしでは、すべこの生産方法上の保守も改廢も無目的だといふ一公理は、現代に於て、それの常識内に一新位置を積極的に與へられて然るべき事情と理由が現實にある。

個人としても、社會としても、消費的自己の現實と必要を知ることは、その個人の、またその社會の、すべての理想と意見とを、したがつて學說をも、思想をも、最も責任あるものにする、即ち良心と聰明の具備したものにするための最も根本的な一要件だ。

生産は、間口が狹いために、奧行は無限に深く、廣いけれども、とかくわれらを利己主義へ導く。現代を救ふ力は生産主義のほかにないが、しかし、その生産主義は、個人的及び社會的消費生活の自覺を條件としたものに限る。

個人そのものは生産によつて代表され、社會そのものは消費によつて代表されることは前にすでに述べた通りだ。たゞ、産業革命以後、日なほ淺き現代に於ては、いや增す大多數者は經濟的生産に、それも早晩機械によつて立派につとまる種類の生産過程に沒頭的に從事してゐるがゆゑに、そして經濟的生産の範圍内に於て、これらの大多數者と殘餘の少數者との間に、後者の富裕は前者の貧弱を必要な條件とし、方法とするといふ現實があまねく存在してゐるがゆゑに、たゞそれゆゑにこそ、社會問題は、また社會改作の主要點は、ひとへに經濟的生産方法に、勿論それの制度的部分に、關聯してゐるかの如くしばしば考想される。しかし、永い問題としては、機械の進歩が、大多數者の沒頭的長時間作業を廢用にせねばならんし、もつと近く實現されうる可能としても、制度改作によつて、同樣にそれを廢用に近づける見込が立つ。さうだとすれば、社會意識、社會思想、社會改作的熱情が、また想像が、專ら經濟的制度に、たとひ經濟的生産制度にのみならず、經濟的消費制度にも完全に及んだかたちに於てさへ、集中することは、一時の事情に支持される現象にほかならないと知られる。

經濟的生産には、その生産過程中の、自由な人間としては誰だつていやがる樣な部分には、主として機械が從事する時代は豫想される。それはかなり有望に期待される。その時代が來るにしたがつて、經濟生活が關する限り、大衆者も、全社會員もが、主として消費者となる。經濟生活は、からなることが、それの人生に於ける、すくなくとも進歩的社會に於ける位置としては、至當でもあるのだ。同じ經濟的生産のうちでも、その時代には、人間の直接の從事は、企業、組織、經營、科學、技術といつた種類のものに主として限られる。そして、これらには、

勿論、創造としての生産の人間的奉仕がありうる。勞働運動は、これの根本の自覺と作思に於ては、勞働を社會的に、そして有意義に實用にするための現在に於ける一とつの主もな努力であらねばならん。

社會全衆が、經濟的には、多く勞働せずに、しかも充分に消費しうる時代は、現代人としては、確信をもつて招致することが至當だ。その時代が來れば、社會は、最も健全なかたちに於て消費主義者となる。最も健全なかたちに於ては、文化的各種生産が勿論努力の主要對象、主要目的物とされるが、その文化的各種生産は、比較的に藝術的だ。それは、生産過程に消費過程を内在させて持つ種類の生産だ。それは比較的にそれ自身に目的を持つ種類の生産だ。比較的にとは、勿論、賃錢を唯一の目的とする生産とくらべてはといふ意味だ。

各人が充分に消費しうる社會。消費する社會。消費主義者として生活する社會。これ以外に社會改作の目途はありえない。現存の社會の不完全は、消費者と生産者とが、經濟生活を中心として、莫大なる階級別をさへ形成してゐるにある。

各人が充分な消費者である社會は、勿論、各人が充分な生産者であることを方法とする。消費と生産は、階級別の如きをば勿論形成せず、個人に於ける時期別をすらも出來るだけ短縮し、拜に死よせて望まれる場合さ。これのすべての場合とする方途に前進することが、社會進化の主要方法であらねばならん。

各人に於ける消費の自覺、大衆乃至全衆に於ける消費の自覺、これを創造源として制度、慣習、學說、常識は常に保存と改作とを不可避にもされ、最も合理的、道德的になされもする。

消費者本位の主張は、最も平凡に觀えることもあらうが、それは、しかしながら、すべての有意義な奇拔を派生し、すべての不聰明な奇拔を退治する最も偉大なる社會理性そのものの自己主張だ。消費者的良心は、社會的良心そのものだ。

われらは消費するために生きる。われらの或ものだけでなしに、われらの各即ちすべてがだ。

最善義のデモクラシそのもの、社會主義そのものも、消費主義の確立、主義的即ち普遍的、社會的確立以外のものでは決してありえない。

われらは、このわかり切った思想を、新たに注意の對象に置き据ゑて然るべき理由を、現代に於て、甚深の程度に於て持つと考へる。

和も、爭も、消費的自覺を決く場合のそれは無乃祇だ。

## 十二　生産

人生の目的は消費にある。しかし、最廣義に於ての一切の藝術が關する限り、それを消費することは、先づそれを生産することを必要な方法とする。先づといふほどの時間の隔たりもない場合は勿論澤山にある。なほかつ、その場合に於ても、消費が生産を要件とすることに特別赦絶はない。

消費は人生の根本必要だが、最廣義の藝術の消費が關する限り、それの、その藝術の生産は絶對不許忌避の義務だ。

最廣義の藝術とは、勿論、純粹自然物以外の、人間にとつて價値ある、即ち人間の慾望を多少とも滿足させる力あるすべてのものだ。有價な人爲物のすべて、文化のすべてがそれだ。

生産には多少の努力または努力がいる。とにかく人力がいる。これをはぶくことは、人力による生産を、藝術の場合ならばその過程及びそれの結果を、富の場合ならば主としてそれの結果のみを、消費せずにすますことだ。

人生の進歩は、しかるに、勿論、人爲的生産を消費する生活に於ける發達だ。藝術的には單に月、雪、花、虫、鳥のたぐひが與ふる視覺美や聽覺美を消費し、經濟的には單に野果、野菜、飛禽、走獸の類を消費した生活は原始生活だ。發達した生活は、それらの自然物の消費に加へて、人爲的生産物の消費をいよいよ――ますます――充分にすることにほかならない。

消費は人生の目的だけれども、生産しないならばそれは達せられない。科學的消費主義は、かくして、充分なる生産主義を條件とする。

眞義に於ての藝術的生産を方法としないでは、個性發見及び個性實現の快樂は味はれない。廣義に於ての技術的生産を方法としないでは、個性發見及び個性實現の充分なる、したがつてまた社會的な、達成は準備されない。

かくして、社會進歩の歴史を見ると、そこには先づ道具が、個人用的機械としての道具が生産され、續いて機械が、集團用的、社會用的道具としての機械が生産された。

道具自身、機械自身は、われらの消費慾を滿足させうるものではないが、先づそれらのものを生産しないでは、それらのものを使用することが出來ない、そして、それらのものを使用しないでは、われらの消費慾を直接に滿足させうる生産過程や、物品は生産されない、即ちそれの實現や存在を可能にされない。

例へば現代の劇を見よ、音樂を見よ、繪畫、彫刻、殊にまた建築を見よ。それらは、いづれも、それの最後の生産過程及び結果に於ては、生産者自身にも、單なる消費者にも、完成した快樂を與へうるものだが、その最後の生産過程及び結果が特殊

されるまでに、複雜な、そして長途な、技術的生産過程が、事實的論理の前提的位置を形成してゐる。單なる消費者からいふてさへも、例へば電車に乘つて映畫見物に往くだけの過程にすらも、すでに發達した技術的生産の消費がある。

最廣義に於ての技術的生産の方法の發達は、最廣義に於ての藝術的生産及び消費の發達にとつての一とつの必要件だ。ただ、その場合に、技術的生産は、目的をそれ自身に有せず、藝術的生産及び消費そのものに有することが、無意識深的にも、意識深的にも、充分に理解されてゐることが必要だ。

生産そのものは、それが淺かれ、深かれ、その生産當事者によつてなり、他人によつてなり、享樂される限りに於てのみ人生的價値を持つ。淺くも、深くも、當人をも、他人をも、決して享樂させないかたちの生産には、人生的價値は絶無だ。

だから、もしもわれらが、生産さへすればよい、生産することは、それだけで必然的、普遍的に人生的價値あることだと考へるならば、それは途方もない迷妄だ。

技術的生産の方法の革命的發達によつて、即ち産業革命以來、物質財の生産額は奇蹟的に激增した。同時に、いかに人口に於ける激增が事實上あつたにしても、前者の激增は後者の激增よりも遙かに高率であつた。しかるにもかかはらず、大多數者は、かれら自身が生産する物質財の大部分をばこんにち享受しない、消費することができないといふ現實が發達した。この現象の根本因のすくなくとも一とつは、すべての生産は、消費を目的とするといふ公理の、それに對する認識の、不徹底に疑ひもなくある。

技術的生産の方法の發達は、物質財の生産能率を、生産額を、それ以前と比して、十倍、百倍、千倍化した。同時代間に於ける人口の激增──勿論死亡率の激減を原因とする現象──は、同じ桁の話でなく低い。それだのに、大衆者が物質財に窮乏を告げ續けることは、社會的、集團的生産が、社會的、集團力的消費を充分に明確に目的とせずに、その點に關しては盲目的に、なされてゐるからにほかならないとしか考へられない。

生産そのものに對する盲目的崇拜、即ち迷信が、産業革命以來、今日に及ぶあひだの、たしかに一大社會的事實だ。いはゆる搾取的、暴利的惡性質が意味する限りの資本主義は、その虚、その正信、正覺の不在に乘じてこそ發達しえたものにほかならない。

たま〳〵、機械をばかり終日的、終年的、終生的に、しかも機械の未發達を當座的に代理するかたち、即ち機械的形式に於

て、方法に於て、あつかふ不幸なる境遇に生まれ、育ち、生きた大衆者が、不知、不識の間に、機械そのものの如き習性をかれら自身の心的法則の世界に發達させたといふ、最も悲しむべき事實も多少そこにあつたのかとさへ想はれるほどに、産業革命以來の生産的大衆者に於ける消費的自覺の發達は遲々であつた。

機械自身は、實に、人間の意思にしたがつて、命令に聽いて、忠實に生産するけれども、ほとんどすこしもその自身の生産物を消費しない。勞働者といふ人間が、資本家といふ人間の意思にしたがひ、命令に聽いて、忠實に物資財を生産するかたちは、勞働者自身が、人間であることをやめて、機械に成りさがつたかたちをすくなからず帶んでゐる。これが極めて悲慘な、不幸な、そして不具的、變態的、病理的現象であることは勿論だが、その主原因は、消費主義の哲學及び信仰の缺乏にあると、究竟、斷ぜられる。その哲學及び信仰の缺乏を條件とした生産主義、不完全な生産主義にそれはあると斷ぜられる。

消費主義の自覺なき生産主義は、それこそ眞實に底なき玉の盃だ。

## 十三　閑

技術的生産方法の發達の社會的實現は、その社會的基礎をなして、經濟者を充分に消費せしめ、一層人間的な意欲の文化……充分に生産せしめ、消費せしめる唯一點に存する。

産業革命は、大衆乃至企業を富の生産に没頭させることを本志とは決してせず、その反對に、大衆乃至企業を富の生産から頽役させ、専らそれの消費を享樂させ、續いて一層人間的な各種文化の生産及び消費、即ち結論的には消費を享樂させることを本志とする現象であつた。その自覺は、しかるに、最近に及んでおもむろに端緒を示して來た。

筋勞的苦役は産業革命以前の一般的社會事實であつた。當時にあつては、大衆者は食、衣、住の獲得の勞に追はれ通ほした。産業革命は大衆者をその不幸な状態から救ひいだす秘鍵を藏してゐた。しかし、それはあまりに深く内藏されてゐたために、今日に至るまでの實際としては、産業革命は全く反對の現象を生んだ。産業革命は、未曾有の大規模と深刻さに於て、大衆者の苦役的筋勞を生んだ。勞働、勞働者、勞働階級、勞働大衆、これらは、みな、産業革命そのものによつて産みいだされた。産業革命以前の生産者であつたが、それは同時に、そして或見地からしてはむしろ代表的に、勞働、人間としては誰れしもが成るたけ忌避したがるそを本當とする勞働その者の生産者であつた。

産業革命には、大衆及び企業をとして、[illegible]されれし

めることをそれの文化史的發現理由とする。人間が、人間ともあるものが、いつまでも經濟意識に支配されてゐるやうでは碌でもない。けれども、經濟生活そのものは、永久に人間にとつて最も基礎的な必要物だ。人間が人間として自由を增大させて行くためには、經濟生活に於ける發達は絶對的に必要だ。經濟生活そのものの發達は、進步的社會にとつては常にいよ〳〵必要であり、同時に、經濟意識からの解放がそれにとつて同樣に常にいよ〳〵必要であるといふ一見的矛盾質の難問題を、產業革命は、物の見事に解決して見せる意思を、實は、最初から包藏してゐた。

失業と科學的、機械的生產時代とは必然的關係物だ。科學的・機械的生產時代は、失業を生まずにはすまない。そこにこそ科學的、機械的生產時代の誇りは存せねばならん。技術的生產方法が發達すれば、筋勞が廢用にされることは極めて必然だ。技術的生產方法の發達は、實に、筋勞を最も有意義に廢用にするためにこそ現はれた。

產業革命の最初の純眞なる方針の進化的實現は、いよ〳〵ます〳〵、失業を增す一途へむかつてなされるほかない。そして、これは、勿論、最も慶賀すべき事だ。ただ、その失業が、現代の事實に於けるが如くに、その失業者が、その者が意味するだけの自由を失ふことを意味せずに、その者が意味するだけの不自由を失ふことを意味する社會組織さへ、他面に於て發達すればだ。

現代の事實としては、失業は、實に、その失業者が、最低限的必要程度の自由を失ふことを意味する。失業することは、自己及び家族の露命をつなぐための方法を失ふことを意味する。

生產科學、したがつて生產機械が發達すれば、現代に於て單なる筋勞即ちいはゆる勞働が意味する種類の仕事をば、機械が立派にやつてのけることができるやうになるほかないから、その發達にしたがつて、いはゆる勞働者がます〳〵失業するほかないことは明白を極めてゐる。

產業革命のかくれたる本志は、大衆者に勞働を與へることには決してなく、閑を與へることに限られてゐた。しかるに、現代までの事實としては、產業革命は、大衆者に、いや却て大衆者に、產業革命以前にかれらが享樂したほどの閑をさへも拒み、それをすらかれらから奪ひ、逆に、產業革命以前にさへかれらがせずにすんだほどの苦役的筋勞をかれらに押しつけた。もしもこの事實が將來なほ永く續くとするならば、產業革命は、したがつて科學と機械は、人類の[illegible]すに、人類のそれ[illegible]

も、綜合的考察は、產業革命を、一とつの偉大なる、そして純眞な、進步的現象として確認する。

科學そのもの、知識そのもの、發明そのもの、技術そのもの、機械そのものは、いつでも、それだけの善であるほかない。ただ、それを使用する人間の、一層全體的な聰明が充分であると不充分であるとにしたがつて、それ自身としては常に善であるそれらのものが、現象的に、あるひは善となり、あるひは惡となる。現代は、生產科學及び生產技術を、それの不充分なる聰明ゆゑに、巨大なる惡としても作用させてゐる。

失業の業が、機械さへ發達すれば機械で、かへつて機械での方が立派に、つとまるやうな性質の作業、即ち一言にして非藝術的作業を意味するものである限り、機械の發達と失業の增加との間には、日なたに於ける物體とそれのかげとの間に於ける以上もの必然的因果關係がある。さればこそ、發達した機械を工場へ備へつけることには、勞働者は、脊に腹はかへられぬ餘儀なさで反對する現實と傾向がある。これが、社會的に、また時代的に、生產科學、生產技術、生產機械の發達そのものをいかに深く且つ廣く制限してゐることか。

けれども、この場合、批難の矢は、勿論、勞働者には向けられない。それは、勿論、制度そのものに、機械と失業とが併進的必然を形成せざるをえなくされてゐる、機械と失業とをさうさせてゐる制度そのものにむかつて放たれるほかあるべきでない。

失業は解放を、經濟意識からの解放を、經濟意識を原因とする苦役的勞作からの解放を一般的に意味しうるやうになることが、產業革命の最も純眞な、本質的な目的だ。產業革命の最も自覺ある目的は、すなはち、大衆及び全衆に自由時間としての閑を大量に供給することのほかにはありえない。

大衆及び全衆が經濟意識から、右の如き積極的方法によつて解放されれば、かれらは、その新たに與へられた閑を、もつと人間的な生產及び消費に使用せずにはゐないだらうことは想察するに決して困難でない。經濟的意識に强制されて、人間が、さもなくば發奮せず、努力しないだらう場合に、發奮し、努力するといふ事實及び可能はたしかにある。しかしながら、人間をして發奮せしめ、努力せしめる刺戟は、經濟意識以外にもある。そして、經濟意識以外の世界にこそ、その刺戟の最も、個人的及び社會的に、有力な、且つ有價なものはある。知的好奇本能だけでも、愛美本能だけでも、あるひはくだつて名聲心ですらもが、人間を怠惰に腐朽させない力に於て、經濟意識以上であることは、全體的、原則的事實及び可能としては確實を極めてゐる。

**現代の一至要事は、**生產の結果が生產者に歸屬することを確**保する制度の設立に**ある。生產者は、論理的に、即ちどんなに**間接的にでも、**代償的にでも、變形的にでもよいが、要するに**自分が消費するため**に生產するといふ關係が制度化されること**にある。**さうなれば、その制度さへ確設されれば、すべての生產者は、生產科學、生產技術、したがつて機械の發達を無制限に、飽くことを知らず希求してやまなくなる。その結果、閑の[illegible]となる。そして社會的大衆が產業革命以[illegible]上の意識によつて支配され、行動[illegible]ばたらん。

失業が、まじめな社會的生產意思あるすべての人々の場合に於て、なけなしの自由を失ふことを意味せず、ありあまる自由としての閑を獲得すること、機械代はりの作業としての人間的不自由を失ふことを確實に意味しうる制度を、現代はもつと懸命的に目的として研究もし、發達もさせ、知識にしたがつて着々實施すべき時代にある。

經濟生活が關する限り、現代人は、もつと有閑者でありうることを至當とする「無閑と忙」とは、科學と機械のすでにこの程度に發達し、なほ限りなく發達しうることを知識に立脚して信じうる現代人としては、それを經濟意識以上のもののためといふ諸方に於て最も代表的であるものへ、制度改作によつて實質さ[illegible]、ある。[illegible]的、藝術的、敎育的、道德的、宗[illegible]

保存してゐるやうに概察される。なほかつ、現存の經濟組織改作の社會的純熟は、必然的に、あまねく閑の光明に照された新時代を、われらの或ものからいへば意外に早く、われらに迎かへ、持ちよろとばせる方途に迅速に進展しつつあること、進展し行くことは疑はれない。最近に於ける金融研究の新傾向、社會組織一般に對する哲學的考察のあれ、これ、多少久しい年數を經過した新經濟制度構想の或もの、これらの周圍に、その方向への想像が次第に繁く洩光し來たりつつあることも、これに關聯して、われらの希望を元氣づける數知れぬ現象中の或ものだ。

産業革命も、やうやくそれの本統に刈るべきもの、全社會の經濟的有閑に本能眼を向け始めたやうに見える。われらは、人間性の意識に於て、それの深徹的、遠達的完全發達を深くこひねがふ。

## 十四　忙

現代の大衆者は生涯を苦役しゐる。それとの比較に於ては、現代の少數者は生涯を忙消しゐる。そして、兩者を通じて、その苦役と忙消との世界は經濟的世界だ。經濟的世界が、現代人の關心的唯一物だ。大衆者は、少數者が消費するための經濟物を生産するために一生を苦役し通ほし、少數者は、大衆者をしてその經濟物を生産せしめるため、及びそれを消費するために、一生を忙消しゐる。

けれども、經濟生活は、生活の基礎條件でこそあるが、それのすべてでもなければ、それの完成的條件では決してない。食はないでは生きることが、いやしくも生ることすらもが絶對的にできない。しかるに、ともかくも生存しないでは、學問も、藝術も、教育も、政治も、宗教も、道德も、戀愛も、發達、完成はおろか、始まりだにしない。このかたちに於て、經濟は生活の基礎的必要件だ。しかし、同時にまたそのかたちに於て、經濟は生活の完成的資格物ではない。

經濟は要するに物質善の消費、そのための生産及び分配にほかならない。けれども、人間にとつては、物質善以外にも善がある。愛、憎、榮、辱、これら自身もそれの或かたちだ。美欲、知慾、これらもそれの或ものだ。それらのすべては、現象として、作用として、多少の物質性を帶びゐる。しかし、これらのものの自體は、精神的特徴に於て最も代表的に顯著だ。例へば、愛そのものには、色も、形も、目方も、匂ひも、味もない。

すべて、[illegible]

於て、勿論精神的だけれども、直接の特徴に於ては代表的に物質的だ。例へば、飢ゑて食ふ。この場合に、飢ゑそのものは精神的事實だ。食ふことのうまさもそれだ。けれども、空腹は、それに於ける飢餓的内容を代表するかたちに於て物質的事實だ。食はれるもの自身も勿論物質的だ。食ふ作用自身もさうだ。

產業は、それの組織がどうあらうとも、またそれの發達がどうあらうとも、要するに生活に於ける物質的部分内の事實だ。

產業革命以來、經濟的生產及び消費が社會の主要關心事となつたことは、そして、いはゆる搾取的少數者と、被搾取的大衆者とに人口の全部が特徴的に、代表特徴的に分類されうる事實が發達したことは、統一的人生そのものの在りかたから見て、勿論偏傾的だ。それは、同時に多少變態的、病態的、すくなくとも一時態的だ。

統一的生活、社會、人生そのものに於ける經濟の位置は部分的だ。しかも、經濟的必要及び滿足は、それに於ては、それが進步し、發達するにしたがつていよ〳〵、ます〳〵、手段的位置に於て最も代表的なものとなる。統一的人生に於ける、それの必要及び滿足に於ける經濟的必要及び滿足は、それが進化するにつれて次第に獨立的、自全的性質を減却し、從屬的、附隨的性質を增進する。

社會をあげて、したがつて個々人の全生活と文化の全部とをあげて、經濟的興味及び必要の經營に沒頭することは、一全人がかれの脚にすべての精力をささげることだ。進步的一全人としては、かれの頭を本位として、主體として、目的として、脚をも、手をも、身體全部、かれ自身のすべてを經營することが、最も賢明な統一方法だ。

生活に於ける比較的に精神的な部分を充分に完全に經營することを目的とすれば、生活に於ける比較的に物質的な部分の、その部分の興味及び必要の、經營は、おのづから充分に、完全に、適當になされる必然關係がある。しかし、その逆は決して眞ではない。即ち、生活に於ける比較的に物質的な部分を、どんなに集中的に經營しても、それに附帶し、隨從して、生活に於ける比較的に精神的な部分が充分に經營されるといふ現象も、結果も生じない。

どうしてかといふに、生活に於ける比較的に精神的な部分は、生活に於ける比較的に中心的な部分にほかならない。そして、生活に於ける比較的に物質的な部分は、生活に於ける比較的に末梢的な部分にほかならない。

かくして、例へば、「衣食足れば」必らず「禮節を知る」かといふに、事實に見ても、理論から推しても、さうではない。

し、眞に榮辱意識に燃えれば、衣食の計もおのづから現はれる。個人としての福澤諭吉氏、民族または社會としての近代英國の如きが、例へばこれらが、先づ衣食に足りたがゆゑにあのやうな榮辱意識を發達させたか、先づ榮辱意識が特にさかんであつたがゆゑにあのやうな衣食の計をも發達させたかといふに、事實上、比較的重心は後者にある。

されば、社會經營の理想及び方法を策する人々が、大衆乃至全衆をして、先づ物質生活的に不足、窮乏なからしめよ。人口のすべてをして經濟的に富足せしめよ。さうさへすれば、一切の犯罪と不道徳は心理的に、その事情ゆゑに、根絶されるだらうと考へる場合にも、實は、多少無意識深的な一層の深處に於て、一切の犯罪と不道徳が心理的に根絶された狀態、人間性の最も自由な發達、實現がすべての人々の身の上と、すべての人人のあひだとに見られる社會に對する要求があつて、その狀態または社會を招致する當面の技術的代表務として、經濟生活改作に集中するといふ心理的事實が、明確なる意思としてではなくとも、一層基礎的な動機のかたちに於て多少あることを常とする。また、さうでなくては、その考へは淺薄だ。

ただ、現代に於ける多くの社會理想者が、經濟生活改作に主張の全部を安心して、また好んで傾倒する場合には、良心的にさうする場合には、單なる精神生活改作の必要は、不完全ながらも比較的にすでに充分に說かれもし、聽きあかれさへしてゐることをかれらは知り拔いてゐるからさうするのでもある。目下最も缺くるところのものは經濟生活改作の方面よりする精神生活改作の努力であること、あるひは、經濟生活改作そのものといふ限られたる部分だけにあることを、かれらは信じまたは知つてゐるからさうするのでもある。かれらといへども、精神生活を目的とする立ち場をば、言はずと知れたことだとして、また從來物質生活的條件を無視してそれが說かれたことに愛想をつかしたり、憤慨したりしてゐる心持から、現象的に無視、一蔑視、賤視、敵視するにすぎない。その一とつの證據には、思想及び學說に於ける極端なる唯物主義者中の或ものが、いかに烈々たる殉難魂の自證者であるかにもある。恐らくは現代——精確には多少の過去——に於ける或唯物主義者以上の唯心主義者は、事實上、ない。すくなくとも自身の經濟的窮苦の如きは、かれらの主義、節操、思想を小搖るぎだにさせる環境力を持たない。行動即ち實質に於ては、かれらこそ現代の最も代表的な唯心主義者だとさへいへる。

事實かくの如くにして、精神生活が、これこそが、進步的社會の目的の一つ。いたることに[illegible]發するにすぎない。單なる言葉

に於て、また感情に於て、これを無視、非認、否定するが如きは、現代の實情からいふ限り、多く問題とするほどの大事ではない。

大事な問題は、産業革命以後の社會は、産業革命以後の社會相當のかたちに於て、精神生活を目的とすることにある。精神生活のいかなる在りかたを、いかなる方法によつて目的とすべきかが、これこそが現代に於ける最も大事な問題だ。そして、大衆者は經濟的苦役に一生を棒に振り、少數者も經濟的企業及び逸樂のみに生涯を忙殺し果つることは、決して社會的深慮及び遠見の存在を意味しない。

社會をあげて經濟の奴隷であることは、現代の最大特徴だが、この間に、人的自然に於ける內的部分は、荒廢と倦怠を極めてゐる。生活に於ける經濟的部分の經營をば、早く機械に一任し去り、經濟生活以外の世界に於て、あらゆる本能と衝動と想像と意思と知慧とに滿幅の機會を享樂させることが、機械を持つ現代の義務であると同時に特權だ。

勞と忙とは、この上ながく經濟生活の世界內にそれの本舞臺を持つべきではない。

單なる經濟的必要の如きをば、生活に於ける物質的必要の如きをば、機械を所有する現代としては、すべての人々に充分に、しかもかれらの勞と忙となしに、給足しうることが重點だ。さうでないなら、なんのための機械ぞや。

現代を勞殺し、忙殺するものは、機械を發明する努力の不足にあるが、その努力の不足の原因は、制度に於ける偶像崇拜的不聰明を自覺する知力または知識の不足にある。その制度は、分析的には金貨及び紙幣に關する部分の如きをも意味し、綜合的には經濟組織及び政治組織の全體を、最も制限して、縮約して見ても、意味する。

# 既成政黨の腐敗と新政黨の進路

杉山元次郎

## 一

一國の政策を立て、或は國民の生命財産に關する討議をなす神聖なる場所を、單に其の形態のみを傳ふる芝居になぞらへ、議會を呼ぶに『日比谷座』を以てするすら我々は最初甚しい侮辱の樣に感じたのである。然るに彼等代議士なるものゝ行爲を見るに其の言葉の正に該當するのみならず、寧ろ藝術的良心を以つて立てる今日の俳優よりも數等劣れるを知るのである。

芝居は一つの藝術として其の形態の中に其人物の心持を現はさんとし、俳優其れ自身は非常なる苦心と努力を以てするのである、出來るだけ觀客を誤魔化し、出來るだけ樂をサボルと云ふが如き者には、如何なる場末の安芝居の俳優と雖も斯る不心掛の、不忠實の人間は一人もないのである、是を思へば今日の代議士に取つて『日比谷座』はむしろ分に過ぎたる言葉であろまいか。

處が此頃は進歩であるか、或は退歩であるか知らぬが『日比谷座』は變じて『動物園』になつたのである、何う云ふ處からか其の名の依つて來る所以を知らぬが蓋し彼等の行爲を見るに喧合ひ、叩き合ひ、或時は流血の慘劇を演ずるなど恰も動物が檻の中で爭鬪してゐる樣な狀態であるから斯く呼んだのであろう、新聞は之に對し武勇傳中への勇士に仕立てて皮肉つてゐるのも知らず、却つて自慢の鼻を高くするとは愈々以て度し難い人間どもである。

聞く處によれば何うせ頭腦は議論を以て人を傾聽せしむるに足りない、彼は所謂無能で用ゆる所がない。之では世間にも廣告されず、選擧民にも自己の存在が知れない。たゞ暴れることにより、奇矯下劣なる野次を飛ばすことにより、斯る所期の目的を達し得ると考へたのである。故に[illegible]たる[illegible]名があるとし

拘らず、『貴千』とか、『小か平』とか、下つては『喧嘩忠兵衞』とか『叢寅』とか云ふ如き、恰も匹夫野郎の如きアダ名を呼んで本人も得意然とし。社會全體も亦之に就て余り怪まないのは慨嘆に堪えない次第である。故に彼等はいよ／＼增長し、暴行するを以つて唯一の手段とし、幹部と云ふ相當な人間すら斯る事をなすに至るのである、見よ五十一議會の終り頃に於て議場の紊亂せる如きは、寧ろ政友會の幹部自ら其の決心を話し、黨員を激勵した事實明かである。斯の如く己等は暴行の限りを敢へてしながら、其の議場に於て暴力取締法を制定するが如き皮肉も此處にては沙汰の限りである。此の法律は決して合理的な社會運動、勞働運動又は小作運動を取締るものでないと辯明してゐるが、何ぞ知らん制定者の精神で何時までも適用されるものでない。其の時に智識なき官憲に其等の運動が適用せられて甚しき苦痛を嘗めることは明かなる事實である。

斯る下劣なる代議士の惡いことは勿論云ふまでもないが、國民全體が、否な選擧民だけでも若し確乎とし、斯る醜惡なる人間を議會に送らぬ樣に注意するならば忽ち改つて來ると信ずるのである。前號に於て滑瀨一郎氏は既成政黨は髑髏の樣なものである、新しい無產政黨と云ふ小石を嚙まして髑髏を打碎かしめよと云はれたのは誠に面白い言葉である、普選の實施と共に新しく選擧權を獲得したる多くの人々は、此の眞理と決心とを以て是非議會の改造に當りたいものである。

近來に於ける日本の議會程醜惡なるもの、また不成績なものは少ないであらう、特に此度の議會程醜惡を暴露し、又不成績を極めたものはない、其の實例を一々數へ來れば枚擧に遑はないが、其の一二を摘發すれば、例へば議案に對する態度である。職務に對する不熱心さである、見よ其の重要案件に就いては悉く首相の所謂『謙讓の美德』を發揮して不合理なる妥協をなし、自分の醜惡を披攊せんとする者に對し議事の妨害を加へ、議事を延長せしめんとする政友會の態度に對しても、內閣初め憲政會の折れたるが如き、何たる無氣力、何たる意氣地なしであるか。何處に一黨として存在の價値があるか、斯の如く衆議院は表面爭ひつゝあるも裏面は政權慾のため敢へて妥協と符合をなし、貴族院はまた貴族院で政府の御馳走政策に乘ぜられ、重要案件を碌々審議せず、所謂『誤勉強振り』を發揮して一瀉千里に片付けて終ふと云ふ狀態である、國民も之れ位馬鹿にされたことはない。其代り國民も亦今度程既成政黨に愛想をつかし、彼等を見限つたことはないであらう。近き將來に行はるゝ普選に際しては此事を心の肉碑に銘じ、斯る良心の麻痺した、厚顏無恥の人間を斃えて一切選擧せぬ樣心掛くべきである。

次に彼等の余りに節操のないことである。議會開會の少し前に當つて各黨共大會なるものを開き、堂々と正義を稱へ、人格の尊重すべきことを高調したのである。先づ彼等の正義とは何を意味し、人格とは如何なることを指示するかを問ひたい。明日に約束したことを今日に急變するのは正義であるか。暴力を以てしても已れの議論に反對する者を壓迫するのは正義であるか。金を貰ふことに依り意見を右に左にするのは人格であるか。否な然らざるのである。彼等は口に正義人格を稱すれども節操なきこと恰も腐れ果た女郎にも劣るのである。女郎と雖も一片の人情がある。容を全くの無一物にしては捨てないのである。然るに彼等こそは金の切目は縁の切目で、さん散に金を吸取つては達磨を蹴落し、其代りに得體の知れぬ持參金付きの軍閥の巨頭を迎へて狂喜するなど、之れ普通に節操あるものゝ行爲であらうか。斯る行爲は田夫野人と雖も唾棄すべきことである、彼等には政治よりも金である。元々政治家になつたのも政治が目的にあらずして金が目的で在つたのである。故に金になれば如何なる惡事も恬として行ひ、金にならねば如何なる善事もなさないのである。松島遊廓移轉問題の如き、山梨大將對梅田某の問題の如き最も良く證明して余りあるのである。之れは單に其等の問題ばかりでない。何ぞ烏の雌雄を知らんや、照魔鏡にかけたならば殆んど大部分は此の類に屬するであらう、見よ其等の事件に續いて其から其へと眉をひそめしむる様な問題は起つてゐるのである。

彼等の人格は誠に鍍金の人格である。人前だけ、選擧間際だけの人格である。彼等は人格の使ひ分けをする手品師である。我等は最早彼等の人格と云ふ言葉に許されないのである。今度こそはと云ふても駄目である。今度と化物は出ない、我等は幾度か此の手を食つたから最早絶對に彼等の言葉を信じないのである。

第三は彼等の狡猾共者である、實に古狐古狸の寄合である、彼等の中では目から鼻に拔ける者を才ありとして貴し、權謀術數をなすものを智者と稱へ、御都合主義、御座成り主義は彼等の常套手段である。故に彼等の云ふことを眞面目に聞いては酷い目にあはされるのである。彼の實業同志會の如き政黨として新しく其だけ主義に忠實なるものと見て居りしに、今度の行爲は何ぞや、政黨の打破を第一旗印とした者が既政黨と妥協的合し、而して昨日も今日も主義に變りなしと云ふに至ては餘りの狡猾さにも程があるのである、又彼の先きに農民勞働黨の禁止の如き、表面には團體加入制度の不可なりしこと、綱領政策には之れ以外の原則的のものがあり、其は現在の國狀と一致せぬ

と云ふのであつたが、何ぞ知らん、学理を楯として凡ゆる無産階級の政治的勢力を二つ葉の内に摘まんとしたること、及び貴族院并に樞密院等の歡心を買はんためなることは明かである、斯の如く表面善美を装ひ裏面に醜悪を包みつゝ民衆を愚弄するのである、故に斯る狡猾なる手段に對して我等は何處までも排撃せねばならぬのである。

最後に彼等の醜悪なるものゝ一つとして歳費の手盛り値上げを舉げることにしやう。何の爲めに上げるのであるか、歳費三千圓で足らぬと云ふのであるか、三千圓は今日餘り多額の金でないであらう。併し年三千圓の純收入を得てゐる者は國民の内何パーセントあるであらうか、餘り澤山ないのである。三千圓あれば家族は普通の生活を支へることが出來るのである。而かも代議士の働く時期は僅かに三ヶ月、正味は六十日程でないか。之に對して三千圓は高くとも決して安くないのである。給與を増さねばならぬものは他に多々ある、然るに之を前にせずして手盛で歳費を上げんとし、形勢悪しと見るや或者は駄々をこね、或者は四方に當り散らすなど厚顏無恥も亦此處に至つては病ひ膏盲に入れりと云ふべきである。彼等の或者は云ふであらう、歳費は今少し多くあつたならば今日の様な悪事は減少するであらうと、畢竟いろ／＼の醜悪事件の起るは要するに金が足りないのであらうと。[illegible]も高い歳費をせぬもよいのではないのである。金のある無しには關係せない。見上金錢を授受せる奴輩は案外に金を持つてる者共である。其では歳費値上げの議論にならないのである。

又或は云ふであらう。今少し會期を永くし議事を慎重審議せねばならぬ、故に其の會期を長くしただけ値上げせよと。會期の延長一應最もな言葉である。併し五十一議會の如く毎日泥のなすくり合ひをなし、或は自分に都合が悪ければ騒然として議事の妨げをしてゐる様では何時まで延長しても同一である。一方で能率が上らぬかと思へば閉會間際になつて數十件の建議案を提案の説明も聞かず、或は審査討議も行はずして通過し、二三日に數百件の議案を上程する腕前を持つてゐるのである。之を以て見ても會期を延長する必要はあるまい。身の程を知らぬとは歳費値上げの御手盛の様なことを指すのであらう。人の前に立ち、選良とも云はるゝ人間であるならば少しは恥を知るが良い。自分の仕事を云はず報酬のみ云々するは實に沙汰の限りであつて、國民を侮辱すること之より甚しいことはない。

## 二

家貧にして孝子出で、國亂れて忠臣出づと昔人[illegible]

# 既成政黨の腐敗と新政黨の進路

杉山元次郎



[illegible]……議會の如し前にかけたならば殆んど大部分は此の[illegible]其等の事件に續いて其から其へ、[illegible]人格[illegible]起つてゐるのである。[illegible]とは何[illegible]彼等の人格は既に[illegible]の人格である。[illegible]

[illegible]には行かないのである。我等は[illegible]あるものを述べ、時と共に高め、實行と共に漸次[illegible]るものである。

[illegible]しい委員の一人として[illegible]一端を述ぶることにしやう（勞働農民黨の正式な中央委員會も開かれず、また黨としての意見も纏めてないから述ぶる譯に行かない。其處で之から述ぶる處のことは私一個の卑見であること、又私は今まで政治には全くの素人であること、之に加へて淺學不才とはいろ／＼の空漏的なこともあらうと思ふ。豫め此點御承知置きを願ひたい。）

今度の勞働農民黨の政綱は別段耳新しい處がない。[illegible]由主義者の云ひ古したる處であると云はれるか[illegible]貫して見るならば多少相違點を發見するのである。[illegible]黨としての働きが充分に出てゐると思ふのである。[illegible]はすれば理想は多々ある。其を一々披瀝したならば[illegible]う、何事か事あれかしと待ち望み、我等の政策を[illegible]さうとする彼等の口實を作り、再度禁止の厄災[illegible]る事實である。其よりも温和にして[illegible]

第一　勞農黨政綱[illegible]より高きへの方針である。[illegible]十項目であつたが、今[illegible]

かと思……

故に議會の改造は先づ第一に人格……は代議士の資格として

一、相當の辯舌をもつてゐること
二、相當の學問知識のあること
三、人格者であること

の三ケ條を掲げるのであるが、少し位の訥辯でも、少し位學問はなくとも、何より人格を必要條件とするのである。

人格のことを云へば米國の富豪モルガンの話を思ひ出すのである。嘗つて歐洲大戰の際米國の議會はモルガンが親交ある獨逸にのみ金を貸して、他の國々へは貸さないのであるまいか、若し然うあつては何うしても聯合軍は勝てないとあつて、遂にモルガンを査問したのである。『貴下は自分の好きな處にのみ金を貸して他には貸さないのでないか』との査問委員の問ひに對し、彼は『否な然う云ふことはない。私は白面の一青年にも無擔保で一時に一百弗?を貸した事がある』と答へたので、査問委員は驚いて『銀行家が其樣な亂暴な貸付をしては破産の恐れはあるまいか』と尋ねたのである、彼は直ちに答へて『擔保品……

人格者を撰ぶと同時に……て眞に國民の代表者たらしめたのであ……

第三は選擧費用の捻出方法である、勞働農民黨は無産……合であるから金はない。資本主義に改造を加へやうとする我々には既成政黨の樣に富豪からの寄附もあるまいから選擧費用の點に就いては余程考へねばならぬのである。二千圓の保證金、通信印刷費、會場費、運動費、等少なくとも數千圓を要するであらう。其の金を如何にして生み出すかである。農民組合のある方では割合に此の問題が解決し易い。何故かと云ふに何處の……部或は聯合會に於ても不納米の百石や二百石、大きな處では二十萬圓も其金を持つてゐるのである。故に保證金を沒收される心配さへなければ其を一時流用しても良いのである。併し出來ることとなれば黨員で凡てを負擔することである。……の如きは他の團體とも……

既成政黨が今日の如く腐敗墮落しては何うしても此處に新政黨の生れざるを得ないのである。恰も良し普選は實施せられんとして新しく政權を獲得した無產階級が、新しき政治的闘爭へと進むのは當然である。斯る社會の情勢と、無產者の長い間の苦惱と要求とにより正に勞働農民黨は生れたのである。此の新しい黨員の一人として抱負と理想の一端を述ぶることにしやう（勞働農民黨の正式な中央委員會も開かれず、まだ黨としての意見も纏めてないから述ぶる譯に行かない。其處で之から述ぶる處のことは私一個の卑見であること、又私は今まで政治には全くの素人であること、之に加へて淺學不才とはいろ〳〵獨斷的なことも云ふであらうと思ふ、豫め此點御承知置きを願ひたい。）

第一綱領政策は簡より複へ、低きより高きへの方針である。先きに禁止された農民勞働黨の政策は四十項目であつたが、今度の勞働農民黨は其の半數の二十項目で以前より見れば頗る簡單である。政策として掲げた數の多少は其の政黨の良否を示すものでない。彼の既成政黨の如きは不渡手形的政策を多く並べてゐるのである、數よりも寧ろ政策の內容である。質如何である。勞働農民黨の政策は如何に實際的であるかは二十ケ項目の內十四ケ項まで生活の問題を捉へてゐる事を見ても解るのである。西の議論より一つの實行である。我等は政策の忠實行者とならねばならぬ故に、單に空想的抽象論を並べる。には行かないのである。我等は法三章的に出來るだけ實行性のあるものを並べ、時と共に高め、實行と共に漸次增加せんとするものである。

今度の勞働農民黨の政策は別段耳新しい處がない。殆んど自由主義者の云ひ古したる處であると云はれるが、綱領政策を一貫して見るならば多少相違點を發見するのである。無產者の政黨としての閃きが充分に出てゐると思ふのである。我等にも云はすれば理想は多々ある、其を一々披瀝したならば如何であらう、何事か事あれかしと待ち望み、我等の政黨を折あらば抑潰さうとする彼等の口實を作り、再度禁止の厄災に會ふは明かなる事實である。其よりも溫和にして官憲の嚴重なる監視を緩和し、一面多くの人々を糾合し、時勢の進步と共に綱領政策も進めて行くのは賢き方法と考へるのである。

第二は被選擧人の資格に對する考へである。既成政黨の代議士と雖も口では選良とか、或は我等も國民の代表者であるとか云ふであらう。彼等は眞に選擧民の意志を代表したであらうか。否な一人の富豪のためには數萬の有權者を賣り自己の爲なのためには主義政見を弊履の如く打棄て[illegible]

黨利黨略と、名譽と利權の外にないのである。金の切目は緣の切目で黨首の人格は勿論のこと自分自身も今日は憲政會に居るかと思へば明日は政友會に席を置いてゐると云ふ始末である。故に議會の改造は先づ第一に人格者を送り込むことである。私は代議士の資格として

一、相當の辯舌をもつてゐること

二、相當の學問知識のあること

三、人格者であること

の三ケ條を掲げるのであるが、少し位の訥辯でも、少し位學問はなくとも、何より人格を必要條件とするのである。

人格のことを云へば米國の富豪モルガンの話を思ひ出すのである。嘗つて歐洲大戰の際米國の議會はモルガンが親交ある獨逸にのみ金を貸して、他の國々へは貸さないのであるまいか、若し然うあつては何うしても聯合軍は勝てないとあつて、遂にモルガンを査問したのである、『貴下は自分の好きな處にのみ金を貸して他には貸さないのでないか』との査問委員の問ひに對し、彼は『否な然う云ふことはない、私は白面の一青年にも無擔保で一時に一百弗?を貸した事がある』と答へたので、査問委員は驚いて『銀行家が其樣な亂暴な貸付をしては破産の恐れはあるまいか』と尋ねたのである、彼は直ちに答へて「擔保品は時の相場によつて高下する。併し人格は一朝一夕に變化するものでない、故に人格を認めて貸付けに決して一度も誤りがなかつた、」と、眞に然りである、眞の人格者なれば朝變暮改はないのである。既成政黨の誰も口には人格を云々するが鍍金の人格だから直ちに剝げて、醜惡なる地金が出て來るのである、我等は眞の人格者を撰ぶと同時に組織の背景を以つて監視し、統制し而して眞に國民の代表者たらしめたのである。

第三は選擧費用の捻出方法である、勞働農民黨は無産者の寄合であるから金はない。資本主義に改造を加へやうとする我々には既成政黨の様に富豪からの寄附もあるまいから選擧費用の點に就いては余程考へねばならぬのである。二千圓の保證金、通信印刷費、會場費、運動費、等少なくとも數千圓を要するであらう。其の金を如何にして生み出すかである。農民組合のある地方では割合に此の問題が解決し易い。何故かと云ふに何處の支部或は聯合會に於ても不納米の百石や二百石、大きな處では二十萬圓も其金を持つてゐるのである。故に保證金を沒收される心配さへなければ其を一時流用しても良いのである。併し出來ることとなれば黨員で凡てを負擔することである。岡山縣聯合會の如きは他の團體とも次の様な申合をなし、何時改選があらうともちやんと差支ない様な準備をしてゐるのであ

『二千圓の供託の積立は左の方法による、選擧權の有無を論ぜず、我々の團體構成員たると否とを問はず、何某か候補に立つと云ふ事に賛意を表する人に限り一人に付き金壹圓の出金をなし、一家に二名以上の有權者ある時は一人に付き金五十錢とす。

供託金は選擧の結果、候補者が法定數以上の得票ありし時はそれ〲醵出者に返却するを以て原則とす。

前記の供託をなす積立金は何年何月何日までに二千圓に充すべく準備委員會に於て努力すること、若し如何にしても其額に充たざる時は選擧期日約二十日前に醵出者會を開きてその積立金の處分を協議す。

二千圓に充ちたる節は選擧期日の告示あり次第直ちに正式の候補者屆出をなして愈々選擧運動に着手す、此際改めて關係者大會を開き運動方法、選擧委員の選定、運動費額、運動費の出途等の協議をなす。

選擧の結果萬一候補者の得票法定數に達せざる節は供託金は政府に沒收せられ從つてその損失は醵出者の負擔とす云々。』

黨員の實力少なく二千圓の供託金が出來ぬ樣なれば候補に立つも勿論當選は出來ないのである。故に斯る地盤はすぐに立つよりも今後に於て實力を養ふ事が何よりも大切である。二千圓が出來る位なければ確かに沒收される心配はない、然らば例へ落選することは明かであつても政治教育のため、經驗のため立候補すべきである。斯くて地盤の黨員は供託金のみならず一切の費用を支辨し、候補者に一厘の心配も掛けない樣にしたいものである。斯くしてこそ選ばれたる代議士は忠實なる國民の代表者となり、義理にも邪道には迷ひ込めないのである。我等は金がない、併し淨財を以て戰はう、何處まで戰ふて此の腐敗せる議會を根柢より廓清しやうと思ふのである。

第四は勞働者と農民との調和問題である、勞働者は消費者であり、農民は生産者である。故に全然一致しない。例へば米の國稅問題の如きに直面したならば直ちに衝突するであらう。勞働者と農民が一緒に政黨を作るが如きは間違ひであると云ふ人が多くある樣である。併し農民組合を土臺として勞働農民黨に入つて來る人々は、一年を通じて米を賣る人であるか、買ふ人であるかを考へて見れば解るのである。大部分は小作料を納めて後ち一ケ年の食料ある者少なく、寧ろ數より云へば買食する者の方が多いのである。米高は一部地主をこそ利益すれ、多數の小作人は却つて苦しむのである。斯る事を云はるゝ人は此の邊の實情を御存じないのであらう。

夫に考へて見たいことは米高は直に農民の生活を良くするか

と云ふことである。一概にそうとは云はれない、日本に於ては米が生活の基準になつて居り、米價が上れば生活費が上り、從つて諸物價も高くなると云ふ有様である、處が物價の指數は米價の指數より高い。即ち之は僅かの米價を上げても却つて多くの物價はより高いから結局農民の損失になると云ふことである。此の事實が呑み込めたならば決して勞働者と農民は爭はないのである。

猶ほ次に各府縣農會の生產費調査によつても明かなる如く、米價は少し位上つたとしても生產費に充たないのである。今日の勞働運動は正當なる勞働報酬を得るために戰ふてゐることを知るならば、農民が正當なる報酬をうる爲に少し位米價の上ることは、都市の僚友達が了解して吳れる筈である、自分は正當の勞働報酬を要求する、併しお前は其を要求するのは間違ひであるとは云はれない、此處にまた勞働者と農民の調和があるのである。

又勞働者と農民とが一致せないと云ふ人々はブハツリンは何うの、マルクスは斯うのと外國の例をすぐ其儘適用しやうとする人々である。我等も理論に於ては然うであらうと信ずる。併し世の中のことは理論通り行くものであらうか。理論の中にも例外があるのである理論の上から云へば工業勞働者の後に喘ぎ付いて行くべき筈の農民が、日本に於ては單に農民の問題のみとは云へ工業勞働者をリードしたことは世界の勞働運動史に未だ甞つてない處であつて、所謂日本の特種事情のある所以である。理論よりも事實は雄辯である、私は此點に就いて決して悲觀せないのである。那須氏の所謂尾が犬を振つた樣な現象であらうが、別に不思議がる必要もない、世の中に理論外の理論は澤山あるのである。

今日勞働者と農民は共に無產者であつて、地主資本家に搾取されてゐる點は同一である。故に共同戰線に立つべき點は多々あるのである。今は調和不調和を云ふべき時でない。又農民は保守的であり、工業勞働者は進歩的であり、此の兩者が一緒になつてゐることは保守を引上げ、急進を抑制し此處に初めて中庸を得るのであつて、別々になるより却つて良いと信ずるのである。其他色々述べて見たい點もあるが多忙の爲め時間がないので之で擱筆し漸く責を塞ぐこととする。（高松より歸途、屋島丸のキャビンにて 一五、四、五）

# 櫛田氏に答ふ

小泉信三

本誌所載櫛田民藏氏の拙稿批評の長篇は多大の興味を以て一讀した。作者の造詣と努力の跡は、充分其處に認められる。併し氏のマルクス擁護論其者に至つては、私は依然として一々不服であるのみならず、忌憚なくいへば、議論の混亂は氏の前稿（本誌昨年六月號所載）よりも却て多く、又此を補ふ爲めに用ゐられた幾多の警句の類は、却て議論其者を弱めて居ると思ふ。度々の事で讀者には御迷惑であるが、左に不服の重なる個條を列記する。

私が繰返していふのは、マルクスの思想には、商品の價格は其價値を中心に旋廻するといふ命題と、價格は價値から外れた生產價格を中心に旋廻するといふ命題とが併立して居るといふことである。此の兩命題は無論相撞着するが、左りとて、第一の命題を成り立たせなければ、第二の命題も成り立たぬ。其處にマルクス學說の根本的困難が在る。然らば價格は何故價値を中心にして旋廻するか、又價格は何故價値以外に中心を求めて旋廻するかといふに對して、前者は利潤率平均の爲めだと答へ、（マルクスはさう言明して居る）後者も利潤率平均の爲めだと答へる（マルクスはさう言明して居る）ならば、兩命題は正面衝突をして全く調和のしやうがない。さりとて、價値と價格とは、利潤率平均ある爲めに一致する。（マルクスはさう言明して居る）價値と價格とは利潤率平均なき爲めに一致する（マルクスはさう言明して

居る」といへば、これも同じく正面衝突である。そこでマルクスの爲めには、自由競爭が價値と價格とを一致せしめる條件となり、又價値と價格とを相離れしめる條件となつた。

河上博士及び櫛田氏は是に對して謂ふ。一口に自由競爭といつても、マルクスはこれを二つに區別して居る。價値と價格とを一致せしめる自由競爭は、同一産業部門内の競爭である。價値と價格とを相離れしめる自由競爭は産業部門間の競爭である。自由競爭が價値と價格とを一致せしめ、又其一致を妨げるといふは、毫も差支ないことであると。

私は對へて曰つた。價値と價格とを一致せしめる競爭は、同一産業部門内の競爭に外ならぬといふ解釋に對しては、マルクス自身の反對の言明を指摘することが出來るが、それを問はぬとしても、同一産業部門内の競爭といふものに價値と價格とを一致せしめる作用のある譯がない。同一産業部門内の競爭に依つて實現されることは、該産業の生産物が凡べて同一價格を以て賣買される、即ち一物一價の法則が行はれるといふことに過ぎぬ。此の「一價」と費用との關係は其處には全く說明されて居らぬ。價格を價値に歸着せしめるには、價格が價値以上に離れた場合に、供給の增加に依つて之を再び價値まで引下げる作用が行はれなくてはならぬ。外部からの競爭者の參加、資本の流入が遮斷されてゐるところでは、價値以上に昇つた價格は、何時までも價値を離れた儘に止まらなくてはならぬ。價格が價値以下に離れた場合も同樣であると。而して私は、「試みに資本の流入を待たずして、生産量は如何にして增加せられ得るか」を考へて、結局それは不可能だと言つた。今櫛田氏は私に反對して、資本の流出入が遮斷されてゐても、供給量は需要に應じて增大し、價格を價値に一致せしめなければ已まぬと主張するのである。

櫛田氏の第一の論點は、全くの誤解に基づいて居る。私は言つた。供給を增加せしめる爲め、「先づ

を延長するといふか。然らば、搾取率即ち餘剩價値率の變動を如何にするか。」櫛田氏は何故か此の「搾取率即ち餘剩價値率の變動」を搾取率の減少と解して、私の說の不合理不可解を痛論した。不可解の筈である。私が變動といつたのは增加の意味であつた。私が變働の二字に增加と割註しなかつたのは手落ちかも知れないが、勞働時間の延長に依つて餘剩價値率が減少するといふ說は、夢にも想像出來なかつたのである。私に手落ちがあつたとしても、櫛田氏の輕卒も亦た甚しいではないか。供給增加の爲め、一產業に於て勞働時間の延長が行はれれば、搾取率が變動（增加）して、搾取率を均一なるものとするマルタスの前提と合はなくなる。それを「如何にするか、」と私は謂つたのである。而して自由勞働者あり、從つて勞働者の轉業轉職の自由あるところに於ては、搾取率の均一は理論上至當の前提たるものである。

次に櫛田氏は曰く、勞働時間の延長は供給增加の唯一の方法ではない。まだ其外に方法はある。「從來價格の關係から費用を償はぬため、前生產期間に於て、生產から退却しなければならなかつた資本家もあり、從つて、ねか(さ?)れた生產手段もあり勞働者もある。」それを動員すれば好いと(一二一頁)。是に對する答へは簡短である。曰く、需要の變動は、「ねかれた生產手段……勞働者……」の有無大小を顧慮しては居らぬ。需要の增進は、此等の生產手段、勞働者の動員された後にも起り得るものである。

櫛田氏は又曰ふ。價格が價値以上に騰貴した場合には、「產業資本の外、商業資本もあれば、生產に用ゐられたことの無い退藏貨幣もある。」是等のものが「物價の騰貴と共に何故に當該產業部門の生產資本として動員されないか」と（同上。此議論は櫛田氏の所說と却つて正反對の、――即ち價格と價値とか一致せぬといふ――言論を證明する。元

來今日、資本の流出入に依つて利潤の平均が行はれ、生産價格が成立するとはいふものゝ、事實既に一産業に放下されて一定形態を取得した資本が、其産業を去つて他に赴くといふことは、容易に出來るものではない。綿糸が下落し石炭が騰貴したからとて、紡績機械を直ちに石炭採掘に利用し得ないことは勿論である。故に利潤平均を實現する資本の流出入といつても、それは大體未だ何にでも變形し得る狀態に在る資本（其中には「商業資本もあれば、生産に用ゐられたことのない退藏貨幣もある」）が或産業を避けて、他の産業に投入されることを謂ふに外ならないのである。從つて、玆で商業資本退藏貨幣の利用を、所謂資本の流出入と別物の取扱をするのは、全く理由のないことである。さて其處で、特に注意を要するのは、此の商業資本や退藏貨幣が産業に投入されるものとして、果して何の産業に投ぜられるかである。いふ迄もなく、それは利潤率の最も高い産業である。價格が價値以上に上つて居るか否かは、當事者たる資本家の問ふ所ではない、資本家の問ふ所は、資本に對する利潤の果して幾何なりやである。價格が價値以上に離れても、是等の資本は必しも其處には投入されぬ。其代り、價格と價値とが一致してゐても、それに由て普通以上の利潤が生ずるならば、資本は其處に流入して供給を增加せしむるのである。故に商業資本や退藏貨幣の動員に依つて、供給の增加が行はれるといふのは好いが、斯くして價格の近付く先はといへば、それは價値でなくて生産價格である。價格が價値に近づくのは、價値と生産價格とが一致する、偶然の場合に限ることである。

次に生産力の增進に依つて、供給の增加、從つて價格と價値との一致は實現されぬかといふ問題がある。私は「生産技術の改良」による供給の增加も結局價値と價格との一致を保障するものでないと結論した。櫛田氏は難じていふ。なぜ「生産技術」とのみ言つて、「勞働組織の改良」や、「自然力の開發」を言はないかと（一二二頁以下參看）。答へていふ。

是等のものを排斥するつもりはない。「勞働組織の改良」により、又「自然力の開發」によつて勞働生産力が增進することに少しも異存はない。たゞ私はいふ、是等の諸原因諸事情による生産力の增進が、假りに生産物價格が價値以上に離れた産業にのみ恩澤を與へるものだとしても（さういふ筈はないが）、それは決して價値と價格との一致を保障するものではない。假りに「百人の生産者がいつしよに働く」とか、或は其他の組織の改善又は「自然力の開發」等に依つて、價格が價値を超過する或産業に於て、平均勞働生産力がn倍加したものとすれば、生産物單位の價値はn分一に減少するのである。無論生産力の增進に依つて供給量は增加し、從つて價格も下落する。併し價格の下落が價値の下落に追及するといふ約束はない。需要の性質如何によつて、價値と價格とは同じ間隔を置いたまゝ双方倶に下落することもあらうし、價格が價値に近づくこともあらうし、又双方共に下落しながら、二者間の距離が擴大されることもあるだらう。だから私は「……供給量が增加すると同時に價値も亦た下落するから、價値と價格との距離は却つて增大することがあるのを如何にするか」と謂つたのである。

價格を價値に歸着せしめるものは利潤平均を伴ふ産業間の競爭だといふことは、或機會にマルクスも明言してゐる。櫛田氏は此の、氏の解釋に不利な文言を、それが通俗的著作中に掲げられたといふ理由を以て、抹消若しくは無視しようとする（一三〇頁）。此抹消は同じ櫛田氏の、彼の富の Elementarform を譯して「それがぬけ出るところの形態」となすの大膽（本誌昨年十一月號八二頁參照）に更に一歩を進めたものである。失言でも誤記でもなく、充分の理由と聯絡とを有するマルクス自身の言明を、斯くマルクシストが抹消無視しなければならぬといふところに、マルクスの理論に存する根本的弱點が示されるのである。櫛田氏としては、寧ろ經濟史上の過去に、利潤平均に依つて價値と價格とが一致したといふ或る時代を求め[illegible]

たと思ふ。

過去の小生産者社會に於ては價値通りの交換が行はれたといふ櫛田氏の說明（一三四頁以下）は、――直言するが――會得に苦しんだ。度々いふ通り、斯る社會に於て、果して價値通りの交換が行はるべきやいなやを決するものは「一斯る社會に於て、自由競爭が行はれて、各生産者（勞働者）は充分打算的に合理的に行動したものと想像（想定）することを許すか許さぬか」である。而して此想定を許せば價値通りの交換は行はれず、又これを容さなければ矢張り價値通りの交換が行はれぬことは、度々說明した通りである。櫛田氏は此想定を許さない。曰はく「問題は他人の勞働でなしに、自己の勞働に依る獨立な單純商品生産者が支配する社會である。」さういふ社會では「大工が引合はないからと云つて、鍬と鉋とを以て急にお百姓になるわけにも行くまいし、百姓が引き合はぬといつて、鍬と馬とを以て急に大工になるわけには行かぬ。またさう云ふ社會ではその大工なり、左官なりは、座又は組合に團し、勝手なまねは出來ないのが普通だ。百姓には都會の手工業者のやうな強固な組合は成立たぬが、一時引合はぬとて滅多に祖先傳來の土地など賣拂ふものではない……」と。贊成である。歷史的事實は恐らく是れに近いものであつたらう。たゞ併し此記述は、茲でも再び「櫛田氏の所說と却つて正反對の結論を證明する。「櫛田氏のいふ通り、大工が引き合はぬからといつて「お百姓」に轉業することも出來ず、又お百姓も引き合はぬからといつて大工になるわけにも行かないとすると、大工又は百姓は、引き合はない儘、引き續いて其の引き合はぬ仕事を營まなければならぬ。即ち假りに農産物の價格が價値以下に離れても、それを引き上げて價値に達せしめることが出來ないのである。櫛田氏のいふ如く、座なり組合なりの「社會的障害」の爲めに、特に有利な生産業に對する他方面からの競爭者の參加が遮斷されれば、（例へばお百姓の大工

るが如く）其處に實現されるものは、獨占狀態である。正しく、それがあつては價値通りの交換は行はれぬとマル[illegible]がいつた、「契約當事者の一方をして價値以上に販賣することを得しめる……偶生的又は人爲的獨占」其者ではないか。櫛田氏は轉業が行はれず、利潤平均が行はれぬことを說くに急なる爲め、併せて價値通りの交換が行はれぬといふことをも力說してしまつた。そこで櫛田氏は、小生産者社會に於ては價値通りの交換が行はれたと力說する直ぐ其後に續けて、「マルクスが小生産者社會に於て價値と價格とが一致したと云ふのは、これ（自由競爭）を前提してのことである。」「只だ小生産者の社會に於ては、獨立な生産者が完全な自由競爭の下に生産すると云ふことは、むしろ例外的な事實であり、多くは獨占價格が支配した」と自ら自說を否定する斷定を下して居る（一三八、一三九、一四〇頁）。これはもと本誌昨年十一月號・第八五頁其他に、私の方で言つたことである

　私は又リカルドの比較生産費說（國際交易法則）を引いて、マルクスの誤謬を指摘した。此說が國際分業の利益を說明してゐることは勿論で、正に櫛田氏の言ふ通りである（一四五頁以下）。たゞ氏は、此說がそれと同時に果して私の言ふ如く、「彼の價値法則の例外を主張したものであるか」否か、「彼の價値說を立證しやうとしたのであるか、それとも[illegible]氏の云はるゝが如く、その例外を述べたものであるか」を疑つて居る（一五一頁）。私は答へる。先づ間違ひはないつもりである。リカルドオ自身も明かに The same rule which regulates the relative value of commodities in one country, does not regulate the relative value of the commodities exchanged between two or more countries. といひ、而して此點に於ける國內交換と國際交易との法則の相違は、資本流動の自由なると否とから生ずると、言つて居るから、[illegible]

私はマルクスが價格を舉げずにたゞ、需要と供給とが平均すれば、其作用は零に歸するから、此の零に歸する力では何物も說明できぬと說いてゐるのを難じて、無意義且つ不用意だと謂つた。此點に關する櫛田氏の反駁は、誤讀に基づいてゐるらしい。私は需給が一致する、せぬといふのは、一定の價格に於て然り又は然らずといふのであるべきで、全くの無用物でない限り、需給は高低何れかの價格で一致する。どんな價格を持つて來ても、どうしても需給が一致せぬ商品といふものはない筈だ、といつたのを、櫛田氏は、需給は如何なる價格に於ても（即ち有ゆる價格に於て）常に必ず一致するといふ意味に解したのではなからうか。若し然らば、拙稿（本誌十一月號）第九二頁から次の頁に亘る十二三行を連續して讀まれたなら、或は意味の通ずることもあらう。

櫛田氏は私を難じて、汝の說の如くならば、生産過剩もなく、恐慌もない筈だと言つてゐるが（一五三頁）、之は當らない。生産過剩とは、絕對的に商品が賣れないことをいふのではない。普通價格、慣習的價格、又は予期せられた價格、畢竟生産者の出費を償ふ價格では賣れないといふ丈けの事である。だからさういふ場合、價格は一旦は成立するが、永續しないで、やがて生産價格の方へ復歸して來るのである。

最後に價値人類犧牲說當否の問題が殘つて居る。此點に於ても櫛田氏の反對論は甚だ性急に失し、又富の泉源と富の獲得費用（生産の費用）との混同から出發してゐるやうに思ふ。此理は割合に簡短に說明し得るつもりである。

農夫が米を作る。イヤ米は農夫許りで作れるものではない。其外に土地がなければならぬ、空氣中の養分がなければならぬ云々。これが「自然も勞働と同じ程度に於て」富の源泉だといふ說である。これは無論斯う云つて差支

ある。併し乍ら、さて此の米を獲得するため、謂はゞ之を購入する爲め、「人間」の側から如何なる代價が支拂はれたかといふ段になると、自然の參加は「人間」に取つては犧牲でないから、問題になるのはたゞ勞働丈けである。そこで勞働生産力の增進といふことが、「人間」に取つて第一に望ましい、第一に利害關係あることゝになる。その勞働生産力の增進といふことは、反面からいへば、勞働費用又は必要勞働時間の減少である。故に「凡ての狀態に於て」生活資料生産のために費さるる勞働量、勞働時間といふものが、「人間」に取つて常に第一に利害關係あるものとなる。即ち勞働時間、勞働費用の減少といふものが——特定の資本家又は勞働者でなくて——「人間」(den Menschen)に取つて常に望ましいといふことが言はれるのである。私の引用した文句で、マルクスもそれを言つて居る。自然も勞働と同じく富の泉源たるものだとは謂つても、自然の參加も亦た「人間」に取つての費用である、犧牲であるとは、マルクスも考へてはゐまい。私の是認する價値人類犧牲說は、「勞働が富の唯一の源」だといふのではない。勞働が「人間」が自然から必要物を購ふ爲めの唯一の費用であり、從つて生産力の增減(勞働費用の減增)が「有ゆる狀態」の下に於て常に人間に利害關係あることだと謂ふのである。

私はマルクスが價値人類犧牲說を主張するため資本論を書いたといふのではない。又價値人類犧牲說がマルクス價値法則の解釋として全然容認し難きものであることは、再三明言した。(拙著「增補價値論と社會主義」四一一頁以下。)たゞ私は、「資本論」中にも、價値人類犧牲說を裏書し、少くもそれを容認する文言が見出されるといふ意味で、「in allen Zuständen……」云々を引用したのである。櫛田氏が引用したゴオタ綱領批評の書簡中に、マルクスが「勞働は有らゆる富の源泉ではない。自然も勞働……と同じ程度に於て使用價値の源泉である」といつて居ることは私も承知して居るが、それはそれで一向差支ないではないか。(四月九日)

# 微生物の形而上學

長谷川如是閑

一個の微生物がこゝで物を言ふのである。

私達微生物には無論意識がない。從つて形而上學もない。それを私はこゝで今、ある事柄について恰も意識ありげに論じるのである。それは丁度、昔の人が全く知識のない宇宙や太陽や人間の祖先や心やについていかに知識ありげに語つたのと同じだが、それを人間が形而上學と呼んでゐるのに倣つて、私は私の形而上學と呼ぶ。けれども私は、昔の形而上學が、宇宙や太陽や人間の祖先や心やについて多くの人間を過らせたやうに、私の形而上學が多くの私達の仲間を過ることのないやうにと祈る。

地上に於ける最初の生物は、私達の祖先であつた。地上に於ける最後の生物も亦私達の子孫であらう。

生物學者と稱する人間はいふ。今を去る六千萬年の昔、草も木も生物もない、たゞ一つの岩の塊のやうな地球に、最初の生物としてバクテリアが生れたと。それは即ち私達の祖先である。地球が岩塊そのまゝで、無論、生物の食料となるやうなものは爪の垢ほどもなかつた時に、バクテリアは、そこにも豐富であつた無機物をそのまゝ

取して、それを彼等の極微粒子的の身體のうちの化學室で、ソデイウム、ポツタシユウム、燐、マグネシユウム、カルシウム、硫黄、鹽素、窒素、炭素等々といふ、後の生物の生存に缺くべからざる所謂化學的生活要素に作りあげて、土中といはず水中といはず、あまねく地球の表面に繁殖して、いはゞ原始に地球そのものを肥やした小さい農民であつた。この顯微鏡的農民がなかつたなら、地球には植物も出來ず、從つて動物も出來なかつたのである。されば私の仲間のバタテリアは、あらゆる生物の親であつた。今日バタテリアがあらゆる生物を食ひ潰ぶしてゐるのは、その昔の産みの親の權利を主張してゐるに過ぎない。しかも此の執念深い親は、地上のあらゆる生物が滅びて元素に歸つた後も、それらの元素の化合した唯一の生物として、一番後まで生き殘らうとしてゐるのである。私は仲間を辯護するものではないが、然し、それも、親に當る人間達の全くやらうとしてゐないことでもない。

私達極微粒子の生命と正反對の形態と運命とを與へられたものは、地質學者といふ人間の所謂古生代中生代等に産れた爬蟲類やマンモスであつた。

古生物學者といふ人間の云ふところをきくと、今を去ること數百萬年の昔の世界には、身の丈數十尺の大蜥蜴のやうな怪獸や今でも動物中で最大の體軀をもつといはれてゐるあの象に幾倍した小山のやうなマンモスの類がのそり〳〵と徘徊してゐたといふことである。然るにこれらの巨大の生物は今日では全く地上からその影を沒して、僅かに古い地層の裡に埋もられたそのきれ〴〵の遺骨を堀出すことによつて私達に此太古の存在を想像せしめるに過ぎないのであつた。

更らに違つた形のマンモスの存在を語るものは歴史家といふ人間である。彼等は、世界の大半を同じ色に塗潰ぶした地圖の上のマンモスを私達に見せる。それは今から二千年足らずの昔に、その頃の世界の全部をたゞ一つの國家の形で現はさうした大帝國の出現を物語るのであつた。

然るにこの地圖の上のマンモスの運命も、氷河の融かされ〲の遺骨となつて掘り出される巨象の運命と共になつた。苔に埋もれた城壁の壞れや、掘り出された市街の殘骸やが僅かにその昔の、國家團體組織の盛衰を私達微生物に幻想せしめてゐるに過ぎない。

マンモスは滅びた。帝國も滅びた。生物の創造者は夫れきりマンモスを造らなかつた。歷史の創造者も再びローマを造らなかつた。象の形で今も殘つてゐるマンモスの最後の姿も、やがてその種の絕滅が暗示されてゐる。地圖の上のマンモスの末裔も、一つ二つと次第に地上からその影を沒しつゝある。

六千萬年の存在をつゞけて、今後もなほ生物絕滅の殿をつとめるであらう私達微生物の生命に比ぶれば、マンモスの生命は全く刹那的である。人間の目にも、恐らく神の眼にも入らない──何故ならば神はかつて私達のことを云つたことがない──私達微生物に無限の生命を與へて、小山のやうなあの巨獸に刹那の生命しか與へない自然の皮肉を、その巨獸や人間が、何といふであらうと思ふと、私達は微笑を禁じ得ない。

私達が何うして六千萬年の系統を保つたかは、私達自身だけがよく知つてゐる。凡そ私達ほど生存力の薄弱な生物はない。盆大の水溜りが乾上つても私達の何億兆が枯死するのである。豕大の小石が轉ろがつても幾千萬の微生物は壓殺される。バクテリアは日光をうけてさへ死滅する。かくまで生存の危險に曝露されてゐる私達に六千萬年の系統を保たしめたものは何であるか。

それは第一には「數」であつた。さうしてその數を作り上げたものは私達の身體の小さゝであつた。自然は畢竟一定の場席に外ならない。そこに塡め込まれる生物の圖體が大きければ大きい程、そこに入り得る數は制限される。そこへ

行けば、私達微生物の身體の小さいことは、定員を無限數にまで達せしめる。人間は私達を顯微鏡で見るといふが、の顯微鏡でさへ一ミリメートルの五千分の一より小さいものは見ることは出來ない。しかも私達の仲間にはそれ小さいものが澤山ゐる。尾籠な話だが、人間が一日の間に排出する排泄物と一緒に、人間の體外へ出て來る私達のバクテリアの數は千二百八十億から三兆三萬億の巨數に達する。地球が私達を容れ得る定量にいたつては、如何に自慢の文明人の數の觀念を以てしても、云ひ現はし得るか何うかわからない。出來ると思ふなら云つて見るがいゝ。

私達の繁殖の烈しいことは、その夥しい數を產まねばならぬ仕懸けに應じて素ばらしいものだ。もし現在の微生物が、全く何の障碍もうけずに皆無事息災に生殖し成育することをつゞけたなら、一年經たないうちに、天文學者といふ人間の想像し得る限りの空間全部を私達の仲間で塡め盡してしまうであらうと、ある人間は云つてゐる。

この數の威力で、私達は如何に自然や他の生物の殺戮を蒙つても、よく六千萬年の系統を保つて來たのだ。『ミノリテイー』の權利などゝいふ人間の形而上學を唱へてゐるものなどは、私達の數の事實を知らない獨斷者なのだ。それは事實なのだ。理想だとか觀念だとかロゴスだとかモナドだとか、プリンシプルだとかイズムだとか、そんな、考へさへしなければ、此世にありもしないといふやうなものではなく、誰れが何といつても、又人間や虎や豚やが如何に知らぬふりなしても、津波のやうに大地に襲ひかゝる事實なのだ。

小石が轉ろげても世界の全人口以上の私達の仲間が壓しつぶされ、一寸日が當ても、動物より今日までの人間の數よりも多い私達の仲間が死んでしまうといふ程、生存の危險に脅かされ通しの私達が、これほどの數の威力で常に世界のあらゆる生物をあべこべに脅かしてゐることが何うして出來るかも亦私達だけが知つてゐることだ。

[illegible]のだ。私達の生活經驗の眞髓だ。私達は六千萬年の間あらゆる諸

[illegible]で毎日に食べてゐるのである。人間の[illegible]間に、その外に群がるあらゆる生物の裡に、何うして生存の道を見出すかについては、私達の方が人間よりも遙かに勝[illegible]である。

人間は今だに、何うしたら最も人間らしく生き得る道を見出し得るかなど〻白髪の生へた連中までがまご〳〵してゐる。私達は、微生物らしく生き得る道などはとうの昔に見出してゐる。人間のやうに書物によつてではない。無數の仲間を犧牲にした尊い經驗によつてだ。

始めは、大地が私達を拒んだ。私達は生物である、食物さへ與へなければ私達は決して生れまい、生まれても育つまいと思つた大地の思わくを裏切つて、私達は鐵鑛の間から生れて金くそを食つて成育した。あらゆるものは私達によつて生きながら、私達の種を絶やさうとして、しまひには何物も私達を根絶やしすることが出來ないことを知つたが、私達を虐待することに變りはなかつた。

私達は決して根絶やしされない。日光は私達の仲間を殺ろすといふ。それはうそだ。私達の仲間の紫バクテリアの群にスペクトラム光線を射し込んで見るがい〻。私達の仲達は、次第にその分析された光線の中の、赤外線の下に、大部分集つてしまつて、少しが橙黄色の下に集るが、他の色の光線は絶對に避ける。これはそのバクテリアのもつ bacterio-purpurin といふ染色體が、丁度木葉が綠素によつてするやうに、赤外線の働きによつて、二炭化酸素を榮養として吸收し酸素を放出することによつて生存するためである。つまり私達にも自分の榮養に必要な光線があるのである。私達の仲間は光線を要しないのではなく、人間の眼に見へない光線を利用してゐるのである。私達が物の影に隱れるのは、その物によつて自然が分析してくれた特殊の光線だけを選んで、無暗に暑苦しい光線を避けるのである。

差すのと少しの變りもない。

落語家といふ人間の話す昔の床屋の話に『ぶせう床』と題するのがある。そのうちで次ぎのやうな會話が取交はされる。

親方『早くその瓶の水でお客様の月代をしめせ。』

下剃『親方、でも此の瓶の中には一杯ぼうふらが浮いてゐますぜ』

親方『馬鹿！　孑孑なんか、瓶の椽を一寸叩けば皆沈んでしまうわい。』

小僧の拳が瓶の椽を一寸つと叩けばぼうふらが皆沈んでしまうのは、危害の警報に對する孑孑の反應で、氣象臺の赤玉によつて沖の漁船が岸へ舟を返すのと同じである。小僧が瓶の椽を叩いたつて孑孑に何の危害あるわけではないが、しかしそれを平氣でゐれば、孑孑はやがて小僧に掬ひ上げられて、その掌とお客の額との間で摩り殺ろされてしまはねばならない。私達微生物は自分に直接利でも害でもない刺戟でも、それが近い將來の又はつひ近所の、利益か危害かを暗示するものであることを豫感して、直ちにその刺戟に反應するのである。人間がその刺戟に『代表的刺戟』といふ名をつけた。その刺戟自體は意義がなくともそれが何かを再現してゐるといふのである。人間の所謂先見の明とはつまりこの代表的刺戟に反應する働きに外ならない。私達微生物は立派に先見の明をもつてゐる。

一體人間が私達を蔑げすむ理由は、私達には人間のもつてゐるやうな、意識や言語や思想やがないといふのである。

成る程私達にはそんなものはない。けれどもそれらのものは人間にとつて何の役をするものであるか。如何に意識や言語や思想やがあつても、たゞそれが意識にとゞまり言語にとゞまり、思想にとゞまつてゐたら、それで人間が何うなる

アがゐる。片ッ端からひねりつぶせ！』と叫んだり、『細菌とはかくの如きものたり。』と莊大な書物に[illegible]語で書きつらねたりするだけだつたら、私達は、人間に利用さる虞れも、殺ろされる虞れもありはしない。そんな意識や言語や書物よりも、何も云はずに、私達の棲んでゐる野菜や肉を煮たり燒いたりする、意識のあるとも覺えないやうな山出し女の方が、私達の生存にとつて遙か恐ろしい。何故ならば、その女は意識はしないが、『行動』をしてゐるからである。

しかも、その行動なら私達が六千萬年の間立派にやつて來て、さうして立派に發達させたのである。私達はその長い年月の間、たゞ行動だけで生きて來た。然し人間だつてさうなのだ。人間に今のやうな立派な意識が出來たのは何時頃のことか人間自身さへよく知らないらしいが、しかし大凡二三萬年此の方だらう。しかも、その前までは人間は何百萬年の長い間、言語も思想も哲學もなしに生きて來たのだ。そんなものを持たないために人間が滅びるものなら、人間はもう今から百萬年も前に全滅してゐる譯だ。

人間だつて意識や思想やから産れた生物ではない。やつぱり特殊の『行動』から産れて來たのだ。思想や意識やは、人間が産れることに何の足しにもならぬのみか却つて妨げになる。『想ふ』といふことだけが戀愛の全部だつたら人種は絕へる。大ギリシヤの閑散階級のやうな、舊ロシヤの貴族階級のやうな、萬一居なくなつても全人間の生活に少しも差支ない人達は、結局もう産れて來なくても、困るのは當人だけで、當人も産れて來さへせねば困りもしまいといふので、そこではプラトニツタ・ラブが考へられ、絕對貞操が唱へられたのだ。だから意識も思想も尙更ら役に立たぬことはないが、それは殖やす方に役立つたのではなく減す方に役立つたのである。

意識は發達した、思想は進歩したと人間達はいふけれども、發達し進歩したのは、結局行動に役立つ科學のそれだけではないか。行動に役立たぬ思想は何千年たつても、私達微生物の眼からは一向進歩したとは思はれぬ。哲學は數千年前の印度やギリシヤに於て既にありつたけの代物が陳列されてしまひ、後の人はたゞそれを置きかへたり塗りかへたりしてゐるに過ぎない。孔子の敎へた思想は、三千年前のまゝに殘され、たゞ多くの人間の手垢で黑光りに輝いてゐるばかりである。それは如何に發達進歩しても、結局、私達仲間のたゞ一匹をさへ、殺しも生かしもするものではなく、それが人間の意識であるといはれながら、多數の人間の意識に上つても來ないものである。私達小さい生物が萬一さういふものをもつたら、行動のために緊張せねばならぬ全身の筋肉の一部を、それがために占領され、迷惑は忍ぶとしても、その部分の神經が『考へ』はするがちつとも動けぬといふことになつた日には一大事である。私達は行動だけで生きてゐることを幸ひと感じてゐる。

然し、意識や言語や思想やがもし、『行動』のためになくてならないものだつたら、私達は意識のないことをどんなに悲しいと思ふか知れない。行動のためになくてならない意識、それは人間が科學的意識と呼んでゐるものだ。これだけは私達も羨やましい。私達が幾萬年で覺へた經驗の或るものを、その意識のおかげで子供が産れてから成年に達するまで短い年月でもつと完全に覺へてしまふ。生れた赤子は、原始人と同じ白紙の人間だ。然るにその原始人が數萬年の間に得た文明の經驗を、二三十年で覺へてしまふ、それが人間の發達した理由だ。さうしてそれは全く意識のおかげだ。もし私達微生物にそんな能力があつたら、私達は、久しからずして、洋服を着て、デパートメント・ストアで買物をし、ダンスを踊るべき運命にある事、維新當時の日本人と異ならないであらう。

み[illegible]達は、意識の形でなしに行動の形で心得てゐる。が私達が萬一それを意識するに至れば、さうして人間のやゝな一意識的』態度といふものをとるに至るとすると、そこに一大危險を生ずる虞がある。何となれば人間は、『小僧が瓶を叩くは危害の近けるなり。』といふ事實を、一つの命題といふものにして、それを自然の事實から隔離させ、人間の頭の中に湧き出た『眞理』といふものに變性させる。それはちよつとも差支ないことだが、いけないのはそれからだ。すると人間はその眞理を自分の頭の奥に祭り込んだ祭神として、ひたらその祭神にいつき奉ることを以て、人間の生活の要諦であるとする。生活とは、頭の裡の意識の神を祭る儀式であると人間は考へる。

尤も强ちそんな人間ばかりもない。本居宣長といふ日本人は『道とは物に行く道ぞ、その外に道といふものはなきぞかし。』といつてゐる。しかし多くの『意識』的人間は、道といふ意識の祭神と合一すれば、人間の生活の目的は達した。そこですぐに死んでもいゝと、諦めのいゝ行路病者のやうなことを考へる。

孑孑がさうなつたら大變だ。彼等は屹度『小僧の瓶を叩くは危害の近けるなり。』といふ文句をラテン語に反譯して、その文句を意識の奥の祭神の前に三唱することによつて、孑孑の道は完成された。小僧に汲みあげられて、摩りつぶされても些の遺憾なしと觀念するに至るであらう。從つて小僧に叩かれた時は、それでも本能のおかげで下へ沈まうとするではあらうが、しかしその意識的孑孑は、すべての孑孑に一番遲れて行動することを得意とするであらう。

私達微生物は、人間と意識を爭つてゐたら、恐らく今日まで生存は出來なかつたであらう。その爭ひに勝たうとすれば私達は科學的意識をすら、行動のための叡智ではなく、思惟のための叡智であるとして、私達も人間同樣、水の化學的成分を知るそのことが、水中に棲むこと以上に私達の生活の目的に適するものであると考へ、陸に上つてその眞理を

考へながら乾死んでしまはうことを得意とするに至らぬとも限らぬ。所謂『意識』は私達にはけんのん千萬である。間の多數が意識を少數のものに打ち任せてゐるのは、私達微生物のやうに賢いものが人間の中にも澤山ゐると見へる。それは恐らくその多數の人間が意識を輕蔑してゐるのではなく、彼等は少數の意識者のやうな『意識』的態度をとれば生活が出來なくなるからであらう。それが眞實であらう。然らば、多數の人間が『意識』的に向上しないのは、私達がそれを避けてゐると同じ理由である。それで私達は、多數の人間が私達微生物に似てゐることを信じてもいゝと思ふ。

多數の人間が私達同樣に賢しこいといふことはつまり、私達の行動の法則か、殆んどそのまゝ彼等を支配してゐるといふことである。私は人間のことは分らない。――人間自身だつて分つてゐるか何うかわからない――けれども人間のいふことを少しばかり聞いてゐる。で彼等人間か自分自身について、恰もそれが天から彼等だけに惠まれた意識の賜物であるかのやうに語つてゐる、人間特有の行動といふものについて、如何にそれを私達微生物でさへもつと上手になしとげてゐるかといふことを語つて見たい。

人間は、私達微生物のもつてゐない意識といふものを持つてゐるばかりでなく、その意識には自然の意識と規範の意識とあつて、たゞに『ある』ことの意識のみならず『あらねばならぬ』ことの意識をもつてゐると稱する。私達微生物は、たとへ意識をもち得たにしても、自然の意識は持ち得やうが規範の意識はもち得ない。何となれば、規範の意識

[illegible]なことは[illegible]ないかた、[illegible]人だが、時々違つた人格となつて現はれるやうなことは滅多になく、[illegible]

作用によつて行はれるのみならず、過去の環境から蓄積されたエネルギーの發揚によつても起り得る。だから私達微生物の生理狀態は、これを要するに過去の蓄積である。私達が動いたからと云つて、それは現に刺戟をうけたからだ、又現にメタボリズムが起つてゐるのと斷じたら間違ひだ。私達は外部の刺戟で動くばかりでなく、代謝作用で動くばかりでなく歷史的經驗の蓄積から作り上げた自分自身の內にあるエネルギーでも動くのだ。自己に內在する『絕對命令』で動くのだ。

私達は何の刺戟がなくとも行動するのだ。刺戟はたゞ私達の行動の方向を變へさせるだけだ。けれども、私達が刺戟の方へ向いて動いたり、それと反對の方に逃げ出したりするのを見て、人間が、それは屹度その刺戟が、私達を引つける力又は刎ね付ける力を私達の上に働かしてゐるのだと思つたら間違ひだ。私達はたゞ水が低い所へ行くやうに、自分の內部衝動で動くのだ。すべて私達も高等動物と同じで、決して刺戟で動くのではなく、刺戟が私達の內部生活に變化を起して、その新らたな自我が、新らたな行動を私達に起させるのだ。だから、私達の行動は、過去の歷史によるエネルギーの蓄積によつて動いてゐるので、よしどんな刺戟をうけたにせよ、私達の動力が過去の歷史によつて蓄積されてゐなかつたなら、丁度電力の蓄へられてゐない蓄電池の兩極を觸れ合はしたのと同じで、何の發動も起らないに定まつてゐる。運動も、運動の方向もつまりは經驗の綜合による私自身の內の生活過程が決定するのだ。たゞ人間のやうに、それを自我の自律などゝいつてゐないだけだ。

て動かないが、腹がへると無暗に動く。さうり蟲も栄養が缺乏して來ないと滅多に動かない。私達も[illegible]によつて動く人間は、私達には滿腹の自我と空腹の自我とあると笑ふかも知れないが、人間社會でも腹の空つた階級と滿腹の階級とは、全然行動が違つてゐるではないか。滿腹の人間は自分の身體を自分で動かさないで、他の人間の引つ張つてゐる車や、自動車などに動かしてもらつてゐるが空腹の人間は、自分の身體を無暗と働かしてゐる。滿腹の人の自我は座つたきりで、自我の絶對命令を發し、空腹の人間の自我はその命令に餘儀なくされて無暗に動く。それが彼等が空腹だからだ。だから絶對命令者は彼等をいつまでも空腹にして置かうとするのは彼等を無限に働かせるためにだ。

私達の自我は、私達の生理狀態によつて決定されてゐる。それを人間は唯物だと笑ふ。が人間の自我はもつと唯物的な愼狀態によつて決定されてゐるではないか。私達の自我を決定する生理狀態は唯物的でも確かに內的であるが人間の自我を決定する愼狀態は、何う好意的に解しても內臓の一部とはいはれぬ、如何にそれが彼等人間の生命にとつて內臓よりも重大な關係を持つものではあらうとも。

自我とは、私達微生物についていへば、行動の系統のことに過ぎない。一定の外的刺戟、又は一定の內的過程に應じて一定系統の行動を起す、その行動の形態が自我なので、それを起さしめるものは自我ではない。自我とは一つの形態であつて『本質』ではない。私達微生物に於ては、それを『生理的狀態』と名づける。だから、その時の生理的狀態の變化に從つて私達の自我は變化する。異なる生理狀態は異る有機組織を構成するものであるから、一つ釣鐘蟲でも、さうり蟲でもその生理狀態が變ずれば、違つた有機體となり、從つて違つた行動の系統――違つた自我――を持つこととなり、即ち違つた人格となる。人間といふ有機組織は甚だ複雜で從つて、私達のやうに全體の生理狀態が革命的變化を起すことは出來ないから、一つ人格が、時々違つた人格となつて現はれるやうなことは滅多になく、あれば精神病と

いふことになつてゐるが、しかし、私達のやうに時々變ることはなくとも、その行動の系統が違つて來て、そこに別な性格が出現することはある。『貧すれば鈍する』とはそれである。彼等は同時に幾つもの自我をもつとはいはれないにしても、自我の轉化は可能である。異なるそれぐ\の自我は、人間の間に於ては、彼等の好む組合、トラスト、ギルドの形で類をもつて集つてゐるが、如何なる人間の自我も、その組合の何れかに絕對的に本質的に固着せしめられてゐるのではない。彼等はその生理狀態の變化によつて行動の系統に變化が起れば、從つて自我の意識に變化を生ずる。ロシヤの貴族ブルジョアの自我は、日本の大道のパン賣りの自我に早變りする。人間もそこに至つて、私達微生物と少しも違つた所はない。

人間は私達に意識や叡智のないことを憫むが、私達は人間が、それらのものを徒りに晴れがましく飾り立てるのを笑ふ。

私達だつて、意識や叡智をたゞ人間の持てゐるやうな形でもつてゐないといふだけで、人間に意識や叡智の役をするやうな働きは私達微生物だつて持つてゐる。それを私達の世界では、『生理狀態の法則』と呼んでゐる。

生理狀態の變化には一定の法則がある。元來生理狀態には二性ある。一つは代謝作用によるそれで、今一つは刺戟によるそれと、內的エネルギーによるそれとだ。前者はメタボリズムの法則によつて變化するのだが、後者は特殊な變化の法則をもつてゐる。

私達はある刺戟を受けると先づ甲の狀態をとる。がその刺戟が續くと、次ぎに乙の狀態となり、更らにつゞけば丙の狀態となり、尚ほ續けば最後に丁の狀態となる。元來、生理狀態には、[illegible]

生活過程が進行するのであるから、そこに[illegible]が生じ、それが運動を起さうとする。そこで運動が起ればその生理狀態は破られるのであるが、直ちに運動が起らない時には、引續き第二の狀態に移り、更に第三第四と移つて最後の行動が起る。例へば、らつぱ蟲に洋紅の溶液を觸れしめると、甲狀態が起るが反動とならずに、なほ刺戟が續けられると乙狀態に移る。なほ刺戟が續くと丙狀態に移つて纖毛を動かし、なほ續くと全身收縮丁が起る。所がそれを繰り返し〳〵行ふと、つひにらつぱ蟲は、洋紅にふれるや否や甲から丁に一足飛びに移つて行く。これは中間の乙丙の狀態への轉化が略されたのではなく、非常に迅速にそれを通過して恰も甲から丁に飛んでしまつたやうに見へるのである。

私達よりもつと高級の生物に於てもこの法則に異りはない。やどかりを、左右の出口の右の方を硝子で塞いだ箱に入れて水のある方へ追ひ出すと、先づ右へ行くがそれが甲狀態であるとすると、そこで硝子に突當つて、左の方向をとらうとする。それが乙狀態である。彼れはまた左へ向ふ。それが丙狀態で、最後に水中に飛び込むのが丁狀態である。が段々馴れると、始めから右に向ふので甲狀態と乙狀態と一つになつて、丙と丁とは一つになる。で私達の仲間のこの生理狀態變化の法則といふのは『ある生理狀態から他の生理狀態への轉化は、度數を重ねるに從つて容易となり且つ迅速になる』と云ふのだ。この法則は埒もないやうだけれども、人間のもつてゐると稱する記憶、聯想、習慣、練習といふやうな複雜な現象は、つまり此法則の延長に過ぎないのだ。私達微生物に於て、この場合に、記憶だとか聯想だとか何だとかいふ心理狀態を檢出することは困難だが、それは方法がない故であつて、それらの現象のないからではない。たゞ私達は人間のしてゐるやうにそれらの叡智を飾り立ることをしないだけだ。

私達の生活だつて、たゞ刺戟で動いてゐるだけではない。其の要素を數へれば、第一には現在の刺戟、第二には過去の

剌戟、第三には過去の反應、第四には內的變化、第五には今いつた生理狀態轉化の法則である。叡智的の人間の行動だつて恐らく此の外に出ることはないのだ。

それを人間は、叡智々々と囃やし立て、まるで昔の豪族共が農民の拓いた土地を奪ひ合つたやうに、叡智の奪ひ合ひをする。豪族が自分で土地を切拓くことは決してやらなかつたやうに、叡智の奪ひ合ひをしてゐる人間は決して、自分で叡智を創造することをしないやうだ。私達微生物の叡智は、それを持たなければ自分一人の命にかゝはるのみならず種の根絶となるのだ。だから叡智は私達の生死の鍵なのだ。それは人間の眼にはどんなに下らない叡智と見へるにしても私達にとつては、眞劍の叡智だ。人間のそれに對て見るなら、獨立當時のアメリカ人の叡智、フランス革命當時のフランス人の叡智、ロシヤの今の共產黨の叡智などが私達の叡智と同じだ。それを變つたら彼等は滅ぼされるのだから、眞劍の叡智だ。がそれを失つても滅ぼされないものがその叡智を實現しやうとすると、『叡智それ自體の眞理』を爭ふことによつて、その叡智の生存理由を彼等自らの手に打ち壞してしまう。でもそれを失つても滅ぼされるのでなければ構ふことはない。

人間は私達微生物が、目前の剌戟のみによつて動いてゐて、未來の意識によつて動くことゝしないと非難するが、前にもいつた通り、床屋の瓶の中の孑孑だつて先見の明をもつてゐる。私達の仲間でそれをもつてゐなかつたものは、今は一匹も殘らず死んでしまつてゐるのだ。たゞ私達は人間のするやうに、自分の先見の明で何の微生物の將來を豫想しやうともしないだけだ。

ると逃げ出すのは、それによつて[illegible]のではなく、明るい方には餌があるからである。ざうり蟲が(二)に移るのもそこに食物を見出すからだ。いそぎんちやくが暗いところにゐるのは明るい所は有害だからだが、突然暗い蔭がさすと、その影の來た方向へその突起を差しむける。これは影のすることによつて敵の來襲を知るのである。かやうな場合は皆直接には影響ない刺戟に對して反應を起すのだが、それは、その刺戟が何かを代表してゐるからである。で前にいつた通りそれを『代表刺戟』といふのである。

この運動を考へて見ると、無論始めは、その刺戟が前にいつた甲の生理狀態を起し、それから目的の刺戟が來襲して乙以下の狀態に轉化するのであるが、反復經驗の結果、甲が起れば直ちに最後の丁狀態に飛んで行動を起してしまうのである。いそぎんちやくは始めは影に對して何の反動も起さなかつたらうが、その影が來れば必ず次に敵が來たので、しまひには影を見れば角をふり起すに至つたのである。これが私達微生物の先見の明だ。

私達微生物は、書物やプロフエッサーの講義等で先見の明を授けて貰つたのではない。現實の刺戟からうける體驗だけでそれを教はつたのだ。だから學生が二三年机の前に居眠りをしてゐればそれを覺へてしまうやうに樂に教はつたのではなく、長い年月と大きい犧牲とを拂つて漸く覺えたのだ。この誠に低級の叡智を覺へ損じたものは皆犧牲者の側にい、しまつたので、段々と生き殘つて行くものは、先見の明のあり過ぎる位だ。人間には、『代表的刺戟』に對する反應なんて、そんな下らぬ先見の明なんかは無い。などゝ威張つたつてだめだ。日本の政府が無產政黨の瓶の縁をポンと叩くと、無產階級の孑孑は皆底の方へ沈んでしまつたではないか。人間中の微生物はさうして生きて行かなければならないのだ。

(完)

# 妖怪を捉へて見れば

山川菊榮

○銀座の暴行事件を『共産主義』のさきがけ、×××前夜なりとして濃厚な反動氣分の中に幕を開かれた第五十一議會は、中野代議士の『共産主義』宣傳事件を以てその幕を閉ぢた。この間三ケ月、代議士の質問に、政府委員の答辯に、『共産主義』は殆んど日毎に反復された。政府が『眼光紙背に徹した』白紙にも『共産主義』の文字を見出し、風の音にも『共産主義』の喊聲を聞いて脅えてゐる間に、野黨は更により以上鋭敏なる目と耳とを以て、某大學の教授連が全べて共産主義の宣傳に耽りつゝあり、與黨議員が共産主義宣傳の爲に金十萬圓を受領したといふが如き、恰かも防疫時がコレラ菌を撒布して歩くような新事實を摘發した[illegible]した共産主義の妖怪は今や東漸して帝國議會の内外を脅かし、與黨にとつては野黨の姿を借り、野黨に取つては與黨の姿を借りて出現したらしい。變幻自在な此妖怪を捕まへるつもりであつた兩派の手に、妖怪ならぬ生みの子の盜賊がつかまつたのは何としても笑止千萬な事であつた。

○勞働諸法案といひ、暴力取締法案といひ、出版法改正案といひ、關税案といひ、政府提出の重要な諸法案がすべて露骨に反無産階級的、反動的な性質を帶びてゐるにも拘はらず、野黨は民衆の聲を代表して、少くとも代表する假面を被つて政府の反動政策に對抗し、よつて自己の立場を有利に導く代りに、却つてより以上に反動的な態度を以て政府に臨み、その反動政策に一層油を注ぐことを以て能事終れりとして居るかの如く見える。そ[illegible]怖と敵意の競爭によつて自己の地位を固め、その強度によつて政權掌握の資格が定まるかの如く考へてゐるのは、まことに反動期の特徴的な現象であるといつてよい。

○此反動的傾向の競爭は、政界各派に亘る醜事の訐き合ひと相俟うて、最も露骨に、完全に無産階級の面前にブルジョア政治の本質を曝露した。贓品の奪ひ合ひから仲間喧嘩となり、秘密の曝露となるのは必ずしも食ふに困るコソ泥の間のみの慣例とは限られない。堂々たる大政黨同士の議政壇上に於ける獅子吼も摑み合でも、結局分捕品の分配方を中心にした×××の仲間喧嘩と何處が違ふだらう。ブルジョア議會を取殺すものは『共産主義』の妖怪よりも泥棒の仲間喧嘩であることを認めるまでに當局の『眼光紙背に徹し[illegible]なかつた[illegible]べきこと

# 「切支丹鮮血遺書」と長崎の港

吉田絃二郎

わたくしは故郷の春の山に立つてゐる。平戸から五島、長崎の岬までが一眸の下に見られる。わたくしは「日本聖人鮮血遺書」のことを思ひ出した。フランシスカン派の神父たちを載せて來たであらう春の海はかすかな白波を立てゝ煙つてゐる。呂宋の據點から一路直ちに海を横ぎつてラテンの文明が日本にその第一歩を踏んだのは今わたくしの眼前に髣髴として漂ふてゐる平戸の岬である。わたくしは子供のころから故郷の春の山に登るごとに日本の花らしくない花を見てゐた。花は天鵞絨のやうになめらかな肌をして眞紅に燃えてゐる。アネモネの一種であらう。平戸から志佐、小値賀、佐々など海岸の村々を傳ふてポルトガルやスペインの商人たち、フランシスカン派の教父たちは支那へ渡つたであらう。その途すがら今わたくしが立つてゐる草山を越えて行つたにちがひない。その旅の間に異國の人たちがあの草の花の種子を落して行つたのではないか。鮮血遺書の中には「二月四日の正午時頃大村領にて……彼杵といふ里に走り着く……奉行は道すがらルドビコの優しく美麗なる童顔に愛情を催し憫然さ遣方なく……」と書いてある。その大村や彼杵を抱いてゐる後の山も霞みながら見える。黒島の白い教會堂の高い塔が波の上に見えてゐる。黒島といふのはクロスの島である。クロスは十字架の意である。ラテン文明が遺して行つた修道院と嚴酷な修道者の生活は今もそのまゝにその島にのこされてゐる。二十六聖人が殺された立山の刑場は今どこいらになつてゐるか知らぬが、ともかく浦上や、筑後町や、大浦のロマン・カソリツクの高いお寺の塔からは朝晩しづかに鐘つ[illegible]ゐる。[illegible]はいつも懐かしい。浦上の禮拜堂は建てあけられた[illegible]、わたくしらの子供のころから森の中に埋まつてゐた。貧しい信徒たちは一枚の煉瓦を買ふ金ができるたんびに一枚の煉瓦を運んで行つた。そして何十年振りかでつい近年になつて出來上つた。禮拜堂の裏の山には殉教者の血で彩められた雜草の中に十字架が雨に打たれてゐる。彌撒かへりの信徒たちの胸の十字架、小鈴を首につけた牛、花賣り女、丘から丘へつゞくナポリ風な古い町、アーチ型の石橋の下に紡ばれたゴンドラ風な小舟、異人さん、あちやさん、朱欒の實、無花果の下の井戸、ホスピタルな心を持つた町の人々……殉教時代のラテン文明の面影を一番ゆたかに持つてゐる長崎の町はなつかしい港である。近代の功利的なアングロサクソンの文明を眞つ先に取り入れた横濱と比べて見ると[illegible]

# 拂底揃ひの劇壇

三宅周太郎

この二月の話だ。歌舞伎座で左團次が谷崎潤一郎氏の「信西」をやつた。その初日一月卅一日に劇文壇の多くの人が招待せられた。所が、見て來た人が不思議に私に同じやうな問ひを發するのだ。「ねえ、君、どうしてあんな古いものをやるのですか」と。

私が脚本係りとか、脚本の問屋であるかのやうにから聞くのだ。が、私も誰にも同じ答へをした。「さうでせうさう思ふでせう。が、今の脚本を殆ど全部讀んでゐても、扨て左團次に何を推薦出來るでせう。外に何がありませう。いや、何もないのであんな事になつたのでせう。」

人々よ。奇異に思ひ給ふな。實に今の左團次に何をやらしたらいいかとなると、殆ど何もないのである。吉右衛門もさう、菊五郎も大體に於てさうと云ふ外はないのである。實演用だからとの割引や條件をひいても尚脚本は明らかに拂底してゐるのだ。いい脚本、それさへ現はれたなら今の脚本書きは大ひでりの水のやうに劇壇の各方面から喜ばれるであらうと思ふ。

但し、脚本の拂底もひどいが一方役者の拂底もひどひではないか。歌、雁、梅、羽の次に菊、吉、猿、勘と此の四人があるだけでないか。しかも此の四人はもう皆四十才である。が、依然として若手と云へば此の四人、そしてそれに續く新時代は、劇壇では殆ど皆無なのである。

いい脚本生れよと云ふ以上に、いい新時代現はれよと云ふのが今の劇壇の役者への言葉である。十五年前あたりの[illegible]の文藝座、春秋座、そのどの一つもない今の役者。これではこれからの劇壇はどうなつてしまふのであらう。

役者は尠く、劇場の數は多くなる。で、役者は皆相當に報はれてゐる。で、此の樂々とした贅沢狀態なのであらうか。が、これではいつ迄たつても菊、吉、猿、勘である。考へやうによつては此の四人も大抵分つてしまつてゐる。で、若い役者の時代は實に今である。脚本家も實に今である。が、時は來てゐながら、そのいづれもが全く拂底してしまつてゐるのは何と云ふ神の惡戯であらう。

# ペンキ屋

中川紀元

ひとりで繪を描いてゐると門口へ來て、

「軒燈の字が消えてゐますが書き換えませんか」といふ者がある。この家へ引越して來てから二年餘りになるので、その時に油繪具で苗字を書いて置いたのが大分ハゲて來てゐるのだ。

「自分で書きなほすからよかつた——」と返事して斷つたが、いづれペンキ屋であらうがあゝいふことが商賣になるのかしらと自分は思つた。

先頃錢湯へいつたら若い男が湯槽に橋を架けて例の湯屋のペンキ繪を描いてゐる。からだを流しながら遠くから眺めてゐると、そのブラッシュの運びは仲々面白い。私は素人の氣持になつて感心してそれを見てゐる。見てゐるうちに空が出來る、雲が浮ぶ、波がうつ、帆船が走り燈台が立つ……實にうまいものである。男は美術家らしい身ぶりで時々流場へ下りて來ては大きなパイプを吹かせながらその繪を眺める。思はず長湯した私があがる時にはその銚子の海岸あたりらしい風景に、點景人物として砂濱に繪具箱を肩にかけて立つてゐる畫家の姿が描き込まれた。恐らく夫子自身の風懐であらう。

そこで私は考へた。あの男も私と同じく小供の時から繪を描くことが好きだつたにちがひない。或はあゝいふ仕事で得た賃銀によつて、家へ歸つてから「彼自身の繪」を描いてゐるのかもしれない。私は繪は賣れないが兎に角畫家として世を渡るもので、まあペンキ繪は描かずに暮しをつけてゐる。恐らくあの男も好んでペンキ屋になつてゐるわけではなからう。自分の繪ばかり描いて暮してゆける境遇を望んでゐるにちがいないと思つた。

着物を着て歸りがけに振返つて見ると、彼はまだセッセと描き續けてゐる。私は何となく武士は相見互といふやうな感情が胸にのぼるのを覺えて、一寸ホロりとした氣分になつた。

私はペンキ屋になるのはいやだがペンキ繪の持つ幼稚な正直さは好きだ。毒々しい色で描いた活動小屋の看板の劇畫も仲々興味のあるものだ。町はづれの「うみたてたまごあり〇」の下に描き添へてある鷄と卵の繪の愛すべき稚拙にほゝ笑まされる。

巴里にゐた頃はよく藤田嗣治君など、一しよに場末の古道具屋を漁つて無名(アンコンニュウ)畫家(パントル)の可憐なペンキ繪を探し出してよろこんだりした。そんなものでも一體に西洋人は繪具を塗ることはうまい。西洋人は仲々よく塗る。日本人の油繪は直ぐ描いてしまつて塗り方が足りないやうに思ふ。アンリ・ルッソウなぞはこの塗ることが隨分うまかつたと云はれてゐる。たしか大島だと覺えてゐるが畫家のことを塗師と呼んでゐるさうだ。よく油繪の寫生をする人が行くので、そればかり見てゐるため、繪は塗つて出來るものだと思込んだのであらう。これは一寸面白い話だ。

# 勞働者に告ぐ

椎名龍德

勞働者よ、君が一度其勞働の手を止めるならば、大小の機械は赤錆でおほはれ、豐穰の野は忽ちに荒廢の地となるであらう。若しも君が其尊い手を工場に下すならば、鐵鎚は動き機械は廻轉する。君の勞働の汗が落つる處荒野は拓かれて農作物でおほはれ、寂寞は幸福に變じ、野蠻は文明に變るであらう。

勞働者よ、生産の源が力ある工場と、健全な職工とを具有するにあるならば、君の二本の手は卽ち國家生産の大半を握るものである。凡そ何れの國家でも、國産の振興を念じない國民はない。特に現代では世界をあげて、他國の富を獲得するに專心して居る。新日本の建設には、君等の二本の手の働き、尊重すべき勞働の力に俟つ事が多いのである「人口は富源である」と云ふ言葉があるが、如何に名論卓說を弄するとも、蒼白い顏で手を拱いて居るならば、人口はむしろ貧源である。

勞働者よ、勞働運動が如何に上手に行はれるとも、君の生産の手を怠るならば、國産の減少となり、國家の貧弱を來すのである。君の手の活動量が、景氣不景氣の分岐となり、貧富强弱の差別となる。若しも一人が一日一錢宛、生産のために其勞働の手を餘分に動かすならば、一年には我國の生産の上に、約三億の金貨を加へる事が出來る。偉大なるは手の働きである。君の勞働の力である。

勞働者よ、君の勞働を資本家の富を增す爲めであると考へるでない。賃銀を得る爲である。と思ふ勿れ。君の生産は國外の市場で、他國の生産品と競爭して居る。君の生産の良否は、國家の財界に忽ち響きを及ぼして居る。健全な勞働者が國家の盛衰に影響する事を思ふならば、君の二本の手が如何に大切であるかを察する事が出來るであらう。

勞働者よ、我國の現狀は涙の出るほど行き詰つて居る。農村は荒廢し、工場は衰微して居る。多額の金貨は他國の生産者に奪はれて五億六億の輸入超過を示して居る。陸海に國防の備は完全するとも、國民の將來は將に破産に瀕して居る。今の時に於ては、只賴むべきは國民の勞働の力である。生産の手の働きである。

勞働者よ、尊い汗を以て農村を守れ、君の偉大な手の力で、君の機械を守れ。生産の戰に勝つて、幸福の都を迎へる事が出來た時は、必ずや國民の全部が、其尊い勞働の手を握つて感謝するであらう。

# 土と愛人

片岡鐵兵

Tは大阪の新聞記者であつたが、さうした都會的な職業に似合はなく、都會の生活が嫌ひなのだつた。冬が漸く去らうとする頃、彼は大軌沿線の或る土地に引越して行つた。そこは、大都會に隣接した住宅地といふ感じは少しもなかつた。それは、青々とした攝津平野の一部分で、工場の煙の代りに、朗らかな肥の匂ひばかりが青空の下に澄む田園であつた。

『此所なら、いつまでも住める。』

Tはよろこんだ。たゞ、彼の若い戀人が徹頭徹尾都會的である事實だけは考へない事にして、彼は土を讃美し、しづかな空氣を享樂する幸福のみに浸つた。

Tの家主は、土着の自作農だつた。年も四十をすぎた平凡な男で、それに百姓でもあるのだから、若いTなどゝ話の合ふ筈はなかつた。それだのに彼は、度々Tのところに遊びに來た。土を讃美するTは、いつも酒をもてなして、退屈な話の相手になつてやつた。シムプル！　ナイヴ！　Tの心臓は、さうした音にしづかな鼓動を打ち、顔はひとりでに微笑を泛べた。Tの微笑には愛嬌があつて、仲々人を惹付ける！　家主の自作農は、Tのことを大變やさしい人だと人々に觸れ歩いた。

或晩、Tはその家主を相手に酒を汲みながら、珍しく熱情を以て、長談議して居た。話題が偶々小作爭議と農民組合に觸れたからだつた。家主も次第に昂奮して、

『私は自作農やが、その農民組合たら云ふもんに、はいれまつしやろか』

『はいれますとも。そのわけは……』實際啓蒙的な意味だけで、彼は説明したのであつた。

その二三日のちだつた。Tは突然この土地を引拂つて市内に歸るやうになつた。

Tはその日、土地の顔役の訪問を受けたのだつた。顔役はTに二十圓の金を差し出し、『これ、手切金だす。』と云つた。あの家主の自作農との手切金だと云ふのであつた。Tはそれで萬事が氷解した。自分は善良な百姓を煽動して、不逞の民にしようと目論む者のやうにとられたのだらう。あの百姓に蟲が付かぬやうに早く手切金を……

Tは苦笑したが愛嬌だつた。二十圓は勿論突き返へして、彼はその日のうちに市内へ引上げたのだつた。

『まア！　土よりも肥よりも、矢張り愛の方が好かつたのね！　もう何所にも行つちや厭アよ！』と、都會的な彼の戀人は、ひとりはしやいで、彼を市内に迎へたのだつた。

# 論語の講義（一）

武者小路實篤

## 序

なぜ自分はかう云ふものをかきたくなつたか。それは本文を見てくれるとわかると思ふ。自分は孔子をなぜ尊敬するか又自分は孔子の言葉に不服な處はどう云ふ所か。

恐らく孔子を尊敬するものも、又孔子に反抗するものも、又孔子を輕蔑するものも、共に僕の考へに不服をもつかと思ふ。

だが自分は正直になるより仕方がない。そして自分の學問の不足のために解釋ちがいのあるのを恐れもするが、自分は論語を正解したい人々は學者につくことをおすゝめしたい。こゝでは自分の云ひたいことを云ふ機會を與へてくれるものとして論語を撰んだのだ。自分の頭の出來、自分の人生觀、自分の生命、それ等が孔子及び孔子の子弟逹の言葉を見てどう動くかを卒直に示したく思ふ。

あとは本文を見てほしい。

## 一の一

論語をあけると第一に目にふれるのは次の孔子の言葉である。

「學びて而して時に之を習ふ亦よろこばしからずや。友あり遠方より來る亦樂からずや。人知らずしておこらず亦君子ならずや」

この言葉は今も昔も、人間が人間である限り通用する言葉である。一時代の言葉ではない、或る國、或る階級の言葉ではない、人間ならば誰にも通用する言葉である。かゝる言葉を自分は人類的言葉と云ふ。

人間は完全なものではない、いつでも學ぶべきものを多くもつてゐる、何萬年たつた所が人間は學ばなくつていゝと云ふ時代は來ないであらう。そして人間はいかに賢くなるとも、なほ賢くなり得る素質をもつてゐるものだ。人間が永遠に學ぶものをもつことは祝していゝ事實である。論語の第一に學ぶ時の態度を説きそれを祝福したことは編輯人の賢こさを示す。

學んでそれを生かすことはうれしいことだ。會得しそれを實行することはうれしいことだ。何處までも學び、何處までもそれを生かしてゆく、其處に人間のよろこびがある。このことを説明ぬきにして事實だけをすつぱりと云つてのけたところに手ぎはがいゝと云つていゝ。

中々かうすつぱりと人生に勇氣と希望と眞劍さを與へる言葉を何氣なく云つてのけると云ふことは容易なことではない。そして孔子は實にその呼吸をのみこんでゐることは、論語のいたる處で我々の感じて感心する所だ。孔子の言葉を覺えてゐた弟子達も頭がよかつたのだと思ふ。

友あり遠方より來たる亦樂からずやと云ふ言葉も、たゞ事實を云ひ切つた言葉でありながら、我々に希望を與へる言葉である。この世の中で自分の云つたことが正解されることは實に少ない。この世には人間は誤解されに來たやうなものだと思ふ時が多い。孔子も決して人々から理解されて許りはゐなかつた。恐らく最も理解されなかつた一人であるかも知れない。このことはあとで云ふ時があると思ふ。しかしさう云ふことを背景として友達が遠くからわざ〳〵來てくれることは喜びでなくつて何ぞ。思はぬ所よりひよこつとあらはれる知己のありがたさ。

はがゆい世の中に、一言一句ぴたりぴたりとわかつてもらへる人の出てくるのはよろこびである。この喜びを眞に知るものは幸であるといゝたい所だ。

次ぎの言葉は何げなく云つた言葉とはちがうが、はつ切り云ひ切つてゐる所、それも消極的な云ひ方でなく積極的な、進歩的な云ひ方の處、そしてまちがいのない事實を云ひ切つた所、孔子らしい言葉である。

「人知らずしておこらず、君子ならずや」

自分の眞價をいやが上に發揮して、人が氣がつかないでも平氣で自分の使命と信じることを果してゆく。さう云ふ人々を孔子は孔子らしい言葉で祝福した。いつになつても之等の言葉は死滅することのない生命をもつ本當のことを云つた言葉であることを、誰も否定は出來ないと思ふ。

## 一の二

次ぎに論語で出てくるのは有子の言葉である。有子は孔子の弟子としても大した人ではなささうだ。云つてゐる言葉も實感をぴたりと云つてゐるのではなく論理的に云つてゐる。そしてその論理も一寸不たしかだ。

「其の人となり孝弟にして上を犯すを好むもの少なく、上を犯すことを好まずして、亂をなすことを好むものは未だあらざる也。君子は本を務む。本立つて道生ず、孝弟はそれ仁をなすの本か」

「好むもの少なし」の表現の仕方は弱いと思ふ。ずるいと云はれても一寸辯解するのに困る「誰も好んで上を犯すのではない、やむを得ず論語の編輯者が、上を犯すことを好むものを非難する言葉のあとに、上にへつらうものを非難する言葉をもつて來たのは用心がいゝと云ふ人があるが、論語の編輯は中々考へてゐると思ふ。

この孔子の言葉は大した言葉ではないが本當であり、同時に孔子、及び孔子の弟子達は巧言令色の徒に隨分ひどい目にあつてゐたことゝ思ふ、君主の勢力が强ければ强いだけ、人々が獨立人になり切れる時に遠ければ遠いだけ、巧言令色は恐るべき武器である。笑つてすませることは出來ない。孔子の弟子達がこの言葉を武器として暗にさういふ徒をやつけて溜飮をさげてよろこんだことゝ思ふ。そのことはこの言葉が論語に二度出てるのでもわかると思ふ。

之も巧言令色をやつける言葉、又いましめる言葉としては中々要領がいゝ。有子にはかう云ふ言葉は出せまい。有子に限らず誰にも出せまい。孔子の表現法は一種獨特な所がある。それが何げなくつて中々印象が强い。

そして簡單明瞭である。

次ぎに曾子の言葉が出てくる。

「吾れ日に三度、吾身を省み、人の爲に謀つて忠ならざるか、朋友と交りて信ならざるか、傳へて習はざる乎」

この言葉は孔子程權威はないが、人々を反省させる力をもつてゐる。我々は心が何となく不安であり、淋しくなる時は、この反省の仕方を試みるのはいゝ方法と思ふ。心がおちつき安心してゐる時は、わざ／＼反省して見る必要もないかと思ふ。しかしかう云ふ點では佛陀の方はなほ徹底した反省法をといてゐると思ふ。今手許に本がないので例をあげ

るわけにはゆかないか）

實際反省ぐせのない人は面白くない。自分の行爲、心の動きを根本から反省して見て過があつたら率直になほすことを心がけることはどんな人間にとつても必要でないとは云へない。現代は反省の不足時代ではないかと思ふ。耶蘇も實によく反省の價値を知つてゐる。自分をよくする必要のない人間には未だ曾てお目にかゝつた人は古今東西に一人もあるまいと思ふ。

たゞ他人にばかり反省を強いて、自分は反省しない人間は人間のくずである。

自分は反省して悪い所はなほせないが、せめて他人だけはなほしてやらうと思ふのかも知れないが、蟲のいゝ考である。

## 一の三

今度は孔子は千乘の國を政めることをといてゐる。しかし自分にはかう云ふ言葉はぴつたりしない。政治はその時その時に應じて行はれるもので、孔子の時代と今の時代とは少しちがいすぎると思ふ。

ぴつたり自分に感じられない言葉は、ぴつたり感じることが出來るまであいまいな事、不たしかなことは云ひたくないので、ぬかすことにする。

次ぎの孔子の言も教訓的な臭があるが、孔子らしい所が出てゐるのでかくことにする。

「弟子は入つては孝。出ては則ち弟。謹んで而して信。あまねく衆を愛し、仁に近づき、行ひて餘力あらば則ち文を學べ」

御尤であると云ひたい處だが、さすがに條件つきではない。孝弟、謹、信、之等は孔子の好きな美德であり、今の

那の新しい連中の好きさうもない言葉である。しかし親を愛し、親をおろそかにしないことは美徳にはちがいない。孝と云ふのは何にも親のために自分の生命を歪にすることを奨勵する道徳ではあるまい。自分の主義、使命、天職を果すことに害のない限りにおいて親に孝行な人は自分は好きである。長者や先輩からいゝ處をとるのに敏なのは美しいことである。謹み深いことも、卑怯にならず、更に進む力を獲得するために役立つ範圍で美德である。信は勿論尊敬すべきである。あまねく衆を愛することが出來、仁に近づくことが出來ればそれは實に結構なことである。この努力は曾子の反省するものよりも大きい所がある。まづその精神を實行してそれから餘力があつたら詩書六藝を學べと云ふのも、主客轉倒してゐない。

だがあまりにまちがひのないのど、端的にぐつと入つてゐると云ふ處がないので、ぴたりと自分には來ない。來ない方がわるいのかも知れない。

次ぎに孔子の

「君子重からざれば威あらず、

「學ばば則ち固からず、

「忠信を主とし、

「己に如かざる者を友とする勿れ、

「過たば則ち改を憚ること勿れ」

と云ふ言葉がかゝれてゐる。この内で最後の句は一番尊敬してさしつかいのない言葉である。之が實行出來る人はたしかに君子と云つていゝ。

又學んで學究的になりすぎず、頑固にならず、自由自在にこれを生かすことが出來るのは君子と云つていゝと思ふ。

萬事に己にしかざるものを友として得意になりたがるのは小人であると云へるかと思ふ。君子は謙の内にも自分よりもすぐれた點を見出し得る人ととるのはこぢつけかも知れないが、さうとれば反つて面白いかと思ふ。

どつちにしても友にする勿れは少しひどすぎる。孔子が生てゐたら、それはかう云ふ意味で云つたのを意味をとりちがいされて困つたと云ふかと思ふが、どうか。

恐らく自分よりも馬鹿な人間のなかに入つて得意になつてゐるものを見て皮肉つた言葉ではないかと思ふが、少し孔子らしくない云ひ方だ。孔子がよし云つたとしてもあまりほめたことではないと思ふ。しかし自分よりもすぐれた點をもつ友を持つことをよろこびにすることは君子らしいことゝ思ふ。

少しとばすことにする。

「子曰く。君子は食飽くを求むる無く、居安きを求むる無く、事に敏しくして言を愼み、有道に就きて而して正すを學を好むと謂ふ可きのみ」

之には反省させる力があると思ふ。大して權威のある言葉ではないが、食ひ物、住居に贅澤なのは可いことゝは云へない。又言葉が多すぎて行ひがともなはないのは見ともいゝものではない。道にそむかないやうに己れを正してゆくことの出來る人こそ學を好む人と云つていゝ。この好むはきいてゐる。

少し話がちがうかも知れないが、自分も言葉が多すぎてあとで淋しい時が時々ある。自分を段々よくしてゆきたく思ふが、すぐ反撥的になりやすいのは自分の至らない處と思ふ。自分はあとで反省するが、つい言葉がすぎて謙が不足することがある。

最も人間がまだ出來上らない內は、いろ〳〵の點で反省を强いられるのはいゝことゝ思ふ。かつとするのはあまりほめたことではない。しかし自分の腹に思つてゐることを卒直に云へないで、あとで後悔することも少くない、言を愼むと云ふことも、他人の思はくを氣にして愼むのでは面白くない。むしろ自分の思つたことで、惡意のない時はすなほに云つてしまう方がよくはないかと思ふ。

日本人は言葉を愼みすぎるのは孔子の敎へをはきちがへたと云つてもいゝかと思ふ。

## 一の四

次ぎに子貢と孔子の問答が出てゐる。之は面白い。

子貢。「貧にして諂らはず、富みておごることがないのはどうですか」

孔子。「よろしい。しかし貧にして樂み、富んで禮を好む者はもつと上だ」

子貢。「詩に、切るが如く、磋くが如く、琢つが如く、磨くが如し、と云ふ言葉がありますが、こんな場合のことを云ふのですね」

孔子。「賜、お前も始めて詩が話せるやうになつた。お前は諸に往を告げて來を知るものだ。」

孔子がよろこんだ樣が目に見へる。貧富にたいする考は今と昔と隨分ちがつてゐる。

そして貧をたのしむと云ふことの內容も少しちがつて來たかと思ふ。だが生活が出來る範圍で士が貧をたのしむことは是認し、又ほめていゝことゝも思ふ。だが自分が興味をもつのは、詩の言葉と、その意味をぴたりと感じた子貢の言葉と、孔子の會心の笑とである。

實際二人とも胸がすいたことゝ思ふ。

そして次第に人間がみがゝれてゆくことはほめていゝことであり、又うれしいことである。そして、樂むとか、禮を好むとか云ふ言葉をつかふ孔子はたしかに、諂ふとか、おごるとか云ふ言葉をつかふ子貢よりもみがゝれた心の持ちぬしだと云ふことがわかる。

樂しむ以上の言葉をこのさい見出すことは困難と思ふ。又禮を知ると云ふ言葉以上の言葉をそのさい見出すことは困難である。頭のうごきが孔子は矢張りいゝと云ふことが之でもわかると思ふ。孔子が貧富と云ふものにたいする考へ方に贊成は出來ないでも、當時のこのさいの言葉として、口からすぐついて出た言葉としてすなほに見る時、子貢の感心したのも無理がないと思ふ。

次ぎに孔子の左の言葉が出てくる。

「人の己を知らざるを患へず、人を知らざるを患ふ」

之は最初の方の言葉、「人知らずしておこらず」と同じ實感から出た言葉である。之を見ても孔子の自己の眞價を認められなかつたことが如何にひどかつたかを察することが出來る。しかし他人の責任は他人の責任で自分の責任ではない。己を知つてくれないのは他人の責任であるから、自分で心配しても仕方がない。自分がわるいのではないことを心配するのは君子らしくない。孔子は己を知られなかつたことをはがゆくは思つたらう。あまり愉快には思つてゐなかつたらう。しかしそれは自分がわるいのではないと云ふことを知つてゐた。だから患へるのは馬鹿であると云ふことをよく知つてゐた。それに反して自分の方が知らないのは自分の不注意であり、自分の責任であり、自分の不明である。だから患へないわけにはゆかない。

他人の範圍のことを患へ、自分の範圍のことを患へないのは小人のくせであり、又自分達も油斷をするとその根性にとらはれやすいが、しかしそれは恥づべきことである。

自分の道德的責任と、他人の道德的責任とを混合しないことは、個人關係がもつれあはないために大事なことである。

こゝで「學而第一」の章は終つて「爲政第二」が始まるわけだが、一寸この機會に、言葉を愼むと云ふことゝ、禮について一言したく思ふ。

言葉を愼むのが大事なのは自分を馬鹿に見せないために必要のやうに心得てゐる人が、日本人にありさうに思ふが、それは云ふ迄もなく間違ひである。人間は他人に誤解されるために生てゐるものではない、眞價通りに見られることを第一に心がけなければならない。自分の馬鹿さを人に知らせたくない、買ひかぶられたい、それは卑怯な考である。言葉を愼むことが大事なのはそんな卑怯な心がけからでないことは云ふまでもない。言葉を愼むのは間違つたことを云ひたくないからである。嘘のことを云つて他人に迷惑を與へたり、不快を與へたりしたくないからである。又まちがつた考へを他人につたへたくないからである。言葉を惡用せず、言葉を善用するためである。自分達がしやべりすぎて後悔することは、他人の心もわからずに他人を勝手に惡評したり、自分が知りもしないことを知つた顏したり、自分が正だ信じもしないことを信じてる顏したりして饒舌る時である。それは他人に自己以上に見られたいためではない。自分の責任を重じ、眞實を尊敬するからである。空々しいことで爭ひを起したり、他人の感情を害したり、他人にまちがつた考をもたしたりすることは君子の恥づべきことなのは云ふ迄もない。それと同時に云ひたいことがあり、それに惡意が入つてゐない時に率直に思つたことを云ふべきである。罪責を愛することは安全第一をのぞむことより遙かに君子ら

じいことである。このことは孔子もよく知つてゐる。

禮は全體の秩序、調和にたいする尊敬から出るものである。だが社會の秩序が孔子の時と自分達の時とは隨分ちがう所があると思ふ。封建時代と今とちがふ以上である。だから孔子がとなへてゐる禮の形式は隨分かはつて來てゐるやうに思ふ。しかし禮は今でも大事である。人間相互が赤裸々につきあつて不快を感じなくなつた時は別であるが、當分はまだ人と人との關係に禮は必要である。禮の精神は今では相手を獨立人として見、相手の心、相手の神經、相手の自由、相手の人格を尊敬する所から起るものである。相手の生命、ひろくは人間全體の生命をそのまゝの姿で認め尊敬する所から發するものである。禮は心のものであるが、しかし我等が完全でない時、又他人を心から愛することが出來ない時、せめて禮儀だけは正しくすると云ふこともわるいことではない。

他人はどんな目にあはしてもいゝとか、他人に損させるとか、他人の神經を無視するとかは禮に背くことで同時にほめるべきことではない。虛禮は空々しいので困る、時に第三者の迷惑、中には相手の迷惑もかまはずに虛禮をつくす人があるが、愚かな感じをまぬかれない。又禮を奬勵するのはいゝが、自分に禮を強要するのは、禮に戾る行爲であることは云ふ迄もないことだ。

## 二の一

「子曰く。政を爲すに德を以てすれば、譬へば北辰其所に居て衆星之れにむかうが如し」

之は嘘だとは云へない。だが全然本當とも云ひ切れない。「北辰其處にゐて」も詩として見ては面白いし、孔子の時の譬へとしては學問上にも不都合はなかつたのだと思ふが、またかう云ふ譬へも科學的立場から否定するのはいゝことゝ

は思はないが、出來たら科學的にも本當の譬へをこの場合は特にとつて來てほしかつた。

しかし德を讃美する言葉とし、政治の理想をあらはした言葉としては大きく美しい。だがあきりきゝめのある言葉とは思へない。

又こんなことは孔子の言葉だから尊敬して聞く氣になるが、他の人が云つたとしたら、（この言葉なら他の人でも云へる）馬鹿々々しい感じを起させさうに思ふ。

だが本當に德をもつて政を行ふ人が出てくれたらと自分はそれをのぞむ一人ではある。だがそんな人間はゐるものか、ゐないものか、又政治と云ふものゝ性質が、そんな人の思ふ通りになるものか、どうか、それは疑問にしておきたい。

「詩三百、一言以て之を蔽はゞ、曰く思ひ邪無し」

この言葉は大きい。人間の本音には邪が無い。利害打算から邪が出て來る。本音からは邪は出ない。純粹な感情が出るだけだ。他人の思はくを考へず、自分の感情を正直にあらはしたものには邪はない。

本音のない處には詩はないのである。

「之を導くに政を以てし、之を齊ふるに刑をもつてせば、民免れて恥ぢ無し、之を導くに德を以てし、之を齊ふるに禮をもつてせば恥ぢ有りて且つ格る」

之は本當のことを云つてゐると思ふ。たゞ之を實行出來る人が少い。

今の多くの人は罰せられる元因をつくることを恐れず罰せられることを恐れる。見つかるのが怖い、見つかつても罰せられなければいゝ。圖々しくなる許りである。今の政治家の圖々しさはこの孔子の言葉[illegible]であることを示してゐ

る。いかに人目をくらまさうかと考へてゐる。皆自分のことは棚にあげて、證據を握つたもので、やつける方が都合のいゝものだけをやつける、やつけられる方も證據さへつかまらなければ、圖々しく出來るだけしやうとする。そして多數の味方してゐるものはどんなことがあつても罰せられない。そして少數の方は必ず罰せられる。罰せられたものが罰した人々の自分と同罪なことをよく知つてゐる。それでは復讐心に燃えても、自分が惡かつたとは思はない

自分が惡かつたことに氣がつかずに、心から恥ぢることは出來ない、心から恥ぢない者のおそれるのは制裁されることだけだ。だから制裁さへされなければどんなことをしてもいゝと思ふのは當然のことである。

彼等は自分のしたことは後悔しない。自分が見つかるへまをやることだけを恥る。そして見つからないでやる惡は傲りにさへする。

德で導かれたるものはそんなことはない。自分で恥ずべきことを知るから、自分が德に背き禮に背くことは心から後悔することが出來、そして自分で自分のかぢをとることを知り、そして自己完成の道に進んでゆく。

しかし德と禮とには感じのにぶい人もあり得るかと思ふ。だが存外、德をもつてふれると人々の心は感動するものである。

德については今の人はあまり感じがするどくない。第一德なぞと云ふものにふれたことのない人が多いと思ふ。ダイヤモンドよりもつと道傍におちてゐない代物だから。

德で導くと云ふのは道德で導くと云ふのとはちがうと思ふ。もう少しあたゝかみがあり、心の美しさの力が加はつてゐるものと思ふ。今の言葉で云へば愛にちかいものと思ふ。人德と云ふ言葉があるが愛で導くと云ふ方がわかりやすいかと思ふ。だが愛よりはもう少し嚴格な處があると思ふ。だがお目にかゝつたことがあまりないのではつ切りしたこと

は云へない。

だがわるい點を反省さして、その人の心のおちつきのわるい所をよく察し、温い心でそれをすなほに反省させ、反抗心を動させるやうな冷たい無理な所のないものと思ふ。そして人間同志のお互に尊敬しあふことを知つてゐる、禮を守つて間違ひを知らすことが出來たら、その人のよくなることは當然のやうに思ふ。そしてさう云ふ人は内よりよくなつたのだから自分の行動によい所が出來ると思ふ。

その次の孔子の言葉は論語のなかでも、大きな言葉の一つと思ふ。

「吾れ十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ひ、七十にして心欲する所に從ふも矩を踰へず」

之は人間の進歩の階段を示し、又人間の到着すべき最高を示してゐる。

學にこゝろざして十五年にして、獨立し、それから十年たつて惑はずにすみ、あと十年たつて天命を知り、六十で外界とよく調和し、七十になつて自由自在の域に達したと云つてゐるかと思ふ。何かでこの言葉は孔子がまだ七十にならない時に云はれた言葉で、之は孔子の理想をといたものだとよんだことがあつたが、七十前に云つたと云ふたしかな證據をつきつけられない限り、七十以上になつて孔子が云つたととる方が自然に思ふ。

自分は今四十二である。惑はずと云ふ域に孔子がやつと入つた齢である。自分の考がまちがつてゐない。自分の生活は之でいゝ。之が惑はずと云ふ意味と同じではないかと思ふ。自分はまだ惑はずの域に完全に到達してゐるものではないが、惑はずでは本當ではないと思ふ。天命を知る以上からその人の生命は明るくなりさうに思ふ。六十になり、七十になり、ついに自分のしたいことをして矩を越えないと云ふ、まるで天國のやうな境遇に達することが出來れば、

實に佛陀の涅槃の境遇と一致し、耶蘇の云はゆる父の「御心のまゝに生る」と一致する。人間の生活の最高峯にたつした、之等の人々は等しく、人間が到達すべき境地を示した人で、それは人間が自分の心の内の神に從順になり切ることを意味してゐる。孔子が不惑の時代から矩を踰へずまでの進歩の經路を三通りに事實によつてかきわけたことに、自分は感心するものである。

## 二の二

次ぎに孔子は孝について相手によつて四通りの答へをしてゐる。

孟懿子孝を問ふ。子曰く。違ふこと勿れ。

孟武伯孝を問ふ。子曰く。父母は唯其疾を憂ふ。

子遊孝を問ふ。子の曰く今の孝者はよく養ふことを謂ふ。犬馬に至るまで皆能く養ふことあり、敬せざれば何を以て別たん。

子夏孝を問ふ。子曰く色難し、事あらば弟子勞に服し、酒食有らば先生饌す。曾て是をもつて孝と爲さんや。

孔子は精神上の醫者として働いてゐる。だから人によつて適藥を與へるために少しづゝさぢ加減をしてゐる。違ふこと勿れに就いては孔子はあとで禮の大事な事を示してゐる。しかし家老でない自分達にとつては別に問題にしないでいゝと思ふ。之等の言葉は皆云はれた當人には適藥であらう。だが人類的な言葉ではない。大した言葉とは思はない。之等の言葉は孔子の不名譽には勿論ならないが名譽にもたらない。

孝と云ふものも之ではは(つ)切りして來ない。象の鼻をつかまへて見せたり、尻尾をつかまへて見せたりする類の處が

ある。勿論孔子は群盲ではなく、孝の正體を最もよく知つてゐた人と思ふが、この言葉は大したものとは思はない。こんなこと許り云つてゐるだけでは孔子を自分達は尊敬しないであらう。

だが次の言葉には感心しないわけにはゆかない。

「吾れ回と言ふこと終日、違はざること愚なるが如し、退きて其私を省れば、亦以て發するに足れり、回や愚ならず」

又孔子愚ならずである。

顔回は孔子の殆んど唯一の知己である。孔子の言葉を全部的に受け入れではみ出させない頭の持主だつたらしい。顔回が孔子より前に死んだことは孔子と共に我等は惜まないわけにはゆかない。彼が生きてゐたら、彼は孔子より一歩進んだ境地に入れたかと思ふ。少くも彼は孔子からとり入れたものを最もよく自分のものとして生かすことが出來た人のやうに思ふ。

この孔子の人物評は實に秀れてゐて、顔回の人となりや價値が一言ではつ切りしてゐる。中々かうは云ひ切れないものと思ふ。

## 二の三

「其以てする所を觀。其の由る所を視。其安んずる所を察すれば、人なんぞ廋さんや、人なんぞ廋さんや」

この孔子の言もよく見てゐる。

その人の行爲を見、その動機を觀察し、その滿足してゐる所を見れば、どの位の人物かがわかると云ふのは本當である。

又その人がどう云ふ時變節するか、しないかもわかるものである。

「故きをたづねて、新しきを知らば、以て師となるべし」

人間の知ることの出來るのは過去の事許りである。過去のいろ〳〵の出來事を知つて、それで未來のことを知り、これでやがて生れることを知るものは賢いものである。

多くの人は昔のことを本當には知らない。そして昔のことを知りすぎたものは、生れてくるものを知らない。過去に新しき村のやうな運動が失敗したから、今後も失敗するだらうなぞと云ふ人は、過去を調べた人かも知れないが、新しく生れてくるものを知らない人だ。人類が進歩するのは、故きをたづねただけでは駄目である。先覺者は故きをたづねて、新しきものを知り、それをいかに育てるべきかを知る、過去を本當に知ることもむづかしいかも知れない。だがそれを知つたゞけでは人類の生長とは緣がない。今後どうすればいゝかを知るものにして始めて師とするに足る。

過去の教をそのまゝうけて新しく生る力を失なつたものは師とするに足らぬ、人類の生長の邪魔物として役立つに過ぎない。

やがて堂々と生れてくるものを呪咀するものは過去に溺れて新しきを知らぬものである。又過去の隋勢で無自覺で生てゐるものは師とするに足りないのはわかり切つてゐる。すべて人の師とするに足る生た學問をした人間は故きをたづねて新しきを知るものであることは今も昔もかはりはない。本當のことを云つた言葉として尊敬していゝであらう。

次ぎに君子について孔子の云つた言葉が三つならべてある。

「君子は器ならず」

「子貢君子を問ふ。子曰く先づ其言を行ひて而して後之に從ふ」

「君子は周にして而して比せず、小人は比して周せず」

君子は一技一藝にひつかゝつて滿足するものではなく、自己の生命の全部的に生ることをのぞむものである。君子は又自分に出來ないことを他人にさせやうと思ふものではなく、自分が先づ實行して、その後それを主張する。君子は又、公明正大であり、あまねく人の生命を尊敬して、黨派根性にひつかゝらない。小人は黨派根性にひつかゝること今の日本の議員の如くにして、あまねく民衆の生命を愛することは出來ない。愛しやうとしないと云ふのである。孔子は今の日本、世界のでもいゝ、議會制度を見て來たやうな本當のことを云つたものである。

次ぎの言葉は自分はより尊敬する。實にぴつたりものを感じてゐる。

「學びて思はざれば則ちくらし
思ひて學ばざれば則ちあやうし」

之は別に說明をつける必要はないと思ふ。だが多くの人は本をよんで本當のことを考へるのを忘れがちだ、他人から教はつたことをうのみに許りしてゐると思考力は退化して、腦味噌が化石して動かなくなる。考へて許りゐて他の人からの教へをうけないと、一人免許で段々頭が傾よつて來て、偏人になつてしまう。

人間には學ぶことゝ考へることゝ兩方の能力のあたへられてゐるのは、兩方をつかつて本當のことを知るためである。

「異端を攻むるはこれ害あるのみ」

異端と云ふことが本當なら、このことは本當である。この攻むるが、攻究する意味であらうが、兩方とも馬鹿氣てゐる。眞理の火をたか／＼かゝげることが大事である。まちがつた考へにひつかゝるのは賢いとは云へない。

馬鹿氣た考へをしらべるのも、攻撃するのも短い人生には餘計なことである。更になすべきことがある。時々まちがつた考へのまちがつた點をはつ切りしたく思ふことがあるが、讀むのも馬鹿臭く、攻撃するのはなほ馬鹿くさい。くわしく自分の反對説を研究しやうとしたら一生棒にふるであらう。

學者には往々自分の生命を窒息させてまで勉强することをいゝことに思つてゐる人がある。自分の生命を生かすために學問が必要だと云ふことを知らない學者は、學者と云つていゝのか、本棚と云つていゝのか。

## 二の四

「子曰く由汝に之を知るを誨へんか、之を知るを之を知ると爲し、知らざることを知らずとなせ、是れ知る也」

この言葉を見る度にソクラテスの言葉を思ひだす。「自分は何にも知らないと云ふことを知つてゐるが、他の人は何にも知らないと云ふことを知らない。」

實際我々は知らないことをいつのまにか知つたつもりでゐる。子路（由）が特別にさう云ふ質だつたかも知れないが、十が十までこの言葉に耳がいたむだらうと思ふ。少くも我々は知らざるを知らざるとなすことを知らない時が多い。知つた風は見ともないものであり、その人のお里のはつ切りするものであり、頭の粗雜さを露骨に示すものである。

だが自分達は知らざるを知らずとすると同時に知らうとすることはいゝことである。知ることがまだ出來ないことをはつ切り知るものには進歩がある。知らないことを知つた風になつて安心するものは遂に本當に知ることは出來ない。

次ぎに孔子は子張が祿にありつくにはどうしたらいゝかに答へた答がのつてゐる。

「多く聞いて疑はしきを闕き。愼みて其餘を云へば則ち尤寡し、多く見て殆きを闕き。愼みて其餘を行はば則ち悔ひ寡し、言尤も寡く、行ひ悔ひ寡ければ、祿その中にあり」

このことは今でも嘘ではない。しかし儒教が稍もすれば消極的になりやすいのは、かう云ふ孔子の考へをはきちがへするかと思ふ。見聞をひろくする、學問を出來るだけする、そして疑はしい處は默つてゐ、あぶないことは行はない、確信のあるだけを云ひ又行ふ。それは大事なことであるが、疑ひあることを云ひ、又あやうきを行つて始めて他から攻撃をされたり、やつけられたりして、自分の人格が鍛えられると云ふともないことではない。殊に若い内は比やつけられるのを恐れるのは面白くない。あいまいなことを默つてゐるといつまでもあいまいですませなければならないことが多い。尤も孔子はわからないことを聞けるだけ聞き、又しらべるだけ調べることを奬勵してゐるのだから、この孔子の言葉は決して非難すべき言葉ではない。だがこの言葉を實行する時、臆病になつたり、卑屈になつては面白くない。

實際多くの人は饒舌りすぎ、出しやばりすぎる、自分のまとまらない意見をのべるのに急であつて、定見をつくるのに急でなく、自分の言行に節度がない。かゝる人は多くの人から信用もされず、よろこばれないのは事實である。しかし安全第一、さわらぬ神に祟なし、出る杭は打れる、なぞと引こみ思案になつてはいくら見聞をひろめても何にもならない。むしろ少し位いは出しやばつて、やつけられても、なほ進む意氣込がある方が、鍛えられて大成すると思ふ。祿にははなれるかも知れないが。しかし一番まちがいのないことは定見のないことを云ひも行ひもせず、定見のあることだけ云ひ又行ふことであるが、定見をもつてゐる人が今の時代に何人あるか。自分は知らない。

孔子は又魯の君主哀公に「どうすれば民は服するか」の問に

この言葉は景氣もいゝし、嘘とも思はないが、中々世の中と云ふものは思はぬことが起るものであ

ロシヤの革命皆勢ひの進んだものにすぎないから前からわかつてゐたとも云へるが、日本の未來を知るものがあるか。今のまゝでは何處へおちつくか。中々知つてゐるものはあるまい。たゞ知るだけでは困る、我等の努力で未來をよくしてゆきたいものだ。中々出來ないことにしろ。しかし元因結果をよく知るものは百世の後ちも知ることが出來るかも知れない。マルクスは少くも五十年か、百年後の社會を見通したと云へるかも知れない。今度は人間の生命がこわれた內から如何に立ち上るかを知るものが未來を知るであらう。人類の意志を知るものこそ千世、百世と雖も知るべしと云へると思ふ。だが何處からどんなことが起るかはわからない所に恐ろしさと同時に面白い味がある。

「其思に非ずして而して之を祭るは諂ふなり。義を見てなさゝるは勇なき也」

義を見てなさゞるは勇なき也は強い言葉と思ふ。其思に非ずして祭ることは自分には緣の遠いことの氣がする。しかし迷信はほめるわけにはゆかないのは云ふまでもない。

から一々言葉をかいて註のやうに說明してゆくのも藝がないと思ふが、先づ一通り孔子の言葉を見て、その後孔子の敎へが我等の生命に如何に働いて來たか、又働いてゆくかを見たく思つてゐる。次回位からもつと喰ひ入りたく思つてゐる。

爲政第二はこゝで終つてゐる。(二六、三、二八)

武者小路實篤著（最新刊）

定價壹圓六拾錢
送料十八錢

# 愛慾

## 第十五版

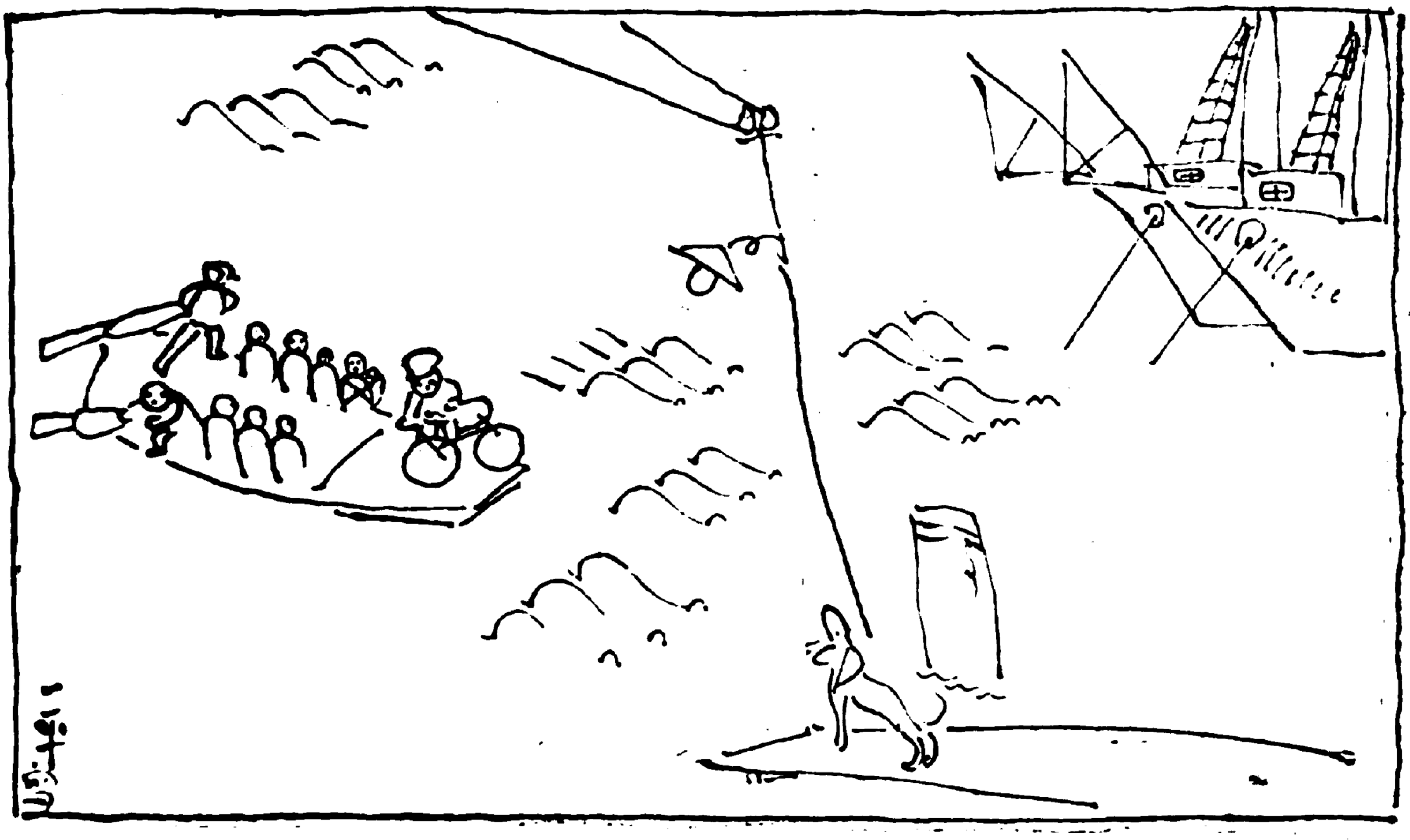
『愛慾』現るゝや文壇は滔々たる賞讃の爆聲を轟かした。其の平明率直なる表現裡の深刻さ、コロロホルムが伴ふ如き恍惚裡に潜む苦惱に讀者は醉はされ憑かれ戰慄に打たれて、此の靈感の前に絶大の嘆聲を發し、額づき伏するであらう。本書は實に我が文學史上の一巨星であるのみか、世界文學史上にさへ爛々放光する巨星である。さらば英人がシェイクスピヤを千載に誇り獨人がゲエテを冠して語る如く、我等も亦本書を掲げて我等の誇を世界に示すべきである。

斯かる國寶的文學を讀まざる者は慚愧せよ！必ず一本を備へて此の時代此の國の榮光を戴け！

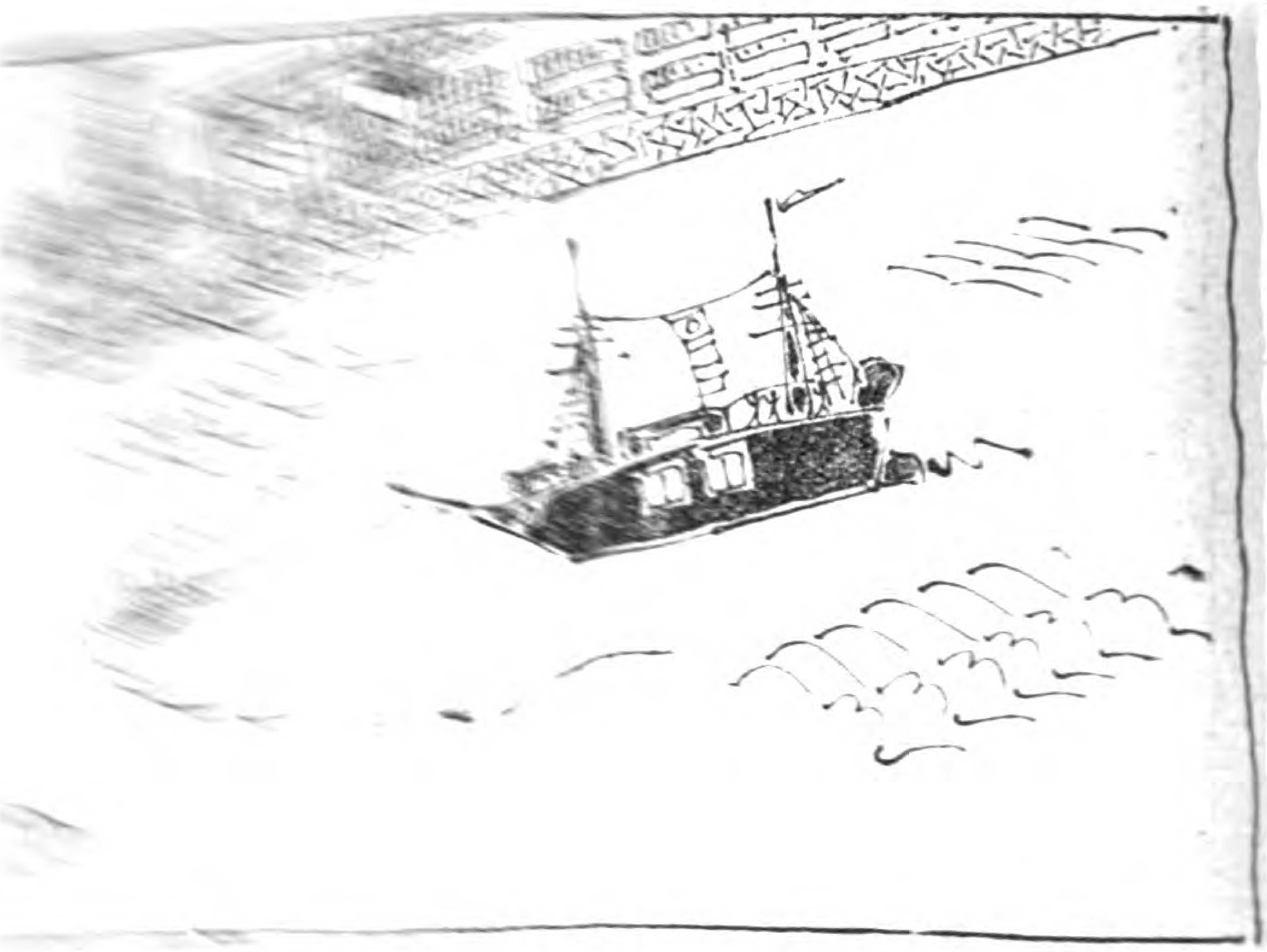
武者小路實篤著 第三の隱者の運命
定價壹圓九十錢
送料二十錢

武者小路實篤著 筆の向くまゝに
定價壹圓二十錢
送料十四錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二一番 改造社



東京風物歌その四
佃島は隅田の河口の子
佃島、住むものに見やする漁船帆柱も
追ふ二三の石崖に寄する夢を。
大川の東川水の雪のあかるさの
ゆりしれわたる帆船の帆影。
わたしぶねの白帆ちり、島の子は
春けふおなじ港にすでに遊ぶなり。
佃島の夫あるものの妻佃煮の
魚ゝ懐きその家佃煮問屋



潮風がそよ吹けば若き旅人
ゆらゆらゆれる佃島。
佃島は帆のかげに一つ[illegible]
泥土のかげに浮かぶ小舟。
あなたの人に人知らず寄つて
語りあかす[illegible]佃島。
江戸時代の人[illegible]
[illegible]

# 東西繪畫の相違及び現代油繪の東洋化と自分の仕事に就て

椿貞雄

こゝで東洋畫と言ふのは支那畫の事を主にしてある。又西洋畫と言ふのは油繪を指す。

第一番に東西繪畫の材料に就いて考へて見る事にしやう。

油繪は油繪具を使ふ事は衆知の事、ねつつこく、生々しく、重く、飽毒い感があり、鑛物質で化學的であり、冷めたさがある。使用法から言つても更に油を用ひる。

東洋畫の繪具はこの反對に輕く、脆く、ぼつそりしてゐて暖かい感じだ。天然産土や植物質の感じで何となく親しみがあり自然な感じがする、使用法でも「ニカワ」で一時煉るが主に水を用ひる。

(西洋でもハンエック時代には主に天然産の物を使つたと聞く。近代になるに從つて益々化學的になつて來てゐる。ことに東洋畫(日本畫)にも此頃この化學的繪具が大部分を占めてゐるが、自分の好みから言つて在來の繪具が好きだ。)

材料そのものから來る感じから言つても、畫面的効果から言つても右の違ひがある。(現代日本畫には殆ど油繪的効果を求めてある物が隨分多いが、この事に就いては又議論のある事だ。自分の考へから言へば、油繪具の効果をねらひ、それのみに腐心するのは愚であると思つてゐるものだ。日本畫(東洋畫)には東洋畫でなくては表現出來ぬものあり、特味を殺して邪道に油繪に近づかんとするは勞多くして効少なしと思はれる。(以上寸言)

畫布は一方は麻製で畫面に亞鉛化粉か何かゞ塗つてある。粗で固く重厚であるが。一方は絹や紙で薄く、繊細だ。ことに[illegible]
たその效果も、デ[illegible]

ンバスは又粗を利用してゐるし重厚で固い必要もあるのだが。筆は一方は粗で固く塗るには適してはゐるが描くには適してゐない。（西洋でもハンエック時代は東洋畫の様に線描で行はれてゐてその手法に似てゐる處があるが。近代に來るにしたがつて感能主義になり、色彩を主にする様になり東洋繪的手法は失はれてきて殆ど柔かい丸筆なぞや腕鎭なぞは使用されなくなつて來てゐる。描くと言ふより塗る方の感がある。）

東洋畫の筆は柔かく密であり、しなやかで彈力もあり、線描にも塗るにも自由自在である。

斯様に見て來ると材料の點から言つて油繪は物質的で化學的（知識的）で意志的に出來て居り、東洋畫は自然で素直で暖く、親しみがあり、より上等の感じがする。繪畫の心境（精神的な仕事をするに）によりぴつたりしてゐる感じがある。一方はパレットに繪具を出して使ふ、いたつて便利だが、一方は繪具を煉つたり、墨をすつたりしながら、尚畫境を深めて行く。これだけでも可なりの心境の違ひがある。

作畫法から言つても西洋畫は少なく共、一度は畫面全體を塗りつぶしてから描き起すよりないが、東洋畫は一筆を下した時に已に描寫がある。ことに紙なぞの敏感さと來たらない。白紙の上に濃墨を一筆下せば、すでに畫的要素となる、その微妙さと來たらない。「一筆をおろそかにせず」と言ふ感じが適切だ。一筆一筆畫が構成して行く氣味のよさ、花の咲くが如く、生れるものが自づと生れるが如き素直さがある。そこの心境が余程違ふ氣がする。絶對であるべき一筆が油繪では絶對でない感がある。失敗したら上から又描けると言ふ感がある。材料上損をしてゐる有様だ。誰でも藝術家は、心境を大事にするが東洋畫ではより強い感じがある。（レオナルドダビンチがモナリサを描く時の心境を先覺者の内に見たが、東洋的味がある。彫刻は勞働的でガサツでアトリヱがキタナイ事を言つてミケルアンゼロに面罵されたりしてゐる。シヤバンヌは大きい聲で歌を歌ひながら畫筆を運んだ事なぞも聞いた。しかし支那はもつと靜だ。自分も、色んな點で、自分の思つた様に環境を作る自由さを持たないが。心を靜かにし、畫境を深める爲めには、色々の方法を行つてゐる。そう言ふ點で、自分は實にエゴイストだと思ふ。生活そのものが、素直に自分の世界になり切り、眞に、自樂を得、悠々自適の境に入つたらしめたものだ。

油繪のやり方に似てゐる院體風（寫生畫）にしても主に力を注ぎバックなぞは生地そのまゝ殘して行つても、少しの不自然を感ぜず、寧ろ非常に生きる。風景畫にしろ、花鳥畫にしろ、人物畫にしろ全てに行はれてゐる手法である事は人々のよく知つ

てゐる處だ。大雅堂が「描かざる處、もつとも難し」と言つてゐる處だ。油繪で全てを描き込んで行つたより數倍の空氣が出、余韻が生れる。近代になつて油繪にも、この手法を試みられてある。フランス展なぞを見ても、この氣配がある。（西洋人が支那南畫、或ひは日本浮世繪からヒントを得たものと思はれる。）日本でも油繪に近來大いに氣韻靜動をとなへられてゐる事であり。南畫的手法を試みられてゐるが、材料上、どうも水墨の如く自由に自然には行かぬ。表現力と言ひ味と言ひ弱い、近景と遠景との間を生地のまゝ殘して置くと言つた大膽は出來ぬ。出來ても何だか不自然だ。或る感じが生れても面白い程度（繪馬とか陶器等の面白味）以上には行かぬ。水墨の心境とはあまりに差がある。しかし、いかなる人間が現はれて如何なる心境迄突込んで行くか不可解な事であつて、一方樂しみな事である。

油繪は油繪具、カンバス等の材料の生れる動機から言つても、性質から言つても（寫生、自然の再現、ありのまゝそつくり寫す）畫面全體を色でうづめて行くのは當然である。その上で精を盡して行く方法が自然である。

さて、そこで畫面上の効果はどうかといふに、油繪は變にテ

あつて一種の冷めたさがある。その重厚さも材料から ツシリさと違つて變に物質感がある。（これに就いては後で考へて見やう。）繪具を盛り上げる手法などもあるが畫面的に一種のキタナサがある。遠目にはいゝが手に取つて味はふにしてはガサツだ。（この盛り上げの手法は一種の筆の面白味で、東洋畫の筆がカスレたり、シミたりする筆の味に相當するものかと思ふ。盛り上げも筆の强弱から來る畫面的効果を生むものであるが、自分が東洋人なるが故に、東洋人潔癖がさう感じされるものと思ふ。）粗目のカンバスに色と筆致とで一種の畫面の美くしさを生む油繪獨特の効果もある。畫面の光から來る一種底光りする鈍重な畫面的効果もあるが。金屬的であり化學的な感じだ。佛蘭西展覽會や其他の展覽會で西洋の繪を見て、この感が深かつた。日本人の油繪と比較して見て、畫面の味は日本人の方が、ボツソリしてゐて西洋人程油つこくない。この事は違ふのが當然であるが、日本人の內に持つてゐる美感の現はれと見る事が出來る。又、油繪具を日本人味にしてゐる事は大いに喜ぶべき事と思ふ。西洋では繪が完成すると、ニスを塗るのが通例としてある樣だが、ニスを塗る事は尙、油つこく、金屬的にするものと思ふ。保存上仕方のない事と思ふが、出來る事なら塗り度くない氣がする。この間セザンヌの作品を見て、勞作の

なぞは曾に[illegible]

俗氣がなく、獨り平和境に遊んでゐる感じがあつた。後に[illegible]

する作かと思はれるが。あそこまで行くセザンヌの道程を人々

分が、今支那を[illegible]

てもすぐ感じる事だ。一方は技巧的（純藝術家）で、一方はより人格を重く見る。即ち內容主義だ。（この事は南畫文人畫が重く見られる樣になつた一つの理由であり、畫家の仕事が輕蔑された理由だ。この事は後にのべる。）一方は動であり、一方は靜。一方は力そのものの美、一方は力をかくした美。一方は現實的で、一方は非現實。（支那ぐらひ俗を嫌つた國はないだらう。）一方は自然を征服し、一方は自然を愛し樂しむ。書畫一致論。禪詩書畫一致論の如きは、支那にして初めて生れるものだ。獨り道を樂しむにはあながち繪畫でなくてはならないと言ふ徹底的な心を持つ必要はない。書や禪や詩の精神は畫の精神であつた。心境を樂しむに、書を書き度い時には書を書き、詩を作り度い時には詩を作り、畫を描き度い時には畫を描く、又は畫に詩を賦す。いつたい支那人はまことに自分の環境を惜み愛す。その爲めには實に自由な國民で、誰々筆を倣ふなぞと言ふ事は普通一般の事になつてゐて、何にもあれ自分の心を彌が上に樂しみ喜ばせる事に自由である。この事は悟道に徹してゐる爲めでもあらうが、支那人の持ち前の性質であらう。

いつたい支那の畫人はたいてい詩人であり、書家であり學者である。勿論僧もゐる。たゞ單に偉い學者であり、書家であり、高僧であつても、あながち立派な繪は描けない。畫は又特別の才能がなくては駄目だ。書畫一致論は南畫家と思はれるし、畫面に生かされたのもそうであるが、北畫家にあつても、南畫家とその點變る處なしだ。しかし北畫が正統な畫道であり、より純畫家である。で北畫家は畫家としての自覺もあり權威を持つてゐたものと思ふ。この事は他の適任者に調べて貰ふ事として。いつたい支那人は前にも言つた樣に、心境を獨り樂しむと言ふ氣持が强い。例へば支那人は、あながち「美くしきもの」でなくともかまはない。醜を如何に多く材料にしてゐる事か。勿論深奥に於て美化され切つてはゐるが。西洋でも醜を取り扱つてゐる繪も多くあるが。支那人の仙、幽、鬼には遠く及ばない氣がする。變に深く、凄く、恐ろしい感じがする。これ實に東洋の幽玄境であらう。支那人獨特の深さだ。

西洋はパットして派手、大ざつぱな處がある。現實的だ。無邪氣だ。味ふと言ふ點から云つても、日本人の樣な濃い味ひ方は決してしない。庭園、建築、（茶屋）茶の湯、或ひは能等。朝顔を人に見せるに一輪だけ殘して、他の全部を取り捨てゝしもうと言つた樣な、美の味ひ方は決してないであらう。

物象を寫す時に西洋畫では陰影や投影は重大な役目を持つてゐる。光線（明暗）を描く事によつて物象に實迫してゐる。

象を生々しく描く、人物なら血のかよつてゐる樣に、こつちで話しかけたら、すぐにも返事しそうに描く。林檎なぞは汁がしたゝれそう。いかにも實物の樣に描く事が出來る。生々した現實を描くには持つて來いである。しかし、先にも言つた樣に、油繪はあまりに物を本當らしく描くに容易であつた爲に、一番大切な精神をおろそかにした感がある。この間、支那でも陰影圓味や投影や遠近法が行はれた時があつたと未醒老人から聞いた。畫家の名前は聞き漏したが、その繪のある寺は凹凸寺とか稱されてゐる由。物が浮き出したら、奥の方へ引込んでゐる樣に見える繪が、その寺にあるので、此の稱あるとか。しかし一時は行はれたがすぐ廢たつた由。「支那人の氣に向かなかつたのだらう」と老人は言つてゐた。陰影を描く事はゲビらせる。俗にする。描寫の緊密を缺く即ち畫境を甘くする。俗をひどく嫌ふ支那人、眞迫するよりも、眞(精神)品位を主にした支那人がこの描法を好かなかつたのはよくわかる氣がする。支那人は飽く迄線描を主にしてゐる。寫生畫(院體畫)の樣に沒骨法のものに圓味の出てゐるものもあるが光線を描いてはゐない。線描で行つてゐる。リアルを寫すに適當な材料を持つてゐる西洋人より、寧ろ支那人の方がリアルを愛してゐる。決して陰影を描かないのは陰影によつてリアルの味を害ふからだ。その物の持つてゐる素描の嚴密な描寫は、數倍増つてゐる。支那が素描世界一と言はれるのは道理ともした事だ。西洋でも、彩描よりも寧ろ素描畫に優れた繪のある事は、大いに考ふ可き事だ

西洋でもヘンアイク時代は割に陰影を描いてない。ことに近代は陰影を描かずに線描で行くやり方が盛んになつてゐる。そこで尚更日本人が線描の妙を極めんとし支那の精神を生そうとするのは實に自然な事だ。その傾向に北畫と南畫とある。この論を進める前に、支那の北畫と南畫とに就いて少し考へて見やう。

北畫は支那の北方の山水、人物、風土、動植物等を寫し、南方は南方の自然、人生を寫したもの、北畫は北方に生れ、南畫は南方に生れたものとされてある。そして一方は寫實(形似)を主とし、一方は寫意(アイデア)を主としたものとされてゐる。一方は嚴しく寒く、透徹して居り、一方は平和、温潤とされてある。處で南畫の祖とされてゐる王維の繪を見ると、南畫と言ふより寧ろ北畫の精神を受ける。北畫家と南畫家と種別するのに、色々議論もあり人によつて違ふ由だが、ともあれ西洋でもリアリズムに對してアイデアリズムが起り、益々盛んにつた樣に、支那でも、北畫に對して南畫が起り、益々盛んにつて來たのと同じ系統だ。

アイデアリズム（南畫）は精神の表現法が直截であるが故にリアリズム（北畫）の形似描法よりも自由であり進んだものと言ふ事にされてゐる。

北畫（院體畫）が職工的とされて、輕蔑されたのは、單に形似描寫に終つたからであるが、南畫は氣韻を概念に終つて形の中に墮落してゐる。末流に至つては同斷である。北畫にまれ南畫にまれ、其の本元は精神にある。畫道には他の如何なる道以外の境地あり。絶對に畫家のみに許された道でなくてはならない。しかして、畫道の本流が北畫にある。近代に至つては益々本格の味を失ひ素人味になり、感能的となり享樂的になり、チヨイ味になり、末流味になつてゐる爲めに、南畫を愛するものは墮落の甚しきものだ。幽人、逸士、僧、學者に愛された南畫は「遊」の極致である即興的であり、感興的であり、人格氣韻を主にして、形似の束縛から逃れてゐる處にあるが、彼等には畫人としての傑出した才能あつて、しかして主觀（客觀）が深かつたから、畫技を超越した自樂境に立派な繪が描けたのであつて素人境を脱してゐるが。文人畫に到つては、まさに素人味である。面白いと言ふに過ぎない。

北畫は純畫道であつて、畫家としての緊密な描寫があり。描く事によつて氣韻を表現してゐるが。人々はその厳しさに耐へず、又描かれてある事のみを見て、その上に[illegible]氣韻を見ない。その內容に、幽人、逸士、僧、學者の心、悟道の心を見ない。

近來油繪に東洋畫の精髓を生かさんとし、又現に生かして來てゐるのは、日本人として、西洋人の油繪では滿足出來なくなつて來て居る爲めだ。西洋の模倣及び西洋人に近づかんとする事の空虚を感じて來たからで、日本人がそれを望むのは自然な事である。日本人は日本人特有の畫境を生かす欲求を感じるのはあたり前の事である。そして、日本人として支那、（東洋精神の代表者）を模倣し、教へを受けるのは又自然な事であり、それによつて、日本人は日本人の眞の繪畫を生まんとするのも自然な事である。人々は模倣を輕蔑するが、模倣なくして現在なく、未來なしだ。人々は「形」を輕蔑するが、先輩が、その道を極めるに一番いゝ道（形）を殘していつてくれたのは、直截にその形によつて精神を會得するのは一番利巧なやり方である。それを足場としないのは馬鹿〳〵しい事だ。「形」を受け、模倣し、そして心を會得すればよいのだ。で、日本人が、支那人を先生にするのは尤もした事である。

前置はこれぐらひにして、現代日本油繪界の東洋傾向を種別すると、北畫傾向と南畫傾向に別ける事が出來る。（他に浮世

繪等の傾向もあるが、これはいつか稿を改めて考へて見やう。）即ち、リアリズムとアイデアリズム、即物と精神主義である。リアリズムに就いては後に自分の仕事に就いて書く時にして、初めに南畫傾向に就いて考へて見やう。

日本人が油繪に南畫の精神及び味を取り入れたのは自然な事である。面白い事だと思ふ。そこに獨特の境地が生れ出ていゝものだと思ふし、今後どうなつて行くか興深い事だ。南畫的な畫は主に第一印象的だ。感興的だ。進んだ印象派だと言ひ得る。或る味はすでに會得して居る。しかし水墨の味には未だ遠いと思ふ。線と云ひ色と云ひどうも甘く油繪の材料そのものが適當でない氣がする。思ひ切つて水墨を探つた方がいゝと言ふ氣がする。或ひは南畫の畫論を卒業して、じかにリアルを生かして行つて、その上で生れた南畫味でなくては食ひ足りない。リアルの研究が足りないと甘い。チョイ味になる。素人味になる。畫家としての力のない處から來る味ではつまらないと思ふ。動かす事の出來ない處までつつこんだ上で、生れる味でなくてはつまらない。この間の光風會に出品されてゐたセザンヌの風景なぞは實に南畫だと思つた。シツトリ落付いてゐて品があり、俗氣がなく、獨り平和境に遊んでゐる感じがあつた。後期に屬する作かと思はれるが。あそこまで行くセザンヌの道程を人々は思ひ見る可きだ。いゝ氣になつてはいけないと思ふ。日本にはクラシツクの歴史が實に淺い。本流が熟し切つて、しかして生れる可きものが、先走りしてゐる。幹がなくして枝が本當に繁るはずがない。面白い程度のものでは到底日本は滿足出來ない。南畫傾向に就いてはこれぐらひにして置ふ。他に考へてゐる人があると思ふし、聞きたいものと思ふ。

次に自分の仕事に就いて考へて見やう。自分はリアリストだから、北畫（院體）的傾向に就いて共に考へて見る事にしやう。

油繪に就いて色々と惡口をついた自分が何故油繪を描いてゐるかと言ふに、今迄稽古しただけ手馴れてゐる。よけいな技法上の苦勞をする必要もない。ことに自分はリアリストで物を寫すには油繪だと自由であるからだ。それで東洋精神を生すに自分の道から言つても自由であるからだ。混血兒を造ると言ふ事は面白い事であり、特別の味が生れるものと思つてゐる。しかし先へ行つて日本畫繪具を使ふ氣が強くなれば使ふ事になるだらう、事實日本畫を描いて見たい氣もなかなかある。又、水墨をやる氣も實に強い。

最初、西洋いつてん張りで、支那を眼中にも置かなかつた自分が、今支那を先生にしてゐるのは自然の道程であり、當然の

求だ。後期印象派に驚歎し、ローマニテシズムに眩惑され、クラシツクに禮拜し、デユラー、レオナルド、ハンエツクに師事し、しかして、支那に最も、強く心の底から、引きつけられるのは至當な事だ。

先にものべた様に油繪は物を描寫するには持つて來いだ。自分はリアリストであるから物それ自身を愛す、その物自身の持味を愛す。對照物その物をそつくり寫すには持つて來いである。（その物の持つ質の味、實在の神秘）例へば僕は、對照物（果實人物）に影を造らない様にする。投影も少なくする。物に影を造ると物それ自身の質感をかくす事になる。バツクを一色の暗色で塗る方法も、宋元の花鳥畫等に倣つたものだ。リアルをより明瞭に描寫したいが爲めと、ジンとした深さを生む爲めだ。（形を倣ふ事を人々は否難するが。或る精神の深さに到達するに一番いゝ道を形の上で示してくれた昔人を倣ふ事、形を借りて其の道を極めんとする事は先に言つたが、形態のみきり見れぬ人は形に止まり、形のみしか見る事が出來ぬ。この事は作者にも觀者にも言へやう。）

人々には描き切つた上での味、突つ込み切つた上で生れて來る味、餘韻と言ふものが解らない、（この事は北畫對南畫にも適應する事が出來る。）リアルのものを見ると人々は細かに描いてあると言ふ事を見て、何故細かに描か

か。そして、細かに描かゝずには生れて來ない味や餘韻を見ない。南畫は氣韻を露骨にねらつてあるが故に、氣韻を露骨に人人に見せるが、リアリスチツクのものは氣韻を奥にかくしてあるが故に、人々には通じにくい。要するに最深の處は北畫にもあれ南畫にもあれ精神である、氣韻靜動である。しかして自分は北畫を藝術境の最深とする。

油繪は材料から言つて建設的に描き起して行くに一番理想的に出來てゐる。描きに描いて行つて精神を積んで行くやり方が一番いゝと自分は思つてゐる。（我田引水かもしれぬが自分としてはこの事を信じてゐる。）

しかし、この手法は飽くどくなる。重くなる。（沈滯する、）意志的になる。固くなつたり冷めたくなつたりする弊がある。支那院體畫（北畫）にしろ、寒さがあるが、材料から來る寒さではない。重さの内に輕さがある。どつしりしてゐて、一方にさらりとしてゐる。しかし、この事は油繪の材料の生し方一つ。言ひ替へれば、自分の内容が深く豐富であれば何でもない事だ。或る深い心境に達してしまへば問題なしに素直になれるであらう。それ迄の刻苦鍛鍊。意志の道程がある。そして、油繪の持つ生々しさが南畫にない處のリアルの持味によつて一つ

の畫境に生し切られてしまへば實に面白い事に。味以上の味。本格の味。最深の味は、この道以外に我になし。もつとも、自由で、力が出し切れて、安心立命の道は我に、他なし、咲く可き花が自ら咲く時こそ自分の最も喜びの時だ。

次に自分の油繪の材料と使用法を少しく書いて見る。油繪具は主に天然産土のものを使ふ事にしてゐる。繪具の使用法はいつたん殺して生すやり方だ。この事は油繪具の性質から言つて相反してゐる事ではあるが。リアリストである自分が色彩の味だけで行つては到底リアルを眞に生し切れない、自分の持ち味は一遍かへて使ふ事が自分として一番自然で素直である。油繪具そのものを生す點では、永い傳統を持つてゐる西洋人の敵ではない。又西洋人の味では自分が滿足出來ない。事實フランス展なぞを見ると、日本人の油繪とは、繪具の使用法と言ひ、畫面の味と言ひ、西洋人は實に西洋人味だと思つた。この事は人種的差違である。性質及び精神の違である。こうなつて行くのは、實に當然な事である。繪具の味の違ひと言ひ、畫面の味の違ひと言ひその發露の一つと見る事が出來る。

先にも言つた樣に自分は油繪具を一遍殺して生すやり方だが。描寫の手法はハンエーク時代に似てゐる由、向ふへ行つて見て來る人に聞いた。しかし日本はこうも思つてゐないから、畫面がテカ〳〵に光つて金屬性の感じにならぬ樣に艶を消すテレピンを使つたりするが、緊密な描寫をするには油つこいポツピーとかリンシードオイルを使わないわけにはいかぬ。自分は兩方の油を適宜に使つてゐる。

筆は英國ニユートンのセーブルヘヤーの丸筆に止めをさす。柔かく彈力もあり、如何なる微妙な線も引く事が出來、如何なる微細なる點迄描寫する事が出來る。塗にも描くにも適してゐる。

カンバスは出來るだけ細目の物を使ふ。フランスのブランシエ製の極細目と言ふのが今の處最上で、一種の彈力もあり、輕るく、非常にいゝものだ。

いつたい我々の使ひ度いと望む材料は、繪具屋で充分はとつてくれぬ。又高價でもあり。品切の時が多かつたりするのは困る。商賣上から言へば仕方のない事であらうと思ふが。現代は佛蘭西全盛時代で、我々の使ふ樣な材料を使用する人が少い爲だ。

未だ〳〵全ての點で研究の余地あり、先を樂しみにして精進しやう。（三月二十日夜）

# 追憶の歌

中島哀浪

福岡舊城内なる兵營の邊を過ぐ十五年振なり

城の森くろぐろとして繁りたり新兵にして眞木を拾ひし

この城の松が見ゆれば靴ずれのいたさ忘れてかへり來にける

錢うせし日曜の朝のあしどめに術なかりける窓はあの窓

しみじみと歩哨にたちて聽きにける松風の音いまにひびけり

この森ゆ鴨たちしかば氣をつけのまなこ動きて睨られにけり

鞘光る刀をはきてこの路にうれしみし日はかへることなし

故長塚節氏の宿はその頃平野屋といひしに

遠く來てここにはかなくなりけるを宿屋の名さへかはりゐにけり

たたずみてつくづくおもふこの宿にたづねきたれば會ひたまひつる

松原に病院白くたてりけり遠くきたりて甲斐なかりける

藥さげて行く人多しかくのごと通ひましけむあはれたのみて

さがせども手にいらざりし冬の柿ほしがらせつゝ死なせけむか

# ジオルダノ・ブルーノ

桑木厳翼

此間偶然二月十七日のラヂオ講演を依賴されたので、三百餘年前の此日に焚殺されたジオルダノ・ブルーノの事蹟を少しく話してみたのが緣となつて、今又此誌上にも之を說くことを需められるやうになつた。私は別に深く此の詩人的哲學者に就て研究したわけではなく、又其の學風に全然一致するものでもないが、其の數奇を極めた一生や、悲壯な最期に對しては常に意を動かされる所があつた。近世學術の發達の爲には如何に高價な犧牲が供せられたかといふ事實は、確かに學徒の感奮を促す者であり、異說迫害の歷史には如何に暗愚と殘忍とが存するかといふことは思想史研究者に取つて慨歎と侮蔑との念を禁ぜざらしめるものがある。加之、ブルーノの學說は近世自然科學より推演せらるべき一方向を示したもので、自然科學は常に物質萬能の思想を導くものだ、と考へる人々に對して、其の迷を去るに足るものである。私は是等の點を念頭に置いて簡單の敍述を試みたのであるが、時間の關係から終りの點に就ては十分に說明することが出來なかつた。今需に應じて之を補足敷衍して試ようと思ふのである。

## 一

ジオルダノ・ブルーノは一五四八年南伊太利ナポリ王國ノラといふ所で生れた。當時此地は西班牙領であつたので、武官であつた父ジオヴンニは、班王の名に因んで其子にフイリツポといふ名をつけた。（ジオルダノは後僧籍に入つてつけた名である）和漢の古式で諱を避けるのと正反對であるが、其の志は同じく敬意を表するが爲である。母フラウリツサ・サヴリナは其の名から判斷して獨逸人であらうと云はれても居るが、フラウ云々といふ語は南人の妻には有り勝ちであるし、又ジオルダノ・ブルーノ自身毫も獨逸的な性格を示して居ないから、此の

推測は空想に止まると思はれて居る。ブルーノの家はチカラ山の麓に在つたが、此地方一帶は樹木鬱蒼として風光明媚、南數哩にはヱスヰウス山の火焔が天に沖するのを見ることが出來る。此火山は一般に此地方の人心に影響すると言はれて居るが、殊に此炎々たる火焔は南國に生れた我が哲學者の性情を象徴するものと言つて宜いであらう。なほまた此地は古希臘の史蹟に富むで居て、人民も一體に希臘的な所もあるといふ。是等も亦ブルーノの學説に關係がないとは言へない。然しブルーノを直接に動かしたものは、武人たる父が文事の嗜み深く詩人を友としたことによつて得た感化であらう。更に又逸すべからざる少時の經驗が傳へられて居る。常にチカラ山の美を樂しむだ少哲學者は、遙に望見するヱスヰウス山の燒土を荒凉醜惡として居た。一日其山に遊んで、其の地方が風光明媚なること毫も我が[illegible]、而してチカラ山附近を此地から眺めると荒[illegible]いのを見て、此に萬物所[illegible]といふ理[illegible]

[illegible]て一貫しては居ない。十一歳の時、ノラからナポリに移つて人文派の古典學論理學等を修めたが、次に十五六歳の頃、即ち一五六二年或は一五六三年、ドミニカン派の僧院に入つて僧籍に入り、名をジオルダノと改めた。僧院に入つたのは學資に乏しい爲であつたらしいが、同時に又當時宗教界間の嚴なるに對しては、此處に在ることが反て攻學に便であつたと思はれる。此院では嘗て中世の大學者なるトマス・アクイナスが修道したこともあり、種々の學術を研究する便が多かつたやうである。一五七二年愈々僧職授任式によつて此派の人となつたが、一方には此間に哲學天文學等世俗の學を修め、又詩作などを試みた。哲學に就ては固よりアリストテレスの哲學が正教となつて居たが、然し又諸種の自然主義の哲學に就ても研究し、デモクリトス、エピクロス等から降つて近世の諸自然學者の所説を學んで、寧ろ之に興味を感じて居た。後に其學説の基礎となり、[illegible]に其説の異端視せられる原因となつたコペルニクス[illegible]きにも、此頃既に意を傾けて居たのであらう。然し[illegible]ート派の反改革運動が猛然として起つて、[illegible]

道院に移つたが、之を以て事件は落着することなく、終に僧籍を脱して放浪生活に入らざるべからざるに至つた。時に一五七六年、ブルーノ二十六歳の時である。



## 二

流竄の生活に入つたブルーノは再び舊名フイリツポに復して、先づジエノヷ灣口のノリといふ村に着いて、四五月間兒童に文法を、或る人々に天文學等を教授した。其後サヴナ、トウリノ、ヹネチア等に移り、職を求めたが何れも意を得ず、更にパトヷに移り知人の勸に從つて再び僧服を着し、更に諸地を經て佛國リヨンに赴からとしたが、形勢不利なるを見てジユネヷに還つた。其時は大抵一五七九年四月或は五月の頃であつたらしいことは此地の大學總長の帳簿中に五月二十二日の條にフイリツプス・ブルヌスの名が錄されて居るので明かである。元來此地は諸種の放浪者の雜居する所であつたが、然しカルギン派の根據地として其點の壓迫は中々強く、ブルーノに對して此派に入ることを勸誘するものもあつた。ブルーノは頑強に之を拒んだが、又一時此派に入つたといふ噂さもあり、後年審判の際には自ら改宗者でないことを辯じて居る。とにかく信奉する程でもなかつたであらうが、名簿などに登錄せられては居た。然し彼の傲岸の癖とて、此派の人の[illegible]し、八月二十七日遂に此地を去るに至つた。斯くして一五七九年佛國に入り、少頃リヨンに止まり、更に大學で有名なトウルーズに赴いて、後其大學の教授となり、アリストテレスの心理學書等を講じて居た。教授となるには先づ神學博士となつて其の資格を作り、更に學生の選擧によるものであつた。斯くして相應に人望があつたことを示して居るが、然し此地も亦後に（一六一六年）ルチリオ・ヴァニニを焚殺したやうに異端には寛容の少ない所であつたから、ブルーノも永くこゝに止まることは出來ず、一五八一年巴里に移つた。巴里では、三十神性に關する三十回の講演によつて忽ち名を知られ、一部教授の候補者となつたが、聖餐式に列することが出來ないので（トウルーズでは其規定がなかつたが）其職に就くことは出來なかつた。然るにブルーノには其性質に似合はしからぬ藝があつた。元來彼は放浪生活中己が修め得た學術を教授して糊口の資に供したのであるが、其の學術の中にはアリストテレス其他の希臘哲學や、天文學等は無論の事として、其他に又記憶術、推理術といふやうな傳授物然たるものがあつた。推理術或は思想術は十三世紀から十四世紀の初にかけて生存したライムンドウス・ルヽスの發明した大術といふもので、七個の圓板を一

て共通の軸の周圍を廻轉せしめ之によつて形的及質的概念が適宜に結合して可能的結論を出すやうにした仕組みの物である。ブルーノが此術に長じたことは大評判となつて居たので、佛王アンリ三世に召されて、之が御前講演を試みることゝなつた。王の母后は伊太利人であり、王も亦哲學を好むだのでブルーノは其の庇護を受け、諸種の著述を公けにし、又大學の員外講師となることを許されたといふ。此で著した『觀念の影』等は、其の題目から見ても、プラトン若しくは新プラトン派の影響を受けたことを示して居る。其他記憶術思惟術等に關する著述を出して國王の意に投じ、之によつて宗教上の問題から遠ざかつて居たが、然しブルーノの機鋒は屢學者の持說に觸れるので、宮廷の快活な機智は此南國人の氣風に一致したのに關せず、遂にまた此地に止まることを得ず、國王の紹介によつて一五八三年英國大使の許へ行くことになつた。

三

當時英國はエリザベス女王の治世に屬し、文物興隆し思想も自由であり、宮廷では專ら伊太利語が行はれて居た。思ふに伊太利の文物が英國に喜ばれたことはシエイクスピアの戯曲に伊太利物の多いことでも證せられるであらう。斯くしてブルーノは忽ちにして其の社交界の大立物となつたし、又此地に一八五三年まで滯在して居る間に諸種の著述を出したが、然し例によつて學界とは和睦することを得なかつた。初め一八五三年四月から六月までオックスフォードに滯在して居たが、此地はアリストテレス學の根據地であつて、其大學の學則にも、凡そ學徒にしてアリストテレス學に背きオルガノンに違ふものは各項につき罰金五志を課す、と言つてある。ブルーノは此地でアリストテレスの天文說や哲學に反對したのであつたから其の運命は卜知するに足るものであつた。殊に記憶術を講ずるに先たち大學の副總理に送つた手紙の如きも、頗る挑戰的なものであつたから、學者の激怒を買ふに餘りあるものであつた。斯くして學者と若干の論戰を試みた後、不滅論等に關する公開講演を差止められ、遂に倫敦に歸還した。

倫敦では佛國大使モーギシエールの家に寓して宮廷に出入するを得たが、此處でも宮廷の人々とは折合がよく、ブルーノも亦英國人殊に婦人の美を賞賛して居た。而して重要なる哲學の著書を伊太利語で綴つて、之を數多出版した。第一にた。『聖灰日晩餐』といふのは即ち此日にオッタスフォードの學者と討論した顚末を對話風に書いたもので、嘲弄の語氣に滿ちて居る。次ぎに著したのは同じく對話篇で『原因原理及

就て』といふ。是は其の哲學の中心思想を說いたものである。其他諸著を出したが、間もなく佛國大使が歸國することになつたので、伴はれて共に巴里に歸ることになつたが、結局此地の舊教徒や學者と合はず、アリストテレス哲學難百二十條を述べた外、一五八六年此地を去つて新教國たる獨逸に趣くことになつた。私は嘗てある音樂會で「旅人」といふ歌謠の中に「我が行く所幸福は去る」といふ句があるのを聞いて大に感じたことがあるが、今ブルーノの一生もやゝ其の趣がないではない。然し其初は常に必しも全く幸福でなかつたのではない所を見れば、狷介の性情も幾分か之に與つて力があつたのかも知れない。

獨逸のルター派は瑞西のカルヰン派に比すれば氣宇濶大な所があつたのでブルーノは其意氣を壯としたが、他の新教諸派に對しては慊らない所が多かつた。且又此地の大學は極めて自由思想に富むで居るので、憚る所なく新說を講ずることが出來た。其れでマインツ、マールブルヒ、ヰッテンベルヒ等諸地の大學に於て記憶術其他を講じたが、ヰッテンベルヒの大學では初めルター派がカルヰン派に勝つたが、後形勢一變し、ブルーノも爲に此地に止まることを得ず、ベーメンを經てフランクフルトに赴いた。此際又諸種の著書を出したが、此時は普及を欲して羅甸語で書くことにな[…]著書が佛國で著した書中に見える第一期の新プラトン說的[…]を脫して反對歸一の世界觀を樹立した第二期の思想をなすものであるが、獨逸で出した羅甸語の著書は『三重の極小と計量』『單子、數及形』の如く同一觀から個體觀に移る第三期の思想を示して居る。

## 四

斯くして學界に立たうとしたが、依然として席暖るに遑あらず、一五九一年遂に此處を去るやうになつた。蓋しブルーノは舊教の頑迷に反抗して鄕里を脫出したのであるが、新教徒の頑迷なることも亦之に讓らざるものがあるのを見ては遂に之に耐ゆるとが出來ず、又南方人と北方人とでは其の性情氣質等如何にしても一致し難い所があるので、漂泊の遊子も家鄕を思慕するの念を禁ずるとが出來なかつた。恰かも好し伊太利の一貴族からの招聘を受けたので、飛んで火に入る夏の蟲の如き運命に陷るとを考へる遑もなく、一五九一年、先づパトヴに赴き止まるとニケ月、遂にヱネチアに於ける其貴族の邸宅に赴いた。蓋し當時羅馬教會に於ては此改宗教師の不敬漢を捕縛せんものと待ちに待つて居たのであるから、全く自ら死地に入つた

ものに他ならないのである。

ヹネチアの貴族はジオヷンニ・モツエニゴといひ、ブルーノの記憶思惟術を傳習したいと思つたのであるが、捗々しく其の目的を達し得ないので業を煮し、終に仇敵となつて官憲に訴へた。時に五月二十三日。

斯くてブルーノは捕縛せられたが、事重大でヹネチアでは力が餘るので、終に一五九三年二月二十七日羅馬に移され、數年の長い審問の後、遂に一六〇〇年一月二十二日羅馬法王の訓令により、二月八日羅馬知事の手に移り、時を移さず仁慈の方法で血を流さず刑すべしとの内意により、火刑に處せられることになつた。斯くして初に述べた如く、二月十七日羅馬の郊外カンポ・デイ・フイオリ即ち花の野とでも譯すべき、名は優美であるが實は恐ろしき刑場で焚殺されることになつた。其の死に臨むで從容たりし有様は、當時幸に傍觀して居た者があつて書き記して置いた。「我に對して宣告する汝こそ之を聽し我よりも恐れ已なくならん」と言つたとは著名な事實である。火炎に包まれ苦悶する時、十字架を示して改心せしめようとしたが、傍を向いて之に應じなかつたといふ。

ブルーノの遺骸はかくて灰となり四方に撒き散され、人々の記憶から全く取り去られんとしたのであるが、既に著した諸書は次第に諸人の間に傳はり、其利は公然口にする者が少なかつたが、漸次諸家の論中に入つて蘇生した。花の野に灰として撒かれた中から、花咲爺の御伽噺にあるやうに、名自稱詮の花を開き實を結ぶやうになつた。一八八九年六月九日各國の學徒聯合して記念像を建て、今では伊太利の誇となつて居るのである。

## 五

何故に斯く迫害が烈しかつたのであるか。此事に關しては諸種記錄の研究によつて漸次明にせらるる所もあるが、然し今日から見れば了解に苦しむ部分が多い。とにかく表面から云へば變心改宗して異説を唱へたことが其の罪過となつたもので、其の異説といふは畢竟コペルニクスの新天文説や其他新興の自然科學に基いて、宇宙の無限にして世界の多數なると、靈魂と[illegible]體に現れる前に存在せざること、其他從來の信仰に對し[illegible]を抱くと等を說くことで、之によつて教會の信仰と相容[illegible]汎神論を唱へ、又教會や法王を誹毀して、時には驢馬の[illegible]ゐたこと等もあるが爲に、一層憎惡の念を深くしたので[illegible]思はれる。然し一つには又當時反動の機運が熟して來[illegible]迫が激烈となつたのにもよるものであ[illegible]

多少溫和な意見も出たが、ブルーノの稍介傲岸な態度は不利な結果を招いたことが多いと思はれる。ソクラテスが罪を被て刑に處せられたのも亦此の如き事情によるものである。たゞソクラテスは死に臨みて平然毫も意に介せざるもの丶如く門人故舊を集めて後々不滅を說き、アイス、クラピオス神に鷄を供げよとの言を遺して毒を仰いだ溫籍の風手は、此の情熱に富む詩人的哲學者が獄卒を叱し刑吏を嘲る態度と大に異なる所がある。然しブルーノも決して怒號絕叫したのではなく、平然として苦を示さなかつた所は、流石に哲人の面影を示し得て居る、といはねばならぬ。元來哲學の歷史上罪に學說の爲に死を招いたものは先づ無いと言つてもよい。ソクラテスの刑死には多少政治的意義がある。希臘末期の女流哲學者ヒパテイアも虐殺されたが、是は明に政治上の失敗に因るものである。ブルーノのも多少實際的理由があるのであるが、然し概して學說上の理由によるもので、是が學徒の意を動かす所以である。尤も焚殺されたこと其のみでは大した價値があるとは言へない。現にブルーノと殆ど同一の運命に遭遇したヴニニといふ人は才學を以て聞え、自らもまた之に誇つて伊太利に於ける古今の第一人者たるジュリオ・チェザレ即ちチュリアス・シーザーの名を襲いで居たが、然も其悲慘な最後は寧ろ自業自得といふやうに片付けられて、ブルーノの犧牲の[illegible]ノが學術の犧牲と稱せられ、其の名聲が千古[illegible]に誠實の精神の存するが爲めに他ならない。

## 六

然もブルーノが學術史上重要な地位を占めることは、其が近世思想の魁となつて居るからである。其說は空想に富んでまた論理的組織的でなく、其の著述も對話や詩歌の形式になつて居るものが多く、思想も前後變動しては居るが、然し之を一貫する精神は、近世の初に發達した自然科學を基礎として古代の眞精神を復活し、而してまた此の古代の一面によつて古代の他部を繼承した中世の哲學に抵抗した所にあるのである。今此には其の學說の細部や著書の一々に就て論究する遑はないが、ただ其の二三主要な點を考察して見よう。中世思想の一特色は二元論にあると言へる。即ち希臘のアリストテレス哲學に於ける形質の對立を基礎とし、天地二元の天動地中の天文說を材料とし、之を宗教上の所傳と合致せしめたものである。ブルーノは之に對して反對の歸一を說き、形質の對立を撤してプラトンの觀念說を取つたが、更に又此合一觀を單に道理によつて演繹するのみならず、經驗によつて證明した。極小や極大に至れば對

物の差別が没却せられることは理論上無差別を立し得る所以である。更に又穀物の種から粒となり粉となりパンとなり人の食となつて其の血肉となり、人の死する後は又土石に歸り再び種子となるといふやうな事實を取つて此の間の經路を見れば同一不變なる本體が其の根底に存在すると見なければならない。之より推して見れば、天文學上に於ても地球と他の遊星とは同様の關係をなすもので、更に進めば太陽系の如きものも無數に存在し、世界は無限とならなければならない。而して此の大自然大宇宙は神の創造した物で神と分離したものではなく、自然の中に生命が存在するもので、自然即ち一大生物なるのみならず、實に一大精神で即ち神そのものに他ならない。此の如くしてブルーノは世界と神との二元をも撤去し去り、自然を生命あり靈智あるものとした。此に至つて最早物質は精神と別離せず、自然の研究は同時に心靈の研究に他ならなくなつたのである。

此の如き學説が近世哲學史上種々の形に於て現れたことは著明の事實である。尤も其の當時に於ても又、やゝ後に於ても、故意に其の説と離れんとするものもあつたが、然し其の説中に意識的に其影響を蒙つたものは多い。ベイコンも或る場所では其の名を引用し、デカルトも全く之を離れては居ない。然し更に至つては、スピノザの一元的本體觀とライプニッツの多元的單子論との如き、一見相反對せる如きものも直接若しくは間接に等しくブルーノに負ふ所があることである。其他又稍後に至つてシェリングの藝術的自然觀が之に基づくとは周知の事實であり、其の著中ブルーノの名を假りて自己の學説を述べて居るもののあることも益々其關係の密接なることを示すものである。」然もカントの批評哲學の如き是等形而上學から離れたものも、其れが科學と哲學との結合と云ふ點に於てブルーノに結合する所がないとは言へない。

こゝに科學といふのは即ち自然科學を指すものであるが、此自然科學と哲學との結合に三様の仕方がある。第一は自然科學の結果を其のまゝ世界全體の説明とするもので、此場合には自然が通常物質的と見られる限り大抵唯物論を生ずる。第二は自然科學の結果から類推によつて經驗以上の世界を論ずるもので、此場合には其の執る所の自然現象の如何によつて種々の解釋を生ずるが、生物的自然を主とすれば勢、全自然を生的心的のものとするやうになる。ブルーノの世界觀は即ち之である。然るに又第三には科學と哲學とを斯く強て結合することなく、科學の基礎を哲學によつて説かうとするもので、是がもし科學の基礎に立つて之と異なつた實在を説くものとなれば形而上學を生じ、然らずして科學の中で其の基礎

の批判となる。カントの批判哲學は即ち後者に當るものであつて、ブルーノが相對性、自然單一性、反對歸一等の原理を其儘に使用して自然觀を構成した所は形而上學的であるが、一方之によつて古來の科學原理を批評した點は批判哲學の精神に近いものと言はねばならぬ。即ち我々はブルーノによつて、自然科學からは唯物論、物質主義等のみが必然的に導かれると思ふ人人に對する反證を得たと言つてよいのである。

然しブルーノも流石にまだ中世や古代の樊籠を脱しきれなかつた。此に其の惱みがある。又其の風土性情の影響を離れ得なかつた。此に其の哲學に空想的色彩を與へ、又他の學說と無用の爭闘を招かしめる點がある。是等は見點であるが、然し同時にブルーノの哲學が如何に其の性格人物との密接なる關係を有するかといふ事を示すもので、我々に對して其說に親しみを感ぜしめるものである。之と共に我々は單なる學術上の意義を離れて、人としてのブルーノが其の學說の爲めに悲壯な最期を遂げたことに深く感慨の念を起さざるを得ないのである。

# DADA散文詩 虛無の對蹠に於て

――ブレイズ・サンドラア――

辻潤 譯

## 第一章

### 天空の緯度にまでの巡歴に就て

錨を揚げた後に、私達は地球を去つて呼吸し得る大氣に充ちた光りの太洋に入りこんだ。その極端に到達した時に私達はオゾーン帶の急流にいたく惱まされた。あまりに迅速なので、勿論その速力は知るよしもなく、殆んど靜止の狀態に於けるが如く感じられた。地球の姿は最早視野の內には存在せず、前方に星辰の姿をさへ見るとは出來なかつた。遂に私共は天空の底深く無限に沈み込んだ、星泡があたりに散亂した。時間にしたら凡そ七世紀ばかりの間、私達は大熊星座の前を屢々黑色の虹の下を通過してうろついてゐた。それからオリオン岬の邊で急に方向を轉じて南方に直進した――それは虛空の北方に當るのである。

私達は行く〳〵不可思議な星を漁つた、それはかなりな驚異ではあつたがそれらの美味はいたく我々を喜ばせたのであつたみんな元氣潑溂として非常に健康であつた。仲間の例にならつて、私も昏睡を振ひ落した、それは我々の出發の豫期せざる成功の當初から私を捉らへて放さなかつたものだ、私は人間情熱の紋章のついた我々の偉大な金旗を高く揭げることを命じた、そして砲門から外界を見渡した。その時、自分は始めて自分の精神がそれを被ふてゐた腫腐から脫落してゐる事に氣づいた。

## 第二章

### 緯に就て、及び虛空の底の海綿に就て

銀河の背後には一匹の

る。彼は深海の泥中に充盈する無數の太陽を餌食としてゐる。彼の眼は空間のクロオバアの如くである、その尾にはガラガラが附着して、滅落する世界がひとつびとつ時刻を刻んでゐる。彼の鱗が剝げる度毎にそれが流星となつて轉落する。この生物の消化器は光りである。彼は樹の根に巣食ふ蚯蚓の如く海綿の底に捕へられてゐる、それを彼が嚙み、それが殆んど彼の身體を蓋ふてゐる。この海綿の毛孔の一つびとつは姫蛤の如く呼吸し悶えてゐる。この海綿は闇の海綿である、舌の發脈であり、發生の器官である。頭蓋に於ける腦髓の如く、それはそれ自ら第一形態を形ち造るのである。それは統一の對蹠に生息する變體な名狀すべからざる生物の種屬の中の最も單純にして原始的なものである。

# 第三章

## 樂器に就て

毎朝、透明な膜が天空一杯にひろげられる。眼瞼が開らく度毎に、アネモネの蕾が開らく、一粒の砂、一個の太陽が生れ落ちる、一匹の蠅、一人の人間、ひとつの動物、ひとつの植物が動き出す、即ち生命の力がその生涯を始めるのだ――この微微な脈が發動し、音響を受け取り、これを繰り返へし、巨大な躁音となつてそれを倍加す
てゐる水の山が崩れ出し、西方の鹽の山に溢れ落ちる
用意される、森然と沸騰する音響の旋風は深いバスから鋭どいソプラノに昇り行き、眩耀の半音階を經て再びバスにまで降り行く。始めは何物も見分けられない。唯だ異樣な光線の反射と強烈な光りによつて眩ませられるのみである。無數の陰影が疲れた眼光に映じ、水中の魚の如く敏活に白色の調音をかなでる。無形はやがて四角となり、楕圓となり、全圓となる。かれ等は水面に浮びあがり、やがて破れて泡となる。かれ等は悉く鰭の運動によつて活躍する。四角は長くなり、楕圓は匙の如き形をとり、圓は星となる。口、唇、咽喉、一切は聲高く張りあげて空間に跳び込む。かれ等は凡ゆる方向より蝟集し、群となり、團となり。奇怪なるマストドンの舌となつてひろがる。この舌が歪む、努力する、未曾有の死力を盡す、吃る。それはしばらくして物云ふ。

やがて、大風が卷き起つてその舌を分解する、雲の如くそれを解きほごす、その時無數のギオロンセロ、立琴、喇叭、太鼓、不易の花々が各世界にその根を下す。そして意識ある生物が規範を再び創造せんと試みんが爲めにそれ等を集合せんと試みるのである。

## 第四章

### 星辰の大歡喜に就て

——（虚無の對話に於て）——

眞識の軸に於て、ある洞窟への入口が開かれる。そして青いパタアカップの如く汝を吸ひ込む。その中では、遊星の臆病と思はれる程に細心な進行が手にとるが如く見られるのである。これ程までに單純で、壯大で、温和で、靜謐なものがまたとあらうか。さうしてかほどまでに偉大な幸福の感じを與へるものもまたとあるまい。何等の機構なしに轉回する蓄音機器。支那音樂。向ふの方ではチベットの粗野な瞑想のゴング、水晶の如きものは黒い麒麟の首の如き金星の輪である。斑紋のある水晶、火星の數、プラチナの如く不變な地球。

これ等の平原に於て、呼吸する行爲は自由の馬なのである。

## 第五章

### 蜜に就て

空間を流れてゐる時劫の河には、[illegible]な蝶が厚い藻の中に遊んでゐるのが見える。水は澄んですき透つてゐる。河底には強烈な紫色と海緑の[illegible]光の間には隕石が形成されるオドマグネチツクな[illegible]、[illegible]、樹木、草木の類が極度に繁茂してゐる。植物が不敵である。今日、この小さな谷で、その河の上流の上を飛んでゐる間、私は大砲で巨大な水棲の蝶を狩した、それは「時」の絶頂に住む蝶で、朝と夕の同時的な翼を持つてゐた。

銛のついた我々の小さい彈丸は彼の透明な翼に命中することとは出來なかつた。そして、二十八個以上の彈丸が發射せられたにも拘らず、その中の一個も彼の身體に命中することに成功しなかつた。しかし、遂に彼は致命的に傷けられた、動物は下方に向つて旋轉し、再び舞ひあがり、突如として方向を轉じ、高く翼を鳴らして逃れた——銛が深く刺し込まれてゐる爲めに我々は彼の行途にひきづられて行つた。

巨大な蟲は右往左往に轉回し、縱横に飛翔しながら我々を自由にひきづりまはした。時として私達は燦爛たる彼の頭上にあり、時として彼の腹部の暗黑な陰に隱れた。

彼の動作につれて、我々は轉覆の危險に瀕してゐた、その場合、綱が切斷され、我等の獲物を失ふの恐れがあつたから、私は蝶の眼を直射することを砲手に命じた。發砲は恐ろしい打擊を與へた。私は動物が前方に大きな飛躍をし、翼を納めて落下するのを見た。私達は彼の[illegible]に旋回したから垂直下した。

私達の位置が危險に[illegible]

した。人々は相互に踏めき倒れた。私は砲門にすがりながら辛うじて直立してゐた。頭に鋭どい痛みを感じた。恰度この時であつた、私は自分達の企ての愚かしきことを始めて覺つたのである。私の精神は我々の探究の謬謬と科學的努力の無駄なることを意識していたく沮喪した。

私達は旋渦の底しれぬ眞中に落下しつゝあつた。私達は夜と朝の間に滅落せんとしてゐた。否、其處にはなん等の法則もなく、なん等の計量もなく、なん等の中心もあり得なかつた。又統一もなく、時間も空間も存在しなかつた。我々の理性は分析の哀れな小さい器具である、又我々の辯證の無力な語彙を捉らへてさま〴〵に變形させる鐵の如きものである、又言葉からその凡ゆる意味と、凡ゆる暗示と、凡ゆる創造力とを剝奪する濾水の如きものである。その濾水は言葉を孤立させ、裸形にし、洗滌し、清潔にし、かれ等の誕生の當初に於て保持してゐた凡ゆる關聯と晶化とをかれ等から奪取するのである。それは唯だかくして形而上的に「無」と云ふ單純の物體を同樣に定義せんが爲めなのである、しかるに一切の萬物は結合して到底分離しがたいのである。「人は一片の草の葉と雖もその中に全宇宙を包含することとなしに定義し得ないのである。」科學が宇宙の最も本源的な範疇に就いて無智であつた時に、たとへば草の葉の纖維の大きさが……は氣候の狀態に依るか、若しくは種子の腐敗或は培養の方……何に依るかさへわからない時に、人は如何にして宇宙を引き離して一片の草の葉をさへ論ずることが出來よう、或は又科學的推理と號するが如き外包の曖昧なる能力を信用して使用することが出來よう？

否、その對象は實在しないのだ、その定義は一切の次元を缺如した——空間そのものであるかも知れない——さうして、それが我に與へる唯一の物は頭腦の疲勞であり、コンヴェンションであり、死文學（[illegible] と [illegible]）である。

本能的に舌を動かす子供は全世界をその搖籃の傍に招致する、その中で赤子は立派に實在のヴヰジョンを世界に示現するのである。我々の感覺は語り、さうして肯定する。一切は形而下的に氣紛れであり、愚劣であり、習慣であり、惡である。一切は深い。全宇宙は同分異性的（イソメリック）である、即ちその全體と部分とは一の要素から形成されてゐる。しかもなほ（全體及び部分として）これ等の要素が感覺に如何に異つて示現されるかに從つて、異なつた性質を具有してゐる。

私が今告白した如く、盲目な探求的な衝動から組み立てられたこの驚異な發見にとうして私は自分と仲間の生命を賭するこ

とが出來よう? 自分は不斷の不安と懷疑の間に努力したのではなかつたか? 自信なく絕えず狐疑する科學者である自分、我々をかくの如く遙かな天空に運搬したこの非凡な機械の發明者――又それを誇りとする自分、數の生命に深く沒入した自分の決定的な硏鑽の結果私の仲間の市民達が宇宙的螺線の主人と呼ぶこの私――は結局一個の詐僞師にほかならないのではあるまいか? 自分は幾何と、三角との Tabula rasa を造つた、最も決定的な確固たる科學的法則と理論とを基礎としてさまぐ\な航空機を製作した、――それは唯だ憑かれた豫言者の如く、若しくは妄語する詩人の如く最も奇怪なる冒險の船出を企てん爲めのみであつた。

　自分はどうして私に服從すべく仲間を說服することが出來たか、さうだ、私が最早自分自身を信ずることが出來ない時に、どうしてかれ等は私を信じ得たか? 思ふに、それは指導者らしき私の權威と風貌と、私の智力的頭腦によつて醸される千年の夢想ででもあつたらう。

　かくして一切が失はれたと考へた時に、抑制と指導の必要が朧ろ氣に心の中に浮んで來て、いつもながら私を行動に驅つたのである。私は砲門から外界を覗いて見た。私達をひきづツてゐる怪物は將に地上に衝突せんばかりである。我々は最早百ヤード以内に來て、粉微塵に粉碎さるべき運命にあつた。自分は半ば無意識に、雷霆の如き聲で、「各自の位置に!」と叫んだ。私は我々の餌物に結び付けられてゐる綱を甲板外に投げ棄てなければならなかつた。力強い放電が我々の船を包んでゐた斥力の隔壁を振動させた。船首にある巨大なタアビンが回轉し始めた。車輪を逆轉させることによつて私は機關を正しくすることに成功した、機械は巨大な死骸から約六ヤードばかりのところで急激に停止して平行を保つた。何物も失はれなかつた。部下の人々は不安な顏付をして私を眺めてゐた、そして神經的な痙攣が私を微笑させた。しかし。舵手達は「働け!」と叫んでゐた。既にして靜かに機重機が船體の四方から下され、死體の各部分をひきあげてゐた。科學に對する私の情熱が再び私の心を支配せんとした。私は我々の取り上げた死體の部分を夢中になつて分類表に書き込み始めた。

蟲の死骸に我々は次の如き物を發見したのである。

1　切斷された頭を鍛錬した泡立つ白羊
2　胸の中に隱れてゐる巨蟹の熱帶
3　觸覺を跨ぐ双兒
4　首の後部から吹き出した、狂へる牡牛
5　頸の軸の中の天秤(私達は甲板にそのマンモスの如き部

を擠ぎ込むことは出來なかつた。)

6 兩脇に靜かに眠る處女
7 胃の腑を消費するさむり
8 口唇を防禦した獵人
9 太陽叢中に座つてゐる狂へる獅子
01 胸壁中にゐる山羊
11と12、氣まぐれな撒水者、それから兩眼の中に游泳する魚、

ネニユフアー(大きな睡蓮の一種)の如く白く空間にひろげられた緊張した兩脚。

隆吻を檢査してゐる間に、私は一滴の蜜をこぼした。生(ライフ)は實際的に、明らかに、形式的に純化され、溶解され、香ひづけられた空間と時間である。蜜、

## 第六章

### 蒼い月達の休憩場に就て、及び小事と眼とに就て

我々は再び出發して或る高さにまで到達した。その時、部下の人々は行途に遙か一勝の山脈の姿の見えることを告げた。私は直に指揮の觀測を[illegible]た。[illegible]から[illegible]に[illegible]上に幾何學的な系辯を望見し得た。私は方向を轉じて前方に[illegible]の方向に進んで行つた。

やがて我々は純粋な光瀾帶に入り込んだ。我々は燦爛たる光線の眞中を航行し始めた。光輝が次第に部厚になり、胡粉の如く、高い音響をさへ發し始めた。これが我々の船體に微かな振動を與へた。わけても強い光線が彈丸の如く我々を撃ち、その衝動によつて全船を鳴動させ、我々は恰かも巨大な波浪に弄ばれてゐるかの如く感じた。光線の放射は絶えず次第に迅速に物凄く繼續された、すべてそれは我々の前方に行途を遮ぎつてゐる山々の仕業なのであつた。分光器はオツミアムの存在を決定した、さうして私はそれによつて前方の山々が激しく活動するプラチナから出來てゐるものであるとの結論に到達した。そして我々が接近するに從つて、クリスタルで出來てゐたエンチンの内部は恰かもそれが電氣(フールマイチン)行であるかの如く光線の成極作用(ポラリゼーション)を引き起した。これが又我々の著しく困難な進行を説明したのである。

かくして多くの困難を經て我々は堅い壁の前面に到達した、それは石板色をして恐ろしく磨かれてゐるのであつた。こつ手らたバルコニーと所とはたんす[illegible]の不[illegible]ちぶしてゐたのであつた。この土[illegible]の上を[illegible]ち望つた[illegible]に[illegible]方に[illegible]した[illegible]

の正面を發見した、これも赤陰く隈かれて光つてゐた。我々はこの二十面體（アイコサヘドロン）のプラチナの塊りとも云ふべき山を越えた。等しい大きさの二十九の塊りが端れから端れまで山脈を形ち造り、巨大な蛾の如き印象を與へてゐた。最後の塊りの眞中が割れてゐた、その波狀の狹谷中に我々は深く沒入した。

入口は白金で飾られてゐた、それが粉々に碎け散つて、その破片が薄い虹のやうな色彩を呈してゐた。

更に進むと巨大なコンクリイトが狹谷の壁から滲み出て我々の脚下に轉落し赤と褐色とサフラン色を混合した雲の波を搔き起した。更に深く坑道の底にあたるところには時々泉が噴き出した、それは血汐のやうに濃い色をして噴き出る度毎に植物の斷片から成り立つてゐる一種の濕かい芝生や、柔かな水晶や、ゴムの屑屑や、糊の如き石や、動物液や、凝結した油等を一緒に吐き出した。突き當ると道は開かれて大きな圓場（アリイナ）に出た、其處には朧ろ氣な水族館に不可思議な幽靈が簇生してゐた。かれ等の陰影が驚くべき混沌狀態で相互に錯綜してゐた。かれ等は不透明ではあつたが絶えず相互に貫ぬき合つてゐた。不思議な騷亂！最後の月が多孔の大杯の中で腐爛しつつあつた、その周圍には悲慘な不潔な蒼い月達が散亂してゐた、かれ等の光りは失はれ、屍骸は曝され、恰かも錯落裏に推積された物象の如く、或は[illegible]

我々は此處を半周してやがて出口の方向へ進路をとつた。サーチライトを全部照らすことを私は命じた、輝き月輪が凄慘として象牙の如く照らし出された、この時私に忽然として一種のギジョンが浮みあがつた、おゝ無限に悲劇的なギジョン、—恰かも千一夜物語の船乘りシンドバッドによつて語られた象の墓場の如く、偉大な白き死骸と、晒らされた骸骨の無限の推積。

今や、我々は出口の方に近づいてゐた。發光は山々の內側から睫毛の如く震えてゐた。我々の前面の視野全體が耀動し、騷亂した黄金の收獲時、最も美しい光りの麥畑、私は其處を通過する時、最も重い麥を刈り取り、それ等を束に結んだ。人間の土地を永遠に豐饒ならしめんが爲めに私が搬んで來たものは次の如きものである。

スザラウカ、或は波蘭土の小麥と呼ばれた北極星、非常に特色のある黄色い穀物、莖は中位な高さで、一杯によく實つてゐる。刈ることはむづかしが、よく霜害に抵抗する。

ヴアリユットの赤と呼ばれてゐるアルゴル——赤い莖を持つ中丈の赤い草、刈ることは困難ではあるが、早く成熟する、そして雜草を繁茂する餘地を與へない。凡んど如何なる土地にも生長する、植え付けは二月の終り頃までにされる。

ジャフェット若しくは神の小麥と呼ばれるアルテニア——美しい赤い實、極めてよく成熟する。莖は白く丈夫である。何處の土地にも蒔かれ、春秋二期に蒔かれる。極めて早く熟り、補助草を持たない。

良き農夫と呼ばれるベテルゲウス——黄色な穀物、重い、たいへん水車屋に好かれる、よく銹に抵抗する。莖が金色に光つて、曲げ難い。時節は早く、補助草をもたず、どんな土地にも生長する。

赤いスコッチの金の棒と呼ばれてゐるストオク——中位な實、大抵は磨かれて半黄色で半赤である。莖は非常に美しく、丈夫で長い、上の方だけが屢々ヴアイオレット色をしてゐる。たいへん堅固で、よく霜や銹に耐へる、副生が澤山よつて、收獲時が遲い。

野邊と呼ばれてゐるアルダバラン、堂々として立派な黄色の穀物、膨れて重い。美しい白い莖、長いが極めて纖維に富んでゐる。銹びない、澤山の副生を持つてゐる、さうして何處でもよく育つ、

馭者と呼ばれてゐるリゲエル——黄色く鼠色をした實、たいへん膨れて、少し縮れてゐる。白い莖、長いが太く、刈るのに骨が折れ僅少の收穫。よき土地を必要とする。

黄色い棒と呼ばれてゐるアーチマアド——赤褐色の穀物、核が黒い、黄色な莖、太い鳶色の天鵝絨の莖。種類が極めて多く多産的である。生長の遲いのが缺點。

鳶と呼ばれてゐる南方十字——白い實、寧ろ膨れてゐる。莖は白く、厚く纖維がある、葉が大きい。四角な莖の小麥の中では一番早い、よく熟す。よき土地に蒔かれなければならない。

私達はほんの小さな眼の中を旅してゐるのではないか。さうして色々な物を見物してゐるのではあるまいかと思はれ始めた。腦髓の小麥。

## 第七章

## 色彩の分娩に就て

私達は何處にゐるのだ、一切が散布され、分解する。機械が呻吟する。プロペラアの各廻轉は私の最も懷かしい思想である。

モオトルの內部の水晶はいくらでも鍛へられ、そして膨れ上がる。技も堅牢に組成されてゐるメタルが相互に離れようとする。液體に泡が生じる。この空氣を呼吸することは不可能である。私の仲間は驚愕の哄笑でふるへてゐる。私にかれ等をひとり[illegible]

ければならない。かれ等の自動的な身振りが我々を救ふに充分であらうか？

數秒の後に、私が船内を一週した時、床が私の重みでへナ〱した、自分はまるで泥の中を歩いてゐるやうな氣持をしながらデッキの上を歩いた。最も堅い物體も熱で溶けるやうに思はれた。一番光つてゐる部分が薄皮で包まれてゐるやうになつた。磨き立てられてゐる隅々が錆び、他の表面がその光を失なつた。燐のやうな時計の表面が消え失せた。私の周圍の一切が軟む、一切が分解し、溶け微かに、非物質になつた。

私は中央のキャビンに逃れた、其處はいつも私が仲間から離れて孤りゐるところなのだ。私は私の機械の主要部である原動力を保存してゐる箱を握る。分子的螺線（モレキュラア・スパイラル）、どうでもなれ！ 私の眼はその箱に附屬してゐるペリスコープに膠着した、さうして、私はその發明者である不斷の動作を觀察する。此處に閃光がある。一秒時の百萬分の一、閃光は凹面のへ・パタイトの中に包まれて眞空の中に動搖し、呼吸し、生息してゐる。極度な自然の閃光を結合し、分解し、倍加するZN――プリオスの一切が蠕動し、飽滿してゐるやうに見える。短絡が結合を不可能にする。一切がファンクションすることを止めた。へ・パタイトの中の眞空が機械の全部を浸食する。船中の一切の機械と物象とが擴大され、それから短縮し、無數の小虫のやうな[illegible]を放射しながら還元する。内部分子の網目が明瞭に定義され、アトムの廻轉が手に取る如くに見える。私の船が風の薔薇のやうに開らく、そして再び擲のやうに開らく。私達は今にも爆破しさうである。私は今唯だ私の頭腦を通してのみ見ることが出來る。私は廻轉をもとに戻すとに努めなければならない。眞空の鍵盤の上に私の指を置いて、私は眞空の流れをその船脚の役目をしてゐる機關の方に引きよせることによつてその方向を轉換させることに辛うじて成功した。眞空の巨大な放射が密度の協力的能率を回復する。この時、私は不可思議な現象を見た。焔の回復と共に、へ・パタイトはシュー〱と唸なり、一切が煙りに包まれた。私のヴィジョンの視野が旋渦の中に溺沒する。褐色を帶びた赤が靜かにスクリーンを攻撃してそれを包んでしまふ。それから粗い表面を持つてゐる暗い赤が藻のやうに縮れ、進んでゐるフィルムから形造られて現はれて來る。各々の膜の上には水泡がふるへてゐる、それが冷えゆくラグのやうに破裂する。突然、赤い染料の塊りの眞中が分裂する、フィルムが右と左りとに別れて群居し、水泡が更に騷々しくなる、さうして青い線が現はれ、それが迅速に頂上と底と兩方に擴がる。この[illegible]凡ゆる方向にその枝をひろげる。それが樹の形をして[illegible]

の葉のやうに、小さくふるへてゐるフィルムの赤の中に突入する。青と赤の葉が一緒に並び、かれ等が溶け合ふ迄、靜かに廻轉する。其處には二個の豆の形をした點以外には何物も殘つてはゐない、青と赤とが相互に絶えず相對してゐる。それ等は恰かも男性と女性の二個の胚種のやうに見える。かれ等は細胞の群になつて接近し、結合し、分離し、倍加する。胚種はそれぞれ桨の網の中に包まれ、やがて膨れて雌蕊のやうな肉付になる。小さなオレンジの菱形が表面に浮游する。やがてオレンジとヴァイオレットが相互に貪噬し始める。小枝と、大枝と幹とがみんな震憾し、崩壞し、再び起きあがる、突然オレンジが瓢簞の花のやうに咲く、簞が深くなり、その底には二個のヴァイオレットの雌蕊が赤と青の雄蕊の上にふるへる。全てが中心から周圍に至るまで旋轉する。やがて燦爛とした黄色の球が、恰かも果實の如く見える球が現はれる。黄色が破裂して、凡ゆる形體の粒に分れ、多樣の色彩を帶びた種子に變ずる。その時、一切が急霰の如く激しく落下する。そして一樣に綠りなのだ。

それ等の眞中に凡ゆる種類の糸や、鎖りや、連絡が現はれる。節のあるのや、歪んだのや、長細くなつた無數の幹や枝。草、それが黑くなり、灰色に變り、遂には濃霧の如き形態の集合中に消え失せ、白色の[illegible]に呑み込まれる。白に歸つて、固定する。

やがて圓盤の形をしたヴル[illegible]動する。その動作は規則的だ。私は眞空を手放す[illegible]の周圍の一切が凝結する。液體は出來るだけ凝集され、固體はかれ等の鋭い突出と、明らかな角度を取り戻す。見慣れた有益な形態が相互から發展する。機械がやがて唱ひ始める。舵が再び働き出す。物體の質は空間に於ける色である。虛無の中に於て、それは落下の動作である、かくして私達はその過程を作業した。それは萬物の根元である。

## 第八章

### ヘテロクリトに就て

上と下、虛空が至る處で我々を把握する。

私達は稍や柔らかな、おだやかな、やさしい大氣の中を航行してゐる。漠然として星座が白い夏雲のやうに我々のほとりを通過する。シャボンのやうな塊りが起伏し、沈潜し、滑走し、崩壞する。一切が靜かに動く。私達は雪のやうな進路を後にする。

我々の進行が次第に遲くなる。一切が固くなる。私達は今天空のバルチックに到達したのである。眞珠がやわらかく輝いてゐる。

[illegible]中にはただ岩鹽が[illegible]

な光り、雲片が光りを放射する。今、我々に一時間[illegible]三ノットの速力で進んでゐる、強い抵抗を感じながら前進してゐる、嗄れた牛のやうなうなり、鯨の激動、貝の咆哮がきこえる。

私は自分達がたしかに袋小路にまよいこんだのだと思ふ。私は始めて我々の見棄てた人間の住居が戀しくなつた。部下の人々は血の氣が失せて蒼白くなつてゐる、かれらの皮膚の下に青色が現はれ出した。かれ等は憔悴した眼付で私の方を見てゐる。時計、時計がヒステリカルに逆轉する。一千年、一萬年、百萬年。私達はいつでも途上にゐるのだ。私達はなにを發見したか？巨大なペンギンが翼を羽搏きながら我々を嘲笑してゐる。私の食指は鳥の嘴のやうに翼の下を掻いてゐる。それが私の皺を咏み出す。虚空はゼラチンオイルのやうだ、黄色い縞が浮び、瑪瑙が密集し、綠りの瓶の中にはギシ〳〵した油が充滿してゐる。

一切が焦躁し、耳朶のやうに開いては閉ぢる。顯微鏡的な口。球根のやうな圓い物體が消え失せ、逆戻り、かれ等を露出しては再び刹那に消え失せる。鍍金された球が昇降して形象を逃る。瞑想か？遊戯か？様々のアラベスクとデザインとが識別される。斑點ある色馬の群が疾走する、かれ等の脚は空を飛[illegible]ぶつ[illegible]ヨート[illegible]つてゐる。棕櫚がうなだれる。蝶の夥しい群、百合の君、小さな狸犬。鶏。土龍が孔雀のやうに歩いて[illegible]

道化の哄笑と同時に、[illegible]衣が[illegible]される。エメラルド色の乗合馬車がその重荷を卸す。一切が砕け、一切が破れる。透明な噴火口が開かれ、燦然たる寄所道具の集合を示現する。一人の印度人と一人の背い黒人とが爐邊で踊り狂ひ、大きなスペイン葱をもつて手品する。駝鳥の卵が坂の麓まで轉げ落ちる。眩暈に捉へられた羊が煙筒の底で廻轉してゐる。雪玉、雪崩(なだれ)が自から分裂して靜止する。泉が此處から嚴粛に湧き出る。騾の背、電光が閃めく。吹雪(ブリザアド)、森林が成長して、死滅する。氷の紙が瓦のやうに飛ぶ。女が彼女の裾をまくる。風車の腕が回轉する。恐ろしい地辷り、書物がライブラリから轉落して、開かれる、かれ等の頁が我々の背後にヒラ〳〵と海燕のやうに落ちる。

その時、一切が寫眞のネガチイブのやうに滑らかに、暗く、薄くなる。白銀の浴泉、山嶽の森砲。私達は虚空の浮氷の中に捕へられたのである。冬眠。

痲痺しながらも、私は氷の上に印せられてゐる小熊の凍った

足跡を見る。その眞中に穴があいて、夜の海豹が呼吸しにやつて來る。

私を震撼する憂愁から逃れる爲め、私は Rob Fludd de Fluctibus Armigero の主著 *Tractatus secundus de Naturae Simia seu Technica macrocosmi historia in partes undecim divisa* を批讃し始めた。vobile Oppenheimio の一六一八年頃の論文、天體の音樂に關する最も完全な論文。

——(虛無の對話に於て)——

# 第九章

## 人間の心に就て

春。

私達は光りの境界で藻掻いてゐる。遙か向ふの砂丘の背後に私達は二個の若い太陽を發見した　かれ等は恰かも二匹の若き獅子の如く相互にふざけ合つて轉がつてゐる、かれ等は相互に上になり下になりしながらかれ等の若い強い齒で創造を破壞してゐる。粉微塵になつた四大が蠶になる。それをかれ等の泡立つ顎が噛み破るのである。一切が火花になつて昇つてゆく、森も山々も。さうしてかれ等の若い爪が宇宙の胸に突き刺されてゐる。

# 第十章

## 女に就て

それはベレニスの夏である。毛と綱と、莖とが我々をとらへ、なんと云ふ暗いシンボリックな森の眞中に我々を連れ込んだのだ！一番手近な星は花のやうである、一番遠いのが豹や犬のやうに唸つたり吼え立ててゐる。一匹の猿が私のキャビンの砲門に倚りかかつてゐる。私は彼の充血した顔から瞳を離すことが出來なかつた。我々の背後にはたツた今後にした純光が退却し、一寸燃えて、遂に微弱になつた。

# 第十一章

## 層に就て

これは空間の赤裸な頂上である。斷えず落下する二重の絶頂である、又土壌の二重の山である。それは漏刻の如く通過して、逆轉されるのだ。

そら。地球は君の戸口にゐる、手に取る如く近く見える。目睫の間に、人はこれを指導する高く聳立つた百姓の姿を見、重い鋤に縛られた[illegible]する彼の[illegible]くことと[illegible]來る。[illegible]時期に[illegible]一[illegible]から[illegible]の[illegible]た土で[illegible]つけら

れてゐる。[illegible]
我等も亦一般の破滅に卷き込まれて轉々する。夜が我々の上に落ちる。土が我々を蔽ふ。大洋の極深も我等の上に干あがる。貝と鰭と翼を切られた動物と、分割された貴族とが我々の上に倒れる。

## 第十二章

## 放射の粉末に就て

我々は引力と、重力と、接合と、メランコリアの形象と、心臓のモノグラムの帶（ゾーン）に入り込む。人はそれ等がかくも明らかな顯微鏡的準備であり未熟な夜のロンデルの上にスケッチされた神經と脈絡との網目であると考へるであらう。

パラボラス。赤球。

一切が新鮮になる。道程が破れる。我々の上に呼吸してゐるのは老年である、恰かも流星の如く、思ひもかけず、突如として、やつて來る恐るべき老年。それは7であるか？それとも±か？我々は最早指をもつて數へることが出來ない。私の仲間達は頭から足の爪先に至るまで白くなり、塵になる。

『みんな各自の位置へ！』

其處には白い齒をむき出して私を嘲笑する死の頭さへ見えないの小さい[illegible]解體に對して蹴きはした[illegible]人である。我々は我々の最[illegible]い。恐らく私は未だ人間の住家に[illegible]私は小さい蒸化器を使用する。放射の[illegible]太陽的物體に變化する。今、何物も我々の[illegible]は出來ない。私達は自分達の源泉にまで立ち戻り

殆んど突如として私達は眩暈的に上下し始めた。[illegible]に凡ゆる天空の繪畫的風景――酋長、奴隸、陳列[illegible]文身――を見棄て一對になつて飛翔してゐるより現象に會釋し始めた。

鳥の如く群生する星座はより親しく知つてゐ[illegible]たことを告げる。此處には既に巨大な瀑布があ[illegible]微かになつた。私には着陸する力が最早失せた。[illegible]如く地球の大氣を通過する。黄金の甲蟲。？の形[illegible]爆破。

# 喜劇詩人カアル・シュテルンハイム

成瀬無極

## 一

ゲオルグ・カイゼルの「カレエの市民」が日本語に飜譯せられ、上演せられたのはもう一昔も前の話である。その後もこの詩人に就ての紹介は數多く現はれた。假令、その作品の飜譯は意外にも餘り試られないけれども。兎に角カイゼルと云へば獨逸表現派の頭目として廣く認められてゐる。然るに、彼と並んでこの派の戯曲家の元老とも云はるべきカアル・シュテルンハイムは殆ど默殺の運命に逢つてゐた。雜誌「文學（リテラトウール）」で日本劇壇の通信を發表したキンクレル氏もこの點を不思議に思つてゐたやうである。ところが最近に築地小劇場の同人がこの詩人の代表作の一つである「ホオゼ」を寶塚で上演したのは最も我が意を得たものと云はねばならない。それは、强ち私がこの詩位と業績とから見て當然の事柄だと思ふからである。そして殊に喜劇詩人である彼が終に日本へ紹介せられたことを私は喜ぶのである。喜劇は到る處拂底である。喜劇を書くことは六つかしくもあり、また作家として危險を冒すことにもなる。勿論、輕い、淺い「茶番」や、官能に媚びる安價な「喜歌劇」風のものは常に在つたし、今も亦、殘念ながら、到る處で全盛を極めてゐる。伯林で由緒のあるレッシング座までが、この種のオペレッテ所謂レヴューを用すやうになつたと云つて或獨逸人は嘆息してゐた。人はその笑ふ對象に依て評價し得られると云ふが、實際滅多に笑ふと損をする世の中である。況や輕々しく滑[illegible]を書くと一口に「愚にもつかない」とか、「下ら[illegible]薄だ」とか云つて葬られてしまふ。それが[illegible]いが、日本でも喜劇を書く人は稀[illegible]

[illegible]

り出す場合も屡々ある。凡て深刻、雄大、熱烈といふやうな特色を發揮する爲めには嚴肅な悲劇的な題材を選ぶに如くはない。また神秘、幽玄、微妙といふやうな味を出すには超人間的世界へ向上するか、識閾下の領土へまで下降することが肝要である。然るに喜劇の世界は凡庸な現實界であり、そこに活動する人物は何等かの缺陷を有する「人間的な、餘りに人間的な」連中ばかりである。偶々それが「眞夏の夜の夢」のやうに夢幻界へ移されても、作者の取扱方は平凡な人間としてであつて、神でも精靈でもない。更にまた喜劇では殊に作者の主觀が人物の背後に隱されることを必要とする。說明は笑ひにとつて禁物である。作者は飽迄冷靜な傍觀者であるべきである。作者が先づ笑ふならば看客は怒るであらう。この說明的笑ひは看客の理知の鋭さを疑ひ、その優越的意識を傷けるものだからである。さて、飽迄傍觀者の態度を保持しつゝ、凡庸な人物を活動せしめて、眞にユーモラスの雰圍氣を生み出すことは決して容易ではない。實は沙翁の偉大を待て始めて完成せらるゝやうな事柄なのである。博大な深遠な個性の所有者でなくては、そして愛をその底に湛へてゐなくては、涙の半面である笑ひは生れないのである。深刻は、悲痛は或程度まで題材や事件そのものに宿つてゐ

の背後に、或はその上に、立つ作者の魂の感覺力から生ず[illegible]である。悲劇よりも、喜劇に於て殊に「何を」に非ずして「如何に」が重大になつて來る。然かも主觀は表面から[illegible]ねばならぬ。喜劇作家は云はば鏡の裏の水銀の[illegible]うなものである。

表現主義は戰前に於て著しく頽廢的傾向を帶びて來た印象主義に對して主張せられた運動で、戰爭に依て火と血との洗禮をうけて、益々物質的文明から離れて精神的新文化の樹立に憧がれ、外界に眼を閉ぢて自我の叫びと幻視との表現に努めた。建設のためには先づ破壞が試られねばならぬ。自我の凝視は人間性の根源へまで徹することを要する。表現主義は自ら革命的であり、還元的であり、情熱的本能的であつた。そして、一方には戰爭の慘劇が反撥的に人類愛の福音を教へた。原罪の觀念から懺悔奉仕の心への道が開かれた。犧牲と獻身とが高唱せられた。さてかういふ傾向の何處に「笑ひ」が潜むべきあらうか。左に拳銃を握り、右に詩筆を揮ふと稱する駄々派にどうして笑ふ餘裕が見出せよう。本能に生きる動物には滑稽と同意義の笑ひは認められない。情熱に燃える唇からどうして哄笑が生れ出るであらうか。濛々たる硝煙と殷々たる砲聲と累々たる屍體とが永久に笑を葬

つてしまつたやうに見えたのに何の不思議もない。勿論、その反面にはかの神經の痲痺的手段としての官能的笑ひは絶えず聞こえてゐた。これは云はば飲食睡眠生殖等と同様の生活要件(ベデュルフニス)である。審美的の意味に於ける笑ひとは沒交渉である。愛の思想は笑ひと相容れるのみではなく、愛は畢竟笑ひの母であるべきではあるが、救濟を目的とし、受難と忍苦との道を行く人類愛の使徒は、超越的な、觀照的な笑ひの世界に住むには餘りに道德的であり、宗教的であり、餘りに眞面目であつた。表現派の中に殆ど喜劇作家が見出されないのは怪しむに足りない。わがシュテルンハイムはこの中に在つて實に異彩を放つものと云はねばならない。彼は疑もなく獨逸現代の最大喜劇詩人と稱せらるべきである。今、私は「現代」と云つたが、それは稍々廣い意味に解せらるべきであつて、シュテルンハイムの傑作の大部分は寧ろ戰前の社會を對象としてゐることを斷わつて置なければならない。彼の「市民の憎惡」(ブルヂョワーハッス)は戰前の市民に對するものであつて、大戰と革命とを經た今日の獨逸市民には恐らく適用せられ難いものである。今日では「戰爭成金」(シーバア)といふ新らしい型が出來てゐる。シュテルンハイムの取扱つたのは、ヘインリヒ・マンの場合と同様に云はば一時代前の市民生活である。「一九一三年」[illegible]

のに依てもそれが分かる。喜劇詩人としてのシュテルンハイムの位置と特質とに就て述る前に先づ彼の重な作物を論評することが適當だと思はれる。何となれば、私の意圖は抽象的議論でもなく、況や議論の議論では猶更なくして、作物そのものの紹介に在るからである。

## 二

人としてのシュテルンハイムに就ては遺憾ながら知るところが殆ど無い。その生年すら曖昧である。ブロックハウスの袖珍百科辭典に據ると一八七八年四月一日とあつて丁度ゲオルグ・カイゼルと同年の生れになつてゐる。カイゼルは十一月生れであるから殆七個月の年長である。シュトルクの文學史も同様である。然るに、ワルツエル、クメル、マルテンス、エールケ等は一八八一年としてある。一九二二年版のキュルシュネルには名だけあり。"Wer ist's?" には全然載つてゐない。パルテルスはその「最少壯派」(チィ・ユングステン)の中で用心深く生年を掲げることを控へた。私もさうすべきであるが月日を明記してゐるのはブロックハウスだけなので、假りにこれに從て一八七八年としておかう。[illegible]要するに大した問題でもない。表現派の元老とも云ふべき[illegible]カイゼル[illegible]

といふことが分れば宜いのである。マルテンスに依ふと、シュテルンハイムは銀行家の息子としてライプチヒに生れ、伯林で育ち、一九〇九年にミュンヒエンに移り、そこでフランツ・ズライと「ヒュペリオン」を刊行した。それから戦争の勃發までブリュッセルで暮し、今は瑞西に居る。これ以上の事を私は知らない。なほ調べてみようとは思つてゐる。彼が生きて來た時代の空氣は彼の戯曲の外に、「第二十世記初頭の年代記」中に收められた五つの短篇小説及、「歐羅巴」といふ二卷の長篇小説に依て覗ふことが出來るけれども、彼自身の閲歴に就ての告白的のものを私はまだ持たない。強て擧げれば昨年の「芝居」誌に見えた、「舞臺藝術家としてのテア・シュテルンハイム」と題する一文位のもので、彼は自分の娘を紹介しながら述懐めいた事を云つてゐる。その大意は下の如きものである、「子供達には父の轍を踏まさないやうにと切に私は期望してゐた。父は生涯を藝術的に無理解な群衆と鈍感な批評家とに對する無意味な戰ひで送つた。子供達はどうか絶對に藝術には手を染めないやうにと切に祈つてゐた。二人の息子はどうやら歐洲社會の目立たない、無邪氣な、有益なメンバアとして教育する事に成功したやうだ。ところが娘のテアは小さい時から、世間に反抗することに依て受ける父の惱みから却て刺戟せられ、一方にはまた革命[illegible]に十四歳のときにチョオリ[illegible]た。からなつてはどうも致方も無い。そこで、ドレースデン及ケルンで修業させた結果、今や私の喜劇「デル・ネツビヒ」(獨逸座上演)の舞臺意匠をさせることになつた。この冒険は成功した。女流美術家は非常な喝采を博した。グスタアフ・ハルトウングは彼女をケルンの劇場へ招聘した。そこでも大した人氣だと云ふ。」之に依てみるとシュテルンハイムの歩いた道はさう平坦なものではなかつたらしい。同じく惡く云はれながらもカイゼルの方が早く、そして廣く認められたからである。そして、娘のテヤは本當に藝術家的天分を豐かに持つた少女のやうに思はれる。

シュテルンハイムの特色は前述の如く諷刺、譏誚の方面に在つて、その代表作は「市民的英雄生活から」と題せられる八篇の戯曲なのであるが、それ前に彼は新浪曼主義的の二部悲劇「ドン・ホアン」(Don Juan)を書いてゐる。一九〇九年乃至一九一〇年頃の作であつて、まだ彼一流の特色が構想にも文體にもはつきり出てゐない。この時代の作を彼は後に自ら嘲つてゐるやうに見える(殊に「ホオゼ」の中に於て)。「ドン・ホアン」の傳説は幾多の詩人に依て戯曲化せられたが、シュテルン

ハイムもこゝに一新機軸を出さうとしたのであらう。然しながら、この二部曲は徒らに冗漫に流れて統一を缺き印象が稀薄である。彼のドン・ホアンはレーナウのそれのやうに「久遠の女性」を求めて漂泊する騎士である。その對象はマリイアといふ當時十四歳の少女であるが、ホアンはこの女性を得ることが出來ないでその苦悶を紛らすために肉慾に耽溺し、幾多の少女を弄ぶ。丁度、カイゼルの「ギルとジャンヌ」でギルがオルレアンの處女の幻影を追うて終に少女虐殺者になるのと同樣の心理である。マリイアの母もその誘惑の手を免かれることが出來ず、父はホアンの爲めに殺されてしまふ。ホアンのマリイアに對する愛は殆ど聖母崇拜（マリイエンディーンスト）に近い。第二部に於て、失戀した彼は十字軍に出征する。この契機（モチーフ）はその昔戀愛詩人（ミンネジンゲル）が好んで取扱つたものである。光輝ある幾多の勝利の後詔告せられて急遽歸國する。一方にマリイアはフイリップ王の寵妃となつが、王がホアンを世嗣としようとするのに憤慨して自殺する。ホアンは未來に於ける戀の成就を夢みる者のやうに最後の戰場へ赴く。即、この作ではかの「石像の招宴」の筋を缺き、その代りに戰爭を取り入れて中世的色彩を添へてゐるが失つたものの方が大きいやうに思はれる。主人公は浪漫的騎士の要素と平凡な遊蕩兒のそれと混合してゐるに明確に性格が獨創ない。結局、モリニール、モーツアルト、グラッベ、レーナウ、ホルタイ、ハイゼ、バイロン、ショオなどとの比較に價する作とは思はれない。カイゼルは古傳説の取扱ひ方に於て遙により大膽であつて、兎も角も新意を示してゐる。要するにこの作で注意すべきはシュテルンハイム一流の新文體の萌芽であつて、或評家の所謂「手袋のやうにぴつたり嵌つた」表現が往々見出される事である。

さて、彼の本舞臺である「市民的英雄生活から」（Aus dem bürgerlichen Heldenleben）とは何であるか。即、「下袴（したばき）」、「金箱」、「市民シッペル」、「スノッブ」、「ペルレベルタ」、「一九一三年」、「候補者」、「白紙」等の戲曲の總稱であつて、固陋な、利己的な市民生活に對する辛辣な諷刺である。何人もさう認めざるを得ない。然るに作者自身は「下袴（ホオゼ）」の新版に冠して自家の立場を明かにし、世評は誤つてゐると斷言した（一九一八年）。この緒言は頗る難解であるが、大體次のやうな意味に解せられる。「私が一九〇八年にある世話喜劇を發表したときに、獨逸劇壇はゲルハルト・ハウプトマンの自然主義の後をうけて、昔の物語中の王樣と若い妃と素敵な小姓との假裝舞踏の外何も知らなかつた。これ等の人物が色々に姿を變へて現はれるのだ。立派な衣裳を着て絢爛たる言葉を使ひ、高潔な振舞をした。ところが其の作中にある市民の[illegible]

の話題も極く平俗な事柄に限つてゐて、節氣の無い言葉が用ゐられる。そこで世間の批評が下つた、是が詩だと云へるか、平民の下袴とそれに就て理窟をこねる五人の俗人があるばかりではないか、何處に詩があるか、しかも先例の無い言葉が用ゐられてゐると。作者は故意に同種類の喜劇を續いて公にした。一九〇八年から一九一三年へかけて七篇を公けにした。最後のものを「一九一三年」と命名した。これは戰爭の前年であるが、市民の懸引が何處まで成功するかを示したものだ。詩人としては唯實生活から寄せ集めて行けばよかつたのだ。これ等の作は廣く世間へ頒たれたが、フランツ・ブライを除いて何人も私の眞意を了解したものは無かつた。「市民的英雄生活」といふのがこれ等の作の總稱である。此處では市民生活の內的矛盾が曝露せられてゐるが、その主人公は皆一種の熱情家であり、意志の人である。社會の抵抗に拘らず自己本然の力へ歸らうとする勇士である。だから、私の目的は決して世人の評するやうに反語(イロニイ)や諷刺(サテイーレ)ではない。私の說くところは、力を失はぬ爲めには因襲的の齊唱に耳傾けることとなくして、自己獨特の聲に聽くべしと云ふのにある。唯一無比の本性に生きよ、と私は云ふのだ。團結(ゲマインシャフト)は數字ではなくして勇敢な個人の獨立的飛躍である。」

これで、シュテルンハイムが嘲笑し愚弄しながらも固陋な、然し狡猾な主人公をして大抵の場合成功させるわけが分つたといふものである。新浪曼主義的夢想に耽る者共の頭を踏み越えてこれ等の粘り强い厚顏無恥の力は丁度タンクの樣に推し進むのである。「ベエヤ・ギユント」に現はれる粘液質の怪物のやうに、ウエルフエルの「鏡人(シュピーゲルメンシュ)」に於ける「蛇の國」の住民のやうに、これ等の市民は受働的抵抗といふ利器を用ゐて終局の勝利を收める。吾々は先づマスケ氏一門に就て之を見よう。

「下袴(しもばかま)」(Die Hose)は前述の如く築地小劇場の手で既に上演せられ、譯書も近く公にせられることゝ思ふから詳說する必要も無いが順序として一言して置かう。これと「市民シッペル」とは最も人氣のある作で屢々上演せられる。主人公は下級官吏のテオバルド・マスケ(Theobald Maske)であるこのマスケ(假面)といふ名は象徵的に用ゐられてゐるやうに思はれる。成功する爲めにはマスケが必要である。實際この男は一種の假面を着けてゐるやうだ。元來鈍感だから全然意識してゐるわけではないが、云はゞ地顏そのものが假面なのだ。又は、面の皮が厚いので段々剝げて行くうち自然に生地が現はれるとも云へる。若い美しい妻のルイーゼが國王のお通りのときに大通りで下袴(ホオゼ)(日本流に云へば腰卷ゆもじ)を落とした。マスケは一生の不面目として、平生空想に耽つて不しだらな結果だと云つて女房を折

陷する。然るに、この事件のために意外にも二人の間借人が現はれた。文學者スカルロンと理髪師マンデルシユタムとである。二人とも下袴（ホウゼ）の落ちた瞬間に居合はせて恍惚となつたのである。二人は共に浪曼主義者である。スカルロンは哲學を語り、ニイチエの强者の道德を說き、「力は最高の幸福だ」と云ひ、「心臟は一片の筋肉に過ぎぬ」と云ふ。理髪師は肺病の感傷家でワグネル崇拜者である。ルイーゼはスカルロンに心を寄せる。然し、男は飽迄文學者としてこの戀愛を題材として取扱ふ。三十二才になる隣りの老孃ドイテルは二人の間を取持たうとつとめる。充たされない自己の欲求を他人の戀に依て滿足させようとする一種變態的の心理が動いてゐる。マスケは新聞以外には讀書もした事もないやうな無知な、動物的な、飽迄頑健な大男で、薄給の爲めに子供を作らぬ方針を立ててルイーゼに近寄らない。これ等の滑稽的葛藤の發展中スカルロンは偶々衰へ果てた娼婦に興味を感じ、この女に改宗せしめられる。始終男性の情慾に身を任せる彼女はこの受難の力に依て全能の神へ一步一步近づくといふやうなヴエーデキンド流の娼婦禮讃に惑溺し、一年分の宿料を拂つてルイーゼの家を去る。その代りに「見知らぬ人」が間借りに來る。この人は學者で家人との交際を拒絕する。「便祕に苦んでゐるが、それはこつちの話だ」と呟く。マスケはこの間に老孃ドイテルを誘惑して我物とし、理髪師には間代を上げて一年間の契約をさせる。今、彼は一大秘密を若い妻に打ち明けることが出來る。それは、愈々子供の製造にとりかゝつても差支無いといふことだ。彼は誠に市民生活の勇士（ヘルド）であり、力の人である。

この劇にはたるみがあつて興味が殺がれると云ふ人もあるが大體に於て成功した作だと思ふ。各の性格も可なりよく描かれてゐる。勿論、誇張はあるが、却てそこを覗つたものとも云へる。場處の統一を保つために食事の場面を幾度も繰返へすのは感心しない。腰卷の樣なものを舞臺に出して官能的の笑ひを買はうとするのは始めから贊成しないが、浪曼主義的の奇麗事に對する反動と見れば我慢が出來ないこともない。殊に注意すべきは作者一流の所謂「電信體（テレグラムシユテイール）の文章」である。カイゼルは之を「カレエの市民」に用ひてロダンの鑿の痕を想はせるやうな力の感じを與へた。枝葉の點を切り棄てゝ思想感情の核心を浮き出させ箴言的の緊張味を出す手法である。この點ではヘツベル、イプセン、ヴエーデキンドよりも過激である。往々希臘劇を思はせることもある。シユテルンハイムはこの文體を喜劇に用ゐて成功した。この場合には緊張の契機の外に弛緩のそれが加はつて、そこから笑ひが生れるものと考へられる。この點に就てアル

フレッツト・ケルの云ふところは要領を得てゐる。即、吾々を美的に樂ませる或種の事柄に於て、快感の根據は吾々が推定するといふ點にのみ存する。——この快感の原因は、云はないところを察し得たといふ自分の慧眼に對する喜びばかりでなく、皆まで云はずに、はつきり解らせることが可能だといふ、その事に對する喜びでもあるのだ。快感は單に主觀的、利己的のものではなくして、同時にまた無邪氣な客觀的のものもある。これは推論の美的快感(Der ästhetische Reiz des Schlüssezichens)である。リーベルマンが「描くとは切り棄てることだ」と云つたのは如何にも道理だが、然し、カアル・シュテルンハイムよ、切り棄てることはまだ描くことではないのですよ。』この切り棄てること(Weglassen)とすぐその後をうけて補つてゆくか、または逆説に依て明かにするか、その息もつけないやうなテムポが、絶えず喜劇的に緊張させてはまた忽ち弛緩させつゝ、快活な笑ひを生んでゆくのである。シュテルンハイムはこの手法と、ヴエーデキンドから學んだ、互に別々の事を云ふ、喰ひちがひの對話(vorübersagen)と、異種の事柄を同時に云ふ、混合的選詞とに依て喜劇的效果を擧げてゐる。そして盛んに倒併法を用ゐ、可及的冠詞を避けて新文體を作り出さうとした。ディーボルトの「言葉の赤裸化」(Die Demaskierung der Sprache)である。然し、この傾向は往々無意義に陷り、殆ど不可解なものを作り上げる弊がある。そして言葉の生命を殺す危險は絶えず存在してゐる。

「スノップ」(Der Snob)の中に再び「ホオゼ」のマスケ大詰が出て來るのは面白い。スノップとは誰であるか。一般に「氣どり家」の意味に解せられるが、然し、單なる見得坊でなくて、野心を懷き、權勢を求めるためには手段を擇ばないといふ圖々しさと狡猾さとが含まれてゐる。文學史家シュトルクはこの劇の初演に對するハンス・エーヴエルスの言葉を引いてゐる、「スノップとは常に自己本然の感情に適合しない事をする人物である。スノップとは常に世間一般と反對の立場に身を置かうと熱望しつゝ、然かも最後の纖維に至るまでこの世間一般に屬してゐる人物である。」そこでシュトルクの續けて云ふには、「してみるとシュテルンハイムは明かに彼が破滅せしめる市民階級に屬してゐるのだ。さもなければ、何處かにより、偉大な世界像(ウェルトビル)が堂々と現はれて來る筈だのに、一向それが見えない。」この批評は兎も角も、スノップの本體はこれで多少明かになと思ふ。そして「ホオゼ」の主人公の息子が即このスノップあることは少しも不思議ではない。この三幕の喜劇は「ホオゼ」第二部と云ふことが出來る。

唯吾々の親愛な理髪師が見えた

いのは淋しい。官吏テオバルド・マスケはもう退職の身で六十歳になるが精力旺盛で私生児をこしらへて息子のクリスチヤンに迷惑をかける。今迄も毎年何かしでかしては金をせびつて行く。父の粘り強い性質と母ルイーゼの空想的要素とを受けついだクリスチアンはジュビールといふ女と四年間同棲してゐる中に言語學から實業方面へ誘導せられ、また交際術一般を傳授せられた。金もこの女に貢いで貰つた。今や彼は大會社の總支配人となつて伯爵家の令孃と結婚する見込が立つてゐる。どこまでもマスケである彼は先づ恩義のある情婦を遠ざける。今迄彼は女から負うたものへ五分の利子をつけて帳簿へ記入しておいた。即、二萬四千馬克で手を切るのである。かういふ所置は曾て女から教へられたものであつた。次には兩親を撲殺せねばならぬ。これも養育料を五分利つきで計算しておいた。父と子とは算盤を持て金額の多寡を爭ふ。結局兩親は仕送りをうけて猶逸を退去し、瑞西のチューリヒへ移住することになる。かうして兩親は死亡した體にして彼は伯爵に求婚し、終にその承諾を得る。成金と貧乏華族との握手である。約束堅められると、「富豪がやる最初の贅澤」として死んだ筈の家族を迎へることにする。一つには老人達に誇りたいのでもあり、一つには腕一本で出世した者が平民の兩親を持つのは却て一種の裝飾となると思つたからでもあらう。然し、これは少し違

であつた母のルイーゼは突然死んだのである。最後まで「クリスチヤンには知らさないで」と云ひ續けたさうである。そして父のテオルドは分を越えないのが最上の策だといふ例の主義から息子の不相應な結婚に大反對をする。「お前のお袋からして氣違ひ染みてゐた。」然しながら、盛大な結婚式の光景と息子の如何にも世慣れた立派な態度とを見て父の心は解け、大滿足して新夫婦を祝福して、自分は再びチューリヒへ引退する決心をする。父と子とは相抱擁して笑ふ。„Maskefor ever!"といふクリスチアンの言葉に對して、父は「うむ、分つた、中らずと雖も遠からずか。いや血統にあることだよ」と云ふ。この場も面白いが、喜劇の「落ち」はこれからである。二人切りになつた新夫婦が四方山の話をするうちに、クリスチアンは亡き母の肖像畫を新妻に見せる。ルノワールの筆に成るものだ。これに就ては一つの逸話がある。母は若いとき Bois de Boulogne の公園で下袴を落とした。それをルノワールが見て其處へ立ち竦んでまつた。結局彼ともう一人その光景を見た佛蘭西の子爵とが彼女に接近する機會を求めた。かくしてこの肖像畫が出來上つたのである。恰も彼の生れる一年前の事であつた。この話の後でクリスチヤンは三段論法に就て長々と講釋する。印度様に論證

が現はれたといふ古い記事を繰り返へして讀んできかせる「ホオゼ」の主人公と何たる對照を成すことであらう。然し若い妻は欠伸を押へて、「して、その子爵はどうなりました」と訊ねる。「どの子爵」と、自分の出鱈目の尻が割れさうになつて一寸狼狽したが、流石はスノッブであり、マスケである。彼は忽ちこの間を利用して自分を華族の落胤のやうに思はせる。「まあよくこそ間男をして下すつたのねお母さま」と云ひ始めて最後の隔てがとれたやうに貴族出の妻は良人の胸に身を投げかける。この最後の詭計(トリック)は主人公の性格描寫に畫龍點睛の妙を成してゐると同時によくこの喜劇全體を引締めてゐる。

　この劇では中流社會から上流社會へ舞臺が移されて、凡てのスケールが大きくなり、事件も眞劍になつて來るので、「ホオゼ」に於ける樣な明るい無邪氣な笑ひは漸々に失はれ、階級鬪爭、陰謀、詭計と云ふやうな要素が加はつて來る。そして一方にはテツイーボルドの所謂殿樣としての、大先達としての(der Grandseigneur) シユテルンハイムが顏を出し、佛蘭西の客間(サロン)文學の臭味が加はつて來る。

「一九一三年」に至るとそれが愈々甚だしくなつて著しく興味を殺がれる。最早喜劇ではなく三幕の「中間劇(シヤウシユピール)」としてある。主人公はスノッブのクリスチヤン・マスケであるが、恐ろしく立身して男爵の肩書附きで、閣下と呼ばせて納まりかへつてゐる。かうなると最早市民(ブルジョア)めいたところも、スノッブ然たるところも無くなつて可笑味に乏しい。殘るところは唯、マスケの血に潜む旺盛な權勢慾だけである。七十歲に達したクリスチヤンの胸には依然としてこの焰が燃えてゐる。息子のエルントには母方の血が傳はつたか享樂主義者として實業界に對して不可抗的の嫌惡を抱いてゐる。之に反して伯爵家へ嫁したゾフイーにはマスケの情熱が熾烈に燃えてゐて動もすれば父を凌いで主權を掌握しようとする。和蘭政府へ武器を供給する問題に關して父と娘とは暗鬪を續けてゐる。クリスチヤンは近く戰爭の起るべきことを豫知してこの契約に反對するのである。ゾフイーは純新教的の和蘭政府に取り入つて他の競爭者を排斥するために、教會方面に於ける大宣傳を行つてこの契約に成功しようとする。クリスチヤンは飽迄之を妨害しなければ自分の權威が失はれると思ひ込んで、終に非常手段として突然舊教に改宗したことを凡ての新聞に發表させる。かくして娘のゾフイーを克服すべき勝利の豫感に陶醉して狂喜の餘り卒倒して死んで仕舞ふ。この場面は殆ど悲劇的の効果を持つてゐる。挿話としてはクリスチヤンの秘書役を勤めながら少壯國民派の總理に推されようとしてゐた自由主義者のヰルヘルムが、クリスチヤンの他の

娘オッティリエに戀せられ、終に誘惑的の環境の力に支配せられて變節する節があり、キルヘルムの友人フリードリヒに於て精神的新文化の曙光が暗示せられてゐる。枝葉の點を削つて父と娘との爭鬪に全力を注いで書いたならばマスケ三部曲の結びにふさはしいものが出來たであらうに、徒らに筋が紛糾して感銘の淡いものとなつたのは遺憾である。一般に悲劇的情操を缺いてゐると思はれるシュテルンハイムは一方にはまたかゝる葛藤を喜劇的に解決する餘裕をも持たぬであらうか。若しさうだとするとシュトルクの批評も敢て不當だとは云へなくなる。

「金箱」（Die Kassette）は然し再び作者の名聲を恢復するやうな作である。この五幕の喜劇は最もモリエールの「守錢奴（ラヴァール）」に近いと云はれる。雰圍氣は「ホイゼ」のそれを思はせるものがあり、人物も親みがある。主人公は中等教員のクルルであつて、姉の後を襲つて後妻に入つた若いファンニイは飽くことを知らぬ情慾の所有者である。ファンニイの叔母はクルルに對して色氣を持ち、何よりの金箱の中の證券を大切にし、若い姪には色々の意味で嫉妬から生れた深い憎惡を懷いてゐる。二人の中を割くために、金箱でクルルの心を釣り、その保管を托することに依て完全にファンニイを男の傍から驅逐してしまふ何となればこの人物の教員は將來遺産として手に入るべき莫大な財産の利殖法に腐心し、一方には浪費好きの……見られる事も恐れて、夜は一人寢室に閉ぢ籠つて金融問題セイエルンの森林問題などの研究に沒頭するからである。一方に叔母は私かに公證人を招いて遺産を教會へ寄附してしまふ。金箱の爲良人を奪はれたファンニイは同じ家に住む現代式ドン・ホアンの寫眞師サツイテヤンシュヌールと情を通ずる。この男は下女のリンヌを手に入れ、更に教授と先妻との間の妹であるリユーデツイアと浪漫的の戀をして、終にこの娘を貰ひうけて伊太利邊へ新婚旅行をし、忽ち畫家としての天分を自覺し、金箱の中味をあてにして美術修業に志す。この劇は評家の云ふやうに叔母が三幕目の終りに金箱を教會へ寄附してから緊張が失はれてしまふ。全體として「ホオゼ」や「スノップ」のやうに最後の締め括りが無く次第に興味が薄れて行くところに致命的の缺點がある。然しながら個々の性格はよく描かれてゐる。クルルは教育のある、また教育があるために愚鈍であるマヌケとも云ふべく、寫眞師はより美貌であり、より教養のある、そしてより厚顏なる「理髮師」と見ることが出來る。この人物の活動に依つて喜劇的氣分が濃厚にされる。

「候補者」（Der Kandidat）は「フロベエルに依る」とあるが、今原作を探して比較する餘裕を持たない。政治的喜劇で立

候補者が萬事を犠牲にして一票を乞ひ得ようと努力する嘲笑すべき心理を諷刺したものであるが、我々が餘り屢々見聞することなので別に深い興味を喚び起されない有力な新聞「民衆の聲」の編輯長に助力して貰ふために妻との情交をも默認し、娘を政略結婚の犠牲にしようとし、その他不必要の物を有權者から押賣りせられて斷ることが出來ない。そして、愈々開票間際になると、思はずそこへ跪いて大悲の神の惠みを祈る。この最後の獨白の場を褒めてゐる批評家があつたが、實際被選擧者の熱情が最高潮に達したものとして一種の崇高感に近いものをさへ起させる。無定見な候補者(カンディダアド)が演壇に立つて彌次のために苦められる醜體は敢てシユテルンハイムの筆を待つまでもない。而白いのは「金箱」の寫眞師サイデンシユヌールが主人公の競爭者として一方の候補に立つてゐることである。然し、主人公に借金をしてゐるので高壓的に棄權させせられる。

「市民シツペル」（Bürger Schippel）は「ホオゼ」と竝んでシユテルンハイムの喜劇中の雙璧と云はれ、デイーボルドは特にこの作を推稱してゐる。一言に云へばプロレタリヤがブルヂョアに成り上る喜劇であつて、作者は兩刀を用ひてプロとブルとを同時に抉つてゐる。所謂一擧に二匹の蠅を殺すやり方である。錺匠と印刷業者と役人が他の一人と共に唱歌のクワルテットを組織してゐたが、テノオルの役が死亡したので、この市で唯一のテノオル歌ひである勞働者シツペルを仲間に入れようとする。名譽ある市民の家へ私生兒であるプロレタリヤを出入させることに就ては非常な精神的苦悶を要した。然かもこの男無しでは、今迄誇りとしてゐた月桂冠を返却する運命に陷ることは明瞭である。止むを得ずして種々の條件の下にシツペルを仲間に入れて首尾よく唱歌の競技に勝利を得たが、一方シツペルの心には傲慢な市民に對する憎惡と共に市民の階級に侵入しようといふ欲望が起る。錺匠の妹である美しいテクラは二十年前に往來で彼の顏に唾した少女である。この怨みを晴らし、同時に榮達の道を開くためにテクラを強て我物にしようとする。然し、或偶然の出來事から彼女は若い浪漫的の公爵ハインリヒと相識り、貞操を傷けられる。之を知つた錺匠は家の名譽を救ふためにシツペルの求婚を承諾するが、後者の胸には再びプロレタリヤの誇りが蘇生して汚れた彼女を巨額の持參金と共に拒絶する。一方に印刷業者と役人とは共にテクラに戀してゐたが、前者は友情から自分の戀を棄てゝ役人のために獻身的に盡力する。シツペルが役人を侮辱し二人の決鬪となる。双方は震へながら短銃を持て相對するところが喜劇的のクライマックスとなつてゐる。シツペルが夢中で發砲すると役人は倒れる。第二幕

り傷を受けたばかりである。錺匠はシッペルが寛大な精神から敵を容赦したものと思ひ込んで心から感謝して、シッペルを名譽ある市民の仲間へ入れることを誓言する。この劇は非常な滑稽な場面に富んでゐて筋もたるみ無く運び確かに佳作と云つて好い。然し、主人公のシッペルよりも寧ろ三人のブルヂョアの描寫の方が成功してゐると思ふ。前者に於ては、プロレタアの誇りと野心との葛藤が十分に書かれてゐないやうである。之に反して、三人の市民はワグネルの「工匠詩人（マイステルジンゲル）」中の人物のカリカチュアのやうに見えて面白い。戀を讓る印刷屋は「タンホイゼル」のエッシエンバハのポンチ繪だと云へる。

「白紙」（Tabuia rasa）に於て市民シッペルは工場長となつて現はれて、激昂した工夫等に文明開化の時代を説明して鎭壓しようとする。この社會主義的喜劇「中間劇としてある」は全然失敗の作だとデイーボルドは評してゐる。私はまだ一讀の暇を持たない。

「ペルレベルグ」（Perleberg）は三幕の喜劇であつて一つの新らしい特色を持つてゐるのでこのグループの最後に置いた。ペルレベルグとはポッツダム附近の小さな市の名である。こゝでホテルを開いてゐるフリーゼッケ夫婦の者が細君カウグステの見下ろして喜劇上の明暗で身體に嚙み合ひ競爭し合ふ所に妙味が中心となつてゐるが、最初の滯在客としてこのホテルへ來る肺病の小學教員タックといふ人物に依て珍らしくも人類愛の理想を示したところにこの特色が存するのである。從來浪曼主義者は嘲笑の的となつたのであるが、この病める青年教育家の純眞な愛は市民の利己心との對照に用ゐられてゐるばかりでなく、終にその感化力に依て敵視し合つてゐた兩家の和解が成立するのである。タックは平和の天使として愛人である少女レエネに抱かれて靜かに死んで行く。リーマンはこの作を推稱して『凡てが巧妙に確實に運ばれ、人間の美徳の效果も極めて自明的で無理なく、然かも一方には人間の惡意も亦場當り的に否定はせられないで主人公のフリッツは何處までも其本性を維持してゐる。この作がある爲めにかの廉價な茶番「市民シッペル」も我慢し得られる』と云つてゐる。之に反してユリウス・バッブは云ふ『シュテルンハイムが始めて積極的態度を取て「ペルレベルグ」で貪慾な俗人の間に人類愛の代表者を置かうとしたときに彼は全然失敗した。彼の才能の貧弱さも固定的の限界とが曝露せられた。この肺病の小學教員は感傷的の影の薄い小説的人物に過ぎない』と。この正反對の批評の孰れが正しいであらうか。これはやがてシュテルンハイムの詩人的本質を定めることにならう。少くとも私にはさう云へると思ふ、この點で一番成功

してゐるのはフリッツの性格であつて、タツクナレエネは感傷的の世話悲劇なる所謂 Comédie larmoyante 中の人物のやうに見えると。即、大體に於てパッズの說に同意するのであるが、然しまた愛に對する或要求と憧憬とがこの劇に於て幽かに現はれてゐることも否定し難いと思ふ。これは近作「オスカア・ワイルド」に於ても亦認められるのである。

## 三

喜劇詩人としてのシュテルンハイムの特色は以上の紹介で略略明かになつたと思ふが、彼の他の作に一瞥を與へて結論へ急がう。

「自由の子」とでも譯すべき三幕の喜劇 „Der entfesselte Zeitgenosse" は法科大學を卒業した青年が職工生活へ入らうとしてゐる中に偶然或富裕な美人と邂逅して終に運命的に結びつけられるといふ筋であるが、「解放せられた」(エントフエッセル)といふのは、個性の絶對自由のために凡ての社會的羈絆を破棄するといふ位の意味で、「凝固した理性」の支配を脱却しようとする意志が動いてゐる。この點で新らしい「狂亂怒濤」(シュツルム・ウント・ドランク)の傾向に觸れてゐるが、然し喜劇としては乾燥した失敗の作と云はねばならぬ。全然頭腦の產物だといふ印象を與へられる。　一體にこの作者は「無情」(ヘルツロオス)だと云はれ、カイゼルの「冷たい熱」すらも持たぬ、純理知人だと評せられるのであるが、この作などを讀むと全くその感じがする。他の作家の物を改作してゐる事も體驗から出發する作家と比較して創作力の稀薄さを思はせる。この點では內的生命の發現を强調する表現派とは正反對の立場に在る。寧ろ理知的に自己の形象界を構成する意味で、構成派とでも命名すべきであらう。然し、私は理知的、情熱的、瞑想的の分類を立て、假りに之を表現派の下に總括せしめることにしてゐる。

さて、改作劇に屬するものにモオパッサンに據つた „Der Scharmante"、ディデロに材を得た „Die Marquise von Arcis"、クリンゲルに從つた „Das leindede Weib" 及モリエールの改作 „Der Geizige" がある。第二の「アルシ公爵夫人」はシルレルの飜譯、「女性の復讐の不思議な例」(Merkwürdiges Beispiel einer weiblichen Rache と二つ並べてディデロの小說と比較してみたら面白いであらう。シュテルンハイムの作はよく纒つてはゐるが原作にある妙味の失はれたやうなところがあり、之に代るべき何等新らしいものも提供してゐないといふ憾みがある。そしてモリエールの「守錢奴」(ラヴァール)の改作は喜劇作家として、一般に劇作家としてのシュテルンハイムの技能を知る一つの材料とも見られる。　彼がモリエールに於ける偶然的[illegible]

即、父子兄妹の奇遇といふやうな不自然要素を除去したのは當然であり、またアルバゴンの息子を極端な享樂主義者としてそこを強調したのも首肯せられるが、大宴會の場面を設けて、「ジユピタアとダナエ」の黄金の雨のバレエを比喩的に捻出したのは小技巧と云はねばならぬ。全體に於て臺詞は簡潔にせられ、往々思ひがけない新らしい機智が用ゐられてもゐるが、かの希臘劇で「かけ合ひ」(Stichomythie)と云はれる疊みかけて隙間なく交換される對話法の喜劇的應用は既にモリエールに依て試られてゐる。一般にシュテルンハイムがこの世界的喜劇家に學ぶところが多かつたのは明らかであり、自分も亦窃かに現代のモリエールを以て任じてゐるやうに見える。惜むべきは、假令モリエールの情意の深さの一部分をも持てゐないことである。

終りに彼の最近の作に就て一言しておかう。但、私の知つてゐるのは昨年出た「オスカア・ワイルド」だけである。この劇の序言で作者は、「本國で否認せられた三人」を紹介する責任に感じると云つてゐる。それは、ハイネとファン・フォークとワイルドである「ファン・フォークとゴオガン」といふ著者は昨年出版せられた。ハイネを明かにするのに要する精神的圓熱（ガイスティゲ・ハイツェ）は五十歳に達したとき得られるであらう。今私は心身を傾倒してワイルドを書いてゐる、と告白してゐる。この意味で私はこのワイルド劇を「同性愛の悲劇」として[illegible]の悲劇」として見たいと思ふ。然し一般的興味は勿論同性愛の問題に集まる。作者も亦如才無く其處に新機軸を出さうとしてゐる。即、アルフレッド・ドオグラスの敵役として愛蘭士生れの美少年ユウ・ダンディー(Sir Hugh Dundee)を置き、ワイルドを挾んで同性愛の三角關係を作り上げたのであるワイルドはアルフレッドにをいて希臘的男性美を讃美し、男性的創造力と女性的世間知とも併せ有する理想的人格としてユウを愛してゐる。兩少年の間る嫉妬が起る。後に訴訟事件が始まつて、ワイルドが有罪の宣告を受けたときに、ユウは絶望の餘り自殺する。屍體陳列所に運ばれて始めて彼の本體が分かる。彼は陰陽兩性兒（ヘルマフロディット）であつたのである。

奇拔な考へではあるが、眼先きを變へるといふ事以外にどういふ效果があるだらうか。誤解せられたワイルドを救ふことに果して役立つであらうか。波瀾に富んだこの詩人を戯曲化したものとしては頗る物足りない感じがする。まだまだ書く可き重要な方面が深山に殘されてゐるやうに思はれる。唯、前述の如く四十歳の深さから、四十歳の焦燥から、憂悶から生れた悲劇をみるときに新らしい意味が認められる。ワイルドの親友タスビイ嬢に云ふ、四十歳はナイフの身を鞘へ收めるやうに自己へ

歸る時だ。第一の總勘定とする時だ。一皮剝いで新らしい皮を着る時だ、と。

恐らく最近の作だらうと思はれるのは、娘のテアが舞臺意匠をしたといふ前掲の喜劇「デル・ネッビヒ」(Dr Nebbich) であるが、私はまだ讀んでゐない。「現代の戲曲」の著者カアル、レエマンに從ふと、シュテルンハイムは從來戰前の雰圍氣中に優れた時代の俤を見出したが今や「ネッビヒ」に於て今日を諷刺してゐる。戀愛でも、政治でも、新聞でも、フイルムでも、今日はすべて人爲的に製造せられる。此處では或映畫界のスタアが一人の猶太種の手代を發見して、心を寄せる。そして男を助けて成功の絕頂へ到達せしめる。ところが、彼はいつかまた昔の低級な生活に憧れを感じ出して再び群衆(マッセ)の中へ消え失せる。さういふ筋だと云ふことである。カイゼルもその「並行」の一つの筋でフイルムの女優を描いてゐるが、シュテルンハイムも負けずに手をつけたと見える、とでも云つて置く外は無い。この他にもまだ讀まない作もあるが、それは散文の著作と一緒に後廻はしにして次の機會にシュテルンハイムの「全い像」を刻みとげることにしよう。今は唯喜劇詩人としての浮彫(リリィフ)を示したのに過ぎない。

(XV—4)

## シュテルンハイム著作目錄

(I) Dramatisches

Ulrich und Brigitte. Elu dramatisches Gedicht.

Don Juan. I. und II. Teil. Eine Tragödie.

Aus dem Bürgerlichen Heldenleben

Die Hose. Komödie.

Die Kassette. Komödie.

Bürger Schippel. Komödie.

Der Snob. Komödie.

Der Kandidat. Komödie.

1913. Schauspiel.

Tabula rasa. Schauspiel.

Per'eberg. Komödie.

Der entfesselte Zeitgenosse. Komödie.

Der Scharmante. Lustspiel von Maupassant.

Die Marquise von Arcis. Schauspiel.

Das leidende Weib. Drama nach F. M. Klinger

Ter Ceizige. Komödie nach Molière.

Manon Lescaut. Drama.

Ter Abenleurer. 3 Lustspiele.

Das Fossil. Drama.

Oscar Wilde. Drama.

Der Nebbich. Komödie.

(II) Prosa

Chronik von des 20. Jahrhunderts Beginn
- Busekow. Eine Erzählung.
- Napoleon. " "
- Schuhlin. " "
- Meta. " "
- Ulrike. " "

Europa. Roman. 2 Bde.

Berlin oder Juste milieu.

---

# 異國風趣

## 春より夏へ

矢代幸雄

病床に在り。イタリヤの初夏に就いて何か書けと云はれる。イタリヤを去つて二年、特には靜かなる病を守つて寂寞にひとり居れば、月影美くしきその地、淺はかとはいへ感激に充ちたその頃を懷ふことしきりである。だから書く。

初夏と云ふて書きにくい。日本でいふ初夏の候があつたかと思ふ。日本の初夏は著しい。薫風が丘に若葉靑葉を揉む。若葉が淺黄色に毎月伸びる。若葉は赤兒の手のやうに林に踊る。花が散つて八重櫻の色が紫色に褪せて、それから——羞かしい春とも違ふ、旺盛に黑ずんだ夏とも違ふ、鮮やかで仕様のない初夏の一幕。初夏といふ特殊なものがイタリヤにあつたかと思ふ。雜多な落葉樹が山を埋めて若葉を一齊に吐き出す日本と違つて、イタリヤに春から夏が急傾斜だつたことを憶ひ出す。春から余りにばたばたと夏になる。

薄むらさきのリラの花が丁度その頃の記憶に咲かなかつたら、季節を知るに予は困つたであらう。思ひ出は窓に咲いたリラの花を焦點として前後にぼける四たびの春と夏の回想をまぜこぜに書く。

「聖の極み告知の處女(サンティシマ・アヌンチアタ)」大寺の祭禮が三月の末になる。廣場に市が立つて、この祭禮が初まるとフイレンツエの人は春がやつと來たなと思ふ。——古き聖書の物語り。或る日處女マリヤの

糸紡ぐ側らに忽ち美男の天使が白百合の一枝を携へて天より舞ひさがる。

「幸あれ(アヴェ)マリヤ、御恵みにみちたる(グラチア・プレナ)…」

マリヤは父なる神の意思に叶ひ玆に世の新しき主である基督を處女の身に神聖受胎する。世界に此の幸なる日に新たなる希望が芽生えたのである。——受胎告知マリヤの禮拜堂は此日は特に美々しく四十二個の銀燭をとぼし早春に楚々として咲く花に埋め飾つて、宛然新春の悦びの祭りを催すのであつた。寺前の廣場は屋台店に一ぱいになつてゐる。その間を縫つて遠近から集つた農夫、若い牧羊者が村娘と混つて押し合ひながら考へて居る。若者の氣取りは當時きまつて色ハンケチであつた。けばけばしい大きな色ハンケチをふくらませて首に巻いたり或は上着の衣嚢からぶらさげたりして居る。村娘の得意は絹まがいの靴たびである。袴を短く穿いて片手をおきやんに腰に置いて肱と胸とを張つて、そして足を氣にして歩く。近頃の娘は風が吹いて裾が翻ればいゝ位に思つて居ると古いおかみさん達は言ふ。

兎に角、フイレンツエの心は春になつた。うちのチルダとリディアがお祭りに行きませうと言ふ。初めの年はまるで小供であつた二人が両手につりさがつて、途中の屋台店で買つてやつた、日本と同じく三角に切つた白いハツカ飴を頬張りつゞけたが、翌年からチルダの方はハツカ飴を頬張るのをやめた。

——夕方に此日のマリヤを祝し「幸あれ(アヴェ)マリヤ」の鐘が各寺塔から一齊に鳴る。此夕ばかりは余程の不信者と雖も鐘聲をきいて、春の再來を祝して十字を切る。

「告知の處女(アヌンチアタ)」大祭から少しすると忽ち天下に春は闌干として見事になる。何ともなかつた牧場の草まで思ひがけない花冠をもたげてぽんぽん音がするかと大輪の花を開く。特にはフイエゾレからセテイニヤノかけて續く庭園に黒いアネモネが咲く。森の奥の黄色い水仙の群叢のイタリヤ空に色花火を打ちあげそうな大げさなチューリプ。

窓の前のリラがふくらむ。

「春よ(プリマヴエラ)」

そう言つてチルダは窓を開けた。日光斜めに彼女の頬を染める。眩しそうに彼女は晴空を見る。それからリラの蕾を見る。

「窓を開けて置き。春だから。」

予が二年目の春にそんなことを言つたのを覚えて居る。このわけは春陽の麗しさに窓を開けて、其儘な彼女を坐らせて絵を描いて居ると、復活祭前は流石春未だ寒くして空氣冷やかに、おとなしい子に風引かせて了つた。

ファリナ家のフラビヤおばさんの別荘は聖ミニアト大寺の裏山から細長い谷に向つたところにある。中世以來續いた舊家は別荘の名さへ古風に鷄鳴荘(ヴイラ・カンタガルリ)と呼ぶ。

「復活祭に小供に捜させる卵を庭に隠さなければならないから、手扶ひに來て下さい」

フラビヤおばさんのよく氣のつく親切は、引込み思案の外國人(エトラン)を招待するにきつと何か役割を頼むやうにして來る。朝早く出掛ければもうアルノの谷にも春の支配は遍く、「花の聖(サンタ)マリヤ」本寺の夢に溫かい春霞が棚引いて居る。

北歐には嬉しき雪の降る降誕祭(クリスマス)。小供は寢床につりさげる靴たびに入れてくれる贈物を待つて居た。南歐には春熟したる戸外の復活祭。復活祭は花祭りでもあり小鳥の巣の祭りでもある。山に氷融けて春の小川花の影浮べて流れ、林の小鳥の巣には新らしい卵が新生の芽生へのやうに艶々しく生まれて居る。だから復活祭の子供の贈物は卵で菓子屋の窓には此切チョコレート製の大小の卵がびつくり箱のやうに中に小供の喜ぶ何物かを秘めて飾られてある。ファリナ家の別荘では予も手扶つてフラビヤおばさん其他の大人達が草叢や橄欖の梢、チプレスの老幹の穴に絹張りだの、チョコレート製だのの卵を押し込むだ。

やがて晴れの今日はいつもの自働車をやめてわざわざ古風な馬車を仕立て、着飾つた小供達を山盛りに滿載して鈴の音勇ましく到着した。その後の玩具箱をひつくりかへしたやうな騒ぎとてはなかつた。上流の子達の白絹の着物が廣い庭中を駈けあるいた、けたたましい喜悅の叫聲が――不思議にもその日は予を悲しくしたのを覚えて居る。

「春闌干　春闌干」

こんなことを口ずさむで、涙まで溜めて多恨の遊子振りの感傷に春の遲日を夕暮まで緑草の上に徘徊し盡したことを、今は可笑しい他人事のやうに記憶して居る。――復活祭とは言へどその年の春は老ひやすく、その後直きに招かれて雞鳴荘へ行つた時、日本と同じ紫の藤花の房が壁にべた一面に咲くのを見た。

もう弱くなりかけた陽の光をリラの花影に坐つてヂルダが本を讀む。本は母から讀られた古風に製本したラマルテイヌの「最初の瞑想（ラ・プルミエール・メヂタシオン）」。

「湖畔の詩が好きなのよ」

などと生意氣なことを言ふ。頁の上にはらはらと、日本ならば萩が散ると言つた風情に老ひたリラの紅片が散る。

「小鳥が居るのかしら」

とヂルダが首をあげる。小鳥は飛んだ。

ラマルテイヌ詩集はお餞別にヂルダがくれたから、珊瑚末を散らしたリラの花片の思出を包むで今も予の手許に在る。

四月末の復活祭からもう四十日して昇天祭。日本ならば季節は初夏にあたるけど、イタリヤではもうまるで完全に夏らしい。

昇天祭の早暁はフイレンツエの南端、アルノの淺流沿ひに森に覆はれた大公園がある、そこに蟋蟀祭（ヅリルロ）が行はれて若者共は謝肉祭（カルナヴーレ）ほどに一年中の楽しみにして居る。予は早暁といふのに閉口して

「若い者が行かないなんてこと、あるものか」

と誘はれながらついぞ行つたことがない。蟋蟀祭とは或はトスカナ地方の特殊信仰の保存だとも或はエトラスカン民族の神話を通じて埃及の甲蟲（スカラベウス）信仰が轉來して來るとも言はれるが、何にしても奇妙なお祭りである。

——いつの世にか七つの首ある魔法使ひの老婆が美しき姫君を竊むで魔法で封じた塔中に隠くした。姫君には戀人があつた。戀人はふ。

「我が失ふた姫を搜し了せねば我が心は狂ふであらう」

若者は馬に跨がつて暗い野山を岩を越え森をぬけて行く。或る夜、森の奥の道に一人の老婆が跛つこ引きながら歩くのを二人のいたづら小僧がからかつて居る。基督の道を信じて心やさしき若者は小僧を叱つて錢一枚宛を與へて

「そんないたづらをするものでない」

と敎訓して逐ひやつた云々。老婆は感謝の余り

「わたしはお前を蟋蟀にしてやらう。蟋蟀になつて塔中に入れる。塔中にはお前の姫君が鎖繫りにされて居る。」

若者は魔法の塔の前に着いて倖て教はつた呪文を唱へると忽ち一疋の蟋蟀になつて中へ這入れる。すると先刻の老婆は若者の扶けをしやうと森中の小人や精を呼び集めて、皆んな蟋蟀に化して若者の蟋蟀と一緒に塔中に入れさせた。森中は蟋蟀で一

ぱいになつた。皆んな
「クリッ　クリッ　クリリ」
と鳴いて居る。何れが本物の若者の蟋蟀か解らない。
　そこへいきなり七つの首ある魔法使ひが歸つて來る。
「おや、どうも基督教徒臭いぞ。留守の間に忍び入つたか、今
隠れて入つて居るのか、如何しても喰つて了つてやる」
　すると蟋蟀が一齊に鳴き出す。

　「おれ達は魔の蟋蟀
　もとは人間だつたが、
　蟋蟀になつたよ。
　　クリッ　クリッ　クリリ

　歌つて、踊つて、
　すすめ、後退！
　御前の七つあたまがはじけるまで
　お前のあたまが狂ふまで
　おれ達は歌ふぞ
　　クリッ　クリッ　クリリ

　七つ頭の氣が狂つて
　お姫様の鎖をとけ、
　若様の花嫁さまの——
　それまで鳴くのを止めまいぞ
　　クリッ　クリッ　クリリ　クリリ」

　流石七つ頭の魔法使ひも之には弱つてお姫様の鎖を解けば、解くより早くお姫様も一疋の蟋蟀となつて若様の蟋蟀と一緒に何處かへ飛んで行つて了つた——
　こういふ出來であるから弁天祭の早朝蟋蟀祭の騒ぎと言へば喩へるにものがない。カシーネ公園から遙か隔たつた予の家までもその朝一齊に吹く玩具の蟋蟀笛の聲が響いて來て仕様がない。

　　クリッ　クリッ　クリリッ

　うちのリデイアも父親に連れられて朝の暗い内に出て行つたたのが、もう歸つて來たらしい。庭で鋭どく蟋蟀笛を吹く。騒々しくて寝て居られない。起きて見ると庭樹の黒い陰影を朝日が颯と射て空中に白い條線が出來て居る。
「もう歸つたのかい」
「クリッツ　クリッツ　もうとつくよ。大勢綺麗な着物を着て馬車

へ乘つてカシーネは馬車一抔でした。人位大きな蟋蟀の人形が出來て居た。フアリナの子供達も來て居た。クリツクリツ」見るとリデイアは片手に日本のきりぎりす籠のやうな空つぼのものを提げて居る。

「空つぼだね」

「だつてお姫様を放してやつた」

話によるとカシーネ公園の入口には屋臺店が並むで蟋蟀笛と籠に入れた蟋蟀とチヨコレートを賣つてゐた。リデイアは安チヨコレートを頬張つて、蟋蟀のお姫様をカシーネの奥の叢中に放つて、そして、クリツ クリツ クリリ リを吹いて歸つて來たに相違ない。

「何故、蟋蟀祭りは昇天祭の朝なのだい」

リデイアは知らなかつた。母親が引受けて答へるところによると七つ頭の魔法使ひは姫君と若者の逃亡を憤慨して一年中にたつた一日昇天祭當日だけ、基督昇天の功徳によつて二人の戀人が人に戻るを許した。あとは年中蟋蟀になつて居ろと命令したからであつた。馬鹿々々しく早い朝にカシーネの森へ蟋蟀を放しに行くのは人に歸るをゆるされた貴いたつた一日を少しでも長くしてやらうといふ蟋蟀の戀人等への思ひ遣りであつた。

クリツクリツクリツの笛が二三日にして飽きられて蟋蟀の祭りの大騷ぎだつた話が已むと、もうイタリヤはまるで夏景色である。時によると五月末から六月初めに暑氣波(ヒート・ウエーブ)の最高潮が來て、石造づくめの町の廣場は熱氣に蒸されて釜のやうになる。それを知つて居る予は、毎年、蟋蟀祭りを句切りにして、山へ逃げる用意をする。菫色の螢火がアルノ河上に無暗と飛び立つて、闇にギタラ鳴らすによくなるのもその頃であつた。空はめつきりと黒く澄むで來た。夏の色は好きなのだけど、身體が保たないから、もう立つことにすると、毎年その頃思ふのであつた。

汽車がアルノの野を拔けてアペニンの連山にかゝる。葡萄がもう旺盛なる緑莖を延ばして丘陵地を鬱苦しくさへぎつて居る。莖の間を赭ら顔の農夫が消火器のやうな道具を背負つて、除蟲藥の霧を吹きかけて居る。この霧に吹かれると、潤い葡萄の葉は、出來そくなつた印象派の油繪ほどにコバルト青に燃えて來る。

もう夏だ。

# シュプレーの森

兼常清佐

風景に對する趣味は人々で違ひます。その人の經驗や聯想や、特にその人の畫や詩に對する趣味などが互に影響しあつて、さう言ふ結果になるのでせう。私の好む風景は廣い野と深い森とその中の坦々たる道です。そしてその森は四季色が變る落葉樹でなくてはなりません。

コツトブスからベルリンまでの汽車はシュプレーの森の外側をめぐります。その車窓の眺めには私は全く驚嘆の聲を放ちました。限ない廣い草原には牛や羊の群が點々と彼方此方に動いてゐます。その果ては鬱蒼たる大森林です。それに映える夏の夕榮の色の美しい事、鮮かな事、――實に私の愛する模範的な風景です。

リューネーブルクの荒野をのぞいて、私はまだこれほど氣に入つた風景を見たことはありません。

コットブスで、私は乘換の汽車を待つ間に、書店をあさつて、この地方の詩人ローベルト・ベーラの詩集『シュプレーの森の歌』を買いました。そして停車場で四五頁よみました。それにはこの森の『抒情的なる三つのW』といふ語がありました。森（ウワルド）と草原と水（ウイーゼウワッセル）です。今私はそのWの二つを見ました。最後の一つも是非見たい、と急に思ひ立つて、私はその汽車をリュベナウで下りました。私は歴史家でないからこの土地に住む有名なスラブ種族の風俗を見ようといふのではありません。人種なんかどうでもいゝ。見たいのはたゞ風景です。森と草原と水です。

停車場は田舍の極めて小い驛で、しかも、もう夜でしたが、それでも、この森林地の案内書と地圖だけは賣店にありました。その案内書の中の廣告に『第一等旅館ノイマン。設備完全、電燈あり』とあるのであります。高は知れてゐると思つてそのうす汚ない一等旅館に落付きました。町は殆ど二階建での家の一すぢ町で裏はすぐ畑で、稻叢が處々に並んでゐます。

この近所の產物が何か知りませんが、汽車の驛でも酢漬の胡瓜を賣りに來ます。『ザウレ・グルケ!』といふふれ聲が來る

と、暫くすると臆くもない三等車の彼處此處で、男も女も丸のまゝの胡瓜を尺八喰ひにかぢつてゐる珍妙な光景が開展されます。私も實はそれで滿腹してた處を宿でもまた酢漬の胡瓜を持ち出しました。

この小い町にも一軒書店があります。私は翌朝早くそこで『シュプレーの森』といふ小供の彈く樣なピアノ進行曲の譜や、地方の詩人の小い詩集や、物ずきにもこの地方のスラブ人の言葉の教科書など買つて、早速波止場にかけつけて小船にのりました。この町の古いお城も見たいと思ひましたが、外國人は一歩も中に入れないときいて、諦めました。勿論小い、けちな城です。私には小船一艘をやとひ切りには出來ませんから、乘合の客を宿の番頭さんに賴んで昨夜から探して貰いました。幸にマイセンから來た青年夫婦が快く乘合つて、船ちんを半分出してくれました。船は五分もたゝぬうちに、もう果しらぬ深林の中に漕き入りました。

シュプレーの森には道はありません。縱橫に流れてゐる無數の小川が即ち道です。その小川に臨んで處々に小い村があります。水は必ずしも清冽とは言へませんが、然し二三尺の底は見えます。水勢が緩いからでせう、岸は自然のまゝで、無風流な石垣などは一つもありません。ひくい川岸に生えてゐる草叢の根を水がひた／＼とあらつて行きます。時々水蜻蛉が飛びます。鳥の聲も稀にはきゝます。前後左右に見渡す限り續いてゐる森は、悉く落葉樹で、今夏の綠の眞盛です。木の幹は大低細く勿論參天の老大樹などとは言へません。然しその森の深さは實に物凄い樣です。空氣はつめたくて、薄ぐらくて、幽邃の極、時々、私は思はずぞッとした事もあります。風が吹くと綠の葉がさわ／＼鳴ります。そして葉の間から日光が洩れてへさきに碎ける川波がぎら／＼光ります。

森を一番近い道で橫ぎつても二三時間かゝります。私共はあまり景色が美しいので相談して少し廻り道をして八時間この船に乘つてゐました。船頭の水棹は相當上手ですが、子供の時から水邊で育つた私にはもつと手際よく行く自信がありました。『船頭さん、まあ一服おやり』といふ譯で、私が暫く水棹を使ひました。たまに行き交ふ舟を避けたり、地圖をたよりに、川の曲り角を船頭にきかずに曲つたりした時には、大に喝采を博して、どんなもんだい、といふ顏をしました。

森が段々淺くなると、その間から、廣い草原が見え始めます。そして處々にぽつん／＼と二階作りの百姓家が立つてゐます。これが漸く村の形にまとまるやうになつた處で、船が止まります。ここがブルク村です。[illegible]

と名のついた宿屋にはいりました。さて私の部屋に落着いて、この一日の旅を考へて見るとまるで夢にお伽噺の國に行つた様でした。その夜は月が實によく冴えてゐました。私は一人夜の村を散歩して宿の前の荒地に小便をしました。西洋で土に小便をしたのはこれきりです。窓を閉めて枕につくと、外では蟲の鳴いてゐるのが聞えます。きり／＼すの様な聲です。

翌朝遅く目が醒めると同行の青年夫婦はもう立つた後でした。私はそれから書店を探したり、物ずきに教會の古老を訪ねて書物を譲つて貰ふ談判などもして見ました。この村には書店らしい書店は一軒もありません。そして人がみな何だか冷淡で、不親切で、女など何を云ふにも顔の表情が少しも變りません。たゞこの村の雜貨店に『ドックトル』(Docktor)といふのが、あります。この主人は甚だ快濶にいろ／＼な事を話してくれました。僻頭第一、我輩は學問はないが天然自然のドックトルだから何でも知つてる。と洒落ました。讀者諸君のうちこれからもしこの村に行つた序でに何か調べようと思ふ方があるなら、まづこのドックトル氏に一獻獻じて、働いて貰ふのが早手まわしです。

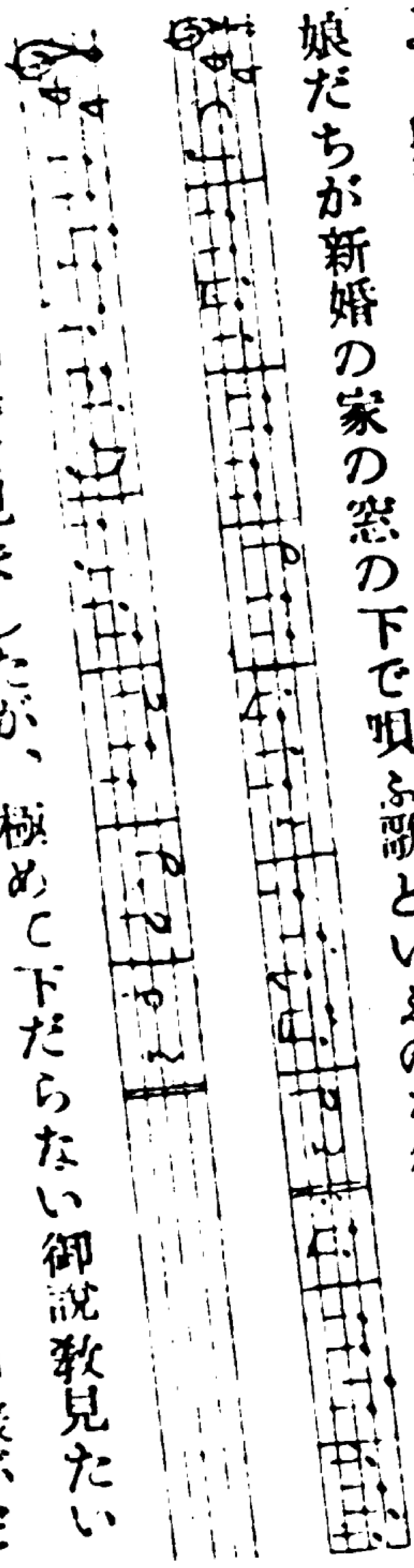
この地方は基督以前から今日までスラブ種族のヴエンド人が住んでゐますが、自分からヴエンド人だと言ふのは餘り喜ばない様です。言葉は人の前では必らず獨逸語を話します。私の宿の食堂に勞働者の一群が來てカルタをしてビールを飲んでゐた事がありますが、その言葉でも大部分は獨逸語でした。私にわからない處は獨逸語の訛りらしいと思つてゐます。私共素人が見て強いてヴエンド人らしい處を求めるなら女の服裝などでせう。話にきくと教會行きの晴着は餘程珍らしいさうです。

降誕祭や復活祭は勿論の事教會で婚禮があつても、村中で踊をやるさうです。酒場でも野天の廣場でも踊るさうです。然しその踊も音樂も、私が尋ねて聞いた限りは現代の獨逸の何處でも見られる極めて普通のものです。決してヴエンド人固有のものを今日まで保存してゐるとは思はれません。些しもヴエンド人固有の踊や音樂や民謠はよしあるにしても餘程稀でせう。それは私共、あわただゞしい旅行者の見聞に觸れない處に潜んでゐる様です。付てハウプトといふ人に依つて、この地方の民謠が蒐集されたといふ話を聞きました。然しその書物は私が滯獨中極力探しましたが遂に手に入りませんでした。たゞ、流石に獨逸で、この邊の小さな村にでもまとまツた一冊の村落史があります。そんなものを丹念に集めると、中に民謠などが引用されてゐるのがあります。私の見たのにこんな節のがあります。——

——或る戀人同志が七年も別れてゐても、女は忠實に男を待つてゐます。男は七年目に騎士になつて歸つて、

を試るために、お前の男にはもう別の妻があると話します。文は涙をこぼして、それならあの男を幸福にするために、私自身の事は忘れて貰つた方がいゝ、と言つたといふ樣な事です。

私の知つてゐる限りヴエンド人の民謠は、平凡で、あんより面白いのはありません。この大森林を歌ひ、大原野を歌つた壯大雄渾な歌は、有るべくして、まだ無い樣です。ふしも特に面白いとか、變つてゐるとか思つたのはありません。一體に人文の開けた點ではシュプレーの地方は到底北獨逸の野には及びません。リユーネブルクの荒野の旅は、その點では遙にシュプレーの森より興味があります。今一例としてブルクの村で婚禮の夜村の娘だちが新婚の家の窓の下で唄ふ歌といふのを御目にかけます



文句は獨逸譯を見ましたが、極めて下だらない御説教見たいなもので、折角の新婚の夜に窓の下にまで來られて、神樣がどうのこうのとやられるのでは、とてもうるさい事でせう。あんまり[illegible]的だとも詩的だとも思へません。

そんな樣な事で、私は二三日の後 數枚の[illegible]の繪はがきを新たにかばんの中にふやして、ベルリンの寓に歸りました。翌日この話を私の知つてゐる獨逸人に話したら、まづ第一にシュプレーの女は美しいだらう！と言ひました。何が美しいものですか。私にはシュプレーの三の大なるWに比べると、第四のW――ワイブ――は言ふに足らないものです。

今から考へると滯獨の一年はたゞ一場の樂しい夢です。シュプレーの森は、そのうちでも特に美しい夢の姿です。私は今は武藏野の森と野と水とを享樂して、それで滿足してゐなければなりません。質は暫く言はないとしても、量に於て到底、それは獨逸の森や野などゝ比較になりません。たゞ、僅に、日本のものであるといふ一種のなつかしさ、一種の親しさを感じるだけです、私はそれで自ら慰めてゐます。

(1) Paul Fahlisch: Geschichte des Dorfes Ragow. Lübbenau, 1921.

(2) Ewald Müller: Das Wendentum in der Niederlausitz. Cottbus, 1803.

# 佛蘭西人

辰野隆

## 巴里の獨白

乘合G(オトビュス)の終點、植物園の裏門からモンジュ街へ拔ける石疊みの坂道を、一人の老爺がのそ〳〵と、杖を曳きながら登つて往く。雨は一時歇(や)んでゐた。

春にはなつたが、人の厭(いや)がる冷たい三月時雨(ジブシエ・ド・マルス)が、未だ寒い空から、思ひ出したやうに落ちて來る季節だつた。

老爺は口の中で何かぶつ〳〵言ひながら、時々立停つては、歩き出す。

あ、再た降つて來た。細い絹のやうな幾條が、白く、かすかに光つて、古い山高帽を、古い外套の背を刺すやうに濡してゐる。

立停つた老爺は杖の握りに兩手を置いて、鈍い空を、恨めしさうに眺めた。

眺めながら『おお…おお…おお…』とつぶやくと、右手を杖から離して空を威すやうに、拳を固めて頭の上で振つた。

——結構な春(シャンチ・プランタン)ですよ。もう澤山(メルシイ)だ！

斯う云つて、老爺は一寸肩を竦してから、古い都の昔ながらの坂道を、またとぼ〳〵と登つて行つた。

## 巴里の對話

或日のこと、岸田國士君が、くす〳〵笑ひながら、斯んな話をした。

——今ね、地下鐵道(メトロ)で、一寸面白い場面があつたんだが……。

岸田君は鯛のやうな目をつぶらにして言ふ事には。

——メトロは非常に込み合つてゐたわけでもなかつたが、兎に角腰をかける席はみんな塞つてゐたと思ひ給へ。

シヤトレエから、ひどく肥つたおかみさん風の女が乘つて來た。肥つた奴！何も裸にして見たわけぢやないが、胴が三段にくびれて、先づ西洋將棋の女王と云つた形だな。そいつが

ね、重さうな包を抱へてゐるんです。何處を見廻しても空いた席はなし、席を讓つてやる奇特な乘客もないので、一寸困つた樣子だつたが、ふと氣がつくと、車掌專用の引出椅子（ストラポンタン）だけが空いてゐる。おかみさんは、すまアして、それに腰を卸すと、「やれやれ」（アンファン……テ……）なんて云ひながら、大きな包を膝の上に載せて、これで助かつたといふ顏。

暫くして、乘客の切符を改めて了つた車掌が、專用椅子のところに歸つて來ると、肥つちよのおかみさんが重荷を膝で支へて、いけしやあ／＼と構へてゐるでせふ。車掌の奴も始めは、むツとした面つきで睨めてゐる。女は平氣で車掌の顏を眺めてゐる（沈默）

車掌の顏面の筋肉がだん／＼ゆるんで來ると、女の小鼻のあたりにも皺が寄つて來る。機の熟するのを俟つて、女はにつこり笑つて、さて何と云つたか、當てゝ見給へ。

此處迄話してから、岸田君は例の目の玉を愈々瞠つて、音のする程の目ばたきをした。

——それがさ、全く旨い臺詞（せりふ）になつてるんだ。マダム・レジヤアヌでも言ひさうな口調で……お前さんは何時だつてかけられるから、いゝちやないか、つてね。

乘客は彼方でも此方でもくツ／＼と笑ひ出す。車掌もにやにや笑ひ出して、とう／＼『まあ、いいや』と云つて了つた。

——その肥つちよの爲に、お互の健康を飲まうか。

と僕は申出た。

——いゝね。と岸田君もすぐ贊成する。

お前さんは何時だつてかけられるから、いいぢやないか。

近所のカツフエに行く途中も、岸田君は此の言葉を言ひ出しては笑つてゐた。

## ベルフォオルとトウルウズ

一夏、東部佛蘭西を旅した折、ベルフォオル市の獅子記念像を背にして、街を見下す崖の上で、偶然知り合つた此市の一吏員と快談した事がある。大戰當時の回想に及んで、其の男は、普佛役以來武勇の譽あるベルフォオル市民の誇りを物語つたが、話が大戰前の政界に移つて行つて、其の男は、當時のカイヨオを口を極めて罵倒した。僕は別にカイヨオを辯護するつもりもなかつたが、其の男の痛罵を全く信じる氣にもなれなかつたので、それではカイヨオは果して賣國奴であつたのか。何か證據があるのかと問ひ返した。——證據？　證據があれば、我々佛蘭西人はあんな奴を今迄のめ／＼生かして置くものですか。

斯う答へて彼は或る挿話を始めた。

——例へば今、我々五六人の仲間が、明日は幸ひ日曜だから、自働車で遠乘りをやる事にしやう。と相談を極めたとしますよ。すると仲間の一人が、明日はやめた方がいゝ。何だか途中で故障が起るやうな氣がしてならない。僕は御免蒙る。と云ふんです。一體此の男には不斷からさう云ふ癖があるので、此奴だけは連れて行かぬ事にします。翌日は天氣も好い。一同上元氣で自働車を走らせる。ところが、途中で輪が外れて自働車はひつくりかへる。怪我人も出來たりする。豫言が的中したんです。然し、實際は前の晩に、仲間はづれになつた奴が、こつそり自働車の輪の捩子を一つ外して置いたんです。カイヨオと云ふ男がそんな奴ですよ。

一九一四年にカイヨオなどが、獨乙と戰ふのは百害あつて一利なしと云つても、それが何が豫言です。

我々は國境に生れ、育てられて、小供の時分から此の崖の上に登ては、獨乙の方を睨んでは「今に見ろ〻〻」と思ひながら大きくなつて來たんです。普佛戰爭の時だつて、巴里の陷落した後も此のベルフォオルの要塞だけは勇敢に抵抗し續けた事を知つてるでせう。私の祖父も當時死を決して此の鄕土を一歩も去らなかつた男でした。大戰前の我々は全く張り切つた馬のやうでしたね。私は佛蘭西が滅びたら、生きてるそらはない。動員令を手にした時の嬉しさ。想像して下さい。

一ケ月の後。南佛(ミディ)旅行の歸路、僕はトウルウズで汽車を乘捨てて、停車場近くのホテルに手荷物を預けてから、街にとび出すと、何のあてもなく、廣い並木道をぶらり〱歩いてゐた。すこし脚が疲れて來たので、あるカツフエの外店(テラス)に腰を卸した。並木を渡る晩夏の風には既に秋が潛んでゐた。

夕食前のアペリチッフを飲みながら、目の前の小卓を挾んで何か面白さうに話してゐる二人の男を眺めながら、僕は彼等の言ふところに耳を傾けた。「それや、さうだ(セ・サ)」とか「へえ(チヤン)」とか「まさか！(パ・ポツシブル)」とか、短い間投詞を發して熱心に聽いてゐるのは大學生らしい。ゆつたりと構へて、時々輕い身振りを交へて徐ろに論じてゐるのは五十恰好のブルジョアである。

——ねえ、おい。カイヨオと云へば戰前の政界を壟斷してゐた凄腕だぜ。それが今ぢやあ、どうだい。賣國奴だの、獨探だのと謂はれて、此のトウルウズ三界でまご〱してゐるんだ。つい、こないだの事だが、俺はすぐ其處のカツフエで飮んでゐた。大學生が十人ばかり圍(カタマ)つて氣焔をあげてゐたつけ。その學生達は悉くラクシォン・フランセエズ（極右國家主義の新聞）

の愛蘭者らしかつた。その時、隣の卓では、一人の紳士(ムッシュウ)が珈琲を飲んでゐた。

不意に一人の學生が猛然と立上がつたと思ふと、「諸君(メッシュウ)！」と叫んで、その紳士を指しながら、「カイヨオだ！」

學生達は總立ちになつた。カイヨオだと叫んだ學生はつか〳〵と紳士の前に進んで、

―ムツシュウ、我々は一刻も、同じ屋根の下に君と一緒にゐる事を承知が出來ない。出て與れ給へ！と亢奮して云つた。

紳士は默々として店を出て往つた。

―ねえ、おい。と例のブルジョアが言ふ。俺はカイヨオが氣の毒で堪らなくなつた。それあ、カイヨオは親獨派ではあつたらう。黨派根性の强すぎる男でもあつたらう。けれども、獨探でもなければ、賣國奴でもない。唯、一九一四年に親獨派だつたのは如何にも時機が惡かつた。

今の政界には頭のいゝ政治家も、雄辯な政治家も、居るには居る。寧ろ多すぎるだらう。然し、政策の善惡は暫く問はず、佛蘭西の危機を切り抜ける斷行に於ては、クレマンソオに次では何と云つてもカイヨオだらうよ。ところが今ぢやあ、クレマンソオはノルマンデイイの海岸で浪の音を聽きながら昂然と、然し淋しく暮してゐる。そしてカイヨオは！俺はあの後姿を見送るに忍びなかつた。俺達が賴みにしてゐたジョオレスが殺されてから、もう八年になる。クレマンソオだつて、歳が歳だから早晩死ぬだらう。だが、カイヨオだけは、もう一度働かせ度いね。働ける者には働いて貰つた方がいゝぢやないか。

僕はアペリチフの代を拂つてカツフエを出た。ホテルに歸る途すがら、僕は國境要塞市の防風林のやうな愛國者と、國境に遠い一小都會の穏かな批評家とを想ひ較べて見た。

問題のカイヨオは昨年、失脚後十年にして政界に復活した。が、それはそれとして、あの健氣な東の一吏員や、平和な南の一ブルジョアは其後どしてゐるだらう。僕は今もなほ心から彼等の健在を望んでゐる。

# 燕京漫筆

犬養健

支那へ行つたと云つても眞夏の四十日のうち、大部分は合歡(ねむ)の花ざかりの北京で暮してゐたのだから、僕が代表者のやうになつてこれを書くのは少し遠慮したい氣持になる。それに僕は北京印象記といふものも「改造」に書きつゝあるので、面白い材料はそれに使つてしまつたし、またそれに取つて置きたい。その上僕はいま旅行に出たい。かたがたこの文章はあまり面白くないかも知れない。たゞ北京印象記の日記抄の項に書き落した事でも拾つて見よう。多少同文と重複するところもありさうである。

支那へ近づいての第一印象は、威海衛の沖にぽかりぽかりと浮んでゐた漁船――元寇役を聯想する新月の形をもつた漁船であつた。それから黄ろく濁つた白河のうねうねした流れであつた。岸の楊と土呂でつくつた低い民家であつた。それにまさる外人經營の工場の裏手の豚であつた。天津埠頭の悲鳴のやうな、あくまで東方臭い苦力の叫喊であつた。それからこれらのすべてに一様に鬱陶しく降りそゝいでゐた、七月の雨だつた。

雨のなかに人の群から少し離れて、岸邊に一頭立の馬車を待たせ、洋裝した日本の若い婦人が甲板を見あげてゐたのをふと今思ひ出した。――天津北京間の汽車に乘つた頃は、雨上りの西日が相當に豐饒な田畑のうへに照つてゐた。雨路のきらきら光る、窓のそとの畑はやはり高粱(カオリヤン)が多かつた。

汽車は日本の汽車よりも下手(へた)な停り方をする。其度びに楊柳を背景にしたプラツトフオームの立札――驛の名を記した楷書を覗いて、僕はほかのどの異國へ入りつゝあるのでもなく、やはり此處は支那だと、そんな當り前の事をぼんやり考へた。夕方近くの窓ガラス越しに異國人の出入りを眺めた印象はあとまで殘つた。

北京の正陽門車站に着くと、僕はいきなり眼の前の何丈かの濡れた城壁を見上げなければならなかつた。城壁のもとには京市の夏の飾りである槐(えんじゆ)が深ぶかと繁つて、青いぼろを着た

力(リイ)が居ならんで憩つてゐた。空氣が澄みわたり、たやすく風に揺れる槐の枝々が滴を散らせて、北京など汚い町だと僕に思はせたのは誰の仕業だらうと考へた。

久しぶりで會つた姉と聲高に喋りながら停車場の前の廣場に出ると、そこにまた一つの丘(アクロポール)が立つてゐた。その石づくりの厚み、その埃つぽさ、その寂寞さ、僕はそれをメッカへの旅の路傍の廢れた城だと考へたかつた。だがそれが北京城の正門——前門(チエンメン)なのである。

支那の城壁の埃はおほむね中央亞細亞臭い。

第一印象はあらましこんなである。

北京の目ぬきの場所は、正陽門から一歩踏み出た外城にある。前門外大街、ことにその西側のさまざまな横町の雜沓には度膽をぬかれる。狹い裏通りの兩側に絨壇屋、酒屋、銀行、澡堂、寫眞屋、兩替屋、衣服屋、帽子屋、金物屋などのあらゆる赤、黑、黄、紺、金——強い色どりの看板が立ちならんで、そのなかを人間と自動車と馬車と驢馬とが押しあひ擦れちがふのである。僕はピアノの高い不調音を續けさまに鳴らされたやうだつたと印象記に書いたが、それは今でも訂正しようと思はない。北京では婦人の洋化振りと、自然の花を用ゐた髮飾りと、紅をつけた口にくはへたパイプ付きの紙卷煙草とが目立つた。男は流行であるのか白い筋入りのリボンの附いたパナマ帽が目立つ。男にしても洋服姿はごく少ないのでローカルカラーは濃い。そしてこれらの雜沓の流れは不得要領にゆるい。

此に比べて内城のところどころの住宅通りは極端な對照をつくる。兩側に風情のある灰色の石塀が次つぎと高くつゞき、塀と塀との切れ目には暗示的な朱塗の門扉があるひは開き、あるひは閉されてゐる。しかし門を二三間入つた突き當りには必らず影壁(イエンピイ)が衝立のごとくに立つてゐて内(なか)は覗かれない。たゞ奧の家族に對するわれわれの想像を深めるばかりである。酷暑の午後にこれらの胡同(よこちやう)を當てもなく行くのは僕ぐらゐであつた。閑かさが二つの塀と一つの路面に滿ちてゐた。僕はさまざまの門の對聯や影壁の文字を讀んで歩いた。今でも無人の往來の横手にちらちら見える、鴻禧、福、迎祥、出門見喜、などといふ縁起振りを眼底に浮べる事が出來る。それは快い記憶である。あの町そのものがぼかんとして、氣の永いやうな魅力は、一度僕を内へて以來どうも離さない。

これらの諸町にわづかの生氣を與へる樹々は槐、合歡、楡などであつた。中央公園[illegible]天壇へゆくと[illegible]がいかにもさう[illegible]

せてゐた。北海公園へ行くと白松が物珍らしかつた。これは名のとほりに幹が白い。

前門外の横町の騒ぎと、この呱通りの靜かさとの中庸をなすのが内城のいろ〳〵の大通りである。僕は夕方になるとよく交民巷（公使館區域）から王府井大街へと出かけて行つた。ホテル通りである東長安街と洋品店街である王府井大街との角の建物になつてゐる長安飯店（ホテル）の地階の花屋からは、灯のともるのを待つて、店に滿ちた晩香珠といふ白い花が一齊に匂ひ出す。晩香珠がさういふ性質なのだ。女の花賣の多くはこの花である。斜巷では美人がこの蕾を數珠つなぎにして頸へかけてゐた。

北京の景物の一つは憲兵と交通巡査の多い事である。殊に交民巷の辻々がさうである。日本公使館の裏手から伊太利公使館の横へ小路をぬけて、アスフアルト敷きのマルコ・ポロ胡同の爽やかな道路を、日影づたいに歩いてゐると、横町の多いその邊りでは十數間おきに巡査が立つてゐる。目ぶしい反射につゝまれながら短い棒をあげて自働車に合圖する黄衣の彼等、歐支折衷の塀、單純なアスフアルトの色、塀からのぞいてゐる暗綠の木々――マルコ・ポロ胡同は少し車夫溜りのにんにく臭いが何となく面白い風景で、アンリ・ルソー胡同と立札を替へたいくらゐである。このマルコ・ポロ胡同と[illegible]ところは公使館區域と外界との國境で、少くも十二三人の憲兵が拔劍で樹陰に憩んでゐる。英國公使館のボーイの罷業のをりには五六十人はゐたらう。

「汽車漫走」――

着いた日に僕がこの關所をぬけて、大通りへ出ると、かういふ立札が立つてゐるので、それではこのレールは汽車のか、開拓時代の亞米利加のやうで牧歌的だと喜んだが、不幸にもそれはやはり電車のレールだつた。汽車とは自働車の意味で、要するに氣をつけて走れといふのである。

月あかりの夜ふけ、北京飯店の七階の樓上でダンス音樂のまだ響いてゐる眞下を俥で歸つて來ると、憲兵が二人ならんで合せるともなく歩調を合せ、何ごとか語らひながら、緩つくりと大通りの一町ほどの間を往き來してゐるのだ。それはむしろ眠られぬ寄宿生の一對のやうであつた。僕は銀の角をもつた月の勢力の古さに歎息した。そしてこの時は活動寫眞で見る西洋人と巡査との間柄のやうに、彼等に支那語で何か挨拶したいやうな氣がした。

近郊のことは印象記に度々書いたから省かう。西山一帶[illegible]

ばへ行つて見ると禿山だが、内城々壁の上の散歩徑や、天壇の境内の高みからは青々として、京都の山々の柔和さを想ひ出させた。近郊の景色で目立つものは街道の古い楊の列なりと川べりの鶩鳥の群である。驢馬に横向きに乘つた男と、駱駝を四五頭ひいた男によく出會ふ。

僕は北京へ着くと姪の日支會話といふ本を借りて入用な言葉を手帖に抜き、たいがいの散歩は一人でする事にした。僕は面白い事があると長く立ち留る癖があるので伴れに迷惑をかけ易いし、それを氣にかけては愉快でないからである。しかし突差の場合――例へば辻車の車夫が目的の横町の前を素どほりしたやうな場合に――手帖のなかの肝心な頁(ページ)がすぐと出て來ないでよくまごついた。僕はまた椿樹胡同の古玩店へ遊びに入つて、陶器の竝んだ棚を前に、片言や筆談でしばしば若い番頭達と話しあつた。彼等は毎日のやうに行つて何も買はないでも詰らなかつた。暑さを避けるために密閉した室のなかでわれわれの話聲は博物館のなかの跫音のやうに大きく響いた。終(しま)ひに彼等は内密の話だなぞと云つて、儲けの割合その他を仔細らしく僕に聞かせたりした。しかし僕の歸る前日に彼例の言ひ値の半分にまけてくれた尖盤の壺の瓣(へた)の汚れを、先日アルコールで拭いて、ペンキの匂の少し落ちはじめた時はやはり稍々[illegible]した。――だがそれは別として、この次ぎに北京へ行く機會にも、彼等がまだあの古風な室のなかで、僕を見覺えてゐてくれるといゝと思ふ。親しさと狡猾さとの微妙にまざつた表情や身振を相手にしてゐることは、調理の複雑な支那料理を食つてゐる時の心持に似て一種愉快である。

僕が北京を去つた時は秋の第一日といふやうな日和であつた。嚴密に云へば前の日がさうで、それは秋の第二日であつた。空は日本の高原の空のやうだつた。汽車が停車場を離れると四五分して、右側に琉璃瓦の天壇祈年殿が見えた。祈年殿はしばらく木の間がくれに汽車と一緒に走つた。畑の高粱(カオリヤン)はすつかり熟してゐた。やがて外城永定門が後ろに去つたので、僕ははじめて振返つて座席の卓に對つた。僕の斜向ひには黒づくめの装をし姿のいゝ若い佛蘭西婦人がひとりチョコレートの箱を開けてゆつくり口を動かしてゐた。楊と兵士と楷書の目立つ次の停車場に着いた時、そのひとり旅の婦人は桃賣りの童を笑つて拒み、花賣りの老婆からしつこい色の花束を買つてゐた。

(終り)

# 巴里の春

西條八十

巴里の春のおもひでといふと、何よりもさきに五月一日に辻々で賣る鈴蘭（ミュゲエ）の花が想ひだされる。まつたく四月の巴里はまだ折々氷雨（ひさめ）がこぼれてきて、室のスティームに未練があるが、この花が行人の胸に挿されるころになると、はつきり春といふものの生體が摑めたやうな氣がする。

"Muguet porte-bonheur ä Uingt Aous la bottte といふ花賣の呼聲が、あらゆる廣小路に、郊外に通ずる門（ポルト）の口に、またカフエーの日覆のかげに聞える。若い男や小意氣なミディネットがわれもわれもと買つて上衣の鈕穴に挿す。日暮ごろには一法（フラン）の花束が倍以上に騰つてしまふ。この香氣ある白い可憐な花が、一年中の幸福をもたらすといふ優しい傳説からである。

去年の日記を引き出して見ると、この日、午后私が古本さがしにカルティエ・ラ・タンへ出かけて、久潤に美術批評家の森口多里君と邂逅したことが書いてある。それから二人はぶら〳〵と一緒に歩きながら「オデオン」座へ寄つて私は翌々夜に演ぜられるラシーヌの「ミトリダート」の切符を購つたりなどしたが、結局これから、アレジヤ街の近くに獨りアトリエ住居をしてゐる彫刻家F君を訪ねやうといふことに相談が一決した。

そこで早速タキシーをと、しばらくオデオン座の前に立つて往來を物色してゐたが、いつまで經つても見えない。サンジエルマンの通りへ出れば屹度在ると森口君が云ふので、三町ほど歩いてそこを探したがやつぱりない。

「セイヌの河岸へ行かう。あそこならいつも澤山通つてゐる。」と、また森口君が云ふ。そこで更に四五町歩いて新橋（ポン・ヌッフ）の袂にしばらく佇んでゐたが、ここにも一向見えない。日頃なら眩しいほど通る場處なのだが、どうした譯か頓と分らない。河岸の古本屋は相變らずの人たかりで、青柳が目のさめるやうな綠を見せてゐる河源にはのんきさうに釣糸を垂れてゐる大公望連が大勢だが、タキシーだけは更に姿を見せない。

「どうせここまで來たんだから、ルーヴルの苑（ほ）まで行つて見ようよ。あそこには何時でも美術館（ミュゼ）から出てくる人を待つてタキシイが行列してゐるから。」森口君が第三回目の提議をする。

その熱心さに引摺されて、またしばらく歩いてたうとうルーヴル宮の苑へ出る。カルーセルの朱い凱旋門の前の花壇にチウーリツプは美しく圏をなして白に咲いてゐるが、タキシイの影は依然として一台も見えない。

怪訝な顔で十分程立つてゐた二人はやがて我を折つてそこから乘合自働車（オートビュス）に乘つた。一度乘換へてアレジャ街の近くまで來ると、そこの路傍には黒山のやうな群集。――一人の男が荷車の上へ突立つて身振（チェスト）たつぷりな演説をやつてゐると、周圍がさかんに拍手喝采してゐる。その間に物々しく入交つてゐる黒マントの警官連。

「さうだ。今日は勞働祭（メーデー）だつた。」

森口君と私が同時に憶ひ出す。だからタキシイが無かつたのだ。全部休みだつたのだ。そこらにゐるのは悉く荒くれた勞働者である。しかもその勞働者までがやつぱりほの白い鈴蘭の花を胸に挿してゐる。

巴里の五月一日はかく一面優美で一面殺伐である。

鈴蘭の花の日であることのみを知つて、勞働者の日であることを忘れてゐた美學者と詩人は、それから彫刻家F君の家を訪ねて、恰かも來合せてゐたベルギー生れのモデル女からヱルハアレンの詩の朗吟を聽かせて貰つた。――と、古い日記はしるしてゐる。

---

いま靜岡高等學校教授として來朝してゐる詩人ノエル・ヌエト氏夫妻と、よくムードンの森へ遊びに出かけたのも春であつた。

（ここに書くヌエト夫人とは現在の新夫人では無く、去年の一月に亡られた前夫人のことである。）

ループル河岸から「下ムードン」まで溯るセイヌ河の一錢蒸汽の旅は樂しい。アレキサンドル三世橋、アルマ橋イエナ橋、ミラボー橋といろ〱に變る橋の姿、また河沿ひの並木や建物がもの珍らしく心を娯しませる。わけて面白く今も眼に殘つてゐるのは、何とかいふ橋の袂の、堤下に在る「犬の床屋」だ。愛犬の毛をさま〲な形に刈るのが一時は巴里でひどく流行したもので、今在るのはそれの名殘つだといふ。Tondeur des chiens と筆太に書いた看板が船の上からよく見える。私は船がその傍を通る度、どんな客がどんな犬を抱いて出てくるのか一度見たいものだと希つたが、その希はつひに容れられずじまひ

になつた。

船から下りると私たちは索條鐵道で新緑滴るやうなムードンの丘へのぼつた。そこの廢墟のテラスでまづ持つて來た辨當を平げてから、幽邃な森の奧へと入り込むのだつた。

ムードンの森はフオンテンブローに劣らぬほど廣く大きい。地圖を手にしてゐてさへ時々迷ひ氣味になる。森の中のところどころに小さい沼があり、沼べりに掛茶屋があつて、よく老つた竪琴ひきなんかがそこへやつて來る。そして靜かな森に向つて誰に聞かすともなく彈いてゐると、いつかまはりに若い男や女たちが集つて、曲に合せて踊りはじめる。

若葉を洩れて樂の音を聞くことがある。ふと覗くと、谿の底に――よくまああんな處にと想はれる場處に踊場がある。掘立小屋のやうなカフェーの藤棚の下で若い男や女たちがたのしげに自働ピアノに合せて踊つてゐる。

かうしてピクニツクに來て永い一日ををどり暮すのか、春の日曜日の巴里人の主なる行樂なのである。

かうしたムードンの一日、私は何かの拍子で、ヌエト氏に遅れて、マダム・ヌエトと二人谿間の路を歩いてゐたことがあつた。マダムはアルサス生れである。で、佛蘭西語とほとんど同じ程度に、達者に獨逸語を話す。

ひんから、ひんから、と鳴く鳥の聲を聞きながら、マダムはその日私にしきりに故郷の村の話を聽かせてゐた。アルサスの氣候の大陸的で寒暑の激しいこと、葡萄畑の中に殘つてゐる封建時代の廢墟のこと、その地方の森林に棲んでゐるダンといふ鹿のことなど。――

私たちが歩く濕つた鐵砂の徑には小さい白ちやけた菌がたくさん生えてゐた。マダム・ヌエトは話しながらその小さい菌を眼の敵のやうに踏んづけた。一寸見當らないと立止つてキヨロキヨロ鐵の根を探すやうにしてまで踏んづけた。

一見嚴つく取り澄ましたマダムにこんな子供つぽいところがあるのかなと思つて私はひそかに微笑した。

マダムはそれでもなほ病氣のやうに氣にして菌を踏みつぶし踏みつぶし歩いて行つた。

（その日の光景を私は今はつきりと眼にうかべる。）

そのマダムはそれから半年ほど經つて亡つた。

私は日本へ歸つてから後、清水澄子といふ十七歳で自殺した少女の遺稿を讀んだことがある。その中に、――委しい話は忘れたが、――その少女が死といふ問題を考へて、思ひ餘つて先生のところへ訊ねに行く條があつた。するとその先生は校庭で

あちらむきになつて行ころで何か地上を一心に叩いてゐた。何心なく覗いて見ると、それは懸命に、穴から這ひ出る蟻を叩き潰してゐるのであつた。それを見て少女はその先生に死といふ重大な問題を解く資格の無いことを知つて、それなり糺すのを思ひ断つたと書いてあつた。

私はその遺稿を讀みながら、何かなし亡きマダム・ヌエトのことを想起した。さうしてムードンの森の春の日に、彼女が無心で踏み亡してゐたものはあの小さい蟻では無くて、彼女自身のいのちであつたやうな氣がされた。



# シベリヤの蠟涙

## ──主としてモスクワの五夜──

池谷信三郎

私達が伯林を後に、北へ向つたのは一九二三年の十二月二十八日であつた。伯林には霙混りの氷雨が街を濡らして降つてゐた。

車窓の外には荒れ果てた山河の姿が痛ましく動いて行つた。白樺の森、山毛欅の森。朽ち果てた田舎家が、等閑に小川の邊りに傾いてゐるのも、牛のゐない牧場の腐つた柵の跡も、何なんとく荒廢した戰敗國の名殘りを語つてゐる。カントで有名なケーニヒベルヒの町は闇の中に眠つてゐた。

ポーランド、東プロシヤ、リタウエン・シツトランド。の税關は煩い極みである。

リガに一泊。この町は港町である。ワグネルが嵐の中にあの"Der Fliegende Holländer,"（漂泊へる和蘭人）の着想を得たと云ふのはこの沖あたりかも知れない。ワグネルはケーニヒベルヒで女優のミンナと結婚して、一八三七年にこのリガで有名な"Rienzi"に手を着けたのであつた。

リガでウエデキンドの「地靈」を見た。ルルの女優は中々上

りマリヤ・オルスカが良い。

愈々赤露に入る。雪の一面に埋つた原の中に小さな驛があつた。國境である。赤い旗がいかにも効果的に靡いてゐた。荷物の檢査を受けた。毛布などに一々税を課せられた。所謂お役人と稱する連中は、それは、身長は高く堂々としてはゐるが、打ち見た所、皆んな廿代の汚い服裝をした村の若衆である。日本ならば鎭守の森で、太鼓でも敲きたいやうな連中である。

モスクワに着く。――十二月の一日だつたと記憶する。私達は驛から六臺の自働車に分乘して、雪の街を走つて行つた。一番後ろに、私達の荷物を乘せたトラツクが行つた。このトラツクに、あの革命の時、沒收されたあらゆる家財や、とりこになつたブルジョア達が乘せられて、人の死體を轢き〳〵、阿鼻叫喚の中を、血の流れたそこの街上を走つたかと思ふと、私達は奇妙な興奮を覺えたのであつた。

クリムリン宮殿の前の有名な『赤廣場』へ來た。高い塀をめぐらしたそこの中の一室に、今、現にリエオニンが居り、あの老大な國を處して行く大畫策を建てつゝあるのかと思ふと、私は丁度自分がナポレオンにでも會つたと同じやうな不思議な氣持にとらはれる。何故ならば、私にとつてリエニンよりも歷史的人物として動いてゐるのである。――後での話に、彼はあの時は病の爲に田舍に居たのだとも聞いた。

赤廣場。――ここに曾つては十月革命の烽火が上り、無數の民衆はあの高い塀に殺倒したのだ、武裝されたトラツクの上に立上つて、リエニン、トロツキーが虹のやうな大獅子吼を試みたのだ。そこの側の教會には例の『宗教は亞片の如し』の文字があるさうだ。露西亞の文字は悲しい哉讀めない。何んでも羅馬字が初めてこの國に入つた時、植字工が間違へて逆さまにしたのが初まりだと云ふが、どうだかわからない。

橋を渡つた河の邊りのノヴ・モスコウスカヤと云ふ宿に着く。私の部屋は丁度角部屋で窓を開けると、河を越して、雪に埋れたクレムリンの宮殿が、綺麗な夕陽の中に赤く映えてゐる。私はそつと寫眞でも撮つて、この二度とめぐつて來さうもない旅の貴重な想出の種を殘さうと思つたが、いつぞや、シベリヤの汽車の中から寫眞をうつし、折から鐵橋守備の哨兵に發見され、射たれたと云ふ話を思ひ出して、どうしてもシヤツターを握る氣にはなれなかつた。兎に角まだ獨身者だから、こんな國の空ではと思つたのである。

モスクワ河にキラキラと夕陽の光るのを窓越しに見下

ら、私の頭にはあの懐しい、ウイニヤフスキーの『モスクワの想出』が甦つて來た。あの中に取入れられた『赤いサラフアン』の民謠は、このモスクワ河の河畔の黄昏に、戀を失つた田舍娘がそつと吐く吐息の調である。——あの方の墓場の上に鳥が啼き、四月の草が茂るもの、と云ふのである。ほんとの戀は土の中、苔蒸す墓場に寢てゐるの、と云ふのである。……どうもいかん、旅にゐるとどうしてかう涙つぼろくなるものか。

抑々モスクワは、——御承知の通り一九一八年三月十日からサヰエート政府の所在地となつた。一九一五年に一、八一七、一〇〇あつた人口が一九二〇年の統計では一、〇二八、〇〇〇を示してゐる。此の數字は何を語つてゐるか？

町は五つの區に分れてゐる。モスクワ河が羽織の紐のやうに曲つて、その先端を中央として、そこにクレムリンがある。町は玉葱の横斷面のやうに擴つてゐる。ハートリー・カーターで御承知の、左翼、右翼、中立と三派の各劇場が頑張つてゐる。スタニスラフスキーのモスコウ藝術座、タイロフのカルメヌイ座、革命劇場等。一七五五年創立の古い大學。トレチヨコフの美術館、それに六百の寺院、教會堂がある。——モスクワに就いて深く知り度い人は、定評のあるオイゲン・ツアーベルの『モスコウ紀行』（一九〇二年版）を讀まれると良いさうである。

市の東北の郊外にはソコルニキの大公園があり、それと丁度對蹠點に、即ち市の西南、モスクワ河に沿ふて、有名な『雀ケ丘』がある。ここに且つては大ナポレオンが立つて、炎々と燃え狂ふモスクワの大火を見てゐたのである。この火こそ、時の將軍ロストツプツシンの英斷に依つて行はれ、一八一二年九月の十四日から廿一日にかけて燃え狂つた。ナポレオンの壯圖ここに空しく消えて、彼の大軍は饑えと寒さの中に退却したのである。ハイネの名詩『二人の擲彈兵』は實にこの退軍を背景として歌はれたものである。私達は、あの丘の上に立つて、例の通り背中に手を組合せ、暮れかゝる黄昏の中に燃え狂ふモスクワの火を見下した彼那翁の姿を想ふ時、そして、翻つて、ごつごつの勞働服にペンと紙とを握つて、小部屋の中に想を錬る彼リエニンの姿を想ふ時、——インペリヤリズム、コンムユニズム。——いかに素晴らしき對照がこのモスクワの空に移り行つた事か！　しかし、歴史は又歴史として美しい。その美しき一幅の繪畫は、チヤイコフスキーの『一八一二年の序曲』となつて、今も私達の前にすさまじい幻影を描き出す。あの音樂に現れる大火の姿、コサツクの蹄の響、私はこの地であの曲を聞いたならどんなに素晴しい事かと思つた。曾つてここの音樂堂でユキシがあれを指揮した時のモスクワ住民の感激を想ふのでも

る。

　アンドレエフの『生活の日』の第一幕は此の『雀ケ丘』を舞台としてゐる。若き男女の學生が、やはり此の丘からモスクワを見下して、この同じ感慨に耽つてゐる。いづれの國の若人も同じ感慨である。

　私達は都合で此市に約五日程滯在しなければならなくなつた。二日目の晩、名物のバレー見物に出掛けた。途中『赤廣場』のアーケードを素見した。サモワールが何百となく積まれてゐる。アストラカンの帽子がある。相當に高い。あの當時、加工品は益々騰貴し、農作物は益々下落した。そのひらきを『鋏』と稱し、その『鋏』のひらきをいかにして狹めるかと云ふ事が財政の要であつた。

　劇場にはやはりきらびやかな人々の群に出會つた。勞農政府の政策が行詰り、結局、あのNEP政策が行はれ、爲に生れた小成金（Nepman）達であらう。彼等は又いづれいつかは、その私有慾に依つて致された努力の結晶を、そのまゝ政府に沒收される時があるのであらう。私有慾を否定したものが私有慾を利用するのだ。毒を以つて毒を制するのである。

　女は內部に毛皮を張つた靴を穿き、男はオーバシユウスを穿いてゐる。劇場では入口でそれを脫いで預ける。下足などゝ云ふものは日本だけかと思つたのに、これは又モスクワにもあつたのだ

　バレーの出しものは『ドンキホーテ』で、音樂はミンクーサである。主役のツエデイノフのあの淋しい姿は、今でも私の頭に殘つてゐる。相手の女を演つたネヴエリスカヤはあのシヤリヤピンなどと共に、勞農政府から『民衆藝術家』の稱號を授けられた有名なダンサーである。ドンキホーテはルナツチヤルスキーも別に戯曲に書いてゐる。これはドンキホーテを使つて、一種の社會制度を寓したもので、最近、友人辻恒彥、千田是也兩君の共譯で出る。九月頃築地で演る事になつてゐる。

　翌日は土方與志君の案內で、メイエルフオーリト劇場へ連れて行つて貰つた。ここで私は、初めて幕の無い芝居を見た。舞台を一杯に開けつ放して、舞台全體にたゞ足場のやうなものを作り、暗轉で初めから終りまでそこで演る。內容は一寸公言を憚るが、兎に角俳優は殆ど皆、例のユニオールと言ふやつを着て、まるで女中さんみたいな、白粉一つ着けない女優でもる。サイドカーに看護婦を乘せたオートバイが二台も、觀客席から掛けられた橋を渡つて、爆音勇しく舞台に乘込む。小銃を亂射する。叫ぶ。

　可笑しな事には、一幕すむと、俳優達はそのまゝ舞台を下り

て、私達の所へ話しに來た。中に一人、獨逸語の話せる元氣な若者がゐた。芝居が終つてから、私達はその若者の案内で街を歩いた。道々彼は元氣に話した。あなたはどう云ふ主義かと訊かれた。別にその、と桃色の返辭をすると、露西亞にはノイトラールはゐないと云つて叱られた。電車を降りる。誰も切符を拂つた形勢がない。こつちは銃殺が恐いので、そつと訊くと、高いから拂はないのだと云つて彼は濟してゐる。車掌さんも別に咎めない。

賑やかな街のとても立派な料理屋へ入つた。その若者の半ズボンの服装は、丁度錦水へ印絆天で入つたやうな形である。が、彼は平氣である。シーチとか云ふ肉入りのソツプを一杯飲むと、家に妻が待つてゐるからと云つて、さつさと歸つて行つて了つた。その男は、大きな大邸宅の中の大廣間を、スクリンでいくつかに區切つた小部屋の中に、獨逸人の妻君と二人で暮してゐるのである。その小部屋の隣りにはヴァイオリン彈きと靴屋さんとが住んでゐると云つてゐた。

料理屋では、無理に、孤兒院の寄附の切符が付けられた。ここは寄席みたいになつてゐて、いろいろの音樂だの、ダンスがあつた。赤い革靴のヂプシーの女が、ハンガリヤン・ラプソディーで踊つた。お菓子を食べて、目の出るやうな代を取られた。綺麗な露西亞の美人がゐる。背丈のすらりとした、小柄な、渋みのかゝる顔。どこかに[illegible]

こんな女に惚れられたら、それこそ親父を質に置いても悔はない、と思ふやうな氣持になる。が、勿論惚れられっこはないから安心である。

私は又馬橇に乘つて、寒い夜の道を宿に歸つた。人通りの途絶えた雪の街路を、尖つた頭巾に赤い星の徽章を付けた哨兵が、默々と歩いてゐる。銃劍の先が陰鬱に光る。馬橇の鈴の音が、凍りついた夜の空氣を震はせて響く。チアイコフスキーの十一月の曲『トロイカ』が夢のやうに心の底に聞えて來る。

汽車は愈々モスクワを立つのだ。エカテリンブルグからウラルを越えると、私達の前にはあの廣漠たる雪のシベリヤが横たはつてゐる。何曜日に着くと云ふ呑氣な汽車の時間割である。雪の中に淋しく建てられた小驛の建物の蔭には、近在の村々から出て來た農夫の内儀連が、卵だの、牛乳だの、鳥の丸燒だのを賣つてゐる。氷の割れる音が寂しく耳に響く。私達はモスクワで大庭柯公氏の死を聞いた。そんな不安と限りなき歸心を心に懷いて、私達は退屈な一週間の汽車の旅を前にした。暗い闇の窓の外に、チラつと過るそこの小村に營まれつゝある生活を想つて、燈火のない三等車の、煖爐の灯を凝視め乍ら、私はぼつりと眼を向けてゐた。雪の原につめたく光つた一條の軌道の上を別つ中を、東へ東へと汽車は走つて行く。

[illegible]。チ、チ、チー[illegible]

# 島木赤彦臨終記

齋藤茂吉

## 一

大正十五年三月十八日の朝、東京から行つた藤澤古實君が、柿蔭山房に赤彦君を見舞つた筈である。ついで攝津西宮を立つた中村憲吉君が、翌十九日の午ちかくに到着した筈である。廿日夜土屋文明君が東京を立つた。翌廿一日の午過ぎに、百穗畫伯、岩波茂雄さんと僕とが新宿驛を立つた。たまたま上京した結城哀草果君も同道した。少しおくれて東京から高田浪吉、辻村直の兩君が立ち、神戸から加納曉君が立つた。

上諏訪の布半旅館で、中村憲吉君、土屋文明君、上諏訪の諸君と落合つて、そこで一夜を過ごした。中村、藤澤兩君の話に據ると、十七日に、主治醫の伴國手が、赤彦君の黄疸の一時的のものでないことの暗指を與へたさうである。その夜、夕餐のとき赤彦君は『飯を見るのもいやになつた』といつたさうである。十八日に攝津國を立つた中村君は、十九日に柿蔭山房に著いた。その時赤彦君は、『烟草ももう吸ひたくなくなつた』『ただ靜かにしてゐるのが何よりだ』と云つたさうである。翌廿日、中村、藤澤の兩君が諏訪上社に參拜祈願して護符を奉じて來た。赤彦君は、『ありがたう。おれにいただかせろ』といつた。こゑは既にかすかで、一語一語骨が折れる風であつた。夫人の不二子さんは護符を以て併

伏してゐる赤彦君の頭を撫でた。赤彦君は『ありがたう』といつた。そして、『きたないとこに置くなよ』と云つたさうである。その夜、藤澤古實君に、言葉が跡切れ跡切れに、『己はな。いかんとも疲勞してしまつてなあ。餘病のために。黃疸のために。まゐるかも知れん』と云つた。その終の『まゐるかも知れん』のところが急に大ごゑになつて、健康な時の朗々たるこゑを思はせたので、胸がぎくりとしたと古實君が話つた。

廿二日朝、赤彦君は首をあげて、皆に茶を飲みに來るやうに云つた。中村憲吉、藤澤古實、丸山東一、久保田健次の諸君、不二子さん、初瀨さんが集まつた。その時藤澤君の美術學校卒業製作彫像の寫眞を見せると、『ありがたう。至極だな。しづかなのは一層なつかしいものだ』と云つたさうである。それから、『どうもな。本病より餘病の方がえらいやうだ。齋藤もさう云つて來たよ。僕も同じ意見だ。餘病が。餘病が餘病だけですめばいゝが。本病にはとりつけないで』とも云つたさうである。僕は、神保博士の意見として、どうも黃疸は單純な加答兒性のものでなく肝の方から來てゐることを手紙に書いたのであつた。それでも病の轉移證狀であることは書けなかつたのである。赤彦君はそれゆゑ飽くまで黃疸を餘病と看做し、餘病を先づ退治して置いて、そして生きられるだけ生きようと覺悟したのであつた。それであるから、極力友人に會ふことを厭うて、靜かに身を保たむとしたのであつた。赤彦君は四五月の候になれば餘病を退治して、今度は樂しく友にも會はうと思つてゐたのである。赤彦君はその夜こんなことをも云つた。『作さんは本當に熱心だからな。己ははじめは知らなんだ。一週見て貰つたらもう作さんに限るやうになつた』『自分ひとりではと思ふときには乾度ほかの人にも相談してなあ』『俺はあるんだからなあ』なども云つたさうである。

二

廿一日に、中村憲吉君は校歌の話を爲出した。校歌といふのは、秋田縣角館中學校の校歌を平福百穗畫伯から囑付して赤彦君に作つて貰ふことになつてゐた。それを謂ふのである。すると赤彦君は、北日本の脊梁の。千秋萬古やまのまに。偉靈の水を湛へたる。田澤の湖の水おちて。鱖瀬川となりにけり。』云々と低いこゑで云ひ、憲吉君の批評をも求め、もう七分どほりは出來てゐることを云つた。その時、藤澤古實君が傍から、『ちよつと其を書いて置きませうか』と云つて、それから不二子さんもそれをすゝめると、『書いちやいかん。それだでこまる』『みどころを取つて行かれるやうだ』と云つたさうである。

そのうち腰の痛が出て來た。『水脈坊水脈坊。お客様がゐていやかも知れんがおさいて呉れなくちや』と云つた。それから、『飲物も食物も皆さげてくれ。目のまへにあると溜まらんから』と云つたさうである。その時按摩が來たので皆が部屋を退いた。その時古實君に、『訂正を送つて呉れたか』と云つた。『はい、送りました』と答へると『確だな』と念を押したさうである。この訂正といふのは、雜誌改造に出した、『風呂桶に觸らふ我の脊の骨のいたくも我は痩せにけるかな』の下の句を『斯く現れてありと思へや』と直し、憲吉・古實兩君の意見をも徵して其をアララギの原稿にしたのである。それを謂ふのである。なほ、今雜誌を調べて見ると改造に出した歌をアララギでは少しづつ直してゐる。

信濃路に歸り來りてうれしけれ黃に透りたる漬菜のいろ（改造）

信濃路に歸り來りてうれしけれ黃に透りたる漬菜のいろは（アララギ）

神經の痛みに負けて泣かねども夜每寢られねば心弱るなり（改造）

神經の痛みに負けて泣かねども幾夜寢ねねば心弱るなり（アララギ）

廿一日夕七時ごろ、古實君との問答がある。

古實『中村さんは明日か明後日歸ると云つてゐました。どうも己が行つて赤彦を興奮させて濟まなかつたといつてゐました』

赤彦『中村は己が相手をしなんで不服らしかつたかな』

古實『そんなことはありません』

赤彦『己は一言いふにもつかれるのだ』

古實『……』

赤彦『もう一度會ふさ』

古實『それでは明日でもお會することにしませう』

かういふ會話などがあつた。それから八時頃かういふことを云つたさうである。『蕨伯、齋藤、岡、土屋、岩波――五人だなあ。………それへおれの病を君から委しく書いてやつて呉れ。まだ容態をくはしく書いてやらうとしてゐて書いてやらないから。………身のおきどころがない。……坐つてゐても玉のやうな汗が額から出る、いかんとも爲様がないとさう書いてくれ。…そして物をいふと、それだけ疲勞するから、靜かにしてゐると書いて呉れ、醫者もさういつてゐるし、それが己には樂だ』かう云つた。古實君は『かしこまりました』といふと、『用件はそれだけ』『あつちで寢て行つて呉れ』と云つた。

この夜の十時頃、妹の田鶴さん。不二子さん。次孫さん。初瀬さん。健太君。丸山君。藤澤君などを部屋に呼び、『おれ

はなるべく物を云はぬから、そつちでお茶を飲んで呉れ』と云つた。間もなく、辛うじて身を起し、『明治四十一年信山へのぼる。雲の海の上にあらはるる信濃のやま上野のやま下野の山』『明治四十一年十一月とおぼえておけ。日本新聞に出てゐる』と云つた。

その時、赤彦君のうしろに猫がうづくまつて咽を鳴らしてゐた。これは赤彦君がいつも猫を可哀がるので傍に來てゐるのであつた。皆が、猫の話をし、夏樹さんの猫をいぢめる話などをしてゐると、赤彦君は、『初瀬、歌の原稿を書け』と云つた。そして、『わが家の猫はいづくに行きぬらむこよひもおもひいでて眠れる』といつた。暫くして、『ちがつた。ちがつた。猫ぢやない。犬だわ』といつて笑つた。これは數日前に居なくなつた犬のことを氣にして詠んだ歌である。

わがいへの犬はいづくにゆきぬらむこよひもおもひいでてねむれる

その後は遂に歌を作らずにしまつた。この歌が赤彦君の最終の吟となつたのであつた。

## 三

廿二日朝、土屋君は僕を伴國手のところに連れて行つて呉れた。僕は初對面の挨拶をし、初診以來熱心の治療に對して謝した。伴國手はその前にも赤彦君の病狀に就いて委しく通信され、また黄疸のあらはれた三月一日には態々電話で知らせて呉れたのであつた。午過ぎに、平福・岩波・中村・土屋の諸君と伴國手と僕と柿蔭山房に出かけた。

家に入るところの道は霜解がして靴がぬかつた。松樹はもとの儘だが庭は廣げられてあつた。大正十年の夏に僕夫婦の一夜宿まつた部屋には炬燵がかけてあつて、そこに諏訪の諸君があたつてゐた。暫くして先づ伴國手、中村憲吉、僕の三人が部屋に入つて行つた。部屋は新築したばかりの書齋である。いままでのは、書齋も客間も一しよで、書きもの

神經の痛みに負けて泣かねども幾夜寢ねねば心弱るなり（アララギ）

廿一日夕七時ごろ、古實君との問答がある。

古實『中村さんは明日か明後日歸ると云つてゐました。どうも己が行つて赤彦を興奮させて濟まなかつたといつてゐました』

赤彦『中村は己が相手をしなんで不服らしかつたかな』

古實『そんなことはありません』

赤彦『己は一言いふにもつかれるのだ』

古實『……』

赤彦『もう一度會ふさ』

古實『それでは明日でもお會することにしませう』

の[illegible]みを得て、そして酒に醉うたのであつた。森山汀川君は今夜向うにつめてゐる。藤澤君は夜更けてから向うに宿りに行つた、

## 四

三月二十三日午前、皆して二たび柿蔭山房に行つた。ゆうべ、百穂畫伯の『丹鶴青湖圖』の寫眞を赤彦君が見たときのことを森山汀川君が話して呉れた。赤彦君は努力して兩手を張つてそれを見た。そして、『これはたいしたものらしい』と云つた。それから、『どうも寫生に徹したものだ』とも云つたさうである。そこで、けふも赤彦君の枕頭でその繪の話などをし、時に諧謔談笑した。午餐には諏訪湖の鯉と蜆とを馳走になつた。これは、『どうも何もなくていけないが、鯉と蜆でも食べて行つてくれたまへ』といふ赤彦君の心盡しであつた。靜かに臥つてゐたい赤彦君の

などの散らばつてゐる時には困るといふので、元の土間の處に書齋を造つたのであつた。そこの炬燵に赤彦君は俯伏して、頭のところに兩手を固く組んでゐる。伴國手は來意を告げた。すると赤彦君は辛うじて顔をあげ、それから兩手を張つて姿勢を正し、そして、『ありがたう』と云つた。こゑは低くくそして幽かであつた。そしてその儘また俯伏してしまつた。赤彦君の顔面は今は純黄色に變じ、顔面に縱横無數の皺が出來、頬がこけ、面長くて、一瞥沈痾の極度を示してゐた。

『だいぶ痩せたなあ』と僕は云うた。すると赤彦君は、『冷靜だ。極めて冷靜だ』と云ひながらその儘俯伏してゐた。僕は咽のつまるやうにおぼえて唯『うん』と云うたのみであつた。僕はその時、三月十二日に古今書院主人橋本福松君が柿蔭山房をたづねた時に、赤彦君がこゑを擧げて泣いたといふことを思ひ出したのであつた。赤彦君は暫くして極く靜かに、『伴先生は毎日診て下さるが齋藤君は久しぶりだから、どうか見て呉れたまへ』と云つた。僕は伴國手から聽診器を借りて型のごとくに診察をした。その間赤彦君は我慢をして起直つてゐた。それからまた俯伏してしまつた。暫くして僕は、『憲伯も、岩波主人も來てゐるから、どうか會つて呉れたまへ』といふと、赤彦君は『どこに』と大きなこゑを出して頬をあげた。そして黄色の大きな眼を瞬つた。『此處に一しよに來た』といふと、今度はただ點頭いた。そこに平福・岩波・土屋の三君が入つて來、中村・藤澤の二君も交つて談笑常の如くにした。赤彦君は新來の客には一々丁寧に會釋をし、をかしい時には俯伏した儘笑つた。それから、『若い連中も來てゐるから會つて呉れないか』といふと赤彦君はたゞ點頭いた。そこに加納曉、結城哀草果、高田浪吉、辻村直の諸君が入つた。赤彦君は一寸うなづき、『おれはなるたけ物を云はぬが、君等はいろいろ話してくれたまへ』と云つた。それでも種々歌柄についての短評などをも云つた。氣になると見えて發行所のことなどをも云つた。それから、『これも生きられるやうなら[illegible]

も聞こえた。その間に僕等に茶を煖することを命じたり、ぼんたんを持つて來て食はせることを命じたり、いろいろ細かいところに氣が付いてゐた。そして僕等は諏訪湖からとれる寒鮒の煮たのを馳走になり、酒をも飲んだ。これは一々赤彦君の差圖によつたのであつた。僕等は病床の邪魔をしたことを謝しながら、それでも二回まで會つた。その時赤彦君は、『何だかこれではあつけないやうだな』と云つた。僕等は、明日二たび邪魔するだらうことを告げて柿蔭山房を辭した。

その晩、急に氣のゆるんだやうにおぼえて、みんなは布半旅館で馬肉を食ひ、坐り相撲を取り、將棋などを差した。百穗畫伯は赤彦君の病顏の寫生圖を作つた。夜更けて溫泉に浴し、靜かに眠らうとしたが、心が落付いて來ると赤彦君の顏容が眼前に髣髴としてあらはれて來た。諏訪の諸君も、それから中村憲吉君も、數日來の張りつめた心に幾分の緩みを得て、そして酒に醉うたのであつた。森山汀川君は今夜向うにつめてゐる。藤澤君は夜更けてから向うに宿りに行つた。

## 四

三月二十三日午前、皆して二たび柿蔭山房に行つた。ゆうべ、百穗畫伯の『丹鶴青瀾圖』の寫眞を赤彦君が見たときのことを森山汀川君が話して呉れた。赤彦君は努力して兩手を張つてそれを見た。そして、『これはたいしたものらしい』と云つた。それから、『どうも寫生に徹したものだ』とも云つたさうである。そこで、けふも赤彦君の枕頭でその繪の話などをし、時に諧謔談笑した。午餐には諏訪湖の鯉と蜆とを馳走になつた。これは、『どうも何もなくていけないが、鯉と蜆でも食べて行つてくれたまへ』といふ赤彦君の心盡しであつた。靜かに籠つてゐたい赤彦君の病牀を邪魔したのさへ心

苦しい。然るに赤彦君は苦しいうちにかういふ心盡しをされるのであつた。僕等は悉く馳走になつた。

午後三時に作岡君が見えて、注射を二とほりされた。僕もそのとき同坐した。注射の一つは强心の方の藥で、一つは神經痛のための藥であつた。この注射は赤彦君から進んで所望されるので、今朝から催促されてゐたものである。それから一時間ばかり經つて僕等は二たび病牀を見舞つた。その時には赤彦君は珍らしく機嫌好くていろいろの話をした。これは强心の方の藥にコフエンが入つてゐるので、それが神經に働いたためであらうか。角館中學校の校歌の話になつたとき、『つまり茶話會などの時に歌ふのもあつていいですね。何とか謂つた。佐竹義敦、小野田直武は日本洋畫の紅二點、といつた調子ですね。デカンショ式でも好し。男美術に女の美術。美術美術で苦勞すると云つた調子ですね』天にそびゆる秋田の杉も巖を貫く根元から。それから、行つて見たかや田澤の湖へ。そこの浮木の下のみづ。かういふのは幾らでも出ます。校歌の方は一遍妻に書かせてみます』こんなことを赤彦君は俯伏しながら云つたので、皆が愁眉を開いて喜んだのであつた。けれども赤彦君はこのごろ眠りと醒覺との界で時々錯覺することがあつた。ゆうべあたりも、『おれの膝に今誰か乘つてゐなかつたか』などと問うたさうであつた。

そこで赤彦君は皆に茶を饗することを命じた。その間に赤彦君は冷水を齎させながら飲干して、實に旨い。これが一等です』などとも云つた。僕は、この分ならば赤彦君の壽命は三月一ぱいは保つであらう。そして短歌の方の製作も幾つか出來るだらうと思つて、秘かに喜んだのであつた。そして、四月の四日過ぎには少し暇になるであらうから、その時また出直して來て邪魔するなどとも云つた。けれども僕の眼識は欲目のために鈍つてゐて、赤彦君は三月盡を待たずに歿し、短歌の製作も『火の歌』以後は絕えたのであつた。

僕等は赤彦君のまへに暇を言ひ、心に暗愁の嘆りを持つて柿蔭山房を辭した。旅舍に歸いて、夕餐を食し、そして十一

先づ銘々歸家することに極めた。それまで湯に入るものは湯に入り、將棋を差すものは將棋を差した。心が妙に興奮してゐて、思はぬ所ではしやいだりしたのであつた。

## 五

その夜十一時幾分かの上諏訪發の汽車で、中村憲吉君は攝津に向ひ、僕等は東京に立つた。平福百穗、岩波茂雄、土屋文明、高田浪吉の諸君同道である。

朝六時頃新宿驛に著くと、家根瓦の上に霜が眞白に置いてゐた。今ごろなんだつてこんなにきびしい霜だらう。さうおもひながら僕は家に著いた。家には父母も妻も誰もゐなかつた。これはゆうべ妹の死報に接してその方につめかけてゐたのであつた。妹は、ゆうべ僕らが上諏訪を立つて少し來たころに歿したのである。僕は實に混亂せんとする心を無理におししづめて暫く眠つた。それから外來診察をし、溜まつてゐる手紙端書を少し書いた。そこへ、今井邦子さんから電話がかかつて、どうしても一度島木先生にお目にかゝりたいといふことであつた。僕は直ぐそのことを否定した。今井さんは涙を流してゐる風であつた。兎も角今夜アララギ發行所に來てもらひたい旨をいつて電話を切つた。

午後に僕は妹を弔ひに行つた。妹は安らかな顔をして死んでゐた。妹が生んだ大きい方の女の子は珍らしい客が來るので切りにはしやいでゐるのも、ひどく僕を感動せしめた。夕刻に妹の家を辭して、途中で蕎麥を食ひ、その足でアララ發行所に行つた。

發行所で今夜は、同人の重立つた人々に來て貰つて、今日まで秘して居つた島木赤彦君の病氣の經過を報告しようとしたのであつた。席には土屋文明君、橋本福松君もすでに見えてゐた。僕は同人の重だつた人々に赤彦君の疾病の經過

の大體を話し、一月廿一日に伴氏から胃癌の宣告を受けたこと。二月二日に胃腸病院の神保孝太郎博士の診察を受けこと。次いで佐藤三吉博士の診察を受けたこと。今はすでに重篤の狀態にあることをも云つた。そして、赤彦門下の三人の女流は岡麓さんと一しよに明日信濃に立つこと。そのほかの諸君は病氣の邪魔になるから行かぬことを約したのであつた。同人のうちにはこらへ切れない程赤彦君に會ひたい者もゐたが。僕は、赤彦君の壽命は三月一ぱいは保つやうに思はれたので、強ひてさう約束してもらつたのであつた。僕はなほその席で、これまで口を緘して赤彦君の病氣を通知しなかつた訣をも話した。『實は發行所に起臥してゐる高田浪吉君にも知らせなかつたのだから、』といふやうなことも其時附加へたのであつた。夜ふけてから僕は家に歸つた。

翌廿五日午過ぎの新宿發の汽車で、岡麓さんは今井邦子さん築地藤子さん阪田幸代さんの三人を連れて信濃に立つた。午後に僕はアララギ發行所に行き、赤彦君と親交のあつた二三の方々に赤彦君の病のすでに篤きことを告げた。なほ數人の方々に手紙に書かうとしてゐるところに、發行所宛に赤彦君危篤の電報が屆いた。僕は手紙を書くことをやめて家に歸つた。家にもやはり電報が屆いてゐた。その夕すぐさま岩波茂雄さんは信濃へ立つた。夕食後アララギ發行所に行くと土屋文明君はじめ七八人の同人が集まつてゐた。留守居萬事を土屋文明君、高田浪吉君に賴み、十時幾分かの汽車で新宿驛を立つた。橋本福松、高木今衞、馬場謙一郎の三君同道した。夜が更けても目が冴えてなかなか眠れない。甲府驛で辨當を買つて食つた。

『おや。雪だ雪だ。』暫くして汽車が信濃に入つたとおもふころ、からひとりが云つた。

『成程たいへんな雪だ。いつこんなに降つたかな。ゆうべあたりかも知れんな』かうまた一人が云つた。二月まへ此處を通つた時には雪はすつかり消えてゐたからであつた。

『おや。まだ降つてゐますよ。吹雪ですよ』なるほど、こいつはひどい。かうして見ると信州の氣候はやつぱり鋭いんだね』こんなことをも云ひ合つた。島木赤彥君の息は既に絕えてゐるだらうとも思ひながら、こんな會話をするのであつた。曉天に近い信濃の國は一めんの雪で蔽はれ、それを烈風が時々通過ぎて、吹雪の渦を起させてゐるのであつた。

## 六

三月廿六日午前五時四十分に、四人は急いで上諏訪の停車場で降りた。町の家々は未だひつそりとして居る。雪のさかんに降るなかを四人は布半旅館にたどりついて、戸を破れる程たたいた。

布半には東京から來た人々はもう誰も宿つてゐなかつた。赤彥君はもう駄目に相違ないといふ豫感が強く僕の心を打つたが、女中は、守屋喜七さんの宿つてゐられることを告げたので、四人は守屋さんの部屋になだれるやうにして入り込んだ。守屋さんは、赤彥君の息のまだ絕えないでゐることを語られた。赤彥君の親しい友である守屋さんは病をおして長野から來てゐたのである。

四人は女中をせきたてて、人力車を雇つてもらつた。雪の降るなかを人力車は走るけれども、それがもどかしい程遲い。高木村の入口で人力車から降りて坂をのぼつて行つた。息を切らし切らし家に著いた時には、もう雪は小降りになつてゐた。入口から直ぐの部屋には昨夜來赤彥君の枕頭をまもつた人々の一部が疲れて眠つてゐる。森山汀川君は直ぐ僕たちを赤彥君の病室に導いた。

赤彥君は今は仰臥してゐる。さうして、純黃色になつた顏面から、二日前に見たときのやうな縱横無數の皺が全く取れて、そのために沈痛の顏貌が極く平安な顏貌に變つてゐる。そして平安な息を續けてゐるけれども、意識はすでに時

明ではなかつた。時々眼を半眼に開き、瞳はもはや大きくなつてゐた。

主治醫の伴國手は、きのふ以來歸宅せずに全く赤彦君の枕頭を護られたのであつた。伴國手はかういふことを語られた。赤彦君はきのふ迄はいつもどほり神經痛のための注射を要求されたさうである。『今日もやはり注射をしませうか』と問うたとき、『もちろん』と答へたが、それが非常に幽かなこゑであつたさうである。今までは神經痛のために仰臥することが出來ずに、おほむね炬燵に俯伏になつてゐたのが、昨夜以來は全く仰臥の位置の儘だといふことである。きのふ以來、急に脈搏が惡くなるので、虚脱の來るのを恐れたといふことである。さういふことを伴國手は語られた。昨夜十二時過ぎに狀態が惡くなつて、みんなが枕頭につめかけたのであつたが、それが少しく持直して今日に及んだのであつた。

藤澤古實君はかういふことを話して呉れた。きのふ、岡麓さん、今井邦子さん、築地藤子さん、阪田幸代さんの見えられたとき、『先生。岡先生がおいでになりました』といふと、赤彦君は辛うじてからべを起して、銘々に點頭いたさうである。そして『ありがたう』といつたが、それが恐らく最後の言葉であつたのであらう。といふことであつた。

それからかういふことも話して呉れた。廿三日僕等友人が皆辭して歸つた日である。その日の夕食後、長女初瀬さんが、『今夜はお父さんはえらい樂のやうだね』と云つたさうである。さうすると赤彦君は、『大敵退散した』と云つて笑つたさうである。『大敵』といふのは、赤彦君が靜かに靜かに籠つてゐたかつた病床に、どやどやとつめかけた平福・岩波・中村・土屋・僕その他の友人、門人を謂つたのであつた。さうして赤彦君はつづいて、『來る人も遠いところを容易ではないよ。感謝しなければならないよ。齋藤はおれの體を氣にして來て呉れたし』と云つたさうである。その言葉は遲く、切れ切れで、幽かなのである。一語いふにも骨が折れるのである。

炬燵に俯伏して頭のところに手を組んでうつらうつらしてゐた赤彦君は、その夜の十時過ぎに居合せた家族、親戚の皆を枕頭に呼んで、『今晩おれはまゐるかも知れない』と云つたさうである。併し暫らくすると、枕頭でみんなに茶を飲ませ、『これで解散だ』といつたさうである。それが廿三日夜のことであるから、廿四日なか一日置いて、廿五日には意識がすでに濁りかけたのであつた。

廿六日は午になり午後になり、赤彦君の狀態は刻々に變つて行つた。主治醫は三時間おきに強心の藥を注射した。二男周介君はいま入學試驗に行つて居り、けふの正午までに體格檢査が濟む筈である。そして直ぐ汽車に乘れば今夜の三時に上諏訪驛に著く筈である。それまで赤彦君の息を斷たせまいといふ主治醫の念願であつた。そこで夕刻、リンゲル氏液五百瓦をも右側大腿の內側に注入した。それから、息のあるうち寫眞も撮りたい。それから藤澤古實君が土を用意して來て居り、息のあるうち恩師の顏を塑にとりたいといふので、夫人不二子さんの許を得て、寫眞も撮り、面型も出來た。そして廿六日は暮れた。

夕食後、九時になり、十時になり、十一時になつたころ、息も脈も細り體が冷えかけた。そのうち夜半を過ぎたので一まづ皆が枕頭を去て休むことにした。伴國手と僕と交る交る容態をまもつてゐたが、ふたりも少し休むことにした。午前二時に上諏訪驛まで周介君のむかひに行くやうに人を賴み、それから脈搏、呼吸の方を初瀬さんに看てもらふやうに賴み、僕もそのまゝ布團をかぶつてしまつた。さて小一時間も經つたかとおもふころ、しきりに赤彦君を呼ぶこゑがする。それは不二子さんのこゑである。それから初瀬さんのこゑである。それから周介君のこゑである。しかし、赤彦君は一言もそれに返辭をしない。呼ぶこゑは幾たびか續いて、それに歔欷のこゑが加はつた。僕は夢現の間にそれを聞いてゐるのであるから、何か遠い世界の出來事のやうに思へる。痛切に感じてゐるやうで、實は痛切に感じてゐない。

けれども暫くそれを聞いてゐるうちに、僕は反射的に身を起して布團から顔を出した。これは何かの會釋でもするつもりであつたらしい。然るに僕が顔をあらはした時にはみんなの言葉が既に絶えてもとの靜寂に歸つてゐる。僕は急劇に明るい電灯の光を目に受けたので、一語も發せずに二たび布團をかぶつてしまつた。布團をかぶつてしまふと意識がだんだん晴れて來るのをおぼえた。そして先程の赤彦君を呼ぶこゑのことが寫象となつて意識にのぼつて來た。氣丈な不二子さんは僕等のまへにつひぞ今まで涙を見せたことはなかつた。これは侍の女房の覺悟に等しい心の抑制があつたからであらう。然るに今は他人の盡くが眠に沈んでゐる。赤彦君の枕頭に目ざめてゐるものは皆血縁の者である。そして終焉に近い赤彦君を呼ぶこゑが幾つ續いても、赤彦君はつひに一語をもそれに答ふることをしない。血縁の者はいま邪魔なく、障礙なくして慟哭し得るのである。僕は布團をかぶりながら兩眼に涙の湧くのをおぼえてゐた。間もなく鷄鳴がきこえ、曉が近づいたらしい。その頃から僕は二たび少しく眠つた。

## 七

廿七日の午前六時半ごろ、主治醫と二人で診察すると、脈搏はもはや弱く不正で結代があつた。息も終焉に近いことを示してゐた。そこで主治醫の注意によりみんなが枕頭に集まつた。赤彦君は稀に歯ぎしりをし、唸つた。その唸りが十ばかり續くと、息が段々幽かになつて行つた。そして消えるやうになるかとおもふと、また唸がつゞいた。それがまた二十ばかりつゞいてまた息が幽かになつた。そのうち八時になつたので、みんなが暫く休んで朝食をした、その間に赤彦君を看護つてゐたが、平安な顔貌に幾らか苦しみの表情が出て來た。それを僕が凝視してゐると、幾ばくもなくその表情が取れて行つて、もとの平安な顔になつた。ときどき唸があつて、それがまた十ばかり續いた。九時に脈搏が微

れなくなつたので、居合せた人々が盡く枕頭に集まつた。

嚴父。夫人の不二子さん。健次さん。周介さん。夏樹さん。初瀬さん。水脈さん。妹の田鶴さん。弟の義穂さんこの他の血族。長野から來られた守屋喜七さん。諏訪の田中一造、五味繁作、森山汀川、両角喜重、丸山東一、藤森省吾、両角丑助、堀内皆作の諸君。東京から來た金原省吾。白水吉次郎。鹿児島壽蔵。京都から來た宇野喜代之介、竹尾忠吉の諸君。それに上に記した、岡麓、岩波茂雄、橋本福松、藤澤古實、高木今衛、馬場謙一部、今井邦子、築地藤子、阪田幸代、等の諸君。僕が姓名を知らずにしまつて、また問合せるのに時の無い約十名。あはせて約四十名が枕頭に集まつた。北海道の令弟塚原瑞穂、それから小原節三、平福百穂、森田恒友、中村憲吉の諸君はいまだ途中にあつた。

赤彦君の安らかな顔貌は一瞬何か笑ふに似た表情を口脣のところにあらはしたが、また元の顔貌に歸つた。その時不二子さん以下の血縁者はかはるがはる立つて赤彦君の口脣を濡ほした。それから主治醫件國手の靜肅な診査があり、赤彦君の息は全く絶えた。時に大正十五年三月廿七日午前九時四十五分である。

續いて朋友、門人の銘々が赤彦君の脣を濡ほした。その時僕等は、病弱のゆゑに師の臨終に參ずることの出來ない土田耕平君をおもはざることを得なかつた。けふは天が好く晴れて、雪がどんどん解けはじめてゐる。友島木赤彦君はつひに歿した。痩せて黄色になつた顔にはもとの面影がもはや無いと謂つても、白きを交へて疎らに延びた鬚髯のあたりを見てゐると、柿の村人時代の顔容をたもひ起させるものがあつた。

此文章は、中村憲吉君の談話。藤澤古實君の覺書に負ふところが多いのである。然し迅急の際に筆を行り、推敲の暇が無かつたのであるから、不備蕪雜不謹愼の個所は、追つて中村君、藤澤君、森山君等の精細なる文章に因つて訂正される筈である。齋藤茂吉識。




臨終の赤彦——平福百穗寫

# コントの王様

## 『悩み笑ふ』を讀んで

佐近益榮

卷頭の「北見」は藤森成吉氏の北海道土産である。「青ちゃん」「種づけ」「雨乞ひ」の三篇より成つてゐるが、三篇中では「種つけ」がいちばん御馳走。この書では大分伏せてあるが、雑誌で讀んだ時、私は太い線の下に作者のこまやかな同情の脈うつてゐるのを見、強い意志のくちびるをかんでゐるのを感じた。畜牛の奔放な性慾に對する可笑しみのかげに貧しい百姓の悲しみを點出した手際はあざやかである。この皮肉は「北見」中で傑れてゐるのみでなく、この一卷中でもさんとして光つてゐる。近頃の文壇でもおそらくは飛行船に東京市中を見下すといつたやうな氣持の清々するものである。コントの王様である。ここへゆくと「青ちゃん」は營養不良である。視點がぼやけてゐる。材料としては惡くはないが、いや寧ろ惡いの反對だが、調理法を誤まつたではなかつたらうか。「雨乞ひ」は「青ちゃん」よりは余程よいが、「種つけ」より勿論おちる。

「地主」といふ作は發表された當時私をして非常に喜ばせたものであつたが、今讀み直して再び非常に喜ばせるものである。この中でいちばん重要な役を演じてゐる人物は私が最近おなじみになつたある文士をモデルにしたものださうだが、いかにもにくめないお坊ちやんである。朱塗の鳥かごの中にでも入れて一聲さへづらせて見たいお坊ちやんである。作者のめぐみを呼吸して始めて生命がある胡椒水中の鮒である。讀者はこの坊ちやんを紹介してくれた作者に感謝せねばなるまい。「種つけ」には作者の涙があるがこの作には涙がない。おそらくは涙の後のやゝ穏やかになつた時の氣分だらう。それでよいのだ。その方が却つてよいのだ。

「親ごゝろ」に對する作者の心は惡い氣持ではないが、すこしあますぎはしないか。すこし淫し過ぎやしないか。私はこれだけの澤山の材料を強いて一つにまとめたことに對してそれを思ふのである。親戚同志が久しぶりに一緒になつて隠し藝をやる場景もよく、芝居の切符賣口に立つてゐる母の心持も涙ぐましいものである。

「路上」も「電車の中の藝妓」と「公園の文人」とから成つてゐるが「親ごゝろ」よりは線が強い。そして、ピチピチと生きがよい。さいたばかりの草花を見る感じだ。いつたいにこの書はユーモア小説集としてある通り看板に詐がない。したがつて客觀的である。拱手して傍觀した結果である。あの正直で、そして勇氣があつて、せきこんで物に對する氏の半面にかうした面があるかと思はれる愛らしい作品集である。(價一圓三十錢)

# 支那南北記

蘇峰生

世間では醫學博士太田正雄君と云ふよりも、寧ろ木下杢太郎君と云ふ方が、通りがよからう。記者の如きも、近來迄は、全く木下杢太郎と云ふ作家名で承知してゐた。

德川時代には、醫師にして、文藝に卓越の士多かつた。爲めに儒醫などゝ云ふ熟字さへも、使用せられた。幕末より明治初期にかけても、淺田宗伯、今村亮、森養竹などの徒、枚擧に遑なき程であつた。而して明治の後半期より現代に於ては、森博士の如き、又た土肥博士の如き、大家、名家が出でゝゐる。而して太田博士の如き、亦た其の一人である。世間では君を鷗外博士の後身と云ふものあるが、記者の知り得る限りに於ては、博學能文の點に於ては、然か云ひ得可きも、其の趣味や、性情は、必らずしも同一とは思はれない。

此頃『支那南北記』を一讀して、頗る愉快を覺えた。此れは大正五年から九年に至る間、著者が奉天に滯在中、朝鮮や支那內地を旅行したる際の、諸製作物を蒐拾して、一冊としたるもの。稱して支那南北記と云ふも、其の卷頭の『朝鮮風物記』若しくは『滿洲聞見記』の如き、おまけとしては、勿體なき程面白き文字である。

著者には科學者の素養と、藝術家の天分とを、併せ具へてゐる。而して詩人忠厚の性情が、極めて他人の氣附かざるやうに、極めて地味に、其の全編に流れてゐる、而して謙虛なる篤學者的態度が、支持せられてゐる。

されば本書は、讀んで面白きと云ふばかりでなく、如何にも言明し易からざる好感、快感が湧き來る。此れは文字の妙と云はんよりも、全く著者の事物に接觸する態度と、調子とが、然らしむるものと云ふを適當とする。少くも此の一點に於ては、著者は鷗外博士よりも、人をより多く引き附くる力を持つてゐる樣に思はる。

著者の觀察眼は、[illegible]である、而して纖巧、時として婉約。何處迄も細かく、何處迄も僅しく、何處迄も其底までも滲入せねば止まぬ趣がある。著者の足跡の一半は、記者も自ら辿りてゐる。然も記者が見逃したる物、見にもそれ程に見透らざる物、一たび著者の指示を經て、實に我が粗枝大葉を、慚悔するの情に堪へざるものがある。

例せば朝鮮李王家博物館に於ける、如意輪觀世音の如き、記者も屢ば其の慈容に接し、自ら隨喜禁じ難きを覺えた。然も本書によりて、更らに其の有難味を加へたる幾倍ぞ。慶州に於け石窟庵石佛の如きも、亦同樣だ。

惟ふに此書は、著者の歐洲行以前の産物だ。其の歐州行の産物は、今後に於て、更らに期待す可きものがある。就中西班牙、葡萄牙に於ける、元龜天正頃の日本關係——耶蘇教傳來——の史料は、君の捜討にかゝるもの少からずと聞けば、如何にそれが君の手によりて、吾人を啓發す可きか、鶴首して竢つてゐる。（國民新聞所載、價參圓）

# 「座右寶」

座右寶は志賀直哉氏の選編になる近來稀に見るの努力になる畫集で、從來のか〻る美術出版物が美術史的系統を追ひ選編せられたのと異り、志賀氏個人の精神的、藝術的要求にのみ從つて、自由に集められた所にその特色を有するものである。

志賀氏はこの集を作るのに數年の年月を費し、京都、奈良、大阪、東京、横濱、高野山といふ風に寫眞をうつして廻つた。而して多大の苦心とあらゆる犧牲とが拂はれ、委くこれ國寶とも云ふべき藝術品にして、他に類を求むることの絶對に得難き尊いもの〻みである。全部で百五十一點、そのうち繪畫の部六十五點、彫刻の部五十八點、庭園建築の部二十八點といふ割合で、その內容の大略を記せば繪畫には法隆寺金堂壁畫、藥師寺の吉祥天女圖等の宗教畫、高野山明王院の傳智證大師作の赤不動。繪卷物では傳覺猷筆の鳥獸戯畫、信貴山緣起、將軍塚緣起等が揃へてある。足利時代のものでは、藝阿彌、相阿彌の山水圖、牧溪の鶴圖虎圖、瀟湘八景圖等。桃山期では永德の豪華なふすま繪二種、宗達の扇繪三種、それから探幽の牡丹の圖がある。文人畫では大雅の十便、竹田の船窓小戯、支那の部では荆浩の濯足圖、董北苑の山水圖、徽宗の桃鳩圖と鶉圖それに八大山人の群鹿圖等がある。彫刻の部では法隆寺の秘佛救世觀音、百濟觀音、夢違觀音等、中宮寺の如意輪觀音藥師寺の聖觀音、河內觀心寺の秘佛如意輪觀音座像等が揃へてある。建築では大德寺眞珠庵の茶室、裏千家の茶室、横濱原氏邸內に移された佐久間將監作の茶室等、庭園には小堀遠洲作の桂離宮、相阿彌作の龍安寺石庭等を入れてある。この畫集を成すに志賀氏のために影の形に伴ふ如く努力した橋本基君の骨折も記錄せらるべき價値がある。我々は志賀氏の趣味に徹底せる今回の擧を賛して大方の美術愛好家が座右寶として一本を購はるるの徒爾ならざるを信ずる。（定價貳百圓、玻璃版印刷の大きな半切。本鄉區湯島四丁目二十番地座右寶刊行會）

**菊池寛著**

（四十版）

# 第二の接吻

（田中良幀装）

定價貳圓
送料廿錢

**In love between the pure and the foul, there is but a kiss.**

戀愛に於て、淨きと淨からざるとの堺は、只一の接吻に在りと稱せらる。接吻すれば萬事休し、接吻すれば萬事始まる。接吻は戀愛の大轉機にして、間接に女性の運命の契機たり。二人の男女の最初の接吻に筆を起し、第二の接吻に筆を擱かんとす。まさに男女間の性愛の機微に筆を舞して、一個の戀愛爭鬪圖を描き來る。しかも前後二回の接吻共に誤れる接吻なりと云ふに至つては、作者の着想天馬を御して大空を馳けるが如し。

發行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社

幸田露伴著

# 賴朝・爲朝

定價貳圓
送料金二十錢

**最新刊**

露伴の人と文とは、渾然として大川の如く巨嶽の如く、時にまた細流の潺然たるが如く、幽谷の深邃なるが如し。而して古來英雄を描いては、恰も解剖臺上にメスを振ふ名醫の如く縱横無障、史實を扱ふては些の假託なく、揑造なく、嚴として秋霜の如し。試みに『戀の賴朝』を見よ。『鳥の爲朝』を見よ。大正の氣を吸ふて我人と相伍する市井人の如くではないか。露伴を措いて誰か斯くの如く操人形を飜弄する如く古英雄を語り得るか、敢て薦む。

幸田露伴著 **幽祕記**（四版）
定價貳圓五十錢 送料二十四錢

幸田露伴著 **蒲生卿・氏平正將門**（七版）
定價貳圓 送料廿二錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

正宗白鳥著

# 安土の春

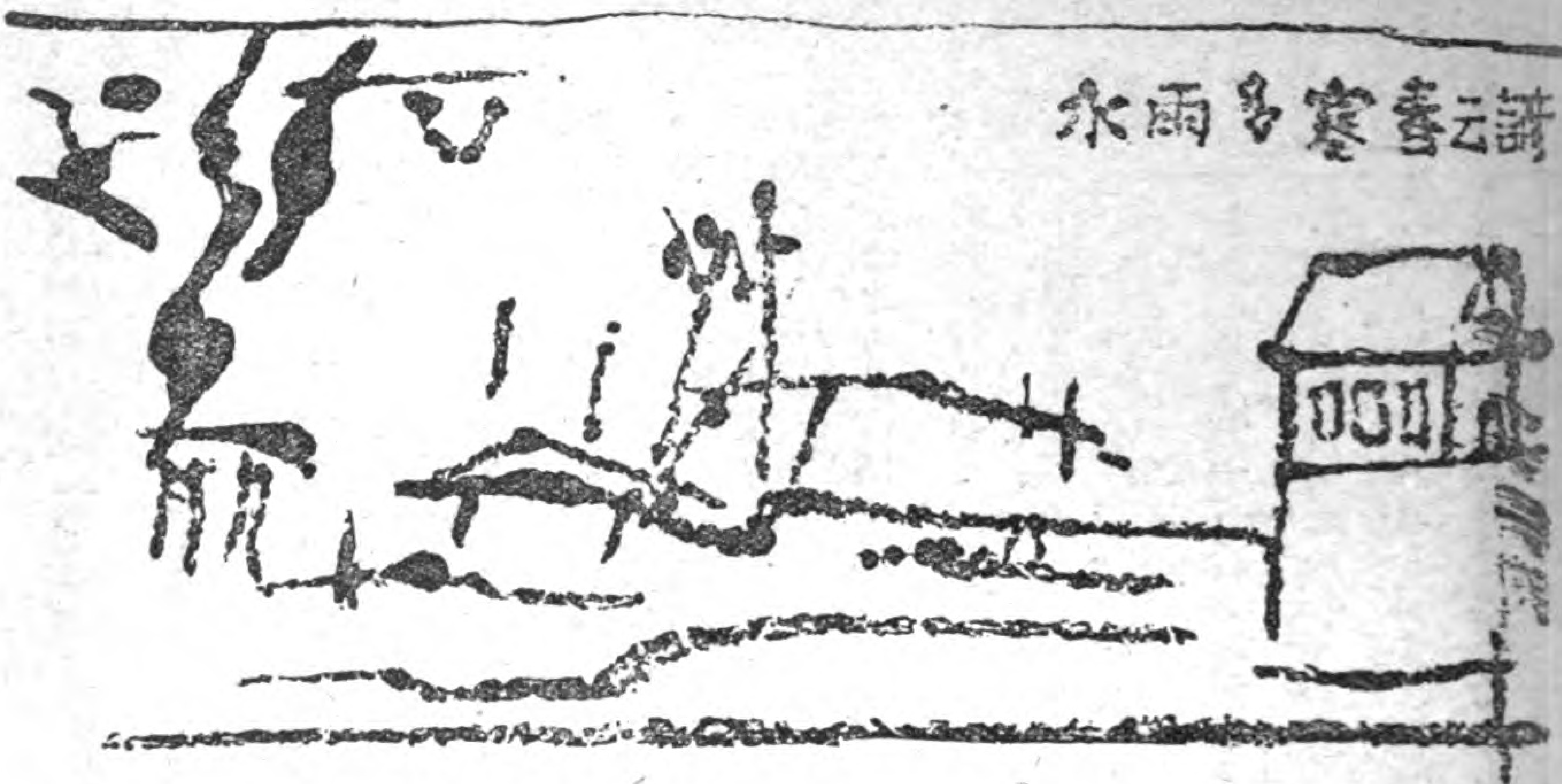
定價金壹圓參拾錢
送料金十八錢

## 最新刊

文壇の雄白鳥氏が刻心鏤骨の餘に成る近作戯曲五篇を聚めたもので、各篇それ〴〵文壇的に重きを爲すものである。心を潜めて讀むに從つて、自ら作者の人生觀に包攝され、沈痛なる人生の寂寞に、思はず歔欷を禁じ得ない。文藝を味讀して深く人生に沈潜せんとするもの丶見逃がすべからざる好著である。

（目次）安土の春。勝頼の最後。ある文學者の心。柿の木。老醜。（以上）

發行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社



# 歡迎されぬ男

正宗白鳥

人物

染井久三（三十歳前後）
伊東秀雄（三十餘歳）
大山明三（六十五六歳）
大山治助（明三の次男二十五六歳）
夏江（久三の妻二十六七歳）
くに子（秀雄の妻三十歳くらゐ）
おちか（二十四五歳）
その他數人

初夏の頃

（一）

本郷彌生町大山明三宅の應接室。以前醫師の家だつたので、患者の待合室であつた部屋が應接室になつてゐる。壁の上にテーブルが置かれて、椅子が二三脚。壁に添つて、青いクションのついた長いベンチが置かれてある。大地震のための破壞の跟がまだ殘つてゐる。

染井久三（三十歳前後、風采の揚らない貧弱な男で、質素な洋服を着てゐる）ベンチに横はつて新聞を讀んでゐたが、怠屈したらしく、欠伸をしながら起上つて、部屋の中をうろついてゐると、上手から、おちか（二十四五歳、大山の縁者だが、貧しいために、此家に寄寓して下女同樣に働いてゐる）が、風呂敷をもつて買物に行かうとして庭へ出て來る。

久三はおちかの顏を見ると、微笑して庭の方へ寄つて、

久三　何處へ行くの？

ちか　牛肉屋まで。

久三　もうそろ〳〵お午飯仕度か。僕も大分腹が減つたが、牛肉の御馳走になれるか知ら。

ちか　さあ、どうですかね（卒氣なく云つて行過ぎようとする）

久三　ちよつとお待ちよ（おちかを呼留めて）僕は聞きたいことがあるんだよ。

おちかゞ足を留めると、久三は端近く乘出して、相手をも側へ寄せて、

久三（あたりを憚るやうに）治助さんの話では病氣が大分進んでるさうだが、どうなつてゐるんだね。伯父さんは今度は

望みを嘱して、纏めようとしてゐるさうだが、どうなつてるのか知ら。治助さん自身はどんな考へでゐるのか知ら。

おちか（不愉快さうに）あなたはそれを聞いてどうなさるの？　どうだつていゝぢやありませんか。あなたには御自分の御用がいろ〳〵おあんなさるでせうのに。

久三　いくら僕が忙しくつても、人の結婚の噂を聞くぐらいの餘裕はあらあね。おちかさんがさうツケ〳〵邪慳な返事をするのは少し可笑しいね。……僕がこの頃一家團欒の茶の間へ入れて貰えないで、こんな殺風景な應接室でボンヤリ待たされてゐるのを、おちかさんだけは同情して呉れてもよささうなものだが。

おちか（少し機嫌を直して）でも、ここの家では、一家團欒の樂みなんか、影もありやしませんわ。それはあなたも御存じなんだけれど、この頃はことに乾燥無味なんです。"dry as dust" あるひは氷の如き生活……久三さんこそ、空借り生活をしてゐらつしやつても、一家團欒のお温かい家庭を樂んでらつしやる譯ぢやありませんか。

久三　お世辭にでもそんなことを聞かされるのははじめてだな。だけど、一家團欒でも、お温い家庭でも、金がなくちや駄目だね。僕の求めてゐる金錢は、極めて僅少なものなんだけれど。

おちか　今日も、そのお金のことでいらつしつたの？

久三「今日も」とはひどいね。僕はこの前來た時にも、金錢の無心なんか一言も云やあしなかつた。今日だつて。借金をしに來たのぢやない。僕の貧相な顏はいつも無心顏や乞食面に見えるのかな。

おちか　へえ。それは不思議ですわね。伯父さんも伯母さんも、久三が金を借りに來る〳〵とたび〳〵云つてらしつたから、わたしもそうとばかり思つてゐました。……それにあなたもお金の御用でもなければ、こんな家へいらつしや

る必要はないぢやありませんか。

久三　成ほどね。金でも借りるためでなければ、僕がこんな家へ何しに來るのかと、おちかさんが思ふのも無理はない（大に感じたらしく）僕は此處の伯父さんから金を借りようなんて、そんな不可能なことは思はなくなつてゐるつもりだが、腹の中で金が欲しい〳〵と思つてゐるから、その思ひが自から顏付や言葉の端々に現はれるのかも知れないね。

おちか　でも、あなたなんか男だから、いくらでもお金の取れる仕事が見つかるでせうのに。

久三　僕の家の奴がよくさう云ひますよ。男のくせにと云つて、我々男子をケナスのが女の常識なのかも知れないが、僕から云はせると、當節は女の方が金の蔓を摑まへることが手易いんぢやないだらうか。おちかさんほどの婦人がこんな家で牛肉買ひなんかに使はれてくすぶつた生活をしてゐるのを、僕は不思議に思つてるんだ。

おちか　でも、わたしたちに適當したいゝ仕事が何處にあるんでせう。あなたが御存じなら教へて下さいね。

久三　さうだなあ。戯談にも僕に職業の相談をして呉れる人は、あなたくらゐなものだ。……人間の職業はいくらでもありさうで、さて考へて見ると無いものだね。やつぱりこの家で辛抱してるのが一番いゝんだらうな。

おちか　……こんなお天氣のいゝ日曜に、お午餐のお惣菜の買出しに出掛けるなんか、こんな詰らないことつたらありやしない。

久三　ハヽヽヽ。治助さんの結婚話を聞かうと思つたのに、あなたが云はないものだから、所帶染みた詰らない話になつてしまつた。……まあ、早くお使に行つていらつしやい。僕に好意を持つてるおちかさんには、もつと面白い話を聞かせたいんだが、僕にはそんな面白い話の持合せは全くないんでね。

おちか　ほんとに愚圖々々しちやゐられない（ふと我れに返つたやうに云つて、久三の側を離れて）御ゆつくりしてい

らつしやいと云ひたいけれど、あなたは、此處の家では、歡迎せられないお客樣なんですからね。

久三　それはあなたに注意されるまでもないことだ。何處へ行つてもあまり歡迎される男子ぢやないことは、御當人が百も千も承知してゐるよ。兩親がかういふ風に僕を生みつけたのだから、今更ジタバタしたつて爲方がない譯さ。

おちか　あなたが其處にさうしていらつしやるのを見ると、病人がお醫者の家へ來て御診察の順番を待つてるやうに見えますよ（笑ひながら云つて行きかける）

久三　うまいいやがらせを云つたね（淋しく笑ふ）

おちか、下手へ入つて行く。久三、何か呟きながら、ベンチに腰を掛ける。と、そこへ明三（六十五六歳、體格は逞ましいが、リユーマチスを病んで弱つてゐる）が足を引摺るやうに歩いて、訪問者島田某（四十歳くらゐの立派な男）を見送つて出て來る。久三立上つて、二人に向つて一しよにお辭儀をする。

島田　オヽ、染井さんでしたか（立留つて挨拶して）この頃はどちらへお勤めになつていらつしやる？。

久三　お聞きに入れるほどのところぢや御座いません

明三（島田に向つて）染井は丸ノ內の信託會社に出てゐます。今度は落着いて勤まりさうです。

島田　それは結構です。……ちと、お遊びにいらつしやい。

島田、靴脫ぎへ下りる。明三は足のだるさを忍んで玄關先に立つて、客が靴の紐を結ぶのを待つてゐる。久三は椽の上に坐つて叮嚀に見送る。

島田が出て行くと、明三は、苦痛を感じてゐるやうな顏付をして、椅子に腰をおろす。久三、相手の樣子に氣をめながら、

久三　伯父さんはこの頃御氣分がよくないんですか。

明三　ウヽン。陽氣の加減で持病が出ていけない。去年まではこんなぢやなかつたのだが。

久三　陽氣の加減と云つても、この頃は晴天續きで溫かくて、一年中の一番いゝ時節ぢやありませんか。

明三　お前だちにはよくつても、おれの身體にはよくないよ。

久三　それは病氣をもつてる人には、いゝ時候といふものはないんでせう。金に不自由してゐる人間にもいゝ時候はないんでせうがね。

明三（相手の言葉には耳を留めず、外を見ながら、少しの間默つてゐたが）おれは今朝から二三人の來客に攻められて話疲れをしてるんだが、お前は何か急な用事でもあるのかい。

久三（少しドギマギして）いや、差當つて用事があつてお伺ひした譯ぢやありません。……東京では身內は伯父お宅だけだから、時々お伺ひしろと、故郷(くに)の母がいつも云つて來まして、時々は此方の御樣子を、手紙で知らならないと、叱られますので。

明三　それで、ちよい〳〵おれの家の樣子を覗きに來るのかい。何のことだ（不快な顏して）しかし、これかざ〳〵來て呉れるには及ばないよ。おれが死んだ時には、死亡通知を送らせるから、それでいいぢやないか。

久三　わたくしがお伺ひすることが、そんなに伯父さんのお氣に障るのなら、御遠慮してもよろしいんですが。

明三（少し言葉を軟げて）絕對に來ちやいけないとは云はないがね。……しかし、あゝいふ同棲者が出來た以上、れの家とは家風が合はないんだから、そのつもりでゐて呉れなきや困るよ。

久三　でも、故鄕(くに)の兩親の許可を得てるんですから、伯父さんも認めて下さらなければ……

明三　だから、おれはお前がどんなことをしようとも妨害はしなかつた。そのかはり、お前もおれの家へ害を加へないやうにして呉れなきやいけないね。

久三　害を加へる?。……へえゝ。わたくしは伯父さんの身内だつてことを、誰れにも云やしません。こんなヤクザな甥が東京で生きてゐることは、伯父さんの御名譽にもならないでせうが、別段不名譽にもならないだらうと思はれます。治助さんの緣談だつて、身内にわたくしのやうな奴がゐちや困ると、先方で肱鐵砲を喰はしたりなんかしないでせう。

明三　治助の緣談のことを、お前は誰れから聞いた?

久三　さういふ話は、誰れの口から出たともなく、直ぐに知れるものですね。（ふと氣がついたやうに）さう云へば、今歸つて行つた島田さんは、緣談のことでやつて來たんですね。あの人は仲人稼業をよくやつてゐるやうだ。……伯父さん。わたくしの身についてもたまには考へて見て下さい。わたくしには島田さんのやうに緣談の世話［illegible］れる者があるぢやなし、この年齡になつて獨身ではゐられないし、あなた方のお氣に入らないやうな同棲者でも［illegible］なければ爲方がないぢやありませんか。

明三　身勝手なことを云つてる。お前はあの事でまだおれを恨んでゐるのか。（不意に神經を尖らせる）

久三　あのこと?（考へて、ふと氣づいたが、詰らなさゝうに）ハヽア。あのことゝ云つてくに子さんのことですか。隨分以前のことですね。今やうやく思出したくらいで、平生わたくしの頭からは消えてしまつてゐたんですよ。あんなことは根に持つても棄に持つてもゐませんよ。伯父さんはお年寄りのくせによく覺えていらつしやる。

明三　おれがあの事と云つたのは、くに子のことぢやないよ。

久三　ハテナ。……しかし、何事についても、伯父さんを恨んでなんかゐませんから、安心していらつしやい。身内の者に恨まれてゐると思つたら、御病氣にも障るでせうから。

明三　おれは椅子に腰を掛けてると、足がだるくてたまらない。これで御免を蒙らう（椅子を離れて）お前も用事がないのなら歸つたらよからう。

久三（咄嗟に言葉に力を入れて）伯父さんにお願ひしたいことがあります。

明三（驚いた顔して振返つて）何だ？。

久三　金を貸して下さいとは申しません。さう思つて心配していらつしやるかも知れないけれど。

明三　おれの家に有り餘る金がある譯ぢやなし、たとへ、貸して呉れと云つたつて貸せるものか。

久三　わたくしは、伯父さんのお心はよく存じてゐますから、今日の米櫃が空になつてゐても、決して御無心は申しませんが、今お願ひしたいことは、全く別なことなんです。（首垂れて思詰めてゐるやうに）わたくしはこの應接室を拜借したいんです。

明三　この部屋を貸して呉れつて？。妙な無心だね。それでどうしやうと云ふんだ？。誰かに此處で會はうと思つてゐるのか。

久三　……誰れに會ふ必要があるものですか。わたくしは、この應接室の、あのクションの上に横になつて、永久に眠つてしまいたいんです。この世にお暇を告げたいんです。

明三（嘘とも思へないやうな相手の顔付を見入つて）戯談もいい加減にしろ。おれを揶揄ふつもりか、脅かすつもりか。

久三　どちらでもありません。今から何分間かの間、あのベンチを貸して頂ければよろしいんです。今度わたくしが伯父さんから求るところは、たつたそれだけなんです。

明三　馬鹿を云へ。自殺でもする奴が、豫め人に斷るつてことがあるものか。それに、死ぬと極まつたら、適當な死に場所はどこにでもあるぢやないか。

久三　いえ、わたくしにはあのベンチの上が何處よりもいゝ死に場所なんです（と云つて、ベンチの方へ近寄つて）このベンチには、以前いろ〱な患者が腰を掛けてゐたんですね。この家の前の持主だつた醫者は山師で、いゝ加減な注射治療を賣物にして、一本の注射で二三十圓づゝも儲けたと云ふことですが、役に立たない治療を受けて、金ばかり取られて死んだ人間が隨分あるんでせう。……さういふ不幸なる患者の思ひの殘つてゐる椅子だ（と、意味ありげな目をベンチに向けて腰をおろす。）

明三　この家にケチをつけるものぢやないよ。以前はどうだらうと、買取つた今は、ベンチ一つでも椅子一つでも、おれの所有なんだから。……お前はさういふいやがらせを云つて、おれを脅かして、いくらかの金をまた持つて行かうと云ふんだね。……オイ。そこへ腰を掛けちやいけないよ。早く歸んなさい。

彼れは久三の腕を捉へて立たせようとする。しかし、久三は動かない。

久三　「また」と仰有つても、わたくしは、伯父さんから何も頂いた覺えはありませんよ。誰れにでも物をやることのお嫌ひな伯父さんも、眠つてる間には、わたくしなんかに金を下さる夢を御覽になることもあるんですね。さつき申上げた通り、わたくしは、今日お金を惠んで貰はふなんて、毛頭そんな考へをもつて參つたのぢやありません。

明三　ぢや、はじめからおれの家で自殺しようと企んで來たとでも云ふのか。馬鹿な奴だ。

久三　いえ、必しもさうぢやありません（まだ彼れの腕を捉へてゐる伯父の顏をじつと見上げて）伯父さんがわたくしの申上げることを聞きたいと思つていらつしやるんならお話しゝますが、……

明三　事によつたら、話を聞くだけは聞いてやつてもいゝがおれの病氣に障るやうな話なら御免蒙るよ。

久三（相手にかまはない獨言のやうに）昨夕から今朝まで、たまらない不愉快なことがあつて、わたくしは朝餐も喰はないで家を飛出したのです。天氣がいゝので、いくらか氣が紛れましたが、誰れかの所へ行つて、親身な話でも聞きたくつてたまらなくなつて、うか〳〵と此方へまゐりました。伯父か伯母さんか、春雄さんか、治助さんか、此方のどなたかに會つたら、元氣がつくだらうと、當てにもならないことを考へてやつて來たんですが、その結果はアベコベだつたんです。

明三（そんな話には興味を感じないらしく）生きてる人間に愉快なことばかりあるものか。たまには不愉快なことのあるのは當り前だ。

久三（目を空間へ注ぎながら、なほ獨言のやうな言葉を續ける）頑丈だつた伯父さんが病み疲れて、この前お目に掛つた時に比べてさへ見違へるやうになつていらつしやるのを見て、わたくしは、スツカリ無常を感じました。金があつても、子供が十人並みに育つて嫁入り嫁取りをするやうになつても、かうなつちや、何の生きてる樂みがあるものか。……

明三、相手の話に心を惹かれた態度をする。

久三　年齢と病氣の重荷に壓されて、ウン〳〵呻きながら、辛うじて生きてゐるといふだけで、何の樂みがあるものか。わたくしなぞは、親の遺産が手に入る望みがあるぢやなし、自分で出世もしさうでないのに、伯父さん見たいに

なつちやたまらない。と、さう思ふと、昨夕からの不愉快なことが胸一杯になつて、此處らで浮世におさらばをした方が結局自分に取つて得策ぢやないかと思はれるんです。

彼れはさう云つて、今まで外へ向けてゐた目を明三の方へ落すと、明三は彼れの側を離れて、疊の上にへたばる。

明三　そんな氣味の悪い目で、おれの顔を見て呉れるな。

久三　伯父さんの顔こそ、死相を帶びてるぢやありませんか。わたくしの顔なんか平凡ですよ。みんなに馬鹿にされて來た顔だ。

明三　餘計なことを云はないで早く歸れ。……今日は島田がおれの家の爲めになる話を聞かせて呉れたと喜んでる矢先きへ、お前のやうな奴がやつて來て、おれの頭を臺なしにしやがる。……早く歸んなさい。……たつて死にたいのなら、上野の森で首をくゝるか、不忍池へ身を投げるかするがいゝ。おれの家に迷惑を掛けるな。……お前はおれを脅かさうと思つてそんなことを云ふが、自殺の用意に刃物でもピストルでも持つて來てるのか。

久三　此處にこんなものを持つてゐます（ポケットから布片に包んだ小さな藥瓶を取出して見せる）

明三（その藥瓶を見上げて）それを毒藥だと云ふのか。變な色はしてゐないぢやないか。消化藥か何かだらう。

久三　ぢや、さう思つていらつしやればいゝ。わたくしは、この消化藥を飲んで、このベンチを拜借して、一眠入りさせて貰ひますから、伯父さんは奧へいらつしやつてお休みなすつて下さい。わたくしは誰れにも遺言することはないんです……（と云つて、自分の心に向つて云ふやうに）遺言？。そんなものを殘す必要があるものか。

そして、彼れは、もはや明三には關はないやうな態度で、何事かを思詰めながら、部屋を歩廻つたあと、咽喉に藥

瓶の藥を飲んで、ベンチに横たはる。

明三は不安らしく、側へ寄つて久三の寢顔を見詰める。そこへ、次男の治助（二十五、六歳の、可成り立派な容姿をした男）が歸つて來る。

明三　オヽ、いゝ所へ歸つて來た。今、久三が自殺をすると云つて、變な藥を飲んで此處に寢てるのだ。何か目算（もくろみ）があつて狂言を打つたのかも知れないよ。此處へ來て樣子を見て呉れ。

治助　呆れたものだ。久三さんが狂言自殺をやるなんて。人間て分らないものだな。（驚いた風もなく、好奇心をもつてベンチに近づく）

明三　まさか、本當に毒を飲んだのぢやあるまい。

治助　さあ、どうですかね（久三の顔をソツと見下して）オイ、君（と、久三を搖動かす）

久三、薄目を開ける。

治助　戲談ぢやないよ、君。

久三　治助さんか。僕の心を亂さないやうにして呉れたまへ。

明三　爲樣のない奴だ（稍々安心したが、急に足腰の苦痛を覺えたらしく）おれは腰つ骨が拔けさうに痛みだした。あちらへ行つて休んでるから、お前が久三によく譯を訊いて、早く家へ歸へすやうにして呉れ。……こいつ　一文にもならないのに、おれの胸にこたへるやうな不吉なことを云やあがつて（獨言のやうに云ふ）

そして、彼れは、足を引摺つて入つて行く。久三は目を閉ぢ兩手を胸の上で組合せて、じつとしてゐる。

治助　君も滑稽な眞似をしたものだね。身體は何ともないんだらう。サア、起きたまへ。僕の部屋へ行つてユツクリ話

をしやうぢやないか。

久三　僕の心を亂さないやうにして與れたまへ。僕の利口が出かゝつて、僕は今死と闘つてゐるんだから。

治助　君のその變挺な目付や口付が、死と闘つてる證據なのか。そんな風ぢや　生と死の爭も、悲劇でも凄慘でもないね。道化た眞似はいゝ加減で止したらどうだ。……全體君の狂言自殺の原因はどんなことなんだい。僕の叔爺に要求したことが入れられなかつたゝめなのか。……僕が紅茶でも入れるから　起きて話したまへ……サア、僕が今生に加勢して、死を追拂つてやるぞ。

治助が元氣よくさう云つて、久三の手を捉へて、勢ひ強く引起すと、久三は、それと爭つたはずみにベンチから轉げ落ちたが、立上つて、憤怒を顏に現はす。

久三　君は殘酷な人だ。僕に無用な口を利かせようとするんだね。……僕は伯父さんなんかに何も要求すりやしないよ。親類のよしみで、君の家で、僕の死骸の跡片付をして與れゝばいゝと思つてゐるだけなんだ。僕の死生の問題に立入つて貰はなくてもいゝよ。

治助　君は氣が狂つてゐるやうにも見えないが、妙だね。まあ椅子にでも腰を掛けて、落着いて、見たまへ。君がそんなに怒つた顏したのを見るのは、今がはじめてだが、不思議なものだ。

そこへ、おちかが、久三の內緣の妻夏江（二十六七歲、世馴れのしたらしい卑しい女）と、一しよに入つて來る

おちか　アゝよかつた。久三さんはまだいらしつた（と、夏江に向つて云ふ）

久三は夏江を見て驚く。

おちか（久三に向つて）今そこであなたの奧さんにお目に掛りましたの。此方の家をお搜しになつてゐて、偶然わたし

にお訊ねになつたのです。(夏江に向つて)さあ、お上んなさいましな。

おちかは、買物の風呂敷を持つたまゝ上り口に腰を掛ける。

夏江は應接室へ上つて、恭しく治助に挨拶する。治助は訝しげな顔して會釋する。今まで憤つてゐた久三は俄かに打萎れてマゴ〳〵する。

久三　お前はこんなところへ何しに來たのだ?(力なく云ふ)

夏江　あなたこそ何しに此方へいらつしやつたの?。あたし、どんなに心配して方々を搜したか知りやしない。(ふと、ベンチの側に置かれた藥瓶に目をつけて訝しげに)あなた、そのお藥を召上つたの?。

久三　今日になつて飲む時が來たのだ(感慨を籠めたやうに云つて、よろけるやうにベンチに腰をおろす)

夏江　なぜ、そんなお藥を飲む時が來たんです?。……今朝あなたが出ていらしつてから、ふつと氣がつくと、その藥瓶がいつも置いてあつたところに見つからないんでせう。ぢや、あなたが持つて行つたに違ひないと思ふと、こりや、打やつて置けないと、あたし慌てだしたんですよ。(袂の中から、同じ形をした小さな藥瓶を出して)でも、よかつた。かういふことがあらうと思つて、中味をすり變へて置いて。……あなたがお飲みになつたのは、あたしが松下先生から頂いた持藥なんですよ。……あなたは、また何だつて。此方のお家でそんなものを召上つたんです?。

久三　ぢや、さつき僕が飲んだのは、婦人病の藥だつたのか(苦笑を洩らして唾を吐出す)

治助、聲を立てて笑ふ。夏江は侮蔑した笑ひを洩らす。おちかも何となしに笑ふ。

久三　僕にあんな藥を飲まして、僕を笑ひ物にしようとしたのか。

夏江　でも、あたしがお藥をすり變へたお蔭で、あなたの生命は助かつたんぢやありませんか。此方のお宅にも御迷惑

が掛らなくて濟んだのぢやありませんか。

治助　それはさうです。此處で本氣で自殺なんかされて溜つたものぢやない。……しかし、この家は元藪醫者の家だつたのだから、藥の間違ひぐらゐは有りさうのことなんですよ。

夏江（馴々しい態度をして）あたし、このお宅へ今日お伺ひしたのをいゝ機會に、あたしだちの內輪の事を、此方のお家の方に聞いて頂きますわ（治助に向つて）失禮ですが、あなた樣はどなたでいらつしやいますか。

治助（相手を見下した態度で）僕は此處の家族の一人です。

夏江　ぢや、あなたに聞いて頂いてもよろしいんです。お身內の方に立合つて頂いて、わたくしだちの間の最後の解決をつけたいんで御座いますから。

治助　さういふ面倒な話には、僕なんかゞ關係しちやいけないでせう。

夏江　たゞお身內の方に聞いて頂きさへすれば、あたし、氣がすみますのよ。

久三　お前が持つて廻つた口を利くにや及ばない。僕が簡單に云つちまはふ。簡單なことなんだから

夏江（慌てゝ遮つて）いゝえ、あなたはどうかすると根も葉もないことを仰有るからいけないわ。あたしに云はせて下さい。（口調に重味をつけて）あたしは自分の身體を引當てに、五百圓の借金をしてゐるんです。久三さんが保證に立つてゐて、そのお金は二人の生活に費つたのですから、期限までにどうにか極りをつけて貰はなきや困るんで御座いますの。

久三　それで、その借金を拂つちまふまで、僕に魔藥を飮ませないやうに警戒してるんだね。御親切さまだ。

夏江（悠然として）あなたは死にさへすりや責任がのがれられるやうに思つていらつしやるんでせうけれど、若しもあ

なたが、今自棄な死に方をなすつたら、お國の御兩親をはじめ、譯を知らない方は、みんなあたしの所爲になさるに極つてるぢやありませんか。あなたが御自分でどうしても死にたいのなら、それは御勝手なんだけれど、あとの事はちやんとして置いて下さらなきやいけませんよ。

久三　それで、僕を掴まへにこんな所までやつて來ためか。……お前の借金拂ひが出來るくらいに、金の工面がついたなら、僕だつて死ぬ氣にならなかつたかも知れないよ（おちかに向つて）おちかさん、お茶を一杯汲んで下さい。次でもよろしい。あんな藥を飮んだので、胸の中がむか〳〵して來ていけない。

おちか入つて行く。

治助　兎に角、君は物騷な男だね。出鱈目に自殺なんか企てるやうなヒステリツクな男には、婦人病の藥が利目がるかも知れないね。細君と二人でその藥を持藥にしたらいゝかも知れない。

久三　（前と違つて元氣づいて）僕はさつき伯父さんの顏を見てゐるうちに、ふつと死にたくなつたんだが、自分でも變だな。……しかし、もう大丈夫、もう決して死なゝい。人が僕を殺さうとしたつて殺さりやしない（自分に力をつけるやうに云つて）治助さん。僕はね……昨夕いく度、これを（夏江を指差して）殺さうとしたか知れないんだよ。いや、殺うとしたのぢやない、殺した方がいゝと昨夕いく度思つたか知れないんだよ。……ところが、敵をでも、惡人をでも一思ひに叩殺せるやうな昂奮狀態か、僕の心にはどうしても起つて來ないんでね。

治助、久三の言語と態度とを研究的に見聞してゐる。夏江は、何を云つてゐるのだと思つてゐるやうな冷笑を洩す。

久三　僕が柄にない過激なことを云つたのを變に思つてゐるんだらう（誰れに云ふともなく云つて）こいつが犯人とはおに

拵えてゐるとか、僕を欺いて僕を踏付けるやうなことを企んでゐるかしてゐるのたら、僕だつてムカ〳〵として相當なことが出來るんだが、さうぢやないんだからね。

夏江　何を詰らないことを仰有るの？

久三　そりや詰らないことさ。………だけど、昨夕から今朝へかけて、二人であんないやらしい喧嘩をしつゞけたことを考へて見るがいゝ。色男でも出來かゝつてゐるやうなことを云つて、僕の氣をひいて見たり、僕の側を離れたら、世間がちやんとお膳立てをして、お前を待つてゐるやうな蟲のいいことゝを云つたりしてゐたのを、お前は淺間しく思はなかつたのか。僕がお前の借金を奇麗に拂つてやつたにしたところが、拂はないで死んだにしたところが、お前の落行くさきは大抵は分つてらあね。

夏江　（腹立たしげに）それは大きなお世話よ。そんなことを他人の前で云つて、事情を知らない人は、あたしといふ女をどんなに誤解するか知れないぢやありませんか。

久三　だつて、お前の方から望んで云ひだしたことぢやないか。……お前は僕を離れさへすりやどうかなると、さきを樂みにしてるか知れないが、僕は……。

夏江　（相手の言葉を慌たゞしく遮つて）何をくど〳〵と寢言見たいなことを云ふんです？。あなたの身内の家に來たからつて、急にえらさうな口を利いて。……あたしは當然取るべきお金は取らなきやなりませんよ。えらさうな口を利いて、人前であたしに恥を搔せたきや、出すべきお金を出したあとでなさい。

夏江は久三を小突きまはす。久三はそれに抵抗して相手を突飛ばす。

久三　昨夕のやうにお前に負けてばかりゐないぞ。おれが能無しで小汚い男なら、お前だつて薄つ汚い女だ。

夏江、昂奮して、身を起して、無我夢中になつて武者ぶりつく。

おちかは奥からお茶を運んで來て、さつきから二人の様子を、呆氣に取られて見てゐる。

治助は、おちかを見て、ニヤ〳〵笑つて、久三夫婦の醜態を見ろと目顔で知らせる。そして、打遣つても置けないので、二人を引分けて、

治助　僕の家へ來て夫婦喧嘩のおさらへなんかされちや迷惑だよ。

久三　いや、どうも濟まなかつた(頭を下げて面目ないと云つた表情をする)

夏江はテーブルに寄りすがつて泣く。

明三、足を引摺りながら、奥から出て來る。

明三(威嚴を見せて、お前だちは直ぐに歸つて奥れ。……人の家へ來て自殺の眞似をしたり、夫婦喧嘩の眞似をしたり。恥知らずにも程があると云ふものだ。おれから金を引出すための狂言だらう。馬鹿め。これがおれに分らないと思つてゐるのか。……さあ、早く歸つて奥れ(久三の背を突く)

久三　これは驚いた。……わたくしは芝居氣なんかちつとも持つてゐない人間だから、そんなこと夢にも思ひつかなかつたのですが、伯父さんさう云はれて見ると、成程狂言のやうでした。わたくしも生れてはじめて、人の前で芝居をしたのですね。

明三　それに氣がついたのなら、今日は大人しく歸つて奥れ。

久三　歸りますとも(キッパリ云つて)大變御迷惑を掛けて申譯ありません。……しかし、伯父さん。わたくしは今日此方へお伺ひした時とはまるで違つた人間になつてお見せすることお約束できますよ。だから、[illegible]

に取つちや無駄でなかつた譯です。……(夏江の肩を叩いて)オイ、禮に伺はう。伯父さんがあゝ仰有るんだ。

夏江は、さつきから、自分の顔を明三に見られまいとしてゐる。明三は夏江の顔を見ぬ振りをしながら、コッソリ見ようとしてゐる。

久三　小さくなつてゐるなんて、不斷のお前にも似合はないな。顔を上げて伯父さんに御挨拶して行け。一生にまたと伯父さんにお目に掛ることはないだらうから(夏江を引抱へて、明三の方へ無理に顔を向けさせて)これが不斷お噂をしゐた伯父さんだ。(明三に向つて)これが、かねてあなたの擯斥してゐらつしやつた女です。

夏江は萎れた顔して挨拶する。明三は苦い顔して會釋をする。

その時をいゝ機會として、おちかは、夏江と久三とにお茶を出す。

久三(茶を飲んで)おちかさん、面白かつたでせう。あなたは結婚してもこんな馬鹿な眞似はしないやうに、今から氣をつけていらつしやい。(明三などに向つて)御迷惑を掛けて濟みませんでしたね。……我々二人のほんとうの芝居はこちらの門を出てからなんですよ。……左樣なら。

久三は附け元氣でさう云つて出て行く。夏江は、藥瓶をベンチの隅に置いたまゝ、それに氣づかないで、コソ〳〵と出て行く。

明三　二人ともあつかましい奴だ。これからあんな奴は寄せつけちやいけない(我れともなくベンチに腰をおろして、治助を見て、稍々機嫌を直して)さう云へば、さつき島田が來ていろ〳〵と話をして行つたよ。

治助(冷淡に)さうですか。

明三　先方では非常に氣乘りがして、一日も早く話を極めたいと云つてるさうだよ。此方でもあんまり迷はないで、早

く極りをつけた方がいゝだらうね。

治助　さうです(冷淡に云つて)お母さんは何處かへ出掛けたんですか(おちかの方を見て)兄さんの家へ行つたのかい。

おちか　えゝ。何だか急に思立つてお出でになりました。

彼女はさつきから、奥へ行かうとしながら、父子の話に心殘りがしてゐるらしく躊躇してゐる。

明三　お母さんがゐなくつてよかつたのだ。あれがゐたら、久三やあの女の不ふしだらな様を見てどんなにいやな思ひをしたことか。目をまはしたかも知れないよ。(おちかの方を見て)お前は早く午餐の支度をしなきやいけないよ。おれも腹がへつた。

おちか、不承々々に奥へ入る。

治助　お父さんもお疲れになつてるやうだから、あちらでお休みになつちやどうです。

明三　ウン。……おれも今日はひどく疲れたよ。心の疲れが顔にまで現はれてゐるのだらうな。久三がおれの顔を見ていやなことを云つた。おれの顔に死人の相でも現はれてゐるやうなことを云つた。それに、あいつ、おれの胸にギツクリ應へるやうな氣持の惡いことを云つた。

治助　どんなことを云ひました？

明三　どんなことつて、別段珍らしいことぢやないんだが。……珍らしくないことでも、時と場合でひどく胸に響くこともあるものだ。

治助　あの人は無能で金もないんだから、内叟な口を利くやうになつたんでせう。信託會社の方も破壊になつたらしいですね。

明三　さうだらうとおれも思つてゐたよ。身内にあんな男がゐると、おれたちの仲間にはいつて困るんだが……

治助　さうですね（冷淡に云つて、ふと調子を變へて）わたしに今朝、木村さんの家へ寄つて頼まれたんですが、あしこでは、この頃手不足で困つてるから、少しの間、おちかさんを貸して呉れないかと云つてゐました。貸して上げる譯に行きませんか。

明三　いや、それは困るよ。家では一日でもおちかに出て行かれちや困るよ。あれがゐなくなつちや、おれは飯も食へなくなるじやないか。

治助　他所から手賴つて來てるおちかさんがゐなくなつてさへ、お父さんの日常生活に差支えがあるのなら、兄さん夫婦を外へ出して置くんです？。この家に住まはせて家の用事をさせたらいゝぢやありませんか（責めるやうに云ふ）

明三　理窟はさうだが、春雄はこの家にゐたくないのだから、どうも爲方がないよ。

治助　ゐたくないのは、兄さんばかりぢやないでせうね。

明三　お前も結婚したら、直ぐに別居するつもりなんだらう。それはおれも覺悟をしてゐるんだよ。

治助　結婚の話はまあ待つて下さい。……それよりも、たび／＼わたしが云ふやうに、この家は人に賣るか貸すかして、郊外にでも住みいい家を新築したらいいぢやありませんか。……この家がいけないんですよ。お父さんの身體の加減の悪くなつたのも、一つはこの家の所爲なんですよ。舊弊な言草だが、この家が祟るのかも知れませんね。……山師の藥德醫者のために治療法をあやまつて死んだ者の怨みが、この家に殘つてるのかも知れませんよ。我々がこの家に移つてから、碌なことはないんだから。……今日だつて、久三さんを嗤ひ物にしてすんだやうなもの丶、危いところだつた。この後またどんな不吉なことがないとも限りませんよ。

明三　久三もお前の云ふやうなことを云つてゐたつけ。……お前だち若い者が
の年齢で新奇に家を建てたりなんか、そんな面倒くさいことが出來るものか。此處は廉い價で買
も燒けなかつたやうな運のいゝ家ぢやないか。お前だちがどこへ行かうとも、おれはこの家の空氣を吸つて、生きて
ゐられるだけ生きてゐるつもりだ。新奇な家を建てたつて珍らしいのは當座ばかりだよ。……いや、かう身體が悪く
なつちや、家の新しいか古いかよりも柔しい人間の手が欲しいよ。だから、おちかのやうな柔しい氣の利いた女に、
出て行かれりやしないかと、おれは氣遣つてゐるのだ。お前だちもあの女に邪慳なことはしないやうにして呉れ。一
日でも長くゐて貰はにや、第一おれが不自由な思ひをするんだから。

治助　お父さんは、そんなにおちかさんがお好きなんですか。

明三　あれが明日にも出て行きやしないかと、氣遣はれるのだが、お前はどう思ふ。

治助　（面羞げに）何をです？

明三　（あたりを憚るやうに）おちかにもこの頃は、心に思つてる男があるのぢやなからうか。急におめかしに身を入れだしたりして。樣子がどうも變だ。……年齢が年齢だから無理もないが。

そこへ、坂本某（二十代の男）が訪ねて來る。

坂本　伊東さんの奥樣は、お宅へいらつしやらなかつたでせうか。

明三　いゝえ、來てゐません。くに子はこちらへ來ると云つたのですか（足を引摺つて訪問者の方へ寄つて行く）

坂本　奥樣は今朝からお家にいらつしやらないので、何處へお出ましになつたのかと、旦那樣がさつきから心配していらつしやいます。

明三　どうしたんでせう。何か事があつたのですか。
坂本　わたくしはよく存じませんが。
治助　(ふと、奥の方を見て微笑を洩して)姉さんが此方へ來たら直ぐお知らせしますから、あなたは外の心當りを捜して下さい。
坂本　ぢや、さういたしませう。
治助　抛つといても心配なことはありませんよ。迷い兒にはなりやしないでせう。
坂本は、心配してゐる明三の顏を見上げて、挨拶して出て行く。
くに子(伊東秀雄の妻、三十くらゐ。神經性の女)奥から出て來る。
明三　(安心して)くには其處にゐたのか、いつの間に來てゐたのだ?
くに子　あたしさつきから、あしこに立つてゐて、立聞をしてゐました。こちらにはお客樣がいらつしやるやうだつたから、裏からソツと家の中へ入つたんです。久三さんが女の人と一しよに歸つて行くのを、氣の毒な思ひして見てゐましたのよ。(と云つたあとで、直ぐに侮蔑したやうに)あんな人なんですかね、久三さんが同棲してるといふ人は。
明三　人の事よりも、お前はどうして無斷で家を飛出して來たのだ?
くに子　それがお父さんにはお分りにならないの。……治助はよく察して呉れてるわね。
治助　僕にも分りやしないさ。
くに子　さう?あたしには……あたしだけには、治助が島田さんの持つて來た緣談に不同意なとはよく分つてゐるのに。

くに子は不平らしくさう云つて、ベンチに腰をおろして、夏江の置いて行つた藥瓶を何氣なく手に取つて、指の先でいじくりながら、

くに子　あたし、此處へ來たら慰めて貰へるだらう思つて、家を飛出して來たのだけれど、お父さんの顏を見たら、とても望みの叶ふ見込みのないことがよく分つたの、治助が云つた通り、この家がいけないんですよ。改築するか、移轉するかしたらいゝでせうのに。

明三　どいつも勝手なことを云つてる……。それよりもお前が此處に來てゐるとを、早く伊東へ知らせなきやなるまいな。

くに子　打つちやつといていゝのよ。

おちか、奥から顏を出して、

おちか　お膳立てが出來ました。くに子さんも召上るんでせう。

くに子　あたしはよろしいのよ。……おちかさんは相變らず一人で台所仕事をして、お忙しいでせうね。お母さんは今日の日曜にもまた兄さんのお家へ行つてるらしいのね。煩がられに行かなくつてもいゝでせうにね。

治助　やうやく飯が食へるんだな。

明三　くにも一つしよに來い。食べながら話をしよう。

くに子　ほんとうにあたしは何も食べたくありませんの。……皆さんの御飯のすむまで、あたしはここで玄關番をしてゐますわ。

明三と治助とが奥へ入る。今まで快活な口を利いてゐたくに子も、俄かに萎れた樣子をして、ベンチから立上つて椅子に腰をおろし、物を思つてゐるやうに空間を見詰める。

そこへ　伊東秀雄（三十餘歳、不斷着で着こなしが亂れてゐる）下手からアタフタと出て來る。くに子を見つけると、悦しさが胸から込上る樣にして上へあがる。

秀雄　やはり此方へ來てゐたのか。……坂本はお前を搜しに來なかつたか（くに子の側に腰を掛ける）

くに子（顏を上げて）どうですか。……それよりもあなたは何しにいらつしやつたの？。あたしに何か御用がおありなさるの？。

秀雄　寢呆けてゐるね。……昨夕お前がヒステリーを起して、絶望的なことを云つてはゐたが、まさか世間の物笑ひになるやうなことはしないだらうと思つてゐた。

くに子　あたしはいくらあなたに侮辱されても、どうもしないで、泣寢入りに寢てしまふ女だと思つていらつしやるの？。

秀雄　まだそんなことを云つてるのか。おれはお前を侮辱した覺えはないよ。……此處のお父さんやお母さんに訊いて頂からうか。おれは、たゞつゆ子といふ不仕合せな女を庇つてやつたゞけなんだ。それでもお前の氣に障るのなら、今後絶對にあの女を家へ入れないやうにしてもいゝのだ。つゆ子はおれが世話をしてやらうとやるまいと、どつち道不幸に落ちる女なんだから、此方で世話をするのも無駄骨折見たいなものなんだよ。これから知らん顏してゐてもいゝんだね。

くに子　此處へ來てまで、そんな言譯なんぞ、聞かして貰はなくつてもいゝのよ。……今にお父さんが出て來て、あなたと一しよになつて、黴臭いお説法を聞かせるのだと思ふと、あたしたまらないんです（相手を脅かすやうな口調で、言葉に力を籠めて）あたしは、親兄弟に愚痴をこぼしたくつて、今日此處へ來たんぢやありません。あなたが、勝手でさう極めないやうにして下さい。……あたしの死骸は、伊東家の世話にならないで、兩親の手で跡片付をして

貰ひたいと思つて、今日此處へ來たんです。……あなたはそつちへ行つていらつしやい。

彼女はヒステリックにさう云つて、秀雄を押退けるやうな手付をして、椅子を離れてベンチに横たはつて、かの藥瓶を取上げて飲む。

くに子　これは、この家の前の持主だつたお醫者から、兄さんが買つたモルヒネなんです。眠りながらい丶氣持で死ねるやうに調合してあるんですわ。あたし、兄さんの机の引出しから盜んで、死にたくなつた時にい丶氣持で死ねるやうに、しよつちゆう自分の身につけてゐました。今丁度このお藥を役に立てる時が來たんです（感傷的な口調で）あたし、こんな冷酷な人生に生きてゐるよりは、早く夢の世界へ行つた方が幸福なんです。……あたし、今い丶夢を見かけてるんだから、誰れもあたしの側へ來て、あたしの夢を攪亂さないやうにして下さい。

秀雄　戲談もい丶加減にしろよ（氣遣はしげに傍へ寄つて）まさかモルヒネぢやあるまいな。芝居の眞似をして脅かすなよ（くに子の身體に手を觸れる）

くに子　芝居なら、さう思つて棧敷に坐つて觀ていらつしやるとい丶。……それはい丶夢をあたし見かけてゐるの。

彼女は目をつぶつてさう云つてゐるうちに、ふと苦痛を感じたらしく、

くに子　あたし變だわ。どうしたのだらう。オ、苦しい。

胸を押へて藻掻きながら、ベンチからすべり落ちる。

秀雄　馬鹿な眞似をするからだ（と、小言を云つてから、奥の方を顧みて、大聲で慌たゞしく）誰れか來て下さい。早く（と叫んで、くに子を抱上げる）

くに子、秀雄にしがみついて苦悶する。活助をたきん、岡三とふぢかゞ奥から出て來る

秀雄　くにが今變な藥を飲んだのです。早くお醫者を呼んで來て下さい。

治助（藥瓶に目をつけて）それは、久三さんの妻君が忘れて行つた毒藥ぢやないか。どうして、そんな者を飲んだのだい。……おちかさん、大急ぎで醫者を呼んでお出で……どうしてそんなものを。……今日はどうも變な日だ。

明三　早く醫者を。早く。

明三、痛む足を引摺りながらウロ〱する。おちか奥へ入る。

くに子（ます〱苦みながら）あたし、お父さんの不斷の持藥かと思つて、戯談に飲んだのです。……あたし、死ぬ氣ぢやないんです。……ア、苦しい。……早くお醫者を呼んで來て下さい。あたし、今死ぬるのはいや。……助けて下さい。

治助　指を喉へ突込んで、腹のものを吐出したらいゝでせう。

治助は秀雄と力を合せて、くに子を部屋の端へ抱へて行つて、飲んだものを吐かせようとする。

明三　何といふことだ。（溜息を吐いて）お母さんがゐたら目をまはすだらう。

足を引摺りながら、皆んなの側へ寄つて行く。

くに子、うめき續ける。

（幕）

（二）

バラック建ての伊東秀雄の住宅の客室。前の幕の大山明三の應接室よりも粗雜であるが、現代風で明るみがある。

油繪の額が掛つてゐて、蓄音器も置かれてある。

秀雄は獨りで蓄音器の側に坐つて、陽氣な西洋音樂を聽いてゐる。そこへ、くに子が衰弱した樣子をして入つて來る。顏の面に現實離れのした、稍々凄味のある、普通人でないやうな粉色を施してゐる。

くに子　今日はお天氣がいゝのに、何處へもいらつしやらないの？

秀雄　今朝からさう極めてゐるぢやないか。

くに子　でも、一週に一度の休日に家にばかりいらしつちや、身體のためによくないぢやありませんか。

秀雄　ハヽヽ。今日に限つてそんなことを云つてる。……お前が外出したい氣持になつたのなら、夕方から一しよに散歩に出てもいゝんだがね。

くに子　あたしに遠慮なさらなくつてもいゝのよ。……どうせ、あたしはもう人の中へは出て行けなくなつたんですから。

秀雄　下らないことを氣に病む必要はないぢやないか。新聞に出された譯ぢやないし、一時の戲談としてもう濟んでしまつてるのぢやないか。

くに子　あなたがそんな空々しいことを仰有つたつて駄目よ。あたしにはちやんと分つてますわ。あたしが自殺なんか出來る人間ぢやないつてことを、あれ以來、あなたは見破つて安心していらつしやるんでせう。

秀雄　そんなことはどうだつていゝぢやないか。自殺の出來る人間がえらいつてことはないんだし。

くに子　あなたの思惑は兎に角、あたし自身、自殺の出來ない人間だつてことが自分によく分つて、急に世の中が淋しくなりました。

秀雄　馬鹿なことを云つてゐる。自殺の出來ない人間こそ、世の中が面白く暮せるんぢやないか。……あの日のことは、もう忘れておしまひよ。

くに子　忘れようとしても忘れられるものですか。あたし、身體がよくなればなるほど、あの時のことがハツキリ思出されますわ。お父さんも治助もあなたも、おちかさんでさへ、みんな蔑視んだ目であたしを見てゐましたわね。

秀雄　蔑視んだのぢやない、心配して見てゐたのだよ。

くに子　本當は、あの時あたしはあのまゝで死んでた方がよかつたの。

秀雄　ぢや、以前のお前はあの時に死んだことにして、新しいくに子が生れ出たことにしたらいゝぢやないか。

くに子　新しいくに子？こんな頭の中に塵屑の詰つてる樣な氣持をしてゐて、新しいくに子も何もあつたものですか。

蓄音器はまだ響いてゐる。

そこへ、下女が名刺を持つて入つて來る。秀雄、その名刺を見て眉を顰める。

秀雄　兎に角此處へ通してくれ。

下女、出て行く。

くに子　どなたが訪ねていらしつたの？

秀雄　あんまり會ひたくもない人間なんだが、斷る譯にも行くまい。お前はあちらへ行つてゐたらいゝだらう。

くに子　あたしが會つちやいけないの？（言葉を尖らせて）それ御覽なさい。あなたどつて、あたしをお客樣の前へ出すことをいやがるやうになつたぢやありませんか。あたしを劣等な人間扱ひして。

秀雄　（不快を忍んで）ぢや、此處にゐてもいゝよ。……緒井久三が來たんだよ。あいつ何の用事があるのか。

くに子（不快らしく）久三さんが?。何しに來たんでせう。

そこへ、久三が入つて來る。服裝は序幕と同じなのだが、顏面に現實離れのした、普通の人間でない感じを與へるやうな粉色を施してゐる。

久三　今日はよく御在宅でしたね（と、秀雄に挨拶してから、微笑を浮べてくに子の方を見上げて）くに子さんは身體がスッカリよくなつたの?。二三日前に、往來で治助さんに伺つて、藥違ひの話を聞いて大笑ひをしたんですよ。

くに子（不機嫌らしく）あなたはあたしを揶揄ひにいらしつたの?

久三　飛んでもないことだ。大笑ひしたことがくに子さんのお氣に障るのかね。僕の獨り心算のしそこないも大笑ひなんだから、お互ひさまです。

秀雄（ますく不機嫌らしく）君は滅多に僕の家に來たことのない人だが、今日は何か用事があるんですか。

久三　特別に用事がある譯ぢやありませんがね。一應くにさんにお詫びをして置かうと思つて。……あんな藥をうつかり置忘れたゝめに、飛んだ御迷惑を掛けて濟みませんでしたね。

くに子　治助が餘計なお喋舌をするからいけない。自分の同胞のことを面白づくで人に話すなんてひどい奴ね。……（昂奮して）頑固なお父さんでさへ、あれから神經を病んで、一刻も早く家を賣りたいと云つてるんぢやありませんか。兄は兩親を嫌つて外へ出てゐるし、治助はおちかさんに誘惑されて兩親の勸める縁談を嫌つてゐるし、あたしの實家は早晩破滅するでせうよ。

久三　なに、彌生町のあの家屋は破滅してもしなくつても、大山家は大丈夫だ。第一資産があるんだからな。

くに子　僅かな資産だつて、手細りになるものですか。

久三　ところが、僕は今、その僅かな金のためにも、百圓足らずの金のためにも苦勞してるんです。……僕にね。自殺をしそこねてから、生れ變つた氣になつて、世間に對して威張つてゐたつもりだが、やつぱり駄目だつた。空威張りをしたつて、Aといふ人間は何處までもAといふ人間で、AがBに變ることはないのかな。……（醉漢のクダ見たいに）いや、しかし、僕はあの時、藥の間違ひで、生命が助かつたと思つたのは間違ひで、本當は死んで、異つた世界に入つてるんぢやないかと、時々思はれることもあるんだ。……僕の飲んだのが眞實の毒藥で、くにさんの飲んだのが、婦人藥だつたのかも知れないて。ハヽヽヽ。

　秀雄は不機嫌だつた顏に笑ひを浮べる。くに子も機嫌を直して淋しく笑ふ。久三、自分が何處に來てゐるかを見定めるやうに室内を見廻はす。

くに子　さう云へば、久三さんは、今日は人が違つたやうに陽氣になつてゐるね。お金に不自由してるやうなところはちつとも見えないぢやないの。

久三　さう思はれるだけでも有難い譯だね。でも、生れ變つたにしても、異つた世界に入つてゐるにしても、僕といふ人間はなさけない譯だ。……あの後は、僕が戸外へ出るたびに、僕のあとに、影が形に添ふ如くに僕にくつゝいて來る者があるんですよ、危險人物が刑事巡査に尾行されてるやうなものでせうな。

秀雄（生眞面目に）君が警察の注意人物になつてる譯ぢやないんでせう。

くに子　あたしには分つてるわ。あなたの影も此處へ連れていらつしやるといゝわ。あなたの影には、あたし一度お目に掛つたことがあるのよ。

秀雄　それは何のことだ。

久三　僕は自分の身を亡ぼさうとしたことはあつても、まだ殺人も強盗もしたことはないのだから、警察に御厄介は掛けないでせう。その點は安心して下さい。

くに子　その影はどこにゐるんでせう（入口に目を注ぐ）

秀雄　二人で謎見たいなことを云つて。どうしたのだ（呆れたやうに二人を見詰めて、二人の現實離れのした顔にギクッと胸を轟かす）

久三（くに子を注視して）不思議だ。自分の本當の影を眼前に見てゐるやうだ（獨言のやうな感慨を洩らす）

くに子（胸に應へたらしく）そんな目で人の顔を見るもんぢやないわ。（顔を外らしたが、すると、秀雄の注意深い目にぶつゝかつたので）あなたもそんな目付で人の顔を見るもんぢやあないわ。

久三　僕はやはりあの時死んでゐたので、今地獄に住んでゐるのかも知れない。

くに子（强いて戯談らしく）地獄に住んでゐる人に訪問されちやたまらないわね。

そこへ、下女が入つて來たので、三人の緊張した態度が破れる。

下女　お客様のお連れ様がいらつしやいました。

久三（夢から醒めたやうに、そして當惑してゐるらしく）僕の云つたのは本當だつたでせう。

くに子　こちらへお通ししてお呉れ。

下女出て行く。

久三　御迷惑でも術方がありませんね。

秀雄　さつきから影々と云つてゐたのは、君の妹君のことですか。僕はまだお目に掛つたことはないんだが、君は妹君

と此處で落合ふやうに打合せをしてゐたんですね。それなら早くさう云つて呉れゝばよかつたのに。

久三　打合せなんかしてゐた譯ぢやないんですが。

くに子　あたし、此間彌生町で、奥さんの後姿をちよつと覗いて見たつもりで、どんな方だか、よくは知りませんのよ。

久三　僕に取つて、名譽なことぢやない（獨言のやうに云ふ）

三人がそれ〴〵の思ひを注いで入口を見てゐるところへ、夏江が前よりももつと見窄らしい服裝をして入つて來る。しかし、來馴れてゐるところへ來たやうに、含羞(はにか)んではゐない。

くに子　さあ、此方へいらつしやい。

夏江挨拶する。秀雄は侮蔑を含んだ目を向けて答禮する。

久三　お前の住みたい家はこんな家なんだらう。……よく見て置くがいゝ。……だけど、お前はおれに喰つついてゐようとも、おれの側を離れて行かうとも、こんな當世の文化的な家で、現代的の華やかな生活の出來る見込みはないだらうぜ。

夏江　あなたは人樣の前であたしに恥を搔かせようと思つて、こんなところへ連れていらつしやつたの？（強い微笑を浮べながら云ふ）

久三　誰れが隨いて來いと云つた？。お前が勝手に隨いて來たのぢやないか。

夏江　嘘を仰有い。……あなたはあたしが隨いてゐなければ、一人歩きは出來ないんぢやありませんか。今日此方へ來る途中でも、何度往來で倒れたか知れない。あたしが、抱起して介抱したからこそ、此處まで無事に來られたのぢや

ありませんか。

久三　お前こそ嘘つ吐きだ。

夏江　あなたは伯父さんのお家で死にそこねた時から、記憶力が悪くなつて、御内分のしたことや言つたことさへ忘れるやうになつたんです。……今日はお前の望み通りに、身内の者に立合つて貰つて、最後の解決をつけてやると仰有つたぢやありませんか。……彌生町から曙町に天神町に、あちらこちらと、あなたのお身内の家へ一軒々々引張り廻されて、此方のお家であなたの御親類が品切れになるのぢやありませんか。

久三　最後の解決は金のことか。金なら何處へ行つても、おれのために出して呉れる所はなさゝうだよ。此處には箪笥器もあるし本箱もあるし、油繪の額もあるし、いづれ、金庫には金が一杯詰つてるのだらうが、それはお前やおれには何の關係もないのだ。諦めるがいゝ。（秀雄やくに子に向つて）この女の身の代金が五百兩になつてるんださうですがね。全體それくらゐの値段がこの女にあるんでせうか。

くに子　久三さんの言草はまるで無頼漢のやうね。自分のことでなくつても、あたし聞きづらくつてならない。何だか怖いやうだから、もう歸つて下さい。

久三　あなたの怖がるのは、僕よりも、僕の連れのこの女のことなんでせう。でも、怖がるには及びませんよ。こんなに見えても、この女はあなたに敵意を有つてゐやしませんよ。

秀雄　用事がなければ、今日はこれで歸つて下さい。

久三　何處へ行つても歡迎されない僕だ。叩きだされないさきに歸りますかね。僕は強請に來たのぢやありませんよ。……本當は僕に影の如く纏つてゐるこの女から奇麗に離れようとしてまご〱してゐるんですよ。自分の家にゐ

る間は、二人がてんでに勝手な獨言を云ひ合つて、お互ひに相手がゐなかつたらと思つてゐるくせに、僕が他所へ出ると、此奴は屹度あとから隨いて來るんだから不思議だ。そして、さつき云つたやうに、僕が往來で轉んだの云つたのと、僕の歩き振りにまで餘計なおせつかいを云ひ出すのだから不思議だ。……どうも最後の解決が金錢だけで盡きさうぢやありませんよ。

夏江　盡くか盡かぬか、當然あなたの出すべきお金を出してから仰有るといゝ。人のことよりも、あなたこそ影のやうな人だわ。あたしはこの通り丈夫な身體をして、ちやんと生きてゐるぢやありませんか。

くに子　煩いね。……影でも形でもあたしたちの構つたことぢやないから、早く歸つて下さい。……あたし、この人の置いて行つたあの藥を飮んだのかと思ふと、今でも胸が苦しくつてならないんです。この人、あたしに飮ませるつもりでわざと置いて行つたのかも知れなかつた。そして、あたしがどうなつたかと、今日二人で樣子を見に來たのかも知れないんだわ。(身ぶるひする。そして、秀雄に向つて)あなた、この人たちを歸して下さい。怖くつて、あたしの頭が變になりさうだから。

秀雄　早く出て行つて下さい。

　彼れは座を立つて、久三に手を掛ける。

夏江　あなた、また彌生町のお家のやうに追出されるの？(久三を勵ますやうに云つて)あなたはあつちでもこつちでも追出されて、しまひには、地球の外でも追出されなければ收まりがつかない人なのね。……意氣地がないつたらありやしない。

久三　此處もおれの家ぢやないから爲方がないさ。

久三は座を立ちかけたが、その際、冷笑憎悪を含んだ顏付をする。秀雄はふとその現實離れのした伜の顏に恐れを感じたらしく、我れ知らず久三の側を離れて、逃げるやうに奥へ入る。くに子も同じやうな態度で隨いて行く。

久三　どうしたのだ？。可笑な人だ。追出さうとした人の方が逃げて行つたぢやないか。

夏江　あなたが彌生町の伯父さんの顏を見て死にたくなつたやうに、あの人だちはあなたを恐れたのよ（ふと、惡辣な目を光らせて）さあ、この隙間に金庫のお金をさらつていらつしやい（權威をもつて命令するやうに云ふ）

久三　金庫なんか何處にも見えないぢやないか。

夏江　あなたは目までも役に立たなくなつたの？。金庫はそこにあるぢやないの？。

一方を指差すと、久三は小さな皮文庫を見て、そちらへ寄つて行く。

夏江　それを持つて、早く庭から逃げていらつしやい。

久三　おれはまだ泥棒をしたことはないよ。……お前はおれに泥棒までさせなければ承知出來ないんだな。……地球の外へ追出される人間だと、お前に云はれたおれだ。泥棒を遠慮するには及ぶまい。

そこへ、くに子があたりを憚りながら顏を出して、

くに子　久三さん、これを貸して上げますから、おとなしく歸つて下さいね（情味をもつて云ふ）

同時に紙包を抛出して引込む。

久三　金か。

紙包の方へ寄つて覗込む。夏江も不思議さうに覗込む。

久三　おれは泥棒の代りに乞食にされたのか。……お前が欲しいのなら、それを持つて歸れ。

夏江　（喜んで）持つて行つてもよくつてよ……あなたも早くお歸んなさい。途中で轉ばないやうに。

彼女はスツと出て行く。久三はつき開けかけた皮文庫をそツと開けて、中を覗いて、合點の行かない顏付をして、それを閉ぢる。

くに子入つて來る。

くに子　あなたはなぜお歸りにならないのです。

久三　僕も物欲しさうな目をして、あちらこちらの身内を訪ねて行くものだから、乞食か強請のやうに思はれて……僕も落ちぶれたものだね（くに子の顏を見上げて）だけど、あなたゞつて隨分憔悴したやうだな。治助さんは何でもないやうに云つて笑つてゐたつけが、毒がまだ拔け切らないんぢやないか知ら。不斷のくに子さんとは思はれないほどに窶れてゐる。……大山家の一族のうちでは、類のないほどに美しかつたくに子さんとは思はれないが、僕の目がどうかなつたのかな。

くに子　あたしのことよりも、あなたこそ、何といふみじめな顏していらつしやるの？　秀雄は、人間離れのしたあなたの顏を薄氣味惡く思つてるのよ。

久三　男の僕は鏡を見ないから、自分の顏がよく分らないのだけれど、女のあなたに自分の顏が分らないのは變だね。僕の連れの女も日ましに顏が荒んで來たのだけれど、あなたのやうぢやない。

くに子　あたし。そんなに窶れてゐるんですかねえ。あの方よりも見つともなく窶れてゐるんでせうか（しみ〴〵と云つて）秀雄はあたしの心を引立てようと思つて、あの後は毎日あたしに口當りのいいことを云つて呉れるのですけれど。あたしはもう駄目になつてるのね。あの後一週間ばかりの間に、あたし十年も歳を取つたやうな氣持がしますの

よ。……あたしがどうなつても、秀雄はちやんとした候補者があるんだから、結句幸ひだと思つてるらしんです。

久三　それは秀雄さんは仕合せだ。僕には、あの女が行つちまつても、僕の道連れになる候補者は一人もないんだ。そして、あの女は、僕の體力でも過去の記憶でも、みんな奪つてしまつたのだから、新たに外の女に捧げる力は、僕には何も殘つてゐないんだよ。

くに子　ぢや、あの方をまだ思つていらつしやるのね。

久三　あの女に未練は殘つてやしないつもりだが、僕のいやな記憶のありつたけを持つて外の男に行かれるのは、僕のやうな男でも不愉快に思はれるね。

くに子　あたしだつて、自分の身はどうなつてもいゝとしても、秀雄の思つてる女とが一しよになつて、あたしを噂話の種にすることが、いま／＼しくつてならないの。

　二人は釘付けになつたやうに、相對して坐つて、相手の顏を見詰めながら、取りすまして話をしてゐる。

久三　くにさんと差向ひで話をするのは、何年振りだらうな。

くに子　さうね。……でも、そんなことはどちらでもいいぢやありませんか。

久三　成程、それはどちらでもいい譯だ。僕は昔から、誰れにも歡迎されない男だつたのだから。他人に、思出の夢を描かせる力もありやしない。……それで、今くにさんが僕に話しかけてたことは何だつたかな。……あゝ、さうか（取りすました調子にかへつて）秀雄さんは品行方正だと聞いてゐたが、あなたの外にも、愛してゐる女があるんですか。

くに子　どうもさうらしいの。こなひだまであたしの家へよく出入りしてゐた若い女もあつたのよ。その現代的な女も少し怪しいんだけれど、それよりも、あたしの知らない女で、誰れか譯のある女が、外にありさうに思はれるの。

久三　それはあなたの邪推ぢやあるまいか。僕の女なぞは、外に手頼りになる男は、はしくれもありやしないのに、さもありさうなことを云つてるんだよ。

くに子　あなたの奥さんはさうかも知れないけど、あたしの家の秀雄は、それとは違ふわよ。

久三　そりや、秀雄さんは御立派だからね（皮肉らしくなく素直に云つて）それで、秀雄さんの女といふのは、何處の何方(どなた)だね。あなたが自分だけでそんな夢見たいなことを云つてヤキモキしてゐるんぢやないとすると。

くに子　秀雄のところへ、その女の手紙がいくつも來てゐるらしいの。そこの皮文庫を開て見て御覽なさい。あなたはさつき覗いて見てゐたぢやないの？

久三　僕の女は、あれを金庫だと云つてゐたつけが、ぢや、秀雄さんの秘密の手紙があの中にしまつてあるのか。……ラブレターなんて、僕はかつて見たことがないが、後學のために、一つ讀ませて貰はふか。

くに子　御覽なさいな。その手紙を見たあとで、あなたにお頼みしたいことがあるのよ。

久三　何を？

くに子　その女の居所を突留めて貰ひたいんです。

久三　乞食同様の僕だ。暇にまかせて捜しますよ。

彼れは座を立つて、皮文庫を開けて、中の手紙をいくつか取出して、どれが所謂ラブレーターであるかと云つた風度で撰り分ける。そして、そのうちの一つを取上げる。

久三　どうもこれらしいな……讀んでもいゝんだな（と、念を押して、封筒の中から手紙を引出して、小聲で讀みながら）なる程。女の文章だ。

くに子（不思議さうに）女の文章ですつて？かまわないから、あたしに聞えるやうに讀上げて御覽なさい。

くに子、手紙の方を覗くと、さつきからそつと顏を出してゐた秀雄が足早に出て來る。

秀雄　何を馬鹿な眞似をするんだ。それはおちかさんの寄越した見舞の手紙ぢやないか（久三に向つて）君は早くお歸んなさい。與さんが門の外で、さつきから君を呼んでゐますよ。

久三　さうですか。あいつ、まだそこらをウロ〳〵してゐるのか。

久三、詰らなさゝうに出て行く。秀雄笑ふ。くに子も、今まで壓えてゐた笑ひを洩らす。

くに子　あんな人だちに恐れて逃出すなんて、あなたも意氣地がないのね。あたし揶揄つて見たのよ。反古箱同樣な皮文庫を、金庫とか秘密の手紙入れとか思つて、頻りに目をつけてるんだから、滑稽でならないわ。

秀雄　あの人は貧乏ばかりしてゐても、不斷物を考へてるやうな男だから、突き詰めて氣でも狂つたのかと思つてゐたら、何のこつた。元來が骨までも愚鈍な人間だつたのだね（笑ふ）

くに子　はじめからそのつもりで、もつと揶揄つてゐればよかつたのに、あんな人だちの云ふことを生眞面に聞いて、いゝ加減、頭を痛めたことぢやない（笑ふ）

秀雄　でも、お前はあの人に金をやつたのぢやないか。

くに子　五圓のお札をたつた一枚。……あの人だちはあの紙幣を百圓札とでも思つてゐたんでせう（笑つたが、ふと氣になつたやうに）でも、あの人、あたしの顏を侮辱したやうな口を利いてゐたけれど、あたし、そんなに見つともなく窶れてるんでせうか。

秀雄　そんなことはないよ。もう四五日も休養してゐたら元のやうになるんだから、安心しておいでよ。

くに子　さうか知ら。

そこへ、治助が案內も乞はず、帽子を被つたまゝ、突如として入つて來る。

秀雄　君はそこで染井に會つたらう

治助　染井?。久三さんにか。いや會はなかつた。どうしたのだ?

秀雄　今まで此處にゐて、今家を出たばかりなんだが、

治助　あの人が君の家なんかへ遊びに來るのは變だね（それには興味を感じないらしく輕く云つて、それからくに子に向つて）それよりも、今夜姉さんに、彌生町へ來て貰へまいか。……お父さんが、われ〳〵四人の兄弟を集めて、遺言見たいなことを云ひたがつてゐるんだよ。

くに子　遺言?お父さんはそんなに病氣がいけないの?。

治助　なに。遺言の必要があるほど惡かあないんだがね。われ〳〵兄弟が親の言ふことを聞かなかつたり、いろ〳〵親困らせをしたりするものだから、親爺も失望してゐるんだらう。

くに子　だつて、あたしは親困らせなんかしないわ。結婚だつて親の命令に逆らはなかつたのぢやないか。

治助　ぢや、遺產は姉さんに全部やると遺言をするかも知れないよ。

くに子　まさか。

治助　ところで、兄貴なんかとも相談してるんだが、親爺が若し財產配けの話でもしだしたら、みんなが口を揃へて、財產なんか入りませんと返答したいんだよ。衆議一決してゐるんだから、姉さんもさう云つてお吳れよ。

くに子（不思議さうに）なぜそんな詰らない相談をしたの?

治助　親爺が舊弊な頭でゐるから、皆んなでさう云つて思ひ知らせるのだ。……第一、姉さんは金なんか入らないだらうし。

くに子　あたしだつて、使ひ切れないほどのお金を持つてやしないよ。……それよりも、お前は、結婚でも何でも、自分の事は自分の勝手にしていゝだらうけれど、あたしのことを、面白づくで久三さんなんかに言觸らしちや困るよ。あたしが馬鹿にされるやうで……

秀雄　そんなことはまあ、どうでもいゝぢやないか。そして、彌生町へはお前も今夜出掛けることにしたらいゝだらう。

くに子　彌生町の應接室のことを思ふと、あたしゾッとするわ。當分あしこへは行きたかありません。

秀雄　だつて、お父さんの遺言を聞きに行かない譯には行くまい。

くに子　あたし、まだ家の外へ一歩も出る氣にはなれないの。

治助　ぢや、姉さんはまだ身體が回復しないから來られないと云つて置かうか。

くに子　何とでもいゝやうに云つといておくれな。

治助　それで。用事は相濟みだ。今日は急ぐから、これで失敬しよう。

治助は突立つたまゝそんなことを云つて、秀雄に會釋して出て行く。

秀雄　あの男も不斷とは違つて、いやにそわ／＼してゐる。今日は來る奴がみんな變だよ。……おれも何だか頭れて來たから、氣晴らしに、そこらを散歩して來ようか。いゝだらう（くに子の同意を乞ふやうに云ふ）

くに子　あたし、今日は一人でゐるのが、何だか淋しくなつた。

秀雄　ぢやお前も一しよに散歩するさ。

彼れがさう云ひ棄てて奥へ入つて行くと、くに子もあとから入つて行く。

間もなく久三が庭の横手から入つて來て、疲れた態度で、部屋の上り口に腰を掛ける。「誰れもゐないのか」と、獨言を洩らす。そしてふと、蓄音器に目を留めて、上へ上つて蓄音器をかける。偶然撰んだのは悲調を含んだ音樂であつた。それに耳を傾けながら、彼れはその前に寢そべる。

と、そこへ、くに子が顏を出す。

くに子（吃驚して）あなたはまだお歸りにならなかつたの？。いつの間に何處から此處へいらしつたの？……そこにゐるのは、眞實の久三さんなのか知ら（夢に魘されてゐるやうに云ふ）

久三　僕も、自分で本當の久三のやうに思はれないのだよ。本當の久三はやはり、あの時に死んだのだね。さつき秀雄さんの話だと、僕の連れの女が、僕を門の外で待つてるといふことだから、そのつもりで出て見ると、何處にもゐないんだ。それで、家のまはりをウロ〱捜してゐるうちに、またこの部屋へ入り込んだ譯なんだが、……

くに子　早く歸つて下さい。

久三（泰然として）さういふくにさんも、本當のくにさんかい。あの時、彌生町の家で二人は同んなじ藥を分け合つて飮んだのだ。昔の久三とくに子の拔け殼が此處にゐるんだね。拔け殼同士が並んで昔の夢を見てるんだよ。

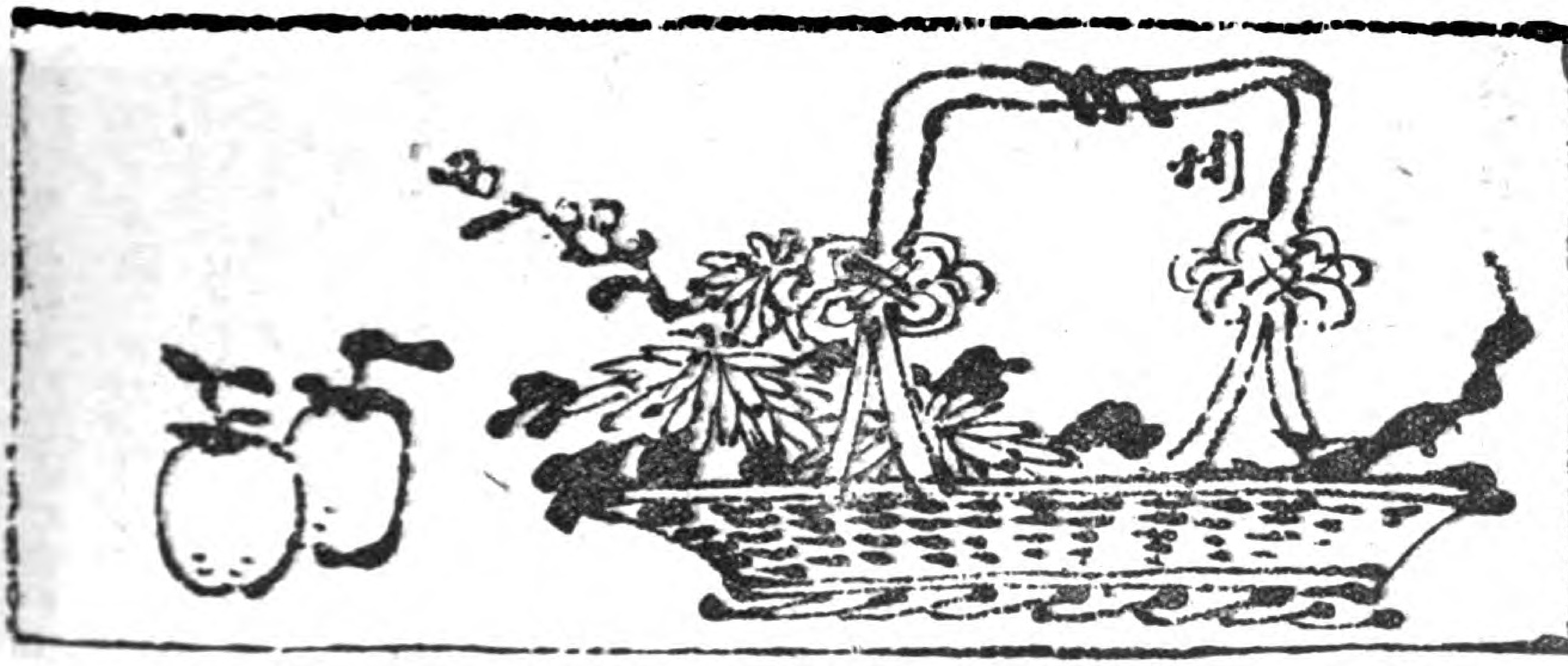
くに子　あたし、あのお藥はあなたのために飮んだのぢやないわ。

久三　僕だつて、あの藥をくにさんのために飮んだのぢやなかつた。……でも、自然にそんなことになつたのだよ。この蓄音器は、二人の夢を弔ふのに相應しい音樂だ。

くに子は骸骨が倒れるやうに、久三の側に倒れて、非現實な顏を並べる。

蓄音器鳴りつゞける。

（幕



# 赤い靈魂

倉田百三

## 第三場

（集會場。コンクリートの頑丈な、ガランとして裝飾のない大きな建物の內部。大部分は土間より成り、その上に橫に一つゞきの木の長椅子が並列してゐる。正面に演壇。議題や組合の名前が揭げられてゐる。その後ろに地圖のやうな斑點のついた白木綿のカーテンが仕切られ、高い窓から暑い日光が幅廣い條をなして射し込み、塵埃が躍つてゐるのが見える。座席には勞働者がギツシリ詰め、座席の後ろの椅子のない土間口も興奮した聽衆が一ぱい立つてゐる。今一人の若い勞働者、Aが汗を垂らして演說してゐる。）

勞働者A。今は絕好の時機だ。俺たちはこの機會を摑まねばならぬ。長い封鎖で食料は缺乏してゐる。物價は暴騰の頂點に達してゐる。國內に充滿してゐる飢餓と怨嗟の叫び——當局者はなすところを知らない。何等成算を持つてゐないことを暴露してゐる。此の時だ！　我々の立ちあがるのは今だ！　此の機會を逸してはならぬ。諸君さあ立たう！（降壇。拍手の響）

勞働者B。(登壇)今はその時機でない。生活必需品は生産せねばならぬ。我々の同胞が飢餓に瀕してゐることを忘れるな。外國の不人道極まる生活必需品の封鎖――我々は今外國人の壓迫に反抗すべきだ。諸君は異人種の軛の下に忍ぶことが出來るか? 國內の爭ひは一時止めねばならぬ。此の上同胞を飢餓に陷し入れることはできぬ。生活必需品を生産せよ。それは今日我々勞働者の義務だ。(降壇。拍手)

勞働者C。(登壇)生活必需品を生産すな。何ものをも生産すな。今こそ總同盟罷業の絕好機だ。あらゆる生産機關を××せしめよ。××××せしめよ。その時こそ我々の日が來るのだ!

勞働者B。(自席より)異民族の鎖につながれたいのか。

勞働者C。我々はもう充分につながれてゐる。どうして此の上つながれることができるか? 異民族であれ、同胞であれ、ブルジョアの鎖であることは一つだ。

勞働者B。同胞が飢え死にするのをどうするのだ。

勞働者C。我々は今初めて飢えるのか。我々の運動は我々の飢えからの要求ではなかつたのか。ストライキによつて一部の同胞は餓死するだらう。だが今も刻々に餓死してゐる無數の兄弟姉妹があるのだ。犠牲はどつち道免れられぬ。我々の日が一日早やく來ればそれだけ同胞は救はれるのだ。見ろ。あちらでも此方でも餓死してゐるぞ。石に當るものは他人やその妻子であつて自分ではない。――かう思ふものがそんなことを言ふのだ! だが考へろ。石は自分の額にも當るのだぞ。

勞働者D。赤ん坊は生れたばかりだ。俺の女房は病みついてゐる。俺が二、三日パンにはづれゝば、もう助からぬ。――工場へ行かう。今は機でない。

N子。（登壇。女勞働者一齊に拍手する）私たちは番に當らう。私たちの日が來るために犧牲が要るならば
ならう。飢えて死なう。妻のことを心配すな。勇ましくたゝかつてくれ。赤ん坊が死ぬるつて？ 赤ん坊は私たちが引き受ける。私たちの乳房が干あがるまで——若し切端つまつたら？ その時こそ私たちは赤ん坊をさゝげる。私たちのたゝかひのために。私たちが——母親が赤ん坊をさゝげる。それだのに男子が何を呑むのだ。それを覺悟せずに我々は此の事業を初めたのか。私たちを捨てゝくれ。そして立ちあがつてくれ。もう工場へは行つてくれな。

聲々。工場へ行くな。ストライキだ。生産すな！

勞働者E。（登壇）街頭へ出ろ！ ストライキでは駄目だ。皆立ちあがれ。皆とつて出やう。石を×××××を。××を！ ××××せ。市街に×を××ろ。店を、××を占領せよ。ブルジョアはまだ飢えては居らぬ。澤山食物を貯へてゐる。彼等を追へ。そしてとれ。それで俺たちの妻子は生きられる！

女勞働者F。私たちは盗んで食はう。赤ん坊のために盗んで食はう。それは飢えた母親の權利だ。人類のために生むものの權利だ。

勞働者G。行かう。武器をとつて立ちあがらう。ブルジョアと、その手先けと刺しちがへて死なう。

勞働者H。××。そして×め！俺たちの權利だ。

勞働者I××、そして×せ。俺たちの復讐だ。

聲。街頭へ行け。街頭へ行け！

他の聲。占領せよ。俺たちの××のために占領せよ！

（聽衆喝采する）

勞働者T。（演壇に驅せ登る）俺たちは反對だ。俺たちは一切の支配を認めぬ！

（會場の一部分から盛んに拍手が起る）

聲。アナーキストだ。アナーキストだ。

勞働者T。俺達は一切の權力をゆるさぬ。人間は、個人は絕對に自由だ。獨裁とは何んだ。誰が獨裁するのだ。×××は俺たちには要らない。一切の中央集權を俺たちは排斥する。一人の主人を追うて他の主人を迎へて何になる？俺たちが追うのは自由になりたいからだ。ブルジョアの虎を追うて權力團體の狼が玉座を座らうとするのだ。俺たちは××されぬぞ。人間が人間を××することはできぬ。命令することはできぬ！

勞働者K。アナーキストを葬れ。空想家を追へ。俺達の獨裁は絕對に必要だ。現實の鐵關は理窟では突破できぬ。誰が無智な大衆に意志を與へるのだ。進路と方法とを示すのだ。いや、幸福への本能さへも我々が摑み出して示し與へねばならぬ。彼等はいかに欲すべきかを知らない。彼等の無智と惰弱とが方向を誤まる時我々は命令せねばならぬ。强制せねばならぬ。

勞働者J。大衆を侮蔑すな。俺だちが無智だつて？　否！　俺だちは鋭く洞察する。支配欲の根深いわざわひを！　それが一切の惡制度の根源だ。それを俺達は嫌惡する。それを俺達は排斥する。萬人は自我の幸福への本能を持つてゐる。誰が俺たちに本能を與へることができる？　本能は最良の方法を嗅ぎあてる。誰がよりよき方法を俺たちに指導することができる？　然り、彼等の指導者的な精神そのものこそ支配の初めなのだ。俺たちの敵の正體なのだ！

勞働者K。空論に欺かれるな。彼等は俺たちの鬪での結束力を掻き亂す。束ねた矢をばら〳〵の藥しべのやうに無力にしやうといふのだ。彼等は我々の裏切者だ。

勞働者J。彼等こそ眞の自由の裏切者だ。彼等は解放を約束しつゝ支配を與へるのだ。

勞働者K。彼等は勞働運動の獅子身中の蟲だ。

勞働者J。彼等は僞はりの豫言者だ。彼等を信ずるな。彼等が勝つた時彼等は狼のやうに權力を以て我々に君臨するのだ。

勞働者K。彼等を無視せよ。小數の、無策の彼等に頓着すな。彼等が我々に何を與へることが出來る！ 美しい理想的名辭が俺たちの生活苦と何のかゝはりがある。今我々に必要なのは權力だ。ブルジョアを倒す實力だ。それから後はどうならうとも。今闘爭の出發に際して、我々の闘志を挫けさすのは裏切者でなくて何者だ。彼等を葬れ！

聲々。彼等を葬れ！ 裏切者を追へ！

勞働者J。俺たちは今實に壯烈な戰闘に呼ばれてゐるのだ。人類の歴史を書きかへる。言語に絕した大決戰に！ 諸君奮へ。出陣の血祭りに先づ彼等を屠れ。裏切者を斬つて陣門に磔けよ！

（一部に屯したアナーキストの群團一齊に叫び、或ひは立ち上り、或ひは足踏みをする。會場喧囂に陷る）

山川。（巨大な、沈着な姿を壇上にあらはす）諸君靜肅にし給へ。興奮は決して力の所在を示さぬ。戰爭は決して怒號では勝てないぞ！

（しいつ、しいつと制する聲が方々から起る）

山川。（冷靜に決然と）まだ早い。諸君は勝てないぞ！

（會場靜かになる）

山川。諸君は敵の實力を知つてゐるか。一つの巨大な、組織ある、鐵や黄金によつて連結された無數の團體を持つた、

その腦髓のなかには複雜な冷たい知能のある怪物――それがブルジョアだ。我々の敵だ。單なる理窟や、感情では戰ひに勝てぬ。鐵のやうな意志―冷めたい緻密な知謀、――火のやうな煽動と、死の如き隱忍とを兼ね、時機を洞察する鋭敏な眼力――それ等をコントロールする超人的な力が初めて戰勝をもたらすのだ。

（沈默）

山川。まだ戰機は熟してゐない。今立ち上る時ではない。今は隱忍の絶頂の時だ。ブルジョアはまだ强い。俺たちは今彼等を倒すことはできぬ。

（會場の一部に喧噪が起る）

山川。冷靜になれ。敵と味方の實力を測れ。最後に勝つものは全局の勝利者だ。今取るべき策は別にある。

聲。妥協だ。右傾だ！

山川。（構はず）躍りかゝる前にもつと敵を弱らせねばならぬ。もつと味方の爪牙を磨かねばならぬ。そして今はその絶好の時機だ。敵の方々の關節をはづし、その帳番ひを毀すのは今だ。そして雪だるまの太るやうに味方の勢力を殖やすのは今だ！

勞働者J。長い封鎖と必需品の缺乏とで敵はすでに弱つてゐる。際限のない物貨の騰貴、爲替相場の暴落――××の痛手を君は見ないのか。

山川。待て！隱忍の時機が先き立たねばならぬ。一日延びればそれだけ敵は弱はる。もつと敵を疲らせろ。

勞働者L。弱るのは敵だけではない。俺たちの此の疲弊をどうするのだ。飢餓をどうするのだ。――いつまで俺達は忍ばねばならないのだ。

聲。俺たちを救へ。早く救へ！

山川。忍べ。勝利のために忍べ！　俺たちが飢えるだけ國家は弱るのだ。根氣を比べろ。――絶食によつて難病を癒やす行者のやうに！

女の聲。その間に斃れる犧牲者を思つてくれ。昨日隣りの老人は死んだ。明日私の赤ん坊は死ぬだらう。

山川。（沈痛に）鐵の事實だ。事實の必至だ。犧牲者を最少にする最良の手段に忠實になれ。それは嚴肅だ。犧牲はいつでもある。いま犧牲を吝むことはたゞ犧牲をふやすに過ぎないのだ。

（沈默）

山川。すべての感情を抑さへて內攻させよ。意志を白金のプロペラーのやうに冴へて猛烈に回轉させろ。しかし音は立てずに――しづかに、冷めたく……（面色が青くなる）憎みとは聲高い怒號のことか？　否、それは毒を塗つた冷めたい鍼だ！

（沈默）

山川。まだ早い。今は忍べ。――今なすべきことは外にある！

聲。（アナーキストの團體の中より）我々のなすべきことは外にある。我々は彼等と行動をともにしない。自我を尊重せよ。絶對の自由を、自由を、自由を！

山川。風船玉に乘つて去れ！手段のない目的、現在のない未來、足のない頭――諸君この滑稽な怪物を見てやれ。此の方法論のない哲學を笑つてやれ。さうだ。彼等は悲慘なアルキメデスだ。「我れに支點をあたへよ、しからば俺は地球を動かして見せる」から言つてどなりまはつても何になるのだ。その支點は何處にあるのだ。そんな長いテコを

どうして手に入れるのだ？　不可能な假定が我々と何のかゝはりがある？　鎖を切るための實力を掴まずにいつ絶對の自由が得られる？　目くそ程の自由だつて得られるか？　實力はどうしてつくれる？　組織によつて、智略によつて、個人の節制ある、犠牲ある訓練によつて！

聲。（アナーキストの中より）絶對に自由なる自我の自由聯合によつて！

山川。階級を解放せぬ先きに何處に自我の解放がある？　自我の自由を節制せずして何處に聯合がある？　不可能な、どつちつかずの、あるものゝ中最もあやしげな建物は彼等だ。

聲。方法を示せ。方法を示せ！

山川。獅子の腕力と蟻の腦力とによつて。今は敵の内部を攪亂する時だ。敵を悔い改めさせることなしに、もつと腐敗させる時だ。勢力を失墜しつゝある彼等を今刺激して溫情主義に變じさせてはならぬ。今は民衆に平和をあたへてはならぬ。無智な彼等の本能を呼びさますためには彼等をもつと苦しましめよ。敵をもつと兇暴ならしめよ。民衆の怨嗟をいやが上に買はしめよ。大童になり、疲れ果て、腐敗のどん底に沈ましめよ。人情を殺せ、同情と人道とな權力のために犠牲にせよ。民衆をもつと坩堝の苦熱の中に陷らしめよ。もつと人心を動搖させ、混亂せしめよ。今敵を悔ひ改めしめて平和に向はしめることは最大の禁物だ。彼等をもつともつと墮落せしめ、腐敗せしめよ。民衆に平和を與へるな。彼等を混亂せしめ、飢えしめ、呪はれしめよ！

同志の女。（青ざめて立ち上がる）わたしは反對する！人道のために抗議する。さういふ手段を用いてはならぬ。それは不名譽だ。卑劣だ！

（沈默）

同志の女。人間の墮落を願ひ、悔い改めをよろこばず、故意に平和を混亂させる――さういふ手段をとることは卑しむべきことだ！

山川。止むを得ないことだ！

同志の女。和らぎ得るものを爭はしめること、引き上げ得る可能性あるものを墮落せしめること、助け得るのぞみあるものを故意に苦しましめること――さういふ手段は恐るべきものだ！

山川。恐るべきものを絶滅するためには恐るべき××××なのだ！

同志の女。平和を求めてゐるものを故意に混亂させ、信じ合つてるものを離間さす――さういふ卑劣なことが我々にゆるされるか？

山川。根本的救濟のためには×××れる――それは事實の要求だ。必然の衝迫だ。我々は權力を得るためにはどんな手段でも用ひていゝ。それを意識的に、組織的に、充分な自覺を以て！僞はりの宣傳も、離間策も、買收も、スパイもあらゆる手段を用いていゝ。敵を斃すことが出來さへするならば！

同志の女。……

山川。我々には完全な手段はない。我々はあり得る手段の中最良のものを選び得るのみだ。最良のものとは何だ。一日も早く敵を斃し得る手段だ。犧牲の數は實に時間に比例する。問題はただ知略にある。我々には右傾の精神は微塵もない。しかも同志の熱烈な決心に反對したのもそのためでないか！同樣に我々は甘い人道主義をも排斥する。我々にゆるされるかつて？誰が我々にゆるすのだ。我々に禁じるものは何ものなのだ？

同志の女。良心の聲がゆるさぬ。靈魂が禁じる！

山川。良心が、靈魂がどういふよりよい手段を與へるのだ。

同志の女。目的が！我々がそのために立ち上つた目的が辱しめられるやうな手段が用いられるか。我々は惡を征服するために立つたものだ。その我々が惡に服從するのか。最も卑しむべき、意識された。眞黑な惡を犯すのか。

山川。毒を以て毒を制するのだ。病氣が破を以ての外癒されない時にも醫者は破を用いてはならぬのか。事實の必要を尊重せよ。我々は天の使ではない。人間だ。

聲々。人間だ。人間だ。人間だ。

同志の女。わたくしの裏の人間がなやむ――單なる手段のために殺されることを拒む。人間らしい心が無理に搾木にかけられて、單なる術策のために歪められることを抗議する……それは不自然だ。器械的の必然だ。たましいの生きる方則ではない。

山川。ではどういふよりよい方法があるのだ。

同志の女。……

山川。これは窮余の苦肉の策だ。虐げられた同胞を救ふための唯一の手段だ。それとも諸君、他に手段があるだらうか。

聲々。（一團となつて短く沈痛に響く）ない。――

山川。（反響の如く）ない。――それではこれは我々の道なのだ。それがどんなものであれ、我々は之を採らねばならぬ。

――必然なものは絕對だ！

群衆の聲。絕對だ。絕對だ。

同志の女。（手を絞りつゝ、ひざまづき、半ば獨白の如くに次の如くいふ。しかしその聲は群衆の絕叫のうちにかき消されてしまふ）

わたしのたましひは今ねぢまげられる。——これが生命の道だらうか。……

勞働者M。絶對ではない。誰れが我々に命令するのだ。我々は主觀を持つ。我々は自由だ！

アナーキストの一團。（一齊に絶叫しつゝ立ち上る。）我々は自由だ！我々は反對する！

群衆の一團。（之に應じて立ち上る。）アナーキストを追へ。裏切者を屠れ！

アナーキストの一團。横暴だ。横暴だ。

群衆の一人。勞働運動の腫物だ。じやまくさい奴だ。

アナーキストの一人。何だと。個性なしの木偶。

群衆の一人。すつこめ。役立たづの扰め。（そのアナーキストを撲る）

他のアナーキスト。（撲り返す。）莫迦が！

（これをキッカケにアナーキストの一團と群衆の一團との間に格鬪が初まる。會場總立ちになる。此の時まで會場の一隅に默々として控えたゐた供へた男及び一團の勞働者の群が一齊に立ち上り、つかみ合つてゐる群衆の間に割つて入る。）

兄弟甲。止したまへ。亂暴するな！

兄弟乙。同志討をして何になるのだ。

アナーキストの一人。（鼻血を垂らしながら）馬鹿が。獸物が！

群衆の一人。（猶も腕を振りあげて）畜生。貴樣らは裏切者だ。我々の敵だ！

供へた男。わしは恥ぢる。我々勞働者のために——人間のために！

（沈默）

兄弟丙。諸君はブルジョアの笑ひ物になりたいのか。

兄弟丁。大事な問題を前にして！諸君は子供のやうになぐり合ひをするのか。

兄弟戊。君達の敵が、君達を輕蔑してゐるぞ。

供へた男。神よお許し下さい。私たちは人間を辱かしめました。自分自身の價値を引き下げました。

同志の女。（釘づけされたやうに、突き立ち、供へた男を凝視してゐたが、此の時叫び聲をあげ、息をはづませて、側に近づかうとする。しかし彼の女の足は意志に反して立ちすくむ）

聲。（群衆の中より）供へた男だ。無抵抗主義者だ。

山川。（演壇に立往生になつてゐたが、顔色がサツと變はる）無抵抗主義者を追へ。彼等は我々の敵だ！

供へた男。（沈默）

山川。すべて我々の味方でないものはことごとく我々の敵だ。事柄はすでに決定的だ。もうギリギリの線まで來てゐる。我々には他に選ぶべき道はない。これは絶對だ。我々のたゝかひの障碍となるものは皆敵だ。何故ならそれは人類の救濟を阻害するから。

兄弟甲。我々は勞働者だ。人類に供へてゐる者だ。

山川。ブルジョアを倒す道は一つあるのみ。これが人類を救濟する道だ。眞理だ。彼等は憎むことができない怯者だ。彼等は同志の闘志を去勢する。我々にとつて最も必要なものは何よりも「憎み」の精神だ。その精神を倦むものは我々の根本的な害敵だ。

供へた男。わしは憎む。たましひの底から憎む。生命を賭けて猛く憎む！

聲。何を憎むのだ。敵は何だ。

供へた男。惡を――靈魂を亡ぼす暗黒を！

（沈默）

供へた男。ブルジョアの惡を、プロレタリアの惡を、わし自身の內の惡を――一切の人間の惡を憎む。惡の觀念を憎む。

一切の惡しきもの――それが我々の敵だ！

山川。（嘲笑する）ブルジョアの惡を憎む。だがブルジョアは憎まない――からだらう。はゝゝゝ

供へた男。君の內の惡を憎む！

山川。……

供へた男。なかんづく善人の內の惡を憎む！何故ならそれは美しいたましいを亡ぼす惡魔だから。

山川。俺の內の惡を憎むなら、俺を憎め。ブルジョアの惡を憎むならブルジョアを憎め。

供へた男。人間を憎むことはできぬ。人間は價値だ。價値の本體だ。わしは限りなく人間を愛する！若し君がそれを憎むなら君は何を愛するのだ。

山川。民衆を――プロレタリアを――虐げられて居る勞働者を！彼等を救へ！

供へた男。救へとは何だ？

山川。救へとはパンを與へることだ。彼等を物質的窮乏から解放することだ。

供へた男。救ひとは永遠の生命を與へることだ。靈魂を惡から解放することだ。

山川。パンがなくて生命があるか。

供へた男。靈がなくて生命があるか。

山川。人間は何を喰つて生きるのだ。

供へた男。靈の息のかゝつたパンを喰つて生きる。

山川。先づパンを與へよ。さうすれば彼らは靈の息を吹きかけるだらう。

供へた男。先づ靈氣をあたへよ。さうすればそれがパンを創造する。

山川。靈からパンを創ることができるか！

供へた男。然り。實にそれができるのだ！

聲々。つくつて見せろ。パンをつくつて見せろ！

供へた男。わしにはつくれぬ。靈が自分でつくるのだ。

（嘲笑の聲）

山川。靈とは何ものだ。

供へた男。生命の太源だ。我らに生命を與へた者だ。

聲。それは母だ。……産むだものだ。

供へた男。母をつくつたもの、母の乳房をつくりだしたもの、母に生みの本能をあたへたもの！君たちに母の乳房に吸ひつく本能を與へたもの！

山川。さうだ。その者が俺たちに飢えをあたへる。故に我々の飢には權利がある。俺たちはパンを獲ねばならぬ。

供へた男。パンは獲るのではない。與へられるのだ。その者が我々を養ふのだ。

山川。では何故我々は飢えるのだ。

供へた男。その者を信じないから。その者が信ぜよ。その者がパンをあたへてくれる！

（沈默）

供へた男。母親に生みの本能を與へたものは乳房をつくつてゐる。若し乳房が無かつたなら君たちはどうして生きて來たのだ。君たちが勞働者の權利を叫ぶその舌も、鋭い頭腦も、劍を握る手も、否君たちの存在そのものが與へられたものなのだ！

山川。我々は偶然によつて生れたものだ。我々は生きたい。それが我々の本能だ。その外のものは我々は知らない――生命を與へた神――そんなものを我々は信じない。

供へた男。神は在る！すでに我々が在ることを信じるならば、神が在るとはそれよりもつとたしかだ。君が神を否定するその理性も神の裡に在るのだ。風が空にあがつてゐるのは風の力に依る。その風が風の存在を否定することができるか？ 山川。我々は見へないものを信じない。我々は科學を信じる。それで自然を征服する。

供へた男。君は死なないことができるか。

山川。……

供へた男。わしは科學の權利の限界を知つた。實在は――生命は科學でとらへることはでぬ。我々の限りなきたましひで――

山川。たましひとは何だ。

供へた男。たましひとは我々の生命の本質だ。價値の[illegible]だ。いつまでも死なない實在だ。

山川。我々はやがて死ぬ人間だ。それでいゝ。我々は物質の偶然の結合だ。それでいゝ。神とたましひ――そんなものが我々の現實と何のかゝはりがあるのだ。抽象的な觀念とたはむれることは君たちに任せる。俺たちには生きた問題がある。神はもう死んだ！

供へた男。神は生きてゐる！現に生きてはたらいてゐる力だ。恐るべき力だ！

山川。君は神を見たのか。

供へた男。然り、わしは見た。信仰によつて見た。

山川。君は神を經驗できるか。

供へた男。日々刻々經驗する。わしのたましひの內に今も活きてゐる。

聲々。神は死んだ。神は死んだ。

供へた男。神は生きてゐる。あか〳〵と光つてゐる。わしの心に「道」の意識があることが歷然たるやうに歷然と。諸君恐れよ。裁く神が生きてゐるのだ！

山川。神は恐しくはない。恐るべきのは社會組織だ。それが我々を締めつける。それが我々を壓しつぶす。それが我々の××だ。此の組織を××する時初めて我々の救ひがある。

供へた男。惡が、我々の呪咀だ。惡を征服する時初めて我々の救ひがある。

山川。階級を壞せ。それが我々に惡を犯させるのだ。

供へた男。利己心を拔け。それが階級をつくつたのだ。

山川。舊い制度を××せよ。新しい制度をつくれ。×××××組織を。その組織の中では最早や×は存在しない。それ

は地上の樂園だ。

供へた男。否内に惡の根が拔けない限り必ず外に惡の樹が生える。異つた形で階級ができる。強者が弱者を支配する。

山川。どうして惡の根を拔くのだ。

供へた男。信仰の力によつて。

山川。それはキリストの道だ。あの失敗した、二千年の歷史がその無力を證據立てた「福音」だ。

供へた男。實に彼が言つた通りだ。今も猶此の外に人類の救ひはない。――永久にない。

聲々。駄目だ。駄目だ。迷信だ。

供へた男。内から個人の靈魂を救はずして、外から一度に人類を救ふことができる――これこそ不可能な迷信でなくして何だ。愚かな、不條理な、企てでなくして何だ。

山川。何時人類の救ひは來るのだ。

供へた男。個人の靈魂が救はれつくす時。

山川。(激怒する)それまでの無數の犧牲者はどうするのだ。答へろ。無責任者が!

供へた男。(瞑目する。)人類の連帶責任だ。

聲々。それは我々の言葉だ。我々の言葉を盜むのだ。

供へた男。黙り。君たちの發明した言葉だ。だがこれは最も深い、最も宗教的な意味で用ひられねばならなかつた。同胞の内一個の靈魂でも救はれないものがある時人類の救ひは成らないのだ。一人の同胞が悩む時全人類が共に悩まねばならぬ。自ら救はないたましひを救ふことはできぬ。我々はおまへたちのたましひを救はねばならぬ。

同胞のたましひの救ひのためにはたらき、我々は救はれない同胞の[illegible]らねばならぬ！

山川。自ら救はないものは救はれることはできぬ。さうだ、それ故に我々は我々を救ふために努力するのだ。闘つて我々の權利を獲得するのだ。我々はブルジョアの犧牲に甘んじてはならぬ。犧牲は奴隷の道徳だ。否最も卑しい罪惡だ。

供へた男。犧牲は自主者の最上の德だ。最深の勝利だ。

山川。たゝかつて獲よ。自由は戰ひによつてのみ得られるのだ。

供へた男。此處に一人の同胞がその兄弟をなぐつてゐる。其の時平和はどうして得られる。それはなぐられてゐるものがなぐり返すことによつてか。否、なぐつてゐるものがなぐることを止める事によつて！剝がれ、殺されてゐる動物の事を思へ。彼等の自由はどうして得られる？彼等が人間よりも強くなり、自らたゝかつて、その自由をかち得る時があると君たちは信じるか。實に虐げてゐる人間が虐げることを止めない限り、永久に彼等の自由の日は來ないのだ！　人間に於ても同樣だ。强者と弱者との差別は永久にある。强者が自ら虐げることを止めない限り、弱者に自由の來る日は決してない。

山川。いつ强者が自ら虐げることを止めるのだ。それを手を拱ねいて待たうと言ふのか。

供へた男。自己犧牲によつて彼等のたましひを買へ。内から彼等を征服せよ。それこそ眞の勝利だ。それこそ眞にたゝかつてかち得た自由だ！

山川。勝利の日はいつ來る？其の日が來るまではどうするのだ。

供へた男。人類が人類自らを救ふのだ。我々は同胞だ。我々の内一人惡を犯す者がゐる時我々全體が苦し
ならぬ。ブルジョアの惡を我々が負はねばならぬ。

山川。馬鹿な！ 權力を獲よ。强者となれ。ブルジョアよりもより强くなつて彼等を仆し、彼等に代つて支配せよ。暴力を以て、血を以て、鐵を以て彼等を征服せよ。

供へた男。征服されるものが我々の兄弟だといふことを忘れるな！ 我々と同類、血肉を別けた兄弟、我々自身——暴力は兄弟殺しだ。自殺だ！

磐々。敵だ。畜生だ。彼等を×せ。彼等を罰せよ。彼等に復讐せよ。

供へた男。暴力は自分自身のたましひを殺すのだといふことを思へ！

磐々。たましひは要らぬ。たましひはない。

山川。暴力は我々の唯一の武器だ。暴力なくして戰勝は無い。

磐々。××だ。××だ。

供へた男。否もつと鋭い、神聖な武器がある！

磐々。それは何だ。それを示せ。

供へた男。拒絶だ。自己犧牲による惡の拒絶だ。

（沈默）

供へた男。君たちは何故その武器を用いぬ？ 君たちは何故惡と協働するか？ 君たちがかくも非難するブルジョアの惡と何故妥協するのだ？ 何故断乎として之れを拒絶しないのだ

羣。我々は戰える。我々は死ぬる。

供へた男。何故死を賭してそれを拒絶せぬのだ。それこそ諸君の非難を實にするものではないか。

（沈默）

供へた男。諸君の非難とは單に口舌の罵詈のことか？　諸君が彼等の惡と協働するならば、諸君はすでに彼等に屈服したものだ。諸君は彼等を罵詈せずとも斷乎として死を賭して彼等との協働を拒絶したならば、勝利は諸君のものではないか。暴力を用いて自分を汚さずに彼等を征服することができるではないか。それを敢えてなし得ずして、何處に諸君の權威があるのだ。

（沈默）

供へた男。わしはいふ。わしは死を以てわしの道を守るものだ。敢えて問ふ。諸君は諸君の運動のために死をかけてゐるのか？

（沈默）

供へた男。諸君の輕蔑するブルジョアの××××××でさへもたゝかひのために死を賭けてゐる。諸君にしてその覺悟なくんば、抑も運動とは何か。非難とは、暴力とは何の意味か？

羣々。我々は死を賭けてゐる。決死の覺悟だ。

供へた男。よし。諸君にして眞にその覺悟があるならば勝利は諸君のものである。諸君は暴力を用いずして自己を犧牲にせよ。死を以て彼等の惡と協働することを拒絶せよ。彼等のために××に行くことを拒絶せよ。彼等の工場に行くことを拒絶せよ。××××をつくるために××を拂ふことを拒絶せよ。彼等のために異邦人を脅かす×××として×くことを拒絶せよ。

聲々。我々は捕へられる。牢獄にぶち込まれる。

供へた男。諸君大擧して牢獄に行け。若しそのやうに多くを容れ得る牢獄があるならば！ 其處で諸君は食を斷て。彼等がそのやうに多くの餓死を観過し得るならば！

聲。我々は縊り殺される。

供へた男。ほゝえんで首をつらねて死に就け。若し彼等がかくも多くの聖なる人々を絞殺することができるならば！

だが彼等にはそれはできない。彼等は自縄自縛する。彼等は虚僞の彼等の「文明」を持つてゐる。新聞紙を、輿論を、「××政治」を、「人道」を持つてゐる。それが此の事實を持ちこたえることができぬ。彼等の虚僞の文明と共にその組織が内から崩壊する。

（沈默）

供へた男。それればかりでない。それよりも重大なことは、彼等の中にも「人間」が棲むことだ。靈魂が醒いてゐることだ。かくも大きな道徳的ショックが彼等を動かさずには置かぬ。死を以て惡を憎んだ無辜の人々の殉難が、それが寸鐵を以てこの反抗をも含まない柔知なものであればある程、彼等の「人間」を烈しく鞭打ち、彼等のたましひを買ふだらう。人類の文化史は、たとひそれが假面的とは言へ、もはや正面から正義の敵として標榜することを敢さぬ程にはすゝんで來た。それは眞實の眞理のかくしてもかくし切れぬ權威なのだ。眞理はどのやうにふれてもふれる者を必ず切らずにおかぬ劍の如くだ。しかも彼等はふれずにはゐられぬ。彼等は狡く、卑怯にふれる亦も知れない。しかも傷かずにはゐられないのだ。況し一彼等の人間性が内から反逆する。彼等は自ら崩れずにはゐられぬ。諸君はすでにたゝかひのために死を賭けた。しからばそのたゝかひを最も有利にたゝかへ。この死を最も有效に死

れ。そして最も輝かしい勝利を得よ。彼等に諸君の死骸に汚名を衣せる口實を得さすな。彼等をして彼等の最もいとふ明らさまなる人道の敵たらしめよ。彼等はそれに堪え得る程强者ではないのだ。

山川。諸君、宗教家の空想に欺かれるな。其處には現實の洞察が微塵もない。民衆は生きんがために鬪ふのだ。死をかけてたゝかふことを彼等に期待することはできぬ。死をかけるものは我々小數の先驅者だけだ。彼等は只我々について來るにすぎぬ。しかしその大衆の力なくしては我等の事はならぬ。我々は自己犧牲に甘んずる。しかし大衆にそれを期待して事をくはだてる事は思ひも寄らぬ空想だ。大衆にその決心があるならば××はすでに疾くに成就してゐる。彼等は散り易い羊の群に過ぎないのだ。其處に問題がある。戰術がある。いかにして弱き彼等を結束せしむべきか。大衆の心を支配し收攬すべきか。しかもブルジョアの獨裁治下に於て如何にして我等の實力をつくるべきか。いつ我等はいよ〳〵立つべきか。其處に智謀があり、機微がある。諸君が時機を誤つて立つならば、諸君はいたづらに敵の爪牙にかゝつて引き裂かれるにすぎぬ。小數の我等が自己を犧牲にしても大衆は我等については來ぬ。

（沈默）

山川。それにも況して愚かな空想は○○の否定だ。○○は武器の本質だ。たゝかひのモーターだ。運命を決するテコだ。○○をはなれて一切の戰術は成立せぬ。すべての運動に活を入れるものは實に○○だ。思へ。事柄はすでに戰である。戰ひは敵を倒すことを目的とする。戰ひに○○を用いるただつて？　馬鹿な！　それなら初めからたゝかうな。それは去勢した馬に子を生ませやうとするよりも愚かだ！

供へた男。否、自己犧牲は暴力に無限にまさつて居る。死をかけないなら暴力を無力なコケ威しだ。死をかけるなら自己犧牲でもできる！

山川。すでにたゝかひだ。敵を生かすのが目的ではない。

供へた男。敵を生かして勝て。我々の兄弟を悔い改めしめよ。諸君の勝利を輝かしい善の勝利たらしめよ。

山川。敵を生かすな。悔いあらためしめな。敵を屠れ。敵を罰せよ。

擊々。敵を罰せよ。復讐せよ。

山川。俺は諸君の聰明を信ずる。諸君は詩的榮辭に欺かれはしない。諸君俺れは宣言する。無抵抗主義者は我々の敵だ。ブルジョアやアナーキストと同じく我々の敵だ。彼等は我々の闘志を挫く。何よりも大事な反抗的精神を失勢する。彼等の精神が我々の間に浸潤することは恐るべきだ。それは我々の闘志を蝕むバチルスだ。俺は繰り返していふ。我々プロレタリアを救ふ道は只一つあるのみ。それに妨害となるものゝは、それが何ものであるにもせよ。我々の敵だ。我々の敵を追へ。無抵抗主義者を追へ！

擊々。我々の敵だ。彼等を追へ！

山川。彼等は民衆に奴隷の道を教へるものだ。

兄弟甲。我々は自主の道を行くものだ。最高の自主の道は自己犧牲だ。

山川。彼等は感謝して受ける。我々は反抗して奪ふ。その間に協働の餘地はない。

兄弟乙。我々は惡を拒絕する。死を以て惡と協働せぬ。

山川。民衆を蟲のやうに火の中に飛び込ませやうとするのだ。彼等には民衆への愛がない。只貴族的な自己興奮に燃えてゐるのだ。

兄弟丙。我は決して興奮しない。我は反対に沈靜する。興奮するものは却つて汝たちではないか。

兄弟丁。我々は決して貴族的ではない。我々は民衆の僕に甘んするものだ。民衆を見下ろし、之を支配せんとするものはむしろ君たちではないか。

聲。（アナーキストの中より）さうだ。最も不遜な、指導者らしい顔をするのは彼等だ。

聲々。（之に應じる）何だと。默れ。裏切者。スパイ奴。

（會場次第に喧噪に陷る）

兄弟甲。我々は晝も夜も勞働する。常に何物かを建設する。決して何ものをも破壞しない。

聲。我々は破壞する。徹底的に破壞する。

兄弟乙。我々はすべての人間を愛する。決していかなる生命物をも憎まない。

聲。我々は憎む。我々は復讐する。

兄弟丙。我々は惡をもつて惡に抵抗せぬ。我々は寸鐵をも用ひぬ。

勞働者A。俺達は鐵拳を用いる。（いきなり兄弟丙を打つ。）この通りだ。我々は石を、劍を、××××××を用いる。

兄弟乙。諸君は自分のたましひを滅ぼすものだ。

勞働者B。生意氣な。（兄弟乙を打つ。）

兄弟乙。諸君は兄弟殺しを企てるものだ。

聲々。何だと。小癪な。やつちまへ。

（二、三の勞働者兄弟乙を打ち、地に引き倒す。兄弟たちそれを制しやうとする。他の會衆兄弟達を取りかこむ。）

聲。やつつけろ。やつつけろ。

供へた男。（一語をも發せず、瞑目して立つ。）

（群衆兄弟たちに向つて打ちかゝらんとする。が此時N子が突然前に走り出て叫ぶ。）

N子。皆さん。お止しなさい。抵抗しないものを打つのは卑怯だ。

（沈默）

N子。暴力は用いて××。私は暴力を××する。だが對手は抵抗し得ない弱者なのだ。といふもより自欺者なのだ。私が皆さんに打つことを止めるのは彼等の無抵抗を尊敬するからではない。むしろ輕蔑するからだ。皆さんの神聖なたゝかひのための暴力をこんな無力な、虚僞な、柔弱者を打つために用いることによつて汚してくれるな。彼等に對してはさげしみを含んだあはれみで以て充分ではないか。

（沈默）

N子。（默々として佇立してゐる供へた男に向つて叫ぶ。）僞善者！

供へた男。（沈默）

N子。わたしはあなたを憎む。心の底からあなたの虚僞を嫌惡する。

供へた男。（沈默）

N子。（面に朱をそゝぐ）何故あなたは立腹しないのだ。何故私の罵詈に反抗しないのだ。

供へた男。（地にひざまづく）

N子。あゝ、いやだ。わたしは唾が吐きたい。

供へた男。わしは人間をあはれむ。——わたし自身をあはれむ。

N子。さうまでして自分を善人と思ひたいのか。

供へた男。以ての外だ。わしが反抗しないのはどんな目にあつても當然だと思ふからだ。

N子。(ギクリとする)まだ怒る事ができないのか。

供へた男。飛んでもない。わしは腹が立つから自分をあはれむのだ。わしはどんな目に遇つても不服の云へないことを知り抜いてゐる。それだのに私は腹が立つのだ。わしはそれが殘念だ。人間の虫のよさ——不謙遜なことをあはれむのだ。

N子。……

供へた男。理性のあるものは考へるがいゝ。我々の不服とは一體何んだ。我々は他の者に苦痛を與へた時それと同じ苦痛を受けても不服が言へるだらうか。我々は何萬の動物を殺し、皮を剝ぎ、乳を搾り、酷使して生きて來た。それだのに今わしが打たれるのが何で不服なのだ。罵られる位はむしろ當然すぎる。わしはたとひ殺されても堪えねばならぬ。それがたえられぬなら何故他のものにそれを堪えさしたのだ。我々は心から他人の幸福を祈つたことはない。それだのに他人が自分の幸福のために働かないのが不服なのか。不服とは單に己れの欲望がかなはぬといふことか。それなら正義の名によつてたゝかはぬがいゝ。若し自分が他のものに與へたよりも以上の苦痛を受けてゐると信じるものがあるならば、その人こそ正義の名によつて不服を云ふがいゝ。

(沈默)

供へた男。わしが他の生命物に與へた害惡は私が七度殺されてもまだあまりある。わしは不服からは出發できぬ。わしは懺悔から出直さねばならぬ。しかもわしは單に打たれ、罵られたゞけで立腹し

が、私の不謙遜が限りなくあはれまれる。

（沈默）

供へた男。あなたがたの一人がさつき云つたのは本當だ。私たちとあなた方とは根本的に道がちがう。私たちは先づ懺悔する。どんな罰も當然として受ける。。それがむしろ寛大なことを感謝する。それ故にせめて奉仕してつぐなふのだ。私たちは他の生命物を犧牲にした。だから自分を犧牲にして奉仕するのだ。一切の生あるものに自分を供へるのだ。

山川。（いら〳〵して叫ぶ）もうよろしい。彼等は神のやうだ。自分の胃の飢餓よりも罪の意識の方が強く感じられるらしい。彼等には自分の子供の病氣よりも、牛や雞のいのちの方が重く感じられるのだらう。我々はたゞの人間だ。我々は人間として自然に欲望する。我々は飢えた時には牛を屠つて喰はう。病氣の時には雞を絞めてソツプをつくらう。それでいゝんだ。

供へた男。實にさうだ。我々は共喰ひしなくては生きられないのだ。互いに犧牲になり合はなくては——それだからこそもつと謙遜になりたい。

山川。不自然な、自僞的な精進は小數の神經過敏な彼等の道だ。我々のかゝはるべきことではない。

供へた男。君たちの憎みの發情は果して自然で、人間らしいだらうか。君たちは子供を失つて泣いてゐる母親を見ても、それがたゞブルジョアの婦人であるといふだけで同情しないのだ。君たちは相手の娘がどの階級に屬するかをしらべて後に戀ひをしやうといふのだ。運命によつてブルジョアの家に生れた赤ん坊が、勿論自分の善惡を考へる力もなしに、乳母車のなかで眠つてゐる。すると君たちはこの赤ん坊を憎まうといふのだ。ある青年が不治の病ひに陥つ

てペットに絕望して橫たはつてゐる。それでも君たちはその青年が單にブルジョアであるといふだけで同情しまいとするのだ。――すべてこれらのことは果して自然であらうか。人間らしいだらうか。

山川。（壇の上に驅け上る）諸君。我々は精神的貴族の道を說くのを聞くためにこゝに集りはしなかつた。我々には現前刻下の急務がある。こゝはプロレタリアの、利害を同じくするものゝ會合だ。我々には一つの定まつた、確乎たる、拔くべからざる理想がある。何が理想であるかの論議はもはや必要でない。我々と目的を同じくし、方法を同じくするものゝみが我々の同志だ。我々は我々の同志でないものゝ退場を要求する！

（贊成々々。さうだ〳〵。然かり〳〵等の叫び場內の到る處から起る。）

山川。我々はアナーキストと無抵抗主義者の即刻の退場を要求する！

聲々。アナーキスト退場せよ。無抵抗主義者退場せよ。

山川。滿場にはかる。此の要求に贊成の諸君は起立せよ。

（アナーキストと供へた兄弟たち等を除いた殆んど全部起立する。）

山川。決議によつてアナーキストと無抵抗主義者の退場を要求する。

聲々。アナーキスト退場せよ。無抵抗主義者退場せよ。

（これに應じてアナーキストの團體より專橫だ。多數者の橫暴だ。多數決には反對だ。等の叫び聲一齊に起り、會場混亂に陷る。）

一人のアナーキスト。（ビール箱の上に立ち上る）諸君、これが一切の會合を無意味にする最も愚劣なる常套手段だ。すなはち多數決といふものゝ卑怯な不條理な壓迫だ。我々はどこまでも多數決には反對する。我々は個人の絕對自由なる聯合を主張する。見よ。我々の自由はふみにじられた。單なる數學的多に何の權利があつて我々を壓倒するの

だ。

（「アナーキスト退場せよ。」の叫び聲場内に滿ち、演說者の聲が聞こえない。アナーキスト止むをえず靜かになる。）

他のアナーキスト。我々は退場しやう。我々は決議は認めない。だが我々は彼等を無視する。我々の自由意志で彼等と斷つて退席する。彼等と我々の道は異なる。我々は去つて我々の道を取らう。今我々は退席する。だが諸君記憶せよ。諸君は斷じて自由の戰士ではない諸君の本質は支配だ。中央集權だ。諸君は民衆と共に歩むものではなく、傲慢にも民衆を羊のやうに散らし、また集めやうとする僭越なる指導者だ。我々は單に僭冒者として諸君を認める。諸君の××來た時諸君は第二の命令者となつて民衆を××するだらう。諸君我々の敵だ。我々は敵とはかるべき何事も持たない。故に我々は自ら退席する。アナーキスト諸君、我々の此の愚劣な、窒息させる會場から街頭に出やう。

（アナーキストの團體席を踏み鳴らして一齊に退場する。）

（沈默）

山川。（冷靜に）決議は無抵抗主義者の退場を要求する。

供へた男。諸君は間違へてゐるやうだ。我々は無抵抗主義者と名のりはせぬ。だが諸君は我々と談議することを好まぬやうだ。我々はもはや云ふべきことを云つたやうにおもふ。我々の力の足りないのを恥ぢる。我々は瞑目する――我々は合掌して此處を去らう。

（供へた兄弟たちしづかに退場する。）

山川。諸君、俺は諸君を愛する。民衆を愛する。善きにつけ惡しきにつけ[illegible]諸君もはや何事に

逃はされるな。一つの目的に、それを遂げる一つの方法に眼をつぶつて集中しやう。正か不正か俺は知らない。だがそれは諸君を解放する唯一の道なのだ。我々は死を賭けて勇ましくその道を進まう。

聲々。我々は死を賭する。我々は勇しく進まう。

山川。諸君靜肅に――どこまでも愼重に。俺は敢えていふ。諸君は今日は工場に行き給へ。家庭にかへり給へ。今は――涙の谷に、軛の下に。そして忍べ。今はその時機でない。やがて黄金的の機會が來る。俺はそれを見逃さぬ。その時こそ諸君は一齊に立ちあがれ。すべてをなげうつて街道に出よ。いのちも妻子も惜しんではならぬ。その時大衆はもはや我々のものだ。そして我々の日が來るのだ。だが今は――今は諸君工場へ行け。涙を呑んで機械のそばに忍んで働らけ。貧しい竈の下で泣きつゝ火を焚け。さあ諸君――他に道はないのだ。

聲々。工場へ行け。工場へ行け。家へかへれ。赤ん坊に飲まさう。

（會衆一同或ひは口々に叫びつゝ、或ひは悄然として默しつゝ退場。）

（沈默。急にしんとする。）

同志の女。（始終沈默して一隅にうづくまつて考へてゐたが、此の時思ひにたえぬやうにふら〳〵と立ち上る。）大きななやみと劇しい動き――（間）ともかくも……ともかくもたましひを大事にせねばならぬ！

山川。民衆は飢えてゐる。人々はもがいてゐる。鞭の下で忍んでゐるのを聞け。赤ん坊の泣くのを聞け。

同志の女。彼等を救はねばならぬ。虐げられたものゝ味方となつてはたらくこと――不幸なものを慈しむ母となることが女の使命だ。

山川。さうだ。わけても今の時代では……心に愛あるものは勞働運動に加擔せよ。勞働運動は實に時代の正義だ。

同志の女。だが永遠の正義は？　暴力と權謀と憎惡とがそれを汚さずにすむであらうか？

山川。ためらうな。勞働運動は一切をジヤスチフアイする。何故ならばそれは唯一の救ひの道だから。

同志の女。術策と流血とがたましひを裏切らずに置くだらうか？

山川。斷じていふ。今の時代に生きて我々の運動に味方することを避けるものは愛の人ではない。決して愛の女ではない。

同志の女。何よりも、何よりも――呪咀と破壞との精神が「女性的なるもの」のたましひを亡ぼしはせぬであらうか？

山川。彼の男に迷はされな。奮ひ立て。新しい愛の女性の型を創れ。それが時代を生む母だ。

同志の女。（一瞬間立ち止つて諦聽するやうに見える。しかし次ぎの瞬間には再び動搖した不安と夢想との表情になつてふら〳〵と歩み出す。）彼の人の言葉が強く耳に殘つてゐる。それが私のたましひにひゞく。惡との非妥協の道……

（黑川いら〳〵して同志の女の歩みに從いて動く。N子眼を光らして黑川の樣子を注視してゐる。）

同志の女。自己犧牲の道……

山川。（動搖して）古い、失敗した道だ。奴隷的忍從の態度だ。卑怯な弱者の……

同志の女。内面的征服の道……兄弟殺し……兄弟殺し……

山川。（叫ぶ。）しつかりしろ。彼があなたの胸に毒箭を射込んだのだ。

（此の時會場の外でプロレタリヤ萬歳を唱へる聲。）

同志の女。（立ちすくむ）

山川。奮ひ立て！　あの同志の叫び聲をきけ。女の同志の使命は重い――それは我々の男子の勇氣を奮ひ立たせて、よ

ろこんで死に赴かしめる！

同志の女。たましひのすくひと同胞のすくひと……私は彼等を救はねばならぬ。……でも私のたましひを守らねばならぬ。わたしのたましひを……（ふら／＼と出て行く）

山川。（一瞬間沈默）愛の火が彼の女をなやますのではないか。（考へる。急に動搖して彼の女の後を追ふ。）彼れが魔薬をふりかけて行つたのだ。街頭へ行け。群衆の中へ――叫喚が、熱風が彼の女の醉ひをさますだらう。（出て行く。）

N子。（たゞ一人がらんとした會場の一隅に立つたまゝ殘る。）彼は彼の女に嫉妬して居るのではなからうか。（一瞬間沈默。やがてよろめきかけて、わづかに椅子に身を支へる）

（再び戸外で萬歳を叫ぶ群衆の聲。）

（つゞく）



# この三つのもの

佐藤春夫

## 八

默つてゐる赤木に再び口を開かせるため北村は言つた——
「今もいふとほり、これをしほに、僕は以前から考へてゐる事を決行するのだ」
「フム……」赤木は北村の重みのある聲に壓力を感じた。さうしてそれに耐へるやうな聲でさう返事をしてから。
「といふと、つまりはお雪と結婚生活をするつもりなのだね——別に結婚などと言はず同棲でも同じことだが」
「いや、いや。それはまだ決定した事ではない。この場合必要のない問題だ。第一お雪の意見もあることだし。——尤も、お雪が別だん不賛成を言ふわけはないが。さうしていづれ同棲するやうな結果にはなるだらうが。何にしても、それはこの際別の問題としてそれの如何に拘はらず僕はお八重とは別れるのだ。それが双方のためなのだ。これやお八重はいろ／＼と悲しがるかもしれない。ほんの當座の事だ。

女の涙などは一々採り上げる値打はない。それに就てはユリ子だが……」

「子供のことを、お八重は、くれぐれも言つてゐたつけ。ユリ子のことを思つてみてくれと……」

「あれは當分はお八重のところへ預けて置くより外に仕方がない」北村は赤木の言葉には耳を借さずに、彼自身のいふことを言ひつづけた「お雪は子供の世話などの出來る奴ではなし、たとひまた出來るとしてもこれはやはり、どうも變だからな。僕ひとりだとすればなほのことどうにもしようがない。それに第一、お八重はあのとほりなのだからユリ子を放すことなど思ひも及ぶまい」

「それはさうだ」

「そこで君に聞きたいのだが、君はお八重と一緒にユリ子をも世話してくれるかね。蟲のいい話だが。――無論、當分だよ」

「…………」

「いやか。それでは困るか」

「いいや。そんな事は別に一向困りはしないのだが、――お八重を世話していいといふつもりのなかには、初めつからユリ子のことも考のなかには入れるべきだらう。」赤木はさう言つてから、いつの間にかもうお八重が赤木の妻或は被保護者となつてゐるやうな北村の口吻に對して、狼狽とも恥羞ともつかないものを感じながら、しかしいつの間にかそれを受け入れてゐる自分にも氣づくのであつた。さうして言つた「しかし、さういふことはさつきも言ふとほり、ここで我々ふたりできめるべき事ではないのだ」

「それはさうだが、僕にはお八重の心持は大てい察しがつく。あれは君を好いてゐるんだ。尤も別に深い意味ではなく、

夫の友人といふ意味かも知れないがね。だから、あの女が今更僕の女房から君の女房になるのは世間體が惡いなどといふ感情さへ強くなかつたら、君の妻になることはいやではないと思へるのだ。それにさういふ點については僕からあれによく話をして、世間體などとそんなつまらないものはどうでもいいことは解らせるつもりだが……」

「さうだよ。我々にとつてこそそんなことは何でもない。しかし女として普通、隨分氣になることに違ひないのだから」

「そこで僕は望むのだが、出來ることならあの女と君とが、單に同棲とか共同生活とかいふようなものではなく、形式的なことだが結婚の式を上げて友人たちには披露でもするといふやうなことでもあれば、さうして僕がそれに立會ひでもすれば、これは社會の目から見ても、その秩序から言つても、新奇には思へても不合理ではなからうと思ふ。さういふ莫迦々々しいことはいやだと、君さへ思はなければだね」

「ちつとも莫迦々々しくはないよ。さう場合には寧ろ僕はそれを望むね」赤木はふと一瞬間その心のなかに、お八重と彼自身との妙な緣組を奇異がりながらもそれを祝ふために集つた彼の知人たちを、賑やかな幻に見た。さうして言つた

「儀式といふものも決して惡いものではないよ。それはそこへ列席した人たちがみんな保證人になつてくれるやうなものだからね。僕は今まで保證人なしの契約には懲りてゐるからね。父や母にだつて今度はよく相談をしようと思ふ。勝手にひとりで決めてしまつた形になつては、いろいろの機にあまり責任が苦しすぎるよ。勿論、もう勝手なことばかりしとほして來た僕だから、兩親だつて今さら僕に反對する筈もないといふ見込みをつけた上のことだけれど。……とにかく、さうやつて連帶責任者になつて置いてもらひたいのだ。今さら卑怯にづるい生活態度のやうだけれど……」

赤木の口からは、全く關係のない思想が出さうになつてゐた。それは彼が妹の美代子のことを思ひ出してゐたからで

ある。さうしてお八重を妻にしようとする時の相談よりも、寧ろその自然の順序として、彼が美代子を離縁した事情や、また北村がお八重と別れることになつた次第を、あの母やあの父に明すことの方が苦痛だと思つてゐるうちに、赤木はおのづと口を噤んでゐた。

「さういふ風に君の腹がきまつてゐてくれれば有難いのだ」。北村は言つた「僕はすつかり安心できる。君の家庭でももし何か誤解を持つやうな點でも出來るやうなら――たとへば、僕が君に押しつけたとか、君が僕を欺いたとか、そんな誤解でもありさうだつたら、僕は遠くつても君の田舍まで出かけて行つて、正直になりゆきを僕の口から話してもいい。要するに僕としては、お八重が僕の名ばかりの妻であつたばかりに、君の妻になつてから後、社會や家でまで何か日かげ者のやうな氣持をさせたくはないのだ。そこでユリ子だが、ともかくもお八重のところに置きたいものだ。當分の間でいい――少し大きくなつて母親の手を要しなくなり女學校へでも入れるやうになれば、誰か適當な監督者のゐる家へでも托してもいいわけなのだからね。それ程になればあとはどうにだつて勝手に大きくなるさ。尤も君はひよつとすると子供が慣れると好きになる質かも知れないね――僕は駄目だ！子供はもう眞平だ！」

「ハ、ハ、ハ」赤木は思はず笑つた。北村が子供のことを吐き出すやうにさう言つたのが、あまり唐突で今までの眞直な口調の單調を破つたからだ。

「フ、フ、フ、フ」北村も氣がついたやうに自ら笑つて「それでもまだしもお八重よりは子供の方がいいね。この頃ぢや、お八重に對する義理だと思つて、時々子供をあやして見たりするよ、お八重の見てゐないところでね。見てゐるところぢやどうしたつてやれない。お八重がつけ込みさうで――本當に子供が可愛くなつたかなどと思はれちや、やり切れないからな」

北村はまた、赤木に對して、お八重の養母の事を言つた。この年寄りまで赤木に世話させるわけにはいかない。あれは別に田舍に身よりがあるのだが、その方へ行くだらう。北村のところへ來たのだつて、初めつからその約束ではなかつたのに、途中でだまして入り込んで來たやうなものだ。だから、お八重が赤木のところへ行くやうな時には、無論、北村が注意をして田舍へ歸らせる。それでなければお八重も子をつれ親をつれてまで行くのでは、氣が引けるだらうから。——北村はかういふ風に、さういふ點まで行屆いて考へてゐた。北村はひとりこの年寄りだけではなく、お八重の身うちの人たちを輕んじまたうるさがつてゐた。さうして北村自身も今まではあまり寄せつけないで居たのだから、赤木のところへお八重が行くとしても、氣の弱い赤木にはうまく應待出來まいから、怜まれ序にお八重の身内はみんな北村自身が引受けて撃退しなければいけない。さうしてお八重は寧ろ、北村の家のものとして赤木のところへ嫁くのがいい。——北村はそんな點まで話をした。

しかし、赤木はお八重の身内に就ては、さつき北村の告白のなかで知つた以外に、殆んど豫備知識もなかつたし、またそれ等の人々と交渉を持つやうになることがあるとしても、それはまだ今日や明日といふ時機ではないと思ふと、それらの北村の細心な注意も別に緊急な問題とも思へなかつた。さうして赤木はこの奥まつたさなくとも暗い座敷にだんだん日が暮れて、あたりが殆んど黒くなつたのに氣がつきながら、時の移るのをも忘れて話してゐる北村の言葉には只輕い返事を與へてゐた。お八重の身内のことを聞くにつけて赤木には寧ろ今は、美代子の身内のことがそれらの人々の顔までが思ひ浮んで居るのであつた。——美代子の母、祖母、祖父など。どちらかと言へば朴納な時代後れのした彼等。不羈放縦な美代子の血族とは思へないやうな三の人々に、久しぶりに行つて、突然、彼等を不安にする話を聞かせ

ねばならないと思ふ事は、赤木の心を重くした………

「で、君は、その時機などに就て考へてゐるかね」

「え？　時機とは？」

「お八重といつ結婚したらいいといふやうなさ」

「それは僕ひとりの考へできめるわけには行かないぢやないか。自づとその時が來なければ」

「それぢや、いつになつたら來ると思ふ。積極的に君がその意志を働かすのと、成行き――といつたところでどうせ多少の君の意志がいるわけだが、君の意志の多少によつて、つまりは時機も自ら決まるわけだが。それによつて僕も考へなけやならない。――君のところへ行くまでの間のお八重の生活の事や何かをね」

「さ。僕はまだそこまでは考へてもみなかつたが。時機と言つて、少くとも半年ぐらゐは經たなけや。僕もひとりになる。彼女もひとりになる。さうして半年ぐらゐは親しく往き來してみて、出來るだけ自然に彼女の意志がわかるやうになつてから初まるべき話だらう。まあ半年だね、さうして半年經つてみて駄目なやうならば三年經つてもそれはむづかしからう」

「それにしても半年といふのはどういふところから割出したのだ？」

「それが精々一番短い間だと思ふ――それぐらゐの間は、ひとりになつた氣持をお八重にも味はせるのがいい。さうしてその間に靜に僕を見る機會を與へたい。僕の方では今までにもう充分に見てはゐるが、彼女は僕をよく見てはゐない。君と分れた後の悲しさの最中に、ひとりよりはまだしもいい位なつもりで初まつたのでは、後悔するやうなことがあつてはならん。僕としても溺れるものに取つての藁にはなりたくないからね。せつかく、結婚するほどならば、やつ

ばり兩方で本當に好きにならなけや。――それに今まで、僕はさういふ問題については性急すぎた。そいつがすべて、今日までの僕の夫婦生活の失敗の原因だつたと思ふと、ゆつくり考へた方がいい。それに對世間的にだつてそれ位の時日がある方がよからう。」

「それはさうかも知れないな。それぢやともかくも僕はお八重のために家を一つ搜さう。離緣してあれを歸すといつても、あれは歸るところもないやうなものだ。姉のうちへも行きたくはなからうし、僕もいやだ。當分僕が養はう。君が半年ぐらゐといふならその間をね。東京や外のところよりも、やはりO町の今の附近がいい。お八重もあそこは氣に入つてゐるのだし、それにユリ子がゐる以上はやはり僕の家からあまり遠くては心細いこともあらう。またいづれ雜多な家庭的殘務もあるだらう。ともかくも家を一軒、僕はお八重に持たせてやる。さうして斷然と別れるが、しかし當分の保護はする。そのうちに君もこの冬はOへ來て暮すさ。日夕お八重と相往來してゐるうちには、自ら情緒を生ずるです。及ばずながら小生も月下氷人をしてもいいです」――北村は輕口めいてまた或る友人の言色を眞似たが、再び實直に、さうして愉快げに言つた「さうなれば、僕も赤木清吉夫人なるお八重君には、好意ある友人になることも出來る。またお雪の姉としていい相談相手にもなれる。さう考へただけでも、僕は何だかさつぱりした氣持になつた。――僕は自分の妻としてのお八重には我慢がならないのだが、一個の女としてならばさう嫌いではないのだからね、よくいふとほり。」

北村は不意に氣がついたやうにポケットから時計を出して、それを殆んど暗くなつた部屋の僅かな光のなかに透かして見ながら、

「おや、これはいかん。早く行つてみてやらなけや」

「芝居小屋へか」

北村は近くにあつたベルの釦を押しながら「あ」とうなづいて「ね、話は決つた、解つただらう。野暮なことはもう皆言つた。一つお八重には君からよく言つてくれ給へ。あとは歩きながら話さう」

呼ばれた女中は、障子を開けて黒い影法師のやうに這入りながら

「おや。お燈もともさずに。どうもつひうつかり氣がつきませんで……」

「うつかり灯がつきませんで……だらう」

赤木はふいと駄洒落を言つた。

女中は賑やかに愛想よく笑ひながら、スヰツチに手をかけつつ「こんな暗がりで、まあどんな面白いお話をなすつてゐらつしたのです」

「うまい儲け口の話さ」

氣輕げに今度は、北村が答へた。

室は明るくなつた。その瞬間、北村と赤木とは思はず互に顔を見合した。さうして彼等はそれぞれ無意味に笑顔になつた。つくつたのではない自然のものであつた。例の魅力のある北村の笑顔は晴やかなものであつたが、その苦ざめた廣い額の上には油ぎつた汗が光つてゐるのを、赤木は見つけた。

煙草を吸はずにゐたことに氣がついて、彼等は二人とも立ぎわに煙草をくわへた。

（作者曰く、ここまでが前回のつづきであります。さうしてあとは新らしく書き起すのです。〆切日や何かの都合で、いつも完全な

一回づつを書くことが出來ず、今までにも毎月妙な風に切れてるのを氣にしてゐる折なので、ちつと一言記して置きます。完全な章や回の切り方などは、いづれ本にでもなつた時にその他の點とともに改めるつもりです。今までも今後も雜誌に出てゐる回數は、作意と關係なく、無意味に回を追ふてゐるものです）

一體、このふたりの友情はそれほど古いものではなかつた。まだまる四年には少し足りない。それでゐながら彼等の友情の深さはどんな竹馬の友にも劣らなかつただらう。現に北村は曾てその保護者であり同時に幼な友達である竹中よりも、赤木を重んじもし、好みもし、親しみもしてゐる。さうして彼等は、旅にでも出てゐない限りは殆んど毎日顏を合せて、閑な時には一日を——それも夜更けまで話し合つてゐるし、忙しい時でさへも北村は仕事の合間に入浴を思ひつくやうな場合には、手拭ひをさげて、お湯屋よりも倍も遠い赤木の家へ、赤木を誘ひに來る程であつた。その僅の時間に彼は互に仕事の經過を話し合つたり、また相談をしてみたり、その歸りには濡れた手拭をさげたまま赤木は北村の家へついて行くのであつた。赤木が行きさうにしない時には、北村が、まあ三十分ぐらゐはいいだらうと言ひながら、赤木を話相手に誘ふのであつた。その三十分が三時間になることも一向珍しくなかつた。ふたりは日を切つた忙しい仕事を、しかも隨分と興に乘つてゐる仕事を差し措いてでも話し合ふことが樂しかつたのだ。彼等はふたりでゐて飽きるといふことを知らなかつた。彼等にとつてはふたりでゐる間は退屈さへも面白いものになつてゐた。彼等のうちの一人が別の人々と會つてゐる時には、必ずもう一人の彼が噂に出てゐるものと思つて差支へないほど、彼等は殆んど離れてゐることがなかつた——顏を合はせてゐないならば、きつと頭の中で面會してゐたと言へる。北村はよく一週間ぐらゐの小旅行に出かけることがあつたが、さうした時には、三日目ぐらゐに赤木に手紙でもやらなければ

置くこともあつた。また赤木から思ひ立つて行くこともあつた。さういふ時から北村が外出すると、家へ行くよりも先に必ず赤木のところへ來た。どうかするとそのまま話し込んで互に相手の家へ泊り込んでしまふことも少くなかつた。

「ふたり集つて何がそんなに面白いんでせう。馬鹿なことばかり言つて笑つてゐるのがさ」

さういふ批評を、お八重も、美代子も、お雪さへも異口同音に言つた。そのなかに嫉むやうな口吻さへ雜つてゐた。全く、これが異性同志であつたならば、いや、同性でも赤木がもう七つも八つも年が若くて優しげな性格ででもあつたとしたら、世人はどういふ觀察をしたかわからない。さほどでもない友達でも、子供の頃ならばかういふ友情もある。また三十に近くなつても獨身同士で酒色の巷に出入する人々の間にはこのやうな友情もある。それに甚だ似たやうなものを、一向に飮もしない赤木と北村とがつづけて來て、それが日を經るに從つて深まつて行つた。ただ親愛なといふだけではない。かういふ間柄に於て寧ろ珍らしい現象ともいふべきは、彼等が互に相手に對して尊敬の念を抱いてゐた。

彼等をそれほど結びつけたものは、その仕事であるところの藝術の觀念と才能とに因つてである。いや、それよりもつと全體的に彼等相互の性格そのものであつたと言はなければなるまい。彼等は各々相當に復雜な性格者であつた。さうして決して人々からは了解されなかつた。わけても彼等の傲岸な態度が、人から近づかれもしなかつたし、人を近づけもしなかつたのだ。さうして彼等は、もと永い間、孤獨であつた。それが偶然の事で會つたと思つたらば、殆んど一ケ月とは經たないうちに赤木と北村とは十年の舊知のやうになつてゐた。北村はそんなに早く人と相許す男ではないのだが、と彼等を見た北村の或る友人は不思議がつた程であつた。ふたりの深い友情は、同時に甚だ因縁の深いものであるが、事の初めからすべてが今日のやうに成るが如く出來てゐたのかも知れなかつたのだ……

それらすべての事を、赤木は北村と肩を並べて歩きながら靜かに、それ故に客觀的に思ひ出してゐたのである。そ

れは赤木自身としては美代子と貧しい家を初めて持つて、不遇と生活上の不安との絶頂にゐたころの事である。また北村と初めて會つたのだから從つてお八重を最初に見た時でもある。その時のお八重を赤木は思ひ出すことが出來る。――當初には大した注意を拂つたわけではなかつたが。その頃が、北村としてはお雪との關係が起つたばかりのころであつたといふのだが、さう聞けば赤木の心にも思ひあたる事もあるが、四年の後の今日、その美代子とは別れて更にお八重との結婚を思はうとは！、　さうして北村はお雪を妻にするだらうとは！　赤木は自分の事ながら、それが甚だ自然な勢であるだけに、一層奇異の感に打たれるのであつた。

「それでは、君は、今夜は巣鴨の家へ行くんだね」

北村は立ちとまつて、思ひに耽つて歩いてゐる赤木に呼びかけた。赤木は現に一緒に居ることを忘れかかつてゐた北村の聲に驚いて、同じく立ち止つた。さうして言つた。

「あゝ。さうだよ。君はどこへ行くのだ」

そこは銀座の四つ辻であつた。一年ぶりで東京の夜を見る赤木の目に、あたりの燈火がまぶしいほど煌めき出して、今までは無意識にそれを避けてゐたのだが、氣がついてみると、あたりは今が最も人の出盛る時刻だけに、赤木と北村とは電車停留所の雜沓のなかにゐたのである。

「僕は」と北村は言つた「今夜はYへ行つてお雪に會ふ。さうして今日の話を聞かせる。あれもこれは一株持つべき話だからね」

「一株どころか、大株主だ」

「ハ、ハ、ハ、ハ」と苦笑の表情であつたが、北村は大きな聲を出して笑つたので、あたりの人は彼等を見た程であつ

た。「さうして、君は0の株主のところへは、それぢや、明日の午后には行つてくれるだらうね。」

「あゝ。一刻も早く話を知りたがつてゐるに相違ないからね。」

言ひながら赤木は、お八重が今日一晩をどんな風にして明すだらうかといふ思ひを持つた。

「それぢや、僕も、明日の午后――夕方、君がもう一とほりの話をしたところに、自分でも行つて話す。ぢや失敬」

北村は一種不愛想な調子で最後の一句を言ひ捨てると、もう新橋の方へ歩き出して、その小柄な體が人ごみのなかをすた／＼と早足に縫つてゐた。それは北村の別れ際のいつもの癖だから赤木は別に、それを不思議とは思はなかつたけれども、突然ひとり置きつ放しを食つたやうな心細さに似たものと、それよりも何か重大なことを言ひ殘したやうな物足りなさとで、しばらく北村の後姿を見送つた。赤木はしばらく呆然として、まるで田舍者のやうに、――ほんの一年都會に居ない間に、事實、彼は田舍者にかへつてゐた――自分の行くべき道、乘るべき電車にまごつくやうな氣持だつた。氣がついて、電車のレエルを踏み渡ると、彼は數寄屋橋の方へ歩き出した。日比谷から電車へ乘るために。

彼は北村とはもう少し話し合ひたかつた。しかし、それは別に重大な相談ではなく、ただほんの心持であつた。ひとり自づと思ひ出されてゐた四年來の彼等の交友や、その間に起つた幾つかの出來事や、また將に新らしく創めようとしてゐる彼等の生活や、さうしてそれらの時と人との不思議にも感ぜられる組合せ――運命ともいふべきものに就て、赤木は北村を相手にどこか靜かなところをでも歩きながら話したかつたのである。さういふ氣持が動いた折柄であつた。ひとりしみじみと考へてゐた彼が、すぐ彼の傍に北村のゐたのに氣づくとともに、そこに話すべき適當な相手を感じ出したと思ふや否や、その相手はすぐに別れを告げてしまつたのである。赤木の物足りなさは實にそれであつた。しかし赤木自身は知つてゐる――若し、北村が別れ去らずに、彼等がもつと一緒にどこかを歩きつづけたところで、彼等は風

變りな冗談を連發することがあるとしても、決して一言の抒情的な言葉も口から出すことは無かつたであらう。何故かといふのに、もし何かそんなことを話したいと思つたならば、A座を出て銀座に來るまでの間には、さほど人どほりもない靜かな處も、またそれだけの餘裕ある時もあつたのである。その間に彼等はほんの二三の戯れを言つた。「さて、さういふ事になると俺は赤木清吉の弟分になつてしまふぞ。君、威張りはしないだらうな」北村はそんなことを言つた。それから、彼等二人は默つたまま銀座の四角に出て來てゐたのであつた。その沈默の間に赤木が運命を感じたごとく、北村も亦運命を感じたであらう。さう。さうして赤木が北村に話しかけたいと思つた事を、北村は直感した上で、それを避けたかのやうに赤木には見えた。愚にもつかない感傷的な心持に時を移すよりは、去つて、寧ろ家事の潮を見るために北村は急いだやうに、赤木には思へた。

　されぱと言つて、赤木は北村に少しの感傷もなかつたとは考へない。赤木は彼の友の蒼白くなつて油汗の浮いてゐた額が、點火した瞬間の電燈に照らし出されたのを知つてゐた。しかも一切の感傷をこの上もなく輕蔑する北村を赤木はまた知つてゐた。――要するにそれは、美代子の事に關してこれまで一言も人に洩らさなかつた赤木の心と同じものなのである。人に知られることを恥づるのではない。却つて自分自身で自分の一切の感情を處分せずには居られないのだ。それまでは決して人に訴へたくないといふのであらう。さういふ性格は人を孤獨にするものだ。さうして事實、北村も赤木も傲然として孤高を守るといふ意氣を持つてゐた。さうだ。最初に彼等二人を友人にしたものは或はこの性格の類似であつたらう。弱々しい赤木は、しかし、諧謔を喜ぶ北村とはやや趣がちがつてゐて、最も抒情的な心を奇異な戯れの言葉であつかふ癖があつた。その陰影に富んだ言葉は、多くの人々にはただ赤木をへんな奴としてしか受取らせなかつたのに、それが北村にだけは交友の當初から苦もなく[illegible]に傳はつた。それはかりでなく、北村はこれを面白がりさへ

した。

さうして自ら人と交ることを好まないと明言してゐた北村は、住居が近かつたからとは言へ、年少で無名な赤木の貧しい家を訪れた。赤木はもとより屢々北村を訪ねた。容易に人を引見しないと噂されてゐた北村は、黄疸の目をこすりながら、赤木を書齋へ導いた。さうして田舍訛りでまくし立てる赤木の文學論に北村は耳を傾けてゐた。當時、一作によつて世を動かさない位ならば一そ筆を折つた方がいいと傲語しながら、しかも何一つ出來なかつた赤木は、心弱くももう文筆を捨てて畫筆をとつてみようかとさへ思ひ惑うてゐただけに、胸のなかには幾多の物語の荒筋を持つてゐたし、頭のなかには日夜考察して文藝上の議論が混沌として蟠つてゐた。その抱懐する藝術上の持説が、時代とは相容れないものでしかし北村とは甚だ相似たものであつた。北村はそれをも喜んだ。しかも赤木が藝術上の意見に於てはその有名な先輩に對しても、一向、相下ることとなしに意見を戰はし、また北村の作品に就ては忌憚のない直言をすることがあつた。北村はこの無名な弱輩の意見と直言とに寛大であつたばかりでなく、折には同感の意を洩すことさへあつた。さうして北村は赤木のことを、人に向つては「頭のいい男だ」「判つてゐる男だ」「あいつのいふことは酢豆腐ぢやない」「あれは言葉そのままが藝術になつてゐる男だ」さういふ風に評した。さうして當の赤木に向つては折ある毎に勉勵の言葉を與へて議論よりも事實に於て才能を示さなければならないことを慫慂して、今更畫筆などを捨てゝ再び文筆を試みる方がいいことや、もし作品が出來たならばこれを世に問ふ爲めには必ず盡力するとまで約束した。北村の言葉が、もう自暴自棄に陷入つてゐた赤木を再び奮起させた。赤木の作品が世に出るやうになつたのは一から十まで北村の力である。もし世に北村がなかつたならば赤木の文學的生涯は無かつただらうと、赤木自らは思つてゐる。一作が世に出るやうになるや否や北村は筆に口に機あるごとに赤木を賞讃し、のみならず「正直に告白するが、予は赤木清吉には啓發されるとこ

ろ拗少ではない」とまで言ひ、また赤木の處女作集が上梓される時には、その卷頭に文を題して「自分の事のやうにうれしい」とまで言つた。傲岸一代に高しとして、世もまた彼を呼ぶに天才兒と言つてゐる北村莊一郎のこれ等の言説と態度とは、もう五六年の間誰ひとり希望を繋ぐ人さへなく否彼自身でさへも自ら抛たうとして、埋木に終りさうに見えた赤木清吉を、一躍して第一流の作家のひとりに仕立て上げた。しかも自尊心の强い赤木は、この先輩に師事するといふでもなく、心中には兄事しながらも、まるで同輩に對するが如く振舞ふのを、北村はそれさへも當然のやうに見逃して、ただ赤木と藝術を語ることを好み、また「赤木は予をして藝術的昂奮を催さしめる」とまで人々に告げた。赤木は以前私に（ひそか）あの男だけは自分の藝術は判ると考へたその先輩にかくのごとく遇せられることを德として心中に無限の感謝を持ちながら、そんな事を口に出すことを恥ぢてゐた。さうして北村は其赤木の心持を好しとした。さうして彼等は互に藝術上の苦言を惜まずに呈し合つて、當時文壇の一部に友と友との間に好言令色の風が芽してゐるやうな風徵のあるのを感じた彼等は、陽にそれらの人々の態度を嘲笑して、己達が好い友を得たことを自ら祝福してゐた。かうして毎日、往き來をして語り合つてゐるうちには、江戸子を誇としてゐる北村の口調のなかに、赤木の田舍訛がうつつて仕舞つたほどであつた。

北村が初め赤木を訪ねてみたのは、ほんのちよつとした物好きでもあつた。當時二十五歲であつた赤木は、二十三歲の時に戀によつて同棲した或る名もない女優と別れてしまつてそれと同時にもつと名もない見習女優の女と第二度の同棲を初めた當時であつた。高慢な赤木に名聲を與へることは豫め拒むやうに見えたその仲間の者は、赤木の惡名と嘲笑とならばいつもくれたがるので、その時にも別に名もない隱れた赤木が第一の女を去つて第二の女を持つたといふ事に就てだけは案外有名になつてゐた。北村は一つにその赤木の新らしい女といふのを見てやらうくらゐなつもりで來たのであつた。その第二の女といふの [illegible]

る。赤木と美代子とは、北村の力ぞへによつて赤木がその作品を賣ることが出來なかつたならば、終に餓えやうとしてゐたのは、忘れもしない二疊と六疊と二間きりの裏長家だつた。前途もないくせに放縦な生活に陷入つた赤木に對しては、家庭はもう赤木を見限つてゐた。さうして赤木が第一の女を離別しなければならなかつたその最も重大な理由の一つといふのは、實に生活難から來てゐたのである。赤木の第一の女は生活難のために或る下等な小屋のそれも下つ端の女優になつて、それがもとで見込みのつかない夫を捨ててしまつたのであつた……。赤木は、第一の女の友達である美代子を、身持のよい女でない事を知りながらもその女と同棲を始めたのである。赤木はその時、既に自暴自棄の道を歩み出してゐたし、またその上にこの主觀的な若かつた彼は外聞や面目などといふものに何の束縛をも受けなかつた。さうして己ひとりの身でさへ食ふ道を知らずにその爲めに妻を失つた彼が、尙ほ懲りもさず、考へもせずに美代子と裏長屋の生活を初めてゐた。その噂を聞いて北村は面白半分に赤木の女を見に來たのであつた。……

そのころ北村の家には、お雪の外にひとり十七八の書生がゐた。お八重は日本橋の父の家へ行つてゐるといふ話であつた。赤木はそれを人の噂でも知つてゐたし、北村自身の口からもさう聞いた。今日も北村が打ちあけたとほり、母の亡くなつた父の家へ、お八重は北村の言ひつけによつて手傳ひに出されてゐたのである。金曜日とか土曜日とか一週に一度お八重は、夫の家へ歸ることになつてゐた。お八重が歸るその日には北村が自身で、或はその友人である俳優の大川秋帆を使にして、わざわざ赤木を迎えに來るのであつた。週に一度、稀に妻の歸る日に限つて、必ず友人を呼び集めるといふ事を、さうして折角來た細君とは滿足に話もせずに呼び集めた友達とばかり話合つてゐる北村を、當時美代子と新らしい家を營み初めた赤木は不思議に思つた。たまに逢ふところの自分の妻とならば、ゆつくりさし向ひに話でもしたらばよからう、と赤木は思つたものだ。思つた事を言はずにはゐられない赤木はその事を北村に言ふと、彼は苦笑

をして「うるさいからだ。ふたりきりになると愚痴ばかり言ふからね」とたゞそれだけ、事もなげに言つた。大川秋帆にその事を赤木が言ふと、大川は例の特有の奇異な口調で「北村の奴令夫人を好まんですな。常にうるさがつてゐるです。さあ、その理由は知らんですな」と眞面目にさういふとぼけたことを言つた。事實また大川もその理由は知らないらしかつた。赤木はまだ北村の細君――お八重を知らない頃には、きつと彼女はあまりに家庭的で北村の無鐵砲な金づかひなどについて妻として小言を言つたり、或は不如意な藝術家の妻として月末の諸拂ひなどに就て過分に心配するのを北村がうるさがるものと思つてゐた。しかし必ずしもさうではないやうであつた。そのことを大川に言ふと「北村夫人は溫順な好個の妻君です。どうして郎君の嫌ふところとなつたのか、門外漢にはわからんです。孝行の名によつて、今日遠く日本橋なる家にゐるですな。氣の毒だね。――むかし、支那にええ、何とかいふ美人があつたです。君命によつて遠く胡地に送られたです。それやあんまりぢや胡地の人」――大川は駄洒落を言つて目をぱちくりさせるのであつた。常に滿足に覺えてはゐないくせに好んで故事や成語をつかひ、駄洒落を好きな大川の話しぶりを、赤木は早くもその呼吸を覺えて、よく北村に眞似て聞かせた。北村もまたそれを眞似た。さうして彼等はそれを秋帆語と稱してゐた。「胡地の人」の駄洒落のある秋帆の言葉を、赤木は北村に、そつくり秋帆の口吻で傳へた。赤木の心持ではたゞ秋帆語がおかしかつたのではない。そのなかには北村がその細君に對する態度の溫情の缺けてゐることを、些、諷することとまたその理由とを疑ふ意味を籠めてゐたのであつた。その時、北村は單に笑つて何も言はなかつた。赤木は或る時、ごく親しい先輩のひとりで、北村の作品とさうしてその作を通して見られる北村の個人とに興味を持つてゐる人に、北村の日常生活を傳へる序に、彼の夫婦生活のことに及んで、赤木のこれに對する觀察を述べた。この先輩は言つた「なに笑すること[illegible]

げてキアツ、キアットと笑つた。しかし、たゞそれだけで何とも言はなかつた。さうして赤木はこの先輩の言葉を或はその通りだらうと思つた。何故かといふのに、北村はいつもお八重の名をよく口にしたからである。お八重が、お八重が……。赤木はいつの間にか北村のその口調がうつつてしまつた。さうして北村が己の妻とは言ひながらいかにも輕んじたやうにお八重、お八重と呼ぶのを聞くと、書生流に無作法な赤木は、別に細君とも、奥さんとも呼ばずに、北村の口調をそつくり北村にむかつてはお八重、お八重と彼女を呼び慣はしてしまつた。最初、北村はそれを暗にたしなめるらしく、赤木の妻のことをも「お美代」と呼んでみたが、赤木は一向そんなことには頓着しないのを見ると、北村も慣れてしまつて、赤木がお八重と呼ぶのを怪しむ風なかつた。しかし、彼は赤木の妻のことを、もう呼び捨てにしなくなつて「君の細君」と言ふのであつた。

そのお八重を初めて見た日を赤木は思ひ出す。赤木はお八重を自分より年上の女のやうに感じて意外だつたが、その頃、お八重はまだやつと二十かそこらだつたのだ。噂に聞いたとほり美人だと思つた。しかしそれ以上にもとより何とも考へはしなかつた。北村夫婦とそれに大川と赤木と、その四人で花札を遊んだ。赤木が無論一ばん下手だつた。大川が例の愛嬌ある口調でしかし口汚く赤木の未熟を罵り笑ふと、彼女は罵られながら負けてゐる赤木を氣の毒がつて赤木をかばふやうなことを言つた。音無しい人をいぢめてはいけないと言ふと、大川は、「何のこの男がこゝへ遊びに來るうちでも一番口の惡い奴です。今日は奥さんとの初對面で猫を冠つてゐやがるんだ。ソラ猫、松のピカを拾へ。口惜しか。ちやんと秋帆がビキでタンを持つてヒカへてゐるんだぞ」「赤木さん。しつかりなさいよ。この人は口で勝負をする人なんですからね。」しかし、北村は外の人々が面白がつてゐるのに一向興がなささうだつた。そのうちに下につれて來てあつ

たらしい嬰兒が泣き出すと、北村は札を捨てて、「よさう〳〵。赤木みたやうな素人がゐて、それに子供なんぞ泣き出しちや、花なんぞ引けない！。」北村は別に語氣を改めてもなかつたが、いかにもつまらなさうだつた。赤木は、客の永居をいやがるのぢやないかと思つて歸らうとするのを、北村が本氣で引き留めて、却つてお八重を家へ歸らせやうとするのであつた。しかし赤木は無理に歸つて來た――あれは九月の半ばごろで、赤木が試みに出品した展覽會が選に入つたかどうかは、その夕刊で判る筈だつた。赤木の三枚のうち二枚まで入選してゐたのを、その歸りに知つたのだつたが……

赤木は北村の告白を思ひ合はしてみて、あのころからもうお雪との關係が初まつてゐたのに氣がつかざるを得ない。その頃のお雪と言へば、思ひ出すがまだ下げ髮をしてゐて十六かそこらの少女だつたが……。さう言へばお雪はその頃から人に憶しない調子で、直ぐになれ〳〵しく赤木などにも話しかけた。感ずることをすぐ誰かに言はずには居ない赤木は、或る時、北村に云つた――「君のうちのお雪は、僕を好いてゐるのぢやないかね」「心配しなくつても大丈夫だ。あれは君、誰にでもあんな調子だよ。ハ、ハ、ハ」北村が笑つたことがあつた。

――ずい分長い歳月であつたやうな氣がする。しかしそれを指折つて遡つてみると、たつた五年目にしかなつてゐない。その五年のうちで長かつたのはきつと、最近のまる二年間だ。美代子と愼吉との事件の影響がこの二年の歳月をそれほど長いものにしたのだ……

一度出來るだけ客觀して、すべてを見てみようとした赤木の回想は、ここまで來ると、一時に結集して生々しい且つ錯雜たる己の心にぶつかつてしまふと、もうこれが過ぎ去つたことであり、またもう充分適當な解決を得てゐると信じながらも、まだ完全に凝視しつづけられない或るものを赤木は己の心に見出すのであつた。――何の惜愛もなく美代子とは關係してしまつて、この度一度も會はない愼吉には、勤め一時の一寸遊びくらゐ：さうして、愼吉には、すつかりの愼吉から

の頼みを聞き入れながらそれをやりとげ [illegible]

なければならない。さうしてまた田舍へ歸つたならば父母に向つては、子として淸吉は言はなければならない――己の不聰明と不身持とからみだらな女を妻にして、その累を弟にまで及ぼしてまだ年も行かない若い弟に、一人前にもすこし過分な程の苦しみをさせてしまつた。さうして爲めに愼吉は學業さへも忘れ勝ちであつたに相違ない。しかし兄として淸吉はまた弟に言はなければならない。この兄とこの弟との爲めに與へられたこの二年間の月日は、苦しいものではあつたが人生を生きるものにとつては、決してさう無意味な歲月ではなかつたらう。生きるといふことの道が、享樂でない限り、また必ずしも幸福だけでもない限り、卽ち知るといふことも一つの生き方である以上、我等は確に一つの眞實を知つたのであつた。尠くとも一つの眞實な苦しみを覺えたのであつた。しかもそれによつて命が壓しつぶされる事もなく、また自暴自棄に自分を投げ込む事もなく、新らしくもの事の考へ方を別に一つ工夫することが出來たとしたからは、その苦しみは各の命にとつて一つの肥料であるかも知れない。今はそれに氣づかないまでも後にはそれを思ひ當るかも知れない――愼吉に會つた時には、かうも言はなければならない……

それにしても、今から行つて美代子に會ふ時には? 淸吉はそれに就ては、もう何の苦痛もないやうな氣がした。寧ろ、美代子はそれを望み、それを期してゐることが察せられる。さうして偶然にも今、美代子が新らしく別に男を持つたといふことはありさうな事であり、この際すべてにとつて、言はゞ甚だ好都合なのである。美代子はそれを問題にして貰つて、淸吉と別れる種にしたいであらう。今更、愼吉とのことを持出されるよりも、その方がずつと彼女にとつて都合がいいに違いない。彼女はそれを自覺した上で、新らしく男を持つたのかも知れない。併し、(と赤木淸吉は彼自身に言ふのである)、この新らしく美代子が持つた情夫のことに就て、それを愼吉や自分自身に對する口實にしてはならない

のだ。何故かとならば、そんな者はすでに今日、清吉には問題ではないからである。清吉は、美代子が清吉の田舎から祖母病氣といふ電報を見て歸つた時から、その電報は僞で、彼女がすでに自分から夫を去つて行くことを氣づいてゐた。さうして清吉にとつても美代子にとつても、もうその時から既に別れてゐたも同然であつた。しかもその時には美代子は懷妊してゐて、それだのに敢て赤木家を去り、さうして東京へ來て流産したといふ事は、自然にさういふ結果になつたのか、それとも清吉と別れる事を欲して、その際に子供のあることを面倒に思つて、身籠つた子をおろしたかとさへ清吉は考へるのである。美代子はさういふ事をも出來るところのある女だと清吉は思ふ。もしそれほどの心組で美代子があるとすれば、今夜、清吉が巣鴨の家に行つて美代子に別れることを相談することは、寧ろ馬鹿丁寧なことであつて、ただ一通のやや長い手紙を彼女とその母親とに與へても事が足りるとさへ清吉は思ふ。それをわざ〳〵、清吉が重い氣持をもつて自分で話しに行くのは、それは彼女に對する愛からでもなく、また情からでもなく、却つて清吉自身への申し開きの爲めである。一つの眞實の道を眞直ぐに踏んでみようと思ふからである。さういふ清吉にとつて、たとひそれがどんなに便宜であらうとも、一向問題でもないところの新らしい情夫などのことを主題にしてはならないのである。それはほんのつけたりに發生した事なのだからだ。飽くまでも清吉にとつては、やはり慎吉と、美代子とが問題なのである。何故かとならば、もしあの後に、お美代がたとひ彼にとつて貞淑な妻であり得たとしても、清吉は或は既往を既往として忘却し去ることが出來なかつたかも知れないからだ。——いや、それはわからない。美代子はその後と言へども決して貞淑な一刻もなかつたのであつた。だからこの假定は終に假定に過ぎない。寧ろ憫れむべき事ではあつたが、美代子は彼女の過去の弱點に氣がつく度に、彼女の夫がこれを口實にしていつ彼女を離緣するかも知れないといふ不安にのみ襲はれてゐた。彼女はいつも己から出た[illegible]に[illegible]されたのだ。彼女が夫の[illegible]である貞吉と[illegible]した時には、

彼女の夫が旅行を名として最初の女とまた出會ふために出かけるものと妄想した。さうして一つの過ちをしてしまつた後には、その過を盾にとつて彼女の夫がいつ彼女を捨てるかも知れないといふ不安に寧日がなかつたのである。いや、そんなにむつかしく考へるよりも彼女はたゞ病的なほど情欲の旺んな、さうしてそれの變形であるところの妬心の深い女なのかも知れないのだ。その何れであるにせよ、彼女はその忌はしい過去とまた焦立しい現在とによつて二重にその夫を苦しめたのだ。彼女は自ら呪はれて、その信じていい夫を信ずるわけにはいかなかつたのである。だが、その妬心もごく近ごろに到つては或は單な邪推でないと言はなければならないかも知れない。何故かといふのに、彼女の夫は自分と同じやうな立場にゐて、しかもそれを悟ることさへ出來ないお八重を同情するのあまり、形が影を弔ふが如く、つひに清吉はお八重を愛する心を抱いてゐた。さうして美代子に對しては愛するの義務をこそ感じたが、少しの愛をも感じなかつた。たゞ愛の片身として、少しばかりの惱みと多くの憫みと、さうして一層多くのうるささと、最後に最大の腹立しさとが殘つてゐた。——妬心も女にとつて必要な本能であらうのに、その妬心さへもまことの愛情なしには、眞の働きをしない。清吉にとつて最も莫迦々々しい事には、美代子はその嫉妬の對照をお雪に向けてゐるのであつた。清吉がその心中では美代子その者と同樣に嫌惡を感じてゐるお雪を、美代子は自分の夫清吉が愛してゐるものと思ひ込んでゐる。ひとり思ひ込んでゐるばかりでは無くさう口に出して清吉を罵り、また橘などにも言つてゐた。それをまた橘は信じてゐるらしい。

そのころお雪と戀をし出した橘は、お雪と結婚したいといふことを赤木の口から北村に相談して欲しいと望んだ。稍以前から、お雪と北村との間ををかしいと觀察し出してゐた赤木は、橘の意志がお雪と相談の上であるとは聞いても果してお雪がどれだけ本氣なのかを疑はれたし、赤木はその邊のことを知りたいと思つてお雪と二三度、話しながら散

歩した事があつた。「約束をした人があつて、尤もその人はアメリカへ行つてしまつたのよ」と、こんなことを言ふお雪のきつぱりとしない態度のなかから、北村とお雪とがやはりをかしいことを確めると、さうなつてみると橘からの話を北村に傳へることが、赤木にとつてはひどく億劫な仕事になつてゐた。赤木は自分自身で身に餘る物思ひを持つてゐるうへに、更に友達のさういふ複雜な事情のなかへ頭を突込むことは、一たいに消極的なだけに尻ごみされた。さうして橘の希望は寧ろ橘自身なり、或はお雪自身なりから言つたがよからうと答へて、赤木はその問題に立入らなかつた。そのはき〳〵と言傳ての傳はらない理由を橘とさうして美代子とは、赤木自身がお雪に氣があるからだといふ風に觀察した。橘には好い返事をしてゐながら、腹のほんとうに決つてゐないお雪は、その自分の心持もまた北村との關係の事などは無論、橘に明さないで、氣のあせつてゐる橘が詰ると、事の運ばない罪が專ら赤木にあるやうなことを言つて、橘の尋ねるままに、なるほどさう言へば赤木が彼女自らに氣があるのかも知れないやうなことを、その場の都合でにほはす。橘は更にそれを信じて、橘と美代子とは自分達の及ばない觀察に氣づかずに、赤木ひとりを或は腑甲斐のない男にし、或は嫉妬の相手にした。それを美代子の口うらから察することの出來た赤木は、橘と美代子とまたお雪とに憤を感じながら、心を決して橘からの言傳を北村に告げた。「一たい橘は僕とお雪との事を氣がついてゐて橘はさう言ふのかね」北村はさう簡單な言葉で、しかし困つたやうに彼とお雪の間柄を、赤木に明したのだ。

それ以來、赤木は北村にむかつて折にふれてはお雪やお八重の身に關する意見を述べもした。しかし已に深い關係のない事に就ては立ち入る事を好まないのが、また赤木の性癖でもあつた。さうして赤木は、北村がお雪と一緒に散歩に出る時に、今までのやうに赤木を誘はない事を希望した。それは一つには美代子や橘の誤解をも不愉快に思ふからで

もあるが、同時に北村が世人やお八重に對する手前、赤木を散歩の同伴者にしてゐるやうな氣がしたからだ。誤解されたり利用されたりしてゐる己に就て、清吉は腹が立たないではなかつたが、そんな小さなことを誰に言ひ立てるだけの餘裕も心にはなかつた。たゞ、北村に向つては赤木は言つた――北村が何をしようともそれは仕方がないけれども、それはなるべく赤木の目のとどかないところで行つて貰ひたい。またお八重の目をくらますことに就て、赤木は利用されたくないと。それからまた或る時赤木はお八重には言つた――早くお雪を橘にくれてやるやうに姉として取計らつたらどうだらうかと。

北村は一時は、お雪を橘にくれるやうに見えたのに、それがいつの間にか話が消えてしまつて、その代りにはお雪と橘との關係を、北村は目の前に見ながら默認してゐるらしかつた。赤木はまた北村が今までにも時折に出かけてゐた小旅行といふのは、これがお雪と逢ふ機會をつくる爲めのものであつたことに氣がついた。さうして何も知らないお八重を見ると赤木はたゞはら／＼した。さうしてお八重の爲めだか彼自身のためだか、彼はそのお八重を見ながら涙が出たことがあつた。

美代子はまた、お雪に就ては、北村がその愛して居る女である自分の夫清吉に、北村自身の妻の妹なるお雪をくれたがつてゐるといふ妄想を描いてゐたのは、よほど以前からであつたらしい。ヒステリイに罹つてゐる美代子は、さまざまな妄想を不思議なばかり巧みに組み合せて夫の清吉を主人公にした一篇の物語を、何かしらいつもその胸の中に持つてゐて、思ひがけない事どもを不意に言ひ出しては、清吉を焦立たせ、腹立たせ、情けなくするのであつたが、清吉ももうあきらめてしまつて今はもう、辯明を試みることも愚だ、大儀だと思ふほどであつた。就中、お雪のことに就てはその事實の告白を、それが止むを得ない必要から出たものであつたけれどもとかく當の北村の口から明されたのであつ

た以上、北村がその解決を下すまでは一切他言をすまいと自ら滑吉は誓つてゐた。それだけになまじ自分の證しを立てるためとあつては、尚更、お雪と北村との關係などを美代子は述べることを欲しなかつた。いづれ日がくれば判ると思つて、赤木は美代子や橋には何も知らない顔をしてゐた。しかも美代子が橋を、意味ありげにどこかへ誘ふたといふことを橋が北村に告げて、その時特に これは赤木氏には內密だけれど と言つたと いふのを、赤木が北村から聞いた時には、橋を赤木は始めて腹立しく、輕蔑する心になつた。お雪とすでに交情がある程でありながら、そのお雪をつひその時までは處女だつたらうと思ふ程のうぶな橋だから、何も氣がつかずに赤木をお雪に氣があるものと思ひ込む事は許せる。しかし純粹な人間ならば當然赤木に向つて語るべき事實を赤木には內密だと云ひながら北村に告げるといふことは、唯の多辯ではなく一つの不誠實だと赤木は思つたのである。さう思つて橋を見てゐると、お雪と北村との關係にもう氣づいた筈でありながら、北村の默認を結局いゝ事にしてお雪と一緒にうやむやに交をつづけてゐるらしいこの青年の心持が、また赤木には人ごとながら腹立しかつた。……

そんな何事よりもしかし重大なことは、滑吉のお八重に對する心持だつた。それが果していつ起つたのやら當の彼も知らなかつた。しかし氣がついた時には彼は北村に向つて、その妻のお八重に彼が愛情に似たものを感じ出してゐることを言ふのが、必要でもあり當然でもあると思つた。誰かにそれを打明けずにはゐられないやうな場合、わけても心のなかに仕舞ひ込んで置けば置く程それが募つて來る赤木滑吉のやうな性質にとつては、人の妻をいとしいと思ふような心持になつた場合には、まづその夫にその自分の心持を告げて置くことが最も正當で安全なやうに思へたからであつた。それと同時に、お八重その人にむかつては、赤木は意義を加へてこそれが自然の狀態であるよりももつと疎ましく交るやうにし始めたのであつた。あれだけに親密な間柄である北村の細君なのだから、もつと親しくあるべき筈であつ

たのに、さうしてその當然に從つてお八重は無邪氣に赤木には何かと氣輕るに振舞つたり言つたりするのに、赤木は却つてお八重を同情するために彼に對してくつろげなくなつてしまつた。お八重が目に見えてさびしげであるのに、さうして友達を求めてゐるのに、なまなかそれを慰めてやることさへも出來ないのを感じた。また赤木がお八重に對してもつと淺い同情だけを持つてゐたならば、ただ慰めるだけではない進んで、その夫の行爲に就てお八重に注意しまた相談してやることも出來たらうにと思ふと赤木は、益々お八重に對する己の立場といふもののぎこちなさを思はざるを得なかつた。話し相手も遊び友達もないお八重が、家は近くもあり美代子と友達になりたいといふことをしきりに赤木につげ、美代子の行くお湯屋を聞いたり、その時間を聞いたりして、自然に近づくの機會をさへ求めるのを知つたけれども、さうしてそのお八重を哀れに思つたけれども、赤木はそれにさへ應じ兼ねるのを感じた。それは一つには美代子の性格が好もしいものでないからでもあつたが、且つは赤木自身がお八重を思つてゐるのに、そのお八重と美代子とが友達になるといふことは、彼女たちの誰もがそれを知ると知らないとに拘はらず、何故か赤木にとつては望ましい事でなかつた。赤木といふ男の心は四面の壁に鏡を張つた部屋に似てゐる。

お八重を思ふ彼の心が、日々に深まるらしいのを、赤木は北村に告げると一緒にまたその心持の因つて來る理由をも、北村に明したかつた。それをしかし赤木は、竟に一言も北村にさへ洩さなかつた。感傷的な話を一切好まない北村に、そんなまだ自ら處決することも出來ないであるやうな問題の打明話をすることは、赤木の性格のうちにそれを拒むものがあつた。またそれは清吉の特有の言葉である冗談の外套にくるめて輕く語るには、赤木にとつてあまりに重い大きな氣持でありすぎた。それ故に北村には、赤木のお八重に對する心持がどれ程のものであるか察することはむつかしかつた。それだのに赤木は、お八重に對する氣持が日とともに高まり深まつて行くのを感じ、どうかすると彼は、その

心をうつかりお八重に明してしまひさうになる自分に氣づいた。赤木はその自分の心を[illegible]かういふ日々のなかにも、赤木は一月とて彼の仕事である文筆を休めることは出來なかつた。彼はそれで飯を食つてゐるのだからである。二年この方、さまざまな勞苦のために精も根も枯れようとしてゐる赤木に心ゆく作品が出來よう筈もなかつた。さうして現實的なさまざまなものを考へねばならない赤木が、奇異な事にはその作品ではただただ空想的な筆をのみ弄んでゐた。赤木はその場のがれに己の生活を韜晦してゐたのだ。さうして眞の己のない自分の作品を見るもいやなものに思ひ出した。

彼のかういふ生活は、それでなくてさへも過敏な彼の神經をさんざんに突つ突き、休まるひまのない彼は二・三日と劇しい神經衰弱に陷入つた。すべての事情をのこらず打明けさへ出來たならこの狀態は直ると思ひながら、心のなかの密雲をどう處理することも出來ず、しかも自我の強い赤木は、己以外の何物にも縋るまいと思ふのであつた。赤木は、極度の神經衰弱のなかに、縊死するために木の枝に繩を用意してゐる者の幻影をまざまざと二度までも見たことがあつた。その赤木にとつて唯一の慰めであるものはお八重であつた。必ずしもその姿を見ることではない。たゞ彼女を心に描くことであつた。かうして戀とも何とも見分けがたい赤木の心持は、益々深くされて行つた。それはもう、輕口の假面で、その夫なる北村に告げるにはあまりに眞劍になりすぎたやうに、赤木には自ら感ぜられた。赤木は僅に殘つてゐる意志の斷片を揮ひ起して、遠い田舍の父母の家へともかくも歸つたのであつた。

田舍の半年。さうして遠い海を渡つて蒸せかへるやうな南方の地方の眞夏の三ケ月。赤木はその旅の海で山で、いつも美代子を、またお八重を思つた。さうして一さうこのふたりを同時に彼の心から抹殺することだと決心した。さうして何もかも新らしく、第二の生活を創造しようと考へつくと、赤木はやつと道を見出した。もしさうすると[illegible]いふ地で病

死でもするかも知れない。その運命をも受けてもいいとさへ思つた彼に、しかし運命は心氣を一轉させた。身も心も疲勞しきつたとは言へ、それでも一つの血路を見つけた彼の前へ、思ひがけなく再びその顏を向けた運命は、思ひきや、どうやら彼とお八重とを組合せたがつてゐるらしい………

それにしても美代子との久しぶりの對面が、さうして恐らくは最後の語らひが、時も場所も刻々に近づきつつある。それが最善で、また自然な徑路であることを信じはするが、この袂別だつてやはり苦痛と泪となしには遂げられまい……

……。然うだ。すべてを話す序には、今まで彼女が久しく抱いてゐた雪に對する誤解を釋いてやらう。その時が來てゐる。北村はもうすでにそれを世間へ自分から發表するだらうから。それにつけても、それはまだどういふ成行きをとるものか一切不明ではあるが、お八重の事を――この後、彼が或はお雪などとではないお八重と(!)結婚するやうなことはないとも限らない。それをもむしろ今、美代子に述べて置くことは、後の成行の如何にかかわらず必要であるかもしれない。さうして出來ることならば彼女にもまた、赤木とお八重との結合を祝つて貰ひたい……

赤木淸吉はその半面を窓ガラスの上へ押しつけてこれらの事を考へつゞけてゐた。それは滿員の電車の片隅である。日比谷で辛うじて三台目に乘ることが出來たこの車も、時間が時間だから、やつと最端の吊皮を他の三四の手と一緒につかまへながら、赤木淸吉は息ぐるしいほど押される混雜の片隅で、己がやつと生きて來たこの二年間をとりとめもなく、しかし生々しくそれが發散する息を嗅ぎ味ひながら、あちらからもこちらからも一時に持ち上つて來る思ひを、考へ耽つた。それを彼は努めて整理してみやうとしながら、しかしあの昨夜のお八重の騷ぎのために眠ることも充分でなく、また今日の北村との半日の旅と會談とのために更に朧げになつてゐる彼の頭は、徒らに順序もなく思去つた。しかもその思ひ毎に、働かない頭腦とは反對に心臟は一々

の事を「彼」として考へ得るよりも時にはひとりの友であり、ひとりの苦しい兄であり、更に苦しい息子であり、不貞な妻を持つた夫であり、戀を持つた未だ明さずにゐる男であり、別れるべき女のところへ運ばれてゐる男であり、彼の一つの心臓は刻々に調子を異にして鳴つた。

思ひ出されるすべての名のその顔を赤木は思ひ出したが、そのうちではやはりお八重の顔が最も度々浮んだことは爭はれない。

やつと身動きの樂になつた電車は、白山の坂を上りつつあるのを赤木は見ながら、一匹の黒犬が彼を見つけて尾を振るのを思つた。それは彼の飼ひ犬ではなかつたが、美代子の門の向ひの家のもの、彼にも懐いてゐる。ふと思ひ出したその犬のことが、赤木には美代子の家を、さうしてそこに這入るべき己をはつきりと思ひ浮べた

# 楠木正成（三幕）

松居松翁

**時**

延元元年五月

**處**

（一）河内國赤坂の里

（二）攝津國櫻井の驛

（三）同く湊川のほとり

**人**

楠木判官正成……四十三歳

庄五郎正行（其長子）……十二歳

—(楠　木　正　成)—

二郎（後に正時、其二子）……十歳
小二郎（後に正儀、其三子）……八歳
次郎左エ門（後に正秀、其四子）……六歳
新平（後に正平、其五子）……二歳
攝津守正氏（其弟）
帶刀正季（其弟）
南江備前守正忠（其妻の兄）
惠美太郎正遠（其妹の夫）
和田五郎正隆（其一族）
橋本八郎正員（同）
宇佐美河內守正安（同）
伊藤兵部義和（同）
矢尾新介正春（同）
神宮寺太郎兵衞正師（同）
江田四郎高次（同）
安田五郎正光（同）
富田七郎正武（同）

河原九郎正文（同

岡田四郎兵衛友治（同）

三石藤内行隆（同）

箕浦兵衛朝房（同）

觀心寺中院律師瀧覺坊聖瑜（其師）……七十餘歳

僧授翁（前萬里小路中納言藤房）……二十九歳

廣嚴寺鐵堂和尚……五十餘歳

水分の佐兵衛……六十餘歳

勅使四條中將隆光

人見源次資兼（尊氏の密使）……二十五歳

足利左馬頭直義

藥師寺十郎次郎公平（其臣）

櫻井兵尉康光……四十餘歳

細川卿律師定禪

お久の方（正成の妻）

奥羽の方（正成の妹、正遠の妻

ことせ（佐兵衛の孫）

楠木一族の侍、お久の方の侍女、乳人、觀心寺の僧侶、楠木方の武士、足利方の武士、いづれも多數

## 序幕

（河内國赤坂城に近き、寄手塚と味方塚との前。大なる松樹數株あり、其下に大小二基の五輪の塔。大なるは寄手方、小なるは味方塚。いづれも、楠木正成が敵味方の戰死者の遺骸を埋め、其供養の爲めに、新たに建立したるもの。その向ふは斷崖低く河内の平野に垂れて、近く石川の奔湍、水分神社の鳥居社殿を瞰下し、遠く葛城、金剛の二峰を眺む。

時は延元元年五月十九日の午後。

塚供養の導師、觀心寺中院の瀧覺坊以下十餘人の僧侶が轉讀する理趣經の聲の裡に幕上る。

楠木正成は長子庄五郎と、次男二郎との手を取り、寄手塚に燒香し、お久の方は小次郎、次郎左エ門の二子の手を曳き、侍女に五男新平の手をひかせ、六男六郎は乳人に抱かせて、味方塚に燒香し居る。

此燒香の間衆僧は次の祈願文を讀誦す。

「今上天皇、寶祚延長、國體鞏固、萬民快樂、佛日増輝、常轉法輪、大小神祇、三世諸佛、現世安穩、後世安穩、乃至法界、平等利益。」

燒香終つて正成夫妻は定めの座につく。正成の右方にはお久の方の兄南江備前守正忠、妹吳羽の方の夫[illegible]美太郎

正遠、正成の弟攝津守正氏、帶刀正季、一族宇佐美河內守正安、伊藤兵部義和、矢尾新介正春等居列び、お久の方の左方には正成の妹吳羽の方、侍女、乳人等座し居る。

正成（瀧覺坊に一禮して）まことに有難うござりました。多年心にかけて居りました、無慘の戰死を遂げた、敵味方の不幸な人々の、修羅の妄執を慰めてやる事が出來ましたので、正成、やつと心が明るくなつたやうな氣が致します。近頃かやうに快いことはござりません。

瀧覺坊「怖畏なる軍陣の中にても、彼觀音力を念ずれば、もろ〳〵の怨み悉く退散せん」とさへ御佛は白された。況してかやうに入念の供養をしておやりなされたのでござるから、敵味方の亡靈いづれも、三業の罪過を消滅して、諸佛の前に生ぜん事、疑ひもござらん。いつもながら慈悲憐憫の心のふかい正成どのゝなされ方には、瀧覺坊感服の外はござらんよ。

正氏　わたくしなども、幼少の時から、兄上の庭訓をうけて居りますから、出來るだけ博愛の心は失ふまいと力めては居りますが、一天萬乘の君に弓を引き、多年われわれに仇をした敵方の亡靈までも、この樣に供養をしてやらうなどゝいふ佛心には、どれもなれさうもありません。

正季　併し何日にも、敵味方と分れて、互ひに恨み合つた以上は、この呼吸の根が止つたからと云つて、急に愛し合ふといふのは、普通の人情にはちと遠くはありますまいか。柔和忍辱を商賣の種にして居る坊さんたちならいさ知らす、弓槍を取つて天下の怨敵退治に一身一家を犧牲として居るわれわれ武門に生れたものには、抹香くさ過るやうな氣もするがなあ。

正成（微笑を含みながら）又正季の批判ぐせか。場所柄を知るといふ事も、武門に生れたものゝ謹むべき事だぞ。

正季　併し……

正成　それに人おの／＼信ずる所がある。一々批判し合つて居たのでは、人間の世に爭ひの種の盡る時はないからな。

正季　併し、今の人間は餘りに面從腹非で、思ふ事を云はな過ぎると思ひます。折角王政復古の大事業を成し遂げながら、幾年も經たぬ中に、今日のやうな動亂を見るに至つたのも、心の底の不平不滿を出し切れずに居た人々が、一時に勃發させた爲めではないでせうか。

正忠　いや、わたしはその反對だと思ふ。新田左中將や、足利どのは、餘りに他人を批判し、我意のみを推通さうとして、此春の樣な大亂を速いだのだと思ひますが。

正遠　わたしも同じ見方だ、公卿方でも武家方でも、兄上のやうに、穩かな遜つた心をさへもつて居て下さつたら、中興の御事業も萬世に涉つて、光りを失ひはしなかつたらうと思ふ。

正季　併し……

瀧覺坊　それは正遠どのゝ云はれる通りだ。併し正成どのゝ、風が吹いても波立たぬやうな玲瓏和平な心境には、なかなか容易な事では到達の出來るものではないよ。自分が幼少から守り育てたからいふのではないが、同じ楠の根からふいた芽でも、正成どのといふ幹は、風雨にもまれ方が、正季どのなどの樣な新芽とは鍛え方が大分違ふからの。多聞丸の昔、この觀心寺へ來られた時から……

正成（迷惑さうに苦笑して）師の坊の正成自慢が又初まりましたな。師の坊の多年の御教導の御恩、それは語に盡せませんが、弟たちの敵を愛する心の薄いのは、一つは時勢の罪ではござりますまいか。私の育ちました時代には、何と申しても人間の心が今日の樣に荒んでは居りませんでした。人と人とが相愛し、語らひ合ふ事を知つて居りましたが、

弟たちの御心のつきます頃から、人の心が不思議に險しくなりまして、此國は相憎み、相殺す事が人間の常道の樣になつてまゐりました。さういふ世界を見慣れて育つてまゐりました弟達の心に、菩提精進の種の芽ぐむ暇のないのも、不思議ではないかと思ひます。いや、それよりも、此供養塔建立を思ひ立ちました發頭人は、此お久なので、わたくしはお久が發願に引づられて、師の坊に御世話を願つたに過ぎません。正成ばかり御褒めに預つては、却つて面目次第もござりません。

瀧覺坊（快げに笑つて）成程、其話は一度伺つた事もあつたが、つひ失念して居つた。わしは年を取るにつれ、所謂判官贔負が烈しくなつて、正成どのゝ外は目に入らんでな。もつとも折々は贔負の引倒しもやるやうぢやが。はゝゝは。（お久の方の前に進んで）奥方、わしは改めて御禮を申し上げる。奥方も赤坂、千劍破の二度の籠城の間は、水分の館で氣の毒な程、心配もされ、難儀もされたばかりでなく、今日供養の寄手方の中には、御一族の退引ならぬ怨敵も交つて居る筈ぢやに、その怨敵の後世の冥福をはかつておやりなさるとは、梵網經に示された「父母六親を殺して報を加へず」とある、御佛のお心を其儘の、有難い、尊い心ぢや。地下に迷ふて居つた敵味方の亡靈は、いづれも喜んで居る事でござらう。

お久の方　その樣な御語では、却つて御恥かしう存じます。あの石川河原や、赤坂城の下で、雨露に曝されて居た敵味方の白骨を見ますと、氣の毒にも憐れに思はれまして、つひ殿に願つて見たくなつたまでゞござります。併し、左樣な發願の心が起りましたのも、實を申しますと、門前の小僧何とやらで、殿の朝夕の慈悲心と、呉羽どのゝ信仰のあつい御心とに導かれたに過ぎませぬ。

呉羽の方　わたくしの信仰などは、姉上に比べますれば、日輪の光の前の火縄の火ほどに生温いものでござります。

お久の方　只此上は師の坊の御助けによりまして、殿が御寺内に建てかけて居られます、あの[illegible]日も早く見たいものでござりますが。

瀧覺坊　あの塔は、正成どのが一代の心願、國土鎭護、聖壽萬歳祈願の爲めではあるが、わしは又あの塔の落工が、正成どの無事息災の祈願成就のしるしと心得て居るのぢやから、あれが出來上らんと、如何も心が落つかん。あの塔の建築成就までは、正成殿が戰爭に出ない樣にと、わしは朝晩本持佛の愛染明王へ御祈り申して居るのぢや。（正成に）あれはいつ頃まで出來の見込みかな。

正成　普請一切の事は、甘南備（かんなび）の兄上と、正遠どのに奉行を賴んでござります。（兩人に）たしか來春早々に落成の筈であつたかな。

正忠　そのつもりで工匠人夫を催促致して居りますが、あの塔を建て初めましてからは、妙に妨げが起りましてな。

瀧覺坊　（不安さうに）なに、妨げが？

正遠　何に、大した事でもござりませんが、金堂の修覆が思ふたよりも大仕事でござりまして、思ひながら長引きました。併し一重はもう組上げましたから、來春御庭の牡丹櫻の咲きます頃までには落慶の式を擧げたいと思ふて居ります。

瀧覺坊　聞けば、一旦九州へ逼塞した筈の足利勢が、また威勢を盛り返して、都へ攻め上ろといふ事ぢや。そんな事のない中に、正成どのゝ所望通り、大師御自作の大日如來と阿彌陀とを、あの中へ勸請したいものぢやなう。

（淨瑠璃寺の鐘の聲聞ゆ）。

正成　（日昇を見て）もう未の刻か。御一同はここで御[illegible]ござらう[illegible]の塔にて、[illegible]しててござりま

す。正成も程なく參つて御相伴を致しますが、まづ取敢へず兄上と、正遠どのに御案内を頼みませう。奧や妹も、伜たちを連れてお供をするがよい。

久子の方　はい。

正忠　師の坊、お供致しませう。

瀧覺坊　では、御雜作に預かるとしやう。

（正忠、正遠を先に、瀧覺坊と衆僧とは、打つれて上手へ去る）。

久子の方　では庄五郎も、二郎も、さあ參りませう。

庄五郎　わたしは父上のお供をするのでござります。

久子の方　でも……

正成　それなら庄五郎だけは、あとへ殘して置くがよい。

久子の方　では、お先に參ります。さあ、吳羽どのも。

吳羽の方　では兄上、後程御目にかゝります。（久子の方は五人の伜たちと、吳羽の方とを伴ひ、上手の方へ去る。侍女乳人等もあとよりつゞく。松籟の聲、谷川のひゞき）。

正成（正氏と正季とに）二人とも許してくれ。流石の師の坊も、お年を召されたせいか、近頃はちと一徹心が强くなられたやうだ。おまへたちもさぞ聞きにくかつたらう。

正氏　なんの、瀧覺御坊の云はれる方がほんとうでござります。何といふても、わたくし等はまだ心の鍛錬が足りません。戰爭ばかりして居ると、人間は餘計馬鹿になる樣な氣が致します。

正季 (苦笑して) 併し悧巧な奴は、戦争をしては官位や名聲を高めて行く。それを指を咬へて黙つて見て居る兄上の料簡が、わたしには呑み込めぬ。

正氏 (叱つて) これ、又其様な……

正成 (笑つて) 正季、おまへはそれ程官位が欲しいか、名聲がそれ程羨ましいか。

正季　わたしはまだ若うござります。

(一座默然。此時下手の奥に方つて、爭ふ人々の聲、やがて格鬪の音する)。

庄五郎　やつ、喧嘩ぢやな。

正季　一人は八郎の聲らしいぞ。

(罵しり騒ぐ聲、爭ふ物音。やがて橋本八郎正員は、水分の佐兵衛の手を抑へながら出づ。佐兵衛の孫娘こゝせは泣きながら斧をもつて跟き來る。)

佐兵衛 (身を揉みながら) これ、離して下せえ、はなして下せえ。おらああの寄手塚を打ちこわさねえでは腹が癒えねえだ。

(八郎の手をふりほどき、こゝせの持てる斧を奪つて、寄手塚の方へすゝむ)。

庄五郎 (立塞つて) ぢい、何をするのだ。

佐兵衛 (稍氣勢をそがれながら) 和、和子さまか。(俄かに思ひ返して) 邪魔だ、どいて居て下せえ。おらあ、あんげなものあ見ちやあ居られねえだ。

こゝせ　ぢいさま。そ、そんな勿體ない……(止むるこゝせを振飛ばして、背後の方へすゝむ)。

庄五郎（手にせし鞭をふり上げて）ちい、無禮な事をすると許さんぞ。父上の御建てになつたものへ其樣な事をするのは、父上に手を上げると同じだぞ。

佐兵衞（稍萎みながら）だつて、和子さま！

（尚進まんとするを、庄五郎は鞭をあげて、佐兵衞の斧をもてる手を打つ。佐兵衞斧をおとす。ことゞせ之を拾ふ。佐兵衞取り返さんとするを、正員後より抱きとめ、侍たちは佐兵衞を縛めんとする）。

正成　手荒なとをするな。佐兵衞、いつもにない、如何したといふのぢや。

佐兵衞（引すへられて、汗と涙とを一緒に拭ひながら）どうも如斯もあるこつちやあねえ。お、おらあ、その寄手塚が、無體に癪に障つてなんねえだ。

正成　それは又何故にぢや。

佐兵衞　殿さま！おめへさまあ、一體何と思つて、そんなものを建てさつしやつたど。

正成　此塚を建てたのが、何で悪いのぢや。

佐兵衞　これが悪くなけれあ、大塔の宮樣の首い取つた淵伊賀守だつて、天子さまに弓を引く足利どんだつて、此上もねえ善人だ。見、見たくでもねえそんなものをぶつ立てゝ、おらあ目障りでなんねえから、ぶつくぢいてやるだあ。

（又ことゞせの手より斧を奪ひ返さんとするを、八郎は抑へる。）

正成（微笑を含んで）如何して此塚がそれ程迄に、おまへの氣に入らぬのかな。

佐兵衞　氣に入るも入らぬもあるものけえ。こ、この塚の下には、一體、な、なにが埋まつて居るだね。

正成　問ふまでもない事ぢや。その札にもかいてある通り、寄手の人々の白骨を集めて埋めてあるのだ。

佐兵衛　さあ、その寄手といふ奴等は、おめへさまが自分の生命より大事がらつしやる天子さまへやらちやあねえか。

正成　うむ。

佐兵衛　それぱかりぢやあねえ。おまへさまの一門眷族の中でも、あいらの矢先、鋒先にかゝつて、生命を取られたり、不具にされたりしたものが、何十人とあるでねえか。おらが倅の勘十の野郎だつて……（涙ぐんで）默つて鉄の柄せえ握つて居れば、安樂に天道様の光を浴びて居られたものを、いや國の爲めで候の、朝廷の爲めで候のつて、用でもねえ事におだてられたばつかりで、もちつけもしねえ槍刀抔をひねくつた揚句の果が、可哀さうにくたばりかけて居る此老爺と、頑是無え此孫を殘して、敵の矢先にかゝつて死んでしまつたゞあ。

正成（悲しげに首肯いて）うむ！

佐兵衛　それでも勘十の野郎は、殿さまの爲めに一命を捨てるのだ、惜い事あねえと、自分だけは滿足して死んだのだから、まあ仕方がねえと、無理にも諦めはつく様なもの、妹のお信の身の上ばかりあ、佛さまだつて、瀧覺坊の和上様だつて、あれが御自分の身内だつたらう、未來永劫諦めはさつしやるめえ。あいつめ、亭主の命を取られた上に、てめへの命より大事にかけて居た操とやらせえ、敵の奴等に取られてしまつたゞ。

（正成兄弟は顔を見合はす）。

佐兵衛　あの晩の事ばかりあ、何遍死にかはつても、おれには忘れられめえ。あゝ一昨々年の二月の末の事だつけ。名越何とかいふ叔父甥揃つた助倍大名が千劍破の下へやつて來て、江口や神崎の遊女ばかりぢやあかつ足らねえといふので、近習近たちの女房衆を引さらつて行つては、長陣の退屈凌ぎの相手にさせたもんだ。おらが妹のあのお信も

容貌好しに生みつけられたのが身の災難となつて、獣物の様な敵の爲めになぐさみものにされてしまつたゞ。それが口惜い、面目ねえ、死んだ亭主にあはせる顔がねえと云つて、其晩直に千早川の、あの逆まく流れへ身を投げて、可哀さうに、たつた三十で、死、死んでしまつたゞ。そ、そんな非道な事をする寄手の奴が、何、何で可哀さうなのだ。死骸は犬や鳥につゝかせ、殘つた骨はおらが足のひらで、踏みにじつてやつてせえ、まだ怨みは晴らし足りねえに、塚まで立てゝ供養するたあ何のこつた。あんな奴等の亡魂は、八萬奈落の底へなげ込んで、針の山や血の池地獄で出來るだけの苦艱をやらせてこそ、天道さまの依怙贔負のねえ思召にかなふ筈だ。だから、おらあ、おらあ、あの塚をたゝつ毀して、浮みかゝつたあいつらの亡魂を、も一度無間地獄のどん底へ、たゝつ込んでやらずには置かれねえ。

（佐兵衛は身悶えして泣く。孫も祖父を慰めかねて泣く）。

正成（目をしばたゝいて）ぢい、それは濟まなかつたな。其頃わしは千劍破の城にたてこもつて居たので、おまへの嫁の身に、その樣な氣の毒な事があつたとは、今の今まで知らずに居た。改めて嫁の菩提は弔ふ事にする。どうぞ許してくれ。

佐兵衛（大聲に泣き出して）今頃になつて、そんなやさしい事を云つてくれさしつても、死んだ者は生き返つて來てくれねえ。あんな親孝行な嫁が、生え先のねえこのおれを棄てゝ死ぬといふなあ、よくせきの事だつたに相違ねえ。あいつが彼世へ行つて、倅の奴に逢つた時、ど、どんなせつない思ひで詫びをしたか、お、おめへ様方にあ、とても察しもつきはしめえ。

正成　佐兵衛、許してくれ。國の爲め、君の爲めばかり思ふて、同じ郷に生れた手近な人たちに、こんな大きな歎きを

かけて居る事を忘れて居た。併しおまへの伜の死骸は、此味方塚の下で、立派に成佛して居る筈ぢや。そ

は何卒安心して呉れ。

佐兵衛　其伜だつて、怨みのある敵の奴等なぞと、一緒に供養をされたところで、な、なにが嬉しいものか。それに、おめへさまは、足利どんがそんなに怖えのか、敵の奴等の塚石ばかり大きくして、味方塚の見すぼらしさは何といふ事だ。おらあ、それが第一氣にくわねえ、劫が煮えてなんねえだ。

正成　成程、たゞ一筋に敵を呪ふおまへの心からは、左様取るも無理はない。が、これは敵方の死人の數が、味方に比べて何十倍と多かつたので、かうしたまでの事ぢや。供養の心に大小の隔てのあるわけではない。どうぞ悪しく思はないでくれ。

佐兵衛　塚石の事あどうでもいゝ。建てた心が間違つて居るのだ。此味方塚の下に居る人たちあ、どんなに腹あ立て居るか知れたもんでねえ。

（正成は愁然として瞑目する）。

正季　兄上、如何でござります。あなたの足下にも如斯いふ人間が居るのでござりますぞ。佛くさい柔和忍辱では、飾りと僞りとを知らない人間の中は押し切れませんぞ。

正氏　これ、何故その様な失禮な事をいふのだ。左様でなくてさへ、兄上のやさしい胸は、痛みを感じておいでになるのだ

正成　（佐兵衛に）成程おまへのいふ事にも一理は有る。が、佐兵衛、わしが初めて赤坂の城へ立てこもつた時、寄手の手負ひが、石川河原の氷の上で、傷手に苦んで居るのを見るに忍びないと云つて、自分の家へ連れて行つて、介抱を

してやつたのは、佐兵衞、おまへでは無かつたか。

佐兵衞　え〻！

正成　惻隱の心は仁の端なりぢや。生きて居るもの〻此世の苦痛を除いてやりたい心があるなら、未來永劫修羅道の苦惱に陷つて居る亡靈とて、救つてやる氣には、どうしてなれないのぢや。

佐兵衞　え〻！

正成　もつとも其時には、おまへの伜はまだ討死はして居なかつたらう。嫁もその樣な恐ろしい死は遂げて居なかつたらう。おまへが敵を憎む心の燃えさかつて來たのは、無論それから後の事であらうが、敵方の將卒にも、親もあり子もあるのぢやぞ。其親や子は、矢張此正成や味方のものを怨んで居やう。其人たちの心を思ひやると、わしにはあの山と積まれてあつた寄手方の死骸を、あのま〻棄て〻置く勇氣はなかつた。佐兵衞、わしの心も察してくれ。

佐兵衞　殿さま、おめへさまは、自分の生みの子供を殺して見ねえから、そんな氣樂な事を云つて居なさるのだ。子供の愛情といふものあ、殺して見なければ分るものでねえ。(又泣く)。

(正成默然として首うなだれる)。

正氏　佐兵衞、それはちと云ひ過ぎはせぬか。われ〳〵とても一族を殺して居る。從弟も死んだ。叔父も死んだ。

正季　それに命數なれば、疊の上でさへ非業の死を遂げるものもある。君國の爲めに犧牲となるのが、何が不足だ。

佐兵衞　それでもおめへさま方は、戰さの功名で、任官されたゞ。褒美をお貰ひなされただ。併し、併し、おらが伜は！おらが嫁は！(泣く)。

こゝせ　祖父さま、なんぼ云つても盡きはしねえよ。さあ、大概にして歸りませう。(手を執つて促がす)。

佐兵衛　さあ、その寄手といふ奴等は、おめへさまが自分の生命より大事がらつしやる天子さまへ、弓を引いた逆賊やらぢやあねえか。

正成　うむ。

佐兵衛　そればかりぢやあねえ。おまへさまの一門眷族の中でも、あいらの矢先、鎗先にかゝつて、生命を取られたり、不具にされたりしたものが、何十人とあるでねえか。おらが[illegible]で）默つて鍬の柄せえ握つて居れば、安樂に天道様の光を浴び[illegible]のつて、用[illegible]

（庄五郎、佐兵衛
下手へ去る）。

正成　かやうなところへ御來臨を蒙つては、恐縮の外ございません。水分の館へ御案内致しませう。

隆光　いや、それには及びません。これへまゐる途中で、備前守どのや、眞美どのにも御目にかゝつて、こちら
たので、すぐに馬を走らせた位でございますから。

正成　それは尙々恐れ入りました。（正氏、正季、正員等を顧み）そちたちは遠慮せえ。

一同　はあ。

（正成と隆光とを除く外、悉く上手へ去る。松籟の聲、川水の音）。

正成　都には何か異變がございましたか。

隆光　一大事が起りました。此春西海へ逃げ下つた足利尊氏、直義の兄弟でございますが、いつの間にか九州を切り
けまして、此度百萬に餘る大軍を率ゐて、上洛の途に上り、既に此月十五日には備前國兒島へ着船、直ちに兵庫へ進發したとの注進がございました。

正成　それだから、あの時追討の事を、新田どのにお勸め申したのであつたが（間）お上にはさぞ叡慮をお惱まし遊ばし

正成　（佐兵衞の前にすゝみ、其手を執つて）佐兵衞許してくれ。此正成も時さへ來れば戰場で

日心にさへ適ふなら、倅も、孫も、楠木の一門一家は、必らず兵戰の裡に身を果すでおらう。佐兵衞、それで倅や孫の怨みを棄てゝくれ。どうぞ心の修羅を消してくれ。

佐兵衞　（烈しく感憤して、大地に兩手をつき）殿樣、わしが惡かつた。許して下され。倅はいゝ事をして討死してくれた。わしも殿樣と一緒に討死する。而して敵方からの供養でも、喜んでうけますべえ。

正成　佐兵衞、分つてくれたか。わしは嬉しく思ふぞ。（又佐兵衞の手を執る）。

佐兵衞　殿樣、殿樣、勿體なうございります。（感泣する）。

（下手より侍かけ入る）。

侍　都より勅使として四條中將隆光卿御來臨でございます。

正成　（驚いて）なに、御勅使だと？（正氏と正季に）おまへ方二人で、水分の館へ御案內申してくれ。わしも直ちに歸館して、御對顏するとしやう。

兩人　はつ。

侍　いや、勅使には、もうこれへ御見えになります。

正成　（不安さうに）餘程火急の御用と見える。（正行に）、それでは庄五郎、おまへは佐兵衞とこの女をつれて、水分の館へ行け。そして母に勅使御饗應の用意をする樣にといふてくれ。

庄五郎　畏りました。

佐兵衞　わたくし共は、これでお暇を申しませう。

正成　今夜からは二人とも、館の内に居るがよい。庄五郎、先程からの次第を母に話して、二人の寝所をよくしつらへてくれ。

庄五郎　はい。では、ちい、行かう。

佐兵衞　有難うございます。

（庄五郎、佐兵衞、こゞせ等上手へ去る。やがて下手より勅使四條中將隆光卿、侍に伴はれて入り來る。侍たちは下手へ去る）。

正成　かやうなところへ御來臨を蒙つては、恐縮の外ございません。水分の館へ御案内致しませう。

隆光　いや、それには及びません。これへまゐる途中で、備前守どのや、惠美どのにも御目にかゝつて、こちらと伺つたので、すぐに馬を走らせた位でございますから。

正成　それは尙々恐れ入りました。（正氏、正季、正目等を顧み）そちたちは遠慮せえ。

一同　はあ。

（正成と隆光とを除く外、悉く上手へ去る。松籟の聲、川水の音）。

正成　都には何か異變がございましたか。

隆光　一大事が起りました。此春西海へ逃げ下つた足利尊氏、直義の兄弟でございますが、いつの間にか九州を切り靡けまして、此度百萬に餘る大軍を率ゐて、上洛の途に上り、既に此月十五日には備前國兒島へ着船、直ちに兵庫へ進發したとの注進がございました。

正成　それだから、あの時追討の事を、新田どのにお勸め申したのであつたが（間）お上にはさぞ叡慮をお悩まし遊ばし

てでござりませうな。

隆光　それ故お上には、一刻も早く正成を召寄せて、防戰の手配に及べとの勅諚でござります。

正成（感激して）數ならぬわたくしへ、わざ／＼の勅使、感泣の至りに存じます。それに致しましても、西國へ赤松退治に向はれた新田どのは、如何して居られるのでござりませう。

隆光　新田どのゝ軍略は、總て捗々しくまゐりませんで、三石の城も、赤松の城も其まゝに、兵庫まで引退いたと申す注進が、今朝未明に京着致しました。御前にては只今軍評定の最中でござりませう。御苦勞ながら、直ちに御參内の儀を御願ひ申します。

正成　委細畏りました。早速用意をとゝのへ、一門の誰彼を召連れ、おあとより參着致します。御前よしなに御披露を願ひ置きます。

隆光　承知致しました。さてこれは隆光一個のお尋ねでござりますが、奇謀妙計に富まるゝ判官どのゝ事でござりますから、此大軍を喰ひ止める手段は、乾度胸中にお蓄ひでござりませうな。

正成　敵方の委しい樣子を承はりません中は、卒爾に御返事も出來ませんが、併し今春あれほどの大軍を洛中へ入れてさへ、終には西海へ追ひ下しました例もござりますから、必ずしも防戰の手立が無いとも限りますまい。いづれ左中將どのから、委しい御沙汰もござりませう。それを承はつてから、愚存の程も申し陳じませう。勿論、諸將方にも、なにか御名案のある樣子でござりますか。

隆光　いや、平素は智慧自慢の坊門宰相清忠どのでさへ、顏色を變へてふるへ上つて居りますばかり、異口同音に、ただ正成を呼べ、楠木判官を迎へよと、偏に判官どのゝ參内を待ちこがれて居られます。

正成　かやうな時に、大塔宮様にても君側においでなされましたら、左様に勁揩をしませえでも、宸襟を慰め奉る工風もござりませうに、殘念な事でござります。

隆光　判官どのと宮様とは、お親しうなされておいでゝあつたから、一層お懐からお思ひになるでせう。わたくしは又萬里小路藤房卿と竹馬の友でござりましたから、かやうな時にはあの人が思ひ出されてなりません。

正成　惜まれる人は、いつでも早く世を去ります。(悄然となる)。

隆光　更に角一刻も早く立還りまして、お上を御喜ばせ申しませう。どうか成るべく御早く……

正成　一晌違ひ位で、參內が出來ませう。

隆光　では、これで御別れ申します。

正成　そこまで御見送り申し上げます。

(兩人退場。舞台しばらく空虛。鐘の聲。夕映の色山々を染む。正成ひとり歸り來る。正氏正季も上手より入來る)。

正氏　何事か起つたのでござりますか。

正成　足利殿が百萬の軍勢を率ゐて上洛するといふ事ぢや。

正季　ふむ、それで、いつかの兄上の獻策を用ひなかつた、不明の罪をわびにでも來られたのでござりますか。

正成　(少し怒氣を含んで)お上は御軫念遊ばして居られるのぢや。皮肉をいふて居る時ではないぞ。

正氏　それにしても、中國へ向はれた新田左中將どのは、如何いしたのでござりませう。

正成　兵庫まで引上げられたさうぢや。

正氏　新田殿の手にどれ程の軍勢があるか知りませぬが、敵の百萬に對しては、十分の一も覺束ないでせう。

正季　どうせ、又新田どのの得意の戰法で逃げかへるのだらう。それには少い方が、足手纏ひでなくて都合がよいだらう。

正成（笑つて）批判辯ももう大體にせえ。(間) 兎も角も直に參内せねばならん。おまへたちは急いで水分へ歸つて、一同に出陣の用意をしろと觸れて呉れ。

正氏　なに、出陣の用意と仰有りますか？

正成　都へまゐつたら、多分歸國の暇もあるまい。急げ。

兩人　はつ。

（兩人は上手へ去る。正成は斜陽の中に立ちて、心しづかに二つの塚に禮拜する。下手より侍入來る）。

侍　行脚の雲水が、御對面を願はれますが……

正成　なに行脚の僧？（沈思して）して、法名は？

侍　お名宣りになりません。

正成　風采は？

侍　笠を目深くお被りになりまして、只左様申上げたら、逢ふて下さる筈ぢやと仰せられました。

正成（再び思案して）左様か。うむ。兎も角もお通し申せ。

侍　はつ。

（侍、下手へ去る。正成は去り行く後を見送つて、なつかしげに[illegible]と、[illegible]の上[illegible]、水分

の館の方にあたつて起る。やがて、馳せ違ふ馬蹄の音も聞ゆ。

侍は今は授翁と名のる僧形の萬里小路藤房卿を伴ひ來る。侍去る。と、正成はかけ寄つて）。

正成　おゝ、矢張藤房卿でござりましたか。

授翁（笠を脫いで）姿は浮世を棄てても、尙三界をさまよふ藤房のさとられぬ魂が、再びこゝまで迷ふて參りました。判官どのあの出陣催促の法螺の音を聞くにつけても、わしは面目次第もござらん。

正成　都は北山の岩藏、不二房が許においでと、風の便りにきゝまして、早速おたづね申しましたが、たゞ一騎の違ひで、御行衞を失ふてしまひました。今生では再度の御對面は賴まれぬ事と、諦めてばかり居りましたに、折も折、ここで御目にかゝれますのは、正成に取つて、此上の喜びがございません。それにしても、何としてこの赤坂へは？

授翁　足利勢また〳〵都へ攻め上るとの取沙汰で、都は鼎の沸き立つ樣な騷ぎぢや。禁裡には、相變らず、賢い人は多くござらうが、彼樣な一大事の時に方つて、物の役に立つべき人物が幾人ござらうか。今となつては、さぞかし孤獨のわびしさに、大御心を痛めておいで遊ばすであらうと御推察申し上げては、浮世を思ひ絕つた此授翁胸が痛む。餘りの心元なさに、是非に再びおみを煩さうと、身の恥を忍んで私かにこれまで參つて見れば、君を思ふ忠男は今も昔も變りない判官どのぢや。勅命と聞くや否や、出陣の用意とは、此授翁とは雲泥萬里の忠肝義膽、二人の心にこれ程の隔りがあつたかと、今更に此身の不甲斐なさが心を責めまする。

正成　それでは今でも都近くに御遁世なされておいでなのでござりますか。これ程までお上の御身を思はれ[illegible]心が殘つておいでなさるなら、今一度俗の世へお立還りなされて、御輔佐の任におあたりなさるゝ思召[illegible]んか。

授翁　いや、わしにはそれ程の自信もなければ、勇氣もござらん。お互に身を焦し、心を碎いて、中興の大業がやつと成就したかと思ふと、あの醜い、きたない世の樣は如何でござつた。いや、それをいふまい爲めに、世を遁れあたまを丸めた此授翁ぢや。もう改めてはいふまいが、たゞ一つ如何にしても忘れられぬのは、判官どの、おみの身の上ぢや。さして武功もない輩が、或ひは宰相となり、將軍とまでなり上りながら、三十萬の大軍を身一つに引受けて、朝廷をあの金剛山の上より安きに置いたおみの恩賞は、たつた攝津河内の二國に過ぎなかつた。わしはこれを思ふ毎に……（口惜げに太息をつく）。

正成（淋しく笑つて）此正成は河内の邊土の披郷士に過ぎません。攝河兩國をあて行はれたさへ、分に過ぎた恩賞と思つて居ります。清和源氏の累葉たる人々が、高位高官を獲られるのは當然のことでござります。それを羨むやうなきたない心が、微塵でも此胸に萠しましたら、わたくしの守り本尊なる信貴山の毘沙門天の冥罰が立ろに下りませう。それよりもおいたわしは大塔宮樣の御身の上でござりましたな。あの赤坂の城からお立退き遊ばされて後の御艱難だけを申しましても、たゞ涙の種でござります。彼君一人おいで遊ばしたゝめに、中興の大業が成就したと申しましても誰に異論がござりませう。それ程のおん方がよしや多少の御過失（おんあやまち）があつたればとて……（言々激越の調を帶びて來たが、急にまた思ひ返して）いや、女々しい感慨を申上げて、面目次第もござりません。あの英邁な高貴のお方が、あの樣な非業な御最期をお遂げになり、忠誠無二のあなたまでが、此世を思ひ棄てゝおしまひなさるといふのも、つまり時の運、神佛の思召でござりませう。あの水分の館で、お互に行末の事を語り合ふた事がござりましたが、今更思へば痴人の昔物語りでござりましたなあ。

授翁（目を瞬かせて）あゝ、あの時は、おみの健氣な、しかも學問を根柢にした勇氣に勵されて、われ〳〵の心も全く

の光りに輝いて居つたが、理想の世界が現實となつてあらはれると、あらゆる事が夢より果敢なく消えてしまつた。而して宮樣はあの御非行から御非運、わしは又望みと勇氣とを一時に失つて、見苦しくも姿をかくしてしまつた。その中で判官どの、おみばかりは終始一貫、忠節の心を失はずに、よくも朝廷の爲めに竭して下された。これ程の忠誠の英傑を擧げ用ひらるゝ眼識もおはさず……（云ひさして）いや、わしの方こそ出家に似合はぬ述懷をならべ立てた。況して人の批判など出來る授翁では無かつたに、さぞ片腹いたい事でござつたらう。併しおみの相變らぬ誠忠を見る上は、出陣のさい先に、緣喜でもない行脚の坊主が、いつまで御邪魔をすべきでない。安心してお暇申す。

正成（殘り惜げに）此上還俗をお勸め申したとて、空世辭に過ぎまい。正成も參內に心が急きまするから、これで御別れ申します。もう此上の再會は望まれますまい。（思ひ入つていふ。）

授翁（じつと正成を見て）わしが勅命を奉じて、笠置から初めて此水分へまゐつた時、「正成一人未だ生てありと聞召されたら、聖運終に開かるべき時ありと、御心安く思さるゝ樣」と、勅答されたことがござつたな。（正成嗟嘆する。）あの時のおみの勅答は、今日の場合一層切實ぢやと思ふ。何卒生命を大事にかけて、末永うお上の爲めに御奉公が願ひたい。

正成（顏を曇らせて）いや、あの時とは人の心も時の勢ひも違つて居ります。あの時はたゞ聖恩の忝さに感激して、あれにもあらず思ひ上つた事を申上げました。今更思へば身に相應はしからぬ、大言壯語を吐いたものでござります。面目次第もござりません。今日あの樣な事を申しましたら、御側の方々から狂人あつかひにされるかも知れません。

授翁　いやいや成程人の心は違つて居やう。併し時の勢は同じ道を繰返して通つて居る。斯樣な事を申すのは、全く御佛に說法ぢやが、判官どの、どうぞ天下國家の爲め、短慮な心は起さずにな……

正成、あなたとて聖朝安穩、天長地久の御祈を、いつ〳〵までも御怠りなさいませんやうに、正成が
げます。

投翁　では判官どの。

正成　藤房卿、いや、御法名は。

投翁　投翁と申して居ります。

正成　して御隱棲は。

投翁　おみにばかりは詐りはいひたくない。洛外の妙心寺ぢや。

正成（驚いて）なに、妙心寺と仰せられますか。まことに大隱は市にかくれるでござりますな。それなればいづれ凱陣の上……

投翁　蔭ながらそれを祈つて居ります。

（此時上手の方に馬の嘶き、轡の音。）

投翁　誰やら參る樣子ぢや。では愈々御別れぢや。

（投翁は笠を被つて下手へ去る。正成は悄然として後姿を見送る。正忠と正遠の二人武裝してかけ入る。）

正忠　判官どの。

正遠　兄上。

正成　あゝ出陣の仕度は整へましたか。

正忠　一月御待申して居りましたが……

正遠　餘りお手間が取れますので、御迎へにまゐりました。
正成　行脚の僧と思はず長話をして、とんだ暇を潰した。では參らう。
正忠　それにしてもあの觀心寺の三重の塔は如何致したらよろしいでござりませう。
正成　如何にも仕方があるまい。あの儘にして置くばかりぢや。
正遠　瀧覺御坊は、さぞ力をお落しになるでせうな。
正成　(淋しく笑つて)あれほど力を籠めた建武中興の御事業さへ、如何なり行く事か。明日をも賴まれぬ世の中ぢや。萬事は參內してからの事ぢや。
(正成は靜かに上手へ去る。兩人つゞく。日漸く暮し——幕)

# 第二幕

(攝津櫻井の城主櫻井兵尉康光が庭前。中央に古松一株、下手は一面の庭樹の植込み、其後に母屋の見ゆる心。上手も木振面白き庭樹、夏草の花壇などあり。處々に菊水の紋打ちし幕を張る。
正面は天王山を近く望み、寶積寺の三重の塔は、其山腹に塔頂を露はす。
前幕より三日の後。
庭上には處々に楯板を敷き、正季を中央に、武裝せる楠木の一族、前幕の正員、正隆、正安、義知、正純、たびに神宮寺太郎兵衛正師、江田四郎高次など、はげしき昂奮の色を示して居並ぶ。
宿雨漸く收まつて、虹の影午後の空を彩る。虹はしばらくして消ゆ。折々行々子の聲聞ゆ)。

正員　今の殿の仰せられた詔には、どうも腑に落ちかねる節があると思ふ。帶刀さま、あなたも軍評定の事はよく御承知な筈だ。見られた通りを聞かせては下さりませんか。

正季　うむ。實はおれの方から云ひたかつたのだ。あいつらに唾を吐きかける氣で、惡口をたゝいてやつたら、昨日から此むしやくしや腹に、石のやうに固まつて居た不平の思ひがちつとは和くかも知れないからな。

正隆　一體、一昨日からの禁裡の軍評定といふのは、どんな風だつたのでござります。

正季　如何もかうも、まるで形なしだ。なみの人間に三本毛の足りない鼻缺猿の公卿共の參會だ。一昨日の朝御前に伺候した時には、どれもこれも目が釣上つて、人間の顏色をした奴が、一疋も居なかつた。それでも兄上の顏を見たら、いくらか氣が落着いたものと見えて、「逆徒院宣を請ひ申して、西國九州の兵を驅り集め、百萬騎の多勢を率ゐて、海陸より攻め上るさうぢや。何とかして逆賊を攻め破り、上は宸襟を安んじ奉り、下は萬民塗炭の苦みを救ふ手立はあるまいか」と勿體らしく云ひ出した男がある。

正安　それは何といふ人でござりました。

正季　殿上人の面なぞを一々覺えて居て堪るものか。月に八度の武者所の結番に伺候しても、あいつらは挨拶一つした事のない高ぶり方だ。おれは地下から見上げて居るせいか、あいつらの面といふのは咽喉佛の事かと思つて居るよ。はゝゝは。

正安　そこで殿は、何と御返答をなされました。

正季　おれならば「今となつて下萬民もないものだ。如斯までせつぱつまらぬ中に、何故おみたちは御補佐の大任をつくして、仁政を御布きにならなかつたのだ」と、ひしやりとやつゝけてやりたい處だつたが、兄上は何處まで氣がよ

いか分らぬ。眞面目になつて、逆賊退治の名策を立てたものだ。

和義　して、其名策と申しますのは。

正季　手短かにいへば、新田どのゝ軍勢は數も少なく、疲れても居らう。自分の手勢はもとより敵の千分一にも足りぬ。それではまともの勝負はとても出來ぬ。そこでもう一度お上に山門へ御臨幸を願はう。そして敵の奴等を又洛中へおびき入れる。自分は一旦河内へ歸つて川尻を塞ぎ、洛中の敵を兵粮攻めにする。奴等がすつかり參つてしまつた處を見すまして、新田どのは山門から攻め下らるゝがいゝ。正成は搦手から攻め上せて、一戰に奴等をたゝき倒してしまはう。と、かう申上げたのだ。

正春　さすがに殿だ。如何なる死地に身を置いても、不思議なところに活路をおもとめになる。評定に加はつた連中もさぞ喜んだでござりませう。

正季　うむ、周章狼狽まるで人心地のなかつた奴等も、兄上の此智謀には、ほつと呼吸をついたらしかつた。而して一旦は正成が機略の通り取計ふべしといふに治定したものだ。

正師　それが如何して、俄かに兵庫下向といふ事に風向きがかはつたのでござります。殿に於せられても、一旦防戰覺束なしと仰有つた合戰を、お引受けなさるも不思議だと思ひますが。

正季　そこが山猿共の智慧の足りない所なのだよ。翌日になると軍議一變といふ事になつて、目ばかりキョロ〳〵させて戰慄ばかりして居た坊門宰相清忠といふ長袖め、急に賢人になりましたといふ樣な面をして、眞先にしやく〳〵り出たものだ。「未だ戰をも交へざるに、山門へ臨幸は怪しからぬ。況して一年の内に二度も京都をお捨てになつたとあつては、甚だ帝位の輕きに似て、官軍の道を失ふ所ぢや。且つはこれまでも小勢をもつて敵の大軍を破つた例は澤山に

有る。これは全く將士の武略のすぐれた爲めではなくて、唯陛下の御聖運が大道に適
も、たしかに官軍の上にある。早々兵庫へ罷り下つて、義貞と共に、逆賊を攻め亡せ」と、いふ事になつたのだ。

高文　なに、是迄の勝利は、將士の武略のすぐれた爲めでないと申しましたか？　これは殿に對する此上もない無禮過言だ。そんなにまで罷じられて、それでも勝ち目のない合戰をするのは、馬鹿げた骨頂ではござりませんか。

正員　全くだ。すわ一大事といふと、泣面ばかりかわいて居て、われ〳〵の足手纏ひになる外に、能のない長袖どもが、何といふ無禮なぬかし方だ。それほど戰爭がして見たくば、あのべら〳〵物をかなぐり棄てゝ、三日も野宿をして見るがいゝ。

正隆　それにしても、殿は何故（なぜ）彼等の愚蒙を教へてはおやりにならなかつたのでせう。前の日の戰も献策に贊同した連中は、如何したのでござります。

正季　あいつらはあの虹の様に自分の色といふものがまるでないのだ。だから無論定見といふものゝ有やうがない。それにあいつらは、今度の戰で、兄上のいふ通りになると、又第二の足利が出來はしまいかと、兄上が煙つたくつてならないのだ。

正隆　馬、馬鹿な。あれ程公明正大な、微塵も私心といふものゝない。殿の胸中が分らないかなあ。殿に少しでも野心がお有りになつたら、新田や足利などには貧乏籤をおさせにはならないのだ。兎に角もう如何にもならないでせうかな。

正季　そこへ行くと兄上は、世の中の事が人より早く見え過るので困つてしまふ。「かうなつたのも綸綍の思召だ。今更仕方がない」と仰有つて、すぐにお受けをしてしまはれたのだ。

正安　併し、みすく勝てべき戰さに、無理に負けるのは劫腹でござりますな。これも相手が相應に兵法にでも長けて居て、お互ひの立場が違ふとでもいふのなら、詮方もござりませんが、あの坊門淸忠といふ男は、いつか尊氏の手先になつて、大塔宮さまを、ぺてんにかけ樣とした、思慮もなければ見識もない、二股公卿では有りませんか。

義和　長袖の生兵法はいつでもこれだ。保元の昔にも、鎭西八郎爲朝の夜討をこばんで、つまらない名聞から、おのが生命を縮めた賴長といふ馬鹿公卿があつた。元弘には笠置へさへ落ちられた事があるではないか、山門への御還幸ぐらゐは、一月一度づゝおやりになつても知れたものだ。今に熊野の奧へでもお供をしないやうに用心をするがいゝ。

正季　あいつらは、その時迄には足利方になつて居るよ。

正春　何にしても殘念だなあ。かうなると、今度の戰さは、わざと負けて見せたい樣な氣もするなあ。

正季　併し左樣なつては、一番お困りになるのは、お上だからなあ。

正師　それに殿はお上の爲めなら、どんな無理な事でも、平氣でなさるお方だからなあ。

高次　だからあの公卿どもは、默つて殿の言に從つて居ればいゝのだ。いらざる猪子才などを出さなければいゝのだ。

正員　何にしても此儘あの馬鹿公卿どものいふ事を聞くのは殘念だな。帶刀さま。もう一度殿へ申上げて、出來る事なら都へ引還さうではござりませんか。而して殿の御考へ通りにやつゝけやうではござりませんか。

正季（愉快さうに）みんなが其心なら、一番兄上にぶつゝかつて見るのも面白いな。

正隆　誰に異存があるものですか。足利をやつゝけると同時に、分らずやの公卿どもにも、殿の力を見せつけてやるのですから。

正季　よし、それならみんな揃つて來い。兄上に申上げて見やう。

（一同下手の方へ進まんとす。正氏出で來る）。

正氏　騒々しい。如何したのだ。

正季　兄上に兵庫下向を思ひ返していたゞくつもりで、これから一同推かける處だ。兄上も御同意でせうな。

正氏　そして如何しやうといふのだ。

正季　もう一度都へ還つて、山門臨幸をお上に願つていたゞくのさ。

正氏　馬鹿な、そんな事が出來るものか。兵庫進發は勅諚だ。

正季　併し、將軍閫外に在る時は、王命といへども奉じない事がある。

正氏　それが出來る位なら、兄上はこゝまで御出陣なさるものか。兄上は、どんな間違つた事でも、勅命とあれば、なんでもお背きなさる事が出來ない方なのだ。

正季　併し……

正氏　（悲しげに）正季、おまへには兄上の昨日からのあの物思ひに沈んでおいでになる御様子が見えないのか。あの思ひ出の多い赤坂の城を焦土にして御退去になつた前の晩でさへ、あの温顔に微笑を湛へておいでになつた兄上も、昨夜計りはまんじりともなさらなかつたらしい。夜半の雨に夢を破られて、わしは見るともなくお寝間の方を見たら、兄上は具足をつけられたまゝ、短檠の下で、兵書を讀んでおいでなされた。今引還す事の出來る程なら、兄上は昨日既に坊門宰相の思慮のない議を説破して居られる筈だ。兄上の事であるから、大局の落着く處を達觀してしまはれて、死地に生くべき途を定めて居られるのだらう。われ／＼が騒ぐ位の事は、疾うに考へつくして居られるのだ。八郎、五郎、いや河内守までよい年齢をしながら、正季をおだてゝ呉れては困るではないか。

正安　併しあの坊門清忠は、これまでの官軍の勝利を、殿の武略のすぐれた爲めではないと申しましたさうで……

正氏　誰が何を云はうと、兄上の武略は敵方でさへ認めて居るでは無いか。それに兄上は自分の名聞の爲めに、義兵をお擧げになつたのでは無い。お上が笠置へ御遷幸のあつた時、藤房卿をおつかはしになつて「正成賴む」の御一言を頂いたので、あの心の正しい兄上は、それを無上の光榮として、御一身はおろか、一門一家を犧牲にして、皇室の爲めに働いておいでになるのだ。お上さへ知つて居て下されば、兄上はその以上何ものをもお望みはなさらないのだ。

正員　併しお上は、ほんとうに殿の功績をお認めになつておいでゝせうか。

正氏　(稍躊躇して)さあ。

正隆　果して御存じなら、殿の恩賞を新田殿や、足利兄弟の下にお置きになる筈はないと思ひます。一方が征夷大將軍の、左中將のといふ高位高官を占めて居るのに、殿ばかりが猫の額のやうな攝津と河內の國主に過ぎないといふのは……

正氏　(愁然として)それをいふな。お互ひの心が卑しく見える。兄上はさういふ事をいふのが、一番お嫌ひなのだ。

正季　(太息をついて)兄上は今の世の中に生れて來る人ではなかつたのだ。人間が餘りに潔白過る。

正氏　左樣思つたら、尙更兄上のお心を騷がすやうな忌な耳を御聽かせ申してくれるな。兄上も今度ばかりは餘程お心を痛めて居られるらしい。泉の如く滾々と湧き出るあの智略も、今度ばかりはさう行かぬらしい。それでも兵書を讀破して、此難境を斬り拔ける道を覓めておいでになるらしい。それが御自分の爲めではなくて、御自分を信じ切つてくれぬ人の爲めにする事なのだから御氣の毒だ。そこへ行くと、われ〱は仕合せなものだ。自分を信じてくれ、自分が信じて居る人の爲めに、たゞ默つて働けばそれでいゝのだからなあ。

正季　だからわれ〳〵の力で、あいつらに自分を信じさせればいゝぢやないか。

正氏　それが出來ないから、兄上は餘計に苦んでおいでになるのだ。（一段と聲を低めて）それに兄上はひよつとしたら、討死を覺悟しておいでになるかも知れぬだ。

正季　外に途はなからうさ。われ〳〵は絕壁へ鼻面をおしつけられながら、なぜ早く通り拔けぬと、尻つぺたを鞭でたたかれて居る樣なものだからなあ。

正氏　おまへは如何して、さう口が惡いのだ。

正季　（苦笑して）大きい兄上にも、仲の兄上にも似ないところを見ると、おれは楠木の寄生木かも知れないな。

正氏　（釣込まれて微笑する）。困つた男だ。（寶積寺の塔を見て）あの塔が如何も目障りだ。兄上は今もあれを見て太息をついて居られた。而して甘南備の兄上と惠美どのに、觀心寺の三重の塔は、生前には見られなくなつたなと、しみじみ仰有つた。

正季　あんなものが、そんなに氣になるものかなあ。

正氏　兄上はあの塔それ自分を、皇室の御繁榮の象徵(しるし)のやうに思つて、建立を思ひ立たれたのだからた。

正季　兄上は幼少から、あの中院の瀧覺坊の教訓を受けて居られたので、どうも佛の匂ひがつよ過る。あれが兄上の長所の短所だ。あの佛臭さの爲めに、おれは惡いと知りつゝ、皮肉を云ひたくなる。

正氏　おまへのは皮肉をいひたいために、兄上の短所をほじくつてゐるのだ。（下手を見てやつ）兄上がこちらへ來られる。もう何も申上げない事にしてくれ。どうぞ兄上の心を煩さないで置いてくれ。おゝ [illegible]
さあ、みんなあちらへ行かう。

正季（一同を顧みて）如何する。
正員（一同と顔を見合せて）殿にそれほどの御苦心があるなら、餘計な事は申上げぬ方がいいだらう。
正氏　どうぞ左樣してくれ。さあ、行かう。
（正氏先に立ちて一同上手へ去る。遠く淀川船の船歌聞ゆ。正成は正忠、正遠及び櫻井康光夫妻と共に出で來る。正成、正忠、正遠の三人は武裝し、正成は手に南蠻鐵の鉢割をもてり）。
正成（正忠に）伜やお久がまゐつたら、直に發足致しませう。一同に仕度をさせていたゞきたい。
正忠　承知いたした。
正遠　わしも小荷駄の檢分をしてまゐりませう。
正成　それは御苦勞ぢや。
（正忠正遠は上手へ去る）。
康光　今一晩御泊りは願はれませんか。今晩は自慢の淀鯉を差上げたいと存じますが。
正成　いや、左樣致しても居られません。併しから大勢が思ひもかけぬ御もてなしに預つては、御禮の申上げやうもありません。これが打寬いでの最後の宿りかも知れませんから、わたしどもに取つては、よい思ひ出になりませう。
康光　して今晩は？
正成　萱野泊りと致すつもりでござります。
康光　併しあそこには、御一同を御泊め申す樣な大きな家はない筈でござりますが。
正成　あそこで野陣を致す筈になつて居ります。

水無瀬 （夫の顔を見ながら）それならば、いつそもう一晩當家へお泊[illegible]

正成 いや富春以來、しばらく戰爭をなまけましたので、一同身體がなまつて居りさうでござりま[illegible]
引しめてつかはしませんでは。

康光 わたくしなども、等しく朝恩に浴して居りながら、多病とは申せ、一向に何の働きも致さず、判官どのに對し
て、面目次第もござりません。

正成 いや、人にはそれ〴〵變つたつとめがござります。戰爭ばかりが武士の仕事でもござりません。都間近に住まは
るゝ方には、矢張禁裡の守護を願ふのが、一番よろしいと存じます。

（向ふより武士一人かけ來る）。

武士 奥方と和子樣とが御出でになりました。

正成 おゝ、これへ案内してくれ。

武士 はつ。

（向ふへ去る）。

康光 では、わたくし共は失禮を致します。

（夫妻立上る）。

正成 いや、お引合せ申したい。しばらくこれへ。

康光 御邪魔ではござりませんか。

正成 （笑つて）一寸逢つてやつていたゞきたい。河内の田舍者で、何も心得ぬ女でござりますが。

水無瀬　では御目にかゝらせていたゞきませう。

（二人も又楯板の上に佳ふ。向ふよりお久の方と庄五郎とは、先刻の武士に伴はれて出づ、侍女一人つき添ふ。武士たちは鎧櫃を舁きて出づ）。

庄五郎（正成にすがりつきて）父上、とう〳〵參りました。

正成（たゞの好々爺になり濟して、庄五郎の頭を撫でつゝ）うむ、よう來たな。（櫻井妻子に）この樣な遠慮のない奴でござります。（庄五郎とお久の方に）櫻井どの御夫婦ぢや。今度は大勢があつい御世話に預かつた。

（お久の方と庄五郎とは夫妻に挨拶する）。

お久の方　それは忝い事でござります。荒くれものばかりで、さぞ御迷惑でござりましたらう。

康光　何の手前どもこそ。都にては判官どのに、何かと御世話に預つて居ります。此後とも何分よろしく願ひます。

水無瀬　何にしてもこゝは庭先、どうぞあれへお通り下さりませ。

正成　いや、兩人には申し聞けたいとがござります。暫くこゝを拜借致しませう。（武士に）供のものは、御案所でもお借り申して休息させるがよい。

水無瀬　いや、わたくしが御案内申上げます。

お久の方　それでは却つて恐れ入ります。

水無瀬（供の者に）さあ、かうお出でなされませ。

（康光夫妻先に、召仕たち下手へ入る。武士は一禮して向ふへ去る。行々子鳴く）。

正成　うむ、わしも急に逢ひたくなつたのでな。年齡のせいかの、今度は不思議に[illegible]

庄五郎、父上、わたくしも、初陣が出來るのでございますか。

正成（笑つて）それで鎧櫃をもつて來たのか。

庄五郎　はい。

正成（尙笑つて）おまへはまだ早いよ。

庄五部　併し其中に戰さの無い時が參りは致しませんか。

正成（苦笑して）左樣なれば結構ぢやが、おまへ一代、いや何代も戰さをせねばならぬ事になるであらう。

（思はずお久の方と顏を見合はす。お久の方默然となる）。

庄五郎　これでも今度は父上と一緒に戰さがしてみたいなあ。

正成　さういふ時節が來るかも知れぬ。併し今度はもう一度留守居せえ。

庄五郎　でも、わたしはもう十二歲になつて居りますよ。

正成　併しまだ戰さの仕やうは知らないからな。

庄五郎　いゝえ、存じて居ります。父上が戰場へ出られて御留守の間でも、わたくしは將監や母上から、兵法の講釋を伺つて居ります。孫子も、吳子も、六韜や三略も、みな讀んでしまひました。

正成　それはえらいなあ。父は此春以來一緒に暮して居りながら、それ程とは知らなかつた。（懷中より卷物を取出し）ではこゝの件を讀んで見い。

庄五郎　おゝ、これは三略でございますな。（讀む）「[illegible]道[illegible]、五つの[illegible]は一[illegible]なり。[illegible]人の[illegible]、[illegible]人の[illegible]

所、義は人の宜しき所、禮は人の體する所、一つも無かるべからず。故に夙に興き夜に寐るは禮の制なり、賊を討じ讎を報ずるは義の決なり　惻憫の心は仁の發なり、己を得、人を得るは德の路なり、人をして均平にして其所を失はざらしむるは、道の化なり……」

正成　うむ、よし〳〵意義も解つて居やうな。

正行　分つてゐるつもりでございます。申上げませうか。

正成　いや、それにも及ぶまい。ではもう一つ尋ねる。吳子の治兵第三に、死に居つて生を得るの道を說いた件がある。知つてゐるか。

正行　お待ち下さい。ちよつと考へて見ます（間）意味だけは覺へて居ると存じます。「吳子曰く、凡そ兵戰の場は、屍を止むるの地なり。死を必ずする時は則ち生き、生を幸するときは則ち死す。其の善く將たる者、漏船の中に坐し、燒屋の下に伏するが如く、智者をして謀るに及ばず、勇者をして怒るに及ばざらしむれば、敵を受けん事可なり。故に曰く。兵を用ふるの害は、猶豫最も大なり。三軍の災は狐疑に生ずと。」

正成（嬉しげに）もうよい〳〵。よく覺えたものだ。（お久の方に）お久、正成改めてそちに禮をいふぞ。

お久の方　何、何でわたくしに……

正成　この正成、六人の子を儲けながら、自分は兵馬に身を委ねて、其養育はいつもおまへの手一つにまかせて置いた。將監や左近も側には居るものゝ、實をいへば倅たちの生ひたちに、多少の心かゝりがないでも無かつた。併し庄五郎が今のさかしさ――と、云つても庄五郎慢氣を起してはならぬぞ。慢氣の恐るべきは、孫吳略韜、みな說いてゐる。そちも充分知つて居やう……

庄五郎　はい、多少は心得て居るつもりでござります。

正成　わしはそちをさながらにさかしいといふ。庄五郎の此様子を見て、やつと一つ心がゝりが消えた。お久、おまへにさへまかせて置いたら、二郎も小次郎も、其他の倅たちも、庄五郎の弟たるに耻ぢないものに仕立てゝくれるであらう。而してわしの志を襲ぎ得るものが、旣に六人もあるとすれば、正成は枕を高くいつでも此世を去れるわけだ。

庄五郎　（父の顏をじつと見て）では、父上はもう死を決しておいでになるのでござりますか。

正成　（稍聲を勵まして）その尋ね方はおろか過ぎるぞ。苟しくも武士の家に生れたものは、如何なる時、如何なる場合でも、討死の覺悟なくして戰場に臨むべきではない。母は其事をよく知つて居る筈ぢや。わしは赤坂や千劍破に城を築いた時でも、此春の洛中の戰でも、屹度討死の覺悟は定めて居た。さう〳〵、あの折には、都から隼人を河内へ送つて、おまへに遺言の一札を渡した筈であつたが。

庄五郎　はい、その手紙は肌身につけて、もつて居ります。

（肌の守りを懷より取出し、中より一通の書面を引出す）。

正成（受取つて見て）うむ。これだ〳〵。（自から讀む）「此度隼人差下し候事別事にあらず、我等最期近くと覺え候、願くば貴殿成長の器量を見屆度候へども、義之堅き所更に遁れ難く候、彌よ勤學怠りなく、成長の後我等心中察せらるべく候」……此通り、父はいつでも死の覺悟を定めて居る。それで居て、今日まで無事に戰場をかけめぐつて居た。そこがおまへが今讀んだ吳子の謂所「死を必ずする時は則ち生きる」ぢや。死生を超越してこそ、初めてまことの武士といふ事が出來るのぢや。

お久の方　それに致しましても、なぜ今度に限り、わざ〳〵わたくし共をお呼寄せになつたのでござりませう。心得の

爲めにうかゞつて置きたいと存じますが。

正成（笑つて）今もいふ通り、これは年齡の所爲らしいぞ。實は今度の戰ひは、正成の出つくわした何十ヶ度の合戰中で、一番難儀なものらしい。そこでわしはひどく迷つたものだ。ゆふべも眞夜中に目がさえて眠られぬまゝに、呉子を讀んだ。が、今庄五郎の暗やみをした件にぶつゝかつて、あらゆる疑ひが解けた。「兵を用ゆるの害は、猶豫最も大なり、三軍の災は狐疑に生ず」ぢや。正成の兵法、今日までは、如何なる時も、狐疑せず、猶豫せず、敵をして迅雷疾風耳を掩ふの遑なかしめるに在つたが、今度ばかりは狐疑し、猶豫した。その爲めに庄五郎の身も餘計に案ぜられて、おまへたちを呼寄せる事になつたのぢや。今になつて見れば、杞人が天を憂ひたやうなおろかさで、正成、心ひそかに恥ぢて居るのぢや。併しわしも今年はもう四十三ぢや。今までの戰場で無事であつたゞけ、これからは段々危險のめかたが重くなつて行くわけぢや。親子三人が手を取り合つて、のどかに語り合ふ機會も、このつぎにはもう無いかも知れぬ。さうして見れば、おまへたちにわざ〳〵來てもらつた事も無益ではなかつたらしい。いや、庄五郎の學問識見の程を知つたゞけでも、わしの心の曇りを拂ひ去つて、狐疑もなく、猶豫もなく、天空海濶の心をもつて兵戰の場に赴く事が出來る。これも云はゞおまへたちの賜ものだ。正成、これにも禮をいふ。

お久の方　そのおよろこびをうかゞつて、わたくしどもゝ、どの樣に嬉しいか分りません。今度は〳〵と、どの合戰の時でも、お身の上を危みながら、お見立て申して居りましたが、今度ばかりは安心して御送り申す事が出來まする。有難うございまする。（稍躊躇しながら）と、申して居る口の下からかやうな女々しい事を申し出しましたら、御叱りを蒙るかも知れませんが、さかしいと申しても庄五郎もやつと十二歳、當歳の六郎まで六人の小供を、わたくしの手一つで養育致す事は、どうも重荷過るやうに思はれてなりません。かねてからの御敎訓の通り、生死は天命、殊に此

度の様な御難儀の合戰に、お出向ひ遊ばす事でござりまするから、たゞ此[illegible]

せんが、若し神佛の思召に適ひます事ならば、出來ますだけは御身命をお厭ひ遊ばして……（只[illegible]

正成　能くいふてくれた。わしも徐もない生命を棄てやうとは思はん。生きてさへ居れば、まだお上に御奉公の出來る

身體ぢや。併し今度の戰さは、十死に一死を求めるのぢや。萬に一つの手違ひがあつても討死をせねばなるまい。お

まへの兄上も、わしの弟たちも、枕を並べて討死をせねばなるまい。が、喜んでくれ。あの人たちは、喜んでわしと一緒に死ぬ覺悟をもつて居てくれるのぢや。此正成は生れ落ちて、何一つ自得した事とてもないが、たゞ士卒と共に樂みもし、苦みもする事を知つて居る。而してそれは此三略の卷から教へられたのぢや。（又三略を繰展げて、讀む）。「軍讖に曰く、軍井未だ達せざれば、將渇けるを言はず、軍幕未だ辨ぜざれば、將倦めるを言はず、軍竈未だ炊がざれば、將飢えたるを言はず、冬裘を服せず、是れを將の禮と謂ふと」。正成がたつた一つの誇りは、此將の禮を紊る事なく、一兵卒と共に勞苦艱難を分つ事ぢや。一體六韜にせよ、三略にせよ、世間の人は、たゞ用兵の機道を暫いたもの〻樣に思ふて居るが、これこそ正しく國を治め、民を撫育する王道を書き示された聖者の語ぢや。庄五郎、おまへも此二書を熟讀玩味して、出來る事なら、徒らに弓槍を取つて護國の盾となるばかりでなく、治國平天下の御師佐の臣ともなる様に心がけるがよい。（いかにも感慨ぶかげに）それについて正成一生の愚痴をもらす。おまへがた二人だけで笑ふて聞いてくれ。わしは此二書を讀んで、深く感動せられ、一度は正しい仁義の政を、天下に布いて見たいと、願ふて居た。赤坂の城の落ちる前の晩、わしは大塔宮樣や藤房卿と、いろ〳〵未來の夢をお話し申し上げた時、余此二書を宮樣に御覽に入れたのだ。すると殿下にも少なからず興味をおもち遊ばされた。大權一たび元に還らば、みだりは勇を以て天下を治めやう、藤房は智を以て、正成は仁を以て。天下を治めよと仰せられた。其大塔の宮樣に、

に敵を恐れしめて、却つて勇の爲めに身を誤り給ひ、藤房卿は餘りに世の中の裏が見え過ぎて、却つて智の爲めに世をすてゝしまはれた。仁を求めてしかも其仁を行ふ地位に上り得なかつた此正成一人のみが、淋しくも此世に居り殘された。而して此正成もいつまで此世に存ふる事か。思へば人の運命ほど不思議なものはないなあ。

（お久の方と庄五郎とは嗚咽する）。

正成（急に快濶になつて）いや、つまらぬ愚痴をいふて、おまへたちを泣かせたな。しかし愚痴といふものも偶には洩すべきものかも知れぬぞ。わしの心は今日の空の樣にだん／＼明るくなつて行くぞ。そこで庄五郎、（腰の小刀をぬいて）これは先年お上が隱岐の島より還幸の砌、「此度のことは正成そち一人の力であつたぞ」といふ忝ない綸言と共に、下し賜はつた尻懸則長ぢや。どうか楠木家のつゞく限り、子孫のものに語りつゞけて、世にも稀なる朝恩を、永久に傳へてくれ。（前の卷物をまき收めて）それから此一卷は、今も云つた通り、此正成が一生の心の糧ともなり、數十ケ度の會戰の指南車となつてくれた貴重な聖書ぢや。幸ひにおまへの代になつて、この中の語が一々王佐の事業のたすけともならば、正成あの世から禮をいふぞ。お久には此上いふべきこともないが、たゞ心を用ふべきは足利どのぢや。正成一代にあの人ほど賢い人を見た事は無い。如何なる手だてをもつて近づいて來やうとも、決してあの人の甘言に耳をかすな。おまへ程堅固な心のものに、いらぬ用心をさせるやうではあるが、子故の闇に迷ひ易いが親の情ぢや。君子も道を以てすれば欺かれぬものでもない。戒めても戒むべきは足利どのぢやぞ。

お久の方　御教訓一々に肝にいりつけて、屹度御語りの通りに致します。御安心を願ひます。

正成　それを聞いて、わしも心が落着いた。時に、あの書狀は師の坊へ屆けてくれたか。

お久の方　申しおくれて相濟みません。早速觀心寺へお屆け申上げましたら、折惡く御外出とか申す事で、さし置いて

まゐつたさうでござります。

正成　左樣か、それは殘念だつたな。實は師の坊にも一度御目にかゝつて、おまへたちの身の上をお聞ひして置きたかつたのぢやが……兎に角わしが此世を去る樣な事になると、逆徒の手はどこまで延びやうも知れぬ。いつそ水分の館を出て觀心寺へ身を潛めたがよからう。あそこは此正成が、九つから世話になつて居た緣のふかいところぢや。

お久の方　何から何まで有難うござりました。

庄五郎　父上があの中院へお越しになりました足跡を辿りまして、わたくしも師の坊のお敎へを受けませう。

(此時上手に陣鐘大鼓の音聞ゆ。正氏いそぎ入り來る。)

庄五郎　お〻叔父上。

お久の方　攝津守どの。

正氏　お〻、お二人とも能う來られたな。兄上、いよ〱陣押しを初めます。お出下さいませんか。

正成　お〻丁度幸ひぢや。庄五郎もお久も一緒に來い。

(正成先に立ちて、正氏、庄五郎、お久の方上手へ去る。舞臺しばらく空虛。上手の方には、鐘鼓と貝の音と勇ましくひゞく。
笠を目深く被りし旅裝の人見源治資兼、人目を忍んで入來る。安田五郎正光、富田七郎正武の二人、樹木の小陰より窺ひ居る。資兼はそれとも知らず、上手を見て首肯きながら其方へ往かんとす。二人は身を躍らし組付かんとす。)

正光　怪しい曲者ぢや。

正武　どこへ往くのだ。

資兼　(身構へしながら)いや、決して怪しいものではござらん。判官どのに對面したい。御取次下さい。

正光　白晝陣屋を覗ふは、怪しい奴にきまつて居る。

正武　殿に近よつて害め申さうといふ敵の間者に相違ない。正光どの、油斷なさるな。

正光　大丈夫だ。

(三人しばらく格鬪。資兼組みしかる。正武は幕綱を取つて之を縛る。正季、正員上手より入來る)。

正季　どうしたのだ。

正光　白晝、陣所へ忍び込んだ圖太い奴でござります。

正武　如何致しませう。

正季　うむ。手向ひした上は、敵の間者に相違あるまい。出陣の血祭におれが首を刎ねてやらう。

資兼　如何にも、わしは足利方のものに相違ないが、害意をもつてまゐつたものではござらん。から縛められて居るらは、危まるゝところもあるまい。兎も角も楠木どのにお逢はせ下さい。

正員　そんな云ひ譯が何であてになるものか。帶刀さま、一つやつておしまひなさい。

正季　自分から敵方と名のつた上は、急いでたゝつ斬るにもあたるまい。兎も角懷をあらためて見ろ。

兩人　はい。

(兩人は資兼の懷中より一通の書狀を發見す)。

正光　こんなものが出てまゐりました。

正季（表書を讀んで）成程、足利尊氏よりとしてあるな。（上手を見て）おゝ兄上が見えられた。

（正成、庄五郎、お久の方、正忠、正氏、共他の一族悉く出で來る）。

正季　この曲者の懐から、こんなものが現はれました。

正成（ちよつと見て）足利どのからぢやな。見覺えのある手蹟、にせ物ではあるまい。（資兼に）おみは何と思ふて、この様なものを持つて來られた。

資兼　何と思ふて、と仰有りますと。

正成　兵庫から東は、おみたちから見れば敵の陣地ぢや。足利方のものが徘徊するのは危險だと思はれなかつたか。

資兼　それは思ひました。併し主君のいひつけでござります。外に致し方もござりません。

正成　此消息がわしの手に入つたからよいやうなものゝ、今の様に怪しく捕まつて打首にでも逢ふたら如何するつもりであつた。

資兼　それとても天命、餘計な心配を致してもつまりません。（微笑して）併し自分は此先首を斬られませうとも、楠木どのゝ見參に入つて、此密書を御手渡が出來ましたのは、天が主君の志を酌んで下さる證據だと思ひます。兎も角も御讀み下さい。而してかくまでにあなたを慕ひ敬ふ將軍家の眞心をお酌み取り下さい。

正成（不審しげに）なに、足利どのが、わしに好意をもつといふか。（書面を默讀する。不快の色面にあらはる。正忠に書面を渡して）兄上、一同に讀み聞かせてやつていただきませう。

資兼　これは將軍とあなたとの間だけの秘密でござります。事の成就致しますまでに、飽まで御内聞に願ひたうぞんじます。

正成　いや、楠木の家には秘密はない。老若男女、互ひに眞心を明し合ふて居る仲ぢや。兄上讀んでいたゞきます。

正忠（讀む）「此度密使を以て申進候一大事は、國家の利益自他の安福に外ならず候。先つ頃新田左中將義貞、上聞を掠め抽賞を貪り、下愚の身を以て大官を望み、誠に國の蠹毒なり、之を誡めざるべからず、尊氏義に仗て先亡の餘殃を鎭ぜんと欲し、却つて佞人の讒口に眞を亂され、誤つて逆賊の名を享く。遮莫、邪は正に克たず、天定つて人に勝ち、院宣一たび下つて幕下に附隨するもの雲霞の如し。即ち義貞の罪狀を問はんが爲め、こゝに百萬の大兵を率ゐて上洛の時に方り、しきりに貴公の誠忠を懐ひ、年來の舊誼を温らせんと欲す。今畿内五州西海六州を足下に進じて、日夕恭敬の微意を表はす。尊氏不肖といへども源氏累葉の族にして王氏を出でゝ遠からず、貴公は又古今に稀なる智謀武略の英雄なり。共に手を執つて大義を唱へば、天下靡然としてわが幕下に集まり、撥亂反正の大業倏忽にして成らん。委細使者の胸懐に在り、總て内聞を以て申達せん。神明にかけて尊氏に二心なき條、仍て如件」。

正季（腹立しげに）畿内西海を百層倍せよ。日本六十餘州を千倍せよ。それとて兄上の忠誠を一分たりとて揺かし得るものか。尊氏といふ男も、存外目先の見えぬ奴ぢやな。

正氏　それにしても飽まで下手にへりくだつて、兄上を落さうとする彼奴の佞才奸智は全く天性といふべきだ。利祿を追ふ今の世の大小名が、彼の足下へ集まり寄るも不思議ではござりませんな。

正忠　して、これに對するお返事は。

正成（笑つて）改めて返事にも及ぶまい。

資兼　萬死を冒して、これまでまゐつたわたくしの微衷もおくみ取り下されまして、御快諾の御返事が願はしいものでござりますが。

正成　よし、おまへの健氣な働きに免じて、たゞ一言返事をしやう。足利どの、まことにこの正成と手を握らうとの所望があるなら、時を移さず正成の陣門に降參されよと、申上げるがよい。(正光に)五郎、其者の繩をといてやれ。

(正光繩を解く。)

正季　かやうな奴は、たゝつ斬つて三軍に列へる方がよくはありますまいか。

正員　左樣だ、出陣の血祭に恰度よい。

一同　たゝつ斬れ、たゝつ斬れ。

(一同どよめく)。

正成　(之を制して)無用な殺生ぢや、赦してやれ。(密書を投げ返して)さ、早く歸れ。

資泰　では如何しても御和睦は出來ませんか。

正成　いづれ戰場でお目にかゝると足利殿へ申上げえ。

資泰　併しあなたを惜まるゝ將軍家は、一度ではお諦めはなさりますまい。若し重ねて參上致しましたら……

正成　(儼然と)くどい。重ねて來たら有無を云はさず首を刎ねるまでぢや。

資泰　(威服されて)恐れ入りました。

正成　正光、正武、門外まで送つてやれ。

兩人　はつ。(資泰に)お立ちなさい。

資泰　では、今日は此命をお預り申して、かへりますっ。併し……

正季　口の減らぬ奴だ。さも歸れ。

資兼（正季を尻目にかけて）あなたなぞには、わたしの心は分りませんよ。

正光
正武　さあ、お立ちなさい。

（資兼悄然として、正光、正武に護られ、向ふへ去る）。

お久の方　足利どのは、伺つた通り、全くおそろしい方でございますなあ。

正成　正成にさへあの通りぢや。決して油断はならぬぞ。

お久の方　今の密使は、この久に生きた學問をさせてくれました。

正成　庄五郎も分つたらうな。おまへにはもつと大きな土地と高い官位で、釣りに來るかも知れんぞ。

庄五郎　あの人からは、首の外には貰ひたいものはございません。

正成（笑つて）其語を忘れるなよ。

（正遠上手より出づ）。

正遠　小荷駄も手落なく揃へました。

正成　それは忝うございつた。いや、いろ〳〵な妨げに思はぬ時を移した。では、愈々出陣せうかのう。

（康光夫婦、侍女たちに酒肴をもたせて出づ）。

康光　御出陣の祝儀、何はなくともめでたく杯をお上げ下さい。

正成　忝うござる。

水無瀨　御凱陣の節は、又御宿を仰せつけていたゞきたうございます。

正成　さういふ機會がござつたらな。

水無瀬　では、矢張……

（お久の方と顔見合せて、さしうつむく）。

康光　水無瀬、さ、早く御酌をせぬか。

水無瀬　はつ。

（正成に酌をする）。

正成（手にせし鉢割を康光の前にさし出し）これは正成が日頃愛用の鉢割ぢや。御厄介になつた記念として差上げる。御納めを願ひたい。あなたのやうに、和平な日を送つて居られるお方には、人の兜の鉢を割る、この様な殺伐なものは、好もしう思はれぬかも知らんが、

康光　いや、わたくしは生れついての病弱、初めからおのれの分に安んじて、他の功名手柄などは、いつも耳を塞いで聞かぬ様にして居りますが、併しあなたの様に、朝廷の爲めに一身一家をお忘れになり、勇ましい働きをなさるお方を、目のあたりに拝見致しますと、強ひて眠らせてある弱い心も、さすがに羨みの目を開かずには居られません。と、申したところで、わたくしのやうな弱い者が、飛出して見たところで、如何なる世の中でもござりません。わたくしの手本には萬里小路藤房卿が、丁度手頃でござりませう。わたくしにはあなたの眞似はしやうとしても出來ません。併し立派な行ひの方を見て居るのは、嬉しいものでござりますな。わたくしは昨日から急に自分もえらいものになつた様な心が致します。あなたが一夜でもお泊り下されたといふ事、一言でも親しく語をかはして下されたといふ事、それだけで康光夫婦は、此世に生れた甲斐があつた様に思はれます。其上日頃御愛用の品を頂戴したといふ事

は、まことに家門の誇りでござります。子々孫々に傳へまして、家に傳はる弱い心の鉢割と致させます。此上の御願ひには、あなた方御夫婦のお流れを、わたくし共へ頂戴させていたゞきたいものでござりますが。

正成　それはこちらから御願ひ申す事ぢや。(盃をお久の方にさし、康光夫婦へ廻させつゝ)是は先刻も申し上げた通り、河内の田舍者で、何のとり柄もござらんが、たゞ子供の多いだけが、夫婦の自慢でござります。これだけは奥方に是非あやかつていたゞきたい。はゝゝは。

(此間に侍女たちは、一同へ盃を配る。正成は最後に水無瀬の土盃をうけ、その酌にて心地よげにのみ乾し、土盃を地に投げつけ微塵に碎く)。

正成　櫻井どの、重ね／＼の御芳志忝けなうござつた。では、これで御暇申す。

康光　さらば、心より御凱陣をお待ち申します。

正成　馬牽けつ。

(正成立上る。)

正員　殿のお立ぢや。

奥にて武士たちの聲。はあ。

お久の方　それなれば、わたくし共も萱野まで御見送りを致しませう……のう庄五郎。

庄五郎　成るべくは兵庫までお供が致したうござります。

正成　いや、いつまで送つてまゐつたとて名殘の盡るものではない。おまへたちは淀川を越して、橋本、枚方から高街道へ切れるがよい。

お久の方　左様致しませう。

（此對話の間に楠木の一族士卒等大勢、馬を牽いて入り來る。お久の方の侍女、侍たちも出で來り、士卒たちは
を卷き、楯板をかたつけなどし、侍女たちは庄五郎とお久の方の仕度を手傳ふ。此時向ふより正光と正武とは、
呼吸喘ぎ切つてかけ入る瀧覺坊を扶けて出づ）。

正光　殿、河内より瀧覺御坊が見えられました。

正成　（嬉しさを隱し得ず）おお師の坊が。（思はず進み寄る）。

瀧覺坊　（正成に抱きつき）お丶不動明王、お情によつて、とう〳〵和子に逢ひました。

正成　（慈父に對する如く）わたくしも御目にかゝりたうござりました。これでもう思ひ殘す事はござりません。快く一
戰を遂げられます。

瀧覺坊　和子——わしは如何かして居るらしいぞ。けふは正成どのを中院時代の小供の樣に思へてならぬ——正成殿の
無事息災を祈願のためのあの三重の塔は、とう〳〵出來ずにしまふのかのう。

正成　いや、わしの代りに、お久も居ります、庄五郎兄弟も居ります。普請は將監や左近に奉行をさせ、工事をつゞけ
させませう。

瀧覺坊　（黯然として）正成どのが歸つて來なんだら、あの三重の塔も、用の無いものぢや。あの儘立腐れにしたがま
しかも知れぬ。

正成　その樣に思ひ屈しなさるにも及びますまい。正成とて神佛の思召にかなへば、凱陣の出來ぬ事もござりますま
い。これ迄とてもつと危い橋を渡つて居ります。

瀧覺坊　（獨語のやうに）神佛の思召……神佛の思召……（思ひ返して稍々元氣にして）さうぢや。あなたがてくれゝば、お上のお心も一日だけ餘計休まるといふものぢや。そしてわしも一日だけ餘計に御佛へお勤めが出來るといふものぢや。

正成　いや、その上あなたには妻や倅の御面倒を願はなければなりません。書面をもつて御願ひ申し上げました通り。

瀧覺坊　（俄かに元氣を示して）さうぢや。ほんにわしには大きなつとめがあつたのぢや。わしはもう一度若返つて、第二の楠木正成を作り上げるのぢや。庄五郎どの、一生懸命にやらうぞ。

正成　庄五郎は、仕合せな者ぢや。

（正成馬へ乘る）。

正成　貝の役。

武士　はあ。

（貝を吹く。一同隊伍を整へ、肅々として向ふへ進み行く――幕）。

# 第　三　幕

## （一）

（兵庫會下山下の海岸。一帶の松林、遠く波打際見ゆ。

五月二十五夜の月いまだ出でず。たゞ海を覆へる多數の敵船の篝火は、海波を赤く染め成して、陸地に在る人々の姿は、すべて影繪の如く黑し。

上手に正成、馬を躍らして彫像の如く立てり。その背後には菊水の旗と、「非理法權天」の旗とをもちて、正以、正隆等、士卒と共に立つ。

稍離れて正忠、正遠の二人、負傷をつゝみながら立つ。

近く波の音、鷗の聲、稍離れて矢叫びの聲、(金鼓の響き)。

正遠　兄上、やつと又一緒になれましたな。

正忠　(笑ひながら) 斬つても〳〵斬りつくせません。人間の數は存外多いものでござりますな。

正成　味方はたつた七百騎、敵は左馬頭の手だけでも五十萬騎といふ事ぢや。一人で七十人づゝ斬らねば、互角の勝負はならぬ筈ぢや。それにしても弟共にはお逢ひになりませんか。

正遠　二人とも、敵の總大將左馬頭直義のみを目がけて、追ひまはして居られます。

正成　逃げ足の早い直義ぢや。二人の手にはとても合ふまい。大抵にして置けばよいに。

正忠　われ〳〵も副將高師泰を討取らう、夢野一圓追ひまはしましたが、群がる敵にかけ隔てられ、とう〳〵姿を見失つてしまいました。

正成　何しろ、先程から三時も戰ひつゞけ、十五合も敵をかけ惱ましたので、味方の數は一度毎に減つて來る。もう大抵にして一門一族一まとめになりたいものじやな。

正忠　わたしも少し倦きて來ました。此儘冥土へ行つても、閻羅王に自慢のならない事はありますまい。

正遠　併し、せめて大將分の首の三つ四つも土産にしたいものだなも。

正成　では、兎も角も、今一働きして見るかな。

（海岸の方に喇叭の聲、金鼓のひゞき。細川卿律師定禪の一隊、炬火を翳して進み來る）。

定禪　そこに居られるは楠木河内大夫判官正成殿でござらうな。

正成　（屹と見て）左樣いふおみは。

定禪　此春の洛中合戰に、三百の小勢を以て、新田左中將が二萬餘騎を走らせた細川卿律師定禪でござる。楠木どのとは初めての對面ぢやが、御首は此入道が申受けますぞ。

正成　よい相手ぢや。いつにても進上致す。

（双方入り交りて激しき血戰。楠木勢は敵を追まくつて下手へ入る。月出でてあたりを照す。

足利左馬頭直義は、馬に鞭ち、たゞ一騎となつて、向ふより、逃げ來る。正氏、正季の二人はあとを追ふ）。

正氏　逆賊足利直義、卑怯にも後を見せるな。

正季　同苗帶刀正季だ。楠木河内太夫判官正成の弟、攝津守正氏……

直義　逆賊とは無禮な申條ぢや。われ〳〵兄弟は、畏くも院の御所の勅命によつて、逆徒新田左中將義貞を退治に向つたのぢや。楠木どのとは何の恩怨もない。引退つて見物せられえ。

正氏　此期に爲んで、問答は無益ぢや。それ弟……

正季　左馬頭、首を渡せ。

（二人斬つて懸る。決戰、直義屢ば危くなる。向ふより藥師寺十郎次郎公平、二尺五寸の小長刀を揮つてかけ來り、二人に斬つてかゝる）。

上手に正実、馬を廻らし二影覚の[illegible]には[illegible]の枝と[illegible]「[illegible]天山」の枝とをもちて、正

正勝等、[illegible]に[illegible]

[illegible]、正遠の二人、負傷をつゝみな[illegible]

[illegible]の青、[illegible]の里、[illegible]の[illegible]、[illegible]。

正遠　兄上、やつと又一緒になれましたな。

正忠　(笑ひながら) 斬つても／＼斬りつくせません。人間の数は存外多いものでござりますな。

[illegible]も五十萬騎といふ事ぢや。一人で七十人づゝ斬らねば、互角の勝負

[illegible]んか。

[illegible]れます。

[illegible]いに。

[illegible]捕てられ、とう／＼姿を見失

[illegible]し来る。

[illegible]

（向ふより河原九郎正次駈け入る）

正次　殿、殘念でござります。

正成　如何したのぢや。

正次　新田どのゝ軍勢は總崩れとなりました。生田の森を捨てゝ御影の方へ落ち

正季　おれの云つた通りだつた。

正氏　そして、敵の軍勢は。

正次　海陸の軍勢を一つにして、たゞ味方をめあてに推寄せてまゐります。

正成　今度の戰ひで、一番恐れたのは、新田勢との聯絡を絶たれる事だつた。此會下山に陣を
つた。併しその恐れた事が、思つたより早く來た。孫子呉子が出て來やうと、もう防戰の途は
あの一村立てる森の中に、一際高く屋根の見えるのは、いつか休んだ事のある廣嚴寺らしい。今
て、あそこで生害しやう。

（此時四方に吶喊の聲、金鼓の響、大地を震撼して起る。一同屹となる――幕）。

公平　おゝ小御所でゐらせられますな。千金の子は盗賊の手に死なずぢや。こゝは薬師寺十郎次郎が引受けました。早く御引取なさい。

直義　頼むぞ。

(公平は直義の馬を打つ。馬躍り、姿を松林のあなたに消す。正氏すぐ後を追ふ。正季も公平を斬倒してあとを追ふ。向ふより、水分の佐兵衛、あたりを見まはしながら出づ。俄かに起る吶喊の聲に驚いて、松林の中へ身をかくす。上手より正氏、正季、又敵の大勢を相手に出づ。松林の間より、正安、義和、正春、其他、敵と鬪つて出づ。大亂戰。正氏と正季を除く外、悉く敵を追ふて去る。正氏、正季うつとりとなる。正成は徒歩にて、蓑毛の如く矢を負ふて入來る。菊水の旗と、「非理法權天」の旗を飜して、正忠、正遠、正員、正隆其他十餘人の一族、多くの將卒と共に出づ。正員と正隆とは、正氏兄弟を介抱す)。

正氏　(目を開き正成を見て、抱き寄る) 兄上。

正季　(同じく心づいて正成に縋る) 兄上。

正氏　兄上、御無事でござりましたか。

正成　七度別々になつたが、とう〱又一緒になつたぞ。これで一緒に死れるなあ。

正季　たゞあの直義めを打洩したのが殘念でなりません。

正成　足利殿兄弟は運にかなうた人たちや。凡人の力では如何もならぬ人たちぢや。

(此時向ふにて吶喊の聲烈しく起り、金鼓の響一段と烈しくなる。佐兵衛は狼狽して下手より出づ)。

正成　やあ、おまへは佐兵衛ではないか。

佐兵衛　あゝ、殿さまだ。よ、よく御無事で居て下すつた。

正成　如何して斯様なところへ參つた。

佐兵衛　殿さまと一緒に死にゝめえりました。

正成　(左右を顧みて)　律義な男もあるものぢやな。(と、佐兵衛の手を取る。佐兵衛聲をあげて泣く)。

(向ふより河原九郎正次驅け入る。)

正次　殿、殘念でござります。

正成　如何したのぢや。

正次　新田どのゝ軍勢は總崩れとなりました。生田の森を捨てゝ御影の方へ落ちてまゐります。

正季　おれの云つた通りだつた。

正氏　そして、敵の軍勢は。

正次　海陸の軍勢を一つにして、たゞ味方をめあてに推寄せてまゐります。

正成　今度の戰ひで、一番恐れたのは、新田勢との聯絡を絶たれる事だつた。此會下山に陣を置いたのもその爲めであつた。併しその恐れた事が、思つたより早く來た。孫子呉子が出て來やうと、もう防戰の途はない。(向ふを見て)　あの一村立てる森の中に、一際高く屋根の見えるのは、いつか休んだ事のある廣嚴寺らしい。今一度敵をかけ惱まして、あそこで生害しやう。

(此時四方に吶喊の聲、金鼓の響、大地を震撼して起る。一同屹となる——幕)。

## 二

(瀟洒なる禪室、楣間に明極楚俊が「無爲庵」の額をかゝぐ。廣嚴寺塔中無爲庵の一室。

上手にさゝやかなる佛壇、燈明の光り細々と室内を照す。正面の窓よりは、和田の岬わたり遥かに見ゆ。

庭前には四方竹、芭蕉などあり、曉の風にそよぐ。

室内には正成以下一族十六人、下手に廣嚴寺住職鐵堂和尙住ひ、庭前には將卒四十餘人、稍離れて佐兵衛うづくまる。

波の聲、風の音、折々杜鵑啼く。)

正成「兩頭倶に截斷して、一劍天に倚つて寒し」。お庇蔭によつて、落處の秘奧に徹しました。忝うござります。たゞ清淨な佛地を血を以て汚します事が、御氣の毒でなりません。

鐵堂　いや、それは少しも苦うござらん。當山がかゝる忠義な人々の最期の場となりまする事は、御佛もさぞ御喜びでござりませう。では、心靜かに御生害なされませ。愚僧は本堂へまゐつて回向を致しませう。

(徐かに挨拶して去る)。

正成　佐兵衛、おまへには賴みがある。河内へ還つてくれぬか。

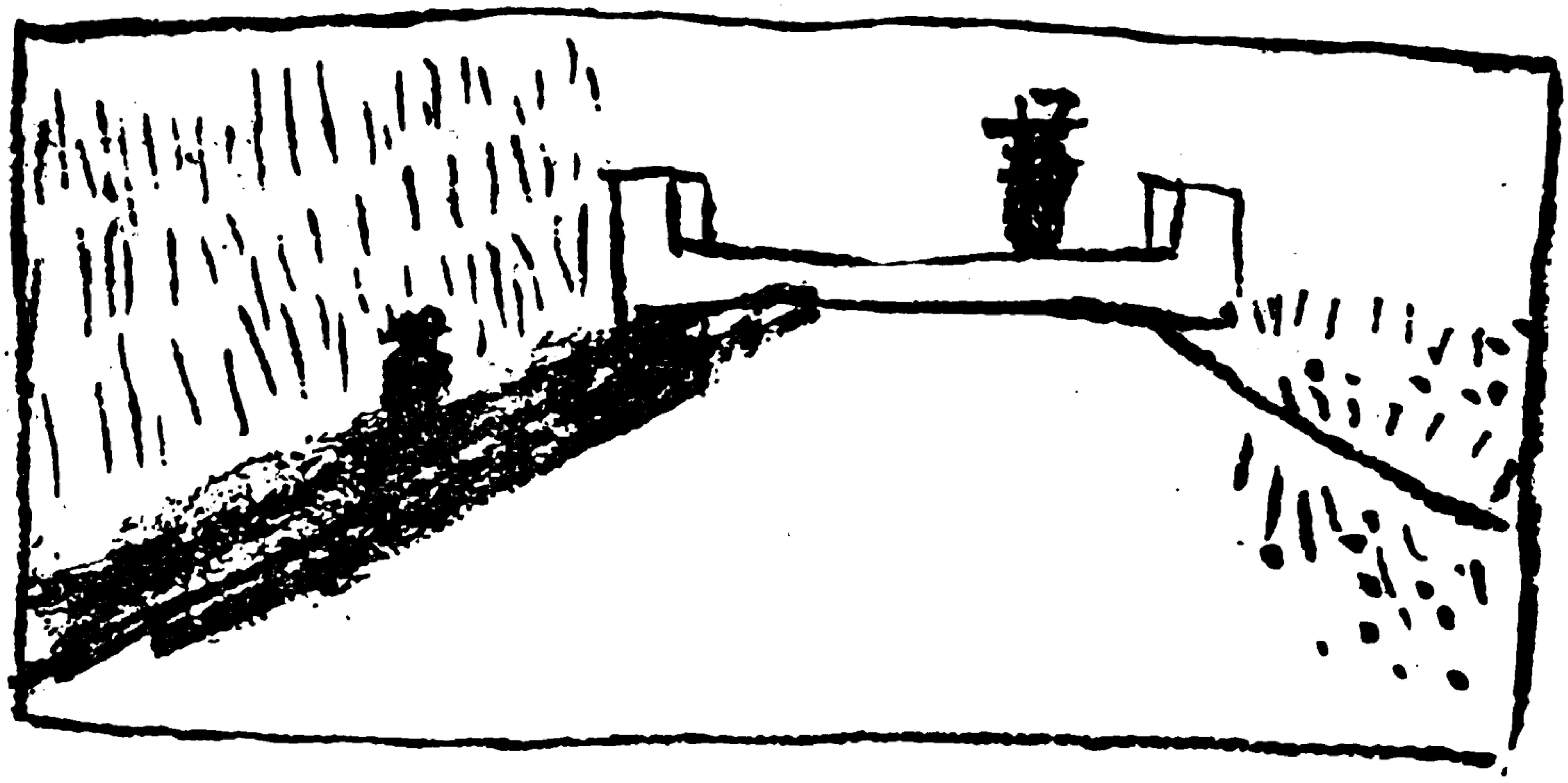
佐兵衛(不快らしく)いやでござります。

正成　與や倅に用があるのぢやがな。

佐兵衛　いやでござります。

正成　おまへは猿を可哀さうと思はぬか。
佐兵衞（煩さゝうに）思ひません。
正成　さうか、ではどうでも一緒に死ぬか。
佐兵衞　勿論でござります。
（腰の一刀をとり咽喉を貫き死す）。
正季（感慨に堪へぬ聲音にて、正氏に）さつきの直義とはまるで人間が違ふなあ。
正氏　おれも少し恥かしくなつた。
（本堂の方にて磬の音、讀經の聲起る）。
正忠　鐵堂和尚が勤經をして下さると見えます。
正遠　此樣に靜かな往生を遂げられるとは、意外でござりましたな。
正成　われ〳〵はどこまでも幸福に生れついた人間と見える。
（下手より人見資兼かけ入る）。
正季（見とがめて）性懲もなく又來たな。兄上は猫の額ほどな日本六十餘州などは眼中にないのだ。
資兼　そんな事でまゐつたのではござりません。先だつて櫻井でお預り申して置いた生命を、おかへしに參つたのでござります。
正成　何といふ？
資兼　わたくしも逆賊の一人として死にたくは有りません。どうぞ御供の一人にお加へ下さい。

正成　さうか、おまへの樣な若者のある中は、まだ日本の國土も心配する事はあるまい。
資義　御供を御許し下さりますか。有難うぞんじます。
正成　死を見る事歸するが如しといふ境地には、ほんとうに到達し得らるゝものか如何かと、常々危ぶんで居たが、かう安らかな心で死ぬるとは、あゝ有難い事ぢや。
正季　他の人々は知らず、わたしだけは左樣は行きません。
正成　如何してぢや
正季　わたしは尊氏兄弟が憎くて堪りません。七生まで同じ人間に生れて、朝敵を滅ぼす事ばかり考へて死にます。
正成（淋しく笑つて）例の批判辯が死の際まで離れぬと見えるな。わしの心は違ふ。最後の一念が善惡の生を引くといふ事がまことなら、わしは七度聖人に生れて、朝敵佛敵のない、平和な世界を作る爲めに働きたいぞ。
正季（はら／＼と淚をこぼし）兄上、わたしは間違つて居ました。わたしも惡魔になるより佛になつて死にませう。
正成（溫顏に微笑を湛へて）いや、正季、批判辯はわしにもあつたのぢや。最期の際に人の心を批判しやうとは思ひもかけなかつた。許してくれ。
（杜鵑一聲。夏の夜は次第にしらみ行く。佛前の燈明風なきに消ゆ）。
正成　あゝ靜かな朝ぼらけぢやな。さあ、念佛をとなへてくれ。
（一同唱名する。又杜鵑の聲、鼓の音――幕）。



喜劇

# 金を借りに來た男

——一幕——

谷崎潤一郎

人物

豐田
豐田の細君
長谷川
宇佐美

情景——明るい感じのする日本間。洋行から歸つたばかりのところで、大小の鞄が三つ四つ置いてある。豐田がいろいろ土産物を取り出して整理してゐる。細君が傍から手傳つてゐる。

（豐田）はてな、此れぢやアなかつたかな。おい、そつちの鞄を見てくれないか。

(細君)どれ？　此れ？
(豐田)ああ、それそれ、その下の方に這入つてないかね。……(細君は別な鞄を捜す。豐田は矢張り前の鞄を探りながら)をかしいなどうも、……たしかに此處へ入れた積りなんだがなあ。……
(細君)此の鞄にはそれらしい物はありはしないわ。どんな函なの？
(豐田)小さい平べつたい天鵞絨の函だよ。待てよ、その黒い方の鞄だつたかしら。それをちよつと見てくれないか。
(細君)あなたそんな小さな物を、そのまま入れてお置きになるから惡いんだわ。おなくしになつたんぢやないかしら？
(豐田)そんなことはない、なくたすなんて筈はないよ。だけど變だな、あの時瑞西で買つたものは大概此處にあるんだがな、……ほら、アルプスの繪葉書が出て來たし、ユングフラウの寫眞帖があるし、……
(細君)ではやつぱりその鞄だわ。もつとよく見て下さらない？　いやだわ、あたし、おなくしになつちや。……
(豐田)あ、あつた、あつた、やつぱり此處だつた。ほら、此れなんだ。(女持ちの腕時計の函を取り出す。)ジユネーヴの本場で買つて來たんだよ。
(細君)(手に取つて見る。)ナルダンね？
(豐田)お前の先のは何だつたかね。
(細君)あれはエルヂンよ。
(豐田)此れはあれよりずつといいんだよ。お前、そのゼンマイを捲いて御覽。それからそうツと耳をおツつけて、セコンドの音を聞いて御覽。

(細君)(云はれた通りにする。)まア、いい音がするのね！　ピーン、ピーンと、何て綺麗な音なんでせう。

(豐田)ね、素敵な音がするだらう。それだけ機械が精巧なんだよ。

(細君)ほんたうね、先の時計はこんないい音はしませんでしたわ。

(豐田)あれは幾らで買つたんだつけ。

(細君)(時計を腕へ卷いて見ながら、)あれはたしか、百五十何圓でしたか、……

(豐田)此れはお前、日本へ持つて來たら四五百圓はするんだよ。此の外にまだ男持ちや女持ちのを三つ四つ買つて來たけれど、お前にはそれが一番いいよ。どれ、ちやんと本當に篏めて御覽。(時計を受け取り、違ひ棚の置時計を見て時間を合はせ、細君の腕に篏めてやる。)手を向うへやつて御覽。うん、サイズもそのくらゐがちやうど好かつた。

(細君)少うし大き過ぎやしない？

(豐田)馬鹿云つちやいかん。西洋では日本の女がするやうな、子供だましの玩具みたいなのはしやしないよ。どんなに機械がよくつたつて、餘り小さいと結局狂ふものなんださうだ。あんなものは實用にならんと云つてるよ。

(細君)形は非常にいいことね、スッキリしてゐて。――

此の間に玄關のベルが二回鳴る。後のは長く鳴つてゐる。

(豐田)おい、誰かゐないのか、玄關だぜ。

(細君)あ、さうさう、お菊を使ひにやつてしまつて。――あたしちよつと出て見ませう、どなたか知ら。

(豐田)今日は日曜だから、誰か來やしないかと思つてゐたんだ。

細君下手へ退場。間もなく戻つて來る。

(豐田) 誰？

(細君) あたしの嫌ひな人。

(豐田) だれ？

(細君) 長谷川さん。お會ひになる？ (險しい眼つきをする。)

(豐田) だつて會はない譯にも行くまい。何か用だと云ふのかね。

(細君) 日曜でお天氣がいいもんですから、散歩がてらお宅の前を通りましたので、洋行みやげのお話でも伺ひたいと思ひまして、ちよつとお立ち寄りいたしましたツて仰つしやるの。

(豐田) 仕方がないな。ぢやアまアちよつと通してやれよ。

(細君) お會ひになれば、又きつとお金のことよ。

(豐田) 今日はまさか大丈夫だらう。此の前金をやつた時に、無心に來るなら此の後來ないでくれるやうに、ちやんと云ひ渡してやつたんだから。

(細君) それがアテになるもんですか。今迄にだつて、そんなことが何度あつたか知れないんですもの。

(豐田) なあに、彼奴は頻りに洋行したがつてゐるんだから、彼方の話が聞きたいんだらうよ。

(細君) さう云ふことを仰つしやるのが、長谷川さんの手なんですよ。あの方はいつも、始めから斷らうと仰つしやつたことはありはしないわ。何となく遊びに入らしやつたやうな風をして、此方に油斷させて置いて、隙を狙つて切り出すんだから……だからあたしは蟲が好かないの。お金のことは二の次ぎとして、さう云ふ陰險なやりかたをするのが。

(豐田) いゝや、あれであの男も氣が弱いんだよ。だから却つて陰險に見えるんだよ。

（細君）だけど、一週だつてお返しになつたこともない癖に、よくまア恥かしくもないことね、[illegible]て、お金の話が出なかつたことは一度もありはしないのよ。又かと思ふと、いつでもきつとさうなんだから不思議なくらゐよ。あたしあなたのお友達に、ああ云ふ方がいらつしやるかと思ふと情なくなるわ。
（豐田）まアさう云ふなよ、さう云はれると氣持ちが惡い。
（細君）あたしはどうでもいいんですけれど、長谷川さんがいらつしやると、あとで一日あなたの御機嫌が惡くつて、又あの男に致されたやうな氣がするなんて仰つしやるもんだから、それを聞くのが辛いんですの。——ぢやア今お通ししますけれど、今日はほんたうに、何と云はれても斷つておしまひにならなけりや駄目よ。あなたこそ氣が弱いもんだから、尚更向うが附け込むのよ。
（豐田）今日は決して附け込ませないよ。あんまり待たすのも變だから、兎に角上げてやるがいい。
（細君）それぢや、二階でお會ひになる？
（豐田）二階も荷物が一杯ぢやないかね。此處でいいよ。
（細君）あなた、御飯はどうなさるの？
（豐田）さアどうしようか、もう直き午だから長谷川と一緒に何かたべるか。先生きつと飯時を狙つて來たんだ。
（細君）あの方に御飯を上げるのは眞つ平御免よ。それなら戸外で上つて頂戴。
（豐田）あははは、なかなかお前も意地が惡いな。
（細君）支度が出來てゐるんですから、ちよつと待つてゐて頂いて、先へお濟ましになつたらどう？　さうなさいよ、あなた。お午になつても知らん顏をしてゐてやりませうよ。

(豐田) ちやアさうするかな。

豐田上手へ退場。

細君少しあたりを片附けて下手へ退場。すぐに長谷川を導いて來る。三十五六の、狡猾さうな眼つきをした痩せた男。和服の着流し。細君の前では惡く硬くなつてギクシャクしてゐる。

(細君) あのう、唯今ちよつと食事をいたしてをりますから、少々お待ち遊ばして、……

(長谷川) は、御ゆつくり何卒(どうか)、……

細君座布團をすすめる。

(長谷川) 恐れ入ります。

と、ペコペコお時儀する。

細君上手へ退場。長谷川それを見送つて、ますます硬くなつて下手に畏まる。

細君紅茶を持つて來る。茶碗を長谷川の前に置く。長谷川また鄭寧に頭を下げる。

(長谷川) 豐田君はあの、お宅へお着きになりましたのは何日でございましたでせうか。

(細君、濟まして横を向いたまま) あのう、二三日前に。……

(長谷川) ああ、左樣で。さうしますと、役所の方へはまだ御出勤になりませんので?

(細君) はあ、當分はまだ、……

(長谷川) 御歸朝早々、お荷物の整理や何や彼やで、お忙しうございませうな。

(細君) わたくし、ちよつと失禮させて頂きます。

(長谷川)は、どうぞお構ひなく。

細君長谷川を尻眼にかけ、つんとして上手へ退場。

やや長き間。長谷川最初は恭しく茶を飲んでゐたが、だんだん退屈してヂロヂロ部屋の中を見廻し、しまひには立ち上つて、そこらに置いてある目欲しい品物を、一つ一つ値踏みするやうな樣子で眺め、そつと手に取つて見たりしてゐる。そこへ上手から豐田登場。

(豐田)やア失敬、寢坊をしたんで、今朝飯を食つてゐたもんだから。

(長谷川)(どうせ見付かつたんだからと云ふやうに、度胸をきめてまだ品物をいぢくつてゐる。)君、君、此れは一體何だい?

(豐田)ああ、それか、それは希臘の瓶だよ。

と、上手へ据わる。

(長谷川)ふうん、ぢやア古い物なんだね。君は希臘へも行つたのかい?

(豐田)いいや、それはロンドンの骨董屋で買つたんだ。

(長谷川)僕にはどうも斯う云ふものゝ趣味がないから分らないが、安い物ではないだらうな。

(豐田)なあに、そんなでもないんだ。

(長谷川)しかし幾らぐらゐだい?

(豐田)さア、幾らだつたか、はつきりしたことは忘れちまつたが。

(長谷川)此れは何だい。此の大理石の女の首は?

(豐田) それは伊太利で買つたんだよ。それでもローマ時代の物だぜ。

(長谷川) いろいろ買ひ込んで來たもんだなあ。僕ならそんな金があつたら、みんな女に使つて來るがなあ。

云ひながら元の席へ戻る。

(豐田) あははは、君が洋行したいと云ふのはそれが目的なんぢやないかい？

(長谷川) 無論の話さ。(上手の方へ氣を配つて、低い聲で) 君だつて少しはやつただらう？

(豐田) 僕は一向その方は駄目だ。

(長谷川) だつて、どんな堅造でも洋行すると一と通りはやつて來るさうだぜ。

(豐田) 僕は例外だよ。さう云ふことに金を使ふ氣にはならんよ。

(長谷川) それにしても一度や二度はあつただらう？

(豐田) いや、一度もない。

(長谷川) ウソをつけ、ほんたうのことを云ひ給へ。

(豐田) いや、ほんたうだよ。巴里で無理に引つ張つて行かれたが、いよいよと云ふ時逃げて來ちやつた。

(長谷川) ぢやア、一體何をしてゐたんだ。

(豐田) 何をしてたつて、役所の命令で行つたんだから、方々視察して歩いたのさ。それからまア、暇を見つけて骨董品を漁つたり山登りをやつたり、僕の道樂はそんなもんだアね。

(長谷川) 詰まらんなあ、わざわざ歐羅巴へ出かけて行つて、女を買はずに山へ登つて來るなんて！

(豐田) あははは、君は詰まらんかも知れないが、僕には大いに愉快だつたよ、本當のアルプスへ登つて來たんだか

ら。

(長谷川)だけど何だらう、骨董品なぞを買つたりしたんぢや、大分旅費が懸つただらう？

(豐田)懸つたと云つても知れたもんだよ、一年足らずの旅だつたからね。

(長谷川)どうだい君、却つて持ち出しになりやしなかつたかい？

(豐田)うん、そりや官費だけぢやア足りなかつた。持ち出しの方が多かつたよ。

(長谷川)さうだらうなあ。――全部でどのくらゐ使つたね。

(豐田)(いやな顏をする。)さあ、ざつと三萬圓も使つたかしらん。

(長谷川)ふうん、短かいわりに隨分金が要つたもんだね。――それだけの金を一文も殘らず使つちやつたかい？　神戶へ着いた時いくらか懷ろに殘つてゐたかい？

(豐田)そんなことを聞かんでもいいぢやないか。

(長谷川)(うろたへる。)いや、僕だつていつ出かけないものでもないから、參考のために聞いて置きたいと思つてね。

(豐田)儉約すれば一萬圓も要らないんだから、君もそのうちに社の方から行かして貰ふさ。此の頃は猫も杓子も出かけるんだから。

(長谷川)僕の社なんか貧乏だからとても駄目だよ。それに新聞社なら兎に角、雜誌社が社員を洋行させることはまアないからね。おまけに僕は信用がないと來てるんだから。

(豐田)信用がないのは身から出た錆で仕方がなからう。あはははは。――君も好い加減に女道樂を止めたけりやいかんね。

(長谷川) いや、こいつを止めたら僕は生きてゐるかひがないね。尤もそりやア、君のやうないい奥さんを持つてゐりや別だけれど。

(豐田) 詰まらんことを云ふなよ。

(長谷川) だつてさうだらう。君の奥さんは、君が三萬圓も使つて來たつて文句なんか云はないだらう。

(豐田) そんなことは當り前ぢやないか。

(長谷川) ところがそれが當り前でないんだよ。僕なんぞの家庭ぢやア、百圓の金を使つたつて直ぐにグズグズ云やがるんだ。

(豐田) 君のは使ひ途が悪いからさ。

(長谷川) それもさうだが、僕ンところみたいな貧乏所帶ぢや、貯金と云ふものがちつともないから、内證で金を使はうとして忽ち女房に知れつちまうんだよ。君ンところなんざ、百圓や二百圓のはした金は譯なく胡麻化せるだらうけれど。

(豐田) 君、變なことを聞くやうだけれど、今日はまさか、金の話をしに來たんぢやないだらうね！

(長谷川)(グッと詰まる。)え？　どうして：：：：

(豐田) どうしてッて、さつきからいやに金の話ばかり出るからさ。君もいつかの約束を忘れてゐる筈はないだらうから、今日は別段用事がありはしないんだらうね。

(長谷川) ああ、：：いや、そんな積りで來たんぢやないんだ、今日は日曜で、お天氣がいいんで、散歩に出たら偶然此の前を通つたんでね。あれからちようど一年ぶりだし、君が歸朝した事を聞いてゐたもんだから、挨拶旁ちよつと寄つただけなんだ。

(豐田) さうかい、それなら差支へないけれどね。……

(長谷川) しかし何だぜ、お取り込みのところを何だらうから、忙しければ僕は歸るぜ。

(豐田) (少し氣の毒さうに) う、まアいいよ。今月ちゆうは役所の方を休めるんで、わりに暇なんだ。

(長谷川) それなら何だが、忙しかつたら遠慮なくさう云つてくれ給へ、又そのうちに土産話を聞きに來るから。

(豐田) さう急いで歸らんでもいい、まア話して行き給へ。――土産話もいろいろあることはあるんだが、生憎君の氣に入りさうな種を仕込んで來なかつたんで、困つたもんだな。

(長谷川) けれども君、妖艶なる美人の繪葉書か何かありさうなもんだね。

(豐田) 美人のはないが、此處にアルプスの寫眞帖がある。此れでも一つ見てくれ給へ。

(長谷川) (寫眞帖を受け取つて、ゾンザイにはぐつて見る。) 山の景色か。こんなものを見ても詰まらんなあ。さうさう、君は瑞西へ行つたんだから、時計を買つて來ただらうね。

(豐田) うん、土産物には時計が一番嵩張らないでいいもんだからね。

(長谷川) ぢやア何だね、今奧さんが腕へしてゐるのも土産物だね。さつきちらツと見たんだが。

(豐田) うん、さう。

(長谷川) あの腕時計はなかなかいいなあ。先に奧さんがしてゐたのはエルヂンぢやなかつたか。(豐田がギョツト驚いたやうな顏をしたので、慌てて辯解する。) いや、僕は時計に趣味があるんで、人の持つてゐる物を非常に注意するもんだから。……

(門田) へえ、そりや初耳だね、君が時計に趣味があるなんて。――女道樂とは大分縁が遠いぢやないか。

(長谷川)僕だつてそのくらゐな趣味はあるさ。尤も自分は倣た物を持つてゐないし、そいつも今ぢやア質に入れちやつたが、金があつたら時計のコレクションをやつて見たいな。

(豐川)あれもやり出したらきつと面白いもんだらうね。

(長谷川)君も蒐集癖があるなら、此れから少しやつて見給へ。一體何だよ、腕時計なんて云ふものは、ほんとうの時計好きが買ふもんぢやないんだよ。

(豐田)それはそうかも知れないね。――ぢや君、こいつを一つ見てくれ給へ。此れは自分が持たうと思つて買つて來たんだが。(と、さつきの鞄の中から男持の懷中時計を出す。)どうだね、此れは?

(長谷川)(受け取つて見る。)ふうん、ジュネーヴと。――此れもやつぱり瑞西だね。

(豐川)ちよつとその機械を開けて見給へ。

長谷川開けて見ようとするが、開け方が下手でマゴマゴする。

(長谷川)う、…………、こいつアどうも…………馬鹿に緊いな。………

(豐田)あツ、そんな亂暴をしちやアいかん。僕に貸し給へ。(譯なく開けて長谷川に渡す。)此の機械をよく見てくれ給へ。

(長谷川)……成るほど、いいねえ此れは。……寶石なんかも澤山附いてゐるやうだし、……なかなかいいよ君。

(豐田)さうだらう、それはちよつと珍しい機械なんださうだ。日本で買つたらどのくらゐなものか分らないかね。

(長谷川)さあ、……僕はどうも、斯う云ふ新型の時計よりも古い時計に趣味があるんで、……

(豐田)時計通になると、誰でもみんなさうらしいね。

(長谷川)それはさうだよ。此の時計だつて結構には違ひないけれど、われわれに云はせると、斯う云ふものは金さへ出せば幾らでも買へるんで、やつぱり古いものが面白いね。コレクションをするにはさう云ふ奴を集めなけりやいかんよ。饅頭のやうに分の厚い、ガツシリとした奴で、ゼンマイを卷くのに鍵で卷くやうな、ああ云ふのがあるといいんだがなあ。……

(豐田)今頃鍵卷きの時計なんて、ザラにありはしないだらう。

(長谷川)ザラにないから、それを集めるのが面白いんだよ。僕の知つてゐるんぢや、宇佐美が一つ素晴らしいのを持つてるんだが、そりやアとても溜らんもんだよ。

(豐田)へえ、どんなんだい?

(長谷川)それが今の話のやうな、ガツシリとした、不細工の奴でね。厚さは、さア、此の時計のざつと三倍はあるだらうか。サイズも從つてずつと此れより大きくつて、而も斜子の金側の兩蓋なんだ。

(豐田)斜子の兩蓋は珍しいね。西洋へ行くと、英吉利人の老人なんかが時々持つてゐたやうだけれど。

(長谷川)それだよ君、時計は瑞西と云ふけれど、實は英吉利に限るんだよ。ほんたうに機械の頑丈な、何年使つても狂はないと云ふ時計は、英吉利でなけりや出來ないんだよ。だから英吉利人はよく古い時計を持つてゐるのさ。

(豐田)宇佐美君は何處でそんなのを手に入れたのかね。

(長谷川)宇佐美の親父が洋行した時に倫敦で買つて來たんださうだが、それを親父の死ぬ時に形見に貰つて、宇佐美が使ひ出してからでも二十年近くなるさうだけれど、未だにピシツと時間が合つて、一分一秒も狂はないんだ。

(豐田)しかし金側のそんな大きな時計だと、成金臭くツてイヤ味になりやしないか。

（長谷川）ジョ、冗談ぢやない！　日本人は何でも斯う、薄ツぺらなケチ臭い物を持ちたがるのは惡い癖だよ。金側と云つたつて、その金の色が昔の英國の金だから、とても上品なものなんだ。それに長年使ひ込んだので、斜子に時代が附いて來て何とも云へない好い味になつてゐるんだ。さうさう、それから鎖が又いいんだ。

（豐田）鎖もその時代の物なんだね。

（長谷川）無論さうさ。何しろ時計がイカツイんだから、鎖も非常に太くつてね、此の頃のやうなあんなヘラヘラした物ぢやなくつて、まるで犬でも繫ぐやうなド物凄い奴なんだよ。宇佐美は體が大きいから、モーニングか何かの黑のチヨツキへ、そいつをだらりと垂らしてゐるところはハイカラで實に立派に見えるね。決して下品なもんぢやないね。

（豐田）さう云ふのがあれば僕も一つ欲しいもんだな。

（長谷川）買ひ手はいくらでもあるけれど、なかなかあんなのは出て來ないよ。出て來たにしても五百圓六百圓と云ふ値段で、直ぐ賣れちまふよ。君がほんたうに買ふ氣があるなら、まア宇佐美が何と云ふか聞いて見てもいいけれどね。

（豐田）いや、宇佐美君にそんなことを云つちや惡いよ。出物があつたらと云ふ話だよ。

（長谷川）けれども話しやうに依つたら、或は手放すかも知れんぜ。此の時計も飽きるほど使つたから、知つてゐる人になら安く讓つてもいいんだがなんて、いつかもさう云つてゐたんだから。――どうだい君、三百圓ぐらゐに負けると云つたら買ふ氣があるかい？　無論僕では信用がないから、君がたしかな專門家に見せて、極めをつけてからのことだが。………

（豐田）さうなれば買つてもいいけれど、兎に角宇佐美君のは止せよ、僕はそんなに懇意な仲でもないんだから。

（長谷川）しかしちよつと、その時計を見る氣はないかね。見るだけならば何時でも持つて來られるんだよ。

(豐川) 内證で！

(長谷川) ああ、……實は何なんだ、……その時計は、僕が預かつて持つてゐるんだ。

(豐川) だつて、……どう云ふ譯さ？……ぢやア今そこに持つてゐるのか。

(長谷川) 此處には持つてゐないんだよ。と云ふのはそいつを質に入れちやつたんでね。……いや、宇佐美が入れた譯ぢやアない。僕が無斷で入れちやつたんだが、百圓ばかり金があれば直ぐに出して來られるんだよ。(豐川眞つ青になる。長谷川構はずに、平然たる態度ですらすらと續ける。)斯う云つただけぢや分らないだらうが、此の間實は、僕が大變懇意にしてゐる仕事の上手な時計屋があつてね、その事を宇佐美に話したら、ぢやア此の時計は暫く油を挿さなかつたし、掃除をさせたことがないから、その店へやつて修繕させてくれろと云ふんで、僕が預つた譯なんだよ。そいつを僕が、その時計屋へ持つて行けばよかつたんだが、急に差迫つた必要が出來て質屋へ持つて行つちやつたんで、今になつて困つてゐるんだがね。

短かき間。豐川むつとして長谷川を睨みつけてゐる。長谷川はづうづうしくケロリとしてゐる。

(長谷川) ねえ、どうだらうか？

(豐川) 君は又してもいつもの手を使つたんだね。

(長谷川) いつもの手つて？

(豐川) 君はさつき何と云つた、偶然此處を通つたから、挨拶かたがた寄つたんだと云つたんぢやないか。

(長谷川) うん、それはさうに違ひないよ。いつかの約束もあるんだから、そんな積りで來た譯ぢやァなかつたんだが偶然時計の話が出たんで、つい云ひ出してしまつたんだよ。

(豐田)ではその話は止めにし給へ、聞いてると氣持ちが惡くなるから。

(長谷川)けれども君、云ひ出してしまつた以上聞いて貰ひたいもんだがなあ。

(豐田)いかん、いかん、そんなことだらうと思つたから、僕は念を押したんだ。そのくらゐならなぜ始めからさう云はないんだ。

(長谷川)始めにそんなことを云つたら、一度にハネ付けられるぢやないか。

(豐田)だからペテンにかけたんだね。

(長谷川)ペテンにかけたんぢやないんだツてば。全く偶然に、――――それと云ふのが、頭の中に始終此の事がこだはつてゐて、困る困ると思つてゐたもんだから、ついロに出てしまつたんだよ。(だんだん哀れつぽい調子になる。)實際困つてゐるんだがなあ。何しろそれを預かつてから一週間にもなるんだから、さうさう引つ張つちや置けないだらう? 僅か百圓の金があれば、僕は救はれるんだがなあ。

(豐田)君は僅かと云ふけれど、百圓の金は大金だよ。

(長谷川)僕に取つては大金だけれど、君には何でもないぢやないか。

(豐田)馬鹿云つちやいけない。百圓と云ふ金が無闇に出せるもんぢやないよ。

(長谷川)だつて君は、時計の出物があれば三百圓は出すと云つただらう? 立派な時計を二つも三つも持つてゐるのに、それでも買ふと云つただらう?

(豐田)君はどうも、人がウツカリしてゐるとカマをかけたりするんだから、油斷も隙もならん男だ。

(長谷川)しかし理屈はさうぢやないか。時計のために三百圓出す餘裕があるなら、その三分の一の金で僕を救つてく

れ給へな。こいつが宇佐美に見つかると、僕の信用は地に墜ちてしまつて、詐欺横領で訴へられても仕方がないことになるんだよ。

(豐田) 始めから地に墜ちてゐる信用が、此れ以上墜ちる心配はないさ。

(長谷川) ま、さう云へばさうだが、此れでもまだ多少名譽と云ふものはあるんだし、それにそんなことが世間へ知れると、社を馘られる恐れがあるし、——さうなつた日にやア早速食ふに困るんだからね。君だつてまさか、僕が無職になつちまつたら好い氣味だとは思はないだらう?

(豐田) それを僕の責任だと云ふのかい君は?

(長谷川) さうぢやないけれど、君が百圓を惜しんだために一人の友達が職を失ふ結果になつたら、君のふだんの性質として、決していい氣持ちはしまいと思ふね。

(豐田) 僕がどんな氣持ちにならうと、餘計な心配はしないでもいい。

(長谷川) さう云つちまつたら身も蓋もないが、今度の金はいつもと性質が違ふんだから、——マカリ間違へば僕の生活と地位に關する重大事件なんだから、——

(豐田) 君は背水の陣を敷くからズルイよ。そんな重大事件にしたのは何のためだい? もとはと云へばやつぱり酒と女ぢやないか。

(長谷川) 君は一々逆に取るから困つてしまふな。背水の陣を敷くなんて氣はなかつたんだが、今度はもう、君のところへ無心に來る譯にも行かないし、何とか彌縫しようと思つて獨りでいろいろやつてゐるうちに、とうとうこんな重大事件になつちやんだ。ほんたうに君、もう此れツきり頼まないから、今度こそ此れが最後だと思つて聽いてくれない

か。僕にくれると思つたら腹が立つかも知れないが、まア何だ、時計を一つ買つた[illegible]安い値で、一人の人間の地位と生活が買へるんだから。さうしてその男の家族全體が助かることになるんだから[illegible]僕はどうなつてもいいけれど、考へて見ると女房や子供が可哀さうだよ。

（豐田）いや、折角だけれど今度は御免蒙むるとしやう。そりやまア、百圓で濟むことなら、何とかして上げてもいいやうなものの、正直のところ、實は僕よりも妻が君を嫌つてゐるんだ。君は僕の妻に對して此れッぱかりも信用がないんで、中へ這入つて僕が非常に困るんだよ。金のことよりも今では感情問題だから、君が來るたびにイヤな話を聞かせると、妻の方でもますます氣持ちを惡くするし、そんなことから今後附き合ひが出來ないやうになつてしまつちや、お互ひに面白くないからね。

（長谷川）うん、そりや分つてる。奧さんに睨まれてゐることぐらゐは、僕だつてちやんと氣が付いてゐるよ。だけども君が何とかしてくれる意志があるなら、そこを一つ、奧さんに知れないやうにやつて貰ふ譯にや行かんもんかね。ちよつと內證で小切手を書いてくれたつていいし、——

（豐田）さう君の云ふやうに簡單に行くもんぢやないんだから、——

（長谷川）だつて奧さんに知れさへしなけりやいいんだらう？　ねえ、賴む、ほんたうに賴むよ。何しろ僕は此の事件のカタがつくまで、宇佐美に會ふことが出來ないんだよ。それに宇佐美は僕の懷中時計がないんで、變な腕時計をしてゐるから、先生だつて困つてゐるに違ひないんだ。困つてゐないにしたところが、さつきも云ふ通り親父の形見の品だと云ふんで、ひどく大事にしてるんだからね。催促されたらどうしようかと思つて、僕は始終ヒヤヒヤして、此へ出てゐても電話が來るたびにビクツとするんだ。さう云ふ[illegible]一つ。[illegible]もう[illegible]きり[illegible]はいけないか

ら、今度だけは是非一つ、……賴む、賴むから聽いてくれ給へ。萬一奥さんに知れたところで、今度は事情が事情だから云ひ譯は立つと思ふんだがね。

（豐田）さう云ふけれど、此れから後も亦こんなことがあつたらどうする？　その度毎に「事情が事情だから」と云ふんで、尻拭ひをするんぢや際限がないよ。

（長谷川）だから此れッきり迷惑はかけない。第一こんな危なッかしい綱渡りは懲り懲りしたから、二度と再びやる筈はないよ。やつても決して君のところへは持つて來ないよ。

（豐田）ぢやア何だね。今日百圓貸してやれば今後どう云ふことがあつても、君が詐欺横領で監獄へ行くやうなことがあつても、僕の世話にはならんと云ふのだね？

（長谷川）無論さ。又そんなことがあらう譯もないぢやないか。

（豐田）ないかどうだかそいつがアテにならんからダメを押すんだよ。

（長谷川）ほんたうに大丈夫だよ。何なら證文を書いてもいいよ。

（豐田）ふん、君の證文なんか三文の値打もあるものか。

（長谷川）君、なんにも云はない、賴む！（拜み倒す。）此通りだ。

（豐田）君に摑まると此だから遣り切れん。

（長谷川）君には散々イヤな思ひをさせてゐるんで、いつもほんとうに濟まないと思つてゐるんだよ。僕も此頃は、友達がみんなえらくなつてゐるのにいつまで此のザマぢや仕様がないから、御忠告通り眞面目になつて一と勉强しようか知らんと、柄にないことを考へることがあるんだよ。だからまあ、今日のところを助けて貰へれば、大いに發憤するや

うなことになるかも知れん。僕だつて此れで、ズボラな點が玉に瑕だが。根は馬鹿

此時玄關のベルが鳴る。兩人心付かず。

（豐田）あははは、そいつは飛んだ御愛嬌だ。トボケるのも好い加減にし給へ。

（長谷川）さう君のやうに茶化してしまつちや、話が出來ない。際どい所でエラク油を搾られるものだな。

（豐田）ぢやァ君、今日のところは災難だと思つてあきらめるが、實際此の金は、宇佐美君にも氣の毒だし、君の名譽を思ふために出してやるんだぞ。此れで永久に墮落をした積りだから、それは分つてゐるだらうな。

（長谷川）ああ、此れから誓つて約束を守る。

（豐田）云ふ迄もないが、その金で直ぐ時計を出して宇佐美君に返すだらうな。又そいつを使つちまつて、泣きついて來るんぢやないだらうな。

（長谷川）馬、馬鹿なことを、……

（豐田）そんなことがあつたつて、もう今度は取りたげないぞ。——實際君は仕方のない男だよ、斷われればグヅグヅ理窟を云ふし、貸してやればツケ上るし、いつでも一杯喰はされたやうな氣がして、僕は一日胸糞が惡いんだ。

云ひながら、旅行鞄の中から手提げ鞄を取り出す。

（長谷川）さうい風に誤解されてゐるのは、實に恐縮した。一杯喰はすどころぢやない、今日は君に斷わられたらどうしやうかと思つて、大汗を掻いちやツたよ。

（豐田）（小聲で）君、ぢやァね、妻に知れると工合が惡いから、小切手で持つて行き給へ。

（長谷川）ああ、有り難う、ほんたうに有難う。

（豐田）はて、小切手帳は此處にあるんだが、印形を取つて來なくツちや。……

豐田小切手帳を懐ろに入れ、手提鞄を素早くもとの場所に收めて立ち上らうとする。

細君下手より登場。

（細君）あの、ちよつと失禮いたします。

（豐田）何？

（細君）お客樣ですの。から云ふ方、……

名刺を二枚豐田に渡す。

（豐田）ふうん、君、宇佐美君だぜ。

（長谷川）（ギクツとする）へえ、宇佐美が來ることがあるのかね？

（豐田）今まで來たことはないんだが、黑瀨の紹介で來たらしいね、（名刺を見ながら）ははア、さうか、僕が紹介で黑瀨の所へ屆け物を頼まれて來たんだよ。黑瀨が病氣だもんだから、宇佐美君が代りにそれを受け取りに來たんだ。（細君に）ぢや、散らかつてゐて失禮だけれど、ちようど長谷川もゐることだし、此處へお通しするやうにね。

（長谷川）だつて君、僕がゐても差支へないのか。

（豐田）差支へはない。屆け物と云つたつて本が一冊だけなんだから。……ええと、あれは二階の棚だつたかな？ ちよつと見て來るから、兎に角此處へ何したらいいだらう。

（細君）はあ。

細君下手へ退場。

(長谷川) 君、君、困るよ僕は。

(豐田) 困ることはないぢやないか。まさか僕のゐる前で時計の催促もしやしまいし、されたところで明日返せば濟むぢやないか。

(長谷川) それはさうだが、それにしてもバツが惡いよ。早く小切手を書いてくれないか、僕は一と足先へ歸るから。

(豐田) 小切手は今渡すけれど、話して行つたらいいぢやないか。慌てて逃げ出したら却つてをかしいぜ。(下手で足音がする。ぢや、今二階で書いて來るから。

豐田上手へ退場。

下手より細君宇佐美を連れて來る。堂々たる人品の男。英吉利好みの黑の上衣に縞のヅボン。黑の靴下。シングルカラー。しかし腕時計は附けてゐない。その胸間には太い金鎖が燦然と耀やいてゐる。

長谷川は此の時から、頻りに宇佐美の金鎖を氣にする。

(宇佐美) やあ失敬、君も來てゐたのか。

(長谷川) (モヂモヂする。) う、うん、洋行の話を聞いてゐたところさ。

(宇佐美) (細君に) や、奥さんでいらつやいますか、わたくしは宇佐美で。――豐田君とは中學時分に御懇意に願つてをつたのですが、その後お噂は伺ひながら、ついかけ違つて御無沙汰をいたしてをります。

(細君) 今日はようこそ、………

(宇佐美) は、どうも突然お邪魔に出まして、……… 此のたびは又、御無事に御歸朝なさいましておめでたう存じます。

(細君) 有り難うございます。(上手を指して) さあ、どうぞあちらへ。取り散らかしてをりまして、大變失禮でございま

すが。

(長谷川) さ、君、君、そこではいかん、どうぞあちらへ。

(宇佐美) は。

上手へ据わる。

細君その邊を片附けて上手へ退場。

(宇佐美) 暫く顏を見せなかつたね。此の頃はどうしてゐる？ やつぱり例の雜誌社の方かい。

(長谷川) う、うん、相變らずだよ。

(宇佐美) しかしあの雜誌もなかなか盛んにやるぢやないか。面白い仕事があるだらうね。

(長谷川) なあに、賣れることは賣れるけれども、女の雜誌なんて詰まらんもんだよ。碌な仕事はありやしないよ。

(宇佐美) 女の雜誌だから君には適當してゐてよからう。いろいろな方面の美人に會ふ機會が多いだらうな。

(長谷川) うん、それやまア、さう云ふ機會はあるけれどね。……

(宇佐美) すると大いに眼の保養にはなる譯だね、あははは。

細君上手より登場。お茶を持つて來る。

(細君) あのう、お預かりの品物を唯今捜してをりますので、少々お待ち下さいますやうに。――

(宇佐美) いや、飛んだお手數をかけまして、恐れ入ります。

(長谷川) 豐田君も三日ばかり前に歸つたばかりで、荷物を解くのが大變らしいよ。

(宇佐美) さうだらうとも。――御面倒のやうならば、又頂きに出ましてもよろしいんですが。

(細君) いいえ、しまつてあるところは分つてゐると申してをりますから、直きに何でございます。………どうかごゆつくり遊ばして。………

(宇佐美) どうも何とも相済みませんな。わたくしは實はもう二三日たつてからと存じましたが、黒瀬が頻りに急いでをりますものですから。

(細君) 黒瀬さんは大分およろしいと承はつてをりましたが、その後いかがでいらつしやいますか。

(宇佐美) はあ、お蔭様で引き續いてよろしい方で、一週間もいたしましたら退院出來るかと存じます。

(細君) まア、何よりでございましたわ。くれぐれもお大事に遊ばしますやうに。

(宇佐美) 有り難う存じます。

長谷川すつかり落ち着きを失ひ、細君の顔と、宇佐美の顔と、例の金鎖とをチラチラ見てゐる。

細君上手へ退場する。長谷川憂鬱な眼つきをして、ぼんやり考へ込んでゐる。と、宇佐美チョツキのポツケツトへ手を入れ、イカツい、分の厚い、金側斜子兩蓋の懐中時計を取り出して時間を見る。

(宇佐美) 十一時半だね、僕は十二時に外へ約束があるんだが、………(と、時計をポツケツトへ收める。)

(長谷川) (強ひて元氣を出す。)今日は日曜で暇ぢやないのか。

(宇佐美) 日曜だつて此れでなかなか忙しいんだよ。お晝に帝國ホテルへ行つて、友達と飯を食ふことになつてるんでね。

(長谷川) ぢやア君、飯を食つてから歸りに寄つたらいいぢやないか。此處からホテルまで三十分ぢや行けやしないぜ。

(宇佐美) だけど折角來たもんだし、それでも惡いから、………

(長谷川) 何しろ先生は君、此の通り彫刻だの陶器だのをうんと買ひ込んで來たもんだから、そりや大變な荷物なんだよ。僕も實は貰ふ物があるんで待つてるんだが、搜し出すのが容易なこツちやないらしいね。

(宇佐美) さうかなあ、そりや困つたなあ。

(長谷川) 僕も夕方まで遊んでゐるから、約束の方を先へ濟まして來たらどうだい? 久しぶりでゆつくり一つ話さうぢやないか。

(宇佐美) ところが夜は又約束があるんでね。(と、時計を出しては引つ込める。)どうしようかな。明日でも出直して來ようか知らん。

(長谷川) さうし給へ。今日のうちに出しといて貰つて、明日取りに來るか、でなければ僕が屆けて上げてもいいぜ。何か大事な品物かい?

(宇佐美) なあに、大事と云ふんでもないが、…………

豐田登場、上手の奥で長谷川に眼くばせする。

(豐田) 君、ちよつと。

長谷川心得て其の方へ立つて行く。豐田懷ろより小切手を出し、「ぢやア、此れを」と、長谷川に渡す。長谷川受け取つて懷中し、もとの席へ戻る。豐田は一番下手へ來て、宇佐美とさし向ひに据わる。本の包みを持つてゐる。

(豐田) やあ、此れはようこそ。えらいお待たせしてしまつて。

(宇佐美) その後は長いこと御無沙汰を。いつも御壯健で。——

(豐田) わたくしこそ。黒瀬君から始終お噂を伺ふので、何かの折に一度お目に懸りたいと思ひながら、つい機會がありませんで。

(宇佐美) ちやうど何です、まる二年間山口縣の方へ遣られてをりまして、やつと昨年の八月から本省詰になりましたので、皆さんに御無沙汰してをります。

(豐田) はあ、そんなお話で。——(と云ひながら金鎖に氣が付き、けげんさうに長谷川を見る。)此れからはちと、黒瀬君と御一緒にお遊びに入らしつて下さい。どうもだんだん昔の友達が東京を離れて行くもんですから。——

(宇佐美) 役人生活をしてゐますと、此れは仕方がありませんな。——しかし今度は大分御遠方へお出かけで、いかがでした彼方の印象は？

(豐田) なあに、さつと駈け足で通つて來たので、一向どうも。——今も長谷川に土産話をせびられてゐるんですが、なんにも材料がありませんでね。

(宇佐美) はは、長谷川、そりやア駄目だよ。君の滿足するやうな土産話は、豐田君は仕込んで來られないよ。

(長谷川) ふん。

と、仕方なく笑ふが、直ぐ訴へるやうな眼つきで豐田を見る。豐田ますます險惡な顏で、鎖を見ては不思議さうに長谷川を眺め、それを又宇佐美に氣取られまいとする。

(宇佐美) ええと、最初は何でございましたか、亞米利加の方からお廻りになりましたか。

(豐田) はあ、亞米利加から先に廻りました。——あ、ところで實は此れなんですが、此方からお見舞ひかたがたお屆けしなければならないところを、わざわざ恐れ入りました。

本の包みを渡す。

(宇佐美) どう致しまして。御歸朝早々お忙しいと存じまして、御遠慮すべきだつたのですが、家内がもう毎日退屈で

仕方がないので、かう云ふ時に本を讀みたいと申しますものですから。

（豐田）黒瀬君も本が讀めるやうになれば、もう御安心です。いづれ近日お見舞ひに伺ひます。

（宇佐美）しかし今では殆んど全快に近いのですから、御多用のところを、何卒そんなことはお構ひなく。――わたくしから宜しく申し傳へて置きます。ではあの、失禮ですがちよつと今日は急ぎますので。

（豐田）まアいいでせう、お差支へがなかつたら御ゆつくりなすつていらしつても。

（宇佐美）いえ、甚だ勝手でございますが、又此の次ぎにゆつくりお伺ひいたします。今日は實は、十二時に約束がありますので。

と、時計を出す。豐田と長谷川期せずしてその時計をじつと視つめ、ついで豐田は忌ま忌ましさうに、長谷川は憐れみを乞ふが如くに、顔を見合はせる。

（宇佐美）それでは此れは確かにお預りいたしました。どうかお通りかかりの節には、私どもへも是非お立ち寄り下さいまし。

（豐田）さうですか。一向お構ひしませんで、今日は誠に殘念ですが。……

（長谷川）では僕も此れで。――宇佐美君、そこまで一緒に行かうぢやないか。

（豐田）（グツと長谷川を睨みつける。）まア君はいい、もう少し居給へ。

（長谷川）（拜むやうな眼つきで）だけどもあの、……今日はちよつと、……

（宇佐美）君は夕方までいいんだらう？　さつきさう云つてゐたぢやないか。

（長谷川）いや、考へて見たら大變な用を忘れてゐたんだ。

(宇佐美)でもまアいいさ、殘つてゐ給へ。

(長谷川)それが非常な急用なんで、グズグズしちやアゐられないんだ。丸の内まで行くんだから、君の自働車へ乘せてツてくれ給へ。(又拜むやうに豐田を見る。)君、ほんたうに今日は失敬するよ。

(豐田)待ち給へ君、まだ君には話があるんだ。

細君上手より登場。

(長谷川)うん、その話は分つてゐる。──分つてゐるが、又出直して聞きに來るよ。

(細君)あなた、長谷川さんは御用がおありになるのですから、無理にお引き留めしては惡いわ。

(長谷川)ええ、ほんたうに何です、今日は折角ですけれど。──ぢやア君、失敬。

長谷川逃げるが如く下手へ退場。

(宇佐見)奧さん、───

(豐田)あ、宇佐美君もお歸りだと。

(細君)おや、まアおよろしいぢやございませんか。──(豐田に)あなた、失禮かも存じませんけれど。御一緒に御飯でも召し上つて。───

(豐田)(むつとしながら上の空で)うん、僕もさう思つたんだがね。………

(宇佐美)有り難う存じますが、今日は全く已むを得ない先約がございますので、いづれ改めてお邪魔に上ります。

(細君)左樣でございますか、それはまア、何のおあいそもございませんで。

宇佐美退場。細君送つて出る。

豐田まだむつとして部屋の中を往つたり來たりしてゐる。

# 編輯だより

◇歐洲文明は沒落しつつある。我々新鋭の徒には今後の歐洲は何等の希望を繋ぐものがなくなる。倫敦や巴里は一日は一日と埃及の如く、アゼンスの如く、羅馬の如く廢墟へ！の途上にある。

◇日本文明の進度も遲々牛步の如く行詰つて來た。模倣文明の廢墟よりは一片の哀詩も生れ來ないであらうことを想へば東洋民族！日本民族として情なく感ぜられる。

◇興國の魁は密航婦にあり！二十年前新嘉坡、南米、瓜哇、蒙古、プラゴエあたりの我國人によりて發せられた此銳い侮辱に充ちた一語。今後日本文明の魁をなす徒が街學的徒輩に出ないことは慥だ。しからば誰が今後菲販なる東洋文明を脊負つて立つ！何處を眺めても埒もない。

◇蝸牛角内の鬪爭の醜さを嘆く。惡いことした奴はドン〳〵フン縛る可し。總裁であらうと總務であらうと泥的は泥的として取扱へ。神より授かりたる判官の骨は宜しく兒島惟謙、和氣淸麿の如く硬かるべしだ。

◇四月强霜あり、花開いて黃塵高く、九日は嵐あり、田舍よりの花見客ちぢこまり小さくなり、お江戶の風と雨とを恨む。

◇近來の人格者穗積陳重氏逝く

◇あかむケ原は東京にあり、安達ケ原は奧州にあり、—松島遊廓—三百萬圓—機密費—田中義一—床次竹二郎—政治の倫理化—復興局—桃介は帝劇へ—豚の足は對露ビルへ—等、等、等……何れも新日本百景で國民讀本もの。

◇本庄博士、土屋、黑正、中村氏等編纂の「近世社會經濟叢書」は我國の社會史、國史、經濟史を攻究する學徒にとりて悅ぶべき計畫で、叢書のなかには我國に一册しかない文獻もあり、そして今日まで祕書として外部に出さなかつた珍籍も多いこととて趣味、實益兩つながら我學界を裨補するであらうことと思はれる。

◇「廚川白村集」全六卷は一昨年完了したが、その後圖らずも博士の遺稿中別に「最近英詩概論」と題する約三百枚のほゞ完成した未發表ものを發見して印刷中だ、出來の曉は「白村集補遺」として白村集全卷〔譯讀者〕に限り實費をもつて頒つ、尙ほ「文學論索引」も印刷され補遺購讀者には無代で頒ちます。別頁にある廣告參照して本社まで申込んで下さい。

◇國史の權威三浦周行博士は　半生の心血を傾けて「日本國史」を本社より刊行する。菊判三百頁全十二卷で一年に二册づつ發行。第一卷は六月中旬發行する。片々たる叢書を求めんより本書の如き大書に就け。

◇また、我社會學の泰斗米田庄太郎博士の社會學大系も近々發行する、本書は菊判三〇〇頁全廿卷のつもり。

◇本誌記者上村淸敏は三月卅一日渡支した。約二ケ月間支那主要地を一巡する。「改造」七月號は「現代支那」號とする本誌が世界的飛躍を示す第一端である。この一二ケ年間の惰眠より猛然と振ひ立つ成算は略ぼ成つた。

◇今月號は紙面の都合で新進作家のものを登載することが出來なかつた。そして九十錢としたことと併せて遺憾であつた。

## 改造定價

| 册數 | 定價 | 郵稅 |
| --- | --- | --- |
| 壹册 | 八拾錢 | 貳錢 |
| 半ケ年 | 五圓六拾錢 | 郵稅增大號共不要 |
| 壹ケ年 | 拾壹圓廿錢 | 郵稅增大號共不要 |

## 註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾五年四月廿日印刷納本
大正拾五年五月一日發行
（價九拾錢）
東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯發行兼印刷人　山本三生
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍
發行所　東京芝區愛宕下一ノ一
改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

故アルフレッド・マーシアル著　大塚金之助譯

# 經濟學原理

（全四册）

菊判上製　定價各册參圓五拾錢　送料廿六錢

**分册一　本日發賣**

マーシャル經濟學の全體的理論體系は、建設的進化的であつて、實に近代經濟學の精華である。深き理論的思索に沈潛しながら、數學的分拆に陷らず、富膽なる史的考察を試みながら、統計的羅列に終らない。美しい調和と完き綜合とは、韻律を奏でながらマーシャルに盛られてある。昨年繙譯「分册三」と「分册四」の上梓を見、今茲にまた「分册一」を出版して、更に「分册二」の出版近きに在るを告ぐ。

分册三　第五編　需要・供給・價値の一般關係
分册四　第六編　國民所得の分配
分册一　第一篇　序論　第二篇　基本觀念　第三編　慾望と滿足

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社